

朝見遺跡（第3・4・6次）発掘調査報告

—松阪市和屋町・立田町—

〈第1分冊：遺構・木製品・分析編〉

2020（令和2）年3月

三重県埋蔵文化財センター



S X 62024 (南から)



S X 62024 漆No.1 (西から)



S X 62024 漆No.2・3 (西から)



S X 62024 刀子・漆No.4 (南から)



S X 62024 漆No.5 (西から)

例 言

1. 本書は、三重県松阪市和屋町・立田町に所在する朝見遺跡（第3・4・6次）の発掘調査報告書である。
2. 本書は、全二分冊からなる。二分冊の構成は、第1分冊が「遺構・木製品・分析編」、第2分冊が「遺物編」である。
3. 本書で報告する発掘調査は、平成24・25・27年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴うもので、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。

4. 発掘調査（面積・期間）および整理作業・報告書作成は、下記の体制で実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課
〔平成24年度 範囲確認調査〕	
調査面積	330㎡
調査期間	平成24年12月11日・平成24年12月14日
担当者	主幹 伊藤裕偉 主査 星野浩行
〔平成25年度 範囲確認調査〕	
調査面積	384㎡
調査期間	平成25年9月4日・平成25年9月13日
担当者	主査 伊藤 亘 技師 櫻井拓馬
〔平成24年度 第3次発掘調査（工事立会）〕	
調査面積	236㎡
調査期間	平成24年12月10日～平成24年12月11日
担当者	主査 谷口文隆
〔平成25年度 第4次発掘調査（工事立会）〕	
調査面積	141㎡
調査期間	平成25年9月30日
担当者	主幹 伊藤裕偉
〔平成27年度 第6次発掘調査（本調査）〕	
調査面積	8,545㎡
調査期間	平成27年5月12日～平成28年2月23日
担当者	主幹 谷口文隆 主査 中井英幸 技師 石井智大 技師 渡辺和仁 研修員 眞名井孝政（活用支援課）
受託者	株式会社 イビソク三重営業所（発掘調査補助委託）
〔平成28年度 整理作業・報告書作成〕	
担当者	主査 石井智大 主任 渡辺和仁

[平成 29 年度 整理作業・報告書作成]

担当者 主幹 谷口文隆 主査 石井智大 主任 渡辺和仁

[平成 30 年度 報告書作成]

担当者 主任 渡辺和仁

[令和元年度 報告書作成]

担当者 課長 穂積裕昌 主幹 中村法道 主査 森川常厚

5. 出土遺物等の理化学的な保存処理及び自然科学分析は、平成 28～31 年度にかけて以下の業者へ委託して実施した。

[金属製品・木製品等の保存処理]

S X 62024 副葬品 株式会社吉田生物研究所 (平成 28 年度)

鉄製品 株式会社吉田生物研究所 (平成 30 年度)

木製品 一般社団法人文化財科学研究センター (令和元年度)

[自然科学分析]

S X 62024 副葬品 株式会社吉田生物研究所 (平成 28 年度)

鉄滓鉄成分分析 日鉄住金テクノロジー株式会社 八幡事業所 (平成 29 年度)

井戸枠等の樹種同定・分析 株式会社パレオ・ラボ (平成 29 年度)

動物骨・人歯同定 株式会社パレオ・ラボ (平成 30 年度)

年代測定・種実同定・土壌の総合的分析 株式会社パレオ・ラボ (平成 30 年度)

6. 本書の作成は調査担当者を中心に行い、文責は目次及び文末に記し、第 1 分冊の編集は渡辺及び森川が行った。

なお、「Ⅱ 位置と環境」については、当センターにより 2014 (平成 26 年) 10 月に刊行された『朝見遺跡 (第 1・2 次) 発掘調査報告』の文章の大半を引用している。

7. 遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、木製品の写真は、中村による。

8. 現地における発掘調査や整理作業、そして本書の作成にあたっては、地元である松阪市和原町・立田町の方々をはじめ、下記の個人・機関・団体にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい (以下、五十音順、敬称略)。

石田由紀子、今西敏典、岡田憲一、小田裕樹、小野映介、金田明大、狭川真一、神野 恵、田部剛士、田村陽一、早野浩二、間瀬 創、丸山真史、山藤正敏、山本直人、朝見上土地改良区、立田町自治会、松阪市教育委員会、三重県総合博物館、三重県農林水産部、三重県松阪農林事務所、和原町自治会

9. 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1. 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「松阪」「松阪港」（平成20年10月発行）、2006三重県共有デジタル地図（平成19年測図）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：平成26年 三総合地第93号）。
2. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系（第Ⅵ系）に基づき、方位は全て座標北を用いている。
3. 標高は東京湾水平海面（T. P.）を基準とした。
4. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。
5. 本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
SB：掘立柱建物 SA：柱列 SE：井戸 SK：土坑 SX：墓・埋設土器
SD：溝 SR：流路 SZ：道路状遺構・落ち込み・性格不明遺構 Pit：柱穴・小穴
6. 遺構の略記号及び番号について、整理過程での検討で変更を行ったものについては、遺構一覧表に示している。
7. 平面図及び土層断面図中に破線で示した遺構・土層のラインは、断ち割りや下層遺構の掘削によって失われた部分及び調査状況により掘削ができなかった部分を復元的に示したものである。また、一点鎖線は掘削の途中または層中であることを示す。
8. 土層断面図にある土層注記については、調査時に各担当者間での用語等の表記の統一を行うことができなかった。報告において統一を図ることも一つの方法であるが、調査時に担当者間での認識が統一できていなかった以上、調査後に統一をすることによって調査時の事実とは掛け離れた改変を生じる可能性が高かったため、統一することを敢えて行わなかった。したがって、土層注記については、調査時のオリジナルの状態であるため、用語等の表記が不統一であることを断っておく。
9. 掘立柱建物の個別平面図にあるトーンは、検出時に平面で認識した柱痕を示している。

目次 <第1分冊：遺構・木製品・分析編>

I. 前言	(渡辺和仁)	1
1. 調査の経緯と経過		1
2. 調査の方法		8
II. 位置と環境	(萩原義彦・和澄(相場) さやか・森川常厚)	10
III. 範囲確認調査	(渡辺和仁)	14
IV. 第3・4次調査	(*)	17
1. 調査の概要		17
2. 層序		17
3. 遺構		17
4. 小結		19
V. 第6次調査		20
1. 1区	(石井智大)	20
2. 2区	(渡辺和仁)	34
3. 3区	(*)	59
4. 4区	(谷口文隆・渡辺和仁)	64
5. 5区	(渡辺和仁)	67
6. 6区	(谷口文隆)	78
7. 7区	(渡辺和仁)	84
8. 8区	(*)	86
9. 9区	(石井智大)	88
10. 10区	(谷口文隆・渡辺和仁)	96
11. 11区	(渡辺和仁)	99
12. 12区	(*)	147
13. 13区	(谷口文隆・渡辺和仁)	162
14. 14区	(渡辺和仁・森川常厚)	171
VI. 木製品	(森川常厚)	187
VII. 自然科学分析		231
1. 分析試料・目的・報告	(渡辺和仁)	231
2. 木棺墓(SX 62024)分析	(株式会社吉田生物研究所・株式会社パレオ・ラボ)	238
3. 出土鉄滓の鉄成分分析	(日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所TACセンター)	251
4. 木製品分析	(株式会社パレオ・ラボ)	271
5. 動物骨同定	(*)	282
6. 遺構の性格および古環境分析	(*)	283
7. 放射性炭素年代測定	(*)	309

插图目次

第1图	朝見遺跡位置図	2	第22图	第6次調査2区井戸平面図 ・土層断面図・立面図②	42
第2图	第3・4次調査区位置図	4	第23图	第6次調査2区井戸平面図 ・土層断面図・立面図③	44
第3图	第6次調査区位置図・地区割配置図	5	第24图	第6次調査2区土坑平面図・土層断面図	46
第4图	遺跡分布図	11	第25图	第6次調査2区木棺墓検出状況図・立面図	48
第5图	地形分類図	12	第26图	第6次調査2区木棺墓遺物出土状況図	50
第6图	平成24・25年度範囲確認調査坑位置図	15	第27图	第6次調査2区木棺墓棺内完掘状況図 ・土層断面図	52
第7图	第3次調査1・2区平面図・土層断面図	18	第28图	第6次調査2区溝土層断面図	54
第8图	第4次調査A～C地点柱状土層変遷図	19	第29图	第6次調査2区溝、流路土層断面図	56
第9图	第6次調査1区平面図	21	第30图	第6次調査2区溝、断層土層断面図	58
第10图	第6次調査1区土層断面図	22	第31图	第6次調査3区平面図①	60
第11图	第6次調査1区井戸平面図・土層断面図①	24	第32图	第6次調査3区平面図②	61
第12图	第6次調査1区井戸平面図・土層断面図②	25	第33图	第6次調査3区掘立柱建物、溝、 流路平面図・土層断面図	62
第13图	第6次調査1区井戸平面図・土層断面図③	26	第34图	第6次調査4区平面図	41
第14图	第6次調査1区土坑、 落ち込み平面図・土層断面図	27	第35图	第6次調査4区土層断面図	65
第15图	第6次調査1区溝、落ち込み平面図 ・土層断面図	30	第36图	第6次調査5区平面図	68
第16图	第6次調査2区平面図	35	第37图	第6次調査5区土層断面図	69
第17图	第6次調査2区掘立柱建物平面図 ・土層断面図①	36	第38图	第6次調査5区掘立柱建物、柱列平面図	70
第18图	第6次調査2区掘立柱建物平面図 ・土層断面図②	37	第39图	第6次調査5区掘立柱建物土層断面図	71
第19图	第6次調査2区掘立柱建物平面図 ・土層断面図③	38	第40图	第6次調査5区溝、 道路状遺構平面図・土層断面図	76
第20图	第6次調査2区掘立柱建物土層断面図	39	第41图	第6次調査6区平面図	79
第21图	第6次調査2区井戸平面図 ・土層断面図・立面図①	40	第42图	第6次調査6区土層断面図	80
			第43图	第6次調査6区溝、流路土層断面図	82
			第44图	第6次調査7区平面図・土層断面図、 土坑・溝土層断面図	85
			第45图	第6次調査8区平面図・土層断面図、 溝土層断面図	87

第46図	第6次調査9区平面図	89	第71図	第6次調査11区溝平面図	
第47図	第6次調査9区土層断面図	90		・遺物出土状況図①・土層断面図	126
第48図	第6次調査9区溝土層断面図	92	第72図	第6次調査11区溝平面図	
第49図	第6次調査9区溝、流路土層断面図	94		・遺物出土状況図②	127
第50図	第6次調査10区平面図	97	第73図	第6次調査11区溝平面図	
第51図	第6次調査10区土層断面図	98		・遺物出土状況図③	128
第52図	第6次調査11-1区平面図、		第74図	第6次調査11区溝土層断面図①	130
	11-2区上層遺構面平面図	100	第75図	第6次調査11区溝土層断面図②	132
第53図	第6次調査11-2区下層遺構面平面図	101	第76図	第6次調査11-2区上層遺構面	
				埋設土器出土状況図・土層断面図	136
第54図	第6次調査11-3区上層		第77図	第6次調査11-2区下層遺構面埋設土器	
	・下層遺構面平面図	102		出土状況図・立面図・土層断面図	137
第55図	第6次調査11区土層断面図①	103	第78図	第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図	
第56図	第6次調査11区土層断面図②	104		・土層断面図①	139
第57図	第6次調査11区土層断面図③	105	第79図	第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図	
第58図	第6次調査11区掘立柱建物、			・土層断面図②	141
	柱列平面図①	106	第80図	第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図	
第59図	第6次調査11区掘立柱建物、			・土層断面図③	143
	柱列土層断面図①	107	第81図	第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図	
第60図	第6次調査11区掘立柱建物平面図			・土層断面図④	145
	・土層断面図①	108	第82図	第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図	
第61図	第6次調査11区掘立柱建物平面図			・土層断面図⑤	146
	・土層断面図②	109	第83図	第6次調査12区平面図①	148
第62図	第6次調査11区掘立柱建物、		第84図	第6次調査12区平面図②	149
	柱列平面図②	110	第85図	第6次調査12区土層断面図①	150
第63図	第6次調査11区掘立柱建物土層断面図①	111	第86図	第6次調査12区土層断面図②	151
			第87図	第6次調査12区柱列平面図	
第64図	第6次調査11区掘立柱建物、			・エレベーション図	152
	柱列平面図③	112	第88図	第6次調査12区井戸、	
第65図	第6次調査11区掘立柱建物、			土坑平面図・土層断面図	153
	柱列土層断面図②	113	第89図	第6次調査12区井戸平面図	
第66図	第6次調査11区掘立柱建物、			・土層断面図・立面図	154
	柱列平面図・土層断面図	115	第90図	第6次調査12区井戸、	
第67図	第6次調査11区掘立柱建物平面図			溝平面図・土層断面図	156
	・土層断面図③	116	第91図	第6次調査12区溝平面図・土層断面図	
第68図	第6次調査11区土坑、Pit平面図				158
	・土層断面図	118	第92図	第6次調査12区Pit遺物出土状況図	
第69図	第6次調査11-2区下層遺構面土坑平面図			・立面図	149
	・土層断面図①	121	第93図	第6次調査13区平面図①	164
第70図	第6次調査11-2区下層遺構面土坑平面図		第94図	第6次調査13区土層断面図①	165
	・土層断面図②	123			

第95図	第6次調査13区平面図②・土層断面図② 166	第131図	第6次調査12区井戸枿材等実測図⑥..... 215
第96図	第6次調査13区井戸平面図・ 土層断面図・立面図 .. 167	第132図	第6次調査12区井戸枿材等実測図⑦..... 216
第97図	第6次調査13区溝、流路平面図 ・土層断面図 .. 168	第133図	第6次調査13区井戸枿材等実測図①..... 217
第98図	第6次調査13区溝、流路、 道路状遺構平面図・土層断面図 .. 169	第134図	第6次調査13区井戸枿材等実測図②..... 218
第99図	第6次調査14区平面図①..... 171	第135図	第6次調査13区井戸枿材等実測図③..... 219
第100図	第6次調査14区平面図②..... 172	第136図	第6次調査出土木製品実測図①..... 220
第101図	第6次調査14区土層断面図①..... 173	第137図	第6次調査出土木製品実測図②..... 221
第102図	第6次調査14区土層断面図②..... 174	第138図	第6次調査出土加工屑実測図..... 220
第103図	第6次調査14区井戸平面図・土層断面図 175	第139図	S X 62024木棺材樹種同定試料箇所図 231
第104図	第6次調査1区井戸枿材等実測図①..... 188	第140図	1-1区土壌分析試料採取箇所図..... 233
第105図	第6次調査1区井戸枿材等実測図②..... 189	第141図	1-1区土壌分析試料採取箇所①..... 233
第106図	第6次調査1区井戸枿材等実測図③..... 190	第142図	1-1区土壌分析試料採取箇所②..... 233
第107図	第6次調査1区井戸枿材等実測図④..... 191	第143図	11-2区土壌分析試料採取箇所図..... 234
第108図	第6次調査2区井戸枿材等実測図①..... 192	第144図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所① 234
第109図	第6次調査2区井戸枿材等実測図②..... 193	第145図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所② 234
第110図	第6次調査2区井戸枿材等実測図③..... 194	第146図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所③ 234
第111図	第6次調査2区井戸枿材等実測図④..... 195	第147図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所④ 234
第112図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑤..... 196	第148図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所⑤ 235
第113図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑥..... 197	第149図	11-2区下層土壌分析試料採取箇所⑥ 235
第114図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑦..... 198	第150図	11-3区土壌分析試料採取箇所図..... 235
第115図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑧..... 199	第151図	11-3区下層土壌分析試料採取箇所① 235
第116図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑨..... 200	第152図	11-3区下層土壌分析試料採取箇所② 235
第117図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑩..... 201	第153図	木棺材の光学顕微鏡写真①..... 239
第118図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑪..... 202	第154図	木棺材の光学顕微鏡写真②..... 240
第119図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑫..... 203	第155図	木棺材の光学顕微鏡写真③..... 241
第120図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑬..... 204	第156図	No.1のFT-IR分析データ..... 242
第121図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑭..... 205	第157図	No.2のFT-IR分析データ..... 242
第122図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑮..... 206	第158図	No.3のFT-IR分析データ..... 243
第123図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑯..... 207	第159図	No.4のFT-IR分析データ..... 243
第124図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑰..... 208	第160図	No.5のFT-IR分析データ..... 244
第125図	第6次調査2区井戸枿材等実測図⑱..... 209	第161図	No.6のFT-IR分析データ..... 244
第126図	第6次調査12区井戸枿材等実測図①..... 210		
第127図	第6次調査12区井戸枿材等実測図②..... 211		
第128図	第6次調査12区井戸枿材等実測図③..... 212		
第129図	第6次調査12区井戸枿材等実測図④..... 213		
第130図	第6次調査12区井戸枿材等実測図⑤..... 214		

第162図	スグロメ漆塗布後60日経過のFT-IR分析データ(参考資料) .. 245	第181図	椀形鍛冶滓(ASA-10)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 268
第163図	No.1のEPMA分析データ .. 246	第182図	鍛造剥片3層分離型模式図 .. 271
第164図	No.2のEPMA分析データ .. 246	第183図	木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真① .. 275
第165図	No.3のEPMA分析データ .. 246	第184図	木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真② .. 276
第166図	No.4のEPMA分析データ .. 247	第185図	木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真③ .. 277
第167図	No.5のEPMA分析データ .. 247	第186図	曲物底板の塗膜構造 .. 280
第168図	No.6のEPMA分析データ .. 247	第187図	塗膜試料の赤外分光スペクトル図 .. 281
第169図	試料No.1～3と塗膜断面 .. 248	第188図	動物骨 .. 283
第170図	試料No.4～6と塗膜断面 .. 249	第189図	火山ガラス屈折率測定結果 .. 285
第171図	出土人骨 .. 250	第190図	テフラ試料の偏光顕微鏡写真 .. 286
第172図	椀形鍛冶滓(ASA-1)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 253	第191図	粒度分布と累積頻度曲線 .. 287
第173図	椀形鍛冶滓(ASA-2)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 254	第192図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真 .. 291
第174図	椀形鍛冶滓(ASA-3)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 257	第193図	朝見遺跡から出土した種実 .. 294
第175図	椀形鍛冶滓(ASA-4)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 258	第194図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 .. 297
第176図	椀形鍛冶滓(ASA-5)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 260	第195図	植物珪酸体分布図 .. 298
第177図	椀形鍛冶滓(ASA-6)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 262	第196図	植物珪酸体 .. 299
第178図	椀形鍛冶滓(ASA-7)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 264	第197図	遺跡周辺の地形分類図 .. 303
第179図	椀形鍛冶滓(ASA-8)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 265	第198図	プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図 .. 308
第180図	椀形鍛冶滓(ASA-9)の顕微鏡組織・EPMA調査結果 .. 266	第199図	炭化材の年代測定試料写真 .. 310
		第200図	暦年校正結果 .. 312
		第201図	縄文時代後期土坑出土試料の暦年校正結果 .. 314

写真図版

巻頭図版 S X 62024 S X 62024掘形断面
..... S X 62024漆No1 S X 62024木棺底板
..... S X 62024漆No2-3 S X 62024木棺除去後断面
..... S X 62024刀子・漆No4 S X 62024木棺除去後
..... S X 62024漆No5	写真図版13
第3次調査	 S D62003
写真図版1 1・2区全景 S D62003断面
..... 1区全景 S D62003-62014断面
第6次調査1区	 S D62007断面
写真図版2 1-1、1-3区全景 S D62022断面
..... 1-2、1-4区全景 S D62017断面
写真図版3 S E 61033井戸枠検出状況 S D62029断面
..... S E 61013井戸枠検出状況 S D62031断面
第6次調査2区		第6次調査3区
写真図版4 2区全景	写真図版14
..... 2区全景 3-2、3-3区全景
写真図版5 S B 62026 S B 63004
..... S B 62026No3	写真図版15
..... S B 62026No4 3-1区全景
..... S B 62026No16 3-3区全景
..... S B 62026No20 3-4区全景
写真図版6 S B 62028-62039 3-5、3-6区全景
..... S B 62029No5	第6次調査4区
..... S B 62039No4	写真図版16
..... S B 62020 4-1区全景
写真図版7 S E 62002 4-1区全景
..... S E 62002断面 4-2区全景
写真図版8 S E 62015 4-2区全景
..... S E 62018 七-H11Pit4
写真図版9 S K 62036	第6次調査5区
..... S K 62038断面	写真図版17
写真図版10 S X 62024木棺検出状況 5-1、5-2区全景
..... S X 62024 S B 65014~65018
写真図版11 S X 62024遺物出土状況 S Z 65004
..... S X 62024漆No1 S Z 65004
..... S X 62024漆No2-3 S Z 65004断面
..... S X 62024漆No4 S D 65010-65029
..... S X 62024漆No5 S D 65011遺物出土状況
写真図版12 S X 62024掘形断面	第6次調査6区
		写真図版19
	 6-1区全景
	 6-1区南部
	 S D 66002断面
	 6-2区
	 層序

.....	6-2区	写真図版30	S B 611043
第6次調査7区		S B 611043No4
写真図版20	S B 611043No7
.....	7-1区全景	S B 611043No9
.....	7-2区全景	S B 611038
.....	S D 67001	写真図版31	S A 611087・611088
.....	S D 67001断面	S B 611073・611074・611082
第6次調査8区		写真図版32	S B 611075
写真図版21	S B 611081
.....	8区全景	S B 611080・611083・S A 611086
.....	8区南部	S K 611005
.....	S D 68001	写真図版33	S K 611009
.....	S D 68004断面	S K 611022
.....	S D 68002・68003	S K 611024
.....	S D 68003断面	写真図版34	S D 611001遺物出土状況
第6次調査9区		S D 611001遺物出土状況
写真図版22	S D 611001遺物出土状況
.....	9区調査前風景	写真図版35	S D 611001・611004
.....	9-1区全景	S D 611001
写真図版23	写真図版36	S D 611013
.....	9-2区全景	S D 611013
.....	9-4区全景	S D 611013断面
.....	9-3区全景	S D 611021
第6次調査10区		写真図版37	S Z 611006
写真図版24	S X 611037
.....	10-1区全景	写真図版38	S X 611051
.....	10-2区全景	S X 611052
.....	10-3区全景	写真図版39	S K 611057・611058・611066
.....	S D 610004	S K 611057
.....	S D 610005	S K 611053
第6次調査11区		S K 611055
写真図版25	S K 611060
.....	11区調査前風景	S K 611059
.....	11-1区全景	S K 611069
.....	11-2区西部	写真図版40	へ-P18Pt3
写真図版26	へ-Q18Pt1
.....	11-2区中央部	へ-Q18Pt6
.....	11-2区中央部	へ-P19Pt6
写真図版27	へ-P19Pt13
.....	11-2区東部	へ-Q19Pt2
.....	11-3区全景	
写真図版28	
.....	11-2区下層中央部	
.....	11-3区下層	
.....	11-3区下層	
写真図版29	
.....	S B 611044	
.....	S B 611044No2	
.....	S B 611044No3	
.....	S B 611044No4	
.....	S B 611044No6	

..... ~R19Pit5
..... ~R19Pit1

第6次調査12区

写真図版41 12区調査前風景
..... 12-1区全景
..... 12-2区全景
写真図版42 12-3区全景
..... 12-4区全景
..... 12-5区全景
..... S A612030
写真図版43 S E612003
..... S E612003
..... S E612007-612017
..... S E612017
..... S D612020
..... S A612025
写真図版44 ホ-O14Pit5上層遺物出土状況
..... ホ-O14Pit5下層遺物出土状況

第6次調査13区

写真図版45 13区調査前風景
..... 13-1区全景
..... 13-2区北部全景
写真図版46 13-2区中央部景
..... 13-2区南部
..... 13-3区全景
..... 13-3区全景
写真図版47 S E613001下部
..... S E613001下部断面

..... 13-3区全景
..... 13-3区全景
写真図版48 S E613001上部
..... S E613001上部断面
..... S E613007断面
..... S D613008
..... S D613007
..... S Z613014

第6次調査14区

写真図版49 14-1区全
景
..... 14-1区全景
..... 14-2区全景
写真図版50 14-3区全景
..... 14-3区全景
..... 14-4区全景
..... 14-5区全景

木製品

写真図版51 曲物
写真図版52 加工材・楔
写真図版53 S E61012-61013-61033井戸枠
写真図版54 S E613001井戸枠
写真図版55 S E612003井戸枠①
写真図版56 S E612003井戸枠②
写真図版57 S E62002井戸枠①
写真図版58 S E62002井戸枠②
写真図版59 S E62002井戸枠③
写真図版60 S E62002井戸枠④

表 目 次

<p>第1表 高度水利機能確保基盤整備事業(朝見上地区)に伴う埋蔵文化財調査一覧表… 3</p> <p>第2表 平成24・25年度範囲確認調査結果 一覧表… 16</p> <p>第3表 掘立柱建物一覧表… 178</p> <p>第4表 遺構一覧表… 179</p> <p>第5表 木製品一覧表… 223</p> <p>第6表 分析実施一覧表… 232</p> <p>第7表 木棺材の樹種同定結果一覧表… 238</p> <p>第8表 漆製品調査試料一覧表… 241</p> <p>第9表 漆器の断面観察結果表… 250</p> <p>第10表 EPMA分析結果表… 250</p> <p>第11表 人歯試料一覧表… 251</p> <p>第12表 供試材の履歴と調査項目… 252</p> <p>第13表 供試材の化学組成… 255</p> <p>第14表 供試材調査結果のまとめ… 270</p> <p>第15表 木製品・井戸枿材の樹種同定結果一覧表 … 272</p> <p>第16表 井戸枿材の遺構別樹種同定結果… 278</p> <p>第17表 木製品・井戸枿材の樹種同定結果… 279</p> <p>第18表 分析対象… 280</p>	<p>第19表 塗膜分析結果… 281</p> <p>第20表 分析試料とその詳細… 281</p> <p>第21表 生漆赤外吸収位置とその強度… 282</p> <p>第22表 動物骨… 282</p> <p>第23表 分析試料一覧表… 284</p> <p>第24表 含水率および重・軽鉱物… 285</p> <p>第25表 4Φ残渣中の鉱物粗製… 287</p> <p>第26表 各試料の粒度分析結果… 288</p> <p>第27表 各試料の粒度指標… 289</p> <p>第28表 分級度、歪み度、尖度の評価… 289</p> <p>第29表 出土炭化材の樹種同定結果一覧表… 290</p> <p>第30表 種実… 293</p> <p>第31表 堆積物中の珪藻化石産出表… 300</p> <p>第32表 珪藻化石の環境指標種群一覧表… 301</p> <p>第33表 試料1g当たりのプラント・オパール個数 … 302</p> <p>第34表 半定量分析結果… 306</p> <p>第35表 測定試料および処理… 311</p> <p>第36表 放射線炭素年代測定および暦年校正の結果 … 313</p>
---	--

I. 前 言

1. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

本書で報告する内容は、平成24・25・27年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴って実施した、埋蔵文化財の記録保存にかかるものである。当事業の主体は、三重県農林水産部、実施機関は泉松阪農林事務所農村基盤室（以下、松阪農林）である。

朝見遺跡は、松阪市街地より約1.5km東の田圃地帯に位置する遺跡で、遺跡とその周辺一帯には今なお古代の条里型地割が良く残っている。ここで、朝見上地区（朝田・立田・和屋・幸生・上七見・上川町）を対象とした高度水利機能確保基盤整備事業が計画されたため、当事業の実施機関である泉松阪農林商工環境事務所（現松阪農林事務所、以下松阪農林と略）と保護措置について協議を行った。事前協議の詳しい経過は、平成26年刊行の『朝見遺跡（第1・2次）発掘報告』をあわせて参照されたい。

その結果、朝見上地区における事業区域が159haと広大な面積に及んだため、平成21年度は分布調査、平成22～25年度に範囲確認調査を4カ年に分割して実施した。これらの事前調査に基づく朝見遺跡の本発掘調査は、平成22年度に第1次調査、平成23年度に第2次調査、平成24年度に第3次調査、平成25年度に第4次調査、平成26年度に第5次調査を実施した（第1表）。

(2) 範囲確認調査

朝見遺跡では、平成22～25年度に範囲確認調査を行い、計308ヶ所の調査坑を設定した。このうち、第1～4次調査に先立つ平成22年度の範囲確認調査については、『朝見遺跡（第1・2次）発掘報告』で報告されている。第5・6次調査にかかる事前の範囲確認調査は、平成24・25年度に行われており、調査の結果、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認された。また、一部の調査坑では縄文時

代後期頃の遺物も出土した。この調査内容については、第3章で詳述する。

この範囲確認調査を受けた協議の結果、主たる本発掘調査の対象は、遺構・遺物が確認された要調査範囲における農地農業用集落内道路・幹線水路及び支線水路の施工部分とした。また、田面については極力保護層を確保しよう図ったが、一部では田面の高低調整に伴う掘削により、遺跡に影響を与える範囲が生じたため、調査の対象範囲とした。

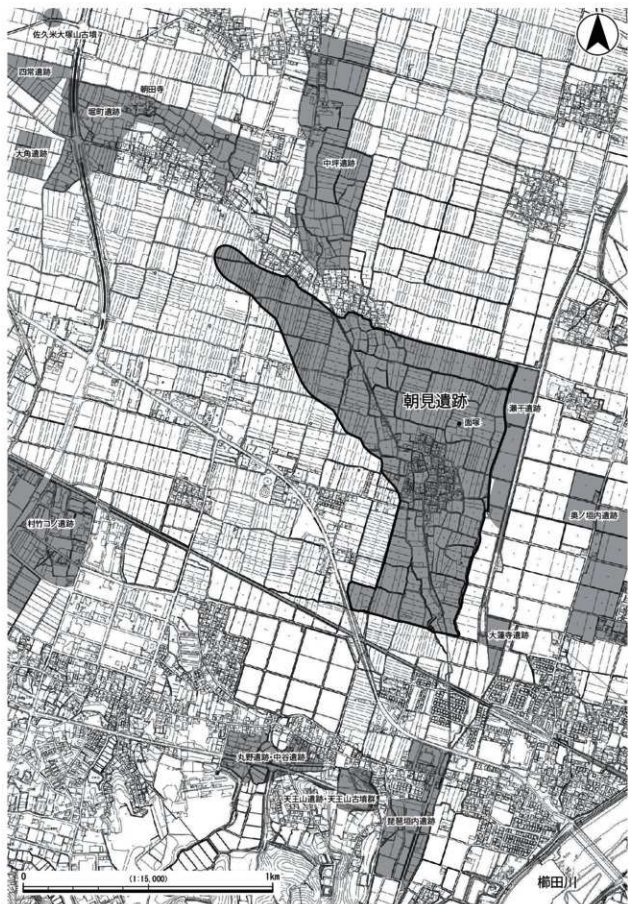
(3) 既往の本発掘調査

朝見遺跡の発掘調査は、平成22～26年度の間に第1～5次調査を実施している。以下では、朝見遺跡を説明する上で主要な成果が得られた調査について記す。その他の調査については第1表を参照されたい。

第1次調査では、平安時代後期以降に埋没する大溝が見つかり、現代の幹線水路もこの大溝を踏襲して作られていることがわかった。

第2次調査では、第1次調査で見つかった大溝と一連と考えられる溝のほか、東西方向の条里溝などが確認された。これら溝の出土遺物から、当該地において条里溝が機能し始めたのが、平安時代後期を下らない時期であることがわかり、条里型地割の施工や水田利用の一端が明らかとなった。また、平安時代前期後半～後期にかけての溝群や井戸からは、石帯や墨書土器、緑釉陶器、越州窯系青磁、朱墨付転用硯、馬歯、鉄製品や鉄滓などの官衙関連の遺物が多く確認されているほか、木製祭祀具や土馬など祭祀系遺物が多数出土した。

第5次調査では、遺跡の南東隅の調査区で確認された大溝から平安時代後期の青銅鏡が3面（瑞花円鏡・瑞花双鳥八稜鏡・素文鏡）出土した。出土状況から水辺の祭祀に伴うものと考えられる。三重県内で当該期の集落遺跡から複数の青銅鏡が出土したのは、初めての事例である。また、和屋町集落の北側



第1圖 朝見遺跡位置圖

第1表 高度水利機能確保基盤整備事業(朝見上地区)に伴う埋蔵文化財調査一覧表

調査年度	範囲確認調査						発掘調査				
	遺跡名 (所在地)	確認面積	調査坑	現状	調査期間	主な 遺構	対応	遺跡名 (次数)	調査面積	形式	報告書
平成22年度	朝見遺跡 (和屋町)	162,000㎡	160ヶ所	水田	20100914～ 20101006	溝	要調査	朝見遺跡 (第1次)	205㎡	工事立会	三重県埋蔵文化財センター2014『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』
平成23年度	塚町遺跡 (朝田町)	123,020㎡	66ヶ所	水田	20111219～ 20111227	溝 土坑 井戸	要調査	朝見遺跡 (第2次)	3,412㎡	本調査 工事立会	三重県埋蔵文化財センター2014『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』
	西常遺跡 (朝田町)	4,900㎡	3ヶ所	水田	20111214	なし	施工可				
	大角遺跡 (朝田町)	1,060㎡	2ヶ所	水田	20111214	溝	要調査				
	朝見遺跡 (立田町)	40,080㎡	29ヶ所	水田	20111214～ 20111219	溝	要調査				
平成24年度	中坪遺跡 (立田町)	131,000㎡	74ヶ所	水田	20121203～ 20121208	溝 土坑	要調査	塚町遺跡 (第5次)	4,396㎡	本調査	三重県埋蔵文化財センター2016『塚町遺跡(第5次)発掘調査報告』
	大角遺跡 (第1次)							64㎡	工事立会		
	朝見遺跡 (立田町)	150,000㎡	55ヶ所	水田	20121211～ 20121214	溝	要調査	朝見遺跡 (第3次)	236㎡	工事立会	本書
平成25年度	朝見遺跡 (和屋町)	187,000 ㎡	64ヶ所	水田	20130904～ 20130913	溝 土坑	要調査	塚町遺跡 (第6次)	5,463㎡	本調査	三重県埋蔵文化財センター2018『塚町遺跡(第6・7次)発掘調査報告』
								中坪遺跡 (第1次)	1,955㎡	本調査	三重県埋蔵文化財センター2017『中坪遺跡(第1次)発掘調査報告』
								朝見遺跡 (第4次)	452㎡	工事立会	本書
平成26年度								中坪遺跡 (第2次)	1,100㎡	本調査	三重県埋蔵文化財センター2018『中坪遺跡(第2次)発掘調査報告』
								朝見遺跡 (第5次)	9,996㎡	本調査	—
								塚町遺跡 (第7次)	720㎡	工事立会	三重県埋蔵文化財センター2018『塚町遺跡(第6・7次)発掘調査報告』
平成27年度							朝見遺跡 (第6次)	8,545㎡	本調査	本書	
平成28年度								朝見遺跡 (第7次)	5,742㎡	本調査	—
								朝見遺跡 (第8次)	約600㎡	工事立会	—
平成29年度								中坪遺跡 (第3次)	3,775㎡	本調査	—
								朝見遺跡 (第9次)	約620㎡	工事立会	—
平成30年度								中坪遺跡 (第4次)	64㎡	工事立会	—

の調査区では、一辺の長さが約1mの方形の柱穴を持つ平安時代中期の大型掘立柱建物が増数見つかった。そのうちの1棟は、南と西に庇、さらに南には庇に続く縁が付属する建物（庇・縁を含め梁行4間、桁行4間）であった。

その他、第5次調査では、低地の中でも微高地にあたる場所で縄文時代中期末～後期初頭の埋設土器や石囲炉が確認されている。柿田川による氾濫からの被害が少ない自然堤防などの微高地上に縄文時代の集落があったと考えられる。また、瀬干遺跡と隣接する東側の調査区では、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が13基確認されており、この一帯が墓域であったことが明らかになっている。

(4) 第3・4・6次調査の経過

第3次調査の調査期間は、平成24年12月10～11日、第4次調査の調査期間は、平成25年9月30日であった。第3・4次調査については、工事施工時の工事立会として行ったことから、それぞれの調

査期間は短期であったこともあり、調査日誌等の作成を行っていない。

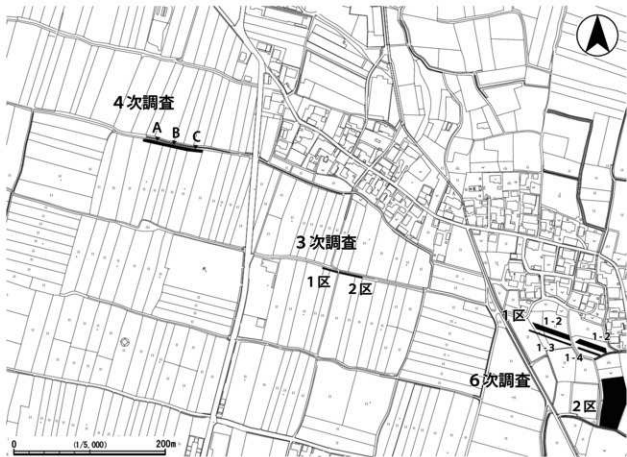
第6次調査の調査期間は、平成27年5月12日～平成28年2月23日である。耕作との関係上、旧参宮街道沿いにあたる立田町内の1・2区から調査を開始し、3・4区へと順次進めた。立田町内にある調査区を終了していくとともに、和屋町内に展開する5～14区の調査を実施した。なお、調査が終了した調査区については、出来高の検査後に随時埋戻しを行い、調査前の現状復旧を行っている。

以下に第6次調査の調査日誌（抄）を記す。

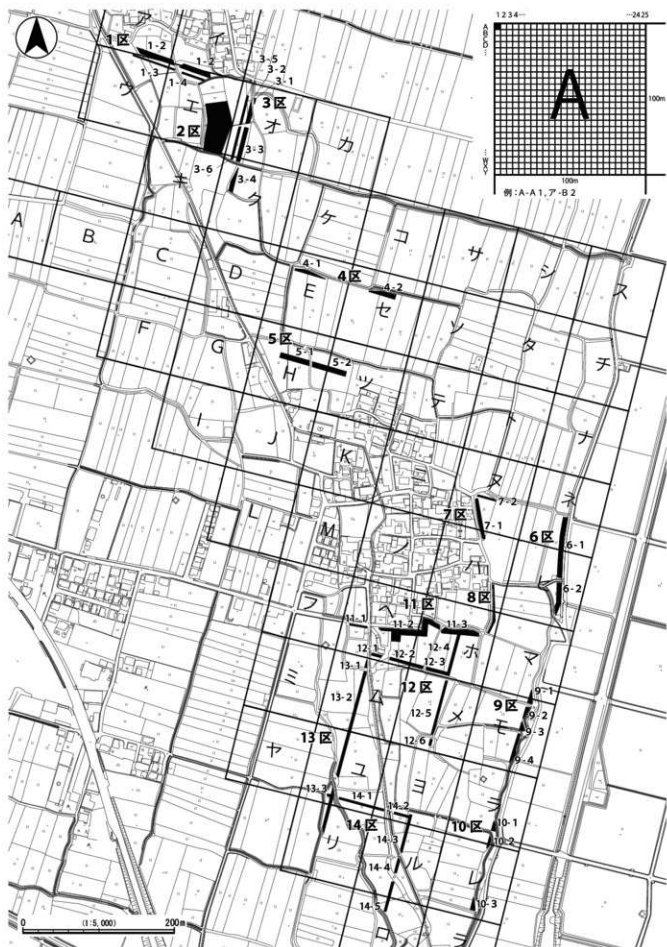
調査日誌（抄）

[平成27（2015）年]

- 5月12日 事前準備開始。
- 20日 調査前風景写真撮影。
- 28日 2区表土掘削開始。
- 6月5日 2区表土掘削完了。
- 10日 2区遺構検出・掘削開始。
- 15日 1-1・1-2区表土掘削開始。



第2図 第3・4次調査区位置図



第3図 第6次調査区位置図・地区割配置図

17日	1-1・1-3区表土掘削完了。	28日	狭川真一氏（元興寺文化財研究所）によるS X 62024の調査指導を実施。4区表土掘削開始。
22日	1-1・1-3区遺構検出・掘削開始。	30日	4区遺構検出・掘削開始。3区の調査完了。
29日	1-2・1-4区表土掘削開始。	10月5日	7区表土掘削開始。
7月10日	1-2・1-4区遺構検出・掘削開始。	6日	5区の調査完了。7区の遺構検出・掘削開始。8区表土掘削開始。
14日	1-1・1-3区全景写真撮影。	7日	4-1区全景写真撮影。
17日	前日から続く台風に伴う豪雨により1・2区ともに全ての調査区が水没。	9日	4-2区全景写真撮影。6区表土掘削開始。7区全景写真撮影。
27日	1-1区北壁断削で把握した層位から縄文土器出土。	13日	6区遺構検出・掘削開始。
29日	2区S X 62024を検出。	14日	2区S X 62024の掘削および記録作業終了。2区及び5区の調査完了。
8月4日	3-5・3-6区表土掘削開始。	15日	7区の調査完了。8区全景写真撮影。8区の調査完了。
7日	1区の調査完了。2区S X 62024の断削土層および段下げされた平面で漆製品の断片と木棺痕跡を確認。木棺墓であることを確信する。	16日	11区の表土掘削開始。表土掘削段階でS D 611001を検出。埋土中に大量の土師器・製塩土器が含まれていることを確認。
11日	3-5区遺構検出・掘削開始。	19日	11区遺構検出・掘削開始。
25日	3-5・3-6区全景写真撮影。	20日	11区S D 611001 検出状況写真撮影。
27日	2区S X 62024 木棺内を掘削した結果、蓋板の残存を確認。	22日	6-1区全景写真撮影。
9月2日	2区全景写真撮影のための清掃作業を開始。近日再び降雨予測のため、急ピッチで作業を行う。	23日	11区S D 611001 検出状況写真撮影。6-2区全景写真撮影。6区の調査完了。
3日	10時から降雨。今後の工程を考慮して清掃途中だが、やむなく2区全景写真撮影を行う。	27日	11区S D 611013 が現和屋町集落の南端に沿うように存在することが判明。11-2区の遺構検出面から縄文土器が出土。下層に縄文時代の遺構面がある可能性を考える。
4日	5区表土掘削開始。	30日	11-2区で縄文時代遺構面の有無を確認するための断削りを実施。縄文時代の包含層と落込み状およびビット状の遺構を確認。断削りの結果から、該当範囲について下層（縄文時代）遺構面の調査が必要と判断。
9日	7日から続く台風18号に伴う豪雨により、調査中の2区及び3区・5区はすべて水没。現地説明会を控え、巨大プールの状態となり、絶望感が沸き立つ。	11月5日	11-5区上層遺構面全景写真撮影。12区遺構検出・掘削開始。
11日	調査区の復旧完了。5区遺構検出・掘削開始。	6日	11-2区上層遺構面全景写真撮影。
12日	現地説明会を2区で開催。水没から復旧した調査区を来場者にお見せする。	10日	11-2区で縄文時代のS X 611037を検出。
14日	2区S X 62024の蓋板を除去。その後、木棺内を掘削し、底板まで到達。複数の漆製品と土師器皿を検出。棺北側で鉄製品と複数の人歯が出土。5区S Z 65004の底面で液板状の凹凸痕跡を確認。	16日	11-1・11-2区全景写真撮影。
15日	2区内にある井戸の断削りを開始。		
25日	5区S D 65011 から鉄製の鋤先が出土。		

19日	13区表土掘削開始。
24日	11-5区全景写真撮影。
25日	13区遺構検出・掘削開始。
26日	13-1区全景写真撮影。
27日	13-2区全景写真撮影。
30日	11-2区上層の調査完了。
12月1日	11-2区下層遺構面までの重機による掘削開始。13-3区全景写真撮影。14区表土掘削開始。
2日	13区の調査完了。14区遺構検出・掘削開始。14区の遺構検出・掘削開始。14-1区全景写真撮影。
7日	11-5区下層遺構面までの重機による掘削開始。
9日	14-2～4区全景写真撮影。9-1・9-2区表土掘削開始。
10日	14-5区全景写真撮影。
14日	11-2区下層の遺構検出・掘削開始。S X 611051や複数の土坑・ピットを検出。9-1・9-2区遺構検出・掘削開始。13区の調査完了。
15日	9-3・9-4区表土掘削開始。14区の調査完了。
16日	9-1区全景写真撮影。
17日	9-3・9-4区遺構検出・掘削開始。
18日	9-2区全景写真撮影。
22日	9-3・9-4区全景写真撮影。

[平成28(2016)年]

1月6日	年度明け現場初日。11-2区下層の遺構掘削を含む調査を継続。10区表土掘削開始。
7日	10-1区遺構検出・掘削開始。
8日	10-1区全景写真撮影。10-2区遺構検出・掘削開始。11-5区下層の遺構検出・掘削開始。上層で認識できなかった古代のピットも合わせて検出。
12日	10-2区全景写真撮影。10-3区遺構検出・掘削開始。終了後直ちに全景写真撮影。
13日	10区の調査完了。11-2区下層全景写真撮影。

15日	11-5区下層全景写真撮影。全景写真撮影後、11-2・11-5区下層の補足調査。
22日	11-2・11-5区下層の調査完了。本日もって、現場内での掘削および記録作業を終了した。

(5) 文化財保護法にかかるとの諸手続

本発掘調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、以下のとおりである。

- ① 文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」(県教育委員会教育長あて三重県知事通知)
 - ・平成22年9月9日付け、松農環第4236-1号
- ② 文化財保護法第99条第1項に基づく「発掘調査の着手報告」(県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知)
 - ・平成27年5月14日付け、教理第53号
- ③ 文化財保護法第100条第2項に基づく「埋蔵文化財の発見・認定通知」(松阪警察署長あて県教育委員会教育長通知)
 - ・平成25年1月25日付け、教委第12-4427号
 - ・平成28年3月1日付け、教委第12-4429号

(6) 普及公開

発掘調査現地説明会や発掘成果報告会などの普及公開活動を行った。また、学校教員の研修を発掘現場および普及公開活動の中で実施した。

- ・朝見遺跡(第6次)発掘調査現地説明会
 - 平成27年9月12日(土)、90名参加
- ・朝見遺跡(第6次)発掘調査現地公開(地元対象)
 - 平成27年11月22日(土)、35名参加
- ・発掘成果報告会
 - 「おもろいもん出ましたんやわ@三重2015」
 - 平成28年3月12日(土)、(於：三重県埋蔵文化財センター楨野分室)、60名参加
- ・松阪市立東部中学校1年生歴史グループ現場見学
 - 平成27年10月30日(金)、生徒15名・教員1名

2. 調査の方法

(1) 調査区の設定 (第2・3回)

第3・4・6次調査地は、当事業での工事対象部分のうち、農業用集落内道路および幹線・支線用水路の施工箇所が多いことから、大部分の調査区が幅の狭い線状を呈している。なお、田面の高低調整により遺構面まで掘削がおよぶ範囲については、面的に広い調査区となっている。第3次調査区は、現立田町集落の南側、第4次調査区は現立田町集落の西側、第6次調査区は現立田町集落の南端から、朝見遺跡として括られる周知の埋蔵文化財包蔵地の南端にいたる南北約1.3kmの範囲に点在しながら展開する。

第3・4次調査は、水路敷設工事施工時における工事立会という形式で調査を実施し、各調査面積は第3次調査が236㎡、第4次調査が141㎡であった。第6次調査は、本発掘調査として実施し、調査面積は当初8,446㎡として着手した。しかし、11区の一部範囲で下層遺構面(縄文時代)があることが判明したため、2面目の調査が必要となったことから、最終的な調査面積は8,545㎡となった。

第3次調査区は、農道を挟んで2箇所に分かれたことから、西側を1区、東側を2区とした。

第4次調査区は、調査箇所が1箇所であったため、調査区名を付与していない。

第6次調査区は、広範囲に展開する調査区を便宜上1～14区と名付け、各調査区の内部は枝番を付した(例:14-1区)。個別に分かれる調査区と調査掘削箇所数は計42箇所に及んでいる。

調査区内における地区別は、調査回数によって調査形態・形式が異なっている。第3・4次調査については、工事立会での調査であったため、地区別の設定を行っていない。第6次調査については、調査区全体を網羅する大地区と小地区の設定を行っている。地区別の方法は、第1・2・5次調査で行われている方法を踏襲した。まず、旧飯野部桑里(N-15°-E)を主軸とする100m四方の大地区(A～M、A～W)を設定し(第5回)、大地区内は東西を1～25(英数字)、南北をA～Y(大文字アルファベツ

ト)として、全体を25分割した4m四方の小地区を設けた。大・小地区とも、北西隅を基点とした地区名(例:E-U1、A-A25)を付与している。遺物の取り上げにはこの地区名をラベルに記載している。

なお、平面直角座標系は、世界測地系(第VI系)を採用しており、本書で報告する各調査区平面図で示している。

(2) 遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機(バックホー)で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。井戸の断ち割りや自然流路の掘削においては重機を補助的に用いている。

(3) 記録・図化

遺構実測は調査員による手測りである。第3・4次調査については、略測図や遺構配置略図の作成を省略し、掘削完了後直ちに遺構平面図・土層断面図の作成を行った。

第6次調査については、遺構検出段階は小地区単位の1/40略測図(遺構カード)を作成し、これをもとに1/100の遺構配置略図を作成した。ただし、ピットや土坑が少ない4～6・8区では遺構カードの作成を省略し、1/100の遺構配置略図を主に用いた。遺構平面図・土層断面図については原則1/20で作成したが、遺物の出土状況図等の詳細図については1/1や1/10で作成を行った。その他、遺構の状況により適切な縮尺を用いた。遺構番号はピットを除き、調査区ごとの通し番号を付与した。第3次調査では、第2次調査からの連番で、番号を付与している。第6次調査では、調査回数番号「6」を冒頭に付し、次に調査区番号「1～14」を付与している。その上で、番号下1・2桁については、調査区単位に「1～」の番号を付し、調査区単位で遺構番号を1から管理することとした。よって、第6次調査における遺構番号は、60000番台ないし600000番台としている(例:SD 61001、SK 612001)。なお、報告書作成にあたり、番号および

遺構略号の加除訂正を行ったが、本書では原則として調査時の遺構番号と略号を用いて報告している。

ピットの遺構番号は、当センターの発掘調査基準に従い、第6次調査については、小地区ごとの通し番号としているが、遺物実測図を掲載した掘立柱建物の柱穴については別に番号を付した（例：S B 62026- P 1）。

当センターの方針に従い、第6次調査における遺構の写真撮影は、すべてデジタル一眼レフカメラに移行した。ただし、一部の写真については6×7判フィルムカメラでの撮影を並行して行っている。なお、第3・4次調査については、デジタルカメラ撮影へ移行する以前の調査になるため、35mmフィルムカメラとコンパクトデジタルカメラを併用した撮影を行っている。

なお、使用したカメラについては、35mmカメラはニコンFM2、デジタル一眼レフカメラは6×7判相当がニコンD 800 E、35mm判相当がニコンD 3300、6×7判フィルムカメラがペンタックスである。第6次調査では、基本的にニコンD 3300・D 800 Eおよびペンタックスで撮影し、コンパクトデジタルカメラを補助的に用いた。遺物の写真撮影は、デジタル一眼レフカメラのD 800 Eを用いた。

（4）出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、小地区単位で取り上げている。

井戸枠材を含む木製品については樹種同定を実施した。また、塗膜が認められる製品については、塗膜分析を実施し、その材質と構造を把握することに努めた。また、調査で採取した土壌については、旧地形を含む古環境を明らかにするために、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析を行い、遺構埋土から出土した炭化物については、遺構の埋没過程を明らかにすることを目的とした放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。出土した種実や動物骨・人歯についても各同定を実施した。（渡辺）

Ⅱ. 位置と環境

(1) 地理的環境

榑田川は、総延長84km、最大幅200mに及ぶ伊勢平野の大河川である。紀伊山地の高見山山系に源を發し、中央構造線に沿って山中を東流するが、伊勢平野に出ると向きを直角に北へ変え、伊勢湾へ注いでいる。伊勢平野での榑田川は、洪水により幾度もその流路を変えている。分流して国史跡齋宮跡(31)を限る蔵川も、かつては榑田川の本流であった。この結果、下流域には広大な沖積平野が形成され、多数の自然堤防が散在する。和屋、立田、朝田の3集落は、弧状縦列に所在し、不明確ではあるものの自然堤防上に立地するものと思われる。朝見遺跡(1)は和屋集落を含み、立田集落に至る自然堤防を中心に周知されており、周囲の水田より若干微高地の標高6~7m前後である。

(2) 歴史的環境

当遺跡の所在する南勢地域は、県内でも有数の遺跡密集地帯で、沖積平野や河岸段丘、その背後の丘陵地帯には多くの集落跡や古墳群が存在する。

旧石器~縄文時代 朝見遺跡周辺の低地では、当該時期の遺跡は殆ど知られていない。旧石器時代では、段丘縁辺部を中心に複数の遺跡が所在する大仏山丘陵周辺まで南東へ8km離れる。続く縄文時代では、当遺跡の他、周辺の堀町遺跡や中坪遺跡等で縄文土器が散見される。蔵川右岸の低位段丘面上上がると西出遺跡から顔を表現した晩期の土版が出土している。さらに右岸段丘上では粟垣内遺跡(55)や金剛坂遺跡(8)から中期末~晩期の土器や石器が多数出土している。なかでも金剛坂遺跡から出土した後期の異形環状壺が注目される。

弥生時代 前期の土器研究において学史的な資料となる垂流遠賀川系の土器群をもつ金剛坂遺跡は、松菊里型とされる住居跡や中期から後期のまでの方形周溝墓群も注目されている。方形周溝墓は、織糸遺跡(14)や天王山遺跡(13)でも検出されているが、寺垣内遺跡(15)・村竹コノ遺跡(12)・瀬干遺

跡(4)等、沖積平野での検出例も増加している。

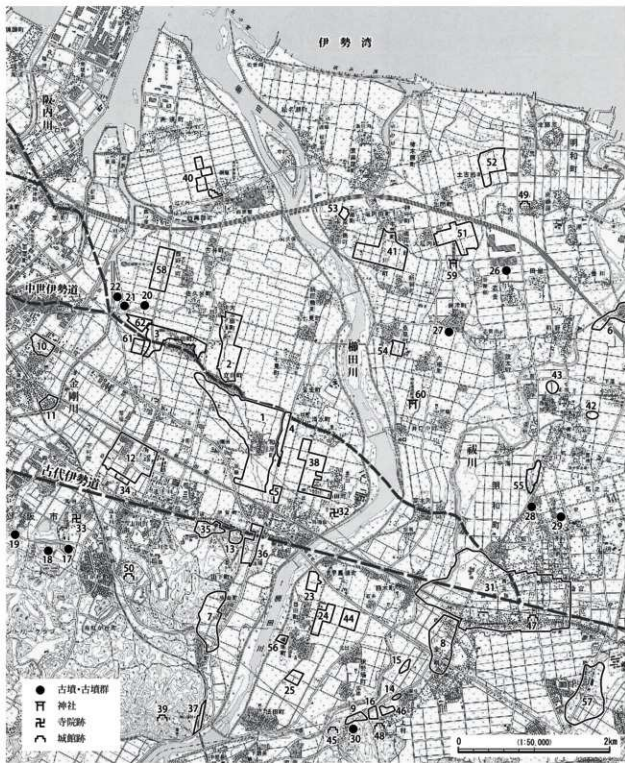
朝見遺跡と隣接する瀬干遺跡では、計8基の方形周溝墓が検出され、この方形周溝墓群は朝見遺跡の西端部に及ぶ可能性が高い。朝見遺跡と一連の遺跡群と考えられる堀町遺跡も同様であるが、銅鐸形土製品が出土していることが特筆される。

古墳時代 既述したように南勢地域の丘陵には高密度に群集墳が分布している。分布は段丘上にも及んでいる。齋宮跡近隣の県史跡坂本1号墳は前方後方墳で、金銅装頭椎太刀が、神前山1号墳(30)は帆立貝式前方後円墳で画文帝神祇鏡が3面出土し、中央政権との強い結び付きを想定させる。

古墳の分布は沖積平野にも散在的に認められる。堀町遺跡と隣接して佐久米古墳群が存在し、前方後円墳と推測される大塚山古墳(20)は、刀剣・槍・鏃・冑・銅鏡・勾玉などの出土遺物の豊富さによって著名である。朝見遺跡のある和屋町では古墳7基が存在しと言われているが、現在は面塚と呼ばれる1基だけが地表面に残っている。そのほか、朝田町に1基(俗称森塚あるいは天土塚)、立利町(現・立田町)字北浦に1基存在したといわれており、神宮徴古館には、伝出土の仿製三獸鏡が所蔵されている。

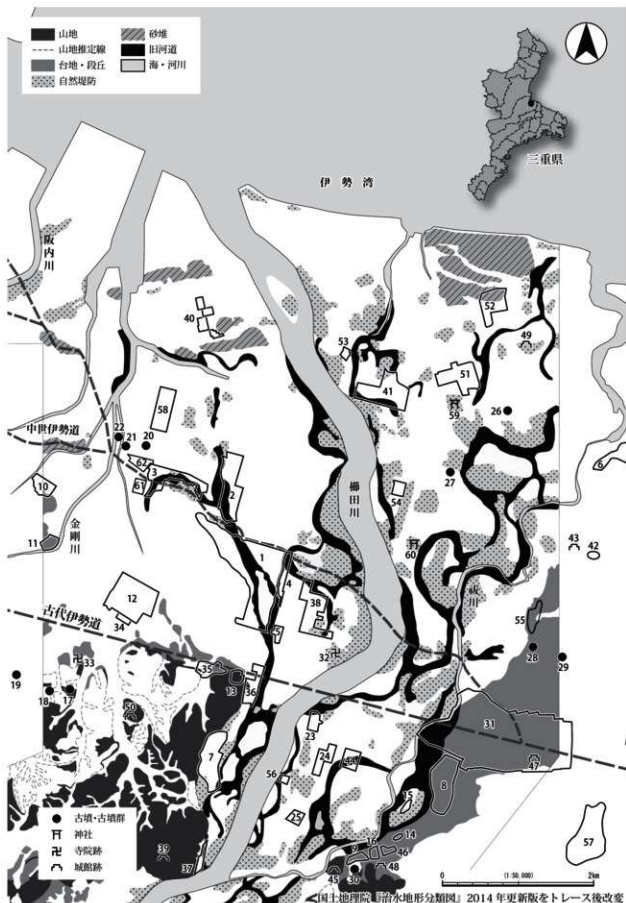
飛鳥・奈良時代 榑田川下流域左岸は、伊勢国飯野郡の領域である。飯野郡は、度会郡・多気郡と合わせて、国司権力が及ばない伊勢神宮の神領「神三郡」にあたる。官道の古代伊勢道は、近世参宮街道とほぼ同じ位置に通っていたと考えられ、官道は齋宮跡地内で、側溝を有する幅約9mの直線道として確認される。榑田川下流域には、この官道と軸を同一とする飯野郡条里型地割(北から約15°東偏)が広がっており、施工年代は古代末頃と推測されている。

朝見遺跡から約5km東に位置する齋宮跡(31)は、昭和45年度から継続して調査が行われており、当遺跡の発掘調査成果と関連する可能性が高い。付近の北野遺跡(57)からは200基を超える土器器焼成坑群が検出され、近隣の国史跡水池土器製作遺跡で



1. 朝見遺跡 2. 中坪遺跡 3. 堀町遺跡 4. 瀬干遺跡 5. 大蓮寺遺跡 6. 西浦遺跡 7. 山部遺跡 8. 金剛坂遺跡 9. コドノA遺跡
10. 浦平崎遺跡 11. 杉田外遺跡 12. 村竹コノ遺跡 13. 天王山遺跡・天王山古墳群 14. 織糸遺跡 15. 寺垣内遺跡 16. コドノB遺跡
17. 高田古墳群 18. 坊山古墳群 19. 権現山古墳群 20. 佐久米大塚山古墳 21. 丸山古墳 22. 輪塚古墳 23. 古曹通りB遺跡 24. 中の坊遺跡
25. 横地高塚遺跡 26. 北浦古墳 27. 狐崎古墳 28. 坂本1号墳 29. 東垣外古墳群 30. 神前山1号墳 31. 番宮跡 32. 大雷寺廃寺
33. 貴田寺廃寺 34. 竹子遺跡 35. 丸野遺跡・中谷遺跡 36. 琵琶垣内遺跡 37. 大川上遺跡 38. 奥ノ垣内遺跡 39. 神山城跡 40. 小狐遺跡
41. 西黒部塩釜跡・池ノ上遺跡・西黒部西山遺跡 42. 東村遺跡 43. 西出遺跡 44. 古川遺跡 45. 岩内城址 46. 城址遺跡
47. 宮城城址 48. 上村城址 49. 下御東中村城址 50. 浅瀬木城跡 51. 服部遺跡 52. 南山遺跡 53. 東久保北浦遺跡 54. 魚見里前遺跡
55. 東垣外遺跡 56. 西ノ垣内遺跡 57. 北野遺跡 58. 御堂山遺跡 59. 神服織機神社 60. 神麻織機神社 61. 大角遺跡 62. 四宮遺跡

第4図 遺跡分布図



第5図 地形分類図

は焼成坑と工房等が保存されている。これら以外にも斎宮跡付近では土器焼成坑を検出する遺跡が多数あり、総数は500基に迫る全国的にも特異な地域である。当地域は「有爾郡」と呼ばれ、伊勢神宮に調進する土器を焼成していた地として知られる。このことから、これらの焼成坑は斎宮及び伊勢神宮への土器の供給施設と考えられている。

一方、琵琶垣内遺跡(36)は奈良時代末頃にピークを迎える集落で、「下厨前」「厨前」などといった墨書土器がみられることから、斎宮寮に貢納する供物の供給地として機能していたと推測される。また、大雷寺廃寺(32)は奈良時代後期から平安時代前期頃の寺院とされ、軒瓦が発見されている。

平安時代 飯野郡・多気郡域内では、延暦22年(803)に川合荘が、弘仁12年(821)には大國荘が成立する。両荘は、東寺が持っていた荘園の中でも特に重要なものであったが、神宮による強い圧迫と柿田川の氾濫によって12世紀には崩壊している。

飯野郡域では、大川上遺跡(37)で9世紀後半の神宮寺の存在を示唆する墨書土器「神宮寺」が複数出土している。大蓮寺遺跡(5)では、飯野郡糸里プランと軸を同じくする10世紀後半の掘立柱建物と区画溝、陰刻花文の施された景注窟産の緑釉陶器が出土しており、朝見遺跡と一連の遺跡群と捉えられる。

多気郡域では、沿岸部に位置する南山遺跡(52)で奈良～鎌倉時代の遺物が出土しており、柿田川・蔵川河口部の集落と考えられる。柿田川の平野への出口付近にある東裏遺跡では、越州系青磁碗が出土し、カウジデン遺跡では役所跡とみられる5間×4間の四面庇の掘立柱建物が確認され、土馬や斎車が出土している。多気郡糸里との関わりが指摘される果渡遺跡では、石帯や緑釉陶器の出土がある。

平安時代後期～中世 掘町遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑などが確認されており大規模な集落が営まれていたとみられる。約25km南に位置する西ノ垣内遺跡(56)では、平安から中世にかけての集落跡が確認されている。山添遺跡(7)は、鎌倉から室町時代にかけて掘立柱建物や井戸が検出される。奥ノ垣内遺跡(38)では鎌倉時代の掘立柱建物・溝が確認されており、この遺跡も山添遺跡と同様に中

世集落とみられる。斎宮跡地内にもまとまった集落遺跡がみられ、朝見遺跡に隣接する中坪遺跡(2)でも室町時代の溝や井戸が多数確認される。概して平安時代後期からの遺跡は、全体的に中世まで継続する遺跡が多いようで、周囲では条里型地割が完成し、洪水に悩まされながらも現代まで稲作が継続している。(萩原・森川・和澄)

【参考文献】

- ・ 松阪市『松阪市史 第一巻 史料編 自然』1977年12月10日
- ・ 松阪市『松阪市史 第二巻 史料編 考古』1978年10月31日
- ・ 三重県教育委員会『昭和54年度県営園地整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』19803
- ・ 三重県教育委員会『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』19853
- ・ 多気町史編纂委員会『多気町史 通史』平成4年3月31日
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『明久宮跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・果渡遺跡』19953
- ・ 三重の古瓦刊行会『三重県の古瓦』平成8年11月1日
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『柿田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』19973
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『大川上遺跡発掘調査報告』19993
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告』19993
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』20033
- ・ 三重県『三重県史 資料編 考古1』平成17年9月30日
- ・ 伊藤裕輝『斎宮寮・伊勢道・糸里』『斎宮歴史博物館研究紀要14』平成17年3月31日
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『琵琶垣内遺跡(第1・4次)発掘調査報告』20063
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『織糸遺跡』20063
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』20063
- ・ 三重県『三重県史 資料編 考古2』平成20年3月31日
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『村竹コノ遺跡』20093

Ⅲ. 範囲確認調査

第5次調査および第6次調査に先立ち、平成24・25年度に事業地内の範囲確認調査を行い、遺構・遺物の有無確認を行った。対象範囲は、北西から南東方向に延びる現農業用基幹水路の東側と和屋町集落の南側である。調査坑は、当事業で計画されている幹線・支線用水路及び農業用集落内道路施工場所の該当位置に2カ年で計119箇所を設定した。2×3mを基本とする大きさで、設定位置は全て水田であった。

なお、第1・2次調査区および本書で報告する第3・4次調査区とその周辺については、平成22年度に実施され、平成26年刊行の報告書の中で報告されている。

(1) 平成24年度

今回の調査地は松阪市和屋町近郊の水田地帯にあたる。現況は水田を中心とし、条里型地割が残る景観である。ほ場整備予定地の約150,000㎡に対し、55箇所の調査坑を設定した。なお、当該年度にかかる調査坑はNo.75～129である。

調査坑No.75～77は和屋町の北部および中心部にあたる。調査坑No.75・76では朝見遺跡第2次調査(平成23年度)に確認された流路を中心とした遺構が見られた。調査坑No.77では、中世後期を中心とした遺構があった。

和屋町南部の調査坑No.78・110・82・98・101・100を中心としたあたりでは、平安時代後期から室町時代にかけての流路があり、遺物も多く確認できた。大蓮寺遺跡(平成24年度景観調査)も近く、近隣に集落遺構も想定される。同じく和屋町南部の調査坑No.81・84・89・92付近では、一部で中世後期頃のの水田と考えられる土層を確認したが、遺構・遺物ともに希薄であった。なお、調査坑No.84・94付近では、これまでの朝見遺跡調査では確認されていない黒ボクの堆積層が見られた。

調査坑No.113・117・120・125付近では、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物を確認した。また、調査坑No.121からは縄文時代後期頃の土器、

調査坑No.109からは古墳時代前期の土器を確認した。

主な出土遺物には、縄文土器、土師器(古墳前期・奈良・平安・中世)、灰軸陶器、陶器、青磁がある。

(2) 平成25年度

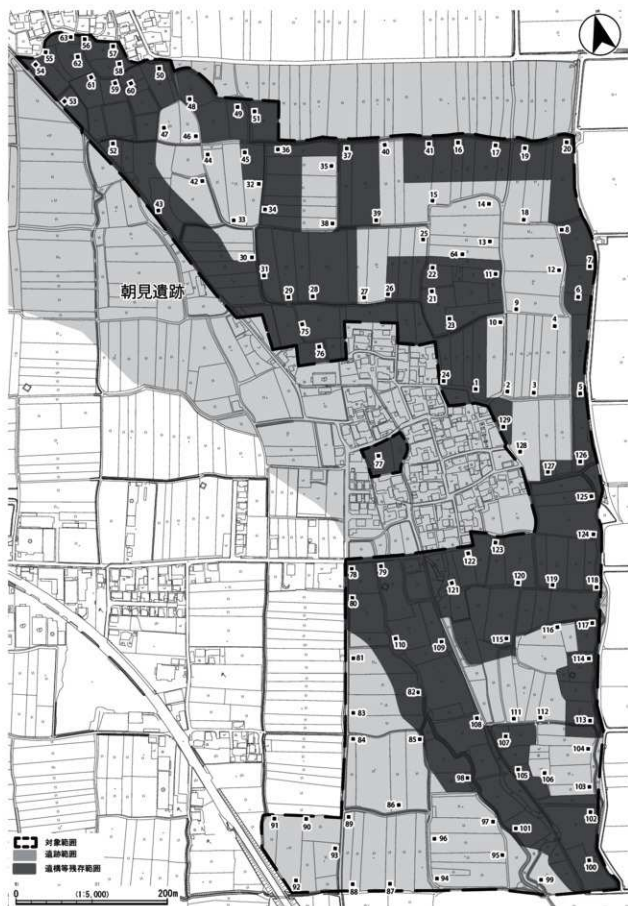
No.1～64の64箇所に調査坑を設定した。その結果、現地表下20～50cmで黄褐色系シルトに達し、この上面で主に古代から中世後期の遺構・遺物を確認した。

遺構・遺物の様相は、大きく①現和屋集落周辺(調査坑No.1、11、21～26、28～31、43)、②対象地東側(No.5～8、16～20、41)、③現立田集落南～東側(No.36、45～63)に三分される。

- ① 和屋集落周辺では、集落北側にある通称「面塚」の周辺で古代の遺構が多くみられた。
- ② 対象地東側では、平安後期の遺構のほか、古墳時代の土器を含む溝が複数認められ、南東に接する瀬干遺跡との関連が想定される。
- ③ 現立田集落南～東側では、中世後期の遺構が多く、現集落の前身となる集落が広がるとみられる。

なお、対象地の広い範囲で基盤層やその下層から縄文中期ごろの土器片が散見されたが、明確な遺構は認められなかった。

主な遺物には、縄文土器、土師器、須恵器、灰軸陶器、緑釉陶器、山茶碗がある。(波辺)



第6図 平成24・25年度範囲確認調査坑位置図

第2表 平成24・25年度範囲確認調査結果一覧表

実施年度	調査坑No.	包含層上の深さ(cm)	遺構上の深さ(cm)	確認遺構	出土遺物	実施年度	調査坑No.	包含層上の深さ(cm)	遺構上の深さ(cm)	確認遺構	出土遺物	実施年度	調査坑No.	包含層上の深さ(cm)	遺構上の深さ(cm)	確認遺構	出土遺物	
24	75	-	60	流路	土師器 山茶碗	24	115	29	48	溝? ビット	土師器、須恵器 製塩土器	25	26	-	30	ビット	-	
	76	-	25	土坑、溝	土師器		116	-	-	-	-		須恵器	27	-	-	-	-
	77	-	30	溝 ビット	土師器		117	-	22	-	-		土師器	28	-	30	溝	-
	78	-	25	ビット	土師器		118	-	30	溝?	土師器		29	-	25	溝 ビット	-	
	79	30	75	流路 水田	土師器 灰軸陶器		119	30	50	溝?	土師器、 須恵器、土埴		30	-	-	-	-	
	80	-	25	溝	土師器		120	-	24	ビット	土師器、製塩土 器、刺片		31	-	45	溝 ビット	-	
	81	-	-	-	-		121	25	55	土坑	縄文土器、刺片		32	-	-	-	-	
	82	40	60	土坑 ビット	土師器		122	-	30	ビット	土師器		33	-	-	-	-	
	83	-	-	-	-		123	-	25	ビット	土師器		34	-	30	土坑 ビット	土師器 灰軸陶器	
	84	-	-	-	-		124	-	40	流路	土師器		35	-	-	-	-	
	85	-	-	-	土師器		125	-	60	溝	土師器		36	-	30	溝	-	
	86	-	-	-	土師器		126	-	50	溝	土師器		37	-	35	溝 ビット	土師器	
	87	-	-	-	-		127	-	50	溝 ビット	土師器		38	-	-	-	-	
	88	-	-	-	土師器		128	-	-	-	-		39	-	35	土坑	-	
	89	-	-	-	-		129	-	35	ビット	土師器		40	-	-	-	-	
	90	-	-	-	-		1	-	30	ビット	-		41	-	50	溝 ビット	土師器	
	91	-	-	-	-		2	-	-	-	-		42	-	-	-	-	
	92	-	-	落ち込み	山茶碗、青磁		3	-	-	-	-		43	-	50	-	縄文土器	
	93	-	-	溝	-		4	-	-	-	縄文土器		44	-	-	-	-	
	94	-	-	-	-		5	-	45	溝	須恵器		45	-	55	流路 ビット	-	
	95	-	-	-	-		6	-	40	溝 流路	土師器 灰軸陶器		46	-	-	-	-	
	96	-	-	-	-		7	-	30	土坑 ビット	土師器 灰軸陶器		47	-	-	-	-	
	97	-	-	-	-		8	-	20	溝	土師器		48	-	45	溝 土坑 ビット	土師器	
	98	-	25	土坑	土師器		9	-	-	-	-		49	-	20	土坑	-	
99	-	-	-	-	10	-	-	-	-	50	-	45	-	-				
100	-	25	土坑 ビット	土師器 製塩土器	11	-	35	溝 ビット	土師器 山茶碗	51	-	25	溝 土坑	製塩土器				
101	-	25	土坑?	ロクロ土師器	12	-	-	-	-	52	-	70	流路 土坑	-				
102	-	32	土坑また は溝	土師器、 山茶碗、瓦	13	-	-	-	-	53	-	30	土坑	弥生土器				
103	-	-	-	-	14	-	-	-	-	54	-	40	-	縄文土器				
104	-	-	-	-	15	-	-	-	-	55	-	30	溝	-				
105	-	20	溝	土師器	16	-	50	溝	土師器	56	-	30	溝、 ビット	土師器				
106	-	-	-	土師器	17	-	35	溝	土師器	57	-	40	-	-				
107	-	50	溝?	土師器 土埴	18	-	-	-	灰軸陶器	58	-	35	井戸? 溝 ビット	土師器				
108	-	50	流路	土師器	19	-	35	溝	土師器	59	-	20	井戸?	土師器				
109	-	50	溝?	土師器	20	-	40	溝 ビット	-	60	-	25	溝 ビット	土師器				
110	-	55	溝	土師器 灰軸陶器	21	-	30	溝	土師器	61	-	28	溝	須恵器 緑軸陶器				
111	-	-	-	-	22	-	25	土坑 ビット	土師器	62	-	45	土坑	縄文土器? 弥生土器?				
112	-	-	-	土師器	23	-	25	溝 ビット	土師器、須恵器 山茶碗	63	-	40	溝 ビット	土師器				
113	-	60	溝?	土師器	24	-	25	溝	-	64	-	-	-	-				
114	-	22	土坑?	土師器、須恵器	25	-	-	-	-									

Ⅳ. 第3・4次調査

1. 調査の概要

(1) 概要

第3・4次調査は、平成24・25年度高度水利機能確保基盤整備事業に伴い、工事施工時の工事立会として実施した。第3次調査は平成23年度、第4次調査は平成24年度にそれぞれ実施し、各調査期間は第3次調査が平成24年12月10日・11日、第4次調査が平成25年9月30日であった。

(2) 第3次調査

第3次調査地は、立田町集落南方の現用水路脇の水田部分に埋設水路設置部分で実施した(第2図)。東西方向の調査地に対し、南北に農道が横切る位置関係となっている。この農道を挟んで、西側調査区を1区、東側調査区を2区とし、調査面積は236㎡であった。遺構検出面の標高は、1区が46m、2

区が48mである。

なお、平成22・23年度に実施された第1・2次の調査区1)は、和屋町集落の北西にあり、第3次調査区の南東約700mに位置する。

(3) 第4次調査

第4次調査地は、立田町集落の西方に位置し、朝見遺跡の西端にあたる部分である(第2図)。事前の協議では、工事が行われる452㎡が対象であったが、工事で掘削を伴いかつ地下遺構への影響が最も大きい水路設置部分を発掘調査の対象として実施した。調査区西に向かって延びる農道南側の水路設置部分であり、調査面積は141㎡であった。

なお第4次調査は、現状において朝見遺跡の範囲内で最も西側で実施した調査である。

2. 層序

(1) 第3次調査の層序

第3次調査で把握された基本層序は、I層が現耕作土、II層が現耕作土に伴う床土、III層は遺物を包含する沖積層と考えられる褐灰色粘質土が層厚約0.2～0.3mで堆積し、IV層の灰褐色粘質シルトの遺構基盤層に達する(第7図)。

1区は、II層直下でIII層が層厚約0.2mで堆積しており、西半部ではさらにその下に層厚約0.04mのふい黄褐色シルトが堆積し、現地表面から深さ約0.4mで灰褐色シルトの遺構基盤層に至る。

2区も1区と同様に、II層直下で褐灰色粘質土を確認し、西半部では1区と同様に層厚約0.1mの

ふい黄褐色シルトを確認したが、東半部では認められず、代わりに4層に分かれる灰褐色系の粘質土～シルトを確認した。遺構基盤層となる灰褐色粘質シルトは、この灰褐色系の粘質土～シルトの直下で確認した。現地表面からの深さは約0.8mであり、1区と比べて若干深くなる。

(2) 第4次調査の層序

第4次調査で把握された基本層序は、I層が現耕作土、II層が旧耕作土と考えられる暗灰黄色シルト、III層が黄灰色～黄褐色粘土である(第8図)。III層は沖積層の一部であり、東から西に向かって下がっていく堆積状況を確認した。

3. 遺構

(1) 第3次調査の遺構

第3次調査で検出した遺構は、溝1条(SD93)

である。

SD93(第7図) 1・2区の長軸に沿って東西方向に延びた溝である。1区の西端から東約35mで、

2区外の北に向かって続いており、検出できたのは、溝の南側の一部である。溝については工事掘削深度が現地表面から深さ約0.8 mまでであり、遺構検出面で既に工事掘削深度に達していたことから、平面検出のみを行った段階で調査を終了した。そのため、溝全体の掘削を行っていないため、深さなどの詳細は不明である。しかし、検出時の埋土から室町時代後期の土師器鍋等が出土したことから、溝の最終的

な埋没時期は室町時代後期以降と考えられる。

(2) 第4次調査の遺構

第4次調査では、掘削の結果、明確な遺構を確認することはできなかった。

しかし、旧耕作土であるⅡ層からは鎌倉時代～室町時代にかけての山茶碗が、Ⅲ層から弥生時代後期の弥生土器小片が出土した

4. 小結

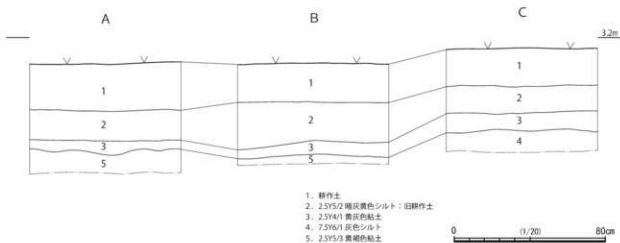
第3次調査では最終埋没時期が室町時代後期以降と考えられる溝1条を検出し、第4次調査では遺構は確認できなかったが、旧耕作土やその下の堆積層から弥生時代後期の弥生土器や鎌倉時代～室町時代の山茶碗などが出土した。

既に第2次調査の結果から、現在の用水路が条里型地割を踏襲している可能性が高いことが考えられており、現用水路付近にある第3次調査区でS D 93を検出したことは、第2次調査の結果を肯定するものと考えられる。また、第3次調査ではS D

93以外の遺構が検出できなかったことから、S D 93から北約150 mの微高地上に現在の立田町集落があることを踏まえると、遺構の広がりは現集落に近い第3次調査区よりも北側にある可能性が推測される。(渡辺)

【註】

- ① 三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告」2014年



第8図 第4次調査A～C地点柱状土層変遷図

V. 第6次調査

1. 1区

(1) 層序

1区では、地表面の水田耕作土直下で古代～中世の遺構面が検出される状況であった。そのため、遺構上部は若干の削平を受けている。

全体の地形は西に向かって緩やかに傾斜しており、1-2区東端では1-1区西端より遺構検出面のレベルが0.3mほど高くなっている。

古代～中世の遺構を検出・掘削する過程で、遺構面の基盤層となっている土層中から縄文土器の出土が認められたため、調査区北壁沿いに幅1m、深さ0.5～0.8mの断割を設け、古代～中世の遺構面以下の土層の堆積状況及び、縄文時代の遺構・遺構面の有無を確認した。

断割によって確認された基盤層のうち、調査区全体にわたって堆積が確認できるのは、69・71・74層である。

遺構は69層の上面で確認した。69・71層はシルトないし極細粒砂混じりのシルトであるが、74層は極細粒砂～細粒砂層となる。74層上面は1-2区東側では標高4.6mほどの高さとなるが、1-1区西側では標高4.2mほどの高さで、0.4mほどの高低差がある。

地盤が低くなる1-1区西側では、69・71層は薄くなる。代わりに、71層と74層との間に、暗灰黄色の細粒砂～中粒砂層(73層)が形成されている。

縄文土器の包含が確認されたのは、70層である。71層の上部にも若干の包含がみられた。70層は1-1区東部のみで確認されており、標高4.2～4.5mのレベルで堆積している。1-2区では70層は認められず、断割によっても縄文土器の出土は確認されなかった。

1-2区東端付近に位置するSR 61029の上層には細礫を主体とする層が堆積しており、この礫層が東側に向かって広がっている。SD 61028の上面もこの礫層によって覆われている。おそらく、調査区

東側に現在でも存在する水路と関係するものと思われる。1-2区東壁付近に見られる中粒砂で充填される落ち込み(68層)も、旧流路の痕跡である可能性がある。

このほか、1-2区西部では、かなり厚い砂層の堆積が認められる(75・75層)。74層以上の基盤層のさらに下位に堆積する土層と思われるが、性格は不明である。また、遺構名は付与しなかったが、古墳時代以前と考えられる埋没流路が数条確認されている(26～28・37～45層)。

(2) 井戸

SE 61012 (第11図) 1-1区北東部で検出された井戸である。SD 61002の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状は円形を呈し、直径2.0mを測る。深さは2.0mほどであるが、湧水が激しく壁面の崩落が急激に進行したことから、下層は重機で掘削して遺物を回収するにとどまったため、正確な深さは不明である。

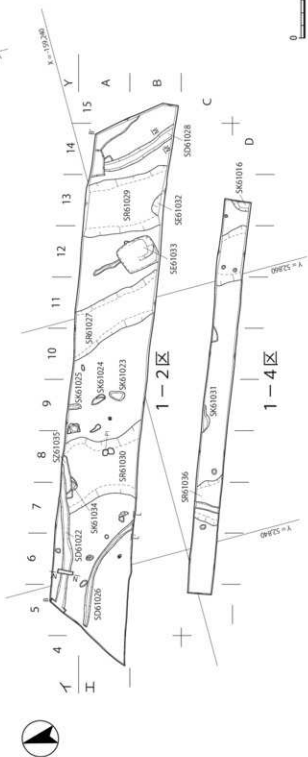
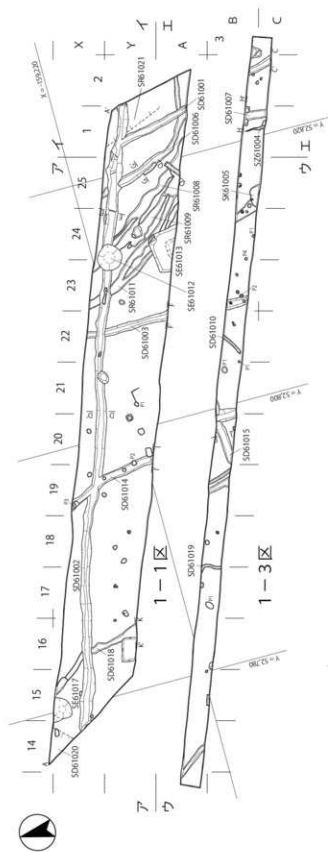
井戸枠は抜き取られたとみられ、井戸枠材はほとんど遺存していなかったが、一部で薄い縦長の板材が立った状態で検出され、横棧の板材も出土したため、縦板組横棧留の井戸枠であったと判断される。最下部には曲物の水溜が据え付けられていた。

井戸の周囲では検出面から0.9mほど下に暗褐色細粒砂層があり、この層が帯水層となっている。

埋土中からは、土器器小皿・皿・鍋、灰釉陶器壺、山茶椀、陶器壺、平瓦、土錘などが出土している。出土遺物と、SD 61002との重複関係から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考えられる。

SE 61013 (第12図) 1-1区南東部で検出された井戸である。SR 61011の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状は方形を呈し、一辺3.2m、深さ1.8mを測る。主軸はほぼ南北方向で、南側半分程度は調査区外となっている。

掘形は、検出面から0.8mほどの深さで段をなす。



第9图 第6次調査1区平面图

段より下では一辺1.5mほどの平面形がやや不整形な方形を呈する。なお、段より上では、北東隅部で一部をステップ状に掘り残しているような状況もみられた。

井戸枠はほとんど抜き取られているが、下層に一部井戸枠材が遺存していた。縦板・横板組横棧留の井戸枠であるが、ほとんどは調査区外となるため、北側の1面しか確認できていない。北面では縦板は内側3枚、外側2枚ないし3枚の二重に立てられており、その内側に横板が組まれていた。また、内側の北東隅部には間詰めのように棒状材が差し込まれていた。水溜施設は認められない。西側は横板で構成されているとみられるが、調査区外のため十分に確認できなかった。

井戸枠が遺存していたのは掘形が段をなす部分より下位であるが、土層断面からは段より上にも井戸枠が存在し、10～15層は表込め土であったと考えられる。その場合、井戸枠の抜き取りは東側から行われたものと推測される。1～3層はシルト～細粒砂ブロックや遺物を多量に含んでおり、井戸枠抜き取り後に人為的に埋められた可能性が高い。

井戸の周囲では検出面から10mほど下に暗褐色細粒砂層があり、この層が帯水層となっている。掘形が段をなす部分は、この帯水層の上面より若干高い位置にあたり、帯水層を意識して段が設けられていることが窺われる。

埋土中からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕、裂塩土器、土鍾、敲石などが出土している。特に埋め戻しに伴う1～3層には遺物が多量に含まれており、中でも裂塩土器の細片が目立つ。井戸枠内からも遺物が出土したが、調査した範囲では完形の土器等は出土しなかった。出土遺物から、遺構の時期は平安時代後期と考えられる。

SE61017 (第11図) 1-1区北西隅付近で検出された井戸である。北半分が調査区外となっているため全体の規模は不明であるが、掘形の平面形状はやや不整形な円形を呈し、直径約12m、深さ18mを測る。

井戸枠は遺存しておらず、完全に抜き取られたが、素掘りの井戸であったと思われる。土層の堆積状況から、少なくとも上層(1・2層)については機能

停止後に人為的に埋められた可能性が高い。

井戸の周囲では検出面から15mほど下に暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂層があり、この層が帯水層となっている。

埋土中からは、土師器杯・甕、須恵器甕、ロクロ土師器台付碗、平瓦などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

SE61032 (第11図) 1-2区南東部で検出された井戸である。SR61029の埋没後にその中に掘り込まれており、埋没流路による地下水脈の利用を意識していると思われる。大部分が調査区外となっているため全体の規模は不明であるが、掘形の平面形状は円形を呈するものと思われ、直径24m以上を測る。深さは10m以上を測るが、SR61029の底面より0.3mほど深い位置まで掘削した段階で湧水が激しくなり、それ以下は重機で掘削して遺物を回収するにとどまったため、正確な深さは不明である。

井戸枠は抜き取られたとみられ、井戸枠材遺存していなかったが、埋土中から楔状の板材が検出されたため、結物の井戸枠であった可能性が高い。

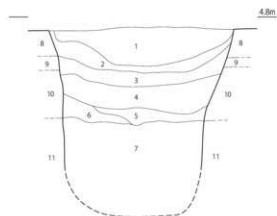
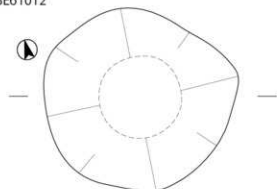
埋土中からは、土師器小皿・皿・鍋のほか、SR61029に由来すると思われる弥生土器広口壺や土師器台付甕などが出土している。北西部壁面付近の3層中からは、半分以上が遺存する土師器皿が検出されている。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代後期～室町時代と考えられる。

SE61033 (第13図) 1-2区南東部で検出された井戸である。掘形の平面形状は検出面では隅丸長方形を呈し、長さ30m、幅24m、深さ31mを測る。主軸はほぼ南北方向である。

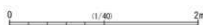
検出面から0.9mほどの深さで掘形の西側が段をなし、それ以下は長径20m、短径1.7mほどの平面形が楕円形を呈する掘形となる。

井戸枠は抜き取られたとみられ、井戸枠材はほとんど遺存していなかったが、5層付近で8枚の板材が立て並んだ状況で検出されたほか、7層上面で円形にめぐるタガが出土したため、結物の井戸枠であったと思われる。井戸枠は東壁に寄った位置に設置されている。最下層は重機によって掘削したため、十分な調査が行えなかったが、曲物の破片が出土したため、最下部に曲物の水溜が据え付けられていた

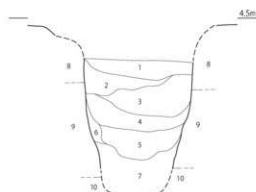
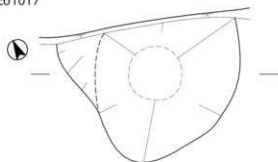
SE61012



- 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂～シルト (10YR4/4 褐色シルトブロック 3%含む、10m大塊 1%含む、土器・炭化物 3%含む)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (10YR4/4 褐色シルトブロック 3%含む、土器・炭化物 1%含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト (10YR3/2 黒褐色シルトブロック 1%含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂～中粒砂 (20～50m大 10YR4/6 褐色シルトブロック 3～5%含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト～中粒砂 (20～50m大 2.5Y6/4 に近い黄褐色細粒砂～細粒砂ブロック 1～3%含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂～粗粒砂 (20～50m大 2.5Y4/6 オリーブ褐色極細粒砂～中粒砂ブロック 3～5%含む)
- 7.5Y4/1 灰色シルト～細粒砂
- SD61002埋土
- 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 (断面に鉄分沈着) : SD61002埋土?
- 5Y4/1 灰色細粒砂 (鉄分塊状に沈着) : 基盤層
- 10YR3/3 暗褐色細粒砂 (渾水) : 基盤層

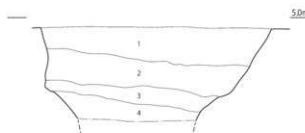
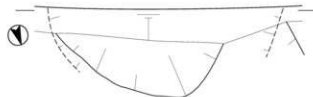


SE61017



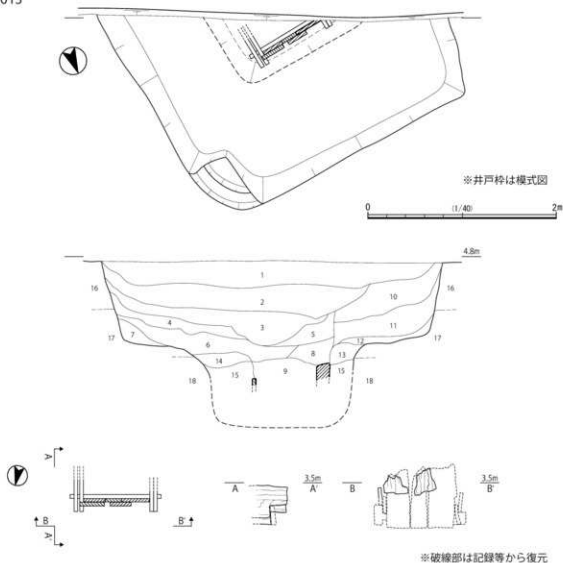
- 5Y4/2 灰オリーブ色シルト～極細粒砂と 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂が混じりあう
- 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂 (2.5Y4/6 オリーブ褐色極細粒砂～中粒砂混状に10～20%含む)
- 5Y4/1 灰色シルト～極細粒砂 (10YR4/6 褐色極細粒砂～細粒砂混状に1～3%含む)
- 7.5Y4/1 灰色シルト～極細粒砂 (5GY5/1 オリーブ灰色シルト～細粒砂混状に3%含む)
- 7.5Y4/1 灰色シルト～極細粒砂と 10Y4/1 灰色細粒砂～中粒砂が混状に混じりあう
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色極細粒砂～極粒砂
- 2.5G1Y5/1 オリーブ灰色シルト～極細粒砂 (鉄分沈着少ない) : 基盤層
- 5Y4/2 灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂 (砂質、しまり混) : 基盤層
- 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～細粒砂 : 基盤層
- 5GY4/1 暗オリーブ灰色極細粒砂～中粒砂 (渾水) : 基盤層

SE61032



- 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂
- 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y8/3 淡黄色シルトブロック 1%含む)
- N6/ 灰色中粒砂～極細粒砂 (2.5Y8/3 淡黄色シルトブロック 1%含む)
- NS/ 灰色シルト (極細粒砂多量に含む)

第11図 第6次調査1区井戸平面図・土層断面図①



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂 (10～30m²2.5Y5/3黄褐色シルト～細砂砂ブロック1～3%含む、5m²大礫少量含む、土器多く含む、しまりあり)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂 (10～30m²2.5Y5/3黄褐色シルト～細砂砂ブロック1～3%含む、2.5Y5/2 暗灰黄色中粒砂礫状に1～3%含む、土器多く含む、やや砂質、しまりあり)
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～細砂 (10～30m²2.5Y5/2暗灰黄色シルト～細砂砂ブロック3～5%含む、2.5Y5/2 暗灰黄色中粒砂礫状に1～3%含む、土器多く含む、しまりあり)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂砂と2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂が礫状に混じりあう (土器多く含む、やや砂質)
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～細砂 (10～20m²2.5Y5/2暗灰黄色シルト～細砂砂ブロック1～3%含む)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂砂と5Y4/2 灰オリーブ色極細砂～中粒砂が混じりあう (10～30m²2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂砂ブロック1%含む、土器多く含む、砂質)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細砂砂と2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～中粒砂が礫状に混じりあう
8. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
9. 7.5Y5/1 灰色極細砂～細砂 (土器片含む)
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～細砂砂と2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～細砂砂が礫状に混じりあう (5Y5/2 灰オリーブ色極細砂～中粒砂礫状に3～5%含む、土器少量含む、しまりあり)
11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～細砂砂と2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～細砂砂が礫状に混じりあう (10～30m²2.5Y5/4黄褐色細砂砂ブロック1%含む、土器少量含む、しまりあり)
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～中粒砂と2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～細砂砂が礫状に混じりあう (砂質)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂と7.5Y5/1 灰色極細砂～中粒砂が礫状に混じりあう (鉄分礫状に注意)
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂砂と7.5Y5/1 灰色極細砂～中粒砂が礫状に混じりあう (下面に鉄分層状に注意)
15. 10Y4/1 灰色極細砂～中粒砂
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂：基盤層
17. 5Y4/1 灰色極細砂 (鉄分礫状に注意)：基盤層
18. 10Y4/3 暗褐色極細砂 (湧水)：基盤層

第12図 第6次調査1区井戸平面図・土層断面図②

ものと考えられる。

土層の堆積状況から、井戸枠抜き取り後に人為的に埋められた可能性が高いが、特に、先述の段状部分より上層については、埋土中に大型のシルト～極細粒砂のブロックが多量に含まれており（1～4層）、人為的に埋められたことが明確である。土層断面からは、この部分は井戸の埋め戻し後に再掘削されたようにも見える。ただし、東側の壁面がほぼ井戸の壁面と一致することや、5層中に遺存する井戸枠材の上端が4層中に食い込んでいることから、

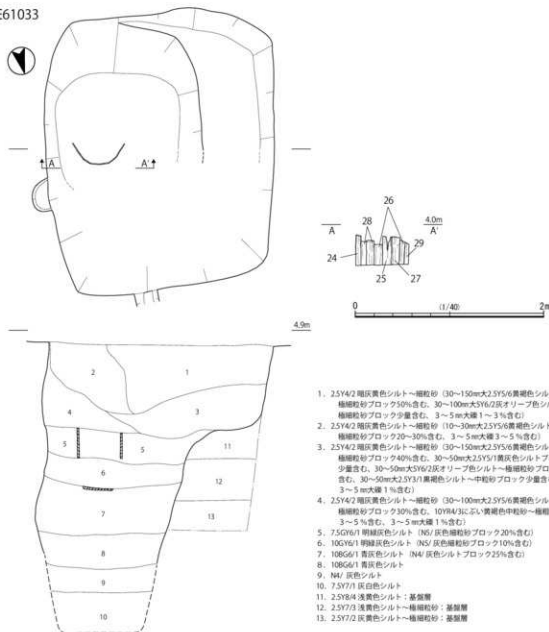
井戸の埋め戻し作業に伴って、作業スペースの確保等の目的から井戸上部を方形に掘り込んで段状部分を造り出した可能性が高い。

埋土中からは、土器器皿・鍋、山茶碗、陶器壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考えられる。

(3) 土坑

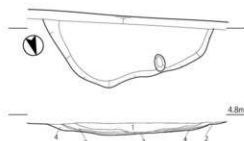
SK61005（第14図） 1～3区南東部で検出された土坑である。大部分が調査区外となっているた

SE61033



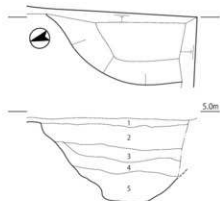
第13図 第6次調査1区井戸平面図・土層断面図③

SK61005



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～中粒砂 (10m大2.5Y4/6オリーブ褐色シルトブロック部分的に含む。土層片多く含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～中粒砂 (鉄分沈着)
3. 5Y5/1 灰色シルト (西半は上面に黄化物広がる)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細粒砂 (下面に鉄分沈着)

SK61016



1. 10YR4/6 褐色シルト～中粒砂 (5～10m大縦3～5%含む) ; 床土
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～中粒砂 (10～30m大2.5Y5/3黄褐色シルトブロック1%含む。5～10m大縦5%含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～中粒砂 (10～50m大10YR4/3に深い黄褐色シルト～極細砂ブロック10%含む。5～10m大縦1～3%含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～中粒砂と10YR4/3 に深い黄褐色中粒砂が層状に混じりあう (断面やや鉄分沈着強い)
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～中粒砂と10YR4/3 ccに深い黄褐色中粒砂が層状に混じりあう (10～50m大10YR4/3に深い黄褐色シルト～極細砂ブロック10%含む。断面やや鉄分沈着強い)

SK61024



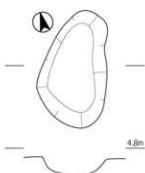
1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂～中粒砂と10YR4/4 褐色シルトが斑状に混じりあう (5m大縦1～3%含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～中粒砂
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂～中粒砂 (10m大2.5Y5/2暗灰黄色極細砂～細粒砂ブロック3%含む)

SK61025

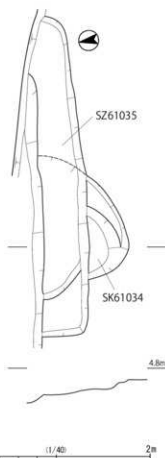


1. 10YR3/4 暗褐色中粒砂 (2～5m大縦3%含む)

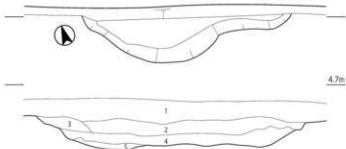
SK61023



SK61034-SZ61035



SK61031



1. 10YR3/4 暗褐色細粒砂 (5～10m大縦50%含む) ; 包含層
2. 10YR4/3 に深い黄褐色細粒砂 (10YR7/6明黄褐色シルトブロック5%含む。5m大縦3%含む)
3. 10YR3/4 暗褐色細粒砂
4. 10YR4/4 褐色細粒砂 (10YR7/6明黄褐色シルトブロック30%含む。5m大縦1%含む)
5. 10YR4/3 に深い黄褐色細粒砂

第14図 第6次調査1区土坑、落ち込み平面図・土層断面図

め全体の規模や形状は不明であるが、平面形状は不整形な方形ないし長方形を呈するものと思われ、長さ18m以上、幅0.7m以上、深さ0.15mを測る。

底面は平坦で、壁面は緩やかに湾曲して立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。下層には薄いシルト層(3層)が全体に広がっており、西半部ではその層の上面に厚さ1cm以下の炭化物層の広がりが確認された。また、底面には鉄分が薄い層状に沈着する。

埋土中からは、土師器皿・鍋、山茶碗などが出土している。主に1層から出土した。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SK61016 (第14図) 1-4区東端部で検出された土坑である。大部分が調査区外となっているため全体の規模や平面形状は不明であるが、平面形状は不整形な円形を呈するものと思われ、長さ1.6m以上、深さ0.8mを測る。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は擋鉢状である。4・5層は下面に鉄分が沈着し、中粒砂が薄い層状に混じることから、掘削後、自然に埋没した可能性が高い。

埋土中からは、全体にわたって土師器皿・甕、須恵器鉢、土鍾などの細片が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考えられる。

SK61023 (第14図) 1-2区中央部で検出された土坑である。平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。床面には凹凸がある。埋土の状況等も鑑みると、風倒木痕の可能性もある。

埋土中からは、土師器の細片が少量出土しているが、図化できるものはなかった。

SK61024 (第14図) 1-2区中央部で検出された土坑である。平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。床面には凹凸がある。埋土の状況等も鑑みると、風倒木痕の可能性もある。

埋土中からは、陶器鉢の口縁部小片のほか、土師器の細片が少量出土している。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代～室町時代の可能性が高い。

SK61025 (第14図) 1-2区中央部で検出された土坑である。北端部は調査区外となっているため、全体の規模は不明であるが、平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.0m以上、幅0.4m、深さ0.4mを測る。溝状の遺構の可能性もある。

壁面はかなり急に立ち上がり、断面形はU字形を呈する。埋土はほぼ1層である。

埋土中からは、土師器の細片が少量出土しているが、図化できるものはなかった。

SK61031 (第14図) 1-3区中央部付近で検出された土坑である。大部分が調査区外となっているため、全体の規模や形状は不明であるが、長さ2.8m以上、深さ0.4mを測る。

浅い皿状の土坑で、埋土はほとんどが砂礫である。埋土中から遺物は出土しなかった。

SK61034 (第14図) 1-2区北西部で検出された浅い土坑である。SR61030の埋没後に掘り込まれている。SD61022に大部分を削平されているため、全体の規模や形状は不明であるが、平面形状は不整形な楕円形を呈するものと思われ、長さ1.0m以上、幅1.5m、深さ0.15mを測る。

底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、一部で段状をなす。

埋土中からは、須恵器高杯などが出土しているが、いずれも細片である。出土遺物と、SD61022との重複関係から、遺構の時期は奈良時代～平安時代と考えられる。

(4) 溝

SD61001 (第15図) 1-1区東端部付近で検出された溝である。1-3区東端部付近の溝も一連のものと思われる。SD61002に一部削平されている。幅0.8m、深さ0.3mを測り、ほぼ東西方向にまっすぐ延びている。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はU字形を呈する。

埋土中からは、土師器杯・碗、須恵器甕、灰釉陶器碗・壺、製塩土器などが出土している。出土遺物と、SD61002との重複関係から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

SD61002 (第15図) 1-1区北部で調査区

北壁に沿って検出された溝である。SD 61001・61006・61003・61014・61018などの埋没後に掘り込まれているが、SE 61012に一部削平されている。幅0.8m、深さ0.4mを測り、ほぼ東西方向にまっすぐ延びている。1-3区で検出されたSD 61022と一連のものと思われる。

壁面はかなり急に立ち上がり、東部では断面形は逆台形を呈するが、西部ではV字形となる。底面付近には細礫混じりの中粒砂～極粗粒砂層が堆積しており（東側7層、西側5層）、中層付近にも同様の砂層の堆積が認められるため（東側4層、西側2層）、掘削時から埋没がある程度進むまでの間に、かなりの水流があったことが窺われる。壁面が一部でオーバーハング気味になるのも、水流による浸食の可能性があらう。底面は東から西へ向かって低くなっており、水は東から西へ向かって流れていたものと思われる。

埋土中からは、土師器杯・高杯・小皿・皿・甕・鍋、須恵器高杯・長頸壺・甕、灰釉陶器椀・皿、山茶碗、土錘、打欠石錘など多くの遺物が出土している。主体となるのは平安時代後期～鎌倉時代中期のものである。最下層からは平安時代後期の土師器甕などが出土しており、SD 61006やSE 61012などとの重複関係も考慮すると、遺構の掘削時期は平安時代後期～末で、鎌倉時代後期までに埋没したと考えられる。

SD61003（第15図） 1-1区中央部付近で検出された溝である。SD 61002に一部削平されている。幅0.6m、深さ0.2mを測る。ほぼ南北方向にまっすぐ延びており、1-3区でも一部が検出されている。

断面形は浅いU字形を呈し、一部では壁面が段状をなす。埋土はシルトを主体としており、頻繁な流水があったとは考えにくい。

埋土中から遺物は出土しなかった。

SD61006（第15図） 1-1区東部で検出された溝である。SD 61002に一部削平されている。幅0.6m、深さ0.25mを測る。調査区内で、東西方向から南北方向へと大きく湾曲して方向を変える。1-2区で検出されたSD 61026と一連の溝である可能性が高い。

壁面は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、断面形はU字形を呈する。西側肩部の一部は段状を呈するが、別の浅い落ち込みが重複している可能性がある。

SD 61002より北側では、重複する不明瞭な落ち込みにより（北壁土層断面21・22層）、掘削が検出できなかった。ただし、その下層には細い溝状の遺構の存在が確認されており、これがSD 61006に連続するもので、北側に向かって急激に深くなっている可能性もあるが、調査時には確認できていない。

最上層の西側肩部付近からは、須恵器甕のほぼ完形の体部が検出された。埋土中からは、ほかに土師器杯・甕などが出土しており、土師器杯の中には平安時代まで期的に下ると考えられるものもある。

出土遺物と、SD 61002との重複関係から、遺構の時期は平安時代前期～中期と考えられるが、飛鳥時代～奈良時代まで遡る可能性もある。

SD61007（第15図） 1-3区東部で検出された溝である。幅1.6m、深さ0.6mを測り、ほぼ東西方向に延びると思われる。南北端はそれぞれ調査区外へ延びているが、1-1区では検出されていない。

掘形は非常に不明瞭であったため、調査区北壁沿いに断割を設定して土層断面を確認し、掘削を行った。幅広の溝であるが、中央部は一段深くしており、断面形は逆凸字形を呈する。

埋土中からは、土師器と思われる土器の細片が少量出土したが、図化できるものはなかった。そのため、遺構の時期も不明であるが、室町時代以前のものと推定される。

SD61010 1-3区中央部やや東よりで検出された細い溝である。幅0.2m、深さ0.1mを測る。北側は調査区外へ延びているが、1-1区では検出されていない。

埋土中からは、土師器皿などが出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD61014（第15図） 1-1区中央部で検出された溝である。SD 61002に一部削平されている。幅0.6m、深さ0.3mを測り、ほぼ南北方向にまっすぐ延びている。1-3区のウ-B 23グリッドで続きと考えられる溝が検出されているが、やや東側に位置しており、1-1区と1-3区との間で若干

SD61001



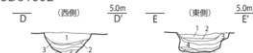
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 (2～5m大層含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂層

SD61003



- 10YR4/3 近い黄褐色シルト (マンガン沈着)
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト (マンガン沈着)
- 10YR3/2 黄褐色シルト (マンガン沈着)

SD61002



- (西側)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～中粒砂 (10YR4/4褐色シルト～中粒砂程度に少量含む、土層含む)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂～極細粒砂
 - 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂
 - 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂 (2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂ラミナ状に含む)
 - 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～中粒砂が層状に互じりある (土層含む))
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
- (東側)
- 2.5Y4/2 灰黄色極細粒砂
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂
 - 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂 (5～7m大層含む)
 - 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂
 - 2.5Y5/1 黄灰黄色極細粒砂
 - 2.5Y4/1 黄灰色中粒砂 (極細粒砂層状に含む、2～5m大層含む)

SD61022



- 2.5Y5/3 黄褐色シルト～中粒砂 (5m大層 3～5%含む、しまりあり)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (5～10m大層50%含む)
- 10YR4/4 暗褐色極細粒砂～中粒砂と2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂～中粒砂が互じりある (2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂が層状に部分的に含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (断面に数分層状に沈着)
- 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂～極細粒砂 (断面に数分と極細粒砂層状に沈着)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂と2.5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂～極細粒砂が層状に互じりある

SD61006



- 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (5m大層少量含む)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂と2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂が層状に互じりある
- 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂
- 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂 (鉄分多く沈着)；基盤層？

SD61007



- 10YR3/4 暗褐色シルト～極細粒砂
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂～シルト (鉄分沈着多い)
- 10YR2/3 黄褐色シルト～極細粒砂

SD61014



- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (2.5Y3/3 黄褐色シルト層状に含む、マンガン沈着)
- 2.5Y3/2 黄褐色シルト (マンガン沈着)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (マンガン沈着)
- 2.5Y3/1 黄褐色シルト (マンガン沈着)

SD61015



- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂程度に5～7%含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂

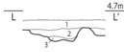
0 (1/60) 2m

SD61018



- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～中粒砂 (マンガン沈着)；包含層
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂

SD61026



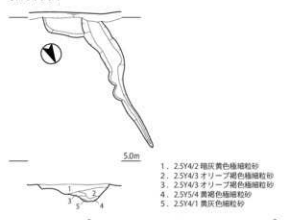
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 (2～5m大層 1%含む)；包含層
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (2～5m大層 2%含む)
- 2.5Y3/2 黄褐色シルト～極細粒砂

SD61028



- 5Y5/2 灰オリーブ色シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～中粒砂が層状に互じりある (部分的に極細粒砂含む、土層多く含む)
- 2.5Y5/3 黄褐色シルト (鉄分沈着)
- 2.5Y5/3 黄褐色シルト (20～30m大2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトブロック10～20%含む、部分的に中粒砂ラミナ状に含む)
- 10YR4/3 近い黄褐色極細粒砂～極細粒砂と2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトと5Y4/1 灰黄色極細粒砂～中粒砂が層状に互じりある

SZ61004



- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂
- 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂
- 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂

◎SZ61004 位 0 (1/40) 2m

SR61008・61009・61011



- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (マンガン沈着)；SR61008
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (10YR4/4褐色シルトラミナ状に含む)；SR61008
- 10YR4/3 近い黄褐色中粒砂 (5m大層 1%含む)；SR61009
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂ラミナ状に含む)；SR61011
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトラミナ状に含む、5m大層 1%含む)；下層流路？
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 (2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトラミナ状に含む)；下層流路？
- 2.5Y4/1 黄灰色中粒砂 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトと10YR3/3 暗褐色シルトラミナ状に含む)；下層流路？
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂 (10YR4/4褐色シルトラミナ状に含む)；下層流路？
- 10YR4/1 暗灰色極細粒砂；下層流路？
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂と2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト層状に含む)；下層流路？

方向を変えている可能性がある。

壁面は緩やかに外方へ立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。

埋土中からは、小片ながら土師器杯や灰釉陶器碗などが出土している。また、縄文土器深鉢の破片も出土した。出土遺物と、S D 61002 との重複関係から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

S D 61015 (第 15 図) 1-3 区中央部で検出された溝である。幅 0.7 m、深さ 0.25 m を測り、ほぼ東西方向にまっすぐ延びている。1-1 区では検出されなかった。

底は平坦に近いが、壁面はかなり急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。

埋土中からは、土師器杯・甕、灰釉陶器碗などが出土している。また、縄文土器深鉢の破片も出土した。出土遺物と S D 61014 の続きと考えられる溝との重複関係から、遺構の時期は平安時代前期～中期と考えられる。

S D 61018 (第 15 図) 1-1 区西端部付近で検出された溝である。S D 61002 に一部削平されている。幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測り、ほぼ南北方向に延びるが、S D 61002 と交わるあたりでやや西へ屈曲する。

南端付近では掘形が不明瞭になり、平面で検出することができなかったが、調査区南壁の壁面で掘形を確認することができたため、調査区外へと続いていることが判明した。1-3 区では検出されていないが、調査区外で大きく方向を変え、S D 61015 の西側に存在する溝や、S D 61019 などに接続する可能性もあろう。

埋土中の遺物や S D 61002 との重複関係から、遺構の時期は平安時代と考えられる。

S D 61019 1-3 区西部で検出された細い溝である。幅 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。調査区を横断し、南北は調査区外へと延びているが、1-1 区へは続いている。いない。

埋土中からは、土師器杯が出土しているが、細片で図化できなかった。出土遺物から、遺構の時期は平安時代後期～末と考えられる。

S D 61020 1-1 区北西隅部で検出した溝である。調査区の浸水等により平面では検出できず、調

査区北壁沿いの断削によって確認された。調査区内ではごく一部しか検出できなかったため、規模等は不明であるが、幅 0.8 m 以上、深さ 0.6 m を測る。

最下層(3・4層)は極細粒砂～細粒砂層やシルトと極細粒砂～細粒砂が層状に混じり合う土層となっており、鉄分の沈着も目立つことから、緩やかな流水があったものと考えられる。

東側には、別の溝ないし自然流路と考えられるものが存在し(5層)、S D 61020 はその西側肩部に重複するように掘削される。ただし、両者の底面の深さがほぼ一致することから、この東側の溝は S D 61020 の前身となる溝であった可能性も考えられる。

埋土中からは、2層を中心に土師器甕、灰釉陶器などが出土しているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

S D 61022 (第 15 図) 1-2 区西部で検出された溝である。S R 61030 埋没後に掘り込まれており、また、S K 61034、S Z 61035 を一部削平する。幅 0.6 m、深さ 0.4 m を測り、ほぼ東西方向にまっすぐ延びているが、わずかに北に向かって湾曲する。S D 61002 と一連のものと思われる。

壁面はかなり急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。最下層(6層)には灰オリーブ色粗粒砂～極粗粒砂が層状に多量に含まれており、また、5層の下面には鉄分が層状に沈着するなど、かなりの水流があったことが窺われる。

埋土中からは、土師器皿・甕・鍋、須恵器高杯、灰釉陶器碗、山茶碗、軒平瓦など多くの遺物が出土している。明確に6層に属する遺物は確認できなかったが、5層からは土師器甕、ロクロ土師器碗、山茶碗など複数の遺物がまぎらって出土している。

5層の出土遺物から、遺構の掘削時期は平安時代後期～末と考えられ、S D 61002 の時期とも矛盾しない。

S D 61026 (第 15 図) 1-2 区西端部付近で検出された溝である。幅 0.4 m、深さ 0.15 m を測る。緩やかに湾曲し、南北方向から東西方向へと方向を変える。S D 61006 と一連の溝の可能性もある。また、1-4 区西部で調査区を横断するように検出さ

れた溝も一連のものと思われる。

断面形は緩やかなU字形を呈し、SD 61006 よりも浅い。

埋土中からは、土師器鍋などが少量出土しているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD 61028 (第 15 図) 1-2 区東端部付近で検出された溝である。幅 0.6 m、深さ 0.4 m を測り、やや湾曲しながら南北方向に延びている。

壁面はやや急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈するが、肩部付近は外方へ広がる。最上層の 1 層は暗灰黄色の細粒砂へ中粒砂を層状に含み、部分的に極粗粒砂も含まれるため、かなり埋没した段階で流水があり、その際に肩部付近が浸食を受けた可能性がある。

1 層からは、土師器甕の大きな破片が 2 個体分検出された。1 層では他にも土師器碗・高杯・甕・甕、須恵器蓋などの破片が出土したが、それ以外の層からは遺物の出土は確認できなかった。

出土遺物から、飛鳥時代～奈良時代に掘削され、奈良時代のうちに埋没したと考えられる。

(5) 流路

SR 61008 (第 15 図) 1-1 区東部で検出された浅い流路である。幅 0.8 m、深さ 0.15 m を測る。ほぼ南北方向に延びるが、南側の 1-3 区では検出されず、調査区外で大きく東へ向きを変えている可能性が高い。

下層にやや大きな流路が埋没しており、この流路が埋没する最終段階に形成されたものと思われる。土層断面で確認すると隣接する SR 61009 に後出するが、同じ方向に流れることや、形状が類似することなどから、大きな時期差はないと思われる。

埋土中からは、土師器碗・壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代中期～後期と考えられる。

SR 61009 (第 15 図) 1-1 区東部で検出された浅い流路である。幅 0.7 m、深さ 0.1 m を測る。ほぼ南北方向に延びるが、南側の 1-3 区では検出されず、調査区外で大きく東へ向きを変えている可能性が高い。

隣接する SR 61011 よりも後出し、SR 61008 よりは先行するが、いずれも下層の埋没流路上に位置し、流れる方向や形状が類似することから、同様の性格のものと思われる。

埋土中からは、土師器甕・台付甕・高杯などが出土している。また、縄文土器深鉢も出土した。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代中期～後期と考えられる。

SR 61011 (第 15 図) 1-1 区東部で検出された浅い流路である。SD 61002 及び SK 61013 に一部削平される。幅 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。2 本の流路が合流し、途中で 1 本となる。ほぼ南北方向に延びるが、南側の 1-3 区では検出されず、調査区外で大きく東へ向きを変えている可能性が高い。

隣接する SR 61008・61009 と同じ埋没流路上に位置し、流れる方向や形状が類似することから、同様の性格のものと思われる。

埋土中からは、土師器台付甕・壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代中期～後期と考えられる。

SR 61021 1-1 区北東隅部で検出した流路である。SD 61002 に一部削平されている。調査区内ではごく一部しか検出できなかったため、規模等は不明であるが、幅 2.6 m 以上、深さ 0.7 m 以上を測る。ほぼ東西方向に延びているものと思われる。1-2 区では検出されていないが、1-2 区北壁沿いの断削において調査区北西部で埋没流路の存在が確認されており、この流路と一連のものである可能性がある。

埋土中からはほとんど遺物が出土しなかったが、下層(北壁土層断面 35 層)から土師器高杯が出土している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

SR 61027 1-2 区中央部付近で検出された流路である。幅 3.0 m、深さ 0.7 m 以上を測る。ほぼ南北方向に延びている。

埋土は大きく上下 2 層に分かれ、下層は砂礫を多く含んでおり、かなりの流水があったことが窺われる。

埋土中からは、土師器高杯・壺・甕などが出土している。表土掘削中に出土したほぼ完形の須恵器直

口壺も、出土位置からみてこの流路の最上層に含まれていた可能性が高い。遺物の出土量はごくわずかである。出土遺物から、流路が形成されたのは古墳時代前期で、古墳時代後期には埋没した可能性が高いと考えられる。

S R 61029 1-2区東側で検出された流路である。埋没後にS E 61032が埋土上層より掘り込まれている。幅4.4m、深さ0.8mを測り、ほぼ南北に延びている。

埋土は砂礫を多く含んでおり、かなりの流水があったことが窺われる。

埋土中からは、土師器壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

S R 61030 1-2区中央部やや西よりで検出された流路である。幅5.2m、深さ0.9m以上を測り、ほぼ南北方向に延びている。1-4区で検出されたS R 61036は一連の流路の可能性もあるが、かなり幅が狭まることなどから、同一の流路かどうか疑問が残る。調査区外でS R 61030の幅が急激に広がり、肩部が他の流路等と重複したり調査区外に出ているため検出できなかった可能性もある。

埋土は砂礫を多く含んでおり、かなりの流水があったことが窺われる。

埋土中からは、土師器台付甕などが出土している。遺物の出土量はごくわずかである。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

S R 61036 1-4区西部で検出された流路である。幅3.3m、深さ0.5m以上を測り、ほぼ南北方向に延びている。S R 61030と同一の流路の可能性もあるが、位置関係や出土遺物の時期等からは判断できなかったため、別の流路として扱った。埋没後、上面にS D 61026の続きと考えられる溝が掘り込まれている。

埋土は砂礫を多く含んでおり、かなりの流水があったことが窺われる。

埋土中からは、須恵器杯身などが出土している。遺物の出土量はごくわずかである。出土遺物と、S D 61026と一連のものと思われる溝との重複関係から、遺構の時期は飛鳥時代と考えられる。

(6) その他

S Z 61004 (第15図) 1-3区東部で検出された、浅い落ち込みである。南側は調査区外となっているが、細い溝状の部分と幅広い落ち込み状の部分があり、長さ1.8m以上、幅0.6mを測る。溝状部分は深さ0.15mを測る。

平面形や土層の堆積状況からみると溝状部分と落ち込み状部分は別遺構の可能性もあるが、いずれも埋土は極細粒砂～細粒砂が中心となっており、自然流路の一部とも考えられる。

埋土中からは、土師器鍋や縄文土器と思われるものが出土しているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考えられる。

S Z 61035 (第14図) 1-2区北西部で検出された、浅い落ち込みである。S K 61034の埋没後に形成され、S K 61034を一部覆うように広がる。一方、S D 61022との重複関係については不明瞭で、明確にすることができなかった。大部分が調査区外に出ているため、全体の規模や平面形状は不明であるが、長さ3.4m以上、深さ0.1mを測る。

掘形は不明瞭で、断面形は浅い皿状を呈するため、人為的に掘られたものではない可能性もある。

埋土中からは、土師器甕、黒色土器碗、須恵器杯身・広口壺、山茶碗などが出土している。出土遺物と、S K 61034との重複関係から、遺構の時期は平安時代～鎌倉時代と考えられる。(石井)

【註】

- ① S R 61021下層にも71層に相当するとみられる土層が認められたが(72層)、土質にやや差異があり、また炭化物を多く含むため、別の土層とした。S R 61021内の堆積の可能性もある。
- ② ポンプ3台で排水を図ったが、梅雨時であったこともあり、それを上回る湧水があった。ただし、時期によっては地下水位がかなり変動し、湧水量も変化しているようである。
- ③ 北面の外側縦板は検出時は2枚であったが、縦板片が掘削中に1枚出土しており、本来は外側も3枚であった可能性が高い。なお、井戸枠は大部分が調査区外と

なるため、北面の部材のみを遺物として取り上げた。

- ④ 調査区平面図ではSD 61006とつながるような遺構が固化されているが、下層の溝状遺構の上面を掘削したものである。
- ⑤ 遺構検出時に上部の幅広の部分を取り込んでしまっているため、実際に平面で検出できたのは深い部分のみであった。

- ⑥ 調査区南壁付近では深くはなっているように見えるが、SR 61009との重複関係が不明瞭で、底面も不明瞭であったため、遺構掘削時に下層の埋没路道まで掘り込んでしまっている。
- ⑦ いずれにしても、SR 61030は1-2区と1-3区との間で大きく堆積状況が変化している可能性が高い。

2. 2区

(1) 層序

2区では、地表面の水田および畑の耕作土直下で古代～中世の遺構面が検出される状況であった。そのため、遺構上部は若干の削平を受けている。

(2) 掘立柱建物

SB62020 (第17図) 2区北部の西側で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、SD 62017・62021の埋没後に掘り込まれている。桁行5間で、梁行2間と考えられる南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN2°W、飯野部条里軸ではN17°Wとなる。

梁行となる南北の妻柱については、想定される柱穴はあるものの、明確ではない。桁となる東西側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長は9.2～9.6mであり、各柱穴間の芯々距離が西側柱で1.8～1.9m、東側柱で1.8～2.1mとなることから、基本的には6～7尺が建物の設計数値になると考えられる。しかし、柱間の長さは不揃いな部分もあり、南北側柱の全長はともに4.65m前後となることから、2間で構成されていた場合、1間は8尺となる。

調査時、東側柱については全て別遺構として掘削してしまっただけで、建物としての記録が不十分になってしまったため、東側柱の各柱穴の土層については、不明である。

掘立柱建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形に近い崩れた隅丸方形を呈しており、一辺の長さが0.5～0.6m、深さ0.3～0.5mを測るが、やや大きさが異なる柱穴も存在する。土層の堆積状況を把握できたのは、西側柱の各柱穴であり、いずれの柱穴においても柱痕を検出した。柱痕幅は0.1～0.2m

である。このうち、柱穴No.6は土層断面から柱が抜き取られていると考えられ、その他の柱穴においても遺物が出土していることから、柱の抜き取りが行われている可能性が高い。

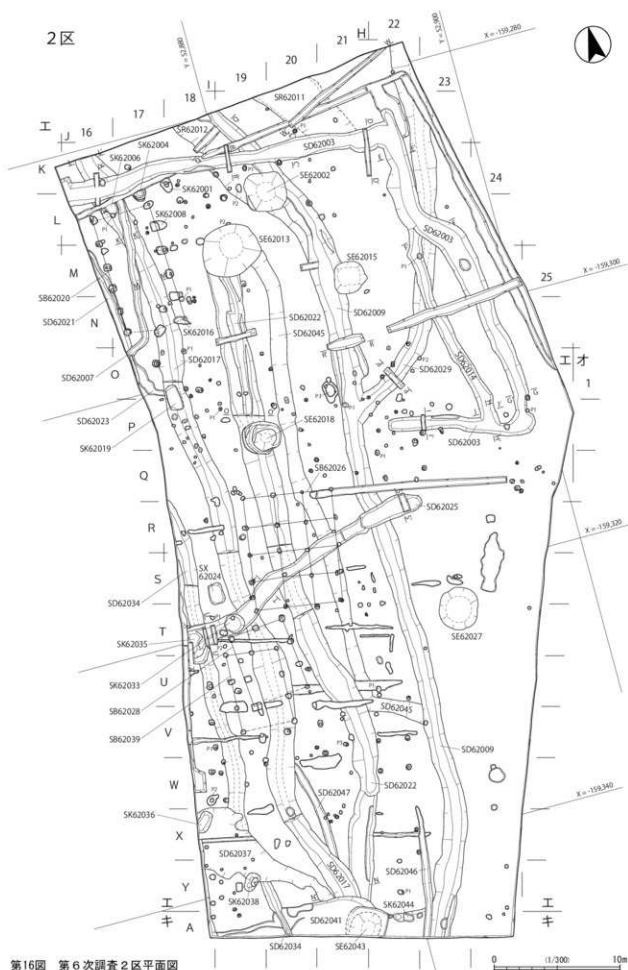
柱穴No.2・4・6・9・10・14からは、土師器杯・壺・瓶、須恵器杯蓋・杯身が、それぞれ出土したが、柱穴の埋土一括として取り上げてしまったため、出土層位の詳細は不明である。これら出土した遺物から、建物の時期は、平安時代後期と考えられる。

SB62026 (第18図) 2区中央部のやや西側で検出された総柱の掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、SD 62022・62025・62045の各溝の埋没後に掘り込まれている。桁行4間、梁行3間の南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN8°E、飯野部条里軸ではN7°Wとなる。

桁となる東西側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長が8.8～8.9mであり、各柱穴間の芯々距離は2.1～2.34mとなる。また、梁となる南北側柱においても東・西端の柱穴芯々で計測した全長が6.8～7.0mであり、各柱穴間の芯々距離は2.1～2.4mである。これら柱間の距離から基本的には7～8尺が建物の設計数値になると考えられる。しかし、東西南北の側柱のみならず、相対する柱穴についても、柱間距離に不揃いな部分がある。また側柱以外の柱筋については、通りが悪い状態となっている。

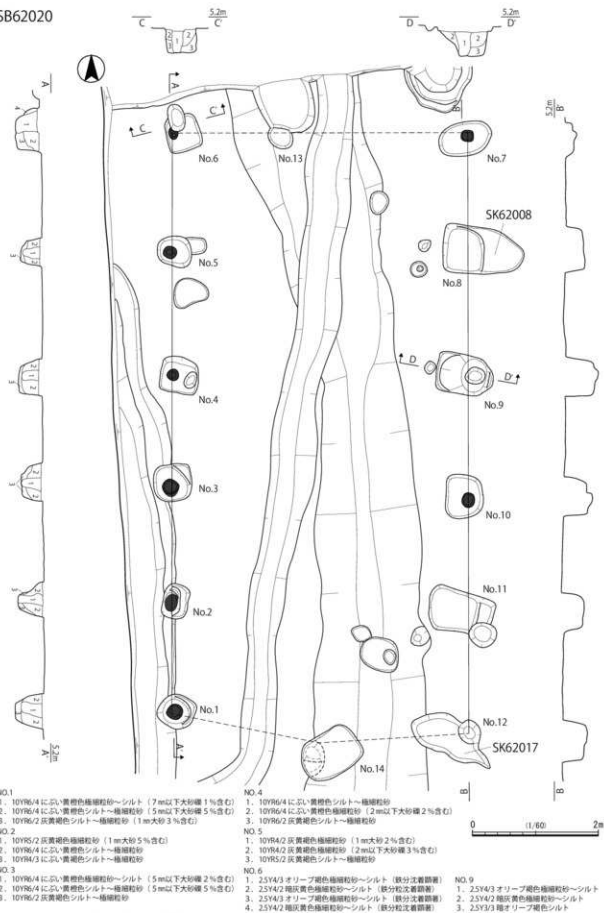
掘立柱建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、直径0.3～0.4mを測るが、やや大きさが異なる柱穴も存在する。多くの柱穴で柱痕とみられる痕跡を、平面および断面で確認することができたが、柱痕幅はいずれも0.2m未満と小さい。

柱穴No.1・4・7・13・14・17・18からは、弥



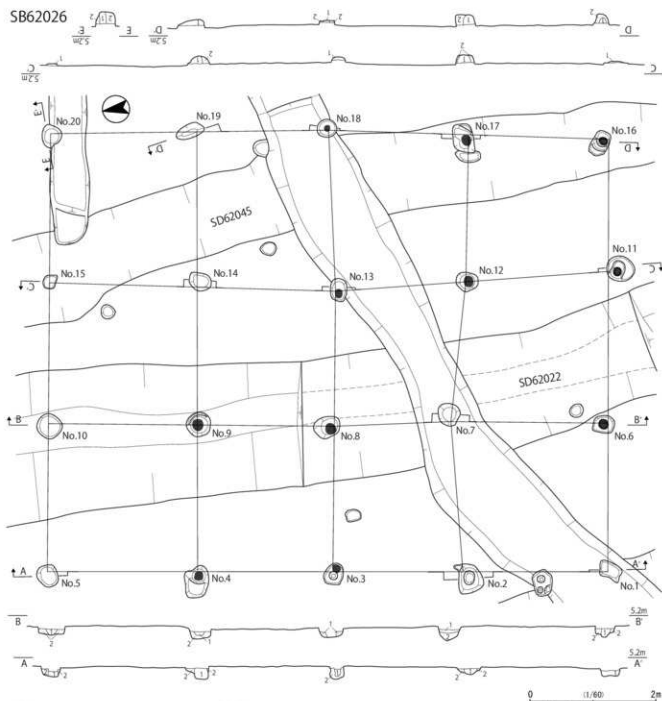
第16図 第6次調査2区平面図

SB62020



第17図 第6次調査2区掘立柱建物平面図・土層断面図①

SB62026



No.1

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (2～3mm大砂礫1%含む。マンガング粒状に含む)

No.2

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (マンガング粒含む)

No.3

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂 (鉄分混状に含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (マンガング粒含む)

No.4

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂～極細粒砂 (3mm以下大砂礫2%含む。鉄分・マンガング粒状に含む)

No.5

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂～シルト (2mm以下大砂礫2%含む)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂～シルト (3mm以下大砂礫1%含む)

No.6

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂～シルト (2mm大砂礫3%含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂～極細粒砂～中細粒砂 (5mm以下大砂礫1%含む)

No.7

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂～シルト (1～5mm大砂礫1%含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (2.5Y5/2 暗灰黄色シルトブロック3mm大砂礫50%含む)

No.8

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (5mm大砂礫10%含む)

No.9

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂 (3～8mm大砂礫1%含む。7.5YR3/4 暗褐色シルトブロック10mm大1%含む)

No.10

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂 (鉄分混状に含む)
2. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 (鉄分混状に含む)

No.11

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (マンガング粒状に含む)
2. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂

No.12

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (2.5Y5/4 黄褐色シルトブロック30mm大40%含む。鉄分広がりあり)

No.13

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂2.5Y5/4 黄褐色シルトブロック (20mm大30%含む。マンガング粒含む)

No.14

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト～極細粒砂 (鉄分の広がりあり。マンガング粒含む)

No.15

1. 2.5Y7/3 淡黄色シルト (マンガング粒含む)

No.16

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (2mm大砂礫2%含む)
2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (マンガング粒含む)

No.17

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (5mm以下大砂礫3%含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (2.5Y5/4 黄褐色シルトブロック20mm大50%含む)

No.18

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (鉄分・マンガング粒状に含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (マンガング粒含む)

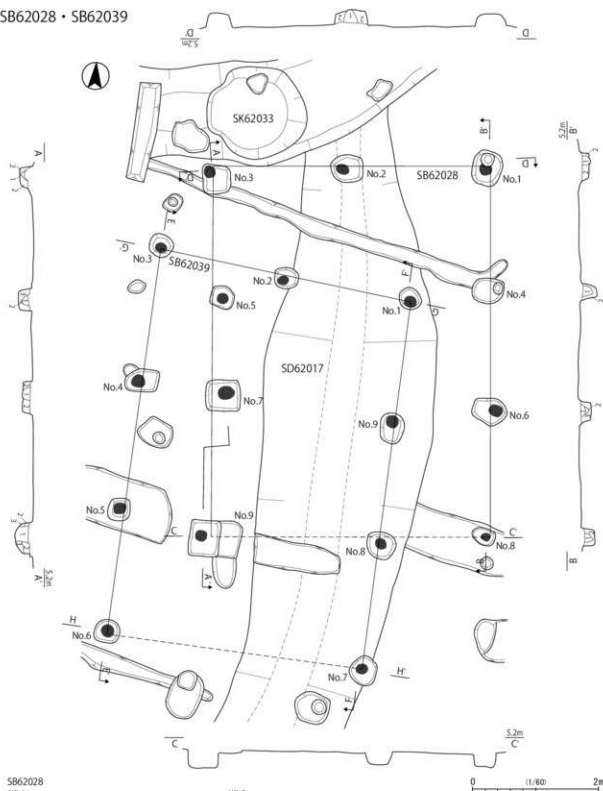
No.19

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (2～10mm大礫5%含む)

No.20

1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂 (3mm以下大砂礫5%含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (5mm以下大砂礫2%含む)

第18図 第6次調査2区掘立柱建物平面図・土層断面図②



SB62028

- No.1
1. 2S14/3 オリーブ褐色シルト質腐植砂砂
2. 2S14/4 オリーブ褐色砂質シルト
- No.2
1. 2S14/3 オリーブ褐色砂質シルト (マンガン広がる)
2. 2S14/4 オリーブ褐色砂質シルト (鉄分・マンガン広がる)
- No.3
1. 2S13/2 黒褐色砂質シルト (中粒砂多く含む)
2. 2S13/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分広がる)
- No.4
1. 2S14/2 暗灰黄色砂質シルト
2. 2S13/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分注意あり)

- No.5
1. 2S14/2 暗灰黄色砂質シルト
2. 2S14/3 オリーブ褐色シルト (鉄分広がる)
3. 2S13/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分広がる)
- No.6
1. 2S14/2 暗灰黄色砂質シルト
2. 2S14/3 オリーブ褐色シルト (マンガン広がる)
3. 2S13/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分広がる。1～2mm大マンガン粒1%含む)
- No.7
1. 2S14/2 暗灰黄色砂質シルト (鉄分広がる)
2. 2S14/4 オリーブ褐色シルト (鉄分・マンガン広がる)

- No.8
1. 2S14/2 暗灰褐色砂質シルト
2. 2S14/4 オリーブ褐色シルト (鉄分・マンガン広がる)
- No.9
1. 2S14/4 オリーブ褐色砂質シルト (鉄分広がる)
2. 2S13/4 黒褐色砂質シルト (鉄分・マンガン広がる)
3. 2S14/3 オリーブ褐色シルト

第19図 第6次調査2区掘立柱建物平面図・土層断面図③

生土器壺、土師器皿、ロクロ土師器椀、須恵器杯身・甕、灰釉陶器椀、山茶椀、土鍾が、柱穴別に出土したが、柱穴の埋土一括として取り上げてしまったため、出土層位の詳細は不明である。これら出土した遺物のうち、弥生土器や須恵器は混入と考えられる。その他の出土遺物から建物の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

S B 62028 (第 19 図) 2 区南部の西側で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、S D 62017 の埋没後に掘り込まれている。さらに S B 62026 と近接しており、S B 62039 とは重なる位置関係にもある。桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟であり、棟方向は正方位軸では N 2° W、飯野郡条里軸では N 17° W となる。南側の妻柱は検出することができなかった。

桁となる東西側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長が 5.85 m であり、各柱穴間の芯々距離は 1.5 ~ 2.25 m である。また、梁となる北側柱においても東・西端の柱穴芯々で計測した全長が 4.35 m であり、各柱穴間の芯々距離は 2.1 ~ 2.25 m までバラつきがある。これら柱間の距離から基本的には 7 尺が

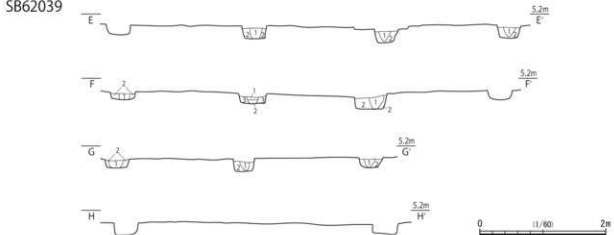
建物の設計数値になると考えられる。

掘立柱建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形のもので隅丸方形を呈したものがあり、柱穴によってやや異なっている。円形または楕円形のもので直径 0.3 ~ 0.5 m、隅丸方形のもので一辺 0.3 ~ 0.5 m を測る。全ての柱穴で柱痕を平面と断面で確認でき、柱痕幅は 0.1 ~ 0.2 m を測る。

柱穴 No 1・2・9 からは、縄文土器深鉢、土師器甕、須恵器杯身、石鍾が柱穴別に出土したが、柱穴の埋土一括として取り上げてしまったため、出土層位の詳細は不明である。これら出土した遺物のうち、縄文土器や石鍾は混入と考えられる。その他の出土遺物から建物の時期は、平安時代中期と考えられる。

S B 62039 (第 19・20 図) 2 区南部の西側で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、S D 62017 の埋没後に掘り込まれており、S B 62028 とは重なる位置関係にある。桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟であり、棟方向は正方位軸では N 5° W、飯野郡条里軸では N 20° W となる。S B 62028 と同様に、南側柱の妻柱は検出することができなかったが、平面プランは S B 62028 と類似してもの

S B 62039



NO. 1

- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (鉄分広がる)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (鉄分・マンガン広がる)

NO. 2

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (マンガン塊状に広がる)

NO. 3

- 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (マンガン塊状に広がる)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (2m以下大マンガン粒 1%含む)

NO. 4

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (鉄分広がる)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (1m以下マンガン粒 1%含む)

NO. 5

- 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト (マンガン 5%含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (マンガン広がる)

NO. 6

- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (1m以下マンガン粒 1%含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (鉄分・マンガン広がる)

NO. 7

- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (鉄分広がる)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト (鉄分広がる、1m以下マンガン粒 1%以下含む)

NO. 8

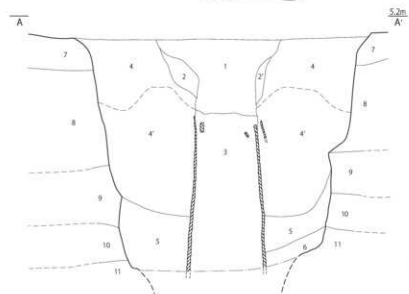
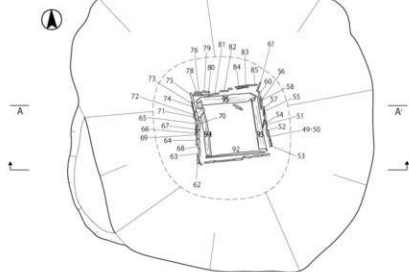
- 2.5Y3/2 黄褐色砂質シルト (マンガン粒含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質極細粒砂 (下部に極細粒砂多く含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂 (マンガン含む)

NO. 9

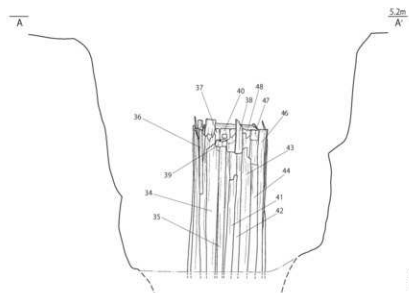
- 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト (鉄分広がる)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (鉄分・マンガン含む)

第20図 第6次調査2区掘立柱建物土層断面図

SE62002



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～中粒砂
(10 m大塚含む、土跡・炭化物含む)
2. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/4 に近い黄色
シルトブロック 20 ～ 50 m大 10 ～ 20%含む)
- 2' 5Y4/1 灰色シルト～極細粒砂 (2.5Y5/4 黄褐色シルト～
極細粒砂ブロック 50 ～ 150 m大 30 ～ 50%含む)
4. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (5 ～ 20 m大塚 3 ～ 5%含む、
2.5Y5/4 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック 50 ～
100 m大と 5Y6/1 灰色シルト～極細粒砂ブロック
50 ～ 100 m大 20 ～ 30%含む、マンガシ沈着顕著、
土跡含む)
- 4' 5Y5/1 灰色極細粒砂 (10Y5/1 灰色シルト～極細粒砂
ブロック 50 ～ 100 m大含む、4層の遺孔層)
5. 5G7/4/1 緑オリーブ灰色シルト (10YR5/1 灰色
シルトブロック 10%含む、若干極細粒砂混じる)
6. 5G7/4/1 緑オリーブ灰色極細粒砂シルト (10YR5/1 灰色
シルトブロック 20%含む、極細粒 10%含む)
7. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト：基盤層
8. 10YR6/6 明黄褐色シルト (細粒砂を若干含む)：基盤層
9. 10YR6/4 に近い黄褐色シルト：基盤層
10. 10G7/1 暗灰色細粒砂：沼流跡
11. 10G6/1 緑灰色細粒砂 (濃いい湧水あり)：沼流跡



0 (1/40) 2m

第21図 第6次調査2区井戸平面図・土層断面図・立面図①

と思われる。

桁となる東西側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長が5.85～6.45 mであり、各柱穴間の芯々距離は1.95～2.55 mである。また、梁となる北側柱においても東・西端の柱穴芯々で計測した全長が4.05 mであり、各柱穴間の芯々距離は1.95～2.1 mとバラつきがある。これら柱間の距離から基本的には6～7尺が建物の設計数値になると考えられる。

掘立柱建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形のものと同丸方形を呈したものがあり、柱穴によってやや異なっている。円形または楕円形のものには直径0.3～0.5 m、同丸方形のものは一辺0.3～0.5 mを測る。全ての柱穴で柱痕を平面と断面で確認でき、柱痕幅は0.2 m前後を測る。

柱穴No.2・8からは、土師器杯・高杯が柱穴別に掘形埋土から出土した。高杯は混入とし、SB62028との位置関係から建物の時期は、平安時代後期と考えられる。

(3) 井戸

SE62002 (第21図) 2区北部で検出された井戸である。SD62009・SR62012の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状は、同丸方形に近い不整形な円形を呈し、直径3.0～3.2 mを測る。深さは2.7 m以上であり、湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な最大限の範囲で留めたため、底面までの深さは不明である。

検出面から深さ0.8 m前後のところで井戸枠を確認した。井戸枠は良好な状態で遺存しており、縦板組横板留の構造のものであった。井戸枠幅は、一辺0.8 m前後である。縦板の内側にある横板は土居桁であり、井戸枠内の上下2箇所に設置され、周囲を多数の縦板で囲っている。厚さ3 cm前後の縦板を打ち込み、さらにその隙間と外側に厚さ10 cm前後の薄い縦板を巡らせている構造で、隙間なく設置されていた。最終的には掘形埋土となる黄褐色シルトや灰色シルトブロックが多量に混じる黄灰色極細粒砂の土圧を利用して井戸枠の外側から固定されたものと考えられる。

井戸枠内の埋土は、大きく第1・2層、第3層、第4～6層に分かれている。第1・2層は井戸の上

面に向かって開きながら堆積していることから、上部の井戸枠材の抜き取り埋土と考えられ、第3層は井戸枠内埋土、第4～6層が掘形埋土となる。いずれの堆積層もシルトを主体とするが、極細粒砂～細粒砂、中粒砂を含んでいる。検出面から深さ0.5 m前後で湧水によるグライ化により、下層に向かって灰色となる傾向を示す。

基盤層である第11層からは、激しい湧水が認められた。またこの井戸はSD62009とSR62012の埋没溝・流路と重複しており、もともと地下水脈の中で水の流れが積極的にみられるところを意識的に選択して設置された可能性が高い。

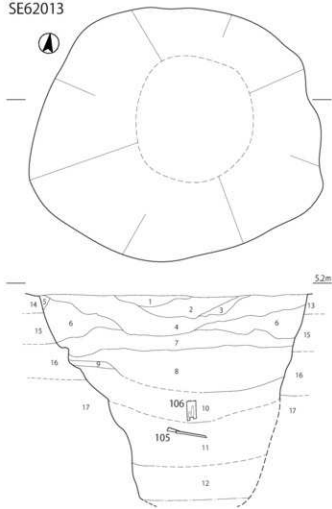
井戸枠内および掘形埋土からは、土師器杯・皿・鍋、ロクロ土師器碗、黒色土師器碗、山茶碗、陶器皿、平瓦が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SE62013 (第22図) 2区北部で検出された井戸である。SD62022・SD62045の埋没後に掘り込まれており、SE62022に近接する。掘形の平面形状は不整形な円形を呈し、直径4.0～4.6 mを測る。深さは3.35 m以上であり、SE62002と同様に湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な最大限の範囲で留めたため、井戸底までの深さは不明である。断面形状は、側面の立ち上がりで東側面は強く段を持たないが、西側面は東に比べて緩やかであるが、段状の凹凸を持つ。階段状の痕跡と考えられなくもない。

井戸枠は確認することができず、完全に抜き取られたものと判断され、埋土中からは土居桁の横板のみが出土した。

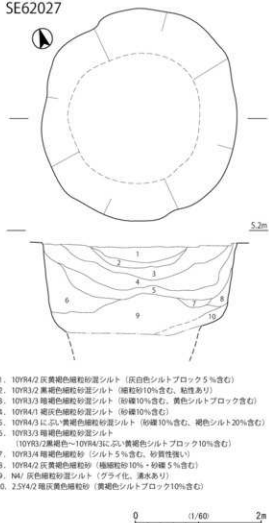
埋土は複数層からなり、第1～3層がシルトブロックを含む暗褐色シルト、第4～6層が黄灰色を主体とするシルト、第7層以下が灰色～緑灰色を主体とするシルト～細粒砂となる。このうち第1～3層と第4層以下では、含まれるシルトブロックの入り方が異なっており、第4層以下は密に含まれている。この層相と堆積状況から、第1～3層は井戸枠の抜き取り埋土の可能性が高い。また、第7層以下は湧水によるグライ化が進んでおり、下層ほど青灰色や緑灰色となっている。特に第17層中からの湧水が激しく、SE62002と同様に、地下水脈の中

SE62013



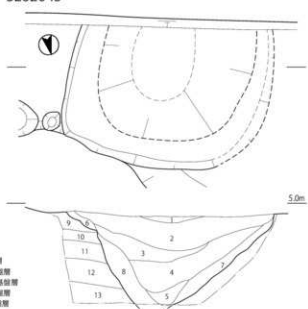
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 (2.5Y8/4 淡褐色シルトブロック30%含む)
2. 10YR4/1 暗灰色細粒砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック5%含む、5mm大砂粒含む)
3. 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック10%、10mm大砂粒含む)
4. 10Y5/1 暗灰色細粒砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック40%、5mm大砂粒含む、鉄分・マンガン粒含む)
5. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (遺物出土なし)
6. 10YR5/3 に近い黄褐色細粒砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック30%、マンガン粒含む)
7. 10YR4/1 暗灰色細粒砂質シルト (2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック20%、鉄分・マンガン粒含む)
8. NS/ 灰色極細粒砂質シルト (10GY 緑灰色シルトブロック20%含む)
9. NS/ 灰色シルト (10YR4/3 暗褐色がラミナ状に層積)
10. NS/ 灰色極細粒砂質シルト (10GY5/1 緑灰色シルトブロック10%含む)
11. 10G5/1 緑灰色シルト (10G7/1 明緑灰色シルトブロック10%含む)
12. 5B6G/1 黄灰色シルト (5B7G/1 明黄灰色極細粒砂10%含む)
13. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト：基盤層
14. N6/ 灰色細粒砂 (3mm大砂粒10%含む)：SD62022
15. 10YR7/4 に近い黄褐色シルト
16. 2.5Y8/3 黄褐色粘土 (内層部はグライ化しSG7/1明緑灰色粘土)：基盤層
17. 5G6/1 緑灰色細粒砂 (3mm大砂粒10%含む)：旧海跡

SE62027



1. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト (灰白色シルトブロック5%含む)
2. 10YR3/2 黄褐色細粒砂質シルト (極粒砂10%含む、粘性あり)
3. 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト (砂粒10%含む、黄色シルトブロック含む)
4. 10YR4/1 暗灰色細粒砂質シルト (砂粒10%含む)
5. 10YR4/3 に近い黄褐色細粒砂質シルト (砂粒10%含む、褐色シルト20%含む)
6. 10YR3/3 暗褐色細粒砂質シルト (10YR3/2 黄褐色～10YR4/3 に近い黄褐色シルトブロック10%含む)
7. 10YR3/4 暗褐色細粒砂 (シルト5%含む、砂質性强い)
8. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 (極細粒砂10%・砂粒5%含む)
9. N4/ 灰色極細粒砂質シルト (グライ化、湧水あり)
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 (黄褐色シルトブロック10%含む)

SE62043



1. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト
2. 7.5YR5/3 に近い褐色砂質シルト
3. 7.5YR5/4 に近い褐色砂質シルト
4. 7.5YR6/2 灰褐色～5B6G/1 黄灰色粘質シルト
5. 10BG4/1 暗青灰色シルト
6. 7.5YR4/1 暗灰色細粒砂
7. 7.5YR4/4 褐色～10BG3/1 暗青灰色シルト
8. 7.5YR6/4 に近い褐色～5B4/1 暗青灰色シルト
9. 7.5YR6/6 褐色シルト：基盤層
10. 7.5YR5/8 暗褐色シルト：基盤層
11. 7.5YR6/8 褐色粘質シルト：基盤層
12. 7.5YR5/6 明褐色シルト：基盤層
13. 10YR5/8 黄褐色シルト：基盤層

第22図 第6次調査2区井戸平面図・土層断面図・立面図②

で水の流れが積極的にみられるところを意識的に選択して設置された可能性が高い。

埋土中からは、土師器皿・椀・甕・鍋・甗、灰釉陶器壺、山茶椀、陶器皿・壺、青磁椀、敲石が出土した。また、井戸の基盤層下層となる第17層中からは、縄文土器深鉢がまとまって出土した。

出土した遺物から、遺構の時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SE62015 (第23図) 2区中央部からやや北側で検出された井戸である。SD 62009の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状はやや崩れた隅丸方形を呈し、長辺2.62m、短辺2.5mを測る。深さは1.5m以上であり、他の井戸と同様に湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な範囲で止め、井戸枠を可能な限り回収することに努めたため、底面までの深さは不明である。

検出面から深さ1.3m前後のところで井戸枠を確認した。井戸枠は良好な状態で遺存しており、縦板・横板組横棧留の構造である。各板の設置状況が非常に強固であり、一部の材しか取り上げができなかったため、底面までの井戸枠構造を把握できるまでには至っていない。井戸枠幅は、一辺1.0m前後であり、井戸の中心部からやや東寄りのところに設置されていた。南北面が縦板、東西面が横板となっている。縦板はいずれも幅10～40cmの板を3枚並べたられており、横板は幅20cm前後の板が重ねられている。また横板には、横棧と接続するための抉りを有しており、縦板の内側は横棧と接する。

把握できた埋土は、第1～5層がオリーブ褐色・暗オリーブ褐色の細粒砂～極細粒砂で礫を含み、第6層以下が黄灰色を主体とするシルトである。第1～5層と第6層以下では、層相が大きく異なることから、第1～5層は上部の井戸枠材の抜き取り埋土、第6層以下が掘形埋土と考えられる。また、第9層以下は、湧水によるグライ化を受けて緑灰色のシルトとなる。SE 62002・62013と同様に、埋没溝等と重複しており、地下水脈の中で水の流れが積極的にみられるところを意識的に選択して設置された可能性がある。

埋土中からは、縄文土器深鉢、土師器杯・皿・高

杯・甕・鍋・鉢、黒色土器椀、製塩土器、須恵器杯蓋・杯身・高杯、灰釉陶器椀・壺、移動式カマドとみられる破片が出土した。このうち、縄文土器深鉢や古墳～飛鳥時代の土師器高杯や須恵器杯蓋・杯身・高杯は、重複するSD 62009や周辺流路、または遺構の基盤層からの混入の可能性が高い。これら縄文時代や古墳～飛鳥時代の遺物を除いた遺物から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

SE62018 (第23図) 2区中央部で検出された井戸である。SD 62022の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状は楕円形を呈し、直径2.6～3.1mを測る。深さは1.1m以上であり、他の井戸と同様に湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な範囲で止めたため、底面までの深さは不明である。

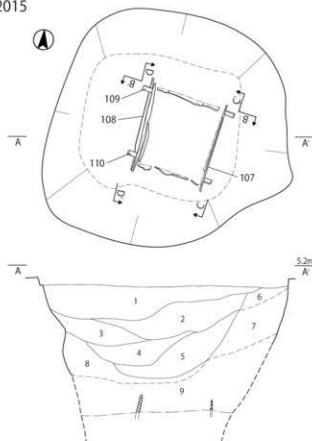
掘削できた範囲で、井戸枠を確認することはできなかった。最終確認で重機による断削も行ったが確認することができなかったことから、井戸枠材は抜き取られたか、素掘りの可能性が考えられる。断面形状は、東側面がややオーバーハンクしており、西側面には段状の凹凸を持つことから、ステップ状の痕跡である可能性も否定できない。井戸の最深部は円形に一段深くっており、筒状に底面に向かって下っている。

把握できた埋土は複数層であり、第1～7層がレンズ状の堆積、第12～17層は西側から流し込まれたような堆積状況を示す。いずれもシルトを主体とする堆積層であるが、細粒砂～極細粒や礫を含む。第18層は黒褐色のシルトであり、湧水のためカグライ化の様相を呈している。第15・18層付近からは、完形の土師器壺が出土した。

埋土中からは、完形の土師器壺のほかに、弥生土器高杯と壺の可能性のある破片、土師器椀・台付甕、須恵器杯蓋、移動式カマドの底部分の破片が出土した。弥生土器や古墳時代の台付甕については、重複するSD 62022からの混入の可能性が高い。出土した弥生土器や古墳時代の土師器以外の遺物から、遺構の時期は、奈良時代の可能性が考えられる。

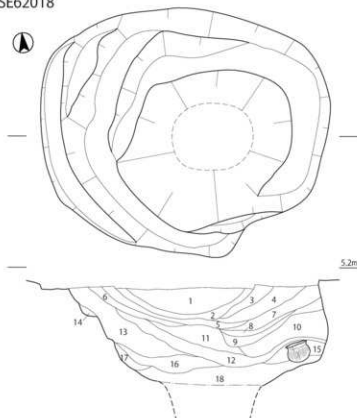
SE62027 (第22図) 2区中央部からやや南側で検出された井戸である。掘形の平面形状は、やや崩れた円形を呈し、直径3.1～3.4mを測る。深さ

SE62015



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒粉砂 (10m以下砂礫 10%含む)
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐色細粒粉砂 (10m以下砂礫 5%含む)
3. 2.5Y3/3 黒オリーブ褐色細粒粉砂 (10m以下砂礫 3%含む)
4. 2.5Y3/3 黒オリーブ褐色細粒粉砂 (20m以下砂礫 1%含む)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (5m以下砂 1%含む)
6. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
7. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
8. 2.5Y3/3 黒オリーブ褐色シルト～極細粒粉
9. 5G5/1 緑灰色シルト (10GY7/1 明緑灰色シルトブロック含む)

SE62018



1. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混シルト (2～3m大砂礫 5%含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂混シルト (2m大砂礫 5%含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐色細粒粉 (1～2m大砂礫 5%未満含む)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂混シルト (1～2m大砂礫 5%含む)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (極細粒～2m大砂礫含む)
6. 10YR4/1 褐色細粒粉 (10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック 20%含む)
7. 10YR3/3 暗褐色シルト (10YR4/2 灰黄褐色細粒粉 5%含む)
8. 10YR5/1 褐色細粒粉 (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック 10%含む)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (10YR5/2 灰黄褐色細粒粉 20%含む)
10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR3/2 黄褐色シルトが等状に堆積、10YR5/1 褐色細粒粉 5%含む)
11. 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂混シルト
12. 10YR4/4 褐色シルトブロック 10%含む
13. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR5/1 褐色細粒粉～10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック 30%含む)
14. 10YR4/2 灰黄褐色細粒粉 (2.5Y6/1 黄灰色シルトブロック 10%含む)
15. 10YR3/4 暗褐色シルト
16. 10YR4/1 褐色シルト (10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック 10%含む)
17. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒粉
18. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR3/1 黒褐色細粒粉～10YR4/4 褐色細粒粉 25%含む)



第23図 第6次調査2区井戸平面図・土層断面図・立面図③

は18m以上であり、他の井戸と同様に湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な範囲で止めたため、底面までの深さは不明である。

掘削できた範囲で、井戸枠を確認することはできなかった。最終確認で重機による掘削も行ったが確認することができなかったことから、井戸枠材は抜き取られた可能性がある。

埋土上層はレンズ状に堆積し、下層はグライ化した灰色シルトが主体であり、層相がやや異なる。複数の層位でシルトブロックが混じることから、井戸枠抜き取り後、人為的に埋められた可能性が高いが、上層はシルトブロックよりも砂の混じりが顕著であり、黒褐色や暗褐色のシルトで土壌化した傾向を示すことから、堆積状況も含めて判断すると埋没の最終段階は自然に埋まった可能性も否定できない。井戸の最深部は、円形に一段深くなっており、筒状に底面に向かって下っている。

埋土中からは、土師器皿・甕、ロクロ土師器碗、灰軸陶器碗、山茶碗、白磁碗、土唾、器種不明の土製品、平瓦、敲石が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代中期と考えられる。

SE62043 (第22図) 2区南端部で検出された井戸である。SD 62041の埋没後に掘り込まれている。井戸の約半分は調査区外へと広がっており、正確な掘形の平面形状は不明であるが、不整形の楕円形を呈するものと考えられる。直径は、調査区南壁部分で3.25mを測る。深さは1.4m以上であり、他の井戸と同様に湧水と調査区壁面が崩落する危険性があったことから、下層部分は重機で掘削可能な範囲で止めたため、底面までの深さは不明である。

掘削できた範囲で、井戸枠を確認することはできず、抜き取られた可能性が高い。調査区内で井戸の約半分ほどを検出していることから、調査区外に存在する可能性も低いと考えられる。

埋土は掘形側面の形状に沿って、落ち込みながら堆積しており、下層は湧水によるグライ化が激しく、暗青灰色のシルトとなる。上層はレンズ状に堆積しており、特に2層には灰白色のシルトブロックが多く混じっていることから、人為的に埋められたものと考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明であるが、SD 62041との重複関係から、少なくとも鎌倉時代中期以降と考えられる。

(4) 土坑

SK62001 (第24図) 2区北西部で検出された土坑である。後世の攪乱溝によって一部が削平されている。幅は0.85m、深さ0.3mを測り、長さ是不明である。断面形状は基本的にU字形を呈するが、テラス状の段を有し、底面の中央部分が1段深くなる。

埋土は4層からなるが、いずれも細粒砂または砂礫が主体であり、若干のシルトブロックが混じる状況であった。

埋土中からは、山茶碗が出土し、遺構の時期は鎌倉時代中期と考えられる。

SK62004 (第24図) 2区北西部で検出された土坑である。SK 62001と同様に後世の攪乱溝によって一部が削平されている。幅1.07m、深さ0.2mを測り、長さは不明である。断面形状は、緩やかな立ち上がりのU字形を呈するが、テラス状の段を有し、底面の中央部分が1段深くなる。

埋土は2層からなり、中粒砂～粗粒砂が主体で若干のシルトが混じる。

埋土中からは土師器皿、山茶碗が出土し、遺構の時期は室町時代前期と考えられる。

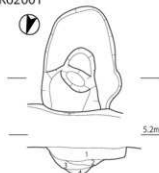
SK62006 (第24図) 2区北西部で検出された土坑である。SB 62020 柱穴 (No.13) とSD 62017の埋没後に掘り込まれており、攪乱によって一部が削平されている。幅0.9m、深さ0.18mを測り、長さは不明である。断面形状はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。

埋土は3層からなり、中粒砂～極細粒砂が主体で若干のシルトが混じる。

埋土中からは、土師器甕、須恵器杯身が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、飛鳥時代と考えられる。

SK62008 2区北西部で検出された土坑である。SB 62020 柱穴 (No.8) の埋没後に掘り込まれている。平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.3m、

SK62001



1. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混シルト (細粒砂含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰色極細粉
3. 10YR4/1 褐色細粒砂混シルト
4. 2.5Y5/2 黄褐色極細砂混シルト

SK62004



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～中粗粒砂 (極細粒砂含む、5～10m大礫1～3%含む、マンガン沈着あり)
2. 10YR4/1 褐色中粗砂～粗粒砂 (マンガン沈着あり)

SK62006



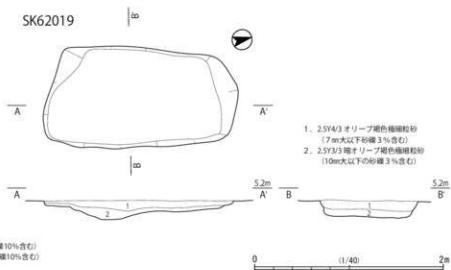
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粉 (マンガン沈着あり)
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粉
- 2.5Y4/2 暗灰黄色中粗砂～粗粒砂を層状に含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粉 (マンガン沈着あり)

SK62016



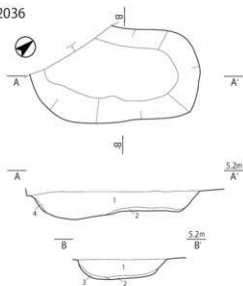
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂シルト (5m大砂礫10%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混シルト (5m大砂礫10%含む)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂混シルト (褐色シルトブロック20%含む)

SK62019



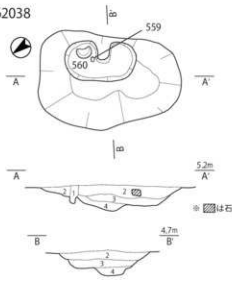
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (7m大以下砂礫3%含む)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂 (10m大以下の砂礫3%含む)

SK62036



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粉 (しまりややあり、遺物含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト～粘土 (しまりややあり)
3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト～粘土 (しまりややあり)
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト～粘土 (しまりややあり)

SK62038



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粉；土層
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粉 (しまりややあり、遺物含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (しまりややあり、遺物含む)
4. 2.5Y5/1 黄灰色シルト～粘土 (しまりややあり、遺物含む)

第24図 第6次調査2区土坑平面図・土層断面図

幅0.75m、深さ0.23mを測る。幅は平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。

埋土は、細粒砂が混じるにぶい黄褐色シルトである。埋土中からは、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

SK62016 (第24図) 2区北西部で検出された土坑である。SB62020柱穴(No12)と重複するが、切り合い関係を正確に把握できなかったことから、その詳細は不明である。平面形状は細長い楕円形を呈し、長さ1.45m、幅0.64m、深さ0.33mを測る。

埋土は、細粒砂が混じる褐色シルトである。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SK62019 (第24図) 2区中央部よりやや北西側で検出された土坑である。SD62017・SD62023の埋没後に掘り込まれている。平面形状は崩れた長方形を呈し、長辺2.02m、短辺1.1m、深さ0.22mを測る。断面形状は浅い皿状であり、底面は所により若干深くなる。

埋土は2層からなり、極細粒砂が混じるオリブ褐色シルトである。平面形状と規模から、墓の可能性も考えられたが、断割の結果、棺痕跡等は確認できなかった。

埋土中からは、灰軸陶器碗、山茶碗、陶器碗、土錘が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

SK62033 2区中央部よりやや南西側で検出された土坑である。SD62025と重複しており、本来の土坑上面は大きく削平されている。残存していた土坑の規模は、直径1.4～1.6m、深さ0.33mを測る。平面形状はやや崩れた円形を呈している。

埋土は暗褐色シルトの単層であり、灰白色のシルトブロックを含む。

埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物が限定的であるため、断定はできないが、他の遺構との層位関係や埋土の状況と出土した縄文土器から、縄文時代の遺構である可能性が考えられる。

SK62035 2区南西部の西壁沿いで検出された土坑である。SD62025と重複しており、本来の土坑上面はSK62035と同様に大きく削平されてい

る。残存していた土坑の規模は、幅2.2m前後、深さ0.12mを測る。検出できた土坑のラインから楕円形または崩れた円形になるものと考えられ、一部は調査区外へと広がる。

SD62025と一連で掘削をしてしまったため、土層断面や堆積状況を十分に把握することができなかった。

埋土中からは、弥生土器の壺、土師器杯・皿・鍋、須恵器壺・甕、山茶碗、平瓦が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SK62036 (第24図) 2区南西部で検出された土坑である。SD62037の埋没後に掘り込まれている。幅1.0m、深さ0.2mを測り、土坑の一部が調査区外へと続くことから、長さは不明である。断面形状は皿で、底面はほぼ平坦である。

埋土は4層からなり、黄灰色が主体の粘土およびシルトである。このうち1層が最も層厚が厚く、2～4層は極めて薄い。

埋土中からは、土師器杯、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

SK62038 (第24図) 2区南西部で検出された土坑である。SD62037の埋没後に掘り込まれている。平面形状は不整形な楕円形を呈し、長さ1.5m、幅0.96m、深さ0.28mを測る。断面形状はややV字形に近い形状で、土坑の南東側は一段低く窪む。

埋土は3層からなり、灰黄色を主体とする締まりがあるシルトだが、最下層の第4層は粘土が含まれる。

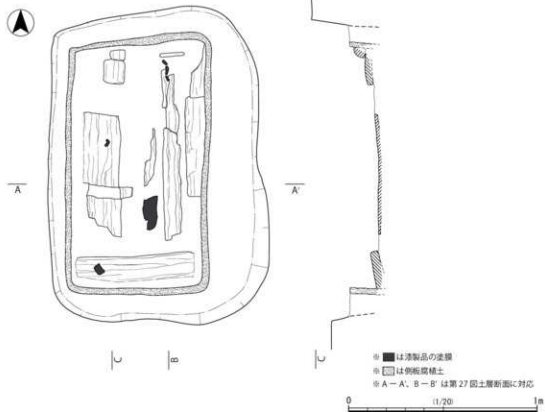
埋土中からは、土師器皿、須恵器とみられる壺、サヌカイトの剥片が出土した。このうち、底面直上で残存状態が良好な土師器皿が出土した。遺構の時期は鎌倉時代前期と考えられる。

(5) 墓

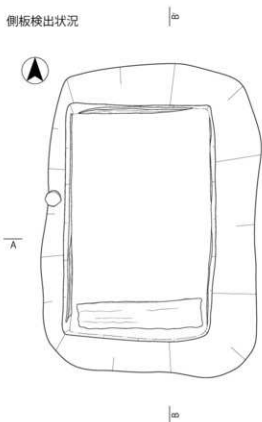
SK62024 (第25～27図) 2区中央部の西側で検出された木棺墓である。SB62026の西側に位置しており、SD62017・62034と近接している。木棺墓の墓坑となる掘形は、長辺1.63m、短辺1.15m、深さ0.4mを測る。掘形の平面形状は、隅丸方形を

SX62024①

蓋板検出状況



側板検出状況



木棺下部構造検出状況



第25図 第6次調査2区木棺墓検出状況図・立面図

呈しており、主軸となる長辺は正方位となる南北方向である。

検出状況 平面形状とその規模から墓の可能性が考えられたため、長軸と短軸方向の土層観察用のアゼを設定した上で、掘削全体を四分割して徐々に掘削を行った。検出面から深さ0.1mのところまで掘削を行ったが、木棺の痕跡等が確認できなかったことから、土層観察用アゼに沿って断割を設定し、先行して掘削して確認する方法に切り替えた。その結果、土層断面で腐植した木棺の側板痕跡を確認したとともに、断割の下部から黒色の塗製品とみられる塗膜の破片が出土した。その後、引き続き土層確認用アゼを残しながら平面を徐々に掘削すると、検出面から深さ15cm前後のところで、側板の腐植層となる灰色粘土が幅2～4cmで帯状に巡る状況を検出した。これらの状況から、木棺墓であると判断した。

蓋板と南側板の検出 さらに掘削を進めると、検出面から深さ約20cm前後のところで、長辺方向に木目が延びる蓋板と、短辺方向に木目が延びる南の側板とみられる板材を検出した。蓋板の残存状況は悪く、木材の表面が残存しているのみであり、全体は腐植して土と同化している状況を示していた。また部分的に、塗製品のものと考えられる塗膜の破片を断片的に検出した。南の側板は良好な状態で、表面のみならず板材の芯も残存していた。蓋板は、腐植した側板痕跡が検出できたところよりも深い位置で検出していることから、側板の腐植や埋葬後の上からの土圧等により木棺内に落ち込んだ状況を示すと考えられる。また、南側板も木棺の内側に向かって倒れ込んだ状況を示していることから、埋葬後の土圧等の影響によって直立していた板が倒れたものと考えられる。

木棺の底板と側板 蓋板とその腐植土層を取り外すと、検出面から深さ約35cm前後のところで木棺の底面となる底板を検出した。底板は大きく腐植している箇所があるため、複数枚に分かれた状態を示すが、板材の広がりから3枚の板で構成されていると推定できる。1枚あたりの板材の大きさは、長さ1.1～1.2m、幅20～25mである。底板の腐植部分からは、さらに下には3箇所横木がある状況を

確認した。

側板は、いずれも土層断面で把握できるように、板材上部から20cm前後が腐植により土壌化してしまっており、板材下部にあたる10cm前後については、板材が残存している状況であった。しかし残存している板材の表面は腐植が著しく、本来の表面が残っていない状況であり、一部は土壌化している。側板のうち、北・東・西側板が直立した状態であったが、南側板については上部が折れて棺内に倒れ込んでおり、板材下部は原位置を保ったままの状態で見つかった。また、側板の表面は腐植が著しく、本来の表面が残っていない状況であり、一部は土壌化している。側板のうち、北・東・西側板が直立した状態であったが、南側板については上部が折れて棺内に倒れ込んでおり、板材下部は原位置を保ったままの状態で見つかった。

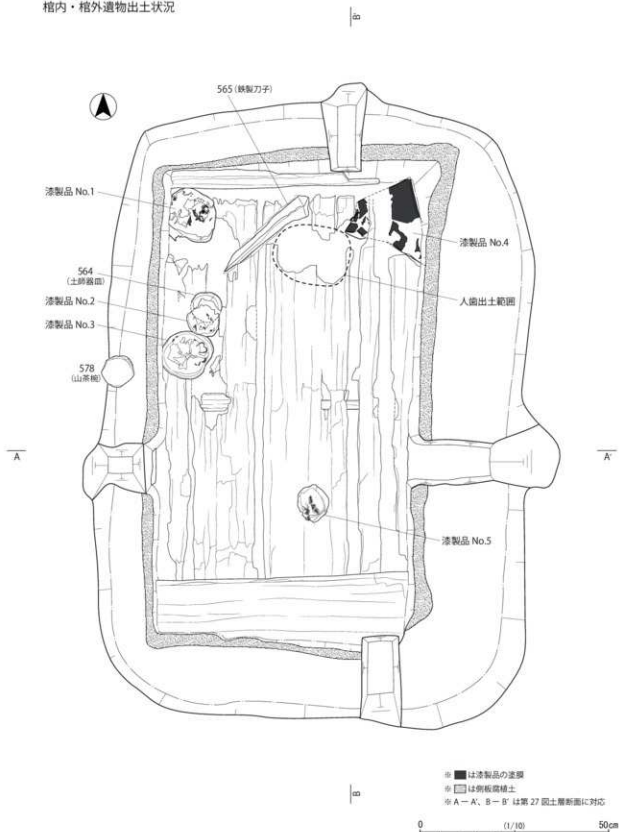
副葬品等の出土状況 副葬品は、塗製品が計7点（うち2点は実施した保存処理におけるクリーニングの過程で存在が明らかになった）、土師器皿1点、鉄製の刀子1点が出土した（第26図）。いずれも底板の直上で検出されたが、底板や副葬品本体等の腐植で生じた土壌を挟んでいるため、若干浮いた状態を示す。

塗製品No.1は木棺内の南東隅で出土し、北側板と西側板に接するかたちで置かれていた。黒漆の地に朱漆で亀甲文が描かれた椀ないし皿状の器種と考えられる。木胎は残存しておらず、表面の漆塗膜のみが残っている状態であり、非常に脆弱な状況であった。調査後に行った保存処理の過程でクリーニングを行った結果、No.1のさらに下から別の塗膜が潰れた状況で見つかったことから、2個体の塗製品が重なった状態で置かれていたと考えられる。

塗製品No.2・3は、塗製品No.1のやや南側にあたる木棺内中央の西側で出土した。No.2・3はほぼ接して置かれており、No.2の下には土師器皿1点が置かれていた。No.1と同様に椀ないし皿状の器種と考えられ、黒漆の地に朱漆で文様が描かれたものである。描かれた文様の残存状態がNo.2・3ともに悪いいため、断定できないが、No.3は花卉状の文様である可能性が高い。木胎は残存しておらず、表面の漆塗膜のみが残っている状態であったが、No.3には木胎の表面とみられる木目が一部で観察された。調査後に行った保存処理の過程でクリーニングを行った結果、No.3の下から別の塗膜の広がりが見つかったことから、3個体の塗製品と土師器皿1点が重複および接して置かれていたと考えられる。

SX62024②

棺内・棺外遺物出土状況



第26図 第6次調査2区木棺墓遺物出土状況図

漆製品№4は、木棺内の北東隅で出土し、北側板と東側板に接して置かれていた。この№4の一部が断削時に出土したもので、断削によって一部が欠損している。形状が三角形を呈しており、南側の端部で折り返しされた状況を確認したことから、袋状の製品であることが推察された。調査後に行った保存処理の過程でクリーニングを再度行った結果、烏帽子であることが判明した。断削時に出土した破片を観察すると裏地に繊維状の編み目が観察できたことから、裏地は布と判断された。布地の表面に塗膜された漆は黒漆である。状態が非常に脆弱であったため、クリーニングにも限界があったことから烏帽子の折り方については明らかにすることができなかった。

漆製品№5は、木棺内の中央からやや南側で出土した。漆製品№1～3と比べて、漆塗膜の残存状況が良好である。黒漆の時に朱塗で草花文とみられる文様が描かれているもので、大きさから皿の可能性が考えられる。他の漆製品と同様に木胎は残存しており、漆塗膜のみが残っている状況であった。1個体が単独で置かれていたと考えられる。

鉄製品は、木棺内の北側中央にあたる漆製品№1と漆製品№4の間で出土した。調査時は器種が不明であったが、調査後のクリーニングと保存処理におけるX線透過撮影画像から刀子であることが明らかになった。刀子は刃部先端を北側に向けた状態で出土し、表面には木質とみられる木目が観察されたことから、木製の鞘に入った状態で置かれたものと考えられる。

これらの副葬品は、木棺内の調査を終了した後に底板とともに取り上げを行い、その後土付きの状態で原位置を保ったかたちで保存処理を実施した。

人歯の出土状況 人歯は刀子周辺と木製品№4との間にあたる範囲から集中して出土した。底板上面を覆っていた板材等による腐植土に含まれていたため、泥まみれの状態であったことから、検出および原位置を保つことが困難であったことから、詳細な出土位置を押さえることができなかった。そのため、周辺の腐植土を一括して取りあげ、調査後の洗浄作業で歯の破片を抽出した。歯は表面のエナメル質の部分が辛うじて残存しているのみであり、内部が

残っているものは1点も確認することができなかった。また、小さな破片が多いことから、埋葬後に木棺内が土壌化していく中で、大半が腐植してしまったものと考えられる。

被葬者の埋葬位置 以上のように、副葬品の位置と人歯の出土範囲との関係から、被葬者の頭部は烏帽子である漆製品№4の下端よりも下、あるいは鉄製刀子との間までの範囲にあり、頭部より下の体部や脚部は木棺の南側にあったと推定される。つまり被葬者は頭部を北に据えられていたことになることから、北枕の状態で埋葬されたと考えられる。また、人歯が刀子の南側で集中して出土していることから、頭部を横にして寝かされた可能性も否定できないと思われる。副葬品は頭部周辺を中心に置かれ、漆製品№5のみ脚部に近い場所に置かれたとみられる。

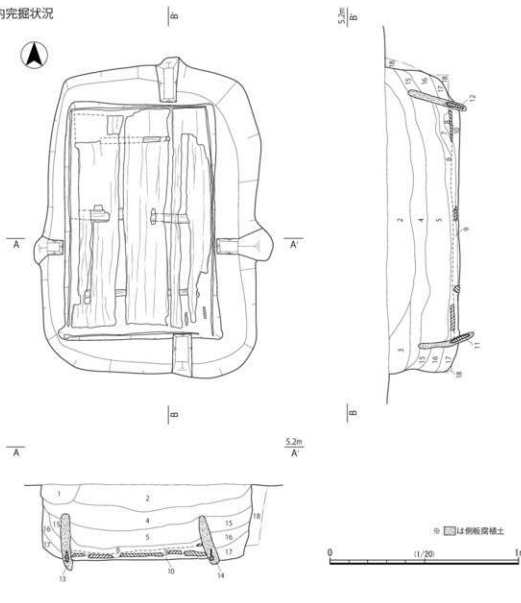
木棺の下部構造 副葬品および底板を外すと掘形の底面には棒状の板材が横方向に3箇所置かれていた。この棒状板材は、北・中央・南に1本ずつ置かれており、うち北側の板材は残存状況が悪く、一部しか残っていなかった。また、側板を外すと溝状に掘りくぼめられたとみられる痕跡を検出できた。この溝状の窪みは、側板の位置と同位置であることから、木棺の側板を設置する際の痕跡であると考えられる。この側板に伴うと考えられる溝状の窪みと棧木状の棒状板材の設置状況から、木棺は墓坑を掘削後、墓坑内で「組み立て→設置」された可能性があると考えられる。また、墓坑となる掘形内や木棺内から釘が出土していないことから、墓坑内で組み立て→設置された状況を示すものと思われる。

この溝状の窪みには切り合い関係が認められ、北側→東側・西側→南側という状況を示すことから、まず北側板が設置され、次に東・西側板、最終的に南側板を設置されたことになる。また、底板の下に置かれた棒状板材は、側板と重ならない長さのものであることから、棒状板材は側板ができた後に墓坑底面に置かれた可能性が考えられ、側板・底板の設置→木棺の完成→被葬者の安置→蓋板の設置→埋葬という一連の行為がこの墓坑内で行われた可能性が想定される。

出土遺物と時期 木棺外の掘形埋土中からは、土

SX62024③

木棺内完掘状況



1. 10YR4/1 褐色細粒砂混シルト (細粒砂10%含む) : 珪
2. 10YR4/2 灰黄色褐色細粒砂混シルト (10YR5/3に多い黄褐色シルトブロック30%含む、マンガング粒が混じりあう)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂混シルト (2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細粒砂20%含む)
4. 10YR4/1 褐色細粒砂混シルト (10YR5/3に多い黄褐色シルトブロック15%含む)
5. 10YR4/2 灰黄色褐色細粒砂混シルト (10YR5/3暗褐色シルトと10YR5/4に多い黄褐色シルトブロック20%含む)
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘土混シルト (厚さ30～40cm、層上側に墓板の木質が薄く残る、しまりややあり) ; 棺内埋土・墓板炭積土
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土混シルト (2.5Y4/1黄灰色粘土～シルトがレンズ状に20%含む、ややしまりあり)
8. 10YR2/1 褐色 (墓板跡)
9. 2.5Y4/1 黄灰色粘土 : 棺内埋土
10. 2.5Y6/1 黄灰色粘土 (地山ブロック10%含む)
11. 2.5Y5/1 黄灰色粘土混シルト (厚さ30～40cm、しまりややあり) ; 南側板炭積土
12. 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (厚さ30～40cm、しまりややあり) ; 北側板炭積土
13. 5Y4/1 灰色粘土 (厚さ30～40cm、しまりややあり) ; 西側板炭積土
14. 5Y4/1 灰色粘土 (厚さ30～40cm、しまりややあり) ; 東側板炭積土
15. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (10YR5/4に多い黄褐色シルトブロック40%含む)
16. 10YR4/3 に多い黄褐色シルト (10YR5/4に多い黄褐色シルトブロック5%含む)
17. 7.5Y6/1 灰色シルト混細粒砂
18. 2.5Y6/4 に多い黄色シルト : 墓底層

第27図 第6次調査2区木棺墓棺内完掘状況図・土層断面図

師器皿、ロクロ土師器椀、須恵器甕、山茶碗が出土した。その他、縄文土器深鉢、石鍾、敲石が出土したが、下層または周辺からの混入の可能性が高いと考えられる。これら出土した遺物と木棺内から出土した土師器皿から、木棺墓の時期は鎌倉時代前期と考えられる。

樹種同定と副葬品・人歯の分析 木棺を構成する板材および副葬品の漆製品と被葬者の歯については、調査後にクリーニングや洗浄・選別を行った後、樹種同定・漆塗膜にかかる構造分析・歯の部位等の同定を実施した。樹種についてはヒノキとスギ、赤色漆に混和されたのは透明度の高い朱、歯は男女不明であるものの8歳以上という結果で、詳細は後述する。

(6) 溝

SD62003 (第28図) 2区中央部より北側で検出された溝である。SD 62007・SD 62009・SD 62017・SD 62029・SR 62011・SR 62012の埋没後に掘り込まれている。幅0.96～1.75 m、深さ0.25～0.5 mを測り、調査区中央部付近からコの字状に延びて調査区外の西側へと続く。SD 62014との関係性は、F-F'の土層断面からSD 62014よりも新しいと認識したが、分岐して流れていたSD 62003と一連の溝の可能性も考えられる。断面形は基本的にU字形であるが、ところにより深い皿状、または底面にやや凹凸を持つ形状のところがあり、必ずしも一定ではない。

埋土は場所により若干異なるが、上層は暗灰黄色または褐灰色～黒褐色のシルト混じりの粗粒砂で共通しており、各層位はシルトよりも粗粒砂～細粒砂が主体の堆積層である。このような状況から、常に流水があったと考えられるが、砂だけで構成される層位は確認できないことから、さほど勢いが強い流水ではなかったと推測される。

埋土中からは、溝の各所において大量の土師器杯・皿・高杯・壺・甕・台付壺・鍋・瓶、ロクロ土師器椀・皿、黒色土師器椀、瓦器椀、須恵器杯蓋・杯身・高杯、灰軸陶器椀・皿・壺、山茶碗、陶器皿・鉢・壺・甕、青磁碗、石鍾、丸瓦・平瓦、砥石、敲石、磨石や弥生土器壺、古墳時代の土師器・須恵器の破片も出土

した。弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器などは、重複する複数の溝や流路からの混入したものと考えられる。これら出土遺物から、鎌倉時代後期までには完全に埋没したものと考えられ、遺構の時期は鎌倉時代前期～後期の幅で考えられることができる。

SD62007 (第29図) 2区北西部で検出された溝である。SD 62017・SD 62023の埋没後に掘り込まれている。幅0.54 m、深さ0.3 mを測り、調査区外の西側から東西方向に延びるが、北側へ屈曲してSD 62003に削平されている。SD 62003よりも北側で検出することができなかったことから、SD 62003付近で途切れていた可能性が高い。断面形はU字形で、側面の立ち上がりは急である。

埋土は3層に分かれ、黄灰色シルトに細粒砂が若干混じる状況であり、激しい流水があったかどうかは確定的ではない。

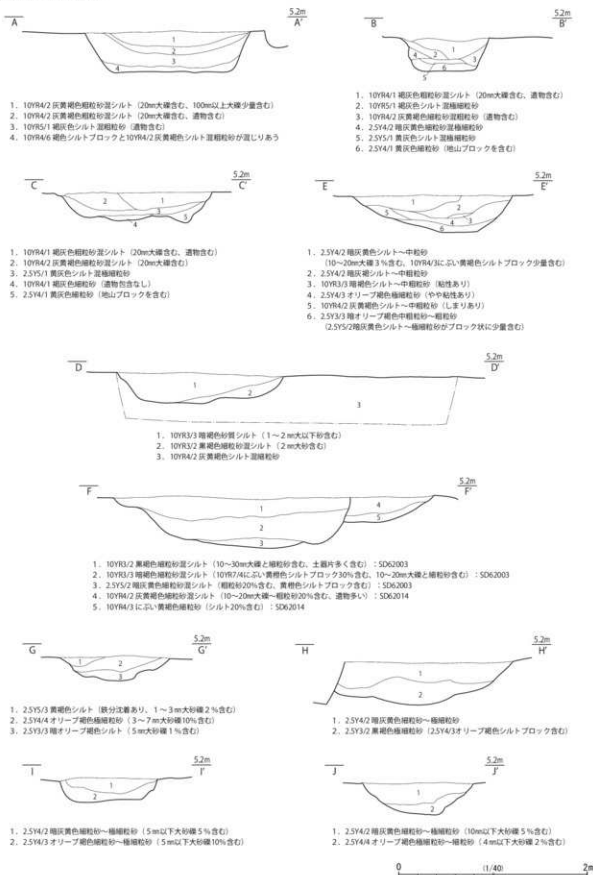
埋土中からは、土師器椀・皿・高杯・壺・鍋、須恵器杯蓋、山茶碗、陶器皿・壺、青磁碗が出土した。この中には古墳時代の土師器・須恵器が含まれているが、周囲にある溝や流路からの混入と考えられる。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SD62009 (第29図) 2区北端部～南端部にかけて検出された溝である。SR 62012の埋没後に掘り込まれている。SD 62029との関係性は、検出時にSD 62029を認識できず、掘削後のSD 62009の側面で溝があることを認識したため、前後関係は明らかでない。幅2～3 m前後、深さ0.5～0.7 m前後で、南北方向に延び、それぞれ調査区外へと続いている。断面形は場所により、緩やかなV字形に近い形状または深い皿状である。

埋土は、灰黄褐色またはオリーブ褐色の細粒砂～極細粒砂で、シルトは上層の最終堆積層にしか基本的には堆積していない。当初から埋没が進む過程の中で、常に流水状態であった可能性が高い。また、第29図R-R'の土層断面では、第1～3層と第4・5・8・9層と少なくとも2回の掘り直しが行われた可能性がある。

埋土中からは、土師器杯・椀・皿・高杯・鉢・甕・台付壺・鍋・瓶、ロクロ土師器、黒色土師器椀、製塩

SD62003・SD62014



第28図 第6次調査2区溝土層断面図

土器、須恵器杯蓋・鉢・壺・甕、灰釉陶器椀・壺・鉢、緑釉陶器椀、移動式カマドの破片、平瓦、砥石、敲石などが出土した。縄文土器深鉢と弥生土器壺等も確認されたが、混入の可能性が高い。これらの出土した遺物から、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

SD62014 (第28図) 2区中央部のやや北東側で検出された溝である。SD 62029の埋没後に掘り込まれており、SD 62003に溝の両端を削平されている。幅1.1m、深さ0.35mであり、南北方向に延びている。SD 62003との関係性は、重複部分の土層断面で確認したが、第28図H-H'の土層断面では明確な関係性を確認できるまでに至らなかったことから、SD 62003の一部である可能性も否定できない。断面形は皿状を呈する。

埋土は2層からなり、細粒砂～極細粒砂の堆積層で、層相がSD 62003の埋土と類似している。

埋土中からは、土師器皿・壺・鍋、灰釉陶器椀、山茶椀、陶器皿、土鍾、平瓦が出土したほか、青銅製の鏡の破片が1点出土した。青銅鏡は、外縁の形状から八花鏡である可能性が高いと考えられる。この青銅鏡を含めて、一部に平安時代の遺物があるが、これは重複するSD 62029などからの混入の可能性がある。遺構の時期は、混入の可能性のある遺物を除外しても、鎌倉時代に収まるものと考えられる。

SD62017 (第29図) 2区西側の北端部～南端部付近にかけて検出された溝である。SD 62023・SD 62047の埋没後に掘り込まれており、SB 62028・SB 62039や複数の溝や土坑の一部を削平されている。幅1.55～2.9m、深さ0.48mを測り、南北方向にやや蛇行しながら延びる。溝の南北端はそれぞれ調査区外へと続く。断面形は、緩やかなU字形を呈している。

埋土は4～5層からなり、細粒砂を含むシルトが主体である。また、やや粘性が強い堆積層も確認できたことから、一定量の流水はあるものの、激しいものではなかった可能性が推察される。

埋土中からは、土師器杯・椀・高杯・壺・甕・台付壺・把手、須恵器杯身・瓶・壺・脚付壺、不明土製品、砥石、剥片が出土した。少量ではあるが弥生土器壺の破片も出土したが、混入の可能性が高い。

出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期～後期と考えられる。

SD62021 2区北西部の調査区西壁に沿って検出された溝である。東岸の一部を検出したのみで、西岸を含めた溝の大半は調査区外に延びる。SD 62023が埋没後に掘り込まれており、SB 62020柱穴やSD 62007の一部が削平されている。深さ0.55mを測り、テラス状の段を経て底面へと至る。

埋土は、砂粒が混じるにふい黄橙色シルトである。埋土中からは、遺物が出土しなかったため、正確な遺構の時期は不明だが、SB 62020とSD 62007との重複関係から、少なくとも平安時代中期以前と考えられる。

SD62022 (第29図) 2区南端部付近から北側にかけて検出された溝である。SD 62045の埋没後に掘り込まれており、SB 62026柱穴やSE 62013・SD 62017などの複数の井戸・溝の一部が削平されている。幅1.4～1.6m、深さ0.3m前後を測り、やや蛇行しながら南北方向に延びる。断面形は皿状を呈している。

埋土は4層からなり、上層・下層は極細粒砂が混るシルト、中層は細粒砂～中粒砂である。上層には鉄分の沈着が認められることから、滞水に近い状況であった可能性が想定される。これらの層相から、当初と埋没の最終段階は、流水が顕著ではなかったと推察され、中層段階には砂を押し流すような水の流れがあった可能性がある。

埋土中からは少量の遺物しか確認できず、弥生土器壺・高杯・甕、打製石斧の未成品とみられる石製品が出土した。遺構の時期は、出土遺物と重複する他の遺構の時期から弥生時代終末期から古墳時代前期の可能性が考えられる。

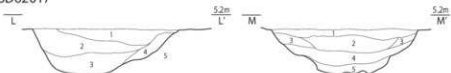
SD62023 2区中央部よりやや北側の調査区西壁付近で検出された溝である。SD 62017・SD 62022と重複しているが、明確な前後関係を平面では確認できなかった。しかし、各溝の側面形状や埋土の状況等から、SD 62017・SD 62022の両者により削平されている可能性が高いと考えられる。幅0.45～0.84m、深さ約0.3mを測り、北西～南東方向または南北方向に延びると考えられるが、両端が溝により削平されているため、完かではない。

SD62007



- 10YR5/1 褐色色細粒砂質シルト (1～2m大砂礫含む)
- 2.5Y4/2 黄灰色細粒砂質シルト (2～3m大砂礫含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト混極細粒砂

SD62017



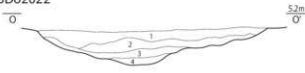
- 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂～シルト (7m以下大砂礫5%含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂 (7m以下大砂礫3%含む)
- 10YR5/1 褐色色中粒砂～極細粒砂 (5m以下大砂礫3%含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂～シルト (5m以下大砂礫3%含む)
- 10YR6/3 に近い黄褐色シルト～極細粒砂 (2m以下大砂礫2%含む)
- 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂質シルト (10YR3/3暗褐色マンガン粒含む)
- 10YR4/1 褐色色極細粒砂質シルト (10YR3/2暗褐色マンガン粒含む、3m大砂礫含む)
- 2.5Y5/2 暗灰色黄褐色極細粒砂質シルト (シルト60%含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂質シルト (細粒砂40%含む、砂質性強い)
- 2.5Y4/1 黄灰色粗粒砂質シルト (黄褐色～褐色シルトブロック含む、粗粒砂30%含む)

SD62017・62022・62037



- 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂 (5m大砂礫20%含む) : SD62017
- N7/1 灰白色シルト (10YR7/2に近い黄褐色シルトブロック5%含む) : SD62017
- 10YR7/1 灰白色シルト (2.5Y7/1灰白色極細粒砂1%含む) : SD62017
- 2.5Y8/1 灰白色極細粒砂 (5～10m大砂礫多量に含む) : SD62022
- 2.5Y7/1 灰白色中粒 (5m大砂礫20%含む) : SD62022
- 2.5Y8/1 灰白色極細粒砂 (5～10m大砂礫多量に含む) : SD62037
- 2.5Y6/1 黄灰色シルト (5m大砂礫1%含む) : SD62037
- 7.5YR6/6 褐色シルト : 基盤層

SD62022



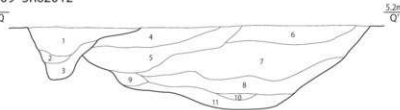
- 2.5Y5/2 暗灰色極細粒砂～シルト (5m以下大砂礫3%含む、鉄分沈着あり)
- 2.5Y4/2 暗灰色極細粒砂～中粒砂 (10m以下大砂礫2%含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂～シルト

SD62029



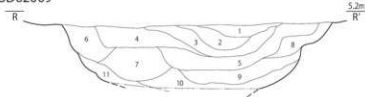
- 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂質シルト (細粒砂10%・粗粒砂5%含む、遺物含む)
- 2.5Y4/2 暗灰色極細粒砂質シルト (細粒砂5%・粗粒砂5%含む、地山ブロック10%含む)

SD62009・SR62012



- 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂 (5m大砂礫含む) : SD62009
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂 : SD62009
- 10YR4/1 褐色色極細粒砂 : SD62009
- 10YR6/2 灰黄褐色細粒砂 : SD62012
- 10YR6/3 に近い黄褐色中粒砂 (5m大砂礫含む) : SR62012
- 10YR6/4 に近い黄褐色中粒砂 (5m大砂礫含む) : SR62012
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂 : SR62012
- 10YR5/4 に近い黄褐色極細粒砂 : SR62012
- 10YR5/1 褐色色極細粒砂 (5m大礫含む) : SR62012
- 10YR4/2 灰黄褐色中粒砂 : SR62012
- 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 : SR62012
- 2.5Y4/2 暗灰色黄褐色極細粒砂～粗粒砂 : SR62012

SD62009



- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (10m以下大砂礫5%含む、鉄分広がる)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂 (10m以下大砂礫5%含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色極細粒砂～シルト (15m以下大砂礫2%含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂 (5m以下大砂礫5%含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂 (20m以下大砂礫1%含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色極細粒砂
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂
- 2.5Y4/2 暗灰色黄褐色極細粒砂 (2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック20%含む)
- 10.2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂
- 2.5Y4/2 暗灰色黄褐色極細粒砂 (1～5m大砂礫1%含む)

0 (1/40) 2m

第29図 第6次調査2区溝、流路土層断面図

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、S D 62017・S D 62022 よりも古いことから、少なくとも弥生時代終末期から古墳時代前期以前と考えられる。

S D 62025 (第30図) 2区中央部から南側にかけて検出された溝である。複数の遺構と重複し、S K 62033・S D 62009等の埋没後に掘り込まれており、S B 62026柱穴に一部が削平されている。幅1.38～1.84 m、深さ0.28～0.56 mを測り、北東-南西方向に伸び、調査区外の西側へと続いている。断面形は皿状を呈しており、底面は若干の凹凸がみられる。

埋土は1～3層に分かれ、細粒砂を含むシルトが主体であるが、下層には砂が混じらないシルトが堆積している。当初から埋没まで、基本的に激しい流水がなかった可能性が考えられる。

埋土中からは、土師器杯・皿・甕・瓶・甔、ロクロ土師器椀、瓦器椀、製塩土器、須恵器杯身・壺・甕、灰軸陶器椀・壺、山茶椀、陶器皿・鉢、白磁椀、青磁椀、平瓦、磨石が出土した。少量であるが、縄文土器深鉢の破片も出土したが、下層からの混入の可能性が考えられる。これら出土した遺物から、遺構の最終的な埋没時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

S D 62029 (第29図) 2区中央部付近から北部にかけて検出された溝である。S D 62003・S D 62014に一部が削平されている。S D 62009との前後関係については、明らかでない。幅1.4～1.6 m、深さ0.56 mを測り、北東-南西方向に伸びている。断面形は、両岸が緩やかに立ち上がるU字形である。

埋土は2層からなり、細粒砂を含むシルトであるが、粗粒砂が若干混じる。

埋土中からは、土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器椀、須恵器杯蓋、灰軸陶器椀、山茶椀、平瓦、砥石、敲石が出土した。これら出土した遺物から遺構の時期は、平安時代後期～鎌倉時代前期と考えられる。

S D 62034 2区中央部の西壁から南部にかけて検出した溝である。S D 62025・S D 62037・S D 62041に一部が削平されている。幅1.2～1.5 m、深さ0.41 mを測り、南北方向に伸び、調査区外へと続く。断面形はU字形を呈し、側面の立ち上がりは直角に近い形状で急である。

埋土中からは、土師器高杯・鉢・甕、須恵器杯蓋、灰軸陶器椀・皿、平瓦が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期～後期と考えられる。

S D 62037 (第29図) 2区南部で検出された溝である。S D 62034の埋没後に掘り込まれており、S K 62036・S K 62038に一部が削平されている。幅0.3～5.0 m、深さ0.18 mを測り、北西-南東方向に伸び、一部が調査区外へと続く。断面形は崩れたU字形であり、底面からの立ち上がりは西岸が緩やかであるのに対して、東岸は急である。

埋土は2層からなり、上層が極粗粒砂、下層がシルトである。埋土中からは、平瓦が出土した。出土した遺物とS D 62034との重複関係から、遺構の時期は平安時代後期前後と考えられる。

S D 62041 2区南端の調査区南壁に沿って検出された溝である。複数の遺構と重複しており、S D 62017・S D 62022などの埋没後に掘り込まれており、S E 62043に一部が削平されている。深さ0.2 mを測り、東西方向に伸びており、南岸は調査区外となる。調査区に接して東西方向に伸びる既存水路が存在していることから、この水路に先行する溝の可能性も考え得る。

埋土が灰色の粗粒砂混じりの細粒砂であったことから、一定の水流があったものと考えられる。

埋土中からは、土師器高杯・甕・把手、須恵器壺、灰軸陶器椀、山茶椀が出土した。出土した遺物から遺構の最終埋没時期は、鎌倉時代中期と考えられる。

S D 62045 2区北部から南部にかけて検出された溝である。S B 62026柱穴・S E 62013・S D 62009などに一部が削平されている。幅0.9から1.6 mを測り、深さについては溝を完全に掘削するのが困難であったことから、不明である。調査区北部から中央部にかけては、若干蛇行しながら南北方向に伸びるが、南部で東側へと曲がる。

埋土上層は、ふい黄橙色シルトである。

平面を中心とした把握のみであったため、出土遺物は確認することができず、遺構の時期は不明である。

S D 62046 2区南部で検出された溝である。S D 62041の埋没後に掘り込まれており、S D 62009

に一部が削平されている。幅 0.65 m、深さ 0.15 m を測り、南北方向に延びており、調査区外の南側へと続く。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SD62047 2区南部で検出された溝である。SD62017に一部が削平されている。南北方向に延びる溝と考えられるが、検出した溝の両端が削平されているため、定かではない。幅 0.68 m、深さ 0.12 m を測る。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

(7) 流路

SR62011 (第30図) 2区北部で検出された流路である。幅 4.0 m程、深さ 1.0 m以上を測り、幅については検出された部分が限定的であったことから、確定的ではない。また、北端断削の土層断面では、西岸は明確に確認できたものの、東岸については把握することが困難であったため、幅についても不確定な点が多く、平面で検出した幅よりも更に大きな流路である可能性もある。

埋土は、灰色粗粒砂および細線でシルトを含まないことから、埋没に至るまで常に流水状態の傾向であったと考えられるが、規模が不確定であることか

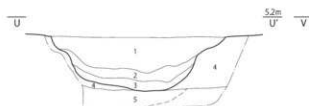
SD62025



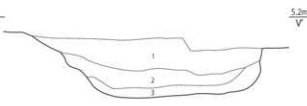
1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂混シルト (10~20m大礫10%含む)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分広がる、2~5m大マンガング粒20%含む)



1. 2.5Y3/3 黄褐色細粒砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (鉄分混在に含む)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (鉄分混在に含む、2.5Y3/1黄褐色シルトブロック50m大10%含む)



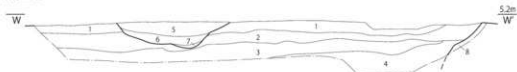
1. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂混シルト (20~50m大礫5%未満含む、シルト50%含む、粘性あり)
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (マンガング粒20%含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂混シルト (2m大砂礫~細粒砂10%含む)
4. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト (マンガング粒10%含む、グライ化し白色を呈する)
5. 7.5YR4/2 灰褐色シルト (遺物含む、部分的にグライ化)



1. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂混シルト (20~50m大礫5%未満含む、シルト50%含む、粘性あり)
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (マンガング粒20%含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂混シルト (2m大砂礫~細粒砂10%含む)



北端断削土層



1. 5Y5/1 灰色粗粒砂 (5~10m大礫5%含む)
2. 5Y5/2 灰オリーブ色粗粒砂 (5~10m大礫2%含む)
3. 5Y6/1 灰色細砂 (細粒砂ブロック10%含む)
4. 5Y5/1 灰色細粒砂~細砂
5. 7.5Y7/1 灰白色シルト (5~10m大礫1%含む、細粒砂2%含む)
6. 7.5Y6/2 灰黄色シルト (5~10m大礫10%含む)
7. 7.5Y6/3 に近い黄色シルト
8. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト



第30図 第6次調査2区溝、断削土層断面図

ら、断定はできない。

埋土中からは、縄文土器深鉢、土師器台付甕・甌とみられる破片、須恵器杯身が出土した。これら出土した遺物から、遺構の最終的な埋設時期は、平安時代と考えられる。

SR62012 (第29図) 2区北部で検出された流路である。SE 62002・SD 62009によって削平を受けている。特にSD 62009と重なっていることから、検出できた範囲は一部に限られる。第29図Q-Q'の土層断面から、深さ0.88mで幅16m前後のものと考えられる。また、埋設後にSD 62009が

重なる形で形成されていることから、常に水が通りやすい状況であったと考えられる。

埋土は、極細粒砂～中粒砂で構成されており、礫も含むことから、埋没に至るまで流水が常にあった状態であったと考えられる。また、第4・5層が示すように、掘り直しがあったと考えられることから、流路としては長期間機能していた可能性がある。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、時期については不明であるが、SD 62009よりも古いことから、少なくとも平安時代中期以前と考えられる。(渡辺)

3. 3区

(1) 層序

3区では、地表面の水田耕作土直下で古代～中世の遺構面が検出される状況であった。そのため、遺構上部は若干の削平を受けている。

(2) 掘立柱建物

SB63004 (第33図) 3-5・3-6区にかけて検出された掘立柱建物である。2つの調査区に跨がったかたちで存在し、調査区内では北側柱と南側柱の一部を確認した。調査区外の東側柱について平面検出のみを行い建物規模を把握することに努めた。推定される建物規模は、南北2間、東西2間であるが、東西については西側に延びる可能性も捨てきれない。

(3) 溝

SD63001 3-3・3-6区で検出された溝である。3-3・3-6区の間は調査区外となるが、両調査区で検出された位置関係と埋土の状況から、同一の溝と判断した。幅30～40cm、深さ10cmを測り、3-3区では東西方向に延びるが、3-6区ではやや北西～南東方向に振れている。

埋土は灰褐色系のシルトの単層である。埋土中からは、土師器杯・皿・甕、山茶碗が出土した。埋土から出土した遺物から、遺構の時期は平安時代末～鎌倉時代前半と考えられる。

SD63002 3-3・3-6区の各南端部で検出

された溝である。SD 63001と同様に3-3・3-6区の間は調査区外となるが、両調査区で検出された位置関係と埋土の状況から、同一の溝と判断した。北西～南東方向に延びる溝であり、幅80cm、深さ25cmを測るが、3-6区では大きく拡張し、別遺構と重複する可能性がある。

埋土中からは、土師器皿、山茶碗、平瓦が出土した。これらから、遺構の時期は鎌倉時代前半と考えられる。

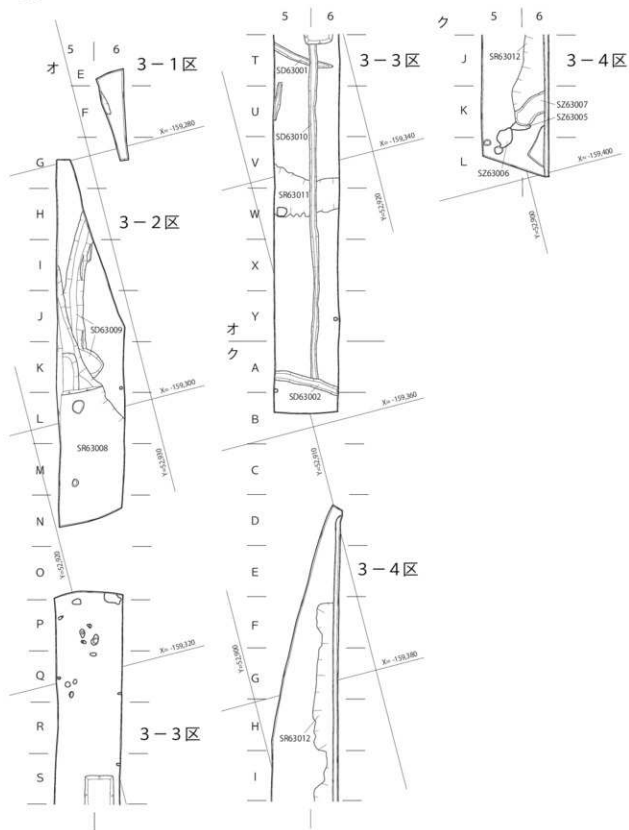
SD63003 3-6区の南端部で検出された溝である。ほぼ東西方向に延びる溝と考えられる。

埋土中からは、黒色土器(A類)碗等が出土し、遺構の時期は平安時代後期と考えられる。

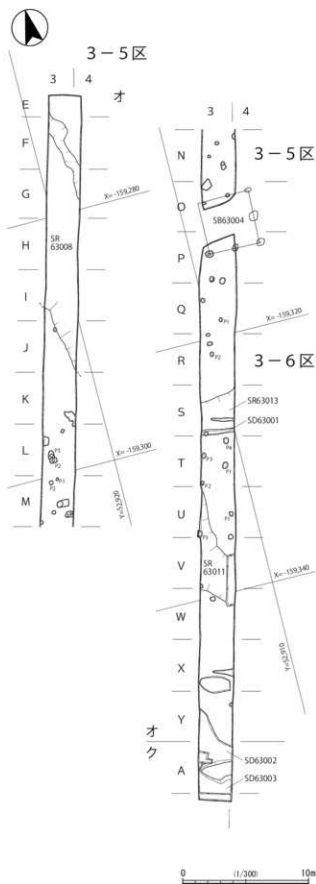
SD63009 (第33図) 3-2区中央部から北部にかけて検出された溝である。幅1.8m、深さ0.7mを測り、やや東に向かって曲がりながら南北方向に延び、溝の南端は東側に屈曲して途切れている。断面形状は緩やかなU字形を呈する。SR 63008と重複しており、埋設後にSR 63008が流れる。

埋土は、4層に分かれており、1層が黒褐色シルト、2層が暗灰黄色シルト、3層が黒褐色シルト、4層が黒褐色極細粒砂である。うち1層は、腐植が強い土壌化が進んだ堆積層であり、しまりが強い。また、4層は極細砂からなるラミナ状の堆積層である。このことから、溝の最下層に相当する4層段階には、緩やかな水流があったものとみられるが、基本的に徐々に埋没していった様相を示す。

埋土中からは土師器の破片が出土したが、細片の



第31図 第6次調査3区平面図①



第32図 第6次調査3区平面図②

ため時期を決めがたい。しかし、胎土の状況から古代以前の土師器と考えられるため、遺構の時期はSR 63008以前の古代以前である可能性が考えられる。

SD 63010 3-3区中央部から南部にかけて検出された溝である。SD 63001が埋没した後に掘り込まれており、SD 63002に一部が削平されている。幅0.35～0.6m、深さ0.2～0.3m前後を測り、条里の南北方向に延びる。断面形はU字形を呈し、検出された北側は皿状に近い形状である。

埋土は、灰白色シルトの単層であり、砂があまり含んでいなかったことから、流水が積極的にあった状態で埋没した可能性は低いと思われる。

埋土中からは、土師器皿と山茶椀が出土し、遺構の時期は平安時代後～末期と考えられる。

(4) 流路

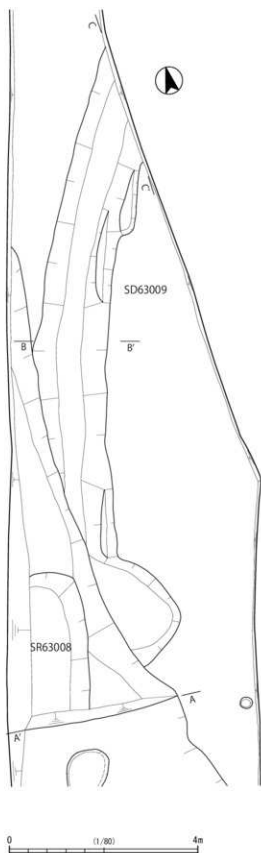
SR 63008 (第33図) 3-2・3-5区で検出された流路である。3-2区では流路の東岸のみを検出したが、3-5区では両岸ともに検出することができた。SD 63009が埋没した後に掘り込まれている。ほぼ南北方向に延びており、幅9m、深さ1mを測る。3-2区では一部で掘削を行ったところ遺物が一切出土しなかったことから、3-5区では平面検出のみの調査に留めた。

埋土は5層に分かれ、1層がシルト、2層がシルト～極細粒砂、3層が極細粒砂～細粒砂、4層が中粒砂～粗粒砂、5層が粗粒砂である。下層ほど砂の粒径が粗く、上層ほど粒径が細くなり、最終的には安定したシルトで埋没している。このような堆積状況から、流路が機能し始めた段階は積極的な水流があったと考えられ、徐々に水流が減少していきながら、徐々に埋没していったことが窺える。

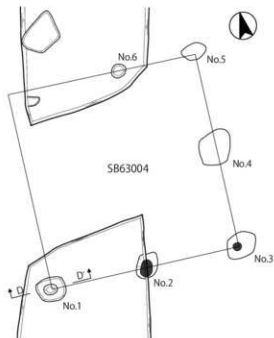
埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は明らかでないが、SD 63009との重複関係から古代以降に形成された可能性が考えられる。

SR 63011 3-3・3-6区で検出された流路である。3-3区と3-6区は調査範囲外を隔てているが、両方で検出された位置関係と埋土の共通性から、同一の流路と判断した。SD 63010とオ-U 3 Pit 3に一部が削平されている。3-6区調査区

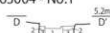
SR63008・SD63009



SB63004

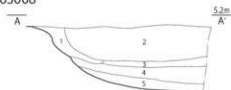


SB63004 - No.1



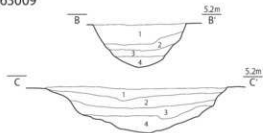
1. 25Y5/3 黄褐色シルト (10YR6/4明黄褐色シルトブロック5%含む)
2. 25Y4/3 オリーブ褐色シルト (2m以下マンガングラが全体的に広がる、3m以下下層1%未満含む)
3. 25Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂〜シルト (マンガングラ成分沈着あり)

SR63008



1. 25Y4/3 オリーブ褐色シルト (マンガングラ沈着あり)
2. 25Y4/2 暗灰黄色シルト〜極細粒砂
3. 25Y4/2 暗灰黄色極細粒砂〜粗粒砂
4. 25Y4/2 暗灰黄色中粒砂〜粗粒砂 (10〜50mm大礫30%含む)
5. 25Y4/2 暗灰黄色粗粒砂

SD63009



1. 10YR2/2 黒褐色シルト (Lもありあり)
2. 25Y4/2 暗灰黄色シルト
3. 10YR3/2 黄褐色シルト
4. 10YR3/2 黄褐色極細粒砂 (ラミナ状の堆積)

◎土層図記 0 (1/80) 2m

第33図 第6次調査3区掘立柱建物、溝、流路平面図・土層断面図

東壁際で行った断割で遺物が出土しなかったため、基本的に平面検出のみの調査に留めた。幅は3～3.5 m前後と考えられ、3-3区ではほぼ東西方向に延びるが、3-6区では南北方向に曲がりながら調査区外へと続いている。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は明らかにできないが、SD65010とオ-U 3 Pit 3の時期から、少なくとも平安時代後期以前のものと考えられる。

S R 63012 3-4区東壁沿いで検出された流路である。SZ63007の一部が削平されており、西岸のみを検出し、流路の大半は調査区外へと広がる。調査区東壁沿いで断割を行ったが、堆積層が浅く、出土遺物も確認ができなかったため、調査は平面での検出に留めた。

調査区内で確認できた深さが浅かったことから、流路の本体は調査区外の東側にあり、検出した堆積層は流路からの溢れ込みによる堆積層であった可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

S R 63013 3-6区中央部で検出された流路である。流路の北岸を検出したのみで、南岸は確認することができなかった。3区の検出面全体が流路由来の堆積層を基盤にしていることから、基盤層の堆積層差を遺構として認識してしまった可能性がある。

検出時に平面から遺物の出土は確認できなかったため、時期については不明である。

(5) その他

S Z 63005 3-4区南部で検出された、浅い落ち込みである。S Z 63007が埋没後に掘り込まれており、S Z 63006の一部が削平されている。平面形状は崩れた楕円形を呈し、深さ0.03 mと浅い。

S R 63012と近接していることから、S R 63012の溢れ込みによる堆積層の可能性も考えられる。

埋土中から遺物が出土しなかったことから、時期については不明である。

S Z 63006 3-4区南部で検出された、浅い落ち込みである。S Z 63005が埋没した後に掘り込ま

れている。平面形は崩れた楕円形を呈し、幅1.2 m、深さ0.04 mを測る。

深さが浅いため、S Z 63005と同様にS R 63012の溢れ込みによる堆積層の一部である可能性も考えられる。

埋土中から遺物が出土しなかったことから、時期については不明である。

S Z 63007 3-4区南部で検出された浅い落ち込みである。S R 63012が埋没した後に掘り込まれており、S Z 63005によって一部が削平されている。幅1.5 m、深さ0.1 mを測り、調査区外へと延びている。

S Z 63005・63006に比べて、深さが若干深く、調査区外へも続くことから、溝の可能性も考えられるが、S R 63012と重複することから、流路の堆積層の一部であった可能性もあり得る。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、時期については不明である。
(渡辺)

4. 4区

(1) 層序

4区では、標高約5.6mの地表面から検出面までの深さは約0.3～0.4mである。基本層序は表土、旧耕作土の直下が基盤層となっている。基盤層は、4-1区では上層が、にぶい黄褐色細粒砂で、その下に褐色(西側)から黄褐色(東側)のシルトがあり、4-2区では上層が、にぶい黄褐色シルトで、その下に褐色シルト、褐色粘質シルトとなる。なお、基盤層から縄文土器の小片が出土した。

(2) 井戸

SE64012 4-1区西部で検出された井戸であり、掘形の一部分が調査区外へと広がる。SD64002・SD64013の埋没後に掘り込まれている。掘形の平面形状は、直径3.0m前後の円形のものと考えられる。深さは0.8m以上で、調査区と接する里道が崩落する危険性を孕んでいたことから、下層

は重機で掘削できる可能な範囲に留めたため、井戸枠の有無まで完全に確認できた状況ではない。しかし、掘形埋土は上層が0.005m大の礫が2%混じるオリブ褐色シルトがレンズ状に堆積し、下層はオリブ褐色シルトの単層を呈していることから、井戸枠は抜き取られた後に埋められた可能性がないわけではない。

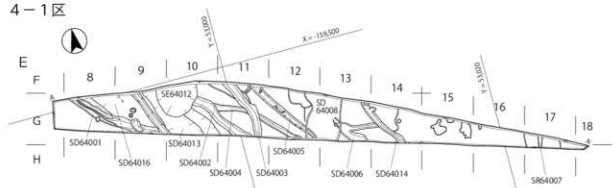
須恵器輪が出土しており、平安時代まで降るものと考えられる。

(3) 溝

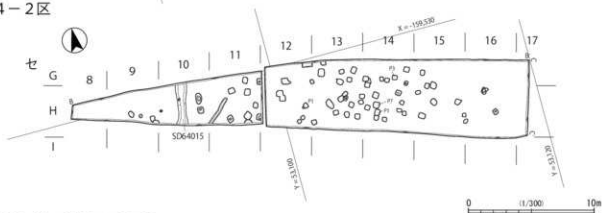
SD64001 4-1区西部で検出された溝である。SD64013および攪乱により一部が削平されている。幅約1.0m、深さ約0.5mを測り、北西-南東方向に延びる。断面形状はU字形を呈する。

埋土の上層は固く締まった灰白色系のシルトで、下層は黄褐色系の細粒砂にシルトが混じる。下層に細粒砂が主体であることから、溝として機能し始め

4-1区

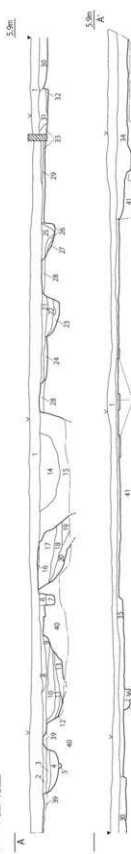


4-2区



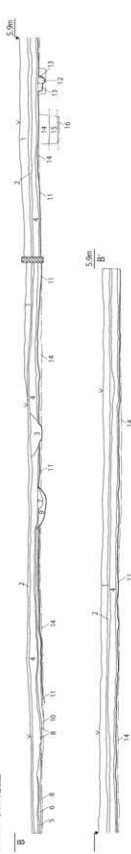
第34図 第6次調査4区平面図

4-1区北壁



1. 107851 褐色色シルト：粗砂土
2. 107871 褐色色シルト：粗砂土
3. 107871 褐色色シルト：粗砂土
4. 107842 灰黄色褐色シルト・ブロック1%混じる）：粗砂土
5. 107844 褐色シルト：粗砂土
6. 107851 褐色色シルト：粗砂土
7. 107871 褐色色シルト：粗砂土
8. 107871 褐色色シルト：粗砂土
9. 107864 褐色色シルト：粗砂土
10. 107864 褐色色シルト：粗砂土
11. 23572 灰黄色シルト
12. 23572 灰黄色シルト
13. 107834 オリーブ褐色シルト
14. 23584 オリーブ褐色シルト
15. 107852 灰黄色シルト
16. 107872 灰黄色シルト
17. 107853 に近い黄褐色シルト（混じりまざる）：粗砂土
18. 23584 オリーブ褐色シルト
19. 107864 褐色色シルト：粗砂土
20. 23572 灰黄色シルト
21. 107844 褐色色シルト
22. 23571 褐色色シルト
23. 23572 灰黄色シルト
24. 107846 褐色色シルト
25. 107853 に近い黄褐色シルト
26. 23584 オリーブ褐色シルト
27. 107852 灰黄色シルト
28. 107842 灰黄色シルト
29. 23572 灰黄色シルト
30. 107873 に近い黄褐色シルト
31. 23573 灰黄色シルト
32. 23573 灰黄色シルト
33. 23572 灰黄色シルト
34. 23584 オリーブ褐色シルト
35. 107854 褐色シルト・ブロック2%混じる）
36. 107852 灰黄色シルト
37. 107873 に近い黄褐色シルト
38. 107844 褐色色シルト
39. 107873 に近い黄褐色シルト
40. 107844 褐色色シルト
41. 23573 灰黄色シルト

4-2区北壁



1. 粗砂土
2. 107876 褐色色シルト：粗砂土
3. 107863 に近い黄褐色シルト
4. 107863 に近い黄褐色シルト
5. 107866 褐色色シルト
6. 107864 に近い黄褐色シルト
7. 107856 黄褐色シルト
8. 107856 黄褐色シルト
9. 107864 に近い黄褐色シルト
10. 107854 に近い黄褐色シルト
11. 107858 黄褐色シルト
12. 107851 褐色色シルト
13. 107851 褐色色シルト
14. 107853 に近い黄褐色シルト
15. 107844 褐色色シルト
16. 107846 褐色色シルト

4-2区東壁



第35図 第6次調査4区土層断面図

た当初は若干の流水があり、上層段階になると殆ど水が流れていた状況ではないと考えられる。

埋土中からは、土師器小片が出土したが、遺構の時期は不明である。

SD64002 4-1区西部で検出された溝である。SD 64004の埋没後に掘り込まれており、一部がSE 64012によって削平される。幅約0.5m、深さ約0.25mを測り、北西-南東方向に延びる。断面形状はU字形を呈する。

埋土中からS字状口縁台付甕が出土したことにより遺構の時期は古墳時代と考えられる。

SD64003 4-1区中央部で検出された溝で、SD 64004の埋没後に掘り込まれている。幅約0.8m、深さ約0.5mを測り、北西-南東方向に延びる。断面形状は、西側に浅い皿状のテラスを有し、全体としてはU字形を呈する。このうちテラス部分については、深さが浅い状況であったことから、表土掘削および検出時を含め、平面で明確に検出することができなかった。

埋土の上層は、褐色極細粒砂が溝の西側にオーバーフローする形で堆積しており、下層は黄灰色系のシルトである。溝の機能当初は、流水がほとんどなく、溝が埋没する最終段階で顕著な流水があったものと考えられる。

埋土中から小片ではあるもののロクロ土師器が出土したことにより、遺構の時期は平安時代後期と考えられる。

SD64004 4-1区中央部で検出された溝である。SD 64002・SD 64003の一部が削平されている。幅約0.3m、深さ約0.15mを測り、北西-南東方向に延びる。断面形状はU字形である。

埋土にはぶい黄褐色シルトの単層であり、顕著な流水があったとは考えがたい。

埋土中からは土師器小片が出土したが、遺構の時期は不明である。

SD64005 4-1区中央部で検出された溝である。SD 64008の一部が削平される。幅約0.5m、深さ約0.38mを測り、北西-南東方向に延びる。断面形はU字形を呈する。底面では、小さなピットを複数検出した。これらのピットは、杭跡である可能性が考えられる。

埋土の上層にはぶい黄褐色シルトで、下層はオリブ褐色細粒砂が混じるシルトであり、当初は流水があったものと考えられる。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の明確な時期は不明であるが、SD 64008よりも新しいことから、鎌倉時代以降と考えられる。

SD64006 4-1区中央部で検出された溝である。幅約0.5m、深さ約0.25mを測り、北西-南北方向に延びる。SD 64008の一部が削平される。

埋土中から土師器小片が出土したに止まり、遺構の明確な時期は不明であるが、SD 64008よりも新しいことから、少なくとも鎌倉時代以降と考えられる。

SD64008 4-1区中央部で検出された溝である。SD 64005・SD 64006の埋没後に掘り込まれている。幅約3.0m、深さ約0.2mを測り、南北方向に延びる。

埋土にはぶい黄褐色細粒砂であり、固くしまりが強い。

埋土中からは、縄文土器と山茶碗が出土した。縄文土器は、4-2区を中心に出土があることから、混入のものとみられ、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD64013 4-1区西部で検出された溝である。SD 64001の埋没後に掘り込まれており、SE 64012の一部が削平されている。削平を受けていない部分の幅は約2.6mを測り、北西-南東方向に延びる。深さが1m以上になると推定され、掘削時に積極的な湧水と周囲が崩落する危険性があったことから、掘削は最大限に留めたため、正確な深さは明らかでない。

埋土の上層は、締まりのあるぶい黄褐色細粒砂、下層はオリブ褐色中粒砂であり、下層になるにつれて粒径が粗い砂が堆積することから、当初は積極的な流水があったものの、徐々に埋没したのと考えられる。

埋土中から遺物が出土しなかったため、明確な遺構の時期は不明であるが、SE 64012よりも古いことから、平安時代以前と考えられる。

SD64014 4-1区東部で検出された溝である。一部がピットにより削平されている。幅約0.45m、

深さ0.15mを測り、北西-南東方向に延びる。

埋土は灰黄褐色シルトの単層である。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SD64015 4-2区西部で検出された溝である。後世の攪乱溝により一部が削平されている。幅約0.6m、深さ約0.2mで南北方向に延びる。

埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

(4) 流路

SR64007 4-1区東端で検出された流路である。西岸の一部が確認できたのみで、東岸は調査区外となる。明確な規模は不明であるが、検出された範囲での深さは0.25~0.4mで、南北方向に延びると考えられる。西岸から底面までは緩やかに下り、底面はやや段状の起伏があつて一定ではない。

埋土は、オリーブ褐色シルトに黄褐色シルトブロックが混じっており、流水痕跡が不明瞭である。

埋土中から山茶碗が出土したことにより、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。(谷口・渡辺)

5.5区

(1) 層序

調査区周辺は、既に大半の耕作土が除去されており、本来の現況は一部しか残存していないが、それから推測すると標高6m近辺の水田であった。僅かに厚さ5cmほど残存する耕作土及び床土を除去すると早くも検出面に達する。したがって包含層は存在せず、遺構の上半は相当削平されている可能性が高い。

(2) 掘立柱建物

SB 65014 (第38・39図) 5-1区北部で検出された掘立柱建物である。桁行2間以上、梁行2間と考えられる南北棟で、調査区外の南側へも続いている。棟方向は正方位軸ではN2°W、飯野郡条里軸ではN17°Wとなる。

梁となる北側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長は5.4m前後であり、各柱穴間の芯々間距離は2.4~3.0mを測る。また桁のうち柱間1間分のみが検出されている西側柱における柱穴間の芯々間距離も2.7mを測ることから、建物の設計尺度は9尺になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または崩れた方形を呈しており、一辺の長さが0.5~0.7m、深さ0.2~0.5mを測り、やや大きさが異なる柱穴も存在する。各柱穴では柱痕を平面および断面で確認することができ、柱痕幅は0.2~0.3mを測る。

柱穴No.1・3からは土師器杯・甕、灰軸陶器碗が柱穴別に出土した。これらは、掘形埋土と埋土一括で取り上げられたものである。これら出土した遺物から、建物の時期は平安時代中期と考えられる。

SB 65015 (第38・39図) 5-1区北部で検出された掘立柱建物である。桁行4間、梁行2間以上と考えられる東西棟で、調査区外の南側へも続いている。棟方向は正方位軸ではE6°S、飯野郡条里軸ではE9°Nとなる。

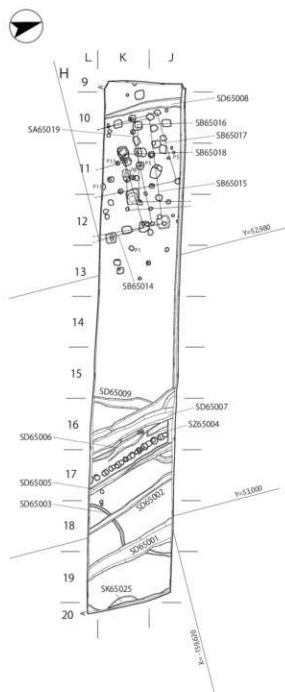
桁となる北側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長は8.4m前後であり、各柱穴間の芯々間距離は1.95~2.4mを測る。また桁のうち柱間1間分のみが検出された妻柱の柱穴間芯々間距離は2.55~3.15mを測ることから、建物の設計尺度は8~10尺になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または崩れた方形を呈しており、一辺の長さが0.3~0.7m、深さ0.1~0.4mを測り、柱穴により規模が大きく異なる。各柱穴では柱痕を平面および断面で確認することができ、柱痕幅は0.2~0.4mを測り、規模が大きく深い柱穴ほど柱痕の幅も広い。

柱穴No.3・4・6・9から遺物が出土したが、うちNo.4・6の柱痕からは遺物が出土していることから、柱が抜き取られていると考えられる。出土した遺物は、土師器杯・甕が柱穴別に出土した。これらから、建物の時期は平安時代後期と考えられる。

SB 65016 (第38・39図) 5-1区北部で検出

5-1区



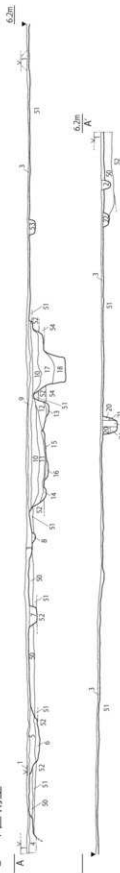
5-2区



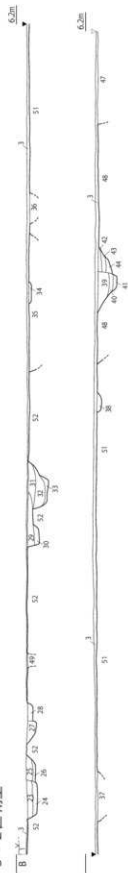
0 (1/200) 10m

第36図 第6次調査5区平面図

5-1区南壁



5-2区南壁

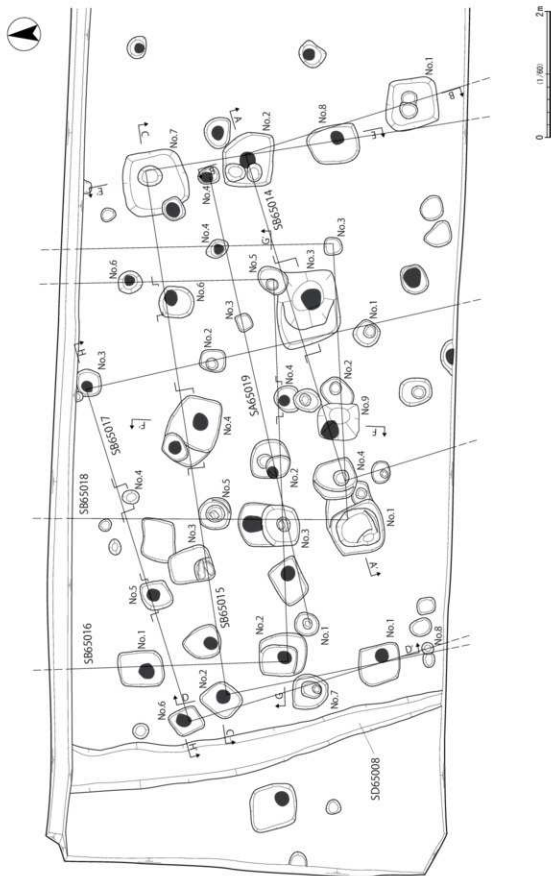


1. 耕作土
2. 10195/1 黒褐色シルト：腐植
3. 10195/1 赤褐色シルト (10195/1 赤褐色シルト (堆積物多量))：粘土
4. 腐乱
5. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：S065001
6. 2316/2 灰黄色シルト (12.5%粘土)：S065002
7. 2316/2 灰黄色シルト (3.5~5.5%粘土)：S065003
8. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：S065004
9. 2316/2 灰黄色粘粉シルト (堆積物多量)：S065005
10. 2316/2 灰黄色粘粉シルト (土層片多し)：S065006
11. 10195/1 灰白色粘粉シルト (伊予半島の地層)：S065007
12. 2317/1 灰白色粘粉シルト (堆積物多量)：S065008
13. 10196/1 黒褐色粘粉シルト (10%粘土)：S065009
14. 2316/1 黒褐色粘粉シルト (10%粘土)：S065010
15. 2317/1 灰白色粘粉シルト (10%粘土)：S065011
16. 2317/1 灰白色粘粉シルト (堆積物多量) (深くしる)：S265004B床
17. 2317/1 灰白色粘粉シルト (堆積物多量) (深くしる)：S265004B床
18. 10196/2 灰黄色粘粉シルト (1.2~3.5%粘土)：S065007
19. 10197/1 灰白色粘粉シルト (1.5%粘土)：S065008
20. 2316/1 黒褐色粘粉シルト (5%粘土)：PK
21. 2316/1 黒褐色粘粉シルト (5%粘土)：PK
22. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065008
23. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065012
24. 2316/1 黒褐色シルト：S065012
25. 10197/2 灰白色粘粉シルト：S065012
26. 2317/2 灰黄色粘粉シルト (5%粘土)：S065012
27. 2316/2 灰黄色粘粉シルト
28. 2316/2 灰黄色粘粉シルト (5%粘土)：S065081
29. 2317/1 灰白色粘粉シルト (5%粘土)：S065080
30. 2317/1 灰白色粘粉シルト (5%粘土)：S065010
31. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：S065029
32. 2316/2 灰黄色粘粉シルト (堆積物多量) (伊予半島の地層)：S065029
33. 2317/1 灰白色粘粉シルト (5%粘土)：S065011
34. 2317/1 灰白色粘粉シルト：S065011
35. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065028

36. 2316/1 灰黄色粘粉シルト (1~5%粘土多量) (伊予)：S065028の一層
37. 2317/3 灰黄色粘粉シルト：S065027
38. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：S065013
39. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：S065021
40. 2317/1 灰白色シルト
41. 2316/1 灰黄色粘粉シルト (5%粘土)：S065021
42. 2316/2 灰黄色粘粉シルト (堆積物多量) (伊予)：S065021
43. 2316/2 灰黄色粘粉シルト
44. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065021
45. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065022
46. 2316/1 灰黄色粘粉シルト：S065022
47. 2316/2 灰白色粘粉シルト
48. 10197/1 灰白色粘粉シルト (1.5%粘土)：S065034
49. 腐乱
50. 2317/3 灰黄色粘粉シルト (堆積物多量、マングラ集積)：腐植層
51. 2317/3 灰黄色粘粉シルト：腐植層
52. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：腐植層
53. 2317/2 灰黄色粘粉シルト：S065029
54. 2316/2 灰黄色粘粉シルト：腐植層

第7図 第6次調査5区土層断面図

SB65014 • SB65015 • SB65016 • SB65017 • SB65018 • SA65019



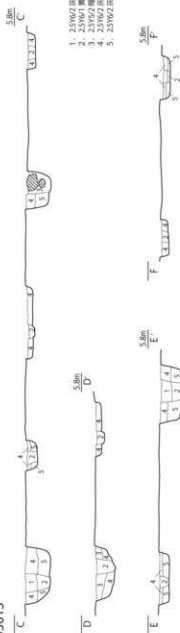
第38图 第6次調査5区圓立柱建物、柱列平面図

S865014



1. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック5% (黄褐色シルト) フロック5%
2. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック30% (黄褐色シルト) フロック30%
3. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%
4. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック30% (黄褐色シルト) フロック30%
5. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%
6. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%

S865015



1. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック5% (黄褐色シルト) フロック5%
2. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック30% (黄褐色シルト) フロック30%
3. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%
4. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック30% (黄褐色シルト) フロック30%
5. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%

S865016



1. 23W61 黄灰色シルト (黄褐色シルト) フロック5% (黄褐色シルト) フロック5%
2. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%
3. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%

S865017



1. 23W61 黄灰色シルト (黄褐色シルト) フロック5% (黄褐色シルト) フロック5%
2. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%
3. 23W62 灰黄色シルト (黄褐色シルト) フロック50% (黄褐色シルト) フロック50%



第39図 第6次調査5区掘立柱建物土層断面図

された掘立柱建物である。桁行3間、梁行2間以上と考えられる東西棟で、調査区外の北側へも続いている。棟方向は正方位軸ではE 13° S、飯野郡条里軸ではE 2° Nとなる。

桁となる南側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長が6.09 m前後であり、各柱穴間の芯々間距離は1.95～2.19 mを測る。また桁のうち柱間1間分のみが検出された東西妻柱での柱穴間芯々間距離は2.25 mを測ることから、建物の設計尺度は7～8尺になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または円形を呈している。方形の場合は、一辺の長さが0.4～0.5 m、円形の場合は直径0.3 m前後、深さは0.2～0.3 mを測る。各柱穴では柱痕を平面および断面で確認することができ、柱痕幅は0.1～0.2 mを測る。

柱穴№3・5・6からは、土師器杯・皿・甕、黒色土器碗、灰軸陶器碗、土錘が出土した。出土した遺物から、建物の時期は平安時代後期と考えられる。

S B 65017 (第38・39図) 5-1区北部で検出された掘立柱建物である。桁行3間以上、梁行3間と考えられる南北棟で、調査区外の南側へも続いている。棟方向は正方位軸ではN 2° E、飯野郡条里軸ではN 13° Eとなる。

桁となる東西側柱は、検出できた2間分の柱穴間の芯々間距離が1.95～2.55 mを測る。梁となる北側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長は5.55 mで、柱間が1.5～2.1 mを測る。桁・梁ともに柱間間隔はバラつきが目立つが、おおよそ5～7尺が建物の設計尺度であった可能性が考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または円形を呈している。方形の柱穴は一辺の長さが0.3 m前後、円形の柱穴は直径0.2～0.4 mで、各柱穴の深さは0.2 m前後を測る。土層は北側柱のみで把握でき、確認できた柱痕幅は0.2 m前後となる。

柱穴№1・5から遺物が出土し、うち№1の柱痕からは遺物が出土していることから、柱が抜き取られていると考えられる。出土した遺物は、土師器杯・甕が柱穴別に出土した。出土した遺物から、建物の時期は平安時代後期と考えられる。

S B 65018 (第38図) 5-1区北部で検出された掘立柱建物である。桁行2間以上、梁行2間と考

えられる南北棟であり、調査区外の北側へも続いている。棟方向は正方位軸ではN 14° E、飯野郡条里軸ではN 1° Wとなる。

桁となる東西側柱は、検出できた1間分の柱穴間の芯々間距離が1.8～2.1 mを測る。梁となる南側柱の東・西端の柱穴芯々で計測した全長は4.35 mであり、各柱穴間の芯々間距離は2.1～2.25 m前後を測る。

柱穴の芯々間距離にはいずれもバラつきがあるが、建物の設計尺度は6～7尺になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、直径0.2～0.5 m、深さ0.1～0.4 mを測り、柱穴により規模が異なる。柱痕は平面で確認することができ、柱痕幅は0.1～0.2 mを測る。

柱穴№1からは、黒色土器碗が出土した。出土した遺物から、建物の時期は平安時代後期と考えられる。

(3) 柱列

S A 65019 (第38図) 5-1区北部で検出された柱列である。4つの柱穴から構成される3間の柱列である。軸方向は正方位軸ではE 3° S、飯野郡条里軸ではE 12° Nとなる。全長は5.5 mを測り、柱間の芯々間距離は2.4 m前後となることから、設計尺度は8尺と考えられる。

柱列を構成する柱穴は、円形を呈しており、直径0.2～0.3 m、深さ0.2 m前後を測る。

柱穴№2・3から遺物が出土したが、うち№3では柱痕から遺物が出土していることから、柱が抜き取られていると考えられる。出土した遺物は、土師器甕、山茶碗が柱穴別に出土した。出土した遺物から、建物の時期は平安時代後期～鎌倉時代前期と考えられる。

(4) 土坑

S K 65020 5-2区西部で検出された土坑である。S D 65024の埋没後に掘り込まれている。平面形状は方形を呈し、長辺2.25 m、短辺1.75 m、深さ0.37 mを測る。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

S K 65022 5-2区南西隅で検出された土坑で

ある。SD 65024 が埋没した後に掘り込まれている。深さ 0.25 m を測り、土坑の大半が調査区外に広がっているため、全体の平面形状は不明であるが、方形に近い形状であると考えられる。

埋土は 2 層からなり、砂粒を含む灰黄色シルトと中粒砂である。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SK 65023 5-2 区中央部で検出された浅い土坑である。SR 65027 が埋没した後に掘り込まれている。平面形は楕円形を呈し、幅 11 ~ 19 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は褐色シルトの単層である。

埋土中から遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

SK 65025 5-1 区南端で検出された土坑である。土坑の大半が調査区外に広がっているため、全体の平面形状は不明であるが、円形または楕円形の形状であると考えられる。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

(4) 溝

SD 65001 5-1 区東部で検出された溝である。SD 65003 の埋没後に掘り込まれている。幅 1.0 ~ 1.5 m 前後、深さ 0.28 m を測り、ほぼ南北方向に延びて調査区外へも続いている。断面形状は、底面から緩やかに立ち上がる皿状を呈している。

埋土は 2 層からなり、ともに灰黄色シルトであるが、下層には褐色シルトブロックを含み、上層には下層に比べて砂粒が含まれている。埋土が砂を主体とした堆積層でないことから、積極的な流水があったとは考えがたい。

埋土中からは、土師器製の破片が出土した。出土遺物から、遺構の時期は室町時代後期と考えられる。

SD 65002 5-1 区東部で検出された溝である。SD 65003 の埋没後に掘り込まれている。

幅 0.5 m 前後、深さ 0.2 m を測り、ほぼ南北方向に延びて調査区外へも続き、SD 65001 と並行する。断面形状は、U 字形を呈している。

埋土は灰黄色シルトの単層からなり、3 ~ 5 mm 大礫を含む。SD 65001 と埋土も類似しており、流水

痕跡が顕著ではない。

埋土中からは、須恵器製の破片及び土師器小片が出土した。確認はないものの遺構の時期は古墳時代と考えられる。

SD 65003 5-1 区東部で検出された溝である。SD 65001・65002 に一部が割平されている。幅 0.2 m 前後、深さ 0.1 m を測り、南北方向に蛇行しながら延びて調査区外へも続いている。断面形状は U 字形を呈している。

埋土は灰白色シルトの単層からなり、淡黄色シルトブロックを含む。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期の詳細は不明であるが、SD 65001・65002 と重複していることから、少なくとも古墳時代以前のもものと推測される。

SD 65005・SD 65006 (第 40 図) 5-1 区東部で検出された溝である。この 2 つの溝は道路状遺構である SZ 65004 の側溝として機能していたと考えられ、SZ 65004 と一連の遺構とし捉えられる。SD 65005 は幅 0.3 m 前後、深さ 0.12 ~ 0.18 m、SD 65006 は幅 0.64 ~ 0.75 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m を測り、SZ 65004 の路面に沿って並行しながら南北方向に延びて調査区外へも続いている。断面形状はともに U 字形を呈しているが、SD 65005 は皿状に近い。

SD 65005 の埋土はシルトブロックが混じる黄灰色粗砂、SD 65006 の埋土は 2 層からなり、ともに灰白色シルトであるが、上層には極細砂が多く含んでいることから、2 つの溝はともに砂が運ばれるような流水が埋没最終段階にあったと思われる。

2 つの溝の埋土中からは、遺物が出土しなかったが、SZ 65004 と一体的な機能を有していることから、SZ 65004 とほぼ同時期であると考えられる。

SD 65007 (第 40 図) 5-1 区東部で検出された溝である。SD 65009 が埋没した後に掘り込まれている。SD 65006 と近接しており、一部が重複しているが、最終的には SZ 65004 と一連で埋没していることから、検出時に前後関係を平面で把握することができなかった。幅 1.25 ~ 1.5 m 前後、深さ 1.0 m を測り、SZ 65004 や SD 65005・65006 にほぼ並行し、南北方向に延びて調査区外へも続いている。西岸側にはテラス状の段を有し、底面から側面への

立ち上は極めて急で、断面形状は箱形に近い。

最終埋没段階は S Z 65004 の埋土と同一であり、それ以下の埋土は 2 層からなる。いずれもシルトを主体とする堆積層であるが、下層は粘性が強いシルト、上層には 3～5mm 大の礫が多く含まれている。この層相から、当初は滞水に近い状況であった可能性が推測される。

埋土中からは、土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器碗・皿、山茶碗、陶器鉢・壺、平瓦、打製石斧が出土した。出土した遺物から遺構の時期は平安時代時代末～鎌倉時代前期と考えられ、最終的に埋没したのは S Z 64004 とほぼ同時期であると考えられる。

S D 65008 (第 38 図) 5-1 区西部で検出された溝である。S B 65015・65016・65017 に近接している。幅 0.3～0.4 m 前後、深さ 0.16 m を測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状は、U 字形を呈している。

埋土は灰黄色極細粒砂の単層からなり、層相から緩やかな水の流れがあったものと思われる。

埋土中からは、土師器杯・甕、山茶碗、白磁碗、陶器甕、平瓦が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末前後と考えられる。

S D 65009 (第 40 図) 5-1 区東部で検出された溝である。S D 65007 によって一部が削平されている。幅 0.46～0.8 m、深さ 0.1 m を測り、北東-南西方向に延びて調査区外へと続くが、北東側については S D 65007 と重複しているため不明である。断面形状は U 字形を呈しており、底面は平坦である。

埋土は灰黄色シルトの単層であり、埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、S D 65007 との重複関係から少なくとも平安時代末期以前であると考えられる。

S D 65010 5-2 区東部で検出された溝である。S D 65029 の埋没後に掘り込まれている。幅 1.5 m 前後、深さ 0.3 m を測り、ほぼ条里の南北方向に沿って北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。西岸にはテラス状の段を有しており、東岸は底面から急激に立ち上がっており、断面形状は箱形に近い。

埋土は 2 層からなり、ともに砂質がやや強いシルト層で、緩やかな流水があったものと思われる。

埋土中からは、土師器皿・鍋、山茶碗、陶器皿(山皿)・鉢が出土し、出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

S D 65011 5-2 区東部で検出された溝である。S R 65028 の埋没後に掘り込まれている。幅 0.4～0.5 m 前後、深さ 0.1～0.25 m を測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰白色砂質シルトの単層からなり、深さも浅いことから、短期間に埋没したものと推測される。

埋土中からは、土師器甕・把手、鉄製の鋤先が出土した。鉄製の鋤先は底面に近い高さのところから出土している。出土した遺物から遺構の時期は、飛鳥時代～奈良時代前期と考えられる。

S D 65012 5-2 区東部で検出された溝である。幅 0.8 m、深さ 0.8 m を測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状は皿状を呈している。

埋土は 4 層に分かれており、第 23・24 層が第 25・26 層を切り込むかたちで堆積していることから、掘り直しが行われていると考えられる。いずれの堆積層も若干の細粒砂等を含むが、シルトを主体としていることから、当初から埋没最終段階まで緩やかな流水の中で埋没していったものと推測される。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

S D 65013 5-2 区西部で検出された溝である。幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は灰黄色砂質シルトの単層からなり、深さも浅いことから、短期間に埋没した可能性が推測される。

埋土中からは、土師器甕の破片が出土した。出土遺物から遺構の時期は、平安時代前半と考えられる。

S D 65021 5-2 区西部で検出された溝である。S K 65020 によって一部が削平されており、S D 62024 と重複しているが、一連で掘削をしてしまったため、前後関係を把握することができなかった。幅 1.8 m、深さ 0.6 m を測り、蛇行しながら北西-南東方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。

いる。断面形状は、崩れたV字に近い形状を呈しており、西側面にはやや低い段を有している。

埋土は6層からなるが、第39～41層が第42～44層を切り込む形で堆積していることから、掘り直しが行われており、新溝と旧溝に分かれる。新溝の埋土は若干の細粒砂を含むものの、安定したシルトであり、積極的な流水があったと窺えない。一方、旧溝の埋土は、極細粒砂が多く含んだシルトがみられることから、緩やかな流水があったものと思われる。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD65024 5-2区西部で検出された溝である。SK65020によって一部が削平されており、SD65021と重複するが、前後関係については不明である。幅2.1m、深さ0.5m前後を測り、南北方向に延びて、調査区外へも続いている。

埋土は灰白色細粒砂～極細粒砂であることから、一定量の流水があったものと思われる。

埋土中からは、土師器のS字口縁台付壺や轆が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、古墳時代前期～中期と考えられる。

SD65029 5-2区東部で検出された溝である。SD65010によって一部が削平されている。幅1.25～2.0m、深さ0.6mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。西岸にはテラス状の段を有し、東側面は底面から緩やかに立ち上がっており、断面形状は皿状である。

埋土は3層からなり、第31層は細粒砂、第32・33層は中粒砂～粗粒砂であることから、積極的な流水があったことが窺える。特に第32層は、ラミナ状の堆積状況を把握できたことから、水量も多かった可能性があると思われる。

埋土中から遺物が出土しなかったため、時期については不明だが、SD65010との重複から少なくとも鎌倉時代以前の古代に遡る時期と考えられる。

SD65030 5-2区東部で検出された溝である。SD65031によって一部が削平されている。幅0.5m、深さ0.2mを測り、やや蛇行しながら南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は灰黄色シルトの単層からなり、顕著な流水痕跡は確認できなかった。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SD65031 5-2区東部で検出された溝である。SD65030が埋没した後に掘り込まれている。幅0.5m前後、深さ0.3mを測り、南北方向に延びて、調査区外へも続いている。断面形状はU字形を呈するが、西側面の底面からの立ち上がりは急であるものの、東側面の立ち上がりは緩やかである。

埋土は灰黄色砂質シルトの単層からなり、顕著な流水痕跡は確認できなかった。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

(5) 道路状遺構

SZ65004 (第40図) 5-1区東部で検出された道路状遺構である。当初溝として認識して掘り下げたところ、非常に固く締まった第8層(第37図第15層)からなる平坦面を検出し、その後に第8層を除去すると南北方向に一列になって連なるピット群を検出した。このピット群は、いわゆる波板状の凹凸痕跡であると判断し、道路状遺構であると判断した。SD65005・65006は、機能面となる平坦面(つまり路面)との位置関係から、側溝として機能していたものと考えられる。

①路面 路面と考えられる層位は第8層(第37図第15層)であり、平面においてもその広がりを確認することができた。路面はSD65005とSD65006に挟まれた間の平坦面であり、幅1.1～1.5mを測る。

路面を形成する堆積層は、灰白色粗粒砂～極粗粒砂の砂利敷きであり、非常に硬化している状況であった。路面中央部分はやや窪んでおり、路面の両端から中央に向かって低くなる状況であった。

②いわゆる波板状の凹凸痕跡 波板状の凹凸痕跡を構成するピット群は、路面を構成する第8層(第37図第15層)を除去して検出した。ピットは路面が延びる方向に沿って存在し、間隔を置いておらず、大半が重複しながら連なった状態で検出された。ピットは、いずれも径0.3～0.4m前後、深さ0.1～

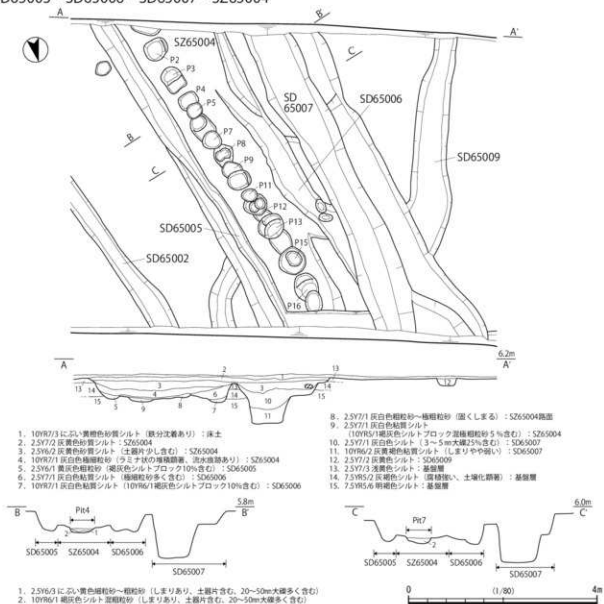
0.2 m前後で、深さについてはばらつきがある。埋土は1～2層からなり、細粒砂～粗粒砂または砂を含むシルトである。砂粒の中には人為的に打ちかかれたものの可能性もある礫が含まれており、意図的に砂粒をピット内に充填して埋めた可能性が推測される。

なお、これらのピットの番号は、通常の地区名を付属させた番号とは異なり、S Z 65004に付属するものとして「S Z 65004 - Pit 1・2…」のように、独立した番号を付けていった。ピットの番号は、1～16まで及ぶ。

埋土中から遺物が出土したピットは、Pit 2～5・7～9・11～13・15・16である。出土遺物は、土師器壺、灰釉陶器椀・壺、山茶碗、陶器椀・皿（山皿）が出土した。遺物の時期は、平安時代末前後のものと考えられる。

このうちPit 5・9・11・13からは、ウマの臼歯が破片の状態です約6点分が出土した。またPit11からは、種不明の軟骨魚綱の椎骨1点が出土した。これら動物骨類は、出土したPitがそれぞれ異なるものの、すべて細粒砂～粗粒砂の埋土中から出土した。これら動物骨については、部位等の同定分析を実施

SD65005・SD65006・SD65007・SZ65004



第40図 第6次調査5区溝、道路状遺構平面図・土層断面図

した。

③側溝 路面に付属する側溝は、S D 65005 と S D 65006 である。各溝の状況については、前述したため、ここでは路面との関係性を記す。

道路の東西側溝となる S D 65005 と S D 65006 の芯々間で計測した場合の幅は、1.5～1.6 m前後で、若干の振幅があるものの、芯々間距離は一定していると考えられる。

また、S D 65005 と S D 65006 の埋土は、路面となる第8層上面（第37図第15層）から切り込む形で形成されていることから、路面の形成後に S D 65005 と S D 65006 が掘削されたと考えられる。

④埋設過程 S Z 65004 の埋土は3層からなり、第2～4層（第37図第9～11層）が相当する。第2・3層（第37図第9・10層）は若干の砂粒を含むシルトであり、第4層（第37図第11層）は灰白色極細粒砂で顕著なラミナ状の堆積が認められた。このうち、第2・3層は S D 65007 の埋土ともなっており、東西側溝の S D 65005・65006 および近接する S D 65007 は、最終的に S Z 65004 と一連となって埋設していることがわかる。

S Z 65004 と S D 65005・65006 は、路面および側溝としての機能を失った後、第4層で埋まることになるが、第4層はラミナ状の堆積が顕著に認められており、道路廃絶直後から流水があったことがわかる。また埋土は、レンズ状に自然堆積していった状況を示していることから、道路として機能した後は、溝として機能していた可能性が高いと考えられる。

⑤埋土からの出土遺物と時期 この第2～4層（第37図第9～11層）中からは、土師器皿・鍋、ロクロ土師器椀、須恵器椀、灰釉陶器椀・壺、山茶碗、陶器壺、平瓦が出土し、遺構が埋設していった時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。一方で、路面下の各ビットから出土した遺物は、総じて平安時代末前後のものである。

これら遺物が示す時期や出土層位の前後関係を考慮すると、S Z 65004 が道路として機能していた時期は、平安時代末～鎌倉時代前期の中で捉えられると考えられる。

(6) 流路

S R 65027 5-2区中央部で検出された流路である。S K 65023 によって一部が削平されている。幅1.6～3.6 mを測り、一定しておらず、蛇行しながら南北方向に延びて、調査区外へと続いている。平面検出時および部分的に行った断面で遺物が出土しなかったことから、調査では平面での状況を把握するのみに留めた。遺物の有無や平面での検出状況から、自然流路の可能性が高いと考えられる。

埋土は浅黄色極細粒砂で、流水を伴いながら埋設していったと推測される。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

S R 65028 5-2区中央部で検出された流路である。S D 65011 によって一部が削平されている。幅3.5～5.8 mを測り、北側に向かって大きく広がっている。南北方向に延びており、調査区外へも続いている。平面検出時および部分的に行った断面で遺物が出土しなかったことから、調査では平面での状況を把握するのみに留めた。遺物の有無や平面での検出状況から、S R 65027 と同様の自然流路の可能性が高いと考えられる。

埋土は灰黄色細粒砂で、流水を伴いながら埋設していったと推測される。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

S R 65032 5-2区西部で検出された流路である。自然流路であり、遺構面を形成する基盤層の一部でもあったことから、調査区南壁付近で東岸の一部を検出したのみである。

埋土は灰白色シルトであり、検出段階での遺物の出土は確認できなかった。そのため、堆積した時期についても不明である。（渡辺）

【註】

① 第5次調査7区で検出されている S D 57051 と同一であることを確認した。

6. 6区

(1) 層序

6区は、南北に長い調査区のため、北端と南端の標高に差がみられ、北端で標高約68m、南端で標高約65mである。検出面の標高は北端・南端ともに約62mである。6-1区は北東・南西方向に延びる溝が複数重複しており、溝の埋土は表土直下に堆積している。部分的にはあるが溝の掘削により、黄褐色シルト系の基盤層が確認できる。6-2区では南端において表土直下に黄褐色シルトの基盤層が確認できるが、調査区の大部分が南北方向に延びると考えられる流路SR 66017である。

(2) 土坑

SK66011 6-2区の南端部で検出された土坑である。SD 66014の埋没後に掘り込まれている。直径0.7～1.0m、深さ約0.4mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、断面形状は底面から側面への立ち上がりは緩やかである。

埋土中からは、土師器甕、サヌカイトの剥片が出土したが、混入の可能性があるため、遺構の時期については不明である。

SK66012 6-2区南端部で検出された土坑である。SD 66014の埋没後に掘り込まれている。直径0.6～0.9m、深さ約0.5mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、断面形状は底面から側面への立ち上がりは緩やかである。

埋土中から遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

(3) 溝

SD66001 6-1区北端部で検出された溝である。SD 66002・SD 66003の埋没後に掘り込まれている。幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、北西-南東方向に延びるとみられる。

埋土は2層からなり、上層がオリブ褐色極細粒砂混シルトで、下層が黄褐色シルトである。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

SD66002 (第43図) 6-1区北端部で検出された溝である。SD 66001・SD 66003の一部が削平されている。幅約0.7m、深さ約0.27mを測り、北東-南西方向に延びる。南側は西に屈曲している。

埋土は2層からなり、上層が暗灰黄色シルト、下層が暗灰黄色シルトで、上層にはマンガンの沈着が認められる。埋土がシルトから構成されており、積極的な流水があったと認めたい。

埋土中からは土師器甕が出土し、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

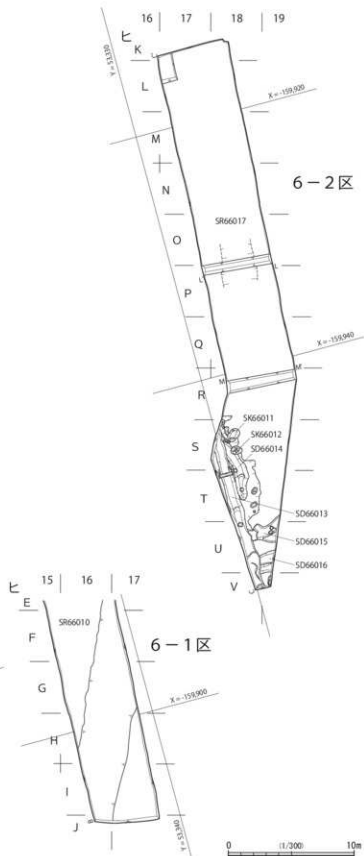
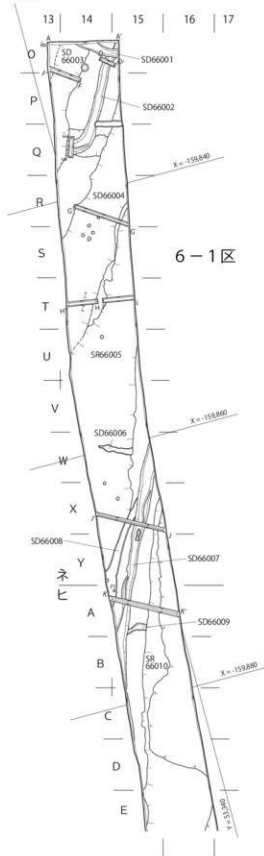
SD66003 (第43図) 6-1区北端部で検出された溝である。SD 66002の埋没後に掘り込まれており、SD 66001により一部が削平されている。幅3m以上、深さ0.6mを測り、北東-南西方向に延びると考えられ、調査区外へと続く。断面形状はU字形に近い形状だが、東西両岸に続く側面には小さなテラス状の段を有する。

第1・2層の堆積状況から、掘り直しが行われている可能性が高く、溝が機能した当初の埋土は第3～6層と考えられる。旧・新段階の溝の埋土はともに、オリブ褐色または暗灰黄色のシルトであり、細粒砂～極細粒砂がシルト中に含まれたもので、徐々に埋没した可能性が高いと考えられる。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、正確な遺構の時期は明らかでないが、SD 66002との前後関係から、少なくとも奈良時代以降の時期に形成されたものと考えられる。

SD66004 (第43図) 6-1区北端部で検出された溝である。SD 66005によって一部が削平されている。幅約3.0m、深さ約0.8mを測る。北東-南西方向に延びており、調査区外へと続いている。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、部分的な深さしか確認できていない。

埋土は複数層からなり、極細粒砂～中粒砂から構成されている。G-G'の土層断面における第4～7層は、堆積状況から掘り直しが行われている可能性が考えられる。またH-H'の土層断面では、SD 66004とは異なる溝の存在を確認した。この溝は、平面では認識できず、土層断面でのみ確認できたも



第41図 第6次調査6区平面図

ので、SD 66004の埋設後にはほぼ同じ方向に延びていると考えられる。

埋土中からは、土師器椀・甕・台付甕・把手が出土した。出土した遺物から、遺構の最終埋設時期は飛鳥時代の可能性が考えられる。

SD66006 6-1区中央部で検出された溝である。SR 66005の埋設後に掘り込まれている。幅0.4m、深さ0.05mを測る。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD66007 (第43図) 6-1区中央部で検出された溝である。SD 66008・SD 66009の埋設後に掘り込まれている。SR 66005とも重複している可能性があったが、SR 66005のラインが認識できなかったため、関係性については不明である。幅0.7m、深さ0.2mを測る。北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は2層からなり、暗灰黄色のシルトと極粒砂である。埋土中からは土師器甕、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代中期以降と考えられる。

SD66008 (第43図) 6-1区中央部で検出された溝である。SD 66005の埋設後に掘り込まれており、SD 66007の一部が削平されている。幅約0.7m、深さ約0.03mを測る。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は、暗灰黄色シルトの単層である。埋土中からは、土師器杯・甕、土錘が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代後期と考えられる。

SD66009 6-1区南部で検出された溝である。SD 66007・SR 66010によって削平を受けており、確認できた溝はごく一部である。幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、SD 66007とSR 66010と重複していることから、鎌倉時代中期以前と考えられる。

SD66013 (第43図) 6-2区南端部で検出された溝である。SD 66014・66015・66016の埋設後に掘り込まれている。幅約0.9m、深さ約0.65mを

測る。南端の調査区西壁に沿って南北方向に延びており、調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は3層からなり、いずれもシルトであり、底面直上には黄褐色のシルトブロックを含むシルトが堆積する。砂を顕著に含んでいないことから、緩やかな水流に伴って埋没していった可能性が窺える。

埋土中からは、土師器皿・鍋が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、室町時代後期と考えられる。

SD66014 6-2区南端部で検出された溝である。SK 66011・66012とSD 66013によって一部が削平されている。幅0.8m、深さ0.3mを測る。南北方向に延びており、北側は調査区外へと続き、南端は丸くなって途切れている。

埋土は黄褐色を主体とするシルトである。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明であるが、SD 66013との重複関係から、少なくとも室町時代後期以前と考えられる。

SD66015 6-2区南端部で検出された溝である。SD 66013によって一部が削平されている。幅0.8m、深さ0.3mを測る。東西方向に延びており、西側はSD 66013が掘り込まれているため、定かではないが、調査区外へと続いていると考えられる。

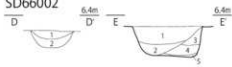
埋土中からは、遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期は不明だが、SD 66013との重複関係から、少なくとも室町時代後期以前と考えられる。

SD66016 6-2区南端部で検出された溝である。SD 66013によって一部が削平されている。幅0.8m、深さ0.3mを測る。東西方向に延びており、SD 66015と同様に西側はSD 66013が掘り込まれているため、定かではないが、調査区外へと続いていると考えられる。

1条の溝として調査を行ったが、底面の形状から本来は2条の溝が重複していた可能性がある。

埋土中からは、土師器鍋が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、室町時代後期と考えられ、少なくともSD 66013よりも古い時期と捉えることができる。

SD66002



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (5%マンガン沈着あり)
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘細砂粉～シルト
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (5%マンガン沈着あり)
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉 (5%マンガン沈着あり)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂

SR66005・SD66004



1. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉 1%マンガン: SR66005
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂: SR66005
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト: SR66005
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂粉: SD66004
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂
6. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉: SD66004
7. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂～細粒砂: SD66004
8. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉: SD66004
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉: SD66004
10. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂 (10%マンガン沈着あり): SD66004
11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉～シルト (20%マンガン沈着あり): SD66004
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉～細粒砂: SD66004
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂粉 (2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトブロック10%含む): SD66004
14. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (20%マンガン沈着あり): SD66004
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉～シルト (5%マンガン沈着あり): 基層層

SD66003



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
3. 2.5Y5/3 暗オリーブ褐色シルト
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂粉～シルト
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
8. 2.5Y5/4 黄褐色シルト

SD66004



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (5%マンガン沈着あり)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉～シルト
3. 2.5Y5/3 暗オリーブ褐色粘細砂粉～シルト
4. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (5%マンガン沈着あり)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂粉～シルト (20%マンガン沈着あり)
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉
7. 2.5Y5/3 黄褐色シルト: 基層層

SR66005



1. 10YR6/3 に近い黄褐色粘細砂粉～シルト
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト (20%マンガン沈着あり)
3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
4. 2.5Y4/3 黄褐色シルト: 基層層

SR66005・SR66010



1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト: 標品
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト: SR66010
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト (10%マンガン沈着あり)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (10%マンガン沈着あり): SR66005
6. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト (10%マンガン沈着あり): SR66005
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト: SR66005
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂粉～シルト: SR66005
9. 2.5Y5/1 黄褐色粘細砂粉～シルト (10%マンガン沈着あり): SR66005

SD66007・SD66008・SR66010



1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト: 標品
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト: SR66010
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (10%マンガン沈着あり): SD66008
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂粉～シルト (10%マンガン沈着あり): SD66007
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト: SD66007
6. 10YR4/4 褐色粘細砂粉～シルト: SR66005
7. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト (10%マンガン沈着あり): SR66005
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト: SR66005

SR66017(北)



1. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト
2. 10YR4/4 褐色粘細砂
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘細砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂～細粒砂
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘細砂
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂粉～シルト
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘細砂
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘細砂粉～シルト (10YR6/3に5%黄褐色シルトブロック3%含む)
10. 2.5Y5/1 黄灰色粘細砂粉～粘細砂
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (固くしまる)
12. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂粉～シルト
13. 2.5Y5/3 黄褐色粘細砂
14. 2.5YR/1 灰白色粘細砂粉 (10m大礫含む)
15. 10BG5/1 青灰色粘細砂粉～粘細砂 (固くしまる。部分的に礫化により褐色化)
16. 10BG5/1 青灰色粘細砂粉～粘細砂
17. 10BG5/1 青灰色シルト
18. SR6/1 暗灰黄色シルト
19. SR6/1 暗灰黄色シルト
20. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂 (固くしまる)
21. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘細砂
22. 2.5Y5/6 黄褐色シルト

SR66017(南)



1. 5Y5/2 灰オリーブ褐色シルト
2. 5Y5/2 灰オリーブ褐色～SR66/1 黄灰色シルト (下部に向かってグライ化し黄色化)
3. 5Y5/2 灰オリーブ褐色～SR66/1 黄灰色シルト (下部に向かってグライ化し黄色化)
4. 5Y5/2 灰オリーブ褐色～SR66/1 黄灰色シルト (下部に向かってグライ化し黄色化。下部は粘細砂・粘細砂粉含む)
5. SR66/1 黄灰色シルト～粘細砂
6. SR66/1 黄灰色粘細砂～中粒砂
7. SR6/1 暗灰黄色シルト

SD66013



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (2.5Y5/4黄褐色シルトブロック10%含む)

0 1:60 2m

第43図 第6次調査6区溝、流路土層断面図

(4) 流路

SR66005 (第43図) 6-1区北部～中央部にかけて検出された流路である。SD 66004・66006・66008 などによって一部が削平されている。北東-南西方向に延びて、調査区外へも続いている。部分的に流路のラインを平面で認識できなかった部分があるため、正確な幅についても不明である。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、部分的な深さしか確認できていない。

埋土は複数層からなり、黄褐色が主体となる極細粒砂～細粒砂を含むシルトである。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明であるが、SD 66004 や SD 66007 との前後関係から、少なくとも飛鳥時代から鎌倉時代の範囲内と考えられる。

SR66010 (第43図) 6-1区中央部～南部にかけて検出された流路である。SD 66009 の埋没後に掘り込まれており、調査区東側で検出した現代の攪乱によって削平されている。北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。流路の西岸が検出できたのみであり、幅については不明である。また、調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、深さについても不明である。

把握された埋土は1層で、暗灰黄色のシルトである。この暗灰黄色シルトの上面から現代の攪乱が掘り込まれており、東岸側に向かって大きく削平を受けていると思われる。

埋土中からは、陶器・磁器が出土した。掘削できた部分が限定的であるため、時期については断定できないが、出土した遺物から少なくとも江戸時代または、それ以降で最終的に埋没しているものと推測される。

SR66017 (第43図) 6-2区北部～南部に至る調査区のはほぼ全体で検出された流路である。流路の岸を明確に調査区内では認識できず、南端部にあるSD 66013 やSK 66011 との関係性も平面では認識できなかったことから、調査区の基盤層自体が流路の堆積層であり、かなり大きな流路である可能性が考えられ、調査区内の2箇所ですり削りを行って状況を確認した。また、調査における安全性の確保から、

途中までの掘削に留めたため、深さについても不明である。

掘削で把握された埋土は複数層であり、シルト、極細粒砂～細粒砂、粗粒砂、中粒砂が複雑に堆積しており、北側掘削と南側掘削では層相が大きく異なる。基本的には、上層にシルト～極細粒砂、下層にシルトおよび細粒砂～中粒砂が堆積し、下層に向かって湧水によるグライ化により青灰色を主体とする堆積層へと変化している。部分的にのみ掘削を行ったため、堆積状況を詳細に把握することができなかったが、流水の緩急変化が複雑に生じていたことが窺える。

このうち、北側掘削ではSR 66017 最終堆積層の上面を基盤として、溝とみられる落ち込みが確認できた(第1～5層)。この溝状の落ち込みは、平面では認識することができなかったため、詳細は不明であるが、幅28m前後、深さ1.2m前後であると考えられる。

埋土中からは明確な遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明であるが、掘削から山茶碗が出土していることから、鎌倉時代中期以降には機能していた可能性が推測される。(谷口)

7.7区

(1) 層序

7区では、現耕作土の下にある旧耕作土の直下で古代～近世にかけての遺構を検出した。検出面の標高は63～64mであり、7-1区・7-2区を通じて大きな標高差はみられず、ほぼ平坦である。検出面に至るまでの層序は、7区全体を通じて劇的な変化がみられなかったことから、土層断面での記録は7-2区北壁で行い、層序を把握した。

把握された層序は、1層が現耕作土、2層が現耕作土に伴う床土、3層がマンガン粒を多く含むにぶい黄褐色シルト、4層が黄褐色シルト、5層以下が灰褐色～浅黄色シルトである。このうち、3層は旧耕作土の可能性が考えられる。遺構は、4層上面で検出し、4層以下が基盤層となる。5層は、腐植が進んだ土壌化層であるが、4層と5層の層理は不明瞭で、4層から5層への変化は総じて漸次的である。また、5層下面には、生痕によると考えられる凹凸が顕著に観察される。6層は7-2区の東側でのみ確認されており、4層以下の層は西側に比べて、総じて高い位置で検出されている。これらの層相から、総じて7区の西側にかけて微高地状の旧地形が広がる可能性が考えられる。

(2) 井戸

SE67003 7-2区南端部で検出された井戸である。SD67001の埋没後に掘り込まれている。井戸の一部を検出したのみであるため、正確な平面形状は不明だが、楕円形ないし不整形な方形を呈すると思われる。規模は明らかでない。調査区南端で検出され、壁面崩落の危険性が考えられたことから、部分的な掘削にとどめたため、正確な深さは不明である。

埋土は、黄灰色～灰褐色シルトであり、調査では灰褐色シルトの範囲のみについて掘削を行ったが、井戸枠等の構造物は確認できなかった。この灰褐色シルト中からは、土器器蓋や陶器碗などが出土した。出土遺物から遺構の時期は、室町時代後半（戦国期）～江戸時代と考えられる。

(3) 土坑

SK67002 7-2区南部で検出された土坑である。調査区西壁際で土坑の一部のみを検出し、深さは0.04～0.05mを測る。埋土は、浅黄色シルトであり、近接するSD67004と埋土が近似することから、SD67004の一部ないしオーバーフローした堆積層である可能性も考えられる。

埋土中からは土器小片が出土したが、詳細な時期は明らかでない。

SK67005 (第44図) 7-1区南西隅で検出された土坑である。土坑の大部分は、7-1区と7-2区に挟まれた調査区外に広がるため、平面形状や規模は不明である。深さは0.3～0.4mを測る。

埋土は黄灰色～灰オリブ色のシルトを主体とした堆積層であり、1層は極細粒砂、1・2層にはシルトブロックが多く混じることから、埋没の最終段階には人為的に埋められた可能性が考えられる。

埋土中から土器小片が出土したが、詳細な時期は明らかでない。

(4) 溝

SD67001 (第44図) 7-2区南端部で検出された溝である。幅1.5～4.4m、深さ0.25～0.6mを測り、ほぼ南北方向にまっすぐに延びている。埋没後にSE67003が掘り込まれている。

壁面はやや急に立ち上がるが、西側はテラス面を経て立ち上がる。埋土は、褐色を主体とする粘質のシルトからなり、3層に分かれる。このうち2層は黄褐色シルトブロックを多量に含む。埋土中に流水状態を示す砂層や砂の混在が認められないことから、基本的に激しい流水がない状態であったと考えられる。また、2層に多量のシルトブロックが含まれることから、人為的に埋没した可能性も否定できない。

埋土中からは、土器器蓋、ロクロ土器器碗、須恵器杯身・杯蓋・鉢、灰釉陶器碗 山茶碗、平瓦、土鍾などが出土している。出土遺物から遺構の時期は、平安時代末期～鎌倉時代前期と考えられる。

SD67004 (第44図) 7-2区北部～中央部で検出された溝である。幅2.2～2.7m、深さ0.1～0.15mを測り、ほぼ南北方向に延びている。確認した溝の北側は若干西側へと広がるが、深さ0.04～0.05mと極めて浅いことから、溝からのオーバーフローによる堆積の一部と考えられる。

壁面は緩やかな皿状に近いが、底面には多くの凹凸が認められる。埋土は、にぶい黄色砂質シルトの

単層であり、黄灰色～黄褐色シルトブロックを多く含む。層中に砂の混在がみられないことから、積極的な流水があった溝ではなかった可能性が考えられる。

埋土中から、土師器高杯、山茶碗などが出土した。出土遺物から遺構の時期は、平安時代後期～鎌倉時代前期の中で捉えられると考えられる。(渡辺)

8. 8区

(1) 層序

8区では、現耕作土の下にある灰黄褐色シルトの直下で古代にかけての遺構を検出した。遺構検出面の標高は、6.5～6.6mであり、8区を通じて大きな標高差はみられないが、調査区の北から南に向かって若干高くなっている。

把握された層序は、1層が盛土、2層が耕作土、3層が床土、6層がマンガング粒を多く含む灰黄褐色シルト、13層がにぶい黄色砂質シルトである(第45図)。遺構は、13層上面で検出し、13層が基盤層となる。なお、1・2層については調査前に、耕作土の除去を行っているため、部分的に土層断面で反映ができていない。

検出された遺構は、基本的に13層をベースに形成されているが、SD68002については13層直上に堆積する6層をベースに掘り込まれている。6層およびSD68002から遺物が出土していないため、6層の形成時期は不明である。このような状況から、遺構は13層をベースとして形成される時期と6層をベースとして形成される時期の2時期があると考えられる。

(2) 土坑

SK68005 調査区中央部付近で検出された土坑である。一部が調査区外の東側へと延びている。幅0.8m、深さ0.17mで、平面形状は不整形な楕円形になるとみられる。

埋土には、焼土ブロックや炭片が混じるシルトである。埋土から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は明らかでない。

(3) 溝

SD68001 調査区北側で検出された溝である。東西方向に延びる溝で、大部分は調査区外へと続いている。幅1.7m、深さ0.2mを測る。3基のピットと重複しており、溝の埋土を取り外した時点で検出されていることから、SD68001はピットよりも新しい。

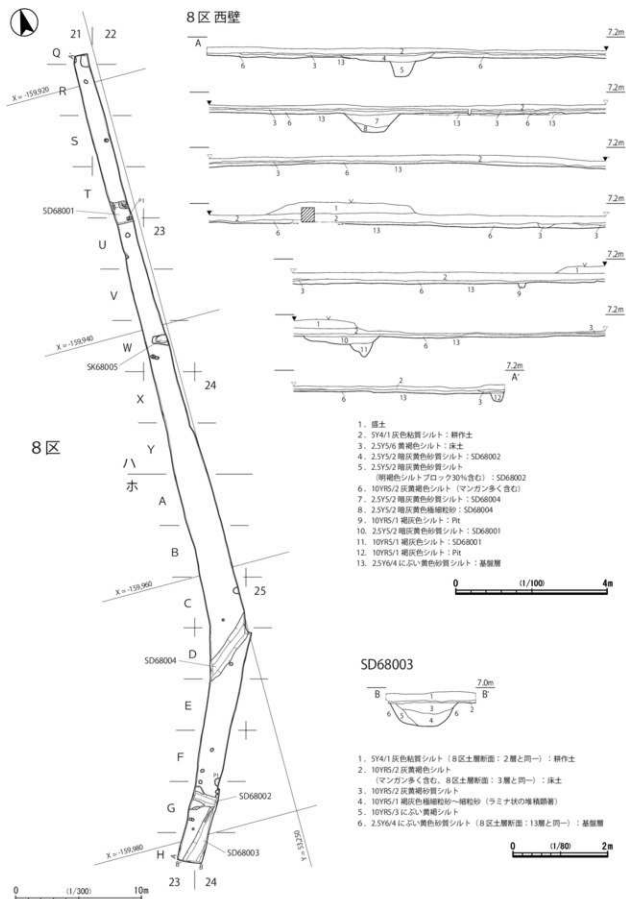
壁面は緩やかに立ち上がり、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は、暗灰黄色のシルトで砂質性が強い。埋土からは遺物が出土せず、重複関係にあるピットからも遺物が出土しなかったため、遺構の時期は明らかでない。

SD68002 調査区南側で検出された溝である。北西～南東方向に延びる溝で、調査区外へと続いている。幅1.85m、深さ0.55mである。土層断面の観察から、6層をベースに掘り込まれており、他の遺構とは形成されたベース層を違えている。

底面はほぼ平らで、壁面はやや急に立ち上がっており、溝下部の断面形状は逆台形を呈している。しかし、溝上部については緩やかな皿状の断面形状をしており、全体の断面形状では大きく2つの単位に分かれている。

埋土は、2層に分かれ、1層が暗灰黄色砂質シルト、2層がシルトブロックを含む暗灰黄色砂質シルトである。断面形状の差異と対応する形で堆積層も異なっている。

埋土から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については明らかでない。しかし、断面形状および埋土の差異から、掘り直しが行われている可能性が考えられる。



第45図 第6次調査8区平面図・土層断面図、溝土層断面図

SD68003 (第45図) 調査区南端で検出された溝である。北東-南西方向に延びる溝で、調査区外へと続いている。幅1.45m、深さ0.5mである。SD 68002と重複関係にあり、埋没後にSD 68002が掘り込まれている。

底面はほぼ平らで、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形状はU字形を呈している。埋土は、3層に分かれ、1層が暗灰色褐色砂質シルト、2層が褐色極細極細粒砂～細粒砂、3層がふい黄色シルトである。このうち2層は極細粒砂と細粒砂が互層となるラミナ状の堆積状況を示しており、ある程度の水流があったことを示していると考えられる。

埋土からは、土師器鍋等が出土し、遺構の時期は奈良時代頃と考えられる。

SD68004 調査区南側で検出された溝である。北東-南西方向に延びる溝で、調査区外へと続いている。幅1.2m、深さ0.5mである。

底面はほぼ平らで、壁面はやや急に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈している。埋土は、2層に別

れ、1層が暗灰色砂質シルト、2層が暗灰色極細粒砂である。埋没当初は、極細粒砂が運ばれる緩やかな水流があったと考えられるが、埋没最終段階の層位はシルト質が強まることから、徐々に水流が減少していった可能性が考えられる。

埋土から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については明らかでない。(渡辺)

【註】

① SD 68002の1層と2層は同一遺構の埋土と調査時において認識されていることから、本書では調査時の認識に従って報告することとした。しかし、1層が広がる範囲は西壁付近に限定的に広がっており、平面においても円形の浅い落込み状のラインが認められる。また、本文中でも触れたように1層が堆積する掘り込み面は、6層になることから、落込み状の別遺構がSD 68002と重複し、ベース層を違えて形成された可能性もあると考えられる。

9. 9区

(1) 層序

9区では、地表下0.2～0.5mで古代～中世の遺構面を検出した。遺構は基本的には耕作土直下で確認されたが、部分的に流路等からの氾濫堆積物とみられる土層が遺構上面を被覆していた(16～18層、30層など)。また、新旧の溝・流路が複雑に重複しており、個々の遺構の掘形や掘り込み面を認識することは困難であった。

確実に古代～中世の遺構形成以前の堆積と判断される基盤層は、9-1～3区を通じて基本的に黄褐色ないしにふい黄色シルト層である(38層)。9-4区では褐色シルト層となっているが、一部で漸移的にふい黄色シルト層への変化が確認されており、同一の基盤層と判断される(第47図)。この層は、標高6.4m付近で検出され、深いところでは0.8m以上の厚さで堆積している。均質な土層で、肉眼観察でさらに分層することは困難であった。

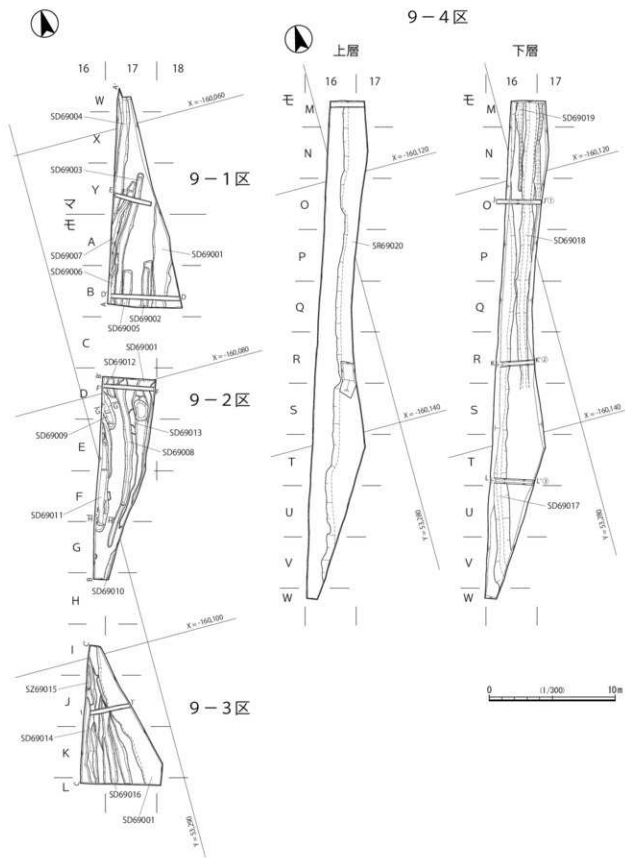
なお、基盤層中で縄文土器の包含は確認されなかった。ただし、9区の遺構埋土中から若干縄文土

器が出土しており、付近に縄文土器を包含する土層が存在する可能性がある。

(2) 溝

SD69001 (第48図) 9-1～3区で検出された溝である。幅1.0～1.5m、深さ0.1～0.7mを測り、ほぼ条里地割りに沿った方向に延びている。9-2区でわずかに西に向かって湾曲し、細くなって消えていくが、9-3区東部で位置関係や埋土の状況等から一連の溝と考えられる遺構が検出されており、削平によって途切れたものと考えられる。9-2区南端部に位置するSD 69010も一連の溝の可能性はある。

底面は平坦であるが、場所によって深さがかなり異なる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は幅広の逆台形を呈する。9-2区北側では、底面に深さ0.4mほどの土坑状の落ち込みがみられた。この土坑内は、シルト質の土で埋積されていた。下層に存在した別の遺構の可能性もあるが、土層の堆積状況等からは判断できなかった。



第46図 第6次調査9区平面図

埋土には変化があり、9-1区では極細粒砂～中粒砂によって埋積しており、鉄分も沈着することから、かなり水流があったことが窺われる。掘形が不明瞭な部分もあることから、人工的な溝ではなく自然流路の可能性もある。

埋土中からは、土師器小皿・鍋、灰釉陶器碗、山茶碗、土錘、平瓦などが出土している。また、9-2区北壁沿いの断割付近では、4層から銅銭が出土した。また、土坑状の落ち込み内からは土器類はほとんど出土しなかったが、板状木材の破片が出土している。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD69002 (第48図) 9-1区で検出された溝である。幅0.5m、深さ0.25mを測り、ほぼ条里地割りに沿った方向にまっすぐ延びている。北端は徐々に浅くなって消えていくが、本来はさらに北側へ延びていたものが、削平された可能性が高い。南側は調査区外へ延びているが、9-2区では検出されておらず、調査区外で終結するか、方向を変えていくものと思われる。

断面形はU字形を呈する。最下層の埋土には中粒砂が多く混じり、また底面には層状に鉄分が沈着していることから、水流があったものと思われる。

埋土中からは、ロクロ土師器台付碗、須臾器壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は平安時代～鎌倉時代と考えられる。

SD69003 (第48図) 9-1区で検出された溝である。SD69005埋没後に掘り込まれており、また、SD69006に一部削平される。幅0.7m、深さ0.4mを測り、ほぼ条里地割りに沿った方向に延びるが、若干東へ湾曲する。

断面形はU字形を呈しており、しっかりした溝であるが、北へ向かって浅くなって消えていく。本来はさらに北側へ延びていたものが、削平された可能性が高い。埋土には細粒砂が層状に混じり、底面に鉄分が多く沈着することから、水流があったものと推測される。

西側肩部には別の溝が重複していると思われ、一部壁面が段をなすが、明瞭な遺構として認識することができず、SD69003と一体的に掘削している。

埋土中からは、灰釉陶器皿、山茶碗、平瓦などが

出土している。出土遺物と、SD69005・69006との重複関係から、遺構の時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SD69004 (第48図) 9-1区西壁沿いで検出された溝である。幅0.7m、深さ0.4mを測り、ほぼ条里地割りに沿った方向にまっすぐ延びている。南側は調査区外へと延びており、9-2区で検出された溝につながる可能性もある。

底面はやや平坦で、断面形はU字形に近い逆台形を呈する。埋土の状況からは、水流があったかどうか不明である。

埋土中からは、土師器杯・鉢ないし鍋、灰釉陶器などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は平安時代と考えられる。

SD69005 (第48図) 9-1区南西部で検出された溝である。北端部のみが検出され、SD69003に一部削平される。幅0.7m、深さ0.4mを測り、ほぼ条里地割りに沿った方向に延びるものと思われる。

断面形はU字形に近い。上面には中粒砂が堆積している。

埋土中からは、灰釉陶器碗などが出土している。出土遺物と、SD69003との重複関係から、遺構の時期は平安時代後期～鎌倉時代中期と考えられる。

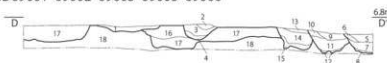
SD69006 (第48図) 9-1区南西隅で検出された溝である。SD69003の埋没後に掘り込まれている。溝が多く重複する箇所位置しているため、掘形は明瞭に検出できなかったが、それほど北へ延びずに消えていくものと思われ、幅0.4m以上、深さ0.3mを測る。ほぼ条里地割りに沿った方向に延びるものと思われる。

埋土中からは、土師器壺、灰釉陶器碗などが出土している。出土遺物と、SD69003との重複関係から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD69007 9-1区西部で検出された溝である。SD69003とほぼ同じ方向に延びる。北端は徐々に浅くなり、SD69003の北端とほぼ同じ位置で消えていく。幅0.6m、深さ0.15mを測る。

埋土中からは、土師器小皿・壺などが出土している。出土遺物と、位置関係からSD69003と近い時期に形成されたこととみられることから、遺構の時期は

SD69001・69002・69003・69005・69006



SD69004



SD69001・69002・69003・69005・69006

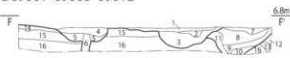
1. 2.5Y/2 暗灰黄色細砂粒～中粒砂 (鉄分沈着) : SD69001
2. 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (鉄分沈着) : SD69002
- 2.5Y/2 灰黄色シルト～中粒砂 (鉄分多量沈着) : SD69002
- 2.5Y/2 灰黄色シルト～中粒砂 (底面に層状に鉄分沈着) : SD69002
- 2.5Y/2 暗灰黄色シルト～極細砂 (鉄分低沈に沈着。しまりあり、粘質) : SD69006
- 2.5Y/3 暗灰黄色シルト～極細砂 (鉄分低沈に沈着。しまりあり、粘質) : SD69006
- 2.5Y/3 暗灰黄色シルト (粘質) : SD69006
- 2.5Y/3 黄褐色シルト (2.5Y/6にふい黄色シルト混在に30%含む。粘質) : SD69006
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (粘質) : SD69003
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (2.5Y/3黄褐色細砂粒混在に10～20%含む。鉄分沈着) : SD69003

11. 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (鉄分沈着、粘質) : SD69003
12. 2.5Y/3 黄褐色シルト (2.5Y/4にふい黄色シルト混在に30%含む。粘質) : SD69003
13. 2.5Y/3 黄褐色中粒砂 (鉄分沈着、粘質) : SD69005
14. 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (鉄分沈着、粘質) : SD69005
15. 2.5Y/3 黄褐色シルト (2.5Y/6にふい黄色シルト混在に30%含む。粘質) : SD69005
16. 10YR/6 褐色シルト～極細砂と 2.5Y/2 暗灰黄色細砂粒が層状に混じりあり (鉄分沈着) : 洗掘?
17. 10YR/6 褐色シルト～細粒砂と 2.5Y/2 暗灰黄色細砂粒が層状に混じりあり : 洗掘?
18. 2.5Y/4 にふい黄色シルト (鉄分沈着) : 基礎層

SD69004

1. 2.5Y/2 暗灰黄色シルト～細砂 (8～20m大10YR/6明黄褐色シルトブロック1～3%含む。マンガンを含む)
- 10YR/2 暗灰黄色シルト～極細砂
- 2.5Y/4 にふい黄色シルトと10YR/8 明黄褐色シルト・2.5Y/2 暗灰黄色シルト～細砂が層状に混じりあり

SD69001・69008・69012



SD69001・69008・69012

1. 2.5Y/3 黄褐色細砂粒 : SD69008
- シルトブロック1～3%含む。鉄分低沈に沈着 : SD69008
- 2.5Y/3 黄褐色細砂粒 (20～40m大2.5Y/3にふい黄色シルトブロック20%含む。20～40m大10YR/8黄褐色シルトブロック10%含む。鉄分低沈に沈着) : SD69008
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～細砂粒 : SD69001
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～細砂粒 (10～30m大10YR/8黄褐色シルトブロック20%含む) : SD69001
- 5Y/2 灰オリーブ色シルト (底面に10YR/8黄褐色シルトに变化) : 粘質?
- 2.5Y/3 黄褐色細砂粒～中粒砂 (鉄分沈着) : SD69012
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～細砂粒 (鉄分低沈に多く沈着) : SD69012
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～細砂粒 (10～20m大2.5Y/3黄褐色シルトブロック3～5%含む) : SD69012
- 2.5Y/3 黄褐色シルト (10～20m大2.5Y/3にふい黄色シルトブロック3%含む) : SD69012
- 10YR/4 褐色シルト～極細砂 (20～40m大2.5Y/3黄褐色シルト～細砂粒ブロック30%含む) : SD69012
- 2.5Y/3 黄褐色シルト : 洗掘?
- 10YR/4 褐色シルト～極細砂 (20～40m大2.5Y/3黄褐色シルト～細砂粒ブロック30%含む) : 洗掘?
- 10YR/8 黄褐色細砂粒 (2.5Y/3にふい黄色シルトを部分的に含む)
- 2.5Y/6 黄褐色シルトと2.5Y/3 にふい黄色シルト～極細砂粒が層状に混じりあり
- 10YR/8 黄褐色シルトと2.5Y/3 にふい黄色シルトが層状に混じりあり

SD69009



SD69009

1. 2.5Y/4 オリーブ褐色シルト～極細砂粒 (1～3m大マンガングレ1%含む)
- 2.5Y/4 オリーブ褐色シルト～極細砂粒 (1～5m大マンガングレ3%含む)
- 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒～シルト (10m大10YR/8黄褐色シルトブロック2%含む。1～1.5m大マンガングレ5%含む)
- 2.5Y/3 オリーブ褐色シルト (10m大10YR/4にふい黄褐色細砂粒ブロック2%含む。土着含む)
- 2.5Y/3 にふい黄色シルト (50m大2.5Y/3暗黄褐色シルトブロック30%含む。2.5Y/3 オリーブ褐色シルトブロック20%含む。粘質)
- 2.5Y/3 黄褐色シルトと2.5Y/3 明黄褐色シルトが混じりあり (粘質)
- 2.5Y/6 にふい黄色シルト (粘質)

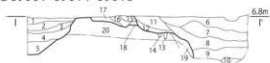
SD69011



SD69011

1. 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (鉄分沈着に沈着。土着含む)
- 2.5Y/3 黄褐色シルト～極細砂 (2.5Y/2暗灰黄色細砂粒～中粒砂粒混在に10%含む。鉄分低沈に沈着。土着含む)
- 2.5Y/3 にふい黄色シルト (20～40m大2.5Y/3黄褐色シルト～極細砂粒ブロック30～30%含む。鉄分低沈に沈着)
- 2.5Y/2 暗灰黄色シルト (鉄分大きな現状に沈着。粘質)
- 2.5Y/2 暗灰黄色シルト (10～20m大2.5Y/3にふい黄色シルトブロック5%含む。20m大2.5Y/6にふい黄色シルトブロック5%含む。鉄分沈着、粘質)
- 2.5Y/4 連黄褐色シルト (層状に層状に鉄分沈着。粘質)
- 2.5Y/4 にふい黄色シルトと10YR/4褐色シルトが層状に混じりあり (粘質)

SD69001・69014・69016



1. 2.5Y/3 黄褐色シルト極細砂～シルト (マンガングレ5%含む) : SD69014
- 2.5Y/3 黄褐色細砂粒 : SD69014
- 2.5Y/4 オリーブ褐色シルト : SD69014
- 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒～シルト : SD69014
- 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒 : SD69014
- 2.5Y/2 暗灰黄色シルト : SD69001
- 2.5Y/3 黄褐色細砂粒 : SD69001
- 2.5Y/3 黄褐色細砂粒 : SD69001
- 2.5Y/3 オリーブ褐色細砂粒～中粒砂 : SD69001
- 2.5Y/4 黄褐色シルト : SD69001

11. 2.5Y/4 黄褐色細砂粒 : 洗掘
12. 2.5Y/3 黄褐色細砂粒～シルト : 洗掘
13. 2.5Y/2 暗灰黄色シルト : 粘質?
14. 2.5Y/2 暗灰黄色シルト : 粘質?
15. 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒 (マンガングレ5%含む) : SD69016
16. 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒～シルト : SD69016
17. 2.5Y/3 黄褐色細砂粒～シルト : SD69016
18. 2.5Y/4 オリーブ褐色細砂粒
19. 2.5Y/6 明黄褐色シルトと2.5Y/4黄褐色シルトが混じりあり
20. 2.5Y/4 黄褐色シルト : 基礎層

0 (1/60) 2m

鎌倉時代前期～中期と考えられる。

S D 69008 (第 48 図) 9-2 区で検出された溝である。S D 69012 埋没後に掘り込まれている。幅 0.7 ～ 1.0 m、深さ 0.3 m を測り、S D 69001 とほぼ同じ方向に延び、緩やかな弧を描く。南へ行くほど浅くなり、調査区内で消えていく。北側は調査区外へと延びており、9-1 区で検出された S D 69003・69005 などにつながる可能性もある。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い U 字形を呈する。埋土はほぼ 1 層で、上面を薄い細粒砂層が覆っている。

埋土中からは、土師器小皿、ロクロ土師器碗、灰釉陶器碗・小瓶、山茶碗、青磁碗などが出土している。出土遺物と、S D 69012 との重複関係から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

S D 69009 (第 48 図) 9-2 区北西部で検出された溝である。南端部のみが検出され、S D 69011 埋没後に掘り込まれている。幅 0.8 m、深さ 1.1 m を測り、ほぼ南北方向に延びる。9-1 区西部で検出された S D 69004・69006 のいずれかにつながる可能性がある。

西壁付近では非常に深くっており、断面形は V 字形を呈しており、壁面はかなり急に立ち上がる。南端部に向かってやや段状に浅くなり、調査区内で終結する。

土層断面からみると、1～3 層にはマンガン粒が顕著に含まれており、3 層下面付近では壁面にやや屈曲があることから、埋没過程において再掘削が行われた可能性がある。

埋土中からは、土師器小皿・壺、ロクロ土師器皿などが出土している。出土遺物と、S D 69011 との重複関係から、遺構の時期は平安時代～鎌倉時代と考えられる。

S D 69010 9-2 区南端部で検出された溝と思われる遺構である。調査区内ではごく一部しか検出されておらず、全体の規模等は不明であるが、幅 0.4 m 以上、深さ 0.2 m 以上を測る。位置関係からみて、S D 69001 と一連の溝である可能性が高いが、壁面の立ち上がりが急であるなど若干様相が異なるため、別の遺構として扱った。

埋土中からは、土師器鍋、山茶碗などが出土して

いるが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、遺構の時期は室町時代中期～後期(戦国期)と考えられる。

S D 69011 (第 48 図) 9-2 区西壁沿いで検出された溝である。S D 69009 に一部削平されている。西側肩部は調査区外へ出ているが、幅 0.9 m 以上、深さ 0.8 m を測り、ほぼ条里地割りに沿った方向に延びる。南端は急激に浅くなり、調査区内で終結するが、西へ大きく曲がっている可能性も残される。北側は調査区外へと延びており、9-1 区で検出された S D 69004・69006 などにつながる可能性もある。

かなり深い溝で、壁面はかなり急に立ち上がっており、断面形は深い U 字形を呈する。埋土は上層(1～3 層)と下層(4～7 層)に大きく分かれる。上層はシルト～極細粒砂を主体とし土器片を含むが、下層は粘性の強いシルトを主体としており、土器片をほとんど含んでいない。再掘削の痕跡は明確ではなく、埋没過程における差異と考えられる。

埋土中からは、土師器杯、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器碗などのほか、縄文土器が出土している。出土遺物と、S D 69009 との重複関係から、遺構の時期は平安時代後期～末と考えられる。

S D 69012 (第 48 図) 9-2 区北西部で検出された溝である。南端部のみが検出され、S D 69008 に一部削平される。幅 1.0 m、深さ 0.4 m を測り、ほぼ条里地割りに沿った方向に延びるものと思われる。9-1 区西部で検出された S D 69003・69005 のいずれかにつながる可能性がある。

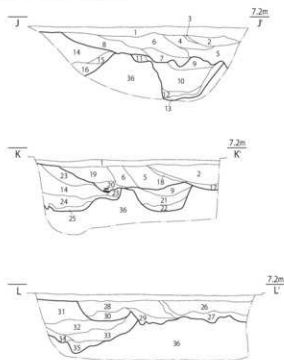
断面形は V 字形に近く、しっかりとした溝である。埋土中からは、須恵器鉢・壺などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は平安時代中期～後期と考えられる。

S D 69013 9-2 区北部で検出された溝ないしは土坑と思われる遺構である。深さ 0.1 m を測るが、S D 69001 と 69008 に大部分を削平されているため全体の規模や形状は不明である。

埋土中からは、山茶碗などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

S D 69014 (第 48 図) 9-3 区西壁沿いで検出された溝である。西側肩部が調査区外に出ているた

SD69017-69018-SR69020



1. 2.5Y4/6 オリーブ褐色極細粒砂～シルト (3～5mm大礫少量含む、1～2mm大マンガン粒1%含む、土質片含む、鉄分沈着)
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (2～6mm大礫少量含む、1～2mm大マンガン粒1%以下含む)；SR69020
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (30mm大10YR6/3に赤い黄色シルトブロック60%含む、マンガン沈着)；SR69020
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (土質含む)；SR69020
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (1～3mm大マンガン粒5%含む)；SR69020
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂～シルト (2～5mm大礫1%含む、マンガン沈着、土質含む)；SR69020
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (マンガン・鉄分沈着)；SR69020
8. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (マンガン・鉄分沈着)；SR69020
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (1～10mm大マンガン粒2%含む)；SD69018
10. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト (マンガン・鉄分沈着、土質含む)；SD69018
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (マンガン・鉄分沈着、土質含む)；SD69018
12. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (20mm大10YR5/6黄褐色シルトブロック30%含む、10mm厚鉄分下面に沈着)；SD69018
13. 2.5Y5/4 黄褐色シルト～極細粒砂 (1～2mm大マンガン粒10%含む、10mm厚鉄分下面に沈着)；SD69018
14. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂～シルト (マンガン・鉄分沈着)；SD69017
15. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂 (1～15mm大マンガン粒3%含む、鉄分沈着、土質含む)；SD69017
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (1～5mm大マンガン粒1%含む、鉄分沈着)；SD69017
17. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (2.5Y6/3に赤い黄色シルトレンズ状に下部に含む)；SR69020
18. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂 (50mm大2.5Y5/3黄褐色シルトブロック40%含む)；SR69020
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (マンガン・鉄分沈着)；SR69020
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 (2～6mm大礫1%含む、土質含む)；SR69020
21. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト～極細粒砂と2.5Y5/3 黄褐色シルトが同程度に混じりあう (マンガン沈着)；SD69018
22. 10YR5/6 黄褐色シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト20%含む、2.5Y5/3黄褐色シルト20%含む)；SD69018
23. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂～シルト (50mm大2.5Y5/3黄褐色シルトブロック50%含む、マンガン・鉄分沈着)；SD69017
24. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細粒砂 (100mm大礫少量含む、1～10mm大マンガン粒5%含む、土質含む)；SD69017
25. 2.5Y5/4 黄褐色 (10mm厚鉄分下面に沈着)；SD69017
26. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂；SR69020
27. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂 (10～40mm大10YR4/6褐色シルトブロック20%含む)；SR69020
28. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (10mm大10YR4/6褐色シルトブロック1～3%含む)；SR69020
29. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～極細粒砂 (5～10mm大2.5Y6/3に赤い黄色シルトブロック3%含む、土質含む)；SR69020
30. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～中粒砂と2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂が混在し混じりあう (土質含む)；SR69020
31. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細粒砂と2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂が混在し混じりあう (鉄分沈着に多く沈着)；SD69017
32. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～極細粒砂 (2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～極細粒砂に20%～30%含む、土質多く含む)；SD69017
33. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～中粒砂 (10YR4/6褐色シルト層状に10%含む、土質多く含む、鉄分沈着)；SD69017
34. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～中粒砂と2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細粒砂が混在し混じりあう (面に層状に鉄分沈着)；SD69017
35. 2.5Y6/4 に赤い黄色シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂～中粒砂が層状に混在し混じりあう (面に層状に鉄分沈着)；SD69017
36. 10YR4/6 褐色シルト (2.5Y6/4に赤い黄色シルトの一部変化)；基盤層

0 (1/60) 2m

第49図 第6次調査9区溝、流路土層断面図

め、規模等は不明であるが、幅0.8m以上、深さ0.6mを測る。ほぼ条里地割りに沿った方向にまっすぐ延びている。

かなり深さがあり、断面形がV字形に近い形を呈する、しっかりとした溝である。最下層（5層）は細粒砂層となっており、緩やかな流水があった可能性が窺われる。

埋土中からは、土師器杯・甕、須恵器壺、灰釉陶器碗などが出土している。最下層（5層）からは、かなり破片が揃った土師器甕が出土している。この甕から、遺構の形成時期は平安時代中期で、鎌倉時代までには埋没したと考えられる。

SD69016（第48図） 9-3区中央部で検出された溝である。SD69001に先行して掘り込まれている。幅0.6m、深さ0.2mを測り、ほぼ南北方向に延びている。

浅い溝で、西側は段状に浅くなっている。掘形が不明瞭な部分もあることから、人工的な溝ではなく自然流路の可能性もある。

埋土中からは、土師器杯、須恵器壺、山茶碗、平瓦などが出土している。出土遺物とSD69001との先後関係から、遺構の時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SD69017（第49図） 9-4区西側で、SR69020の下層から検出された溝である。西側肩部の大部分が調査区外に出ているため、規模には不明な点もあるが、幅1.8m、深さ0.8mを測る。ほぼ条里地割りに沿った方向にまっすぐ延びているが、調査区南端部付近の様相からみて、調査区外で東に屈曲する可能性もある。

壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。底面には鉄分が厚く沈着しており、最下層の埋土には細粒砂～中粒砂が層状に含まれる部分があるため（35層）、掘削当初から流水があったことが窺われる。ただし、粗い砂粒が顕著に含まれることはなく、緩やかな流水であった可能性が高い。

この溝からは土器類が大量に出土しているが、その多くは中層から下層にかけて出土している（24・32・33層）。特に南半部で集中的に出土した。最下層から出土した遺物は少ないが、調査区南端部で

は、最下層で底面に接するように完形の土師器碗が口を下にした状態で出土している。土器類が多く出土した土層の中には、極細粒砂～細粒砂が層状に含まれるものもみられ（32層）、土器類が大量に投棄された段階にも緩やかな流水があったものと推測される。

土層断面からは、再掘削や埋め戻しの痕跡は確認できず、大量の土器の投棄後に自然に埋没したものと考えられる。

埋土中からは、土師器杯・碗・皿・高杯・甕・飯、須恵器杯・蓋・長頸壺・平瓶、山茶碗、製塩土器など、多量の遺物が出土している。また、墨書土器も確認されている。ただし、木製遺物は全く出土しなかった。出土遺物からみて、遺構の時期は奈良時代後期～平安時代前期と考えられる。

SD69018（第49図） 9-4区東側で、SR69020の下層から検出された溝である。幅1.0m、深さ0.6mを測る。ほぼ条里地割りに沿った方向にまっすぐ延びているが、9-4区中央部付近で消えていく。東へ屈曲して調査区外へと延びている可能性もあるが、重機で掘削を行ったため、確認できなかった。

深さもあるしっかりした溝で、壁面はかなり急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は南から北に向かって深くなっている。底面には鉄分が厚く沈着しており、流水があったことが窺われる。ただし、粗い砂粒が顕著に含まれることはなく、緩やかな流水であった可能性が高い。

埋土中からは、土師器、須恵器壺、山茶碗などが出土した。遺物の出土量は少ない。出土遺物と、SR69020との重複関係から、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

SD69019 9-4区北部で、SR69020の下層から検出された溝である。SD69017とSD69018の間に位置し、両者とほぼ並行してほぼ条里地割りに沿った方向に延びる。調査区中央付近で浅くなって消えていく。幅0.5mを測るが、重機によって掘削したため、深さは不明である。

埋土中から遺物は出土していないが、SR69020との重複関係や、SD61017-61018との位置関係から、遺構の時期は平安時代～鎌倉時代の可能性が高い。

(3) 流路

SR69020 (第49図) 9-4区で検出された流路である。SD 69017・69018・69019の埋没後に形成されている。東側肩部は調査区外に出ているため、規模等は不明であるが、幅2.8m以上、深さ0.6m以上を測る。ほぼ条里地割りに沿ってまっすぐ伸びている。

断面形は浅い皿状を呈するが、埋土の状況から、2条の流路が重複しているものと思われる。古い流路の埋没後、西側に新しい流路が形成されている(2～5・17・18・26・27層)。古い流路は、下層のSD 69018から連続的に埋積しているようにも見受けられ、形成時期はSD 69018の埋没時期と近いものと推測される。

埋土中からは、土師器杯・椀・皿・高杯・甕、ロクロ土師器碗、黒色土師器碗、須恵器杯・壺・長頸壺・平瓶、灰釉陶器碗・壺、山茶碗、平瓦、土錘など、多量の遺物が出土している。ただし、重機で掘削を行ったため、下層に存在するSD 69017の埋土の一部も一緒に掘削してしまっており、平安時代に属する遺物は本来はSD 69017の上層に含まれていた可能性が高い。一方、SD 69017から出土した遺物は平安時代までのものに限られるため、山茶碗などは本来SR 69020に含まれていた遺物である可能性は高い。SD 69018との関係も考慮すれば、古い

流路の形成時期は鎌倉時代で、新しい流路の形成時期はそれ以降と考えられる。

(4) その他

SZ 69015 9-3区北西部で検出された、浅い落ち込みである。大部分が調査区外に出ているため、全体の規模や形状は不明であるが、長さ2.0m以上、幅0.3m以上、深さ0.15mを測る。

埋土中からは、土師器甕などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は平安時代後期～末と考えられる。(石井)

【註】

- ① 9-1区南畷付近の溝の重複関係が不明瞭であったため、東西方向の断割を設けて確認を行った。
- ② SD 69007の位置については、記録が不十分であったため、SD 69003の肩部に重複している溝状遺構などと錯誤が生じている可能性がある。
- ③ 山茶碗など鎌倉時代に下る遺物は、調査区の断割時に出土したもので、上層のSR 69020ないしSD 69018に属する遺物が混入した可能性が高い。
- ④ 調査時は「上層流路」としていたものである。本報告の作成にあたって、新たに遺構名を付した。
- ⑤ 9-3区西壁土層断面図作成時に遺構を認識しなかったため、土層の記録がなく、埋土等については不明である。

10. 10区

(1) 層序

10区は、調査区が南北3箇所に分かれており、北部である10-1区は標高約7.5m、中央部である10-2区および南部である10-3区は標高約7.4mである。表土直下で黄褐色シルトの基盤層を確認することができ、その上面は10-1区北端部では標高7.0m、10-3区では標高7.3mである。10-2区は溝を1条検出したが、調査区全面が流路とみられ、基盤となる層は確認できない。

(2) 溝

SD610001 10-1区で検出された溝である。

SD 610002およびSR 610003の埋没後に掘り込まれている。幅約3.0m、深さ約0.9mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。平面検出は、本来の掘り込み面から少し掘り下げた位置で行ったため、平面図(第50図)で示した状態は、溝の下層部分に相当する。そのため、幅約0.4mと狭い状態になっているが、上層部分つまり本来の幅は、調査区南壁の土層断面で把握した。断面形状は、2段掘りされた形状を呈している。

埋土は、上層がオリープ褐色極細粒砂～シルト、下層が暗灰黄色シルトであり、埋没するに従って流水が顕著であったことが窺える。

埋土中からは、土師器鍋、平瓦の破片が出土した

が、小片のため図化できなかった。これら出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代と考えられる。

SD610002 10-1区で検出された溝である。SD 610004 と SR 610003 が埋没した後に掘り込まれており、SD 610001 によって一部が削平されている。幅約 1.2 m、深さ約 0.9 m を測り、南北方向に延びて、調査区外へも続いている。断面形状は緩やかな皿状を呈している。

埋土は2層からなり、オリーブ褐色細粒砂～シルトで、鉄分の染み込みと沈着が顕著にみられる。シルトも含んでいるものの、細粒砂～極細粒砂が主体の流水痕跡が顕著であることから、常に水の流れがあったものと思われる。

埋土中からは土師器杯・甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

SD610004 10-1区で検出された溝である。SR 610003 が埋没した後に掘り込まれており、SD 610002 によって一部が削平されている。幅約 2.6 m、深さ約 0.7 m を測り、北西-南東方向に延びて、調査区外へも続いている。断面形状は、皿状を呈しているが、側面は底面に至るまでに、やや低い段を有している。

埋土は4層からなり、暗灰黄色を主体とする堆積層で、上層が極細粒砂～シルト、下層が細粒砂～極細粒砂であり、鉄分の染み込みと沈着が認められる。層相から、機能当初から流水があったものと思われる。

埋土中からは、縄文土器深鉢、土師器高杯・台付甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、弥生時代終末期と考えられる。

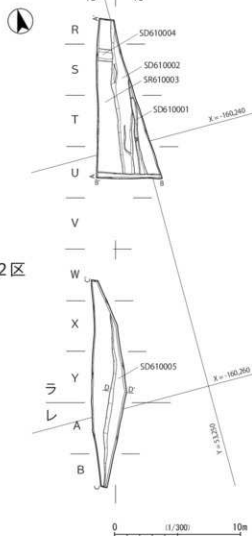
SD610005 (第51図) 10-2区で検出された溝である。深さ約 0.25 m を測り、北東-南西方向に延びる溝で、調査区外へも続いている。調査区内では、溝の西岸部分のみが検出できたため、幅は不明である。

埋土は2層からなり、暗灰褐色シルト～極細粒砂であり、層中に鉄分の染み込みが認められ、底面には鉄分沈着が認められた。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、時代は不明である。

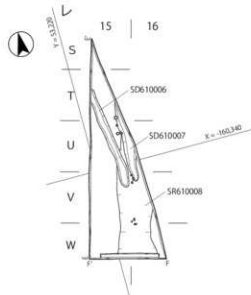
SD610006 10-3区で検出された溝である。

10-1区



10-2区

10-3区



第50図 第6次調査10区平面図

S R 610008 が埋没した後に掘り込まれている。幅約 0.75 m、深さ約 0.4 m を掘り、南北方向に延びて、北側は調査区外へと続いている。断面形状は、緩やかな皿状を呈している。

埋土は 2 層からなり、上層が灰黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトであり、他の溝と比べて流水痕跡が顕著に認められなかった。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、時代は不明である。

S D 610007 10 - 3 区で検出された溝である。S R 610008 が埋没した後に掘り込まれており、S D 610006 と近接している。幅約 0.9 m、深さ約 0.25 m を掘り、南北方向に延びて、北側は調査区外へと続いている。

埋土は灰白色極細粒砂～シルトである。

埋土中からは土師器鍋、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末頃と考えられる。

(3) 流路

S R 610003 10 - 1 区で検出された流路である。S D 610001・610002・610004 によって一部が削平されている。北岸が S D 610004 と重複して失われているが、S D 610004 掘削後に検出した側面の状況から、およそ東西方向に延びると考えられる。南岸は調査区外のため、検出することができず、平面規模は不明である。調査では、安全性の確保から平

面での検出と土層断面で層序の把握に留めた。そのため、底面までに深さについては不明である。

埋土はオリブ褐色系のシルトが複数堆積した状況を示しており、マンガング粒や鉄分の染み込みを確認した。最終段階の堆積層には極細粒砂を含んでいるが、基本的には砂をあまり含まないシルト層から構成されており、顕著な流水痕跡は認められなかった。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、S D 610004 との重複関係から、弥生時代終末期以前には埋没していたものと考えられる。

S R 610008 10 - 3 区で検出された流路である。S D 610006・610007 によって一部が削平されている。幅約 5.0 m を掘り、北東 - 南西方向に延びて調査区外へと続いている。調査では、安全性の確保から平面での検出と土層断面で層序の把握に留めたため、底面までの正確な深さは不明である。

埋土は複数層からなり、大きく上層は灰黄褐色砂質土、下層は褐色細粒シルトが堆積している。このうち流路中央の下層部分は、褐色粘質土と細砂の互層であることから、顕著な流水と安定を繰り返しながら、流路幅が徐々に狭まりながら埋没していったものと思われる。

埋土中からは、土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、奈良時代～平安時代と考えられる。(谷口・渡辺)

11. 11 区

(1) 層序

当調査区は、水田と集落の境界に位置することから、集落側ではそれに由来すると思われる造成土が厚く堆積している。11 - 1 区では、厚さ 0.5 m の造成土下に旧表土が残存しており、残存旧表土上面の標高は 6.3 m である。その下に厚さ 10 cm ほどのシルト層を経て暗褐色シルトの検出面に至る。検出面の標高は約 6.1 m である。

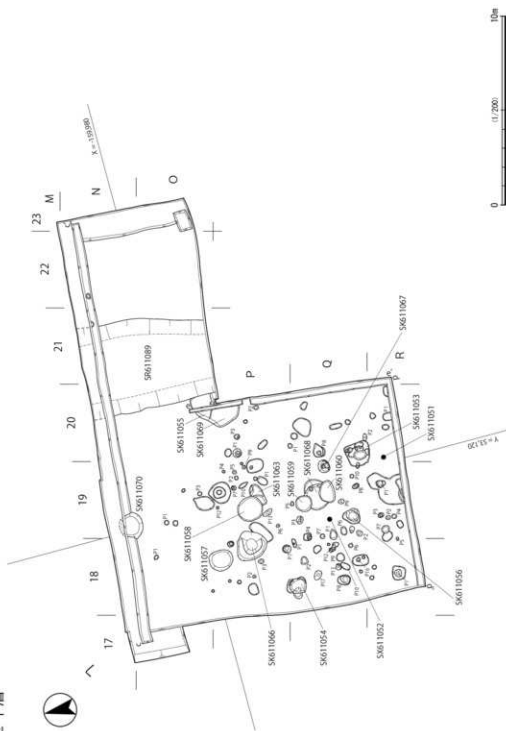
11 - 2 区及び 11 - 3 区では 2 層で遺構検出を実施している。上層検出面を含め 2 層に分層できるシルト層を縄文時代包含層とし、上層検出面から 0.4

m 前後下で下層遺構の検出を行っている。検出面の標高は 11 - 1 区より高く、11 - 2 区が 6.5 m、11 - 3 区ではさらに高くなり 6.8 m である。一方、下層検出面は両者とも 6.3 m 前後である。

(2) 掘立柱建物

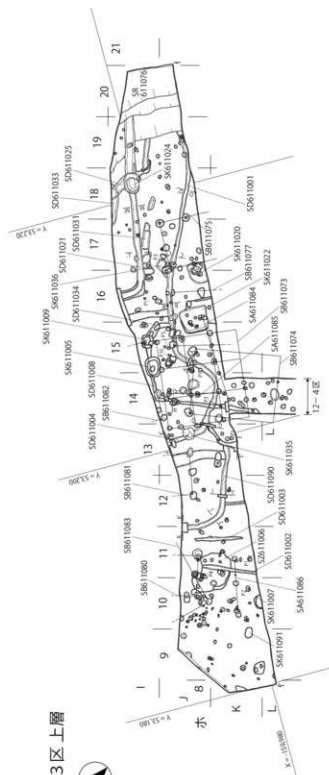
S B 611038 (第 58・59 図) 11 - 2 区上層遺構面の中央部で検出された総柱の掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、S A 611087 柱穴の埋没後に掘り込まれており、S D 611013 と範囲確認調査坑によって一部の柱穴が削平されている。東西の側柱と一部の屋内柱を確認したのみで、調査区外の北

11-2区下層

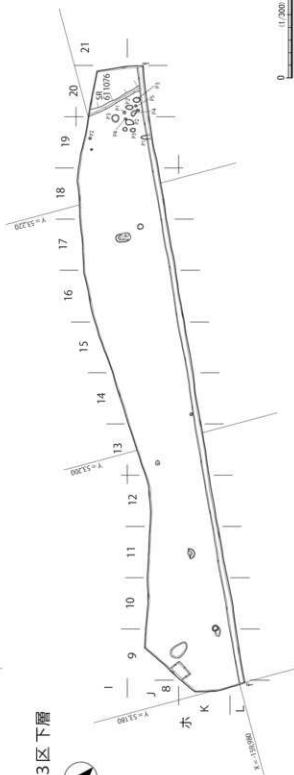


第53図 第6次調査11-2区下層遺構平面図

11-3区上層



11-3区下層



第54図 第6次調査11-3区上層・下層透視面平面図

側または南側にも柱が続く可能性がある。

断定することはできないが、検出できた柱穴と推定される柱穴の位置関係から南北棟の可能性が高く、桁行3間以上、梁行4間になると考えられる。棟方向は正方位軸ではN10°E、飯野郡条里軸ではN5°Wとなる。

桁となる東西側柱は、検出できた柱穴の柱間芯々間距離が1.8～2.3m、全ての柱穴が検出できた東西方向の屋内柱列は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長は9.1～9.2mで、各柱間の芯々距離は2.2～2.4mと若干のバラつきがある。これら柱間の距離から7～8尺が建物の設計尺度になっていたと考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、直径0.4m前後、深さ0.5m前後を測る。多くの柱穴で柱痕を平面と断面を確認することができ、柱痕幅は0.1～0.2mを測る。

柱穴№8の柱痕から出土した土師器碗(2774)については、重複するSA 611087またはSA 611088からの混入と考えられ、他の出土遺物と柱穴形状などから、平安時代後期～鎌倉時代前期と考えられる。

S B611043 (第60図) 11-2区上層遺構面の中央部のやや西側で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、SD 611028・SR 611089

の埋没後に掘り込まれている。桁行3間、梁行2間の南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN5°E、飯野郡条里軸ではN10°Wとなる。建物の南東隅柱のみ、調査区外に存在する。

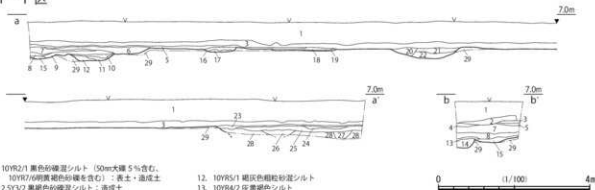
桁となる西側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長が6.6m、各柱間の芯々距離は、西側柱の両端1間と東側柱の北端1間が2.1m、東西側柱の中央1間が2.4mとなり、中央の柱間が両端の柱間よりも長い。梁となる北側柱は、北・南端の柱穴芯々で計測した全長が4.2m、各柱穴間の芯々距離は2.1mで、南側柱で検出できた1間分の柱穴間芯々距離も2.1mを測る。これら柱間の距離から、7尺が建物の設計尺度になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または崩れた隅丸方形を呈しており、一辺0.4～0.7m、深さ0.1～0.4mを測る。深さが浅い柱穴は、西側柱である。これは、後世の造成によって遺構面が大きく削平されているためであり、本来は東側柱と同様の深さであったと考えられる。

柱穴№7・9からは、土師器杯・甕が柱穴別に出土した。これら出土した遺物から奈良時代と考えられる。

S B611044 (第61図) 11-2区上層遺構面の中央部で検出された総柱の掘立柱建物である。建物

11-1区



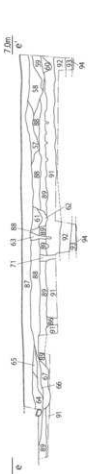
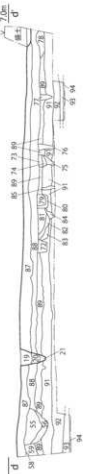
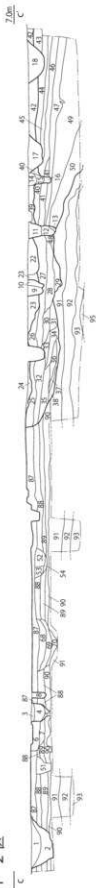
1. 10YR2/1 黒色砂礫混シルト (50m大礫5%含む、10YR7/6明黄褐色砂礫を含む) : 表土・遺灰土
2. 2.5Y2/2 黄褐色砂礫混シルト : 遺灰土
3. 10YR4/1 黄褐色細砂混シルト (2～10m大砂礫含む) : 旧表土
4. 2.5Y4/1 黄褐色砂礫混シルト (礫礫5%含む、マンガング粒含む)
5. 10YR4/4 褐色細砂混シルト (マンガング粒あり、グライ化)
6. 2.5Y4/1 黄褐色砂礫混シルト (礫礫5%含む、マンガング粒含む)
7. 2.5Y4/2 黄褐色細砂混シルト (マンガング粒5%含む)
8. 2.5Y4/1 黄褐色細砂 (粘土土器片含む)
9. 10YR5/4 黄褐色細砂 (マンガング粒少量)
10. 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト
11. 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト

12. 10YR5/1 褐色細砂混シルト
13. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
14. 10YR2/2 黒色シルト (黄褐色シルトブロック20%含む)
15. 10YR4/1 褐色細砂混シルト
16. 5Y4/1 灰色細砂混シルト (10YR2/2黒褐色シルトブロック50%含む) : SD611046
17. 10YR3/2 黒褐色シルト (基礎層のブロック含む、グライ化) : SD611046
18. 5Y4/1 灰色細砂混シルト (10YR2/2黒褐色シルトブロック含む) : SD611047
19. 10YR3/2 黒褐色シルト (グライ化) : SD611047
20. 2.5Y5/2 黄褐色細砂混シルト (礫礫5%含む) : SD611048
21. 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト (1～20m大礫40%含む) : SD611048

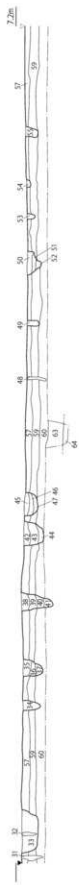
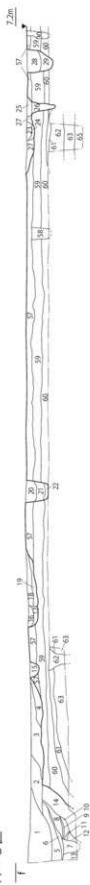
22. 10YR5/1 褐色細砂 : SD611048
23. 10YR4/4 褐色細砂混シルト (マンガング粒あり、グライ化) : SB611049
24. 2.5Y5/1 黄褐色細砂 (マンガング粒含む) : SB611049
25. 10YR6/1 細灰シルト (マンガング粒含む) : SB611049
26. 10YR2/2 灰黄褐色細砂混シルト (礫礫10%含む) : SB611049
27. 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト (礫礫10%含む) : SB611049
28. 10Y1 黄褐色粗砂 (20～50m大礫20%含む) : SB611049
29. 7.5YR3/3 暗褐色シルト : 基礎層

第55図 第6次調査11区土層断面図①

11-2 区



11-3区



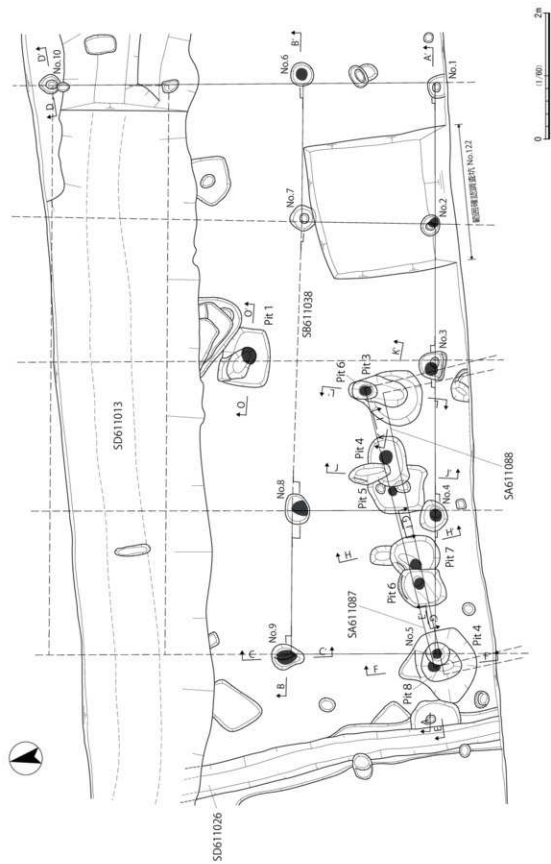
1. 107862 灰黄褐色砂質土
2. 107852 灰黄褐色砂質土
3. 107852 灰黄褐色砂質土
4. 107857 硬灰色砂質土
5. 107857 硬灰色砂質土
6. 107857 硬灰色砂質土
7. 107861 硬灰色砂質土
8. 107857 硬灰色砂質土
9. 107857 硬灰色砂質土
10. 107861 硬灰色砂質土
11. 257857 硬灰色砂質土 (原状貫入)
12. 257861 硬灰色砂質土
13. 107857 黄褐色砂質土
14. 107857 黄褐色砂質土
15. 107857 黄褐色砂質土
16. 107863 灰黄褐色砂質土
17. 107864 灰黄褐色砂質土

18. 107874 灰黄褐色砂質土
19. 107853 灰黄褐色砂質土
20. 107853 灰黄褐色砂質土
21. 107854 灰黄褐色砂質土
22. 107853 灰黄褐色砂質土
23. 107852 灰黄褐色砂質土
24. 107852 灰黄褐色砂質土
25. 107852 灰黄褐色砂質土
26. 107856 黄褐色砂質土
27. 107853 灰黄褐色砂質土
28. 107856 黄褐色砂質土
29. 107854 灰黄褐色砂質土
30. 107852 灰黄褐色砂質土
31. 107852 灰黄褐色砂質土
32. 107852 灰黄褐色砂質土
33. 107863 灰黄褐色砂質土

34. 107853 灰黄褐色砂質土
35. 107856 黄褐色砂質土
36. 107856 黄褐色砂質土
37. 107854 灰黄褐色砂質土
38. 107854 灰黄褐色砂質土
39. 107856 黄褐色砂質土
40. 107856 黄褐色砂質土
41. 107856 黄褐色砂質土
42. 107854 灰黄褐色砂質土
43. 107854 灰黄褐色砂質土
44. 107856 黄褐色砂質土
45. 107853 灰黄褐色砂質土
46. 107854 灰黄褐色砂質土
47. 107854 灰黄褐色砂質土
48. 107854 灰黄褐色砂質土

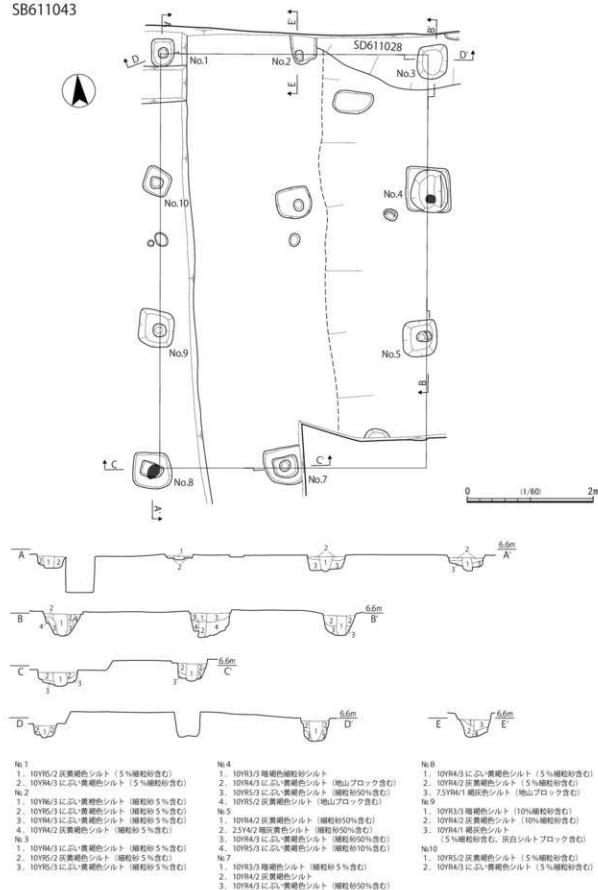
50. 107846 黄褐色砂質土
51. 107856 黄褐色砂質土
52. 107866 黄褐色砂質土
53. 107876 黄褐色砂質土
54. 107862 黄褐色砂質土
55. 107856 黄褐色砂質土
56. 107846 黄褐色砂質土
57. 107856 黄褐色砂質土
58. 107866 黄褐色砂質土
59. 107856 黄褐色砂質土
60. 107866 黄褐色砂質土
61. 107846 黄褐色砂質土 (原状貫入)
62. 107856 黄褐色砂質土 (70-80cm穴掘多数含む)
63. 107856 黄褐色砂質土
65. 107843 灰黄褐色砂質土

第57図 第6次調査11区土層断面図③



第58圖 第6次調査11区掘立柱建物、柱列平面圖①

SB611043



第60図 第6次調査11区掘立柱建物平面図・土層断面図①

を構成する柱穴は、SR 611089の埋没後に掘り込まれている。桁行2間、梁行2間の南北棟と考えられ、南側柱は全て調査区外の南側にあるものと考えられる。棟方向は正方位軸ではN1°E、飯野郡条里軸ではN14°Wとなる。

建物柱列全体が検出できたのは、北側柱のみであり、東・西端の柱穴芯々で計測した全長は4.4m、各柱穴間の芯々距離は2.1mと2.3mである。その他、検出できた東西側柱の1間分と側柱と屋内柱との柱穴間芯々距離も2.1mを測ることから、建物の設計尺度は7尺であったと考えられる。

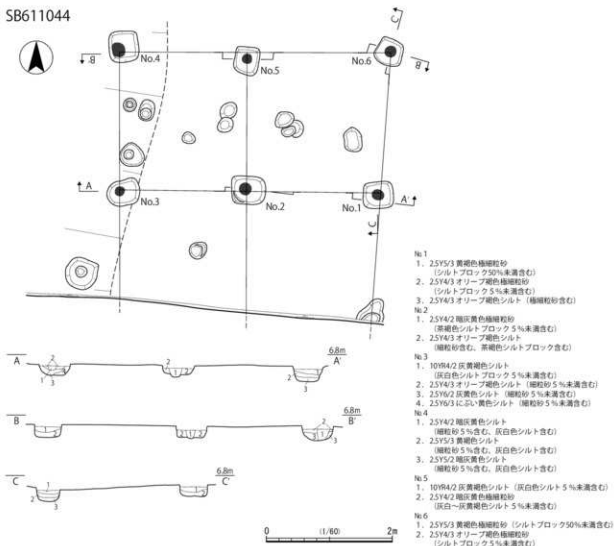
建物を構成する各柱穴は、平面形状が方形または崩れた楕円形を呈しており、一辺0.4～0.5m、深さ0.2m前後を測る。いくつかの柱穴では柱痕を確認することができ、柱痕幅は0.1～0.2mを測る。

柱穴から遺物が出土しなかったため、建物の時期は断定できない。西側に隣接するSB 611043とは棟方向が若干異なるものの柱筋を描える傾向も見ることから、SB 611043と同時期の奈良時代と考えられる。

SB611073 (第62・63図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された総柱の掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、SD 611001によって一部が削平を受けている。桁行3間、梁行3間の東西棟であり、棟方向は正方位軸ではE8°S、飯野郡条里軸ではE9°Nとなる。建物の南側柱の一部は12-4区で検出し、その他は調査区外の南側に存在する。

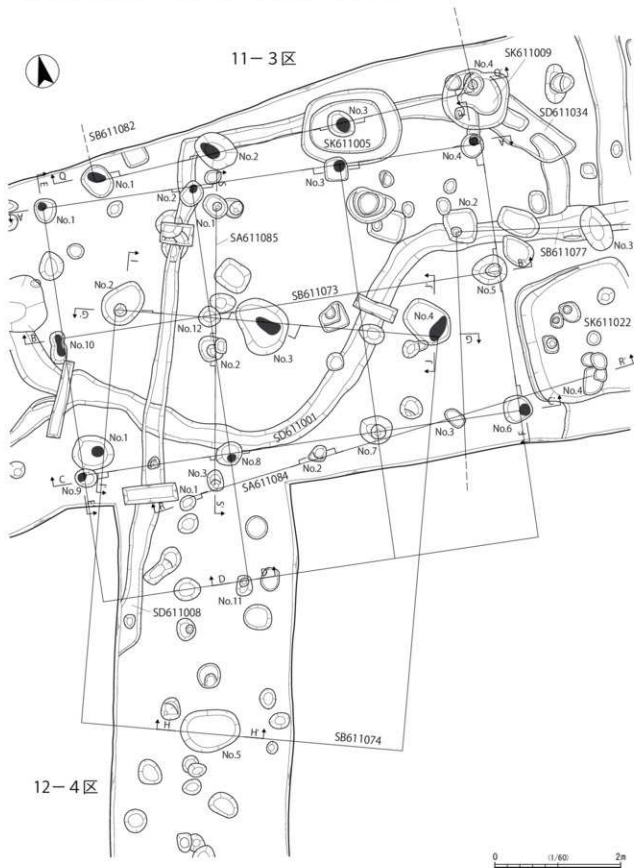
全体を検出できた柱列は、南側柱列と屋内柱のうちの1列である。側柱筋は、全長7.08m、各柱穴間の芯々距離は、2.3～2.4mを測る。屋内柱は、北

SB611044



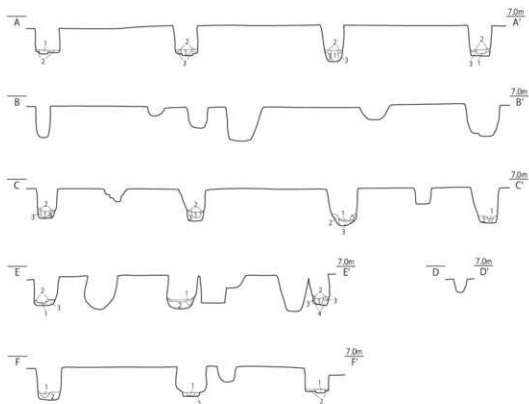
第61図 第6次調査11区掘立柱建物平面図・土層断面図②

SB611073・SB611074・SB611082・SA611084・SA611085



第62図 第6次調査11区掘立柱建物、柱列平面図②

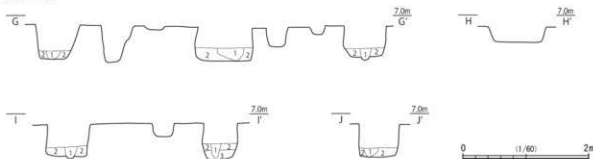
SB611073



- No.1
 1. 10YR4/6 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 2%含む)
 2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (鉄分広がる, 3mm以下マンガン粒 2%含む)
 3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 2%含む)
 No.2
 1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む, 炭片含む)
 2. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 3. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (鉄分・マンガン広がる)
 No.3
 1. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (鉄分広がる, 3mm大マンガン粒 2%含む)
 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 3. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト (鉄分広がる, 1mm大マンガン粒 1%未調査含む)
 No.4
 1. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (鉄分広がる, 5mm以下マンガン粒 1%含む)
 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 No.5
 1. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (鉄分広がる, 5mm以下マンガン粒 1%含む)
 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)

- No.6
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 1mm大マンガン粒 1%含む)
 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 No.7
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 3mm以下マンガン粒 1%含む)
 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 1mm以下マンガン粒 1%含む)
 3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 No.8
 1. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト (炭片共 1%未調査含む)
 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (2mm以下マンガン粒 1%含む)
 3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 No.9
 1. 10YR4/6 褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 2. 10YR4/4 褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 1%含む)
 3. 10YR4/6 褐色シルト
 4. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト (鉄分広がる, 3mm以下マンガン粒 1%含む)
 No.10
 1. 10YR4/6 褐色シルト (2mm以下マンガン粒 2%含む, 鉄分広がる)
 2. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト (鉄分広がる, 2mm以下マンガン粒 3%含む)

SB611074



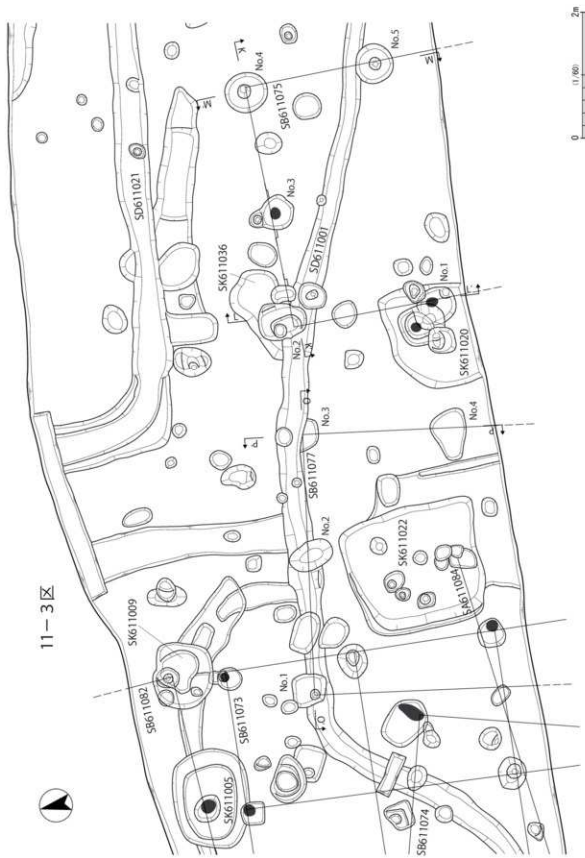
- No.1
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
 2. 2.5Y6/4 に近い黄褐色シルト (10YR4/4褐色シルトを含む)
 3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト

- No.2
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
 2. 2.5Y6/4 に近い黄褐色シルト (マンガン粒10%含む)

- No.3
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
 2. 2.5Y6/4 に近い黄褐色シルト

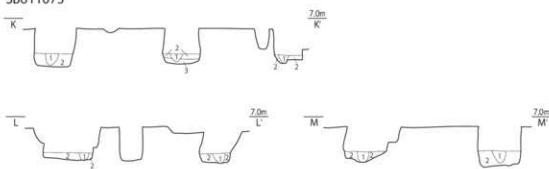
- No.4
 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
 2. 2.5Y6/4 に近い黄褐色シルト

第63図 第6次調査11区掘立柱建物土層断面図①



第64図 第6次調査11区掘立柱建物、柱列平面図③

SB611075

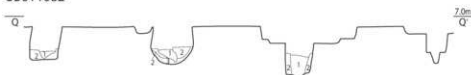


- | | | |
|--|---|---|
| <p>No.1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (2.5Y5/6黄褐色シルトブロック10%含む。マンガン粒5%含む) <p>No.2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (マンガン粒5%含む) | <p>No.3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y6/4 に近い黄色シルト 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (マンガン粒1%含む) 3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト <p>No.4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト | <p>No.5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (マンガン粒5%含む) |
|--|---|---|

SB611077



SB611082

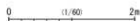


- | | | |
|---|---|---|
| <p>No.1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (マンガン粒5%含む) 2. 5Y6/3 オリーブ黄色シルト (マンガン粒10%含む) | <p>No.2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (マンガン粒5%含む) 2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (マンガン粒5%含む) 3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (マンガン粒5%含む) | <p>No.3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト 2. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (マンガン粒5%含む) |
|---|---|---|

SA611084



SA611085



第65図 第6次調査11区掘立柱建物、柱土層断面図②

南端の柱穴芯々で計測した全長が6.3m、各柱穴間の芯々距離は2.1mを測る。他の柱穴の柱間芯々距離も2.1～2.3mであり、若干のバラつきがあるものの、建物の設計尺度は7尺を基本としていると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、直径0.3～0.5m、深さ0.3～0.5mを測る。このうち浅い柱穴は、屋内柱となる柱穴が該当する。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握できた柱穴は少ないが、いくつかの柱穴で柱痕を確認した。柱痕幅は、0.1～0.2mを測る。

柱穴№5～7・9からは、黒色土器碗、灰軸陶器碗・平瓦が柱穴別に出土したが、柱穴の埋土一括として取り上げてしまったため、出土層位については不明である。これら出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期～後期と考えられる。

S B611074 (第62・63図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された掘立柱建物である。S B611073と重なる位置に存在している。桁行幅定3間、梁行2間の南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN20°E、飯野郡条里軸ではN5°Eとなる。北側梁行と西側柱の一部が検出でき、南側妻柱は12-4区で検出できた。その他の柱穴は調査区外である。

北側梁行は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長が5.1m、各柱穴間の芯々距離は2.4mと2.7mであり、西側柱で検出できた1間分の柱穴間芯々距離は2.4mを測る。若干の柱間長さのバラつきがみられるが、建物の設計尺度は7尺を基本としている可能性が高い。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が楕円形を呈しており、直径0.5～0.9m、深さ0.2mと0.5～0.6mを測る。このうち浅い柱穴は、南側柱の柱穴である。屋内柱となる柱穴が該当する。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面をすべて把握できていないが、多くの柱穴で柱痕を確認した。柱痕幅は、0.2～0.4mを測る。

柱穴№5からは、須恵器杯蓋とみられる破片が出土した。出土した遺物が限定的であるため、断定はできないが、柱穴の規模等から奈良時代～平安時代

前期と考えられる。

S B611075 (第64・65図) 11-3区上層遺構面の東部で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、S K 611020・S D 611001によって一部が削平を受けている。桁行2間以上、梁行2間の南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN4°E、飯野郡条里軸ではN11°Wとなる。東西側柱の一部と南側柱は、調査区外の南側に存在する。

梁となる北側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長が3.9m、各柱穴間の芯々距離は1.8mと2.1mを測る。検出できた東西側柱の北端から1間分の柱穴間芯々距離は2.1mであり、若干のバラつきがあるものの、建物の設計尺度は7尺を基本としていると考えられる。

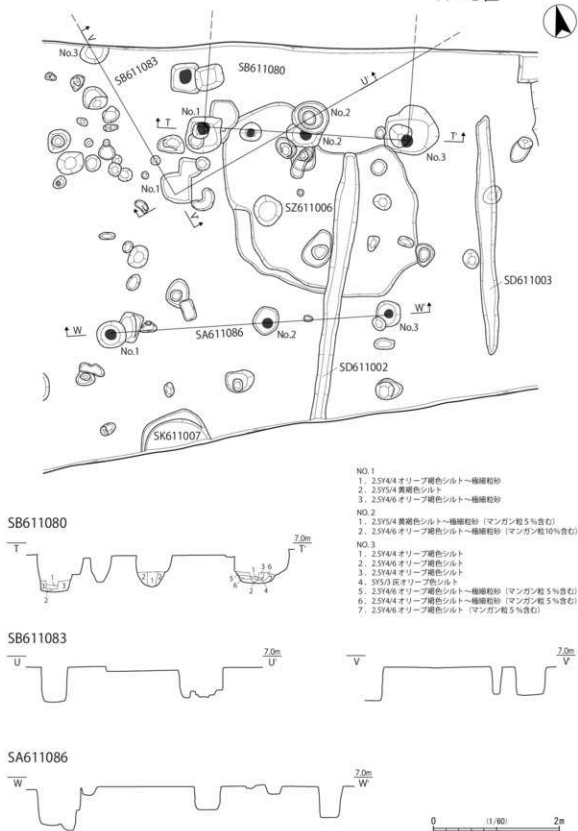
建物を構成する各柱穴は、平面形状が円形または楕円形を呈しており、直径0.6～0.7m、深さ0.5～0.6mを測る。このうち浅い柱穴は、屋内柱となる柱穴が該当する。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面をすべて把握できていないが、すべての柱穴で柱痕を確認した。柱痕幅は0.2m前後を測る。

柱穴№4からは、縄文土器深鉢の破片が出土したが、下層からの混入と考えられる。その他の出土遺物がないため、遺構の時期を断定できないが、S D 611001との重複関係から平安時代前期以前と考えられる。

S B611077 (第64・65図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、S D 611001によって一部が削平を受けている。桁行2間以上、梁行2間の南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN12°W、飯野郡条里軸ではN3°Wとなる。

梁となる北側柱は、東・西端の柱穴芯々で計測した全長が4.2m、各柱穴間の芯々距離は2.1m、検出できた東側柱の北端から1間分の柱穴間芯々距離は2.4mを測る。梁行と桁行で若干柱間の長さが異なるが、おおよそ7～8尺が建物の設計尺度になると考えられる。

建物を構成する各柱穴は、平面形状が楕円形または崩れた方形を呈しており、楕円形の柱穴は直径0.5～0.8m、方形の柱穴は一辺0.4～0.5mで、深さ0.3



第66図 第6次調査11区掘立柱建物、柱列平面図・土層断面図

～0.5mを測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握することができなかった。

柱穴No.4からは、土師器甕が出土した。出土した遺物から、遺構の時期は平安時代中期前後と考えられる。

S B611080 (第66図) 11-3区上層遺構面の西部で検出された掘立柱建物である。S Z 611006と重複するが、明確な前後関係を把握できなかったことから、関係性の詳細については明らかでない。南側梁行のみが検出でき、東西側柱と北側梁行については調査区外の北側に存在すると思われる。

桁行2間以上、梁行2間になると考えられる南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN 19° E、飯野郡条里軸ではN 4° Eとなる。全体を検出できた柱列は、南側梁行のみであり、南東・西端の柱穴芯々で計測した全長が3.2m、柱穴間の芯々距離は1.6mを測る。

建物構成する各柱穴は、平面形状が方形または楕円形を呈しており、方形の柱穴は一辺0.4～0.8m、楕円形の柱穴は直径0.5m前後で、深さは0.5mを測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面をすべて把握できていないが、柱痕を確認した。柱痕幅は0.1～0.2mを測る。

柱穴No.3からは、土師器杯が出土した。これら出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

S B611081 (第67図) 11-3区上層遺構面の

中央部のやや西側で検出された掘立柱建物である。南側柱のみが検出でき、東西側柱と北側柱については調査区外の北側に存在すると思われる。

桁行2間以上、梁行2間になると考えられる南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN 10° E、飯野郡条里軸ではN 5° Eとなる。全体を検出できた柱列は、南側梁行のみであり、南東・西端の柱穴芯々で計測した全長が3.4m、柱穴間の芯々距離は1.5mと1.9mを測る。

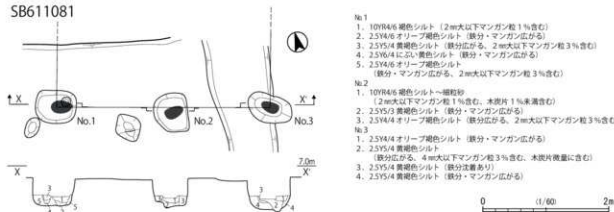
建物構成する各柱穴は、平面形状が崩れた方形を呈しており、方形の柱穴は一辺0.5～0.6m、深さは0.4m前後を測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面をすべて把握できていないが、柱痕を確認した。柱痕幅は0.2m前後を測る。

柱穴No.3からは、土師器杯が出土した。これら出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

S B611082 (第62・65図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された掘立柱建物である。桁行については不明だが、梁行3間と推定される南北棟であり、棟方向は正方位軸ではN 2° E、飯野郡条里軸ではN 13° Wとなる。南側梁行のみが検出でき、東西側柱と北側梁行については、調査区外の北側に存在すると思われる。

建物構成する各柱穴は、平面形状が楕円形を呈しており、直径0.3～0.7m、深さは0.6～0.7m前後を測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で

S B611081



第67図 第6次調査11区掘立柱建物平面図・土層断面図③

調査を行ったため、土層断面をすべて把握できていないが、南東隅柱以外の柱穴では柱痕を確認できた。柱痕幅は0.2～0.3m前後を測る。

柱穴から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期については不明だが、S D 611008・S K 611005との重複関係から、遺構の時期は平安時代前期以前と考えられる。

S B 611083 (第66図) 11-3区上層遺構面の東部で検出された掘立柱建物である。柱穴の位置関係と柱間の長さから建物と判断したが、確認した柱穴が断片的であるため、やや不確定な建物である。推定される棟方向は、正方位軸でN 16°W、飯野郡条里軸でN 30°Wとなる。桁行および梁行の間数は各1間分しか確認できていないため不明であるが、調査区外の北側に存在していると思われる。

建物を構成すると考えられる柱穴は、平面形状が方形または円形を呈しており、方形の柱穴は一辺が0.5m前後、円形の柱穴も直径0.5m前後であり、深さ0.5m前後を測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握することができなかった。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明である。

(3) 柱列

S A 611084 (第62図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された柱列である。4つの柱穴から構成される3間の柱列である。柱穴の一部はS K 611022によって削平されている。柱列は、正方位軸でE 1°N、飯野郡条里軸でE 16°Nとなる。

柱間の柱穴間芯々距離は2.1～2.25m、各柱穴の深さは0.1～0.3mを測る。平面形状は、楕円形を呈しており、直径0.3m前後を測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握することができなかった。柱穴の平面形状は、円形または楕円形を呈しており、直径は0.2～0.3mを測る。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明である。

S A 611085 (第62図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された柱列である。3つの柱穴から構

成される2間の柱列である。柱列は、正方位軸でN 15°E、飯野郡条里軸に沿っている。

柱間の柱穴間芯々距離は2.25m、柱穴の深さは0.4～0.6mを測る。平面形状は、円形または楕円形を呈しており、直径0.3～0.4mを測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握できなかったが、柱穴の掘形底面の形状から柱痕跡を確認できたことから、柱痕幅は0.2～0.3mと考えられる。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明である。

S A 611086 (第66図) 11-3区上層遺構面の西部で検出された柱列である。3つの柱穴から構成される2間の柱列である。柱列は、正方位軸でE 11°S、飯野郡条里軸でE 3°Nとなる。

柱間の柱穴間芯々距離は1.8mと2.55m、柱穴の深さは0.3～0.7mを測る。平面形状は、円形を呈しており、直径0.4m前後を測る。調査上の理由から、下層遺構面の段階で調査を行ったため、土層断面を把握できなかった。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明である。

S A 611087 (第58図) 11-2区上層遺構面の中央部で検出された柱列である。4つの柱穴から構成される3間の柱列である。調査区内では柱列として把握したが、規模や深さなどから、掘立柱建物の側柱である可能性も考えられる。S A 611088とはほぼ重複しており、土層断面の堆積状況からS A 611088柱穴の埋没後に掘り込まれている。平面上で前後関係を把握することが困難であったことから、最終的には土層断面で切り合い関係を判断した。

柱列を構成する柱穴は、へ-O 24Pit 8・へ-O 24Pit 6・へ-N 25Pit 4・へ-N 25Pit 6である。柱列は正方位軸でE 4°N、飯野郡条里軸でE 9°Nである。

柱穴間の距離は1.5m前後で、各柱穴の深さは0.5～0.7mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、直径0.4～0.7mを測る。すべての柱穴で柱痕を確認し、うちへ-N 25Pit 4では、抜き取りに伴うとみられるビット状の窪みを確認した。窪みが広がる方向から、柱は北側に向かって抜き取られた可能性

が考えられる。またへーO 24Pit 6の柱痕土層は、横に広がる堆積状況を示すことから、柱は抜き取られている可能性が高いと考えられる。各柱穴の埋土は、しまりのあるシルトであるが、いずれの埋土にも黄褐色のシルトブロックが含まれている。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明だが、柱穴の大きさや形状から、平安時代の中で捉えられるものと考えられる。

SA 611088 (第58図) 11-2区上層遺構面の中央部で検出された柱列である。4つの柱穴から構成される3間の柱列である。調査区内では柱列として把握したが、SA 611087と同様に、規模や深さなどから、掘立柱建物の隅柱である可能性も考えられる。SA 611087とはほぼ重複しており、土層断面の堆積状況から埋没後に、SA 611087柱穴によ

て掘り込まれている。平面で前後関係を把握することが困難であったことから、最終的には土層断面で切り合い関係を判断した。

柱列を構成する柱穴は、へーO 24Pit 4・へーO 24Pit 7・へーN 25Pit 5・へーN 25Pit 3である。柱列は正方位軸でE 2°N、飯野郡条里軸でE 17°Nである。

柱穴間の距離は15～18mで、各柱穴の深さは0.4～0.5mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、直径0.4～0.7mを測る。へーO 24Pit 4以外の柱穴で柱痕を確認し、うち、へーO 24Pit 7・へーN 25Pit 5・へーN 25Pit 3では、抜き取りに伴うとみられる土層の堆積状況またはピット状の窪みを確認した。このうちへーN 25Pit 3の抜き取りに伴う埋土は北側に向かって堆積する状況を示す。なお、

SK611005



1. 25Y6/1 黄灰色シルト (灰色細砂粒20%含む、マンガング粒含む)
2. 25Y6/3 に近い黄褐色シルト (灰色細砂粒20%含む、マンガング粒含む)
3. 25Y2/2 暗黄褐色粘砂 (黄褐色シルトブロック5%未満含む)

SK611009



1. 10YR3/4 暗褐色シルト (黄褐色シルトブロック10%含む、マンガング粒含む)
2. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
3. 10YR4/2 反黄褐色シルト (マンガング粒含む)

SK611024

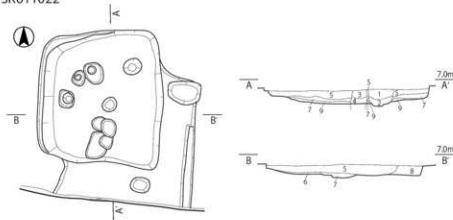


1. 25Y5/2 暗黄褐色シルト (マンガング粒20%含む)
2. 25Y5/3 黄褐色シルト
3. 25Y4/4 オリーブ褐色シルト
4. 25Y5/3 黄褐色シルト
5. 25Y4/6 オリーブ褐色シルトブロック5%含む
6. 25Y4/6 オリーブ褐色シルト

ホー-K 11 Pit 1



SK611022



1. 10YR6/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR5/2 反黄褐色シルト
3. 10YR7/4 に近い黄褐色シルト
4. 10YR7/2 に近い黄褐色シルト
5. 10YR6/4 に近い黄褐色シルト
6. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
7. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト
8. 10YR7/3 に近い黄褐色シルト
9. 10YR6/2 反黄褐色粘質シルト

第68図 第6次調査11区土坑、Pit平面図・土層断面図

へーO 24Pit 4は、へーO 24Pit 8がほぼ重なるかたちで掘り込まれているため、土層断面で確認することはできない。各柱穴の埋土は、SA 611087と同様に、すべてシルトからなるが、いずれの埋土には黄褐色を主体とするシルトブロックを含んでいる。

柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明だが、柱穴の大きさや形状から、平安時代の中で捉えられるものと考えられる。また、少なくともSA 611087よりも古い時期になる。

(4) 土坑

SK611005 (第68図) 11-3区上層遺構面の中央部北側で検出された土坑である。SB 611082柱穴No.3とSD 611008の埋没後に掘り込まれて、平面形状は楕円形を呈し、長辺1.6m、短辺1.2m、深さ0.3mを測る。断面形状はU字形を呈し、底面は平坦である。

埋土は3層からなり、第1・2層はシルトに細粒砂を含み、第3層はシルトブロックを含む極細粒砂である。いずれも砂とシルトが混ざることから、人為的に埋められたものと考えられる。

埋土中からは、陶器破片が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代と考えられる。

SK611007 (第66図) 11-3区上層遺構面の西部南側で検出された土坑である。約半分を検出できたのみで、残りは調査区外の南側に広がる。平面形状は円形または楕円形であると考えられ、確認できた幅は1.15mである。深さは0.1mと浅く、断面形状は皿状を呈している。

埋土は褐色シルトの単層で、埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SK611009 (第68図) 11-3区上層遺構面の中央部北側で検出された土坑である。SD 611008・611034の埋没後に掘り込まれており、SB 611082柱穴No.4によって一部が削平されている。平面形状は崩れた楕円形を呈しており、直径0.9～1.5m、深さ0.2mを測る。断面形状は浅い皿状を呈しており、底面から側面へ緩やかに立ち上がるが、テラス上の段を有している。

埋土は3層からなり、いずれもシルト層である。このうち第1層には黄褐色シルトブロックが含まれており、人為的に埋められた層相を示す。

埋土中からは、土師器皿・甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代と考えられる。

SK611011 11-2区上層遺構面の東部北側で検出された土坑である。一部が検出できたのみで、残りは調査区外の北側へ広がっている。平面形状は不整形と考えられ、確認できた幅は1.0m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は、灰色粗粒砂の単層である。土坑と認識したが、SK 611011の周辺にはSD 611012・611017の溢れ込みによる堆積と考えられる灰白色粗粒砂が検出面全体に広がっていたことから、基盤層上面に生じた浅い凹凸の一部である可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SK611016 11-2区上層遺構面の北東部北側で検出された土坑である。SK 611011と近接している。一部が検出できたのみで、残りは調査区外の北側へ広がっている。平面形状は不整形と考えられ、確認できた幅は0.6m、深さ0.7mを測る。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は、灰色粗粒砂の単層である。土坑と認識したが、SK 611011と同様に基盤層上面に生じた浅い凹凸の一部である可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SK611020 11-3区上層遺構面の東部南側で検出された土坑である。SB 611075柱穴No.1が埋没後に掘り込まれている。約半分が検出できたのみで、残りは調査区外の南側に広がっている。平面形状は崩れた隅丸方形または楕円形になると考えられ、確認できた幅は1.5m、深さ0.1mを測る。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。土坑として認識したが、基盤層上面に生じた浅い落ち込みの可能性も考えられる。

埋土中から土師器や製塩土器が出土し、平安時代中期頃と考えられるが、SB 611075柱穴No.1との前後関係とは矛盾する。

SK611022 (第68図) 11-3区上層遺構面の中央部南側で検出された土坑である。SA 611084 柱穴No.4によって一部が削平されている。全体を検出することができたが、南側については調査区南壁と重なり、土層断面(第57図)では土坑掘形の状況を確認することができた。平面形状は、不整形の方形を呈しており、長辺2.6m、短辺2.5m、深さ0.2mを測る。断面形状は皿状を呈する。底面からは、SK 611022によって削平されたとみられるピットが複数検出された。

埋土は2〜3層からなり、ぶい黄褐色または黄橙色を主体とするシルトである。

埋土中からは、土師器杯・甕・鍋、ロクロ土師器碗、製塩土器、灰軸陶器碗・皿、敲石が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末〜鎌倉時代前期と考えられる。

SK611024 (第68図) 11-3区上層遺構面の東部で検出された土坑である。SD 611021・611025の埋没後に掘り込まれている。平面形状は楕円形を呈し、直径1.2〜1.6m、深さ0.26mを測る。断面形状は、皿状を呈しており、テラス状の浅い段を有している。

埋土は4層からなり、暗灰黄色・黄褐色・オリーブ褐色のシルトである。このうち第4層には、オリーブ褐色のシルトブロックを含んでいることから、人為的に埋められた層相を示す。

埋土中からは、土師器杯、山茶碗と用途不明の円形土製品が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末〜鎌倉時代前期と考えられる。

SK611035 11-3区中央部で検出された土坑である。SD 611004によって土坑全体が削平を受けている。平面形状は崩れた楕円形を呈しており、直径0.4m、深さ0.5mとなり、断面形状はU字形を呈している。

埋土は、オリーブ褐色を主体とするシルトであり、底面直上には褐色シルトブロックを含むシルトが堆積する。

埋土中からは、土師器杯、製塩土器が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期前後と考えられる。

SK611036 (第64図) 11-3区上層遺構面の

東部で検出された土坑である。SD 611001によって一部が削平されている。SB 611075 柱穴No.2とも重複するが、検出時に関係性を捉えるのが困難であったため、前後関係については不明である。平面形状は、SD 611001によって土坑南側が削平を受けているため、正確な形状は不明だが、大きく崩れた楕円形を呈していると想定される。確認できた幅は0.05m、深さ0.23mを測る。

埋土はオリーブ褐色系のシルトである。

埋土中からは、縄文土器深鉢の破片が出土したが、下層からの混入の可能性が高い。遺構の時期は、SD 611001との重複関係から、少なくとも平安時代前期以前と考えられる。

SK611053 (第69図) 11-2区下層遺構面の南部で検出された土坑である。一辺1.3m前後、深さ0.35mを測る。平面形状は崩れた方形を呈しており、断面形状はU字形であるが、底面にはピット状の凹凸を有しているため、不整形である。

埋土は4層からなり、灰黄色または黒褐色のシルトである。第1〜3層には、炭化材片が含まれており、第2層には微量の赤色シルトブロックが含まれている。

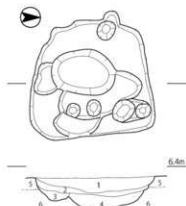
埋土中からは、縄文土器深鉢、ササカイトの剥片、オニグルミとトチノキの炭化種子、広葉樹の炭化材が出土した。なお、炭化種子は調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とオニグルミ種子の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611054 (第69図) 11-2区下層遺構面の東部で検出された土坑である。長辺1.02m、短辺0.85m、深さ0.4m前後を測る。平面形状は、方形に近い楕円形を呈しており、底面の中央やや窪んでおり、底面から側面への立ち上がりは急で直角に近く、断面形状は筒状を呈している。

埋土は3層のシルトからなり、いずれの層位にも炭化材片と細かな灰白色シルトブロックが含まれており、人為的に埋められたと推測される。特に灰白色シルトブロックは、土坑の壁面側で集中しながら、落ち込むように堆積している。

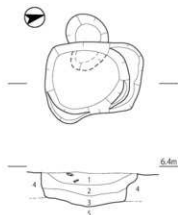
埋土中からは、縄文土器深鉢、鉢または甕、石錘、

SK611053



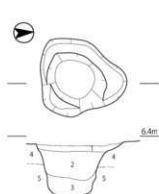
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (珪砂粉20%含む、炭片5%含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片1%含む)
3. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (炭片1%含む)
4. 10YR2/1 黒色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
5. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
6. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611054



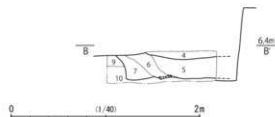
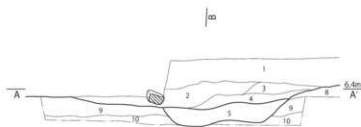
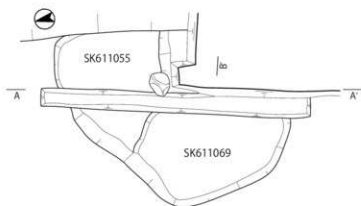
1. 10YR4/4 褐色シルト (炭片1%含む)
2. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (炭片1%含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片1%含む)
4. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
5. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611056



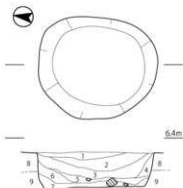
1. 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片2%含む、灰色珪砂粉2%含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片5%含む)
3. 10YR4/3 にふい黄褐色シルトブロック15%含む、10YR2/2 黒褐色シルトブロック10%含む、10YR4/3 にふい黄褐色シルトブロック50%含む、炭片2%含む
4. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
5. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611055・SK611069



第69図 第6次調査11-2区下層遺構面土坑平面図・土層断面図①

SK611057



1. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片20%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭片30%含む、黄土ブロック2%含む)
3. 10YR4/4 褐色シルト (炭片1%含む)
4. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (炭片微量に含む)
5. 7.5YR4/3 褐色シルト (5YR6/4 にふい褐色の黄土ブロック70%含む、炭片微量含む)
6. 10YR3/1 黒褐色シルト
7. 10YR2/2 黒褐色シルト (炭片1%含む)
8. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
9. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

1. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (珪砂粉10%含む、珪砂粉20%含む)
2. 10YR3/1 黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、炭片10%含む、黄土ブロック2%含む)
3. 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (珪砂粉20%含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (珪砂粉10%含む)
5. 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (10YR2/1 黒色シルトブロック5%含む、しまりあり)
6. 7.5YR4/2 灰褐色シルト (炭片2%含む)
7. 7.5YR5/2 灰褐色シルト (珪砂粉20%含む)
8. 10YR4/4 褐色シルト (珪砂粉10%、2~5mm大塊、10YR6/1 灰色シルト5%含む)
9. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (珪砂粉50%含む、しまりあり)
10. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

広葉樹の炭化材が出土した。出土した縄文土器と第3層から採取した広葉樹の炭化材片で行った放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期初頭～前半の中で捉えておきたい。

SK611055 (第69図) 11-2区下層遺構面の中央部東側で検出された土坑である。SK611069の埋没後に掘り込まれている。遺構上面を下層遺構面まで下げる際に認識できず掘り下げてしまったため、平面規模については不明であるが、深さは土層断面から約0.3m前後と考えられる。平面形状は、円形または楕円形になると考えられ、調査区外の南東側へさらに広がっている。断面形状は皿状を呈しており、底面から側面への立ち上がりは、緩やかでスロープ状に延びる。

埋土は3層からなり、砂を含むシルト層で構成されている。各層位には、いずれも細粒砂または極細粒砂を含んでいる。炭化材片を含む埋土は、第2層のみである。第2層には、焼土とみられる赤色のシルトブロックが少量含まれている。

埋土からは、縄文土器深鉢、トチノキの炭化種子、ブナの炭化材が出土した。なお、炭化種子は調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とトチノキ種子の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611056 (第69図) 11-2区下層遺構面の南側で検出された土坑である。長辺0.9m、短辺0.74m、深さ0.53mを測る。平面形状は不整形の楕円形を呈しており、断面形状は底面から側面への立ち上がりが急で直角に近く、円筒形状を呈している。また、テラス状の段を有しているため、土坑上面付近の側面は緩やかである。

埋土は3層からなり、しまりの強いシルトで構成されている。各層位には、いずれも炭化材片を含んでおり、第2・3層には、いはい黄褐色と黒褐色のシルトブロックを含んでいる。特に第3層には黒褐色シルトブロックが多く含有されており、人為的に埋められたと推測される。

埋土中からは、縄文土器深鉢、オニグルミ・トチノキ・ムクロジの炭化種子、広葉樹の炭化材が出土した。なお、炭化種子は調査後に持ち帰った埋土の

土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とムクロジ種子の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611057 (第69図) 11-2区中央部で検出された土坑である。直径1.1～1.26m、深さ0.38mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、断面形状は底面が平坦で、底面から側面への立ち上がりが急で直角に近く、円筒形状を呈している。

埋土は7層からなり、すべてシルトで構成されている。各層位には、いずれも細かな灰白色シルトブロックを含む。このうち、第1～5・7層には炭化材片、第5層に焼土とみられる赤色のシルトブロックが含まれている。炭化材は特に第2層に多く包含されており、シルトとともにレンズ状に落ち込みながら堆積している状況を確認した。

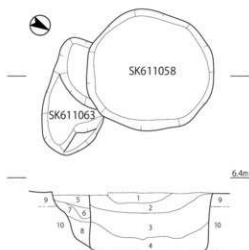
埋土中からは、縄文土器深鉢・浅鉢、磨石、クリ・オニグルミ・トチノキ・ムクロジの炭化果実・種子、コナラの炭化材が出土した。なお、炭化果実・種子は調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とオニグルミの炭化核の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611058 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。SK611063の埋没後に掘り込まれており、直径1.3～1.34m、深さ0.64mを測る。平面形状は、やや崩れた円形を呈しており、断面形状は、底面が平坦であり、底面から側面への立ち上がりはほぼ直角に近い状態の円筒形状を呈する。

埋土は4層からなり、暗褐色または黒褐色のシルトである。第1層には、明赤褐色の焼土ブロックが多く含まれており、特に土坑の中央部に密に含まれた状態であった。また、第4層中にも同様の焼土ブロックが微量に含まれている。第2・3層には細かな淡黄色のシルトブロックを含み、第2～4層には炭化材の細かな破片が含有していた。

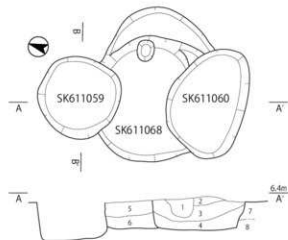
検出時、第1層の広がりから、炉の可能性を考えて上面から徐々に掘削を行ったが、比熱した硬化面などが確認できず、締まりの弱い焼土ブロックしか確認できなかったため、炉の可能性は低いと判断し

SK611058・SK611063



1. 10YR3/2 黒褐色シルト (2.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック40%含む、中心部に多く堆積、炭片1%含む)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片2%含む)
3. 7.5YR3/2 黒褐色シルト (2.5YR4/4灰黄色シルトブロック含む、炭片5%含む)
4. 10YR2/2 黒褐色シルト (2.5YR4/4灰黄色シルトブロック5%含む、2.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック1%含む、炭片2%)
5. 10YR4/4 褐色シルト
6. 10YR3/2 黒褐色シルト
7. 10YR4/2 灰黄色シルト (7.5Y2/2オリーブ黒色シルトブロック2%)
8. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (2.5Y6/2灰黄色シルトブロック、7.5Y2/2オリーブ黒色シルトブロック含む)
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細粒砂50%含む、しまりあり)
10. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611059・SK611060・SK611068

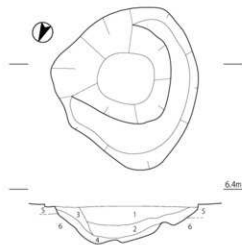


1. 7.5Y2/2 オリーブ黒色シルト (細粒砂10%含む、5%オリーブ色シルトブロック5%含む、炭片2%含む) : Pk
2. 10YR3/3 暗褐色シルト (5Y6/6オリーブ色シルトブロック含む、焼土シルトブロック50%含む、炭片2%含む) : SK611060
3. 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片1%含む) : SK611060
4. 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片1%含む) : SK611060
5. 10YR3/4 暗褐色シルト (炭片2%含む) : SK611068
6. 10YR3/3 暗褐色シルト (10YR3/3 黒褐色シルトブロック5%含む、炭片2%含む) : SK611068
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細粒砂50%含む、しまりあり)
8. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)



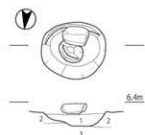
1. 7.5YR3/2 黒褐色シルト (2.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック30%含む、中心部に多く堆積、炭片10%含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (2.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック5%未満含む、炭片10%含む、10YR5/2灰黄褐色シルトブロック3%含む)
3. 10YR4/2 灰黄色シルト (炭片3%含む)
4. 10YR3/1 暗褐色シルト (2.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック2%含む、10YR5/2灰黄褐色シルトブロック3%含む、炭片2%含む)
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細粒砂50%含む、しまりあり)
6. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611066



1. 7.5YR4/3 褐色シルト
2. 7.5YR4/2 灰褐色シルト (7.5YR2/2 黒褐色シルトブロック2%含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト
4. 10YR3/3 暗褐色シルト
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細粒砂50%含む、しまりあり)
6. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

SK611067



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (極細粒砂50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)



第70図 第6次調査11-2区下層遺構面土坑平面図・土層断面図(2)

た。

埋土中からは、縄文土器深鉢・浅鉢、石錘、オニグルミ・トチノキの炭化果実・種子、ムクノキの炭化材が出土した。なお、炭化果実・種子は調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とオニグルミの炭化核の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611059 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。SK611068の埋没後に掘り込まれており、直径0.9m、深さ0.42mを測る。平面形状は円形を呈し、断面形状は底面が平坦で、底面から側面への立ち上がりはほぼ直角に近い状態の円筒形状を呈している。

埋土は4層からなり、黒褐色または灰黄褐色のシルトである。第1層には明赤褐色の焼土ブロックが多く含まれており、SK611058と同様に土坑中央部に集中して認められた。そのため、炉の可能性も考えつつ、上面から徐々に掘削を行っていたが、比熱による硬化面などは確認できなかった。第2・3層には、細かな灰白色と黒色のシルトブロックが多く含まれており、焼土ブロックの一部も混じる状況であった。第4層は第2・3層よりも含まれるシルトブロックの量が少ない。各層位には、いずれも炭化材の破片が含まれている。

埋土中からは、縄文土器深鉢・壺、石錘、オニグルミとトチノキの炭化果実・種子、広葉樹の炭化材が出土した。なお、炭化果実・種子は、調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器と第2層と第4層から出土したオニグルミの炭化核の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611060 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。SK611068の埋没後に掘り込まれており、Pit 1基によって一部が削平を受けている。直径0.8~1.14m、深さ0.36mを測る。

平面形状は楕円形を呈しており、断面形状は底面が平坦で、底面から側面への立ち上がりは、直角に近い状態の筒形状を呈している。Pitは、平面で検

出することができず、土坑の土層断面で認識した。

埋土は3層からなり、暗褐色または黒褐色シルトである。このうち、第2層にはSK611058・611069と同様に焼土ブロックを多く含み、特に土坑の中央部に集中して堆積していた。第3・4層には、灰白色オリブ褐色と黒色のシルトブロックを含む。各層位には、いずれも炭化材片を含んでいる。

埋土中からは、縄文土器深鉢、ササカイトの剥片、オニグルミとトチノキの炭化果実・種子、コナラ・エノキの炭化材が出土した。なお、炭化果実・種子、炭化材は、調査後に持ち帰った埋土の土壌を洗浄して見つかったものである。出土した縄文土器とオニグルミの炭化核の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611063 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。SK611058によって一部が削平されている。平面形状は楕円形を呈すると考えられ、土坑の最深部をSK611058に切り込まれているため、規模は不明であるが、土層断面からSK611058の深さ以上にはならないと考えられる。底面は、一定ではなく土坑の東側にはテラス状の段を有しており、西側が最も深くなる。

確認できた埋土は4層で、いずれもシルトであり、灰黄色シルトブロックを含む。このうち第7・8層にはオリブ黒色のシルトブロックが含まれる。

埋土中からは、縄文土器深鉢、ブナの炭化材が出土した。出土した縄文土器とブナの炭化材の放射性炭素年代測定の結果から、遺構の埋没時期は縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611066 (第70図) 11-2区下層遺構面の東部で検出された土坑である。直径1.56~1.72m、深さ0.4mを測る。平面形状は崩れた楕円形を呈しており、断面形状は底面が丸くて若干の凹凸を有し、底面から側面への立ち上がりは緩やかである。また、テラス状の段を有しており、他の縄文時代土坑の断面とは形状が異なる。

埋土は4層からなり、いずれもしまりが強いシルトである。第1・2層中には約0.1m大の黒褐色シルトブロックが含まれている。埋土に含まれていた炭化材は微量であった。総じて他の縄文時代土坑と

は層相を異にする。

埋土中からは、縄文土器深鉢、炭化材の破片が出土した。なお、炭化材の破片の大きさが小さかったため、樹種同定は実施していない。出土した縄文土器と炭化材の放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期と考えられる。

SK611067 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。直径0.6～0.68m、深さ0.16mを測る。平面形状は円形を呈しており、断面形状は浅い皿状を呈しているが、底面の最深部は一段深くなる。検出面が、本来の遺構の基盤層を若干深く削り込んでいるため、深さはより深かった可能性がある。

埋土は1層からなり、ぶい黄褐色シルトであり、炭化材は含まれていなかった。

埋土中から出土した遺物は、縄文土器深鉢、台石が出土した。このうちの台石は、検出面で表面が剥き出しになった状態で出土している。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

SK611068 (第70図) 11-2区下層遺構面の中央部で検出された土坑である。SK611059・611060によって土坑の南北側が削平されている。平面形状は円形または楕円形になるとみられ、直径1.5～1.7mに取まる大きさと考えられる。深さは0.3mを測る。断面形状は底面が平坦で、底面から側面への立ち上がりは急であり、テラス状の段を有している。

埋土は2層からなり、しまりの強い暗褐色シルトである。埋土中には、いずれも炭化材の破片を微量に含有するとともに、大小の黒褐色シルトブロックを含む。

埋土中からは、縄文土器深鉢、石錘、クリ・オニグルミ・トチノキの炭化果実・種子、広葉樹の炭化材の破片が出土した。出土した縄文土器とトチノキの炭化種子の放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611069 (第69図) 11-2区下層遺構面の東部で検出された土坑である。SK611055によって大きく削平されており、ほぼ全体が重なるように重複している。SK611055を掘削している中で、平面および土層断面で把握した。本来の規模は不明だが、把握できた規模は、幅1.2m、深さ0.2mで

ある。平面形状は楕円形になると考えられる。

把握できた埋土は3層で、ぶい黄褐色および灰褐色のシルトである。第5層は砂質が強いシルトに黒色シルトブロックを含み、第7層には極細粒砂が含まれている。また、第6層には炭化材が微量に含まれる。

埋土中からは、縄文土器深鉢、石錘、サスカイトの破片、オニグルミの炭化果実、広葉樹の炭化材が出土した。縄文土器の中には、短線状の刺突が施された特異な文様を持つ深鉢の破片がみられる。出土した縄文土器とオニグルミの炭化果実の放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611070 11-2区下層遺構面の東部で検出された土坑である。上層遺構面調査時に行った下層確認の掘削によって、一部を掘削してしまっている。把握された直径は1.4m、深さ0.5mを測る。平面形状は円形であり、断面形状は崩れたU字形を呈している。

埋土は3層からなり、灰黄褐色および暗褐色シルトである。このうち、第69層には極細粒砂、第70層には黒色のシルトブロックを含んでいる。また、炭化材の破片を微量に含む。

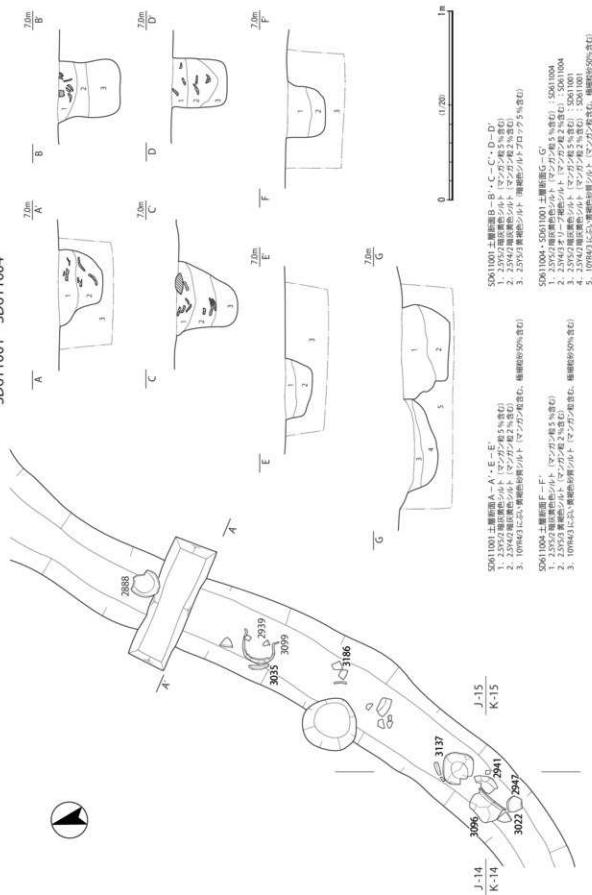
埋土中からは、縄文土器深鉢、広葉樹の炭化材が出土した。出土した縄文土器と広葉樹の炭化材の放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期前半と捉えておきたい。

SK611091 11-3区上層遺構面の西部で検出された土坑である。直径0.6～0.85m、深さ0.36mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

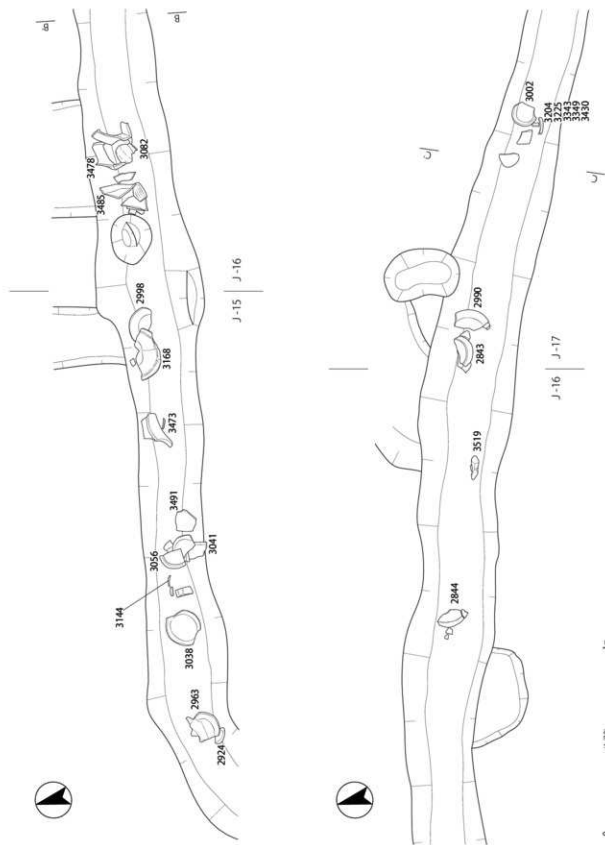
埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

(5) 溝

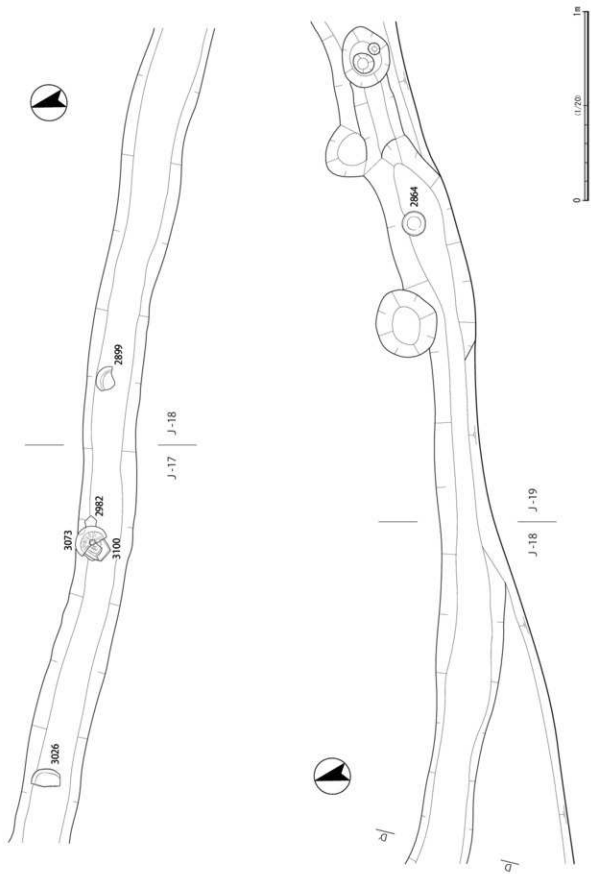
SD611001 (第71～73図) 11-3区上層遺構面の中央部～東部にかけて検出された溝である。SB611073 柱穴No.8、SB611075 柱穴No.1～3、SB611057 柱穴No.2・5、SD611090 が埋没後に掘り込まれており、SD611004・611008によって一部が削平されている。溝は基本的に東西方向に延びるが、調査区中央部で大きく南北に蛇行し、南へと



第71図 第6次調査11区溝平面図・遺物出土状況図①・土層断面図



第72图 第6次調査11区票平面図・遺物出土状況図②



第73图 第6次调查II区浑平面图·清神出土坎梁图③

屈曲して調査区外へと続いている。幅0.3～0.5m、深さ0.25～0.35mを測る。断面形状は場所によりやや異なるが、底面は平坦で側面への立ち上がりは直角に近く、箱形状を呈している。

検出面において土師器をはじめとする大量の土器類が、埋土中に含まれている状況が把握された。埋土は2～3層からなり、いずれも暗灰黄色シルトである。各層中には、マンガンの粒子が含まれている。検出時に把握されたように、土師器をはじめとする土器が埋土中に多く含まれている状況であった。土器の入り方は密であり、ところにより埋土よりも土器の方が多い場所もみられた。また、埋土の上層には比較的小さな破片が多く、下層には大きな破片や完形のものが含まれている状況であった。完形の遺物もあるものの、意図的に掘えられた状況を示さないことから、すべて溝へ廃棄された土器類と考えられる。

このような状況で出土した遺物は、縄文土器深鉢、土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・甕・鍋・瓶・鉢・壺、黒色土器椀、横瓶状土製品、移動式カマド、製塩土器、須恵器杯蓋・杯身・台付椀・壺・甕、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、土錘、輪羽口（土師器高杯の脚部転用）、敲石、鉄製の釘が出土した。このうち、土師器と製塩土器の割合が高く、特に土師器の杯・椀・皿・鉢類と志摩式の製塩土器が多い。

出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SD611002 11-3区上層遺構面の東部で検出された溝である。S Z 611006が埋没後に掘り込まれている。幅0.2～0.35m、深さ0.1mを測り、北端は丸く集束し、北東-南西方向に延びて、南側は調査区外へと続いている。検出面は削平を受けていることから、本来の溝の深さはもっと深かった可能性が考えられる。断面形状は、浅い皿状を呈している。

埋土は灰褐色シルトの単層である。埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD611003 11-3区上層遺構面の東部で検出された溝である。長さ3.8m前後、幅0.2～0.3m、深さ0.1m前後を測り、両端は調査区内で収束する。検出面が削平を受けているため、SD 611002と同

様に、本来の溝の深さはもっと深かった可能性が考えられる。断面形状は、浅い皿状を呈している。

埋土は灰褐色シルトの単層である。埋土中からは、土師器瓶が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、奈良～平安時代と考えられる。

SD611004 11-3区上層遺構面の中央部で検出された溝である。土層断面からSK 611035・SD 611001の埋没後に掘り込まれている状況が把握されたが、SD 611001と交差した以南で溝の続きを検出できていないため、SD 611001と重なりながら合流または同一の溝である可能性もある。南北方向に延びており、北側は調査区外へと続く。

埋土は2層からなり、いずれもシルトであるが、ところにより極細粒砂が含まれたシルトが堆積している。埋土中に含まれている遺物は、SD 611001と比べて密ではない。

埋土中からは、土師器杯・椀・皿・甕、製塩土器、須恵器杯、灰釉陶器壺が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SD611008 (第74図) 11-3区上層遺構面の中央部で検出された溝である。S B 611082柱穴No 2とSD 611001の埋没後に掘り込まれており、SK 611005によって一部が削平されている。12-4区北部から北東-南西方向に延び、調査区北側で東へと屈曲する。溝の南側は調査区外へと続いている。幅0.25m、深さ0.15mを測る。

埋土は2層からなり、第1層がオリーブ褐色シルト、第2層が暗灰黄色シルトである。埋土中に含まれている遺物は、SD 611001と比べて密ではない。

埋土中からは、土師器杯・甕、須恵器蓋が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SD611010 11-2区上層遺構面の北東部で検出された溝である。SD 611014と近接している。溝の南端は不整形に集束しており、北側は調査区外へと続いている。幅は0.3m、深さは0.05mを測り、北東-南西方向に延びている。断面形状は浅い皿状を呈している。

SK 611011・611016などと同様に、SD 611012・611017などの溝からの溢れ込みによる堆積と考えられる灰白色系の粗粒砂が、検出面全体に広がって

いたことから、基盤層上面に生じた浅い凹凸の一部である可能性も考えられる。

埋土は灰褐色粗粒砂の単層である。埋土中から遺物が出土しなかったことから、遺構の時期については不明である。

SD611012 11-2区上層遺構面の北東部北側で検出された溝である。幅0.25～1.3m、深さ0.1m前後を測り、ほぼ東西方向に延びて、調査区外へと続いている。SD611017と重複するが、平面で関係性を認識することができなかったため、前後関係については不明である。

埋土は灰白色粗粒砂の単層で、溢れ込みによる堆積と考えられる砂が周囲の検出面を覆っている状況であった。溝の深さが浅く、埋土が粗粒砂である状況から、ほぼ1回の流水によって埋没したと考えられる。また、重複するSD611017も同様な状態を示していることから、調査では別遺構として認識したものの、本来は同一の溝の可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD611013 (第75図) 11-2区上層遺構面の

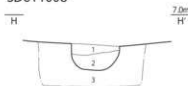
東部～中央部にかけて検出された溝である。SB611038・SD611026の埋没後に掘り込まれている。幅2.0m、深さ0.8～0.9mを測り、東部では北東～南西方向に延びるが、途中西へと屈曲して北西～南東方向に延び、さらに中央部では北に向かって屈曲して、調査区外へと続いている。

平面上でみると、コの字形のプランとなっており、断面形状はU字形を呈しているが、一部にはテラス状の段を有している。底面は丸みを帯びており、側面への立ち上がりは急である。

埋土は5～6層からなり、灰黄色や灰色を主体とするシルトから構成されている。このうち、あ-あ'断面の第5層、い-い'断面の第4層は、グライ化した青灰色粘土質のシルト、上層にあたる西断面の第1・2層は砂質シルトであることから、流水や滲水の状況を経ながら埋没していったと思われる。

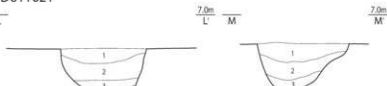
埋土中からは、弥生土器壺、土師器杯・高杯・甕・台付甕・鍋、裂塩土器、須恵器甕・壺、陶器壺・甕が出土した。出土した遺物は、古墳・平安時代以前のもの、鎌倉・室町時代のものに大きく分かれるが、前者は重複する溝などからの混入と考えられる。

SD611008



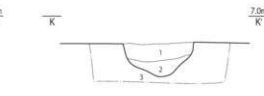
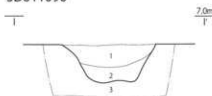
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (マンガング粒2%含む)
3. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト (マンガング粒含む、極細粒砂50%含む)

SD611021



1. 2.5Y6/4 に近い黄色シルト (マンガング粒10%含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (マンガング粒10%含む)
3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (マンガング粒10%含む)

SD611090



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (マンガング粒5%含む)
2. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト (マンガング粒2%含む)
3. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト (マンガング粒含む、極細粒砂50%含む)



第74図 第6次調査11区溝土層断面図①

この遺物状況から、最終的に溝が埋没した時期は室町時代後期と考えられる。

この溝の時期や平面プランを合わせて考えると中世における区画機能をもった溝である可能性が高いと思われる。

S D611014 11-2区上層遺構面の北東部で検出された溝である。長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.07mを測り、調査区内で集束する。平面上のプランは不整形で、断面形状は浅い皿状を呈している。

長さが短く、深さも浅いことから、近接するS D 611010と同様に、基盤層上面に生じた浅い凹凸の一部または落ち込みの可能性も考えられる。

埋土は灰褐色粗粒砂の単層である。埋土中からは遺物が出土しなかったことから、遺構の時期は不明である。

S D611015 11-2区上層遺構面の北東部北側で検出された溝である。S K 611016によって一部が削平されている。幅0.15～0.45m、深さ0.08mを測り、調査区外の北側から南北に延び、東に屈曲する。断面形状は、浅い皿状を呈している。

深さが浅いことから、S D 615014などと同様に、基盤層に生じた浅い凹凸または落ち込みの可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

S D611017 11-2区上層遺構面の北東部南側で検出された溝である。幅0.6～1.2m、深さ0.15mを測り、北東-南西方向に延びて調査区外の南側へと続いている。S D 611012と重複するが、平面で関係性を認識することができなかったため、前後関係については不明である。

埋土は灰白色粗粒砂の単層である。溝の深さが浅く、埋土が粗粒砂であることから、ほぼ1回の流水によって埋没したと考えられる。また、重複するS D 611012と同様な状態を示すことから、同一の溝の可能性も考えられる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

S D611018 (第75図) 11-2区上層遺構面の北西部で検出された溝である。東岸が検出できたのみで、西岸は調査区外の北西側にあるとみられる。

東岸が延びる方向から、北東-南西方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。調査における安全性の確保から、途中までの掘削で留めたため、深さについては不明であるが、少なくとも深さ0.5m以上になる。

埋土は、灰オリブ色や灰黄色のシルトであり、砂を含んでいることから、一定の流水があったものと思われる。

埋土中からは、釘とみられる鉄製品が出土した。土器類が出土していないため、遺構の時期については詳細には断定できないが、釘の形状から中世以降と考えられる。

S D611019 11-2区上層遺構面の北部北側で検出された溝である。S D 611013の東岸に沿って近接している。幅0.1～0.25m、深さ0.05mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外の北側へと続いている。

埋土からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

S D611021 (第74図) 11-3区上層遺構面の東部北側で検出された溝である。S K 611024・S R 611076によって一部が削平を受けている。調査区北壁付近は南北方向に延びるが、西へと屈曲して東西方向に延びている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は3層からなり、いずれもマンガン粒を含むシルトである。

埋土中からは、土師器杯・甕、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末～鎌倉時代前期と考えられる。

S D611025 11-3区上層遺構面の東部で検出された溝である。S D 611033の埋没後に掘り込まれており、S K 611024に一部が削平されている。幅0.7m、深さ0.15mを測り、調査区外の北側から南北方向に延び、西へ屈曲して東西方向に延びている。

埋土中からは、土師器皿、須恵器壺・甕、土鍬が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末～鎌倉時代前期と考えられ、S K 611024よりも新しい時期といえる。

S D611026 (第75図) 11-2区上層遺構面の中央部で検出された溝である。S D 611028の埋没後に掘り込まれており、S D 611013によって一部

が削平されている。幅0.45 m、深さ0.25 mを測り、南北方向に延びて調査区外へと続くが、北側についてはSD 611013と重複するため、延長の有無は不明である。断面形状はU字形を呈し、底面は平坦である。

埋土は2層からなり、暗灰黄色シルトとにぶい黄色シルトで構成されている。堆積層中には、いずれも細粒砂を含んでいる。砂を含むもの、埋土はしまりが強く安定しており、顕著な流水痕跡もみられなかった。

埋土中からは、土師器杯・甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

SD 611027 (第75図) 11-2区上層遺構面の

中央部で検出された溝である。SD 611028の埋没後に掘り込まれている。幅1.2 m、深さ0.5 mを測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈しており、底面は丸みを帯びている。

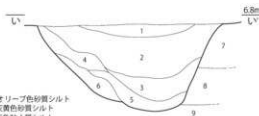
埋土は3層からなり、黄褐色を主体とするシルトである。このうち第1・2層には砂礫～細粒砂を含んでおり、底面直上に堆積する第3層は水によってグライ化し、鉄分の沈着も認められた。機能当初は滞水傾向にあった可能性が考えられる。

埋土中からは、土師器杯・皿・椀・蓋・高杯・鉢・甕・鍋・瓶、製塩土器、須恵器杯蓋・杯・椀・平瓶・甕、灰釉陶器椀・壺が出土し、その量は多い。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

SD611013



1. 5Y6/2 灰オリブ色砂質シルト (マンガン多く含む)
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
2. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト
4. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト (黄褐色シルトブロック10%含む)
5. 10B6/1 黄灰色粘土質シルト (しまり弱い)
6. 2.5Y7/4 黄褐色砂質シルト: 基盤層
7. 5Y6/3 オリブ黄褐色細粒砂 (マンガン沈着あり): 基盤層



1. 5Y6/2 灰オリブ色砂質シルト
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
- 7.5Y6/1 灰黄色土質シルト
4. 10B6/1 黄灰色粘土質シルト (しまり弱い)
5. 7.5Y6/1 灰黄色砂質シルト (黄褐色シルトブロック10%含む)
6. 7.5Y6/1 灰黄色土質シルト
7. 2.5Y7/4 黄褐色砂質シルト: 基盤層
8. 5Y6/3 オリブ黄褐色細粒砂: 基盤層
9. 7.5Y5/1 灰黄色細粒砂: 基盤層

SD611018



1. 5Y6/2 灰オリブ色砂質シルト
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
3. 土色なし
4. 2.5Y7/4 黄褐色砂質シルト: 基盤層

SD611026



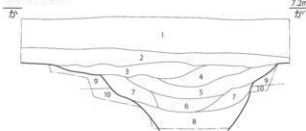
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (灰色細粒砂 5%未調査)
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂質シルト (細粒砂 5%未調査)

SD611027



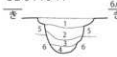
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂質シルト (5m大礫 5%未調査、灰色細粒砂 5%含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂質シルト (灰色細粒砂 5%含む)
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト (グライ化、鉄分沈着あり)

SD611040

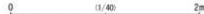


1. 10YR2/1 黒色砂礫質シルト (2~20m大礫10%含む): 表土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫質シルト (2~20m大礫 5%未調査): 造成土
2. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂質シルト (細粒砂 5%未調査)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
5. 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂質シルト (黄灰色細粒砂50%含む)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂質シルト (ラミナ状の堆積、シルト・細粒砂・極細粒砂の互層)
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト・基盤層 (灰白色シルト 5%含む)
8. 2.5Y3/3 暗オリブ褐色シルト・細粒砂 (ラミナ状の堆積、シルト・細粒砂・極細粒砂の互層)
9. 10YR3/3 暗褐色シルト (縄文包合層): 基盤層
10. 10YR3/2 黄褐色シルト: 基盤層

SD611041



1. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト (10YR6/4にぶい黄褐色シルトブロック20%含む、灰褐色砂 5%未調査)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (10YR4/2灰黄褐色シルトブロック 5%未調査)
3. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 (10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック 5%未調査)
4. 10YR3/3 暗褐色シルト・細粒砂 (10YR4/2灰黄褐色シルトブロック 5%含む)
5. 10YR3/3 暗褐色シルト (縄文包合層): 基盤層
6. 10YR3/2 黄褐色シルト: 基盤層



第75図 第6次調査11区溝土層断面図②

SD611028 11-2区上層遺構面の中央部北側で検出された溝である。S B 611043とSD 611013・611026・611027によって一部が削平されている。南岸を検出できたのみで、溝の北側は調査区外へと広がる。調査区北壁際で検出されたことから、壁面崩落の危険性が考えられたため、途中までの掘削に留めたため、規模等については不明である。

埋土は、ふい黄色の細粒砂が混じるシルト層であり、周囲には溝からの溢れ込みによるものと考えられる灰白色のシルトが検出面を覆うかたちで広がっていた。

埋土から出土した遺物は、縄文土器深鉢、土師器杯・高杯・台付壺・壺・甌、須恵器杯身・杯蓋・壺・壺、灰胎陶器壺、丸瓦が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

SD611029 11-2区上層遺構面の中央部で検出された溝である。幅0.45～0.65 m、深さ0.05 mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状である。検出範囲周辺の遺構の基盤層は、後世の盛土造成の際に大きく削平を受けていたことから、本来の溝の上面はもっと高い位置にあったと思われる。

埋土は褐色のシルトであり、しまりが強い。また基盤層のシルトブロックを含まれる状況であった。

埋土中からは遺物が出土しなかった。しかし、遺構の基盤層からは縄文土器が出土した。遺構の時期については不明である。

SD611030 11-2区上層遺構面の西部で検出された溝である。幅0.6～0.86 m、深さ0.15～0.25 mを測り、若干西へ振れながら南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形はU字形で、底面から側面への立ち上がりは緩やかである。SD 611029と同様に、基盤層が後世の造成により削平を受けていることから、本来の溝の上面はもっと高い位置にあったとみられる。

埋土は灰黄褐色で砂礫を含むシルトであり、砂が顕著に確認できたことから、ある程度の流水があったことが窺える。

埋土中からは、縄文土器深鉢、弥生土器壺、土師器碗・高杯・壺・台付壺、須恵器壺、陶器壺、敲石が出土した。弥生土器と古墳時代土師器の出土が主

体であることと、溝の検出面が後世の攪乱の影響を受けていたことを考慮すると、遺構の時期は古墳時代中期～後期と考えられる。

SD611031 11-3区上層遺構面の東部で検出された溝である。SD 611021によって一部が削平されている。幅0.6 m、深さ0.15～0.25 mを測り、北西-南東方向に延びて、東端は不整形である。

埋土はオリブ褐色シルトの単層である。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、器種は不明である。出土した遺物から、遺構の時期を断定しがたいが、SD 611021との重複関係から、少なくとも平安時代末以前と考えられる。

SD611033 11-3区上層遺構面の東部北側で検出された溝である。SD 611025によって一部が削平を受けている。南岸を検出できたのみで、北岸は調査区外の北側にあるとみられる。深さ0.3 mを測り、南岸が延びる方向から、東西方向に延びると考えられるが、断片的にしか検出できていないため、溝状の落ち込みまたは土坑の可能性も考えられる。埋土はオリブ褐色系のシルトである。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期を断定しがたいが、SD 611025との重複関係から、少なくとも平安時代末以前と考えられる。

SD611034 11-3区上層遺構面の中央部で検出された溝である。SK 611005・611009によって一部が削平されている。幅0.4 m、深さ0.05 mを測り、北西-南東方向に延びており、位置関係からSD 611008と繋がる様相を呈する。しかし、SD 611008は平面や断面で認識できる掘形が明確だったうえ、深さも0.1 m以上であるのと比べると、同一の溝とは考え難く、別遺構と判断した。また、溝と認識したものの、深さ0.05 mと浅いことから、溝状の浅い落ち込みである可能性も否定できない。SD 611008との関係性は、SK 611005が掘り込まれていることから、不明である。

埋土は、オリブ褐色シルトの単層である。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、時期については不明であるが、SK 611005・611009との重複関係から、少なくとも鎌倉時代前期以前と考えられる。

SD611040 (第75図) 11-2区上層遺構面の

東部で検出された溝である。幅2.35mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。下層からの湧水が激しく、調査における安全性の確保から、途中で掘削を留めたため、最終的な深さについては不明であるが、少なくとも0.7m以上の深さになる。両岸の上部には、テラス状の段を有している。

埋土は複数層からなり、黄褐色・黄灰色・オリーブ褐色を主体とするシルトから構成されている。このうち第3～7層と第8層で堆積状況の単位が分かれており、断面形状の変化とも対応していることから、掘り直しが行われていると考えられ、第3～7層は掘り直し後の旧溝の埋土となる。

いずれの層位も細粒砂を含むシルトであるが、特に第6層と第8層は、ラミナ状の堆積状況が確認でき、シルト・極細粒砂・細粒砂の互層となる流水痕跡が顕著にみられた。第8層は旧溝の層位となることから、旧溝段階は特に流水が顕著にあった可能性が考えられる。

埋土からは、土師器の薄片が出土したが、時期については不明である。

S D 611041 (第75図) 11-2区上層遺構面の東部で検出された溝である。幅0.6m、深さ0.4m前後を測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈し、底面から側面への立ち上がりは急である。土層断面からは、上位の側面にはテラス状の段を有していることが観察できる。

埋土は4層からなり、灰黄褐色を主体とするシルトから構成されている。各層位には、いずれも細粒砂と黄褐色のシルトブロックを含んでいるが、第3層は細粒砂が主体の堆積層となる。層相から、常に同じような流水状態の中で埋没していった可能性が考えられる。

埋土中からは、縄文土器深鉢、土師器皿・甕・鍋が出土した。出土した遺物から、最終的に埋没した時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

S D 611042 11-2区上層遺構面の東端部で検出された溝である。幅0.65～0.9m、深さ0.2mを測り、ほぼ南北方向に延びて調査区外へと続いている。

埋土からは、遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

S D 611045 11-1区東端部で検出された溝である。東岸が検出できたのみで、西岸については、調査区外の西側にあるとみられる。深さは0.2～0.4mを測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。底面には筋状や円形の凹みが認められる。これらの凹みが別遺構かどうか明確に認識することができなかったため、S D 611045の一部として捉えた。

埋土は複数層からなり、黄灰色・褐色を主体とするシルトから構成されている。各層位の層厚は薄く、いずれも細粒砂～砂礫を含む。また第5・9層にはマンガンの沈着が認められた。シルトよりも砂が主体となる堆積層が多いことから、常に流水の環境下でありながら埋没していったと思われる。

埋土中からは、須恵器壺が出土した。遺物が少ないため、時期を断定しがたいが、平安時代前期と考えられる。

S D 611046 11-1区東部で検出された溝である。幅0.55～0.7m、深さ0.1m前後を測り、北東-南西方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は2層からなり、第16層が灰色細粒砂混シルト、第17層が黒褐色シルトである。このうち、第17層には基盤層のシルトブロックを含み、グライ化した層相を示す。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

S D 611047 11-1区東部～中央部にかけて検出された溝である。S D 611048によって一部が削平を受けている。幅0.35m、深さ0.07mを測り、北西-南東方向に延びて、調査区外の北側へ続いている。埋土は2層からなり、S D 611046と同様の層相を示す。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明だが、埋土の類似性からS D 611046と同様の時期の可能性がある。

S D 611048 11-1区中央部で検出された溝である。幅1.6m、深さ0.15～0.3mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状であり、底面から側面への立ち上がりも緩やかである。

埋土は3層からなり、第20・21層は細粒砂～粗

粒砂を含むシルト、第22層は細粒砂である。いずれの層位も砂を主体としていることから、ある程度の流水があったものと思われる。

埋土中からは、土師器鍋が出土した。出土した遺物から遺構の時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SD611090 (第74図) 11-3区西部で検出された溝である。幅0.6m、深さ0.4mを測り、やや湾曲しながら南北から東西へ方向を変える。北端は調査区外、東端はSD611001により消滅しているが、6m東進して突然止まるようである。埋土は上下2層に分かれるが、いずれもシルト系である。

時期は不明確であるが、平安時代中期より降らないものである。

(6) 流路

SR611049 11-1区東部で検出された流路である。西岸が検出できたのみで、東岸は調査区外の東側にあるとみられる。東岸が延びる方向から、南北方向に延びると考えられ、調査区外に続いている。湧水が認められ、調査における安全性の確保から、途中で掘削を留めたため、深さについても不明である。

埋土は複数層からなり、褐色・褐灰色を主体とするシルトと細粒砂で構成されている。各層位とも砂が含まれており、流水の中で埋没していったと思われる。

埋土中からは、土師器の小片が出土した。胎土の状況から古墳時代頃のものと考えられることから、遺構の時期は少なくとも古墳時代以前と考えられる。

また、位置関係や流路が延びる方向および出土遺物の状況から、12区のSR612019および13区SR613002と同一または関係性が強い流路である可能性がある。

SR611076 11-3区上層遺構面の東端部で検出された流路である。SD611021の埋没後に掘り込まれている。西岸が検出されたのみで、東岸は調査区外の西側にあるとみられる。西岸が延びる方向から、南北方向に延びて調査区外へと続いている。

埋土は複数層からなり、灰黄褐色と褐灰色を主体

とする砂質土あるいは粘質土で構成されている。

このうち、堆積状況から第1～4層と第5～14層に大きく分かれる。第1～4層は第57層を、第5層以下は、第59-60層を削り込んで堆積しており、第5層以下はさらに一段深く堆積する。この堆積状況から、第1～4層が新段階の流路、第5～14層が旧段階の流路と判断できる。そのため、新流路を上層遺構面で、旧流路を下層遺構面で調査を行った。しかし、下層遺構面の調査では、湧水が生じ、調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、最深部までの深さについては不明である。

新流路の埋土は、比較的にしまりがある砂質土である。一方、旧流路の埋土は粘質土と粘土であり、埋没最終段階まで砂を主体とする堆積が確認できなかったことから、砂を押し流すような激しい流水がなかった可能性が考えられる。

新流路の埋土中からは、土師器壺・焙烙、須恵器壺、灰釉陶器皿、山茶碗、陶器摺鉢、平瓦が出土した。旧流路の埋土中からは、縄文土器深鉢、蔽石が出土した。

これらの出土遺物から、新流路は平安時代末～近世、旧流路は縄文時代中期末～後期と考えられるが、縄文土器は包含層からの流れ込みの可能性も排除できない。そのため、初現時期については断定しがたいものの、流路全体が最終的に埋没する時期は近世まで降る可能性がある。

SR611089 11-2区上層遺構面で検出された流路である。SB611043柱穴No.3～5とSB611044柱穴No.3・4およびSD611028によって一部が削平されている。幅38～5.0m、深さ0.9mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。

埋土は複数層からなり、灰黄褐色を主体とするシルトおよび極細粒砂～粗粒砂で構成されている。このうちのシルト層中には、砂が多く含まれている。

また、流路上面からは、ほぼ完形の土師器壺(3703)が横になった状態で出土した。埋没する過程の中で、置かれた可能性が考えられる。

埋土からは、土師器高杯・小型丸底壺・壺・甕が出土した。これらの遺物は、ほぼ上位の層位から出土している。出土した遺物から遺構が最終的に埋没した時期は、古墳時代前期と考えられる。

(7) 埋設土器

SX611037 (第76図) 11-2区上層遺構面で見出された埋設土器とみられる遺構である。埋設されたとみられる土器は、縄文土器の深鉢である。底部全体と体部下位が打ちかかれた状態で据えられていたとみられる。土器内には据えられた体部と同一個体と考えられる波状口縁の口縁部片や体部片が出土した。また土器内からは埋設された縄文土器とは別個体と考えられる平縁口縁の口縁部片が、外面を下にし、口縁部が連続する状態でまとまって出土した。

据えられた土器の体部片の状態から、本来は直立した状態で埋設されていたとみられるが、体部中位～口縁部に至るまでが残存しておらず、口縁部と体部の一部の破片が土器内の土壌中から出土してお

り、加えて別個体の土器も土器内から出土していることから、明確な埋設土器とも断定しがたい。

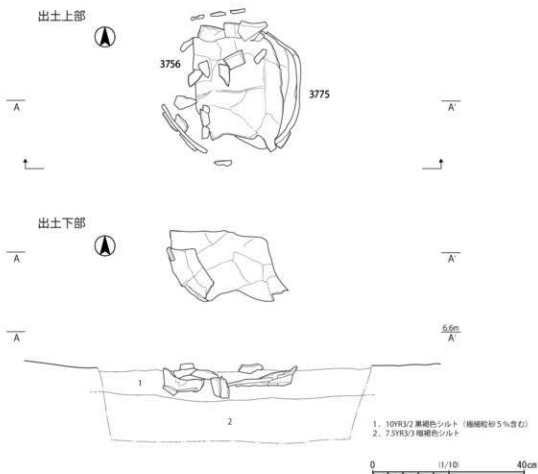
土器を埋設した際の掘り込み痕跡を確認するために断割を行ったが、土層断面で確認することができなかった。

出土した縄文土器のうち、波状口縁を持つ破片とその体部片は、口縁部に施された文様の特徴から縄文時代後期前半と考えられる。それらと別個体の平縁口縁を持つ深鉢は、沈線間に磨消縄文を部分的に施されたもので、J字をモチーフにしたつづ文様構成が崩れた文様帯をもつものであり、縄文時代後期前半(中津式併行)の特徴を持つ。

これらの縄文土器から、遺構の時期は縄文時代後期前半として捉えられる。

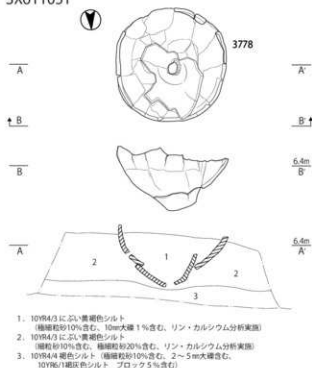
SX611051 (第77図) 11-2区下層遺構面の南端部で見出された埋設土器である。本来の埋設土

SX611037

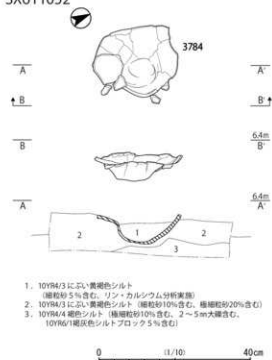


第76図 第6次調査11-2区上層遺構面埋設土器出土状況図・土層断面図

SX611051



SX611052



第77図 第6次調査11-2区下層遺構面埋設土器出土状況図・立面図・土層断面図

器は、検出面より高い位置まであったとみられるが、縄文時代遺構の基盤層を若干削り込んで検出を行っているため、本来の埋設土器は検出面よりも高い位置まであったとみられる。

埋設された縄文土器は深鉢であり、残存していたのは底部から体部中位にかけての部分である。底部中央を焼成後に打ち欠かされている。土器は、やや東に傾く形で底部を下にした状態で埋設されており、土圧のためかヒビ割れが激しく、断割における土層断面の状況からは体部の一部がズレ落ちて、他の体部片と重なってしまっている状況が確認できる。土器を埋設するための掘り込みを土層断面で確認することはできず、ほぼ土器内からは遺物が出土せず、土層のみが含まれている状況であった。

埋設土器については、墓などの性格も推定されたことから、土器内土壌である第1層と埋設土器の基盤層について、土壌中のリン・カルシウムの含有量を調べる分析を実施した。

その結果、リン・カルシウムの含有量については、基盤層に含まれているリン・カルシウムと比較しても大きな差や集中ポイントが無かったことから、墓か否かは分析を考慮しても判断することができな

い。

埋設された縄文土器は、有文の深鉢であり沈線文を主体とする文様帯とキザミを伴う垂下隆帯をもつもので、東日本の称名寺式からの影響が想定される土器である。これらの特徴から、縄文時代後期前半の中でも古い時期（中津式および称名寺式併行）と考えられる。

SX611052（第77図）11-2区下層遺構面の中央部で検出された埋設土器である。上層遺構面から下層遺構面までの堆積層を除去する際に、縄文土器が集中して出土した位置であり、本来は検出面より高い位置まで土器が伸びていたと考えられる。

埋設された縄文土器は、底部から体部下位にかけてのもので、底部に穿孔はない。土器は直立した状態で埋設されており、体部下位については、横に潰れた状態を示す。また、SX611051と同様にヒビ割れが顕著にみられることから、埋設後の土圧による影響もを受けていると考えられる。また、土器を埋設した際の掘り込みについても断割の土層断面で確認することはできなかった。土器内からは遺物が出土せず、土層のみが含まれている状況であった。

SX611051と同様に土器内土壌と埋設土器の基

盤層とでリン・カルシウム分析を実施し、リン・カルシウムの土壌中の含有量を比較した。その結果、リンについては土器内土壌となる第1層で明らかに含有量が多いポイントが検出された。カルシウムについても、リンと同一のポイントで含有量が相対的に多い結果となり、骨や歯に由来する可能性が指摘された。このような結果から、墓などの埋葬または動物性のものを蓄える貯蔵用に埋設された土器である可能性が推測される。

埋設された縄文土器と、下層遺構面までを掘削する際に埋設土器周辺から出土した縄文土器は、多条の沈線文を主体として文様帯を構成しており、頸部に文様帯が展開しない可能性が高い土器である。これらの土器の特徴から、縄文時代後期前半（広瀬土坑40段階併行前後）であると考えられる。

(8) ビット (下層遺構面)

へーP18Pit2 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。直径0.17~0.19m、深さ0.5mを測る。平面形状は円形を呈している。断面形状から杭に伴う穴の可能性が考えられる。

埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期の可能性が高いと考えられる。

へーP18Pit3 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。直径0.25~0.3m、深さ0.18mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、灰褐色シルトと灰黄褐色シルトである。埋土中からは、石錘が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代と考えられるが、詳細な時期については不明である。

へーP18Pit7 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。直径0.45~0.47m、深さ0.43mを測る。平面形状はやや崩れた円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトであるが、第1層には炭化材の破片が微量に含まれている。遺物が出土していないため、遺構の詳細な時期については不明である。

へーQ18Pit1 (第78図) 11-2区下層遺構面

で検出されたビットである。幅0.2~0.5m、深さ0.36mを測る。平面形状は長い楕円形を呈している。ビットの最深部は円形に一段深くなっている。断面形状から杭に伴う穴の可能性が考えられる。

埋土は2層からなり、いずれもシルトで炭化材の破片を微量に含む。埋土中からは縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期と考えられる。

へーQ18Pit2 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。幅0.35~0.4m、深さ0.37mを測る。平面形状は不整形な方形を呈している。

埋土は3層からなり、いずれもシルトである。このうち、第2・3層には微量の炭化材の破片を含む。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期と考えられる。

へーQ18Pit6 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。幅0.21~0.23m、深さ0.24mを測る。平面形状は崩れた方形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層と第2層の層理が縦に延びることから、第1層は柱痕の可能性もある。また、第1層は炭化材の破片と焼土の可能性のある赤色シルトブロックが含まれており、南に向かって傾く堆積状況を示すことから、柱痕ならば抜き取りがなされている可能性がある。

埋土中からは遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期については不明である。

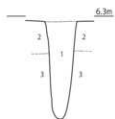
へーQ18Pit8 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。直径0.55~0.7m、深さ0.32mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち第2層には黒色のシルトブロックを含んでいる。埋土から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へーQ18Pit12 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたビットである。幅0.28~0.36m、深さ0.23mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈している。

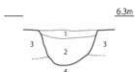
埋土は2層からなり、いずれも炭化材の破片を含むシルトである。埋土中から遺物が出土していない

へーP18 Pit2



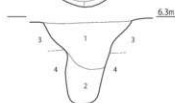
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーP18 Pit3



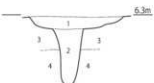
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト (繊維粒5%含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
(10YR2/1黒色シルトブロック10%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーP18 Pit7



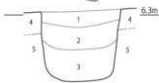
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (炭片1%含む)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ18 Pit1



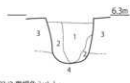
1. 10YR4/3 暗褐色シルト
(繊維粒約10%含む、炭片5%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭片1%未満含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ18 Pit2



1. 7.5YR4/3 褐色シルト
2. 7.5YR4/2 灰褐色シルト (炭片1%含む)
3. 7.5YR3/2 黒褐色シルト
(炭片1%含む、焼土ブロック1%含む)
4. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
5. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

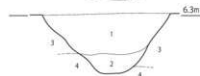
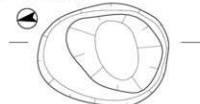
へーQ18 Pit6



1. 10YR3/2 黒褐色シルト
(炭片30%含む、赤色シルトブロック1%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約95%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

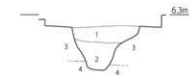
0 1/20 80cm

へーQ18 Pit8



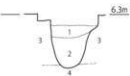
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(10YR2/1黒色シルトブロック30%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ18 Pit12



1. 10YR5/0 灰黄褐色シルト (炭片2%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭片1%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ18 Pit13



1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
(20%大塚含む、チート含む)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト (繊維粒2%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粒約95%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2灰黄褐色シルトブロック20%含む)

第78図 第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図・土層断面図①

ため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q18Pit13 (第78図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.25～0.3 m、深さ0.3 mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層には礫、第2層には細粒砂を含んでいる。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q18Pit16 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.22～0.23 m、深さ0.18 mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q18Pit17 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.34～0.53 m、深さ0.42 mを測る。平面形状は長い楕円形を呈している。ピットの最深部は柱状に低い。

埋土は3層からなり、いずれもシルト層である。縦に延びる層理が確認できることから、第1層は柱状を示している可能性が考えられる。

埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-R18Pit1 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.37～0.4 m、深さ0.37 mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層には炭化材の破片が微量に含まれている。

埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期と考えられる。

へ-O19Pit3 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.22 m、深さ0.1 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、暗褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期と考えられる。

へ-P19Pit1 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.4～0.57 m、深

さ0.11 mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土には、ふい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-P19Pit2 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.2～0.22 m、深さ0.17 mを測る。平面形状はやや崩れた円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片と暗褐色シルトブロックを含む灰黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-P19Pit4 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.15～0.17 m、深さ0.15 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、赤色のシルトブロックを含む灰黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-P19Pit5 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.20～0.22 m、深さ0.43 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片と暗褐色シルトブロックを含む灰黄褐色シルトである。埋土中からは縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-Q19Pit6 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.17～0.2 m、深さ0.27 mを測る。平面形状は円形を呈している。

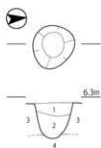
埋土は2層からなり、いずれも炭化材の破片を含むシルトである。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-P19Pit7 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.26～0.27 m、深さ0.2 m前後を測る。平面形状は円形を呈し、ピットの最深部は一段深く窪む。

埋土は、ふい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期については不明である。

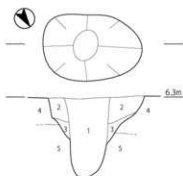
へ-P19Pit9 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.19～0.22 m、

へ-Q18 Pit16



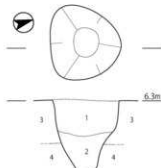
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (繊維粉5%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-Q18 Pit17



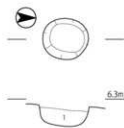
1. 10YR3/1 黒褐色シルト (繊維粉10%含む)
2. 10YR4/1 褐色シルト (繊維粉5%含む)
3. 10YR2/2 黄褐色シルト
4. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
5. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-R 18 Pit 1



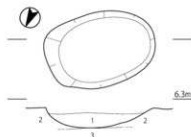
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (炭片1%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR2/1 黒色シルトブロック2%含む、繊維粉1%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-O19 Pit 3



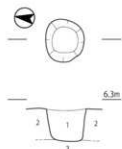
1. 10YR3/3 暗褐色シルト (繊維粉5%含む)

へ-P19 Pit 1



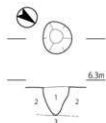
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-P19 Pit 2



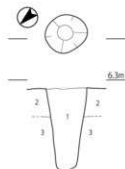
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭片2%含む、
10YR3/4 暗褐色シルトブロック5%含む)
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-P19 Pit 4



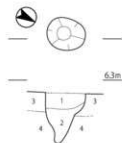
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(赤色シルトブロック10%未調査)
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-P19 Pit 5

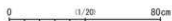


1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭片2%含む、
10YR3/4 暗褐色シルトブロック5%含む)
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へ-P19 Pit 6



1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
(赤色シルトブロック1%未調査)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(10YR2/1 黒色シルトブロック5%)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(繊維粉50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)



第79図 第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図・土層断面図②

深さ0.18 mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片を含む暗褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q19Pit10 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.23～0.57 m、深さ0.07 mを測る。平面形状は細長い楕円形を呈しており、断面形状は浅い皿状で、底面から側面へは緩やかに立ち上がる。

埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit6 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.17～0.2 m、深さ0.27 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれも炭化材の破片を含むシルトである。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q19Pit12 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.16 m、深さ0.18 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit13 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.27～0.58 m、深さ0.18 mを測る。平面形状は細長い楕円形を呈しており、底面は部分的に一段低い窪みがある。

埋土は、炭化材の破片を含むにぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-Q19Pit1 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.37～0.56 m、深さ0.2 mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層には炭化材の破片がわずかに含まれている。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と

考えられる。

へ-Q19Pit2 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.3～0.34 m、深さ0.27 mを測る。平面形状はやや崩れた楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層には炭化材の破片がわずかに含まれている。埋土中から遺物が出土していないため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q19Pit3 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.34～0.43 m、深さ0.38 mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、ピットの最深部は一段深く窪んでいる。

埋土は3層からなり、いずれもシルトである。埋土中からは、縄文土器深鉢、ササカイトの剥片が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-Q19Pit4 (第80図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.41～0.42 m、深さ0.31 mを測る。平面形状は隅丸方形に近い形を呈しており、ピットの最深部はより丸く一段低くなる。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち第1層には炭化材の破片がわずかに含まれている。埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit5 (第79図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.18～0.25 m、深さ0.18 mを測る。平面形状は崩れた楕円形を呈している。

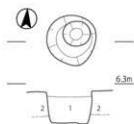
埋土は黒褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit6 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.32～0.46 m、深さ0.09 mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

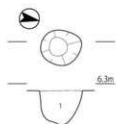
へ-Q19Pit7 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.26 m前後、深

へーP 19 Pit 7



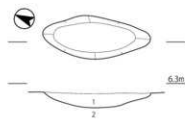
- 10YR5/3 にふい黄褐色シルト
[10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック40%含む]
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

へーP 19 Pit 9



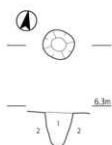
- 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片10%含む)

へーP 19 Pit10



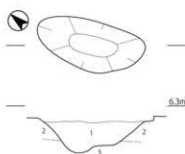
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (細粒砂5%含む)
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]

へーP 19 Pit12



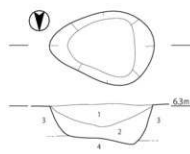
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
[細粒砂5%含む]
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]

へーP 19 Pit13



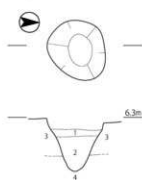
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
[10YR3/3 暗褐色シルトブロック50%含む、炭片5%含む]
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

へーQ19 Pit 1



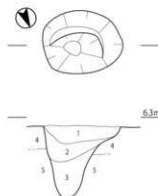
- 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片1%含む)
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

へーQ19 Pit 2



- 10YR3/3 暗褐色シルト
[細粒砂20%含む、炭片5%含む]
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト (細粒砂10%含む)
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

へーQ19 Pit 3



- 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 10YR3/2 黒褐色シルト
- 10YR5/3 にふい黄褐色シルト
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

へーQ19 Pit 4



- 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片5%含む)
- 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
[極細粒砂50%含む、しまりあり]
- 10YR2/1 黒色シルト
[10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む]

0 (1/20) 80cm

第80図 第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図・土層断面図③

さ0.27mを測る。平面形状はやや崩れた円形を呈している。

埋土は3層からなり、いずれもシルトである。このうち、第3層には炭化材の破片がわずかに含まれていない。埋土から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期は不明である。

へ-Q19Pit8 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.26～0.38m、深さ0.13mを測る。平面形状は楕円形を呈しており、ピットの最深部は一段低く窪んでいる。

埋土は、灰黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit9 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.25～0.37m、深さ0.2mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第1層には炭化材の破片をわずかに含んでいる。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-Q19Pit10 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.22m、深さ0.1mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は灰黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit1 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.4～0.5m、深さ0.17mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片がわずかに含む暗褐色シルトの単層である。埋土から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit2 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.22～0.26m、深さ0.2mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は、いぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit3 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.22～0.27m、深さ

0.32mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片をわずかに含むいぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中からは遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit4 (第81図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.25～0.28m、深さ0.1mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、灰黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit5 (第82図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.14～0.2m、深さ0.35mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。このうち、第2層には黒色のシルトブロックを含んでいる。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-R19Pit7 (第82図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.4～0.42m、深さ0.28mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれも炭化材の破片を含むシルトである。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-P20Pit1 (第82図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.45～0.47m、深さ0.45mを測る。平面形状は円形を呈しており、ピットの最深部は一段深くっており、側面にはテラス状の面を有している。

埋土は2層からなり、第1層がシルト、第2層が黒色のシルトブロックを含む極細粒砂である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-P20Pit2 (第82図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。直径0.22～0.28m、深さ0.22mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は、灰黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

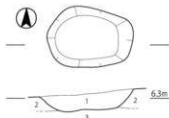
へ-P20Pit3 (第82図) 11-2区下層遺構面で検出されたピットである。幅0.28～0.3m、深さ

へーQ19 Pit 5



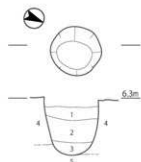
1. 10YR3/2 黒褐色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)

へーQ19 Pit 6



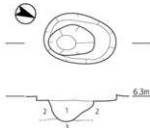
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ19 Pit 7



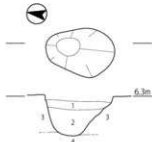
1. 10YR3/2 黒褐色シルト (粘粒砂2%含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
3. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭片2%以下含む)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
5. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ19 Pit 8



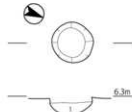
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ19 Pit 9



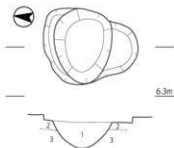
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト (炭片1%含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ19 Pit10



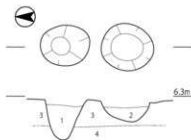
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト

へーR 19 Pit 1



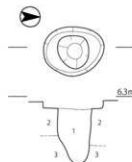
1. 10Y R3/3 暗褐色シルト (炭片2%以下含む)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーR 19 Pit 2 Pit 4



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーR 19 Pit 3

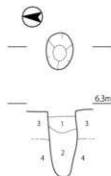


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (炭片2%含む)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(粘粒粒砂50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

0 (1/20) 80cm

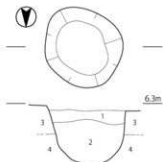
第81図 第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図・土層断面図④

へーR19 Pit 5



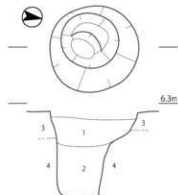
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (細粒砂30%含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (10YR2/1 黒色シルトブロック2%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーR19 Pit 7



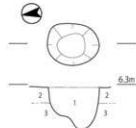
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (細粒砂30%含む、炭片5%含む)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト (細粒砂30%含む、炭片10%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーP20 Pit 1



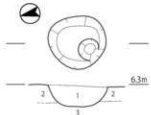
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (細粒砂5%含む)
2. 10YR3/2 黒褐色粘粒砂 (黒シルトブロック5%含む)
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーP20 Pit 2



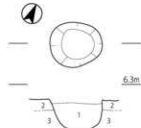
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーP20 Pit 3



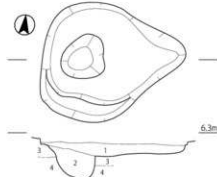
1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ20 Pit 1



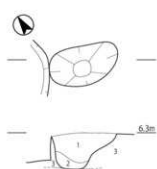
1. 10YR3/3 暗褐色シルト (炭片2%含む)
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーQ20 Pit 8



1. 7.5YR5/3 に近い褐色シルト (炭片2%含む)
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (細粒砂約50%含む、しまりあり)
4. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

へーR20 Pit 2



1. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
2. 10YR6/4 に近い黄褐色シルト
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック20%含む)

0 1/20 80cm

第82図 第6次調査11-2区下層遺構面Pit平面図・土層断面図⑤

0.11 mを測る。平面形状は円形を呈しており、底面の隅には一段低い窪みがある。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中からは、縄文土器深鉢が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-Q20Pit 1 (第82図) 11-2区下層遺構面
で検出されたピットである。直径0.24~0.28 m、深さ0.17 mを測る。平面形状は円形を呈している。

埋土は、炭化材の破片をわずかに含む暗褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

へ-Q20Pit 8 (第82図) 11-2区下層遺構面
で検出されたピットである。直径0.64~0.77 m、深さ0.2 mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈しており、ピットの最深部は一段低く窪んでいる。

埋土は2層からなり、第1層は炭化材の破片をわずかに含むシルトである。埋土中からは、縄文土器深鉢、石錘が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、縄文時代後期前半と考えられる。

へ-R20Pit 2 (第82図) 11-2区下層遺構面
で検出されたピットである。SK 611053と接して

いる。直径0.21~0.38 m、深さ0.2 mを測る。平面形状は楕円形を呈している。

埋土は2層からなり、いずれもシルトである。埋土中から遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期については不明である。

(9) その他

S Z611006 11-3区上層遺構面の東部で検出された落ち込み状の遺構である。S D 611002によって一部が削平されている。幅2.35~3.0 m、深さ0.05 mを測る。平面形状は不整形な楕円形を呈し、断面形状は浅い皿状である。検出当初は、竪穴建物の可能性も想定して掘削を行ったが、深さが極めて浅く、平面プランも明確ではなかったため、落ち込み状の遺構であると判断した。しかし、深さがごく浅いことから、上層遺構面の基盤層上にある凹凸の可能性もある。

埋土はオリブ褐色シルトの単層である。

埋土中からは、土師器と山茶碗の破片が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代と考えられる。(渡辺)

12. 12区

(1) 層序

12区は幅約27 mで東西南北方向にそれぞれ広く延びる調査区である。北端は11-3区に接しており、標高は約6.8 m (12-4区)で、表土下約0.2 mにおいてオリブ黄色シルトの基盤層となる。また南部になるほどやや高くなっており、南端部では標高約7.3 m (12-6区)で、表土下約0.2 mにおいてにぶい黄褐色シルトの基盤層となる。東西方向については、西端部が標高約6.4 m (12-1区)で、表土下約0.2 mにおいて黒褐色シルトの基盤層となっており、西に向かって、やや低くなる状況である。

(2) 柱列

S A612030 (第87図) 12-4区北部で検出された柱列である。4つの柱穴(S A 612030 Na 1~4)から構成される3間の柱列である。S D 612006によって一部が削平されており、S B 611074と近接

する。柱間は芯々間距離で約2.4 mを測り、各柱穴の深さは0.2~0.4 m前後と差がある。柱列の方向は東へ約12°傾く。柱列として認識したが、本来は掘立柱建物の個柱列である可能性も捨てきれない。

柱列を構成する柱穴のうち、Na 2から縄文土器深鉢のほか、土師器破片が出土した。遺構の時期は、柱穴からの出土遺物が少ないため、詳細は不明だが、方向や柱穴の形状などから、古代のものと考えられる。

S A612031 (第87図) 12-4区南部で検出された柱列である。5つの柱穴(S A 612031 Na 1~5)から構成される4間の柱列である。柱間は芯々間距離で約2.4 mを測り、各柱穴の深さは0.1~0.5 m前後と差がある。柱列の方向は東へ15°傾く。S A 612030と同様に柱列として認識したが、本来は掘立柱建物の個柱列である可能性も捨てきれない。

柱列を構成する柱穴のうち、Na 1およびNa 2の埋土中から土師器杯・甕、黒色土器碗が出土した。出

土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期と考えられると考えられる。

(3) 井戸

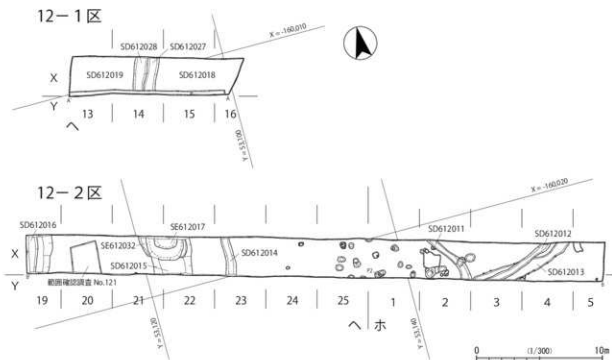
SE612003 (第89図) 12-3区東端部～12-4区南端部で検出された井戸である。SE 612026が埋没後にはほぼ同位置に掘り込まれている。長辺3.5m×短辺3.3mを測る。深さ20m前後で湧水が生じ、壁面等が崩落する危険性が生じたことから、途中までの掘削に留めたため、最終的な深さについては不明である。平面形状は隅丸の方形を呈している。

検出面から深さ約1.6mのところでは井戸枠の存在を確認した。土層断面での埋土の堆積状況も考慮すると、井戸枠の上部にあたる板材が抜き取られていると考えられる。井戸枠は掘形の中央から少し東寄りの位置に設置されており、井戸枠の規模は長辺約1m、短辺0.6mの長方形である。縦板・横板組の井戸枠構造のもので、東西面が縦板、南北面が横板となる。東西面の縦板は長さ約1m、幅約0.2mの板を3枚並べ、さらに下部にも同様の大きさの板を3枚縦並べている状況であった。また南北面の横板は、長さ約1m、幅約0.2～0.3mの板を横に6枚以上積み上げられており、上から4枚目の板には横

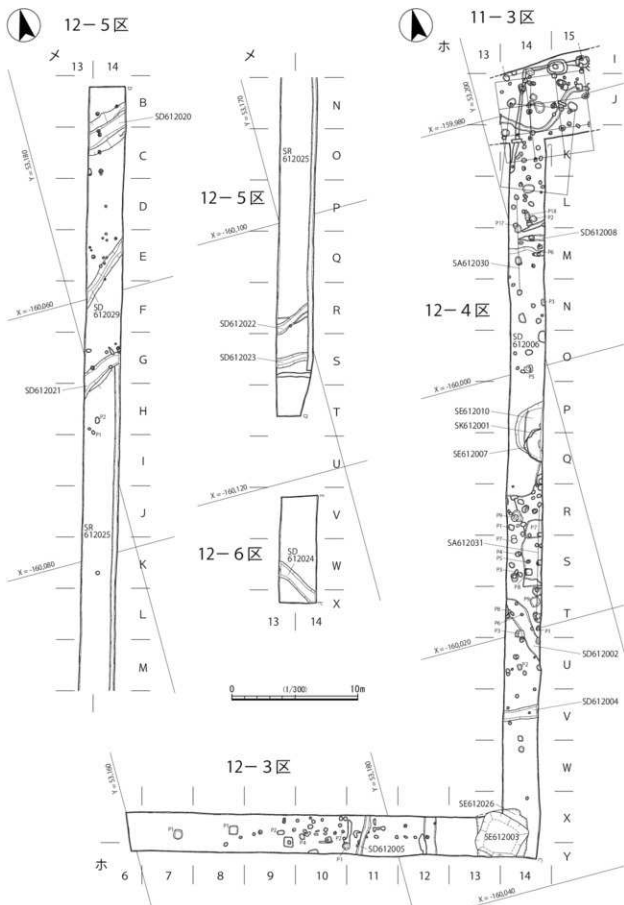
棧を繋ぐための抉りを持つ。掘削ができたのが検出面から深さ約26mのところまでであったことから、井戸枠の下部構造の詳細については不明である。回収可能であった井戸枠材については、調査後に樹種同定を実施した。

井戸の埋土は、第1～4層が井戸枠の上部板材の抜き取りに伴う埋土、第5層が井戸枠内埋土、第6～15層が掘形埋土に大きく分かれる。第1～4層のうち、第1～3層は東に傾斜した堆積状況を示すことから、井戸枠材は東に向かって抜き取られた可能性がある。第6～15層には、黄褐色またはにぶい黄色のシルトブロックが多く含まれており、基本的に粘性が強い。また、第15層は湧水によるグライ化が著しく、検出面から約1.5m前後から湧水が始まる。

掘形の埋土からは土師器杯・皿・高杯・甕・鉢、ロクロ土師器椀、須恵器甕、灰釉陶器椀・皿・壺、井戸枠内埋土からは土師器杯・皿・甕、黒色土師器、灰釉陶器椀・皿、掘形および井戸枠内を含めた埋土一括で、縄文土器深鉢、土師器杯・椀・皿・高杯・甕・鉢・鍋・甌、黒色土師器、製塩土器、須恵器杯蓋・甕、灰釉陶器椀、葎石などが出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期～後期と考えられる。



第83図 第6次調査12区平面図①



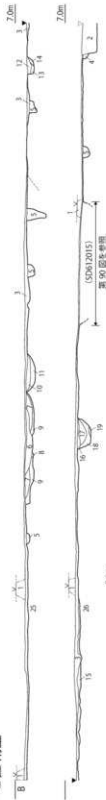
第84図 第6次調査12区平面図②

12-1 区南壁



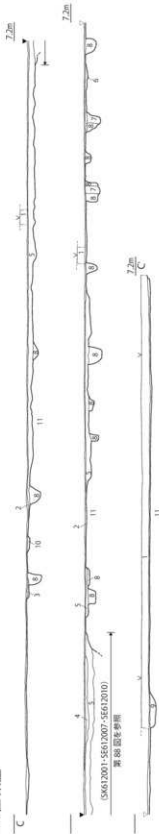
1. 耕作土
2. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612027
3. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612028
4. 1076/4 褐色シルト (褐色シルト) : S0612029
5. 1076/4 褐色シルト、粘砂層 (2~20cm厚層10%含む、砂分・マンガク(粘着砂)) : S0612018

12-2 区南壁



1. 耕作土
2. 23/6/2 褐色シルト・粘砂層 (粘砂層)
3. 23/6/2 褐色シルト・粘砂層 (粘砂層)
4. 23/6/2 褐色シルト・粘砂層 (粘砂層)
5. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612011
6. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612011
7. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612011
8. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612011
9. 1076/3 褐色シルト (1076/2) 褐色シルト・ブロック5%含む(C) : S0612011
10. 1076/6/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612011
11. 1076/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612011
12. 1076/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612011
13. 1076/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612011
14. 1076/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612011
15. 23/6/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
16. 土色不明
17. 1076/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612014
18. 1076/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612014
19. 1076/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612014
20. 23/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
21. 23/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
22. 23/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
23. 23/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
24. 23/6/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
25. 23/6/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
26. 23/6/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
27. 23/6/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016
28. 23/6/3 褐色シルト (褐色シルト) : S0612016

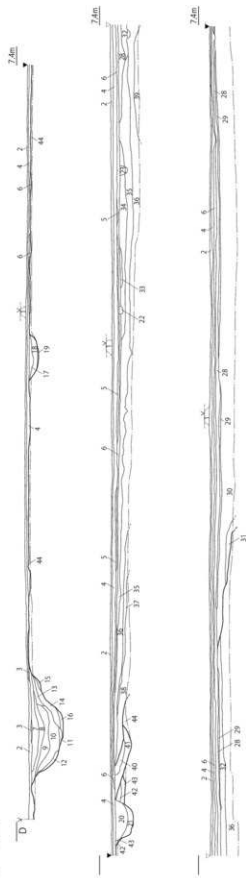
12-4 区東壁



1. 23/6/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612010
2. 23/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612010
3. 23/6/4 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
4. 23/6/4 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
5. 1076/5/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612006
6. 23/6/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612002
7. 1076/6/1 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
8. 1076/6/2 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
9. 23/6/4 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
10. 23/6/4 褐色シルト (褐色シルト) : S0612004
11. 3/6/3 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S0612006

第85図 第6次調査12区土階断面図①

12-5区



1. 耕作土
2. 10785/6 褐色砂質シルト：S0612020
3. 10786/2 頁岩褐色シルト：S0612020
4. 10786/2 頁岩褐色シルト：S0612020
5. 10785/4 褐色シルト：自然作土
6. 10785/2 頁岩褐色シルト：基本
7. 10785/6 頁岩褐色シルト：S0612020
8. 10785/6 頁岩褐色シルト：S0612020
9. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612020
10. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612020
11. 10786/2 頁岩褐色シルト：S0612020

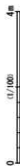
12. 10785/6 褐色砂質シルト
13. 10785/6 褐色砂質シルト
14. 10785/2 頁岩褐色シルト：耕作土
15. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612022
16. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612023
17. 10786/2 頁岩褐色シルト
18. 10786/2 に近い、黄褐色シルト：S0612025
19. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612025
20. 10785/3 に近い、黄褐色シルト：S0612025
21. 10786/2 頁岩褐色シルト：S0612021

33. 10785/4 に近い、黄褐色シルト：S0612025
34. 10784/2 頁岩褐色シルト
35. 10785/2 頁岩褐色シルト：S0612025
36. 10784/4 褐色シルト：S0612025
37. 10785/1 褐色シルト：S0612025
38. 10785/3 に近い、黄褐色シルト：S0612025
39. 10785/6 頁岩褐色シルト：S0612025
40. 10786/4 褐色砂質シルト：S0612025
41. 10784/4 褐色砂質シルト：S0612025
42. 10785/6 頁岩褐色シルト：S0612025
43. 10784/6 褐色砂質シルト：S0612025
44. 10787/4 に近い、黄褐色シルト：基層層

12-6区

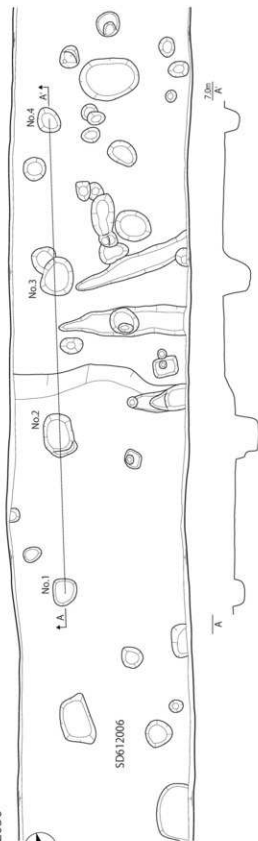


1. 耕作土
2. 10785/6 褐色砂質シルト：基本
3. 10785/3 に近い、黄褐色シルト：S0612024
4. 10787/4 に近い、黄褐色シルト：基層層

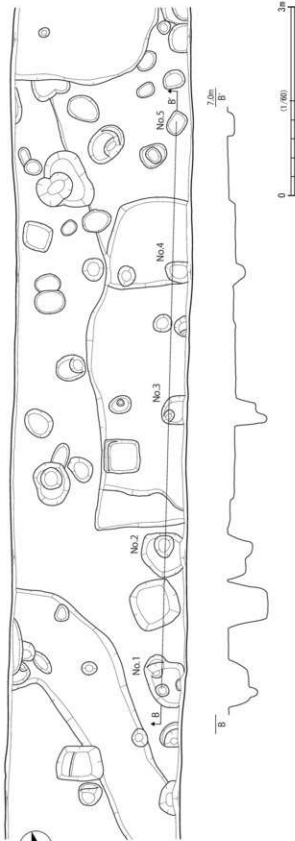


第86図 第6次調査12区土階断面図②

SA612030



SA612031



第6次調査12区柱列平面図・エレベーション図

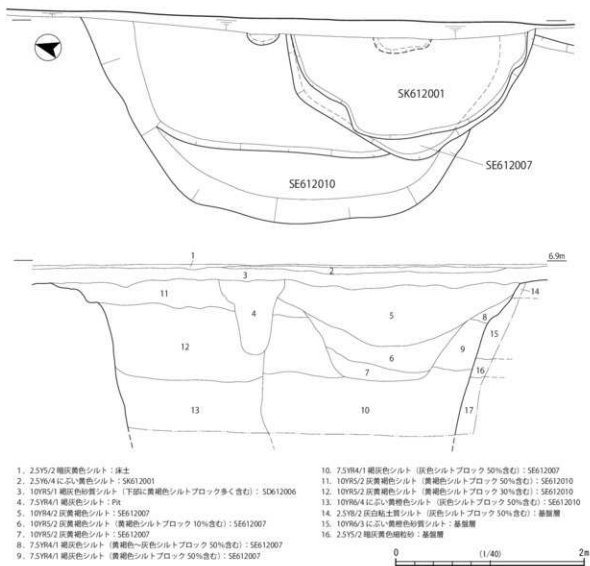
SE612007 (第88図) 12-4区中央部で検出された井戸である。SE612010の埋没後に掘り込まれており、SD612006とピットによって上面が削平を受けている。井戸の約半分が検出できたのみで、残りは調査区外へと広がっている。平面形状は、上面がピットおよびSD612006によって削平を受けているため、正確な形状は不明であるが、隅丸方形または崩れた円形になるとみられる。

検出面から約1.6mで湧水が認められ、調査における安全性の確保から、途中までの掘削で留めたため、最終的な深さは不明である。また、掘削の中で井戸枠を検出することはできなかった。

把握できた埋土は、大きく第5～7層と第8～10層に大きく分かれる。第5～7層は壁面の土層断面で井戸の側面に向かって大きく広がりながら堆積している。この堆積状況から井戸枠材の抜き取りに伴う埋土の可能性が高い。また想定される井戸の中心部が調査区外にあることから、井戸枠は調査区外に位置していたと推定される。第8～10層は掘形の埋土であり、いずれも黄褐色～灰色のシルトブロックを含む褐灰色シルトである。第10層は湧水によって層の下部がグライ化している。

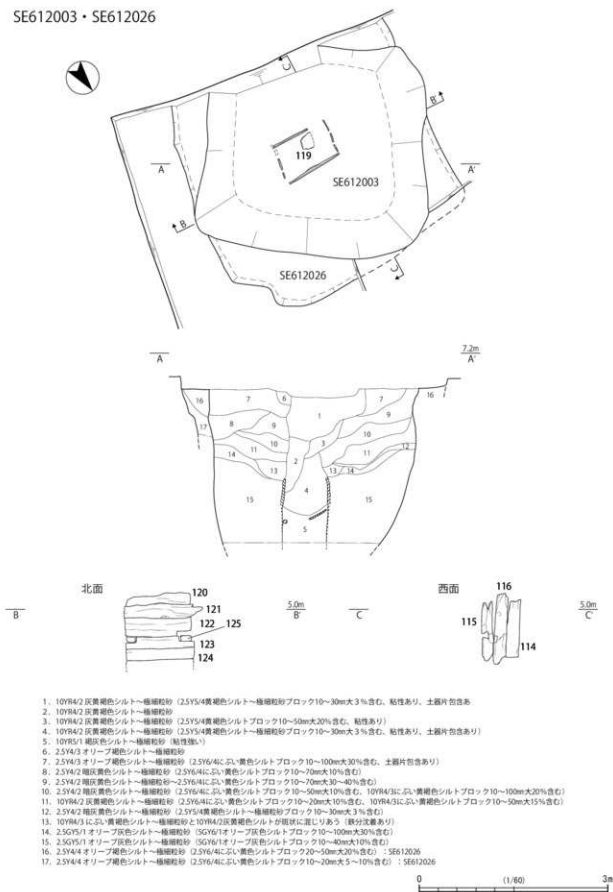
埋土中からは、土師器皿・甕、ロクロ土師器椀、製塩土器、須恵器壺、灰釉陶器壺、山茶碗、丸瓦が

SK612001・SE612007・SE612010



第88図 第6次調査12区井戸、土坑平面図・土層断面図

SE612003・SE612026



第89図 第6次調査12区井戸平面図・土層断面図・立面図

出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代後期と考えられる。

SE612010 (第88図) 12-4区中央部で検出された井戸である。SE612007とピットによって一部が削平を受けており、SD612006によって上面が削平されている。井戸の約半分を検出できたのみで、残りは調査区外に広がる。平面形状は、SE612007等に削平を受けているため、正確な形状は不明であるが、かなり形状が崩れた隅丸方形または円形になるとみられる。

SE612007と同様に検出面から1.6mで湧水が認められ、調査における安全性の確保から、途中までの掘削で留めたため、最終的な深さは不明である。また、掘削の中で井戸枠を検出することはできなかった。

把握できた埋土は3層であり、いずれも黄褐色のシルトブロックが混じるシルトである。このうち、第13層は湧水によって層の下部がグライ化している。各埋土はいずれも水平に堆積していることから、掘形埋土に相当すると考えられる。

埋土中からは、土師器皿・甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期と考えられる。

SE612017 (第90図) 12-2区西部で検出された井戸である。SE612032・SD612015の埋設後に掘り込まれている。井戸の約半分を検出できたのみで、残りは調査区外へと広がる。一辺の幅は3.3mを測る。平面形状は円形に近い隅丸方形になるとみられる。検出面から約1.5mで湧水が認められ、調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、最終的な深さは不明である。

検出面から約1.5mの深さのところまで井戸枠の存在を確認した。井戸枠は井戸本体と同様に調査区外の北側へ続いているため、約半分を把握できたに過ぎない。縦板・横板組の井戸枠と考えられ、井戸枠の幅は約0.6m前後である。南北面が縦板、東西面が横板の構成と考えられる。縦板の残存状態が悪く、部分的にしか把握できなかったが、横板を挟んだ前後に幅約0.16mの縦板を内側に6枚、外側にも同様の縦板が2枚残存していた。横板は上から3枚分が確認できたのみである。また、井戸枠内には、井

戸枠材の一部とみられる板材が出土した。

土層断面での埋土の堆積状況と井戸枠が検出できた深さ、井戸枠材の一部が井戸枠内から出土している状況から推測して、井戸枠上部の部材が抜き取られていたと考えられる。

把握できた埋土は6層であり、第3・4層が井戸枠材の抜き取りに伴う埋土、第5層が井戸枠内埋土、第6～8層が掘形埋土となる。このうち、第6層には礫、第7層には黄褐色のシルトブロック、第8層は粘土に砂を含む堆積層である。井戸の基礎層となる第14層は、粘土に砂と礫が混じった流路由来の堆積層と考えられるため、地下水脈を意識して埋設流路上に掘り込んだ可能性が考えられる。なお、検出面から深さ約1.5m以降は湧水によるグライ化が著しい。

井戸枠内の埋土からは、土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋、掘形埋土は土師器杯・鉢・甕・甕、須恵器杯蓋、埋土一括として土師器甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

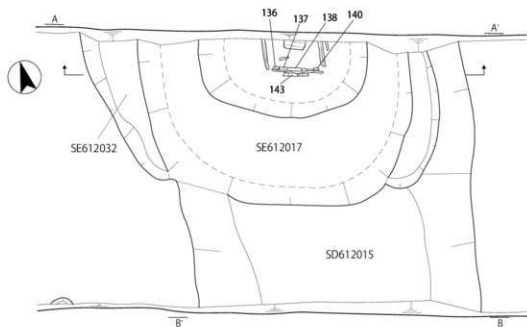
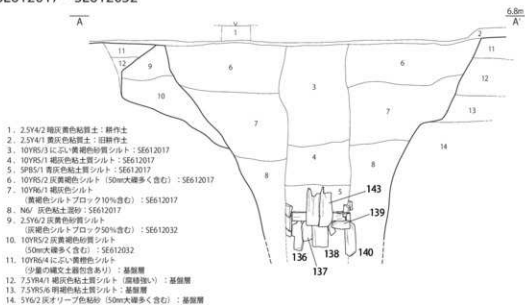
SE612026 (第89図) 12-3区東端部～12-4区南端部で検出された井戸である。SE612003がほぼ同じ場所に重複して造られており、井戸のほぼ中央部がSE612003によって壊されている。検出できたのは井戸の大半の部分であるが、一部が調査区の北側と南側へ広がっている。把握できる一辺の長さは4.0m前後であり、平面形状は方形または隅丸方形を呈しているとみられる。調査ではSE612003と一連で調査を行った。SE612003とほぼ重なるため、埋土もほぼ残存していないことから、断定はできないが、井戸枠は抜き取られている可能性が高いと考えられる。

把握できた埋土は2層であり、掘形埋土に相当する。いずれの埋土にもふい黄褐色のシルトブロックを多く含むオリーブ褐色のシルト～極細粒砂である。

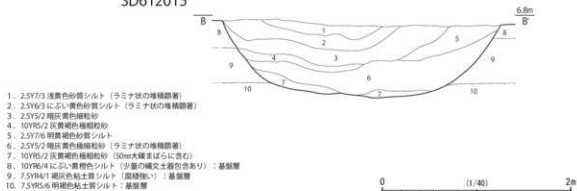
埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の明確な時期については不明だが、SE612003と重複していることから、少なくとも平安時代中期以前と推測される。

SE612032 (第90図) 12-2区西部で検出さ

SE612017・SE612032



SD612015



第90図 第6次調査12区井戸、溝平面図・土層断面図

れた井戸である。S D 612015の埋没後に掘り込まれており、S E 612017によって大部分が削平を受けている。同じ位置にS E 612017が重なって掘り込まれているため、検出できたのは掘形のごく一部分であり、井戸枠等の構造物も確認できなかった。井戸は、さらに調査区外へも広がっていると考えられる。平面形状については、不明である。

把握できた埋土は2層であり、いずれも灰黄褐色の砂質シルトで、灰褐色のシルトブロックや礫を多く含んでいる。

埋土からは遺物が出土しなかったため、詳細な遺構の時期は不明だが、S E 612017・S D 612015と重複しているため、少なくとも平安時代中期前後と考えられる。

(4) 溝

S D 612002 12-4区南部で検出された浅い溝である。S E 612007・612010などが埋没した後に掘り込まれている。幅約1.0m、深さ約0.05mを測り、やや蛇行しながら南北方向に延びて、調査区外へと続いている。底面からは、複数のピットが検出された。

埋土は、黄灰色砂質シルトである。埋土中からは、土師器杯・甕・台付甕、須臾器甕・壺、灰軸陶器壺が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期と考えられる。

S D 612004 12-4区南部で検出された溝である。幅約0.9m、深さ約0.15mを測り、東西方向に延びて調査区外へと続いている。

埋土は暗灰黄色シルトで、細粒砂を多く含んでおり、一定の流水があったと思われる。

埋土中からは土師器皿・甕、製塩土器が出土した。出土した遺物から平安時代後期～鎌倉時代と考えられる。

S D 612005 12-3区中央部で検出された溝である。幅約0.4mを測り、北東-南西方向に延びて調査区外へと続いている。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、遺構の時期は不明である。

S D 612006 12-4区北部～中央部にかけて検出した溝状の遺構である。S A 612030とS E

612007・61201が埋没した後に掘り込まれており、S K 612001によって一部が削平されている。溝として認識したが、落ち込み状の窪地に堆積した旧耕作土の可能性もある。

埋土は褐灰色砂質シルトで、底面付近の層中には黄褐色シルトブロックが多く含まれており、人為的にされた、または埋められた状況を顕著に示す。

埋土中からは、土師器皿・甕、ロクロ土師器椀、黒色土師器椀、山茶椀、軒丸瓦の丸瓦部が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期～末と考えられる。

S D 612008 12-4区北部で検出された溝である。幅約0.4m、深さ約0.05mを測り、東西方向に延びて、東側は調査区外へと続いている。

埋土は灰黄褐色シルトである。埋土中からは、土師器の小片が出土したが、遺構の時期は不明である。

S D 612011 (第91図) 12-2区東部で検出された溝である。S D 612013と近接するが、調査区南壁土層断面において前後関係は明らかでない。幅約0.6m、深さ約0.23mを測り、蛇行しながら、北西-南東方向に延びて、調査区外へと続く。

埋土は2層からなり、上層が褐灰色砂質土、下層が灰黄褐色砂質土である。

埋土中からは、灰軸陶器壺が出土した。平安時代と考えられる。

S D 612012 (第91図) 12-2区東部で検出された溝である。S D 612013が埋没した後に掘り込まれている。幅約0.5m、深さ約0.15mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。

埋土は、にぶい黄橙色砂質土の単層である。調査区南壁土層断面での埋土の堆積状況から、S D 612013の埋没過程における堆積差であった可能性も考えられる。

埋土中からは、土師器杯、須臾器の小片が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期前後と考えられる。

S D 612013 (第91図) 12-2区東部で検出された溝である。S D 612012によって一部が削平されており、S D 612011と近接するが、前後関係は不明である。幅約0.5m、深さ約0.2mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。

東西の両岸には、径0.1 m前後のピットが溝に沿うかたちで複数検出された。杭跡の可能性が考えられる。

埋土は大きく2層からなり、上層が灰黄褐色砂質土、下層が褐色砂質シルトである。

埋土中からは、灰軸陶器壺、蔽石が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SD612014 12-2区中央部で検出された溝である。幅約0.75 m、深さ約0.35 mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は、緩やかなU字形を呈している。

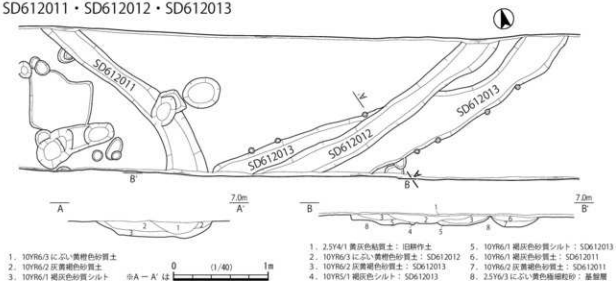
U字形を呈する。

埋土は3層からなり、いずれも黄褐色を主体とする砂質土である。

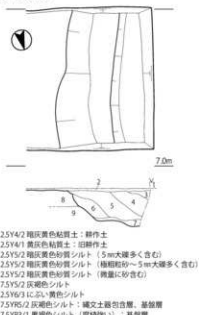
土師器壺小片が出土したが、詳細な時期は不明で平安時代としておく。

SD612015 (第90図) 12-2区西部で検出された溝である。S E 612017によって一部が削平されている。幅約3.0 m、深さ約0.8 mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は、緩やかなU字形を呈している。

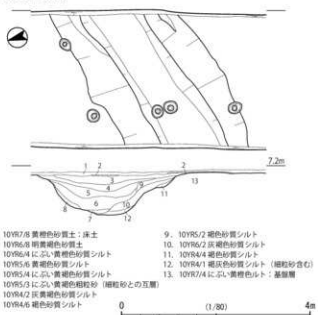
SD612011・SD612012・SD612013



SD612016



SD612020



第91図 第6次調査12区溝平面図・土層断面図

埋土は7層からなり、第1・2層がラミナ状の堆積状況を示すにぶい黄色を主体とする砂質シルト、第3・4・6・7層が暗灰黄色を主体とする細粒砂～極細粒砂を主体とする砂の堆積層である。底面直上に堆積する第7層には、他の層位よりも粒径が大きい砂が含まれている。全ての堆積層がラミナ状の堆積状況を示すことから、機能当初から水の流れが顕著にあり、常に流水を伴いながら埋没していったと考えられる。

埋土中からは、土師器杯・甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SD612016 (第91図) 12-2区西端で検出された溝である。深さ0.75m前後を測り、溝の東岸側を検出できたのみである。およそ南北方向に延びると考えられ、西岸側を含めて調査区外へと続いている。

断面形はU字形を呈し、底面は側面から1段低くなっていることから、2段掘りされている可能性がある。

埋土は、暗灰黄色を主体とする砂質シルトであり、第3～5層に極細粒砂や粒径の大きい砂が含まれる。

埋土中からは、土師器杯・壺・甕、山茶碗が出土しているが、山茶碗は混入であろう。遺構の時期は、平安時代前期と考えられる。

SD612018 12-1区東部で検出した溝である。溝と認識したが、流路の可能性はある。SD612027によって西岸部分が削平され、東岸も調査区外となるため、幅は不明である。また、調査における安全の確保から、平面および調査区南壁沿いの断割に留めたため、最終的な深さも不確定である。溝は、東に向かって緩やかに広がりながら、徐々に深くなっており、最深部は調査区外に位置していると考えられる。

埋土は、砂礫を含むシルトや細粒砂～粗粒砂の堆積が複数確認でき、砂が運ばれるような水の流れがあったものと思われる。

埋土中からは、土師器台付甕とみられる小片が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、古墳時代前期～中期と考えられる。

なお、位置関係から13-1区で検出されたSR613002と同一あるいは関連性の高い遺構の可能性はある。

SD612019 12-1区東部で検出された溝である。SD612018と同様に溝と認識したが、流路の可能性はある。SD612028によって東岸部分が削平され、西岸も調査区外となるため、幅は不明である。また、調査における安全の確保から、平面および調査区南壁沿いの断割に留めたため、最終的な深さも不確定である。溝は、東に向かって緩やかに広がりながら、徐々に深くなる。

埋土は、暗灰褐色シルトであり、黒褐色～暗褐色のシルトブロックと細粒砂を含む。シルトブロックは、遺構の基礎層となる第11層が削り込まれた結果、混じったものと考えられる。

埋土中からは、土師器甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代と考えられる。

なお、位置関係からSD612018と同様に、13区SR613002に繋がる、または関連性が高い遺構である可能性があると考えられる。

SD612020 (第91図) 12-5区北端部で検出された溝である。幅約25m、深さ約0.84mを測り、東西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈するが、ところによりテラス状の段を有している。

埋土は、第3～8層が黄褐色系の砂質シルト～砂、第9～12層が褐色～灰褐色の砂質シルトであり、大きく分かれる。また、第5層は第9層を掘り込むかたちで堆積していることから、掘り直しが行われているものと考えられる。また掘り直しが行われた後に堆積する第6層は、粗粒砂と細粒砂の互層の状態を示すことから、顕著な流水があったと思われる。

埋土中からは、土師器碗・甕・瓶が出土した。このうちの土師器碗は古墳時代後期にかけてのものと考えられ、甕も古相を示すことから、この溝の時期は古墳時代後期と考えられる。

SD612021 12-5区北部で検出された溝である。SR612025が埋没した後に掘り込まれている。幅約0.9m、深さ約0.45mを測り、東西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は2層からなり、にぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。

埋土中からは、須恵器甕が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、奈良～平安時代前期と考えられる。

S D 612022 12-5区南部で検出された溝である。S R 612025 が埋没した後に掘り込まれている。幅約0.45 m、深さ約0.23 mを測り、やや蛇行しながら東西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。

埋土中からは、灰軸陶器皿が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期と考えられる。

S D 612023 12-5区南部で検出された溝である。幅約0.6 m、深さ約0.35 mを測り、東西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、時期については不明であり、遺構の時期も明らかでない。

S D 612024 12-6区で検出された溝である。幅約0.82 m、深さ約0.22 mを測り、北西-南東方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅いU字形を呈している。

埋土は、黄褐色シルトの単層である。

埋土中からは、土師器の小片が出土したが、時期は不明であり、遺構の時期も明らかでない。

S D 612027 12-1区中央部で検出された溝である。S D 612018 の西岸とS D 612028 が埋没した後に掘り込まれている。溝として認識したが、S D 612018・S D 612019 と重複および近接していることから、これら2つの溝の一部あるいは堆積層差である可能性がある。幅約1.0 m、深さ約0.1 mで、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は、浅い皿状を呈している。

埋土は暗褐色シルトの単層で、遺構の基盤層由来と考えられる黒褐色シルトブロックを含む。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明であるが、S D 612018 を切り込むことから、少なくとも古墳時代中期以後と考えられる。

S D 612028 12-1区中央部で検出された溝で

ある。S D 612019 が埋没した後に掘り込まれており、S D 612027 によって一部を削平されている。溝として認識したが、S D 612027 と同様にS D 612018・S D 612019 と重複および近接していることから、これら2つの溝の一部あるいは堆積層差である可能性がある。幅約0.9 m、深さ約0.18 mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は2層からなり、上層ににぶい黄褐色シルト、下層に褐灰色粗砂が堆積する。

埋土中からは遺物が出土していないため、遺構の時期は不明だが、S D 612019 との重複関係から、平安時代以後と考えられる。

S D 612029 12-5区北部で検出された溝である。幅約1.0 m、深さ約0.23 mを測り、北東-南西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は、浅いU字形を呈している。

埋土は3層からなり、黄褐色を主体とする砂質シルトで、細粒砂を含む。

埋土中からは、遺物が出土していないため、時期については不明である。

(5) 流路

S R 612025 12-5区中央部～南部にかけて検出された流路である。S D 612021 は流路の北岸、S D 612022 は流路の南岸に重複しながら削平している。幅約30 m前後を測り、東西方向に延びて、調査区外へと続いている。

検出時に大規模な流路であることが判明した。流路すべてを人力で掘削するのが困難であったことから、調査区東壁沿いで断割を行い、層位と遺物の有無を確認した後、最終的には可能な深度まで人力で補助しながら重機を用いて掘削を行った。しかし、安全上の問題から流路の完掘と底面までの深さを確認することができなかった。

埋土は、褐灰色や灰黄色を主体とする複数のシルトからなる。このうち、第30層が第32層から、第38層が第40層から、第41層が第42層から切り込むかたちで堆積しており、複数の流路堆積が重複していると考えられる。各堆積層は、シルトを主体としており、砂のみで構成される層位を確認すること

ができなかった。そのため、積極的に激しい流水を伴いながら埋没していないと思われる。

埋土中からは、大量の遺物が出土した。遺物は検出段階および断削の掘削段階を含めて確認でき、最終的には重機による掘削から出土したものが多いため、このような調査状況であったことから、出土層位ごとの取り上げをすることができなかつたため、遺物は流路内埋土として一括して取り上げざるを得なかつた。

出土した遺物は、人力・重機掘削時と断削掘削時の遺物に分かれる。人力・重機掘削時には、土師器杯・椀・皿・甕・鉢・瓶、製塩土器、須恵器杯・横瓶・甕、灰軸陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀、陶器椀、山茶椀、平瓦、敲石が出土した。断削掘削時には、弥生土器甕、土師器杯・椀・皿・高杯・甕・台付甕・瓶、ロクロ土師器椀、製塩土器、須恵器杯・壺・椀、灰軸陶器椀・皿、緑釉陶器椀、山茶椀が出土した。

これらの出土した遺物から、流路の埋没最終時期は平安時代後期～鎌倉時代前期と考えられるが、一部に弥生土器と古墳時代の土師器が出土していることから、流路の形成は弥生時代末～古墳時代前期に遡る可能性がある。

(6) 土坑

S K612001 (第88図) 12-4区中央部で検出された土坑である。S E 612007・612010とS D 612006と重複し、S D 612006が埋没した後に掘り込まれている。径約2.5m、深さ約0.08mを測り、半分は調査区外へと広がっている。平面形状は、楕円形または崩れた円形であると考えられ、断面形状は浅い皿状を呈している。土坑として認識したが、深さが浅いことから、本来は落ち込みの可能性がある。

埋土は、にぶい黄色シルトの単層である。埋土中からは、土師器甕、山茶椀が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代末頃と考えられる。

(7) ビット

ホ-014Pit5 (第92図) 12-4区中央部で検出されたビットである。長径0.66m、短径0.55m、深さ約0.6mを測る。平面形状は楕円形を呈し、東

側面にはテラス状の段を有している。ビットとして認識したが、深さや後述する出土遺物の状況から、土坑の可能性がある。

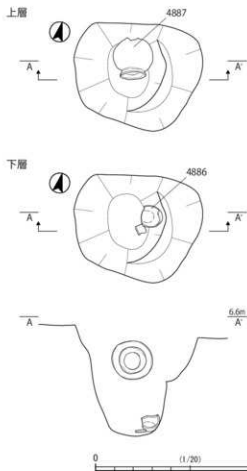
埋土は褐色～灰褐色のシルトで、黄褐色のシルトブロックを含んでいる。

埋土上層からは土師器台付甕(4887)が脚台部を欠いた状態で横になった状態で出土し、埋土下層の底面直上からは土師器椀(4886)が底部を下にした状態で出土した。また、台付甕の脚台部も埋土中から出土したことから、ほぼ完形に復元が可能である。

このような遺物の出土状況から、意図的に土師器椀と台付甕がビット内に置かれたものと推測され、ビットを埋める段階で埋める土器の種類を分けていると考えられる。

出土した遺物から遺構の時期は、古墳時代中期～後期と考えられる。(渡辺)

ホ-O14 Pit 5



第92図 第6次調査12区Pit5遺物出土状況図・立面図

13. 13区

(1) 層序

13区は南北に長い調査区で、標高が南部になるほど高くなっている。北部(13-1区)は標高約62mで、南部(13-3区)は標高約69mである。北部・南部ともに表土直下が基盤層であり、北部の基盤層は褐色シルトで調査区中央部になると暗褐色シルトの基盤層が上に堆積する。南部の13-3区では基盤層が暗赤褐色シルトとなる。

(2) 井戸

SE613001 (第96図) 13-2区で検出された幅約27mの方形とみられる井戸である。結物の井戸枠で、底部には水溜用に2段の曲物が据えられている。上部には0.3～0.4m大の石が円形の井戸枠に沿って配列されている。石組の抜取残とするには土層の乱れが少なく無理があり、この石群が井戸の構造材かどうかは不明である。

SE613003・SD613013と重複し、それより新しい。土師器鍋、山茶碗が出土し、鎌倉時代と考えられる。

SE613003 13-2区で検出された井戸である。大部分をSE613001に切られており、規模は不明である。SD613013より新しい。土師器小片が出土したが、時代は不明である。

(3) 溝

SD613004 13-2区北部で検出された溝である。幅約12m、深さ約0.35mを測り、やや蛇行しながら南北に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は皿状を呈しており、底面から側面への立ち上がりは緩やかである。

埋土は2層からなり、灰黄色細粒砂と粗粒砂との互層の状況を示す。このような層相から、埋没最終段階まで、常に流水状態であったと思われる。

埋土中からは、土師器高杯・小型器台・台付壺が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、古墳時代前期と考えられる。

SD613005 13-2区北部で検出された溝であ

る。同規模の溝と直交し、それより先行する。幅約0.15m、深さ約0.12mを測り、東西方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状は、浅いU字形を呈している。

埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD613007 (第97図) 13-2区中央部で検出された溝である。SD613005・SR613006が埋没した後掘り込まれている。幅約0.6～1.1m、深さ約0.2～0.4mを測り、幅・深さともに一定ではない。調査区外の東側から蛇行して北に向かって延びており、調査区外の北側へも続いている。断面形状はU字形を呈しているが、深さが浅いところは皿状に近い形状である。

埋土は2～3層からなり、粘性の強い橙色粘質土と灰黄褐色シルトである。ところにより灰黄褐色シルト中に砂を含んでいるが、安定的なシルト層が主体であることから、積極的な流水痕跡を確認できなかった。

埋土中からは、土師器皿・鍋、クワ土師器碗、山茶碗が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、鎌倉時代前期と考えられる。

SD613008 (第98図) 13-2区北部で検出された溝である。SR613006が埋没した後掘り込まれている。幅約1.0m、深さ約0.4mを測り、北西-南東方向に延びて、調査区外へも続いている。断面形状はU字形を呈しているが、兩岸の一部にはテラス状の段を有しており、底面は1段さらに深い。

埋土は6層からなり、褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色の砂質土～細粒砂である。このうち、第26層が第29層を切り込むかたちで堆積していることから、掘り直しが行われている可能性が高いと考えられる。よって埋土は第26～28層と第29～31層の大きな2つの単位に分けられる。

埋土中からは、平安時代中期の土師器杯等が出土しているものの山茶碗も混在し、遺構の時期を平安時代末期まで下げざるを得ない。

SD613009 13-2区南部で検出された溝であ

る。幅約1.0 m、深さ約0.05 mを測り、南北方向に延びるが、南端は西へと屈曲して短く延びて止まる。南端の平面形状は不整形である。断面形状は浅い皿状で、底面には凹凸があり平坦ではない。このような状況から、溝として認識したものの、浅い落ち込み状の遺構の可能性も考えられる。

埋土は、明褐色粘質土の単層である。埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD613011 13-3区のはほぼ全域にわたって検出された溝である。SR 613012が埋没した後に掘り込まれている。幅約0.6 m、深さ約0.1 mを測り、調査区に沿った条里方向に延びている。調査区外の南から続いており、調査区内では1箇所で途切れ、間隔を置いて続くが、調査区北部で収束する。断面形状は浅い皿状を呈している。

埋土は、褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土せず、重複するSR 613012からも出土していないことから、遺構の時期は不明であるが、埋土の状況等から、中世以降である可能性が考えられる。

SD613013 (第98図) 13-2区北部で検出された溝である。SE 6134001・SR 613002と重複し、SE 613001によって一部が削平されている。溝として認識したが、SR 613002と重複しているため判然としなかったことから、SR 613002と同一または支流となる流路の一部である可能性も考えられる。幅を含めた規模は不明であり、深さについても調査における安全性の確保から、途中までしか掘削することができなかったため、不明である。検出された南岸の状況から、北西-南東方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。

埋土は、褐色～黄褐色を主体とする複数の砂質シルトと細粒砂から構成されており、上層がシルト、下層が礫も含む細粒砂～粗粒砂と大きく分かれている。このような上層と下層の堆積層の差から、下層の段階は顕著な流水があり、上層の段階には下層に比べて激しい流水ではなかった様子が窺える。

埋土中からは、土師器杯が出土した。出土した遺物から遺構の時期は、平安時代中期以降と考えられる。

SD613015 13-2区中央部で検出された溝である。SD 613007によって一部が削平されている。また、SR 613006は調査区西壁土層断面において、堆積層が上に重なっていることから、SR 613006よりも古い。幅約0.3 m、深さ約0.15 mを測り、SR 613006に沿いながら北西-南東方向に延びて、調査区外へも続いている。断面形状は浅いU字形を呈している。

埋土は、灰黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明であるが、SD 613007との重複関係から、少なくとも鎌倉時代以前と考えられる。

SD613016 13-2区北部で検出された溝である。SR 613002によって一部が削平されている。幅約1.6 m、深さ約0.4 mを測り、南北方向に延びて、調査区外へと続いている。断面形状はU字形であり、底面が平坦で、側面への立ち上がりは急である。

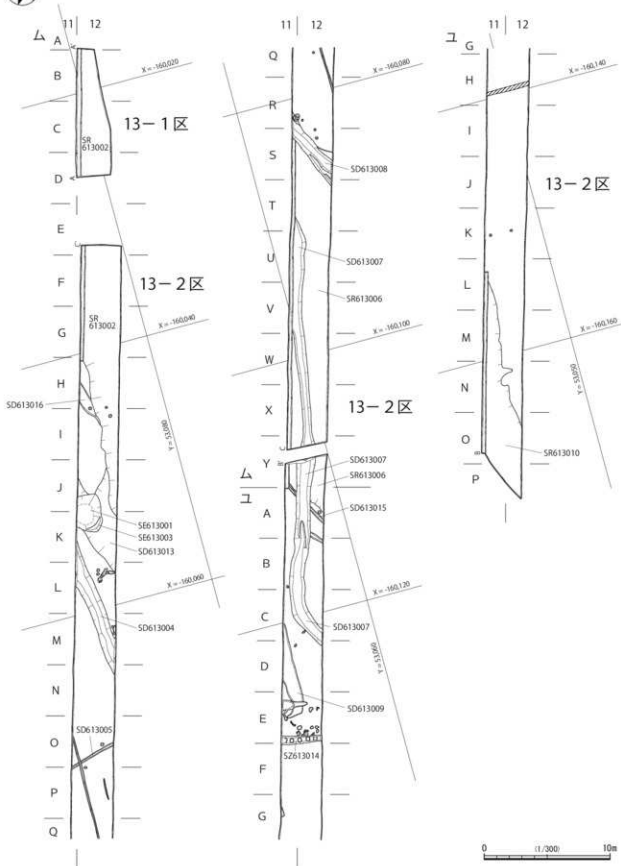
埋土は4層からなり、にぶい黄褐色を主体とする砂質シルトから構成されており、第49層のみが細粒砂である。

埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明であるが、SR 613002との重複関係から、少なくとも平安時代後期以前であると考えられる。

(4) 流路

SR613002 (第98図) 13-1区の全面と2区北部にかけて検出された流路である。SD 613013と重複しており、SD 613013が埋没した後に掘り込まれているとみられる。西岸を検出することができたが、東岸は13-1区の調査区外北東側にあるとみられ、幅を含めた規模は不明である。13-2区で検出することができた西岸の方向から、南北方向に延びて調査区外へと続いている。調査における安全性の確保から、途中までしか掘削ができなかったため、深さについても不明である。13-1区の西壁土層断面で、底面が徐々に上がっていく様子を確認できることから、最深部は13-1-2区間にあると思われる。

埋土は複数層からなり、砂質が強いシルト、細粒砂、粗粒砂、礫が複雑に堆積しており、いずれの堆



第93図 第6次調査13区平面図①

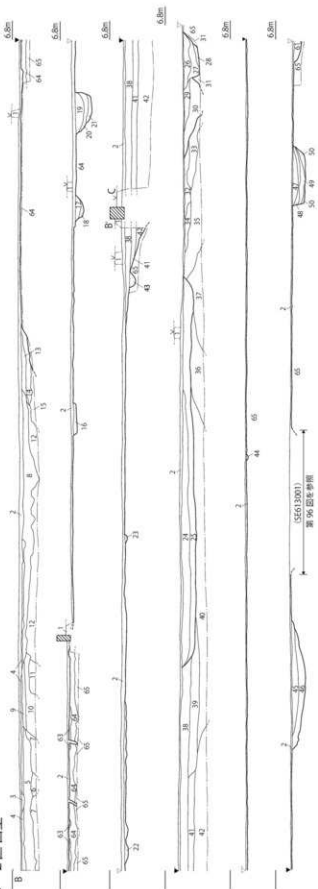
13-1区西壁



1. 25YR5/1 褐色砂質粘土・粘り土
2. 25YR6/0 野原粘質土
3. 25YR6/2 野原粘質土 (7.5YR4.4/2.6黄土プロック含む) : S613002
4. 25YR5/1 褐色砂質シルト (埋没層含む) : S613002
5. 25YR5/2 灰黄色砂質シルト
6. 25YR7/1 黄褐色粘砂 (埋没層含む) : S613002
7. 25YR8/1 黄褐色粘砂 (埋没層含む) : S613002
8. 25YR8/2 灰褐色砂質シルト : S613002

9. 25YR3/0 暗褐色粘砂 (埋没層含む) : S613002
10. 25YR2/1 暗褐色粘砂 (埋没層含む) : S613002
11. 10YR6/4 に近い黄褐色粘土 : S613002
12. 10YR5/2 灰黄色粘砂質シルト
13. 10YR5/3 黄褐色粘砂質シルト
14. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
15. 10YR3/3 暗褐色粘砂 (埋没層含む) : S613002
16. 25YR5/4 暗褐色粘砂 : 埋没層

13-2区西壁



24. 10YR6/2 灰黄褐色粘砂 : S613007
25. 10YR5/2 灰黄褐色粘砂質シルト : S613007
26. 10YR6/1 黄褐色粘砂質シルト : S613008
27. 10YR6/1 黄褐色粘砂質シルト : S613008
28. 10YR6/1 に近い黄褐色粘砂 : S613008
29. 10YR5/1 に近い黄褐色粘砂 : S613008
30. 10YR5/2 灰黄褐色粘砂 : S613008
31. 10YR5/2 灰黄褐色粘砂質シルト : S613008
32. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 : S613006
33. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂 : S613006
34. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂 : S613006
35. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
36. 10YR6/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
37. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
38. 10YR7/1 黄褐色粘砂 : S613006
39. 10YR6/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
40. 10YR6/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
41. 10YR7/2 に近い黄褐色粘砂 : S613006
42. 10YR7/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
43. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006
44. 10YR7/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613006

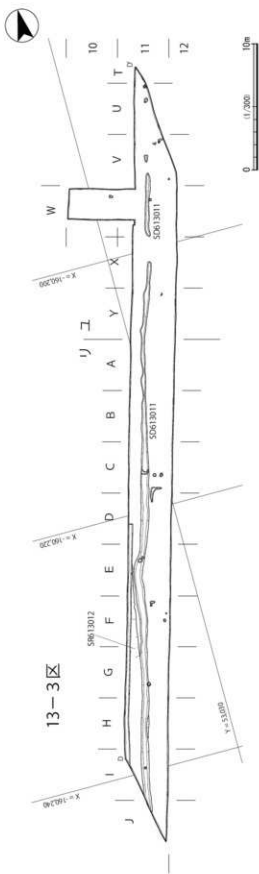
45. 10YR6/2 灰黄褐色粘砂 (埋没層含む) : S613004
46. 10YR5/2 灰黄褐色粘砂 (埋没層含む) : S613004
47. 10YR7/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613016
48. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613016
49. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂質シルト (黄土プロック含む) : S613016
50. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
51. 10YR4/4 硬砂質シルト : S613002
52. 10YR4/4 硬砂質シルト : S613002
53. 10YR4/4 硬砂質シルト : S613002
54. 10YR4/6 硬砂質シルト : S613002
55. 10YR6/6 硬砂質シルト : S613002
56. 10YR6/6 硬砂質シルト : S613002
57. 10YR5/6 黄褐色粘砂質シルト (埋没層含む) : S613002
58. 10YR6/4 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
59. 10YR4/3 に近い黄褐色粘砂質シルト (埋没層含む) : S613002
60. 10YR4/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
61. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
62. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613002
63. 25YR4/3 硬砂質シルト : 埋没層
64. 25YR4/3 硬砂質シルト : 埋没層
65. 25YR4/4 硬砂質シルト : 埋没層



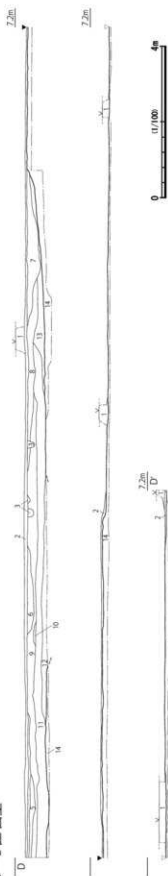
12. 10YR5/3 に近い黄褐色粘砂 : S613010
13. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613010
14. 10YR6/3 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613010
15. 10YR6/2 に近い黄褐色粘砂質シルト : S613010
16. 10YR6/2 灰黄褐色粘砂質シルト (10YR4.1/1.6黄土プロック含む) : S613010
17. 10YR7/2 に近い黄褐色粘砂質シルト
18. 10YR7/1 黄褐色粘砂質土 : S613014
19. 10YR7/1 黄褐色粘砂質土 : S613014
20. 25YR3/2 黄褐色粘質土 : S613014
21. 25YR3/2 黄褐色粘質土 : S613014
22. 25YR3/2 黄褐色粘質土 : S613014
23. 10YR7/4 に近い黄褐色粘砂質シルト

1. 25YR5/1 褐色砂質粘土・粘り土
2. 25YR6/0 野原粘質土
3. 灰黄色黄土プロック含む : S613010
4. 10YR6/1 黄褐色粘砂質シルト : S613010
5. 10YR6/2 灰黄褐色粘砂質シルト : S613010
6. 10YR6/2 灰黄褐色粘砂質シルト : S613010
7. 10YR7/2 に近い黄褐色粘砂質シルト
8. 10YR7/1 黄褐色粘砂質土 : S613014
9. 10YR7/1 黄褐色粘砂質土 : S613014
10. 25YR3/2 黄褐色粘質土 : S613014
11. 10YR4/3 硬砂質シルト : S613010

第9図 第6次調査13区土層断面①



13-3区西壁

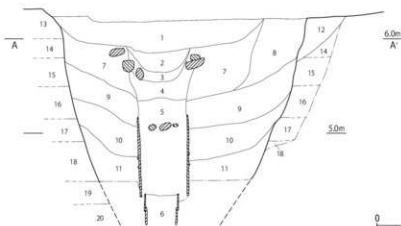
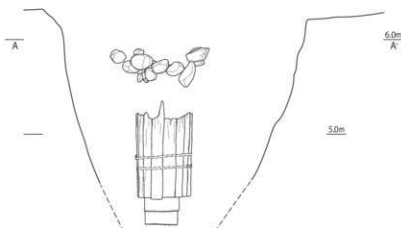
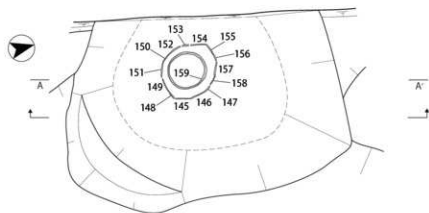
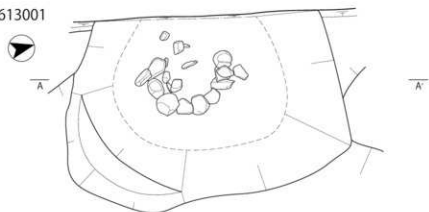


1. 7598/1 褐色砂質土・雑草土
2. 7598/1 褐色砂質土・雑草土
3. 10785/1 褐色砂質土
4. 10785/2 褐色砂質土
5. 10785/2 褐色砂質土
6. 10785/2 褐色砂質土
7. 10785/2 褐色砂質土

8. 10785/1 褐色砂質土
9. 10785/2 褐色砂質土
10. 10785/1 褐色砂質土
11. 10785/2 褐色砂質土
12. 10785/1 褐色砂質土
13. 10785/2 褐色砂質土
14. 10785/1 褐色砂質土

第95図 第6次調査13区平面図・土層断面図②

SE613001

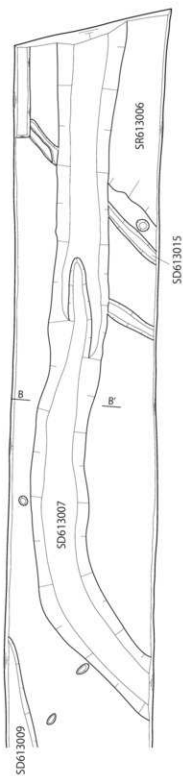
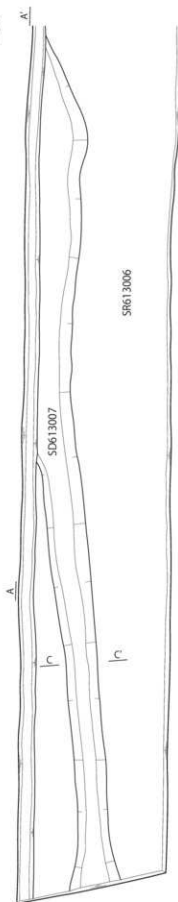


1. 10YR6/8 暗灰色砂質土
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
3. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト
4. 10YR3/3 暗褐色シルト
5. 10YR5/3 に近い褐色塊 (100 ~ 200 mm 径石が詰まる)
6. 10BG4/1 暗黄灰色シルト
7. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
8. 10YR6/3 に近い黄褐色砂質土
9. SPB4/1 暗黄灰色砂質土
10. SPB3/1 暗黄灰色シルト
11. SP3/1 暗黄灰色粘質シルト
12. 2.5YR6/2 灰黄褐色砂質シルト
13. 7.5YR4/4 褐色シルト：基礎層
14. 7.5YR5/4 に近い褐色シルト：基礎層
15. 10YR6/6 黄褐色粘質シルト：基礎層
16. 10YR6/8 暗黄褐色シルト：基礎層
17. 10G7B/1 暗緑灰色シルト：基礎層
18. SPB6/1 黄灰色シルト：基礎層
19. 5YR5/6 明黄褐色塊 (圓粒砂含む)：基礎層
20. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト：基礎層

0 (1/40) 2m

第96図 第6次調査13区井戸平面図・土層断面図・立面図

SD613007



SD613007



1. 1079622 瓦葺埋蔵シロト : SD613007
2. 1079572 瓦葺埋蔵6層シロト : SD613007
3. 23357 刀部黒色シロト (1079534埋蔵シロト 5%含む) : SD613007
4. 1079562 瓦葺埋蔵シロト
5. 1079622 瓦葺埋蔵シロト
6. 1079634 土管埋蔵シロト
7. 1079634 土管埋蔵シロト
8. 1079534 土管埋蔵シロト
9. 1079523 土管埋蔵シロト

第97図 第6次調査13区溝、城跡平面図・土層断面図

積層中にも砂が含まれている。このうち、13-1区西壁土層断面で把握された第9・10・12・15層は、粒径の大きい砂および礫から形成されており、流路の東側に砂の堆積層が集中している。さらに、13-1区西壁土層断面の第3～6層は、南に向かって落ち込みながら堆積する一方、第9・10・12・13層は、北に落ち込んでいく堆積状況を示すことから、埋没単位が異なる可能性が指摘できる。これらの層相から、2つ以上の埋没単位が想定できるとともに複数の流路が重なっている可能性も考えられる。

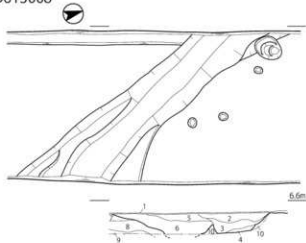
埋土中からは、土師器杯・皿・甕・把手、製塩土器、須恵器壺、灰釉陶器皿、山茶碗が出土したほか、

S字状口縁台付甕の小片が出土した。

出土した遺物から、最終的には平安時代後期～鎌倉時代前期に埋没したと考えられる。またS字状口縁台付甕が出土していることから、混入の可能性もあるものの、古墳時代前期まで遡る可能性を考慮しなければならぬ。

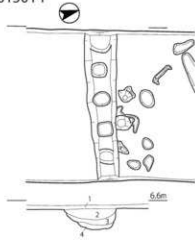
SR613006 13-2区北部～中央部にかけて検出された流路である。SD 613004・613007・613008によって一部が削平されている。SD 613007と東岸が重複しており、平面で東岸については判然としなかった。しかし、13-2区西壁土層断面における状況から東岸はSD 613007の東岸とほぼ重なっ

SD613008



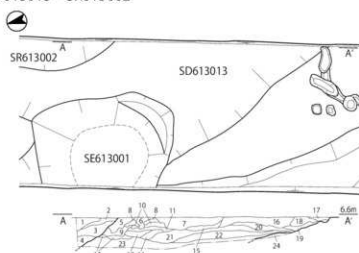
1. 7.5YR6/6 褐色粘質土
2. 10YR6/1 褐色色砂質土：SD613008
3. 10YR6/2 灰黄褐色色砂質土：SD613008
4. 10YR6/3 に近い黄褐色色砂質土：SD613008
5. 10YR6/1 褐色色粘粒砂：SD613008
6. 10YR6/2 灰黄褐色色粘粒砂：SD613008
7. 10YR6/2 灰黄褐色色砂質土
8. 10YR6/3 に近い黄褐色色粘粒砂
9. 10YR6/4 に近い黄褐色色シルト
10. 10YR6/3 に近い黄褐色色砂質土

SZ613014

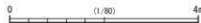


1. 7.5YR6/6 褐色粘質土
2. 10YR7/1 灰白色砂質土：SZ613014
3. 7.5YR2/2 黄褐色粘質土：SZ613014
4. 7.5YR2/2 黄褐色色砂質土：SZ613014

SD613013・SR613002



1. 10YR7/2 に近い黄褐色シルト：SR613002
2. 10YR6/4 に近い黄褐色粘粒砂：SR613002
3. 10YR5/4 に近い黄褐色粘粒砂：SR613002
4. 10YR5/6 黄褐色粘粒土：SR613002
5. 10YR6/6 黄褐色粘粒砂質シルト：SD613013
6. 10YR6/4 に近い黄褐色色砂質シルト：SD613013
7. 10YR6/3 に近い黄褐色色砂質シルト：SD613013
8. 10YR6/6 褐色シルト：SD613013
9. 10YR5/6 黄褐色シルト：SD613013
10. 10YR7/4 に近い黄褐色シルト：SD613013
11. 10YR5/3 に近い黄褐色粘粒砂：SD613013
12. 10YR4/4 褐色粘粒砂：SD613013
13. 10YR6/3 に近い黄褐色粘粒砂：SD613013
14. 10YR6/2 灰黄褐色粘粒砂：SD613013
15. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト：SD613013
16. 10YR7/6 黄褐色粘粒シルト：SD613013
17. 10YR4/4 褐色シルト：SD613013
18. 10YR4/3 褐色粘粒砂：SD613013
19. 10YR7/3 に近い黄褐色色砂質シルト：SD613013
20. 10YR4/2 灰黄褐色粘粒砂・礫混合石：SD613013
21. 10YR6/6 褐色粘粒砂：SD613013
22. 10YR4/4 褐色粘粒砂：SD613013
23. 10YR5/2 灰黄褐色粘粒砂：SD613013
24. 7.5YR4/4 褐色シルト：基礎層



第98図 第6次調査13区溝、流路、道路状遺構横平面図・土層断面図

てしまっているとみられる。幅約220mを測り、検出された西岸の方向から北西～南東方向に延びて、調査区外へと続いている。調査における安全性の確保から、途中までしか掘削ができなかったため、深さについては不明である。

埋土は複数層からなり、にぶい黄褐色を主体とするシルトと細粒砂から構成されている。このうち、第32層～35層が北に向かって落ち込むように堆積しているのに対し、第36・38～42層が南に向かって落ち込むように堆積していることから、2つ以上の埋没単位が確認でき、流路が重複している可能性が考えられる。埋土はシルトの堆積層が主体であることから、埋没最終段階に激しい流水に伴って埋没していない可能性が高いと思われる。

埋土中からは、土師器杯・甕、黒色土器皿、灰釉陶器椀、平瓦、敲石が出土した。これら出土した遺物から、少なくとも平安時代中期～後期にかけて最終的に埋没したと考えられる。

SR613010 13-2区南端部で検出された流路である。検出できたのは東岸のみであり、西岸については、調査区外の南西側にあるみられ、幅については不明である。東岸が延びる方向から、南北方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。調査における安全性の確保から、途中までしか掘削ができなかったため、深さについても不明である。

埋土は複数層からなり、灰褐色や褐灰色を主体とするシルトと砂質シルトで構成されており、全て南に向かって落ち込む堆積状況を示す。このうち、第5・7層が第9層、第8層が第10層、第10層が第12層をそれぞれ切り込むかたちで堆積していることから、2つ以上の埋没単位が確認でき、複数の流路が重複している可能性も考えられる。

埋土中からは、土師器甕が出土した。出土した遺物が少ないため、確定的ではないが、少なくとも平安時代中期以降に最終的に埋没したと考えられる。

SR613012 13-3区南端部で検出された流路である。SD613011によって一部が削平されており、東岸の一部はSD613011と重複する。東岸を検出できたのみで、西岸は調査区外西側にあるものとみられ、幅については不明である。東岸が延びる方向から、南北方向に延びると考えられ、調査区外

へも続いている。他の流路と同様に、調査における安全性の確保から、途中までしか掘削することができず、調査区西壁沿いの削削で、一部の底面を確認したが、最深部の深さについては不明である。

埋土は複数層からなり、灰黄褐色・にぶい黄褐色・褐灰色を主体とするシルトが複雑に堆積している。このうち、第12層のみ裸層である。第7・8層が北に向かって落ち込みながら堆積するが、他の埋土は南に向かって堆積しており、埋没単位が分かれる。第8層は、第9層を切り込むかたちで堆積するが、切り込むラインが緩やかであることから、流路内での堆積差の可能性が高い。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

(5) その他

SZ613014 (第98図) 13-2区中央部で検出された幅約0.7mの性格不明の溝状遺構である。北東～南西方向に延びており、調査区外へと続いている。また条里の方向とも重なる。溝状の底面では、径0.3m前後で深さ0.1m前後の円形のピットを検出し、いわゆる波板状の凹凸痕跡の可能性が高い。ピットは、0.6m間隔で存在しているが、検出した調査区幅が狭いため、確定的ではない。

溝状に窪む遺構の埋土は、灰黄褐色シルトの単層であり、凹凸を構成するピットの埋土は細かく3層に分かれ、灰白色砂質土、黒褐色粘土、黒褐色砂質土の順に堆積する。

溝状の遺構埋土およびピットの埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

いわゆる波板状の凹凸痕跡については、道路状遺構として認識されることが一般的である。しかし、SZ613014については、路面に相当する面やこれに並行して沿う溝の存在が確認できないことから、現状では道路状遺構であるとも断定しがたいと思われる。(谷口・渡辺)

【註】

- ① SR613002の幅は、調査区で検出している長さから、少なくとも35m以上の幅を持つと考えられる。また

S D 613013 も S R 613002 の一部の可能性もあり、また
12 - 1 区で検出されている S D 612018・612019 との関

連性も想定できるため、大規模な流路であると思われる。

14. 14 区

(1) 層序

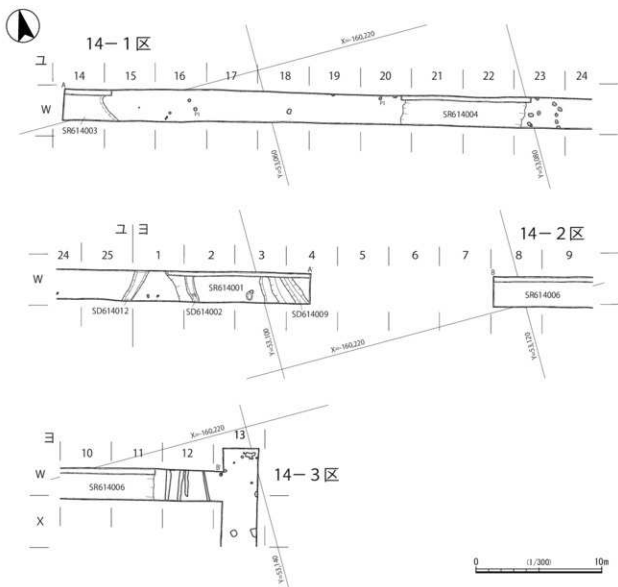
14 区は今回の調査域の最も南側に位置する。5
地区に细分されるが、全体的に L 字状を呈する細長
い調査区である。

全域において耕作土の大半が除去されており、正
確な現況は不明であるが、標高 7 ~ 7.4 m の水田で
ある。遺構検出は耕作土及び床土を除去した暗褐色
のシルト系土層上面で行った。したがって、遺物包

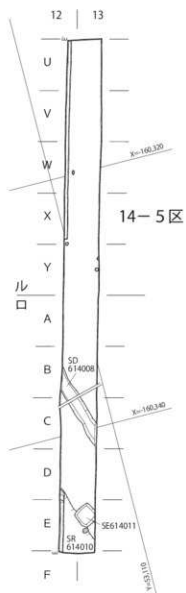
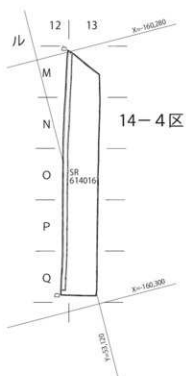
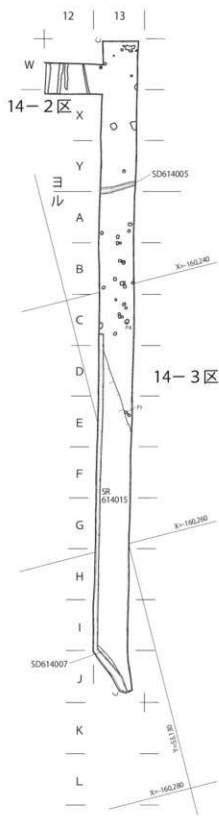
含層は存在しない。

(2) 井戸

S E 614011 (第 103 図) 14 - 5 区南端部で検出
された井戸である。S R 614010 の埋設後に掘り込
まれている。掘形の平面形状はやや崩れた方形を呈
し、長辺 1.4、短辺 1.3 m を測る。湧水のため崩落
の危険性があったことから、底面まで完掘すること
ができず、深さが 0.9 m のところで掘削を断念した。

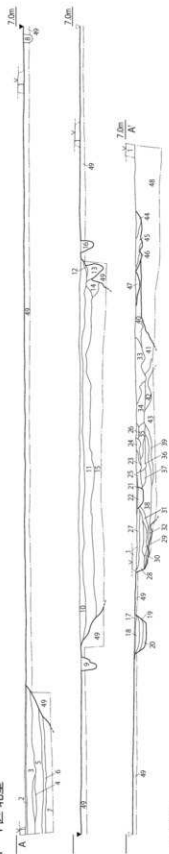


第99図 第6次調査14区平面図①



第100図 第6次調査14区平面図②

14-1 区北壁



1. 砂土
2. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (マングローブ2%含む) : S9014003
3. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ1%含む) : S9014004
4. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ5%含む) : S9014003
5. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (部分に石灰が全体に広がる) : S9014003
6. 2,534,69 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : 部分に石灰が全体に広がる。土層、海淵部は土 : S9014003
7. 2,534,69 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : 部分に石灰が全体に広がる。土層、海淵部は土 : S9014003
8. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ1%含む) : P9
9. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ1%含む) : P9
10. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : S9014004
11. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (部分に石灰が全体に広がる) : S9014004
12. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (10763,04 褐色シルトに石灰が広がる) : S9014004
13. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルトに石灰が広がる) : S9014004
14. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (10763,04 褐色シルトに石灰が広がる) : S9014004
15. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : 部分に石灰が広がる : S9014004
16. 10763,04 褐色シルト (マングローブ2%含む) : P9
17. 2,534,64 褐色シルト (部分に石灰が広がる) : P9
18. 2,534,64 褐色シルト (マングローブ5%含む) : S9014002
19. 2,534,64 褐色シルト (マングローブ1%含む) : S9014002
20. 2,534,63 褐色シルト (10763,04 褐色シルトに石灰が広がる) : S9014002
21. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ1%含む) : 泥土
22. 10764,04 褐色シルト (部分に石灰が広がる) : 泥土
23. 10764,03 に近い褐色シルト (マングローブ2%含む) : S9014002
24. 10764,03 に近い褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014001
25. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ2%含む) : 4~6m水深2%含む : S9014001
26. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : S9014001
27. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (マングローブ1%含む) : 部分に石灰が広がる : S9014001
28. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : 部分に石灰が広がる : S9014001
29. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (マングローブ3%含む) : 部分に石灰が広がる : S9014001
30. 2,534,63 オリーブ褐色シルト : S9014001
31. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014001
32. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
33. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
34. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
35. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
36. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014001
37. 10764,04 褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014001
38. 10764,04 褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014001
39. 10764,04 褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014001
40. 2,534,63 オリーブ褐色シルト : S9014001
41. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
42. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
43. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
44. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
45. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
46. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
47. 2,534,66 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
48. 10764,03 に近い褐色シルト (褐色シルト) : S9014001
49. 10764,03 に近い褐色シルト (褐色シルト) : S9014001

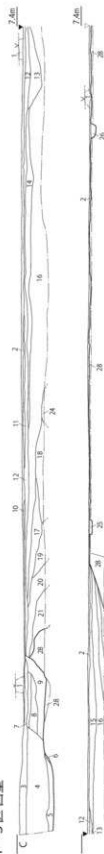
14-2 区北壁



1. 砂土
2. 2,534,64 に近い褐色シルト (10% マングローブ含む) : S9014006
3. 2,534,64 褐色シルト (10% マングローブ含む) : S9014006
4. 2,534,66 オリーブ褐色シルト : S9014006
5. 2,534,66 オリーブ褐色シルト : S9014006
6. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
7. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
8. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
9. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
10. 2,534,63 オリーブ褐色シルト (部分に石灰が広がる) : S9014006
11. 2,534,63 オリーブ褐色シルト : S9014006
12. 2,534,63 オリーブ褐色シルト : S9014006
13. 2,534,64 オリーブ褐色シルト (褐色シルト) : S9014006
14. 2,534,63 褐色シルト (褐色シルト) : S9014006
15. 2,534,63 褐色シルト (褐色シルト) : S9014006
16. 2,534,63 褐色シルト (褐色シルト) : S9014006
17. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
18. 2,534,64 オリーブ褐色シルト : S9014006
19. 10762,03 褐色シルト : 泥層

第10図 第6次調査14区土層断面図①

14-3 区西壁



0 1/1,000 4m

20. 25743 オリーブ埋設部：S6014015
21. 25744 オリーブ埋設部：S6014015
22. 25745 黄褐色シルト埋設部：S6014015
23. 25746 オリーブ埋設部：S6014015
24. 25747 黄褐色シルト埋設部：S6014015
25. 25748 黄褐色シルト埋設部：S6014015
26. 25749 黄褐色シルト埋設部：S6014015
27. 25750 オリーブ埋設部：S6014015
28. 25751 黄褐色シルト埋設部：S6014015

12. 10755 黄褐色シルト埋設部：S6014015
13. 25742 オリーブ埋設部：S6014015
14. 25743 黄褐色シルト埋設部：S6014015
15. 25744 オリーブ埋設部：S6014015
16. 25745 黄褐色シルト埋設部：S6014015
17. 25746 オリーブ埋設部：S6014015
18. 25747 黄褐色シルト埋設部：S6014015
19. 25748 黄褐色シルト埋設部：S6014015
20. 25749 黄褐色シルト埋設部：S6014015

7.4m C

1. 耕作土
2. 10764 黄褐色シルト
3. 10764 に2%黄褐色シルト
4. 10764 に5%黄褐色シルト
5. 25754 オリーブ埋設部
6. 10763 黄褐色シルト
7. 10751 黄褐色シルト
8. 75751 黄褐色シルト
9. 75751 黄褐色シルト
10. 25754 オリーブ埋設部
11. 25755 黄褐色シルト

14-4 区西壁

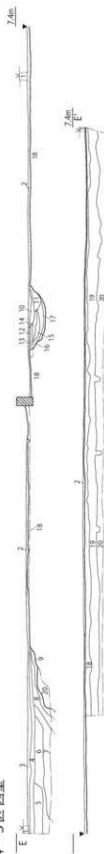


2/1,000 D

1. 耕作土
2. 25742 オリーブ埋設部
3. 25743 オリーブ埋設部
4. 25744 オリーブ埋設部
5. 25745 オリーブ埋設部
6. 10764 黄褐色シルト
7. 10764 に2%黄褐色シルト
8. 10764 に5%黄褐色シルト
9. 10765 黄褐色シルト
10. 25746 オリーブ埋設部
11. 25747 黄褐色シルト
12. 25748 黄褐色シルト
13. 25749 黄褐色シルト
14. 25750 オリーブ埋設部
15. 25751 黄褐色シルト

11. 25749 黄褐色シルト埋設部 (5%マンガン沈着あり)：S6014016
12. 25743 オリーブ埋設部：S6014016
13. 25744 オリーブ埋設部：S6014016
14. 25745 黄褐色シルト埋設部 (0%マンガン沈着あり)：S6014016
15. 25742 黄褐色シルト埋設部 (2.5%マンガン沈着あり)：S6014016

14-5 区西壁



7.4m E

1. 耕作土
2. 25744 オリーブ埋設部
3. 25745 オリーブ埋設部
4. 25746 オリーブ埋設部
5. 25747 オリーブ埋設部
6. 10764 黄褐色シルト
7. 10764 に2%黄褐色シルト
8. 10764 に5%黄褐色シルト
9. 10765 黄褐色シルト
10. 25748 黄褐色シルト
11. 25749 黄褐色シルト
12. 25750 オリーブ埋設部
13. 25751 黄褐色シルト
14. 25752 オリーブ埋設部
15. 25753 オリーブ埋設部
16. 25754 オリーブ埋設部
17. 25755 黄褐色シルト
18. 25756 オリーブ埋設部
19. 25757 黄褐色シルト

11. 25747 黄褐色シルト：S6014008
12. 10764 に2%黄褐色シルト：S6014008
13. 25748 オリーブ埋設部：S6014008
14. 25749 オリーブ埋設部：S6014008
15. 25750 オリーブ埋設部：S6014008

16. 25752 黄褐色シルト：S6014008
17. 25744 オリーブ埋設部：S6014008
18. 25745 オリーブ埋設部
19. 25746 オリーブ埋設部
20. 25747 オリーブ埋設部

井戸はかつて水が流れていた埋没流路となるSR 614010に重複するかたちで形成されていることから、埋没流路の地下水脈の流れの利用を意識して造られたものと考えられる。

井戸枠は抜き取られたとみられ、掘削できた範囲内で井戸枠材の破片等も確認できなかった。土層断面では、すり鉢状に流れ込む埋土の堆積状況が確認でき、井戸枠が抜き取られていることを土層の堆積状況からも追認できる。この抜き取りに伴う埋土は暗褐色や黒褐色のシルトであり、細かな灰白色シルトブロックを含むことから、抜き取り後に人為的に埋められたものと考えられる。

掘削埋土は、にぶい黄褐色・褐色のシルトや細粒砂～中粒砂で構成されており、シルトブロックを各層位とも含むことから、抜き取り埋土と同様に人為的な堆積層と判断できる。

埋土中からは、遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明だが、SR 614010との重複関係から、少なくとも鎌倉時代前期以降と考えられる。

(3) 溝

SD614002 14-1区東部で検出された溝である。SR 614001の埋没後に掘り込まれている。幅0.7m前後、深さ0.2m前後を測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状は浅いU字形を呈している。

埋土は褐色細粒砂～中粒砂の単層で、粒径の大きい礫や鉄分の染み込みが認められる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明であるが、SR 614001との重複関係から古墳時代前期以降と考えられる。

SD614005 14-3区北部で検出された溝である。幅0.5m、深さ0.1mを測り、東西方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状は、浅いU字形を呈している。

埋土はにぶい黄褐色シルトの単層である。埋土中から遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

SD614007 14-3区南端部で検出した溝である。SR 614015の埋没後に掘り込まれている。東岸の一部を検出できたのみで、西岸は調査区外の南西

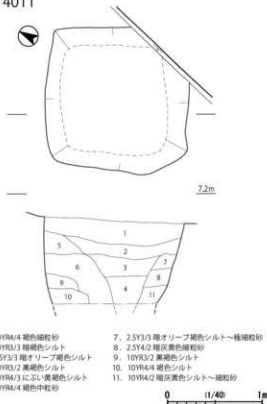
側にあるとみられる。深さ0.9mを測り、東岸の方向からおよそ南北方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。断面形状はU字形を呈している。

埋土は褐色を主体とするシルトで、一部の層位には細粒砂を含んでいる。第4・5層と第7～9層に大きく分かれ、第4層は第7層を大きく掘り込むかたちで堆積していることから、掘り直しまたは異なる単位で埋没が進行していったことを示している。しかし、溝の幅が調査区外へも広がることを含めると、幅5m以上になることから、流路である可能性も考えられる。そのため、明確に掘り直しと断定することはできず、複数の流路が重複している状況を示している可能性も考慮しなければならない。いずれの埋土もシルトを主体とすることから、積極的な流水痕跡を確認することはできなかった。

埋土中からは、須恵器杯身、灰陶陶器輪、山茶碗、白磁碗が出土した。出土した遺物から、最終的に埋没した時期は鎌倉時代前期と考えられる。

SD614008 14-5区南部で検出された溝である。幅1.05m、深さ0.9mを測り、北西-南東方向

SE614011



第103図 第6次調査14区井戸平面図・土層断面図

に延びて調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈しており、側面は底面から緩やかに立ち上がる。

埋土は複数層からなり、オリブ褐色・暗灰黄色を主体とするシルトである。第10・11層の堆積状況を掘り直しが行われている可能性がある。砂の堆積が顕著に認められないことから、基本的には緩やかな流水の中で徐々に埋没していったと思われる。

埋土中からは、サヌカイトの剥片が出土したが、土器が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

S D 614009 14-1区東部で検出された溝である。S R 614001の埋没後に掘り込まれている。幅26m、深さ0.2m前後を測り、南北方向に延びて調査区外へと続いている。遺構面が削平を受けているためか、確認できた溝の深さは浅い。大部分が調査区外となっているため、全体としてはもっと深かった可能性がある。断面形状は浅い皿状を呈しており、底面はやや凹凸を有した面を形成している。

埋土は4層からなり、全てオリブ褐色シルト～細粒砂の堆積層であるが、礫や鉄分・マンガンの含有状況が層位によって異なる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の正確な時期については不明だが、S R 614001との重複関係から、少なくとも古墳時代前期以降と考えられる。

S D 614012 14-1区東部で検出された溝である。幅0.6～0.9m前後、深さ0.3m前後を測り、北東-南西方向に延びて調査区外へと続いている。断面形状はU字形を呈しており、底面は平坦で側面はやや急に立ち上がる。

埋土は3層からなり、全て黄褐色シルトであるが、異なる土のシルトブロックや鉄分・マンガンの含有によって分けられている。各堆積層中に砂を顕著に含まないことから、基本的には緩やかな流水によって徐々に埋没していったと思われる。

埋土中からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期については不明である。

(4) 流路

S R 614001 14-1区東部で検出された流路で

ある。S D 614002-614009によって一部が削平され、東岸はS D 614009と重複している。幅約9.5m前後とみられ、ほぼ南北方向に延びて調査区外へと続いている。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、深さについては不明である。断面形状は、西岸側は急な角度で落ち込んでいくが、東岸側は緩やかに下りながら落ち込んでいる。また、最深部については両岸側とも段を形成してさらに深く落ち込んでいることが調査区北壁土層断面から窺える。

埋土は複数層からなり、オリブ褐色を主体とするシルトと細粒砂～極細粒砂が複雑に堆積し、第43層には粗粒砂が含まれている。下層ほど粒径の大きい砂の堆積が認められることから、活発な流水があったことが窺える。このうち、第27～32層は、第38層を掘り込むように堆積していることから、S D 614002・614009とは別の溝の可能性が考えられる。流路の基盤層は、西岸側は安定した暗褐色シルト（第49層）であるが、東岸側は礫混じりの中に黄褐色中粒砂～極細粒砂（第48層）となり、基盤層の切り替わりが激しい。この第48層の層厚は0.7m以上と厚く、シルトが混じらない純粋な砂層であり、S R 614001の埋土とは明確に層相が異なり、遺物も出土しなかったことから、S R 614001に先行する旧埋没流路の堆積層であると考えられる。この旧埋没流路と合わせて、S R 614001が位置する場所は、古くから地下水脈および地形的に流路が形成されやすい場所であることが窺える。

埋土中からは、土器器高杯・広口壺・S字状口縁台付甕が出土した。出土した遺物から、遺構の最終的な埋没時期は、古墳時代前期と考えられる。

S R 614003 14-1区西端部で検出された流路である。東岸が検出できたのみで、西岸は調査区外の西側にあるとみられる。東岸が延びる方向から、ほぼ南北方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、幅・深さを含めた規模は不明である。

埋土は複数層からなり、オリブ褐色を主体とするシルトから構成されている。埋土は水平堆積している状況であり、複雑な層相を示していない。各層

位には鉄分の染み込みやマンガン粒が層中に含まれていることを確認することができた。

埋土中からは、土師器皿・鍋、ロクロ土師器碗、須恵器甕・鉢、山茶碗、陶器甕・壺、陶器加工皿盤が出土し、第4層から集中的に出土している。出土した遺物から、遺構の最終的な埋没時期は鎌倉時代前期～中期と考えられる。

SR614004 14-1区中央部で検出された流路である。幅10.3m前後を測り、北東-南西方向に延びて調査区外へと続いている。調査における安全性の確保のため、途中までの掘削に留めたため、深さについては不明である。西岸側の側面は緩やかに落ち込んでいくが、東岸側の側面は流水による浸食でオーバーハングしている部分が見られる。

埋土は複数層からなり、オリーブ褐色を主体とするシルトから構成されている。このうち、第15層のみが極細粒砂の堆積層となり、下層になるほど砂が堆積する傾向が窺える。また、前述したように西岸側にはオーバーハングした部分には、第13・14層が堆積しており、第14層にはシルトブロックが混じることから、流水による浸食に伴って基盤層が混じり込んだ結果とみることが出来る。

埋土中からは、土師器杯・甕、須恵器杯蓋が出土した。出土した遺物から、遺構が最終的に埋没した時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

SR614006 14-2区の西端部～東部にかけて検出された流路である。東岸が検出できたのみで、西岸は調査区外の西側にあるとみられる。東岸が延びる方向から、北東-南西方向に延びると考えられ、調査区外へも続いている。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、幅・深さを含めた規模は不明である。

埋土は複数層からなり、黄褐色を主体とした極細粒砂・細粒砂・粗粒砂・中粒砂で構成される。一部にシルトの堆積も認められるが、大半の堆積層が砂層である。また、第11層は中粒砂であることから、下層になるほど粒径の大きい砂層が堆積する傾向が窺える。

このうち、第5～14層は第15層を掘り込むように堆積していることから、第15～18層とは堆積状況が異なっている。層相から、異なる2つの流路が

重複している可能性が指摘でき、2つの異なる埋没単位が存在していると思われる。また第18層も西側に向かって落ち込んで堆積する状況が窺えることから、さらにもう一つの異なる埋没単位がある可能性が推測される。

遺構の基盤層は、黒褐色シルトである。この堆積層は13-1区SR614001の東岸側の基盤層に対応すると考えられる。SR614001の西岸側で確認された厚い砂層からなる旧埋没流路の堆積は確認することができず、旧埋没流路は14-1～2区西端までの間の中に存在していると考えられる。

埋土中からは、土師器碗が出土した。出土した遺物が少量であるため、断定はできないが、流路が最終的に埋没した時期は、出土遺物から古墳時代前期～中期にかけてと考えられる。

SR614010 14-5区南端部で検出された流路である。SE614011によって一部が削平されている。東岸が検出できたのみで、西岸は調査区外の西側にあるものと考えられる。東岸の延びる方向から、南北方向に延びると考えられ、調査区外へと続いている。

埋土は複数層からなり、オリーブ褐色を主体とするシルトと細粒砂・極細粒砂から構成される。

埋土中からは、須恵器甕、山茶碗が出土した。採出した遺物から、最終的に埋没した時期は平安時代末～鎌倉時代前期と考えられる。

SR614015 14-3区中央部～南端部にかけて検出された流路である。SD614007によって一部が削平されている。西岸が検出できたのみであり、西岸が延びる方向から、北西-南東方向に延びると考えられ、調査区外へと続いている。東岸がSD614007と重複することから正確な規模は不明だが、幅約24m前後であると考えられる。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めたため、深さについては不明である。東岸側は底面に向かって緩やかに落ち込むが、西岸側はやや角度が急に落ち込んでいる。

埋土は複数層からなり、黄褐色とオリーブ褐色を主体とする細粒砂～シルトで構成されている。細粒砂のみで形成された堆積層もあり、確認できた中で最も下層に堆積する第24層は、中粒砂～細粒砂の

砂層であることから、下層ほど粒径が大きい砂が堆積する傾向が窺える。

このうち第13層は、第14層を掘り込むかたちで堆積していることから、埋没が進んだ段階で上面に生じた凹みが溝状に機能していた可能性も考えられる。また、周辺にはS R 614015の埋土に類似した堆積の広がりを検出面で確認した。これらは、S R 614015から周囲への溢れ込みによるものと考えられる。

埋土中からは、土師器杯が出土した。出土した遺物が少ないため、断定できないが、少なくとも最終的に埋没した時期は、平安時代後期以降である可能性が考えられる。

S D 614016 14-4区全面で検出された流路である。流路の両岸は確認することができず、調査区内では流路中の堆積層を全面で検出した。調査における安全性の確保から、途中までの掘削に留めた

め、深さについては不明である。幅は少なくとも38m以上と想定できることから、大規模な流路である。

埋土は複数層からなり、オリブ褐色と暗灰黄色を主体とするシルトや粘土から構成されている。一部の層位には極細粒砂が含まれる。埋没最終段階の堆積層は層厚が薄い、下層の堆積層は厚い。また、第14・15層はシルト～粘土であり、埋没最終段階まで砂が積極的に運ばれるような流水ではなく、水量の少ない水の流れによって、徐々に埋没していった可能性が考えられる。

埋土中からは、ロクロ土師器碗、陶器壺が出土した。出土遺物が少ないため、断定できないが、少なくとも遺構が最終的に埋没した時期は、平安時代末～鎌倉時代前期にかけてと考えられる。

(渡辺・森川)

第3表 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査区	時期	規模			棟方向	柱間寸法		備 考
			桁×梁	新行(m)	梁行(m)		新行(m)	梁行(m)	
S862020	2	平安後	5×2	9.2 9.6	4.65	N2° W	1.8+1.8+1.9+1.9 1.95+1.8+1.95+2.1+1.8	1.63+3.0 2.25+2.4	
S862026	2	鎌倉前	4×3	8.88 8.91	6.96 6.84	N8° E	2.34+2.1+2.22+2.22 2.4+2.16+2.1+2.25	2.4+2.22+2.34 2.1+2.4+2.34	掘柱
S862028	2	平安中	3×2	5.85	4.35	N2° W	2.1+1.5+2.25 1.95	2.1+2.25	条理より北向き。
S862039	2	平安後	3×2	5.85 6.45	4.05	N5° W	2.1+2.1+1.95 1.95+1.95+2.55	1.95+2.1	条理より北向き。
S863004	3-5 3-6	不明	2×2	3.15	3.0	N1° W	1.5+1.65	1.8+1.2 1.5	
S865014	5-1	平安中	(2)×2	—	5.4	N2° W	2.7+α	3.0+2.4	大型掘形
S865015	5-1	平安後	4×(2)	8.4	—	E6° S	1.95+2.4+1.95+2.1	3.15+α 2.55+α	大型掘形
S865016	5-1	平安後	3×(2)	6.09	—	E13° S	2.19+1.95+1.95	2.25+α	
S865017	5-1	平安後	(3)×3	—	5.55	N2° E	1.95+2.55+α 1.95+1.95+α	2.1+1.5+1.95	
S865019	5-1	平安後	(2)×2	—	4.35	N14° E	2.1+α 1.8+α	2.1+2.25	
SA65019	5-1	平安後～鎌倉前	3	7.2	—	E3° S	2.4	—	
S8611038	11-2	平安後～鎌倉前	(3)×4	—	9.09	N10° E	α+1.8+2.04+2.22+α	2.28+2.4+2.19+2.22	掘柱または二面以上の壁をもつ掘立柱。条理方向に並び。
S8611043	11-2	奈良	3×2	6.6	4.2	N5° E	2.1+2.4+2.1	2.1	
S8611044	11-2	奈良	(2)×2	—	4.4	N1° E	2.1+α	2.1+2.3	掘柱
S8611073	11-3	平安中～後	3×3	7.08	6.33	E8° S	2.4+2.4+2.28	2.07+2.22+2.04	
S8611074	11-3	奈良～平安前	(3)×2	6.6	5.1	N20° E	2.4+α	2.4+2.7	
S8611075	11-3	平安前期以前	(2)×2	—	3.9	N4° E	2.1+α	1.8+2.1	
S8611077	11-3	平安前期以前	(2)×2	—	4.2	N12° W	2.4+α	2.1	条理方向
S8611080	11-3	平安前～中	(2)×2	—	3.2	N19° E	—	1.6	条理方向
S8611081	11-3	平安前～中	(2)×2	—	3.4	N10° E	—	1.5+1.9	条理方向
S8611082	11-3	平安前以前	(2)×3	—	6.15	N2° E	—	1.95+2.1+2.1	
S8611083	11-3	不明	(2)×(2)	—	—	N16° W	2.6+α	2.4+α	
SA611084	11-3	不明	3	6.6	—	E1° N	2.1+2.25+2.25	—	
SA611085	11-3	不明	2	4.5	—	N15° E	2.25	—	条理方向
SA611086	11-3	不明	2	4.35	—	E11° S	2.55+1.8	—	
SA611087	11-2	平安	3	4.5	—	E4° N	1.35+2.1+1.05	—	
SA611088	11-2	平安	3	4.5	—	E2° N	1.8+1.2+1.5	—	
SA612030	12-4	古代	3	7.2	—	N12° E	—	2.4	
SA612031	12-4	平安中	4	9.6	—	N15° E	—	2.4	

第4表 遺構一覧表

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (m) 長×幅	高さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 61001	1-1	7-Y1 7-A1 14小	平安中	→ SD61002	幅0.8	0.3	土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄山 土師	
SD 61002	1-1	7-X14-X15 7-J 14小	平安後～末	SD61001 →, SD61003 →	幅0.8	0.4	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶 碗、土製品	
SD 61003	1-1 1-3	7-X22-Y22 7-R22	不明	→ SD61002	幅0.6	0.2	なし	
SZ 61004	1-3	7-B1-C1	室町	→ × 0.6	0.15	縄文土器、土師器		
SK 61005	1-3	7-R25	鎌倉～中	-	0.15	土師器、山茶碗		
SD 61006	1-1	7-X25-Y25 7-A1-A2	平安前～中	→ SD61002	幅0.6	0.25	土師器、須恵器	奈良時代以前の可能性あり
SD 61007	1-3	7-B1-C1	鎌倉～室町?	-	幅1.6	0.6	土師器	
SR 61008	1-1	7-Y24-Y25 7-A25 14小	古墳中～後	-	幅0.8	0.15	土師器	
SR 61009	1-1	7-Y24 7-A24-A25	古墳中～後	-	幅0.7	0.1	縄文土器、土師器	
SD 61010	1-3	7-R22	鎌倉	-	幅0.2	0.1	土師器	
SR 61011	1-1	7-X23-Y23-Y24 7-A24-A25	古墳中～後	-	幅0.6	0.2	土師器	
SE 61012	1-1	7-X23-X24-Y23- Y24	鎌倉後	SD61002 →	20 × 2.0	2.0	土師器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、 瓦、土製品	縦横・横縦規模残存戸 調査時は SK61013
SE 61013	1-1	7-A23-A24	平安後	SR61011 →	一辺3.2	1.8	土師器、須恵器、製瓦土器、土製 品、石製品	縦横・横縦規模残存戸 調査時は SK61013
SD 61014	1-1	7-X19-Y19-Y20	平安中	→ SD61002	幅0.6	0.3	縄文土器、土師器、灰釉陶器	
SD 61015	1-3	7-R20	平安前～中	-	幅0.7	0.25	縄文土器、土師器、灰釉陶器	
SK 61016	1-4	7-D13	室町	-	-	0.8	土師器、須恵器、土製品	
SK 61017	1-1	7-W15-X15	平安中	-	径1.2	1.8	土師器、須恵器、瓦	表側り井戸か
SD 61018	1-1	7-X15-X16-Y16	平安?	→ SD61002	幅0.5	0.1	なし	
SD 61019	1-3	7-A17-A18-B17- B18	平安後～末	-	幅0.2	0.1	土師器	
SD 61020	1-1	7-X14	平安中	-	-	0.6	土師器、灰釉陶器	
SR 61021	1-1	7-Y1 7-A1-A2	古墳前	→ SD61002	-	-	土師器	
SD 61022	1-2	7-Y5-Y6-Y7-Y8	平安後～末	SK61004 →, SZ61005 →	幅0.6	0.4	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶 碗、瓦	SD61002 と一連か
SK 61023	1-2	7-A9	不明	-	12 × 0.8	0.2	土師器	
SK 61024	1-2	7-A9	鎌倉～室町?	-	12 × 0.5	0.15	土師器、陶器	
SK 61025	1-2	7-Y9	不明	-	× 0.4	0.4	土師器	
SD 61026	1-2 1-4	7-A5-A6-A7	鎌倉	-	幅0.4	0.15	土師器	SD61006 と一連の可能性あり
SR 61027	1-2 1-4	7-Y10-Y11 7-A10-A11-B11	古墳前	-	幅3.0	-	土師器、須恵器	古墳時代後期までに埋没か
SD 61028	1-2	7-A14-B14	飛鳥～奈良	-	幅0.6	0.4	土師器、須恵器	
SR 61029	1-2	7-A12-A13-B12- B13	古墳前	-	幅4.4	0.8	土師器	
SR 61030	1-2	7-Y7-Y8 7-R7 08 14小	古墳前	-	幅5.2	-	土師器	
SK 61031	1-4	7-C8-C9	不明	-	-	0.4	なし	
SE 61032	1-2	7-B13	鎌倉後～室町	SR61029 →	-	-	-	結存井戸か
SE 61033	1-2	7-A12-B12	室町	-	3.0 × 2.4	3.1	土師器、山茶碗、陶器	結存井戸
SK 61034	1-2	7-Y7-Y8	奈良～平安	→ SD61022, → SZ61005	→ × 1.5	0.15	須恵器	
SZ 61035	1-2	7-Y7-Y8	平安～鎌倉	SK61034 →	-	0.1	土師器、黒色土器、須恵器、山茶 碗	
SR 61036	1-2	7-C7	飛鳥	-	幅3.3	-	須恵器	SR61030 と一連の可能性あり
SK 62001	2	7-R17-K18	鎌倉中	-	幅0.85	0.3	山茶碗	
SE 62002	2	7-R19-K20- L19-L20	鎌倉前～中	SD62000 → SR62012 →	32 × 3.0	2.7以上	土師器、ロクロ土師器、黒色土器、 山茶碗、瓦	縦横規模残存戸枠
SD 62003	2	7-L16-K18-J22- M24-O31-Y22 14小	鎌倉	SD62007 →, SD62009 → SR62017 →, SD62019 → SR62011 →, SR62012 →	幅0.96～1.70	0.25～ 0.5	赤生土器、土師器、ロクロ土師器、 黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶 器、山茶碗、陶器、土製品、 瓦、石製品	
SK 62004	2	7-K17-L17	室町前	-	幅1.07	1.04	土師器、山茶碗	
62005	欠番							
SK 62006	2	7-L16-17	飛鳥	SR62020 →, SD62017 →	幅0.9	0.18	土師器、須恵器	
SD 62007	2	7-L17-M17-N17- O17	鎌倉前～中	SD62017 →, SD62023 →	幅0.54	0.3	土師器、須恵器、山茶碗、陶器、 青磁	
SK 62008	2	7-L17-18	鎌倉前	SR62020 →	幅0.70	0.23	山茶碗	
SD 62009	2	7-J18-19 K19-20 14小	平安中	-	幅1.2～2.9	0.56～ 0.68以 上	縄文土器、赤生土器、土師器、ロ クロ土師器、黒色土器、製瓦土器、 須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土 製品、瓦、石製品	調査時は SR62000 で調査

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (m) 長×短×幅	高さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 62010	2	欠番						SD62025と同一
SR 62011	2	1-K20-J20-J21	平安		幅 4.0 ?	1.0 以上	縄文土器、土師器、須恵器	北澤新期土層前面での東側の立ち上がりが見られとせず
SR 62012	2	1-J18-K19-L20 14か	平安中以前	→SD63002、→SD63009	-	0.88	なし	
SE 62013	2	1-L18-L19-M18- M19	鎌倉前～中	SD63022→、SD63045→	4.6×4.0	3.35 以上	土師器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、青磁、石製品	井戸跡抜き取りか
SD 62014	2	1-L22-M23-N23- O23-P23 14か	鎌倉	SD63029→、→SD63003	幅 1.1	0.35	土師器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、土製品、瓦	
SR 62015	2	1-M21	平安中	SD63009→	2.62×2.5	1.5 以上	縄文土器、土師器、黒色土器、製塩土器、須恵器、灰釉陶器、土製品	調査時は SD62015 で掘削、板板・横板積瓦組井戸跡
SK 62016	2	1-N18	不明		1.45×0.64	0.33	なし	SD62030・No.12 と重複、前後関係は不明
SD 62017	2	1-K16-O17-S17- V17-Y17 14か	平安中～後	SD63023→、SD63047→ →SD63020、→SD63028 →SD63039、→SD63040 →SD63037、→SD63025 →SD63041	幅 1.35～2.9	0.48	養生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品	
SR 62018	2	1-P19-Q19- R20	奈良	SD63022→	3.1×2.6	1.1 以上	養生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品	井戸跡確認できず
SK 62019	2	1-O18-P18	鎌倉前	SD63017→、SD63023→	202×1.1	0.22	灰釉陶器、山茶碗、土製品	
SR 62020	2	1-L16-17-M16- 17-N17-18	平安後	SD63020→、SD63021→	第 3 表参照		土師器、須恵器	
SD 62021	2	1-M16-N16-N17- O17	平安中以前	SD63023→、→SD63020 →SD63007	-	0.55	なし	
SD 62022	2	1-M19-O19-S20- Y21-Y21 14か	養生終了～古墳前	SD62045→、→SD62036 →SD63013、→SD62018 →SD63017、→SD63025 →SD63041	幅 1.4～1.6	0.36	養生土器、土師器、石製品	
SD 62023	2	1-O17	養生終了～古墳前以前		0.45～0.84	0.29	なし	調査時は SD63023 として掘削
SK 62024	2	1-S18-S19- T18-T19	鎌倉前		1.63×1.15	0.41	土師器、ロクロ土師器、山茶碗、鉄製品、漆製品	調査時 H2 SD62024 として掘削。本館蔵。
SD 62025	2	1-R21-R22-S20- T18-T19 14か	鎌倉前	SK63003→、SK63005→ SD63009→、SD63017→ SD63026→、SD63034→ →SD63029	幅 1.38～1.84	0.28～0.56	養生土器、土師器、ロクロ土師器、瓦器、製塩土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、青磁、白磁、瓦、石製品	調査時は SD62030・SD62031・SD63032 に分けて掘削するも、SD63025 と同一
SR 62026	2	1-前19-20-S19- 20-T19-20	鎌倉前	SD63022→、SD63025→ SD63026→	第 3 表参照		土師器、ロクロ土師器、山茶碗	
SR 62027	2	1-S23-S24-T23- T24	鎌倉中		3.4×3.1	1.8 以上	土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、山茶碗、白磁、土製品、瓦、石製品	
SR 62028	2	1-U18-V18- V19	平安中	SD62017→	第 3 表参照		土師器、須恵器	
SD 62029	2	1-J22-O22-P23 14か	平安後～鎌倉前	→SD63003、→SD63014	幅 1.4～1.6	0.56	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦、石製品	調査時に SD62010 として一部掘削するも SD62029 と同一
SD 62030	2	欠番						SD62025 と同一
SD 62031	2	欠番						SD62025 と同一
SD 62032	2	欠番						SD62025 と同一
SK 62033	2	1-T19	縄文時代	→SD62025	1.6×1.4	0.33	縄文土器	
SD 62034	2	1-R18-V18-U19- X19	平安中～後	→SD63025、→SD63037	幅 1.2～1.5	0.41	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦	
SK 62035	2	1-U18-T18	鎌倉前～中	→SD63025	-	0.12	養生土器、土師器、須恵器、山茶碗、瓦	調査時は SD62035 として掘削
SK 62036	2	1-X18	鎌倉前	SD62037→	幅 1.0	0.2	土師器、山茶碗	
SD 62037	2	1-X18～19-Y18 ～21	平安後前後	→SK63036、→SK63038	0.3～0.5	0.18	瓦	
SK 62038	2	1-Y19	鎌倉前	SD62037→	1.5×0.95	0.28	土師器、灰釉陶器、石製品	
SR 62039	2	1-U18-V18-V18-19	平安後	SD62017→	第 3 表参照		土師器	
SD 62040	2	欠番						SD62034 と同一
SD 62041	2	1-Y20-Y21 1-A19-A23	鎌倉中	SD63017→、SD63022→、 SD63034→、SD63037→、 →SD62043	-	0.20	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗	
62042	2	欠番						
SR 62043	2	1-Y21-Y22 1-A21-A22	鎌倉中以降	SD62041→	3.25	1.4 以上	なし	井戸跡確認できず
SK 62044	2	1-A22	鎌倉中以前	→SD62041	1.65×0.65	0.19	瓦	
SD 62045	2	1-M19-M20～ R20-R21-V21 14か	不明	→SD62036、→SD62013、 →SD62009、→SD63022、 →SD63025	幅 0.9～1.6	-	なし	
SD 62046	2	1-S23-Y23 1-A23 14か	不明	SD63041→、→SD63009	幅 0.65	0.15	なし	
SD 62047	2	1-W20-W21-X20- X21	不明	→SD62017	幅 0.68	0.12	なし	

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (m) 長×短×幅	高さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 63001	3-3-6	F-75-T6-S3-S4	平安末～鎌倉	→SD63010	幅0.32～0.65	0.20	土師器、山茶碗	
SD 63002	3-3-6	F-73-F-A3-A4-A5-A6	鎌倉前半	SD63010→、→SD63003	幅0.6～4.1	0.19～0.28	土師器、山茶碗、陶器、瓦	
SD 63003	3-6	F-A3-A4	平安後	SD63002→	-	0.28	黒色土器	
SB 63004	3-5-6	F-C3-F3	不明		第3表参照		なし	
SZ 63005	3-4	F-K5-K6	不明	SZ63007→、→SZ63006	-	0.03	なし	
SZ 63006	3-4	F-K3-L5	不明	SZ63005→	幅1.2	0.04	なし	
SZ 63007	3-4	F-K5-K6	不明	SB63012→、→SZ63005	幅1.5	0.1	なし	
SR 63008	3-2-5	F-P3-F3-L5-N5-L6-N6	古代以降	SD63009→	-	1.05	縄文土器、弥生土器、土師器	
SD 63009	3-2	F-H5-L5-J5-K5-K6	古代以前		幅1.8	0.7	土師器?	調査時はSX63009で掘削
SD 63010	3-2	F-T6-Y6-F-A6-L6	平安後～末	SD63001→、→SD63002	幅0.35～0.6	0.18～0.27	土師器、山茶碗	
SR 63011	3-3-6	F-U3-V3-W4-W5-V6-L6	平安後以前	→SD63010	幅2.4～3.3	-	なし	
SR 63012	3-4	F-P6-届はか	不明	→SZ63007	-	-	なし	
SR 63013	3-6	F-S3-S4	不明		-	-	なし	南岸は掘出できず
SD 64001	4-1	E-G8-G9	不明	→SD64013	幅1.0	0.5	土師器	
SD 64002	4-1	E-G9-G10-G11	古墳	SD64004→、→SD64012	幅0.5	0.25	土師器	
SD 64003	4-1	E-F11-G11	平安	SD64004→	幅0.8	0.5	ロクロ土師器	
SD 64004	4-1	E-G11-G12	不明	→SD64002、→SD64003	幅0.3	0.15	土師器	
SD 64005	4-1	E-F11-G11-G12	不明	→SD64008	幅0.5	0.38	土師器	
SD 64006	4-1	E-G13	不明	→SD64008	幅0.5	0.25	土師器	
SR 64007	4-1	E-G17-H17	鎌倉		-	-	山茶碗	
SD 64008	4-1	E-F12-G12-G13	鎌倉	SD64005→、SD64006→	幅0.6	0.2	縄文土器、土師器、山茶碗	
		64009	欠番					
		64010	欠番					
		64011	欠番					
SE 64012	4-1	E-F10-G9-G10	平安	SD64002→、SD64013→	直径30	0.8以上	須恵器	
SD 64013	4-1	E-G9-10	不明	SD64001→、→SD64012	幅2.6	-	なし	
SD 64014	4-1	E-G13-G14	不明		幅0.45	0.15	なし	
SD 64015	4-2	せ-410	不明		幅0.6	0.2	なし	
SD 64016	4-1	E-G8	不明		幅2.7	0.6	なし	
SD 65001	5-1	H-J18-K18-K19-L19	室町後	SD65003→	幅0.94～1.45	0.28	土師器	
SD 65002	5-1	H-J17-K17-K18-L18	古墳	SD65003→	幅0.44～0.56	0.2	須恵器	
SD 65003	5-1	H-J19-K18-L18	古墳以前	→SD65001、→SD65002	幅0.2～0.25	0.1	なし	
SZ 65004	5-1	H-J15-J17-K16-K17	平安末～鎌倉前		幅1.10～1.16	-	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、瓦、石製品	調査時はSD65004として掘削。表層状の凹凸痕跡、溝状に埋没
SD 65005	5-1	H-J16-J17-K16-K17-L17	平安末～鎌倉前		幅0.32～0.35	0.12～0.18	なし	SZ65004の西側溝
SD 65006	5-1	H-K16-K17	平安末～鎌倉前		幅0.64～0.75	0.1～0.2	なし	SZ65004の東側溝
SD 65007	5-1	H-J16-K16-L16-L17	平安末～鎌倉前		幅1.25～1.56	1.0	土師器、ロクロ土師器、山茶碗、陶器、瓦、石製品	
SD 65008	5-1	H-J10-K10	平安時代末期		幅0.27～0.4	0.16	土師器、山茶碗、陶器、白磁、瓦	
SD 65009	5-1	H-K16	平安末以前	→SD65007	幅0.46～0.8	0.1	なし	
SD 65010	5-2	F-K5-L5	鎌倉前	SD65009→	幅1.55	0.3	土師器、山茶碗、陶器	
SD 65011	5-2	F-K3-L3-J3	飛鳥～奈良前		幅0.4～0.55	0.1～0.25	土師器、鉄製品	
SD 65012	5-2	F-K6L6	不明		幅0.8	0.3	なし	
SD 65013	5-2	H-J23-K23-L23	平安前半		幅0.5	0.1	土師器	
SB 65014	5-1	H-K11-12	平安中		第3表参照		土師器、灰釉陶器	
SB 65015	5-1	H-K11-12-J11-12	平安後		第3表参照		土師器	
SB 65016	5-1	H-K10-11-12-J10-11-12	平安後		第3表参照		土師器、黒色土器、灰釉陶器	
SB 65017	5-1	H-K10-11-J10-11	平安後		第3表参照		土師器	
SB 65018	5-1	H-K11-12-J11-12	平安後		第3表参照		黒色土器	
SA 65019	5-1	H-K10-11-12-J10-11-12	平安後～鎌倉前		第3表参照		土師器、山茶碗	
SK 65020	5-2	H-K21-K22	不明	SD65024→	2.25×1.75	0.37	なし	方形
SD 65021	5-2	H-J21-K22-L22-L23	不明	→SK65020	幅1.8	0.6	なし	
SK 65022	5-2	H-K21-L22	不明		-	0.25	なし	

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模(㎡) 長×短×幅	深さ (m)	主な出土遺物	備考
SK 60023	5-2	7-K1	不明		幅 1.1 ~ 1.9	0.05	なし	
SD 60024	5-2	HJ21-K21	古墳前~中	→SK60020	幅 2.1	0.03	土師器	
SK 60025	5-1	HAK19-K20	不明		-	-	なし	
45026	矢倉							
SR 60027	5-2	HJ24-K25 7-K1-11 辻か	不明	→SK60023	幅 1.6 ~ 3.6 以上	-	なし	
SR 60028	5-2	7-J2-JK3-L3 -L4 辻か	不明	→SD60011	幅 3.5 ~ 5.8 以上	-	なし	
SD 60029	5-2	7-J4-K4-L5	鎌倉以前	→SD60010	幅 1.25 ~ 2.0	0.6	なし	
SD 60030	5-2	7-J5-K5-L6	不明	SD60010 →	幅 0.5	0.2	なし	
SD 60031	5-2	7-J9-K5-K6-L6	不明	→SD60030	幅 0.55	0.3	なし	
SR 60032	5-2	HJ23	不明	→SD60021	-	-	なし	
SD 60031	6-1-2	7-O14	不明	SD60002 →, SD60003 →	幅 0.7	0.2	なし	
SD 60032	6-1-2	7-O14-Q14	奈良	→SD60001, →SD60003	幅 0.7	0.27	土師器	
SD 60033	6-1-2	7-O13-Q14	奈良以降	→SD60001, SD60002 →	-	0.6	土師器	
SD 60034	6-1-2	7-Q14-U14	帆立	→SD60005	幅 3.0	0.8	土師器	
SR 60035	6-1-2	7-R15-Y14	不明	SD60004 →, →SD60006, →SD60007, →SD60008	-	-	なし	
SD 60036	6-1-2	7-W14	不明	SD60005 →	幅 0.4	0.05	なし	
SD 60037	6-1-2	7-W15 7-R15	鎌倉	SD60008 →, SD60009 →	幅 0.7	0.2	土師器, 山茶碗	
SD 60038	6-1-2	7-X15 7-A15	平安後	SD60005 →, →SD60007	幅 0.7	0.03	土師器, 土製品	
SD 60039	6-1-2	7-A15	鎌倉中以降	→SD60007, →SD60010	幅 0.5	0.1	なし	
SR 60040	6-1-2	7-X15 7-I17	近世以降	SD60009 →	-	-	なし	
SK 60041	6-3	7-S18	不明		1.0 × 0.7	0.4	土師器, 石製品	
SK 60042	6-3	7-S18	不明	SD60014 →	0.9 × 0.6	0.5	なし	
SD 60043	6-3	7-S18-V18	室町後	SD60014 →, SD60015 →, SD60016 →	幅 0.9	0.65	土師器, 山茶碗	
SD 60044	6-3	7-S18-T18	室町後以降	→SD60012, →SD60013	幅 0.8	0.3	なし	
SD 60045	6-3	7-U19	室町後以降	→SD60013	幅 0.8	0.3	なし	
SD 60046	6-3	7-U19	室町後	→SD60013	幅 0.8	0.3	土師器	2条の重複
SR 60047	6-3	7-K17-T19	鎌倉	→SK60011, →SK60012, →SD60015, →SD60016	-	-	山茶碗	
SD 67001	7-1	7-W13-Y13 7-A13-C14 辻か	平安末~鎌倉前	→SK67003	幅 1.5 ~ 4.4	0.25 ~ 0.6	土師器, ロクロ土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 山茶碗, 土製品, 瓦	
SK 67002	7-1	7-X12-Y12	不明		-	0.05	なし	SD67004 の一部の可能性あり
SE 67003	7-1	7-C14-C15	室町後~江戸	SD67001 →	-	-	土師器, 白磁, 鉄製品	
SD 67004	7-1	7-Q9-S19-T11- V11-X12 辻か	平安後~鎌倉前		幅 2.2 ~ 2.7	0.1 ~ 0.15	土師器	
SK 67005	7-2	7-O9-O10	不明		-	0.3 ~ 0.4	なし	
SD 68001	8	7-T22-U22	不明		幅 1.7	0.2	なし	
SD 68002	8	7-G24	不明	SD68003 →	幅 1.85	0.05	なし	
SD 68003	8	7-G24-H23-H24	奈良	→SD68002	幅 1.45	0.5	土師器	
SD 68004	8	7-C24-D24	不明		幅 1.2	0.5	なし	
SK 68005	8	7-W22	不明		幅 0.8	0.17	なし	
SD 69001	9-1 9-2 9-3	7-A17-A18-B18- G17 辻か	鎌倉		幅 1.5	0.7	土師器, 灰釉陶器, 山茶碗, 瓦, 土製品, 銅銭	
SD 69002	9-1	7-A17-B17	平安~鎌倉		幅 0.5	0.25	ロクロ土師器, 須恵器	
SD 69003	9-1	7-V17 7-A17-B17	鎌倉前~中	SD69005 →, →SD69006	幅 0.7	0.4	灰釉陶器, 山茶碗, 瓦	
SD 69004	9-1	7-W17-X17-Y17 7-A17-B17	平安		幅 0.7	0.4	土師器, 灰釉陶器	
SD 69005	9-1	7-B17	平安後~鎌倉中	→SD69000	幅 0.7	0.4	灰釉陶器	
SD 69006	9-1	7-A17-B17	鎌倉	SD69003 →	-	0.3	土師器, 灰釉陶器	
SD 69007	9-1	7-V17 7-A17	鎌倉前~中		幅 0.6	0.15	土師器	
SD 69008	9-2	7-D17-E17-F17- G17	鎌倉	SD69012 →	幅 1.0	0.3	土師器, ロクロ土師器, 灰釉陶器, 山茶碗, 青磁	
SD 69009	9-2	7-D17-E17	平安~鎌倉	SD69011 →	幅 0.8	1.1	土師器, ロクロ土師器	
SD 69010	9-2-3	7-G17-H17	室町中~後(帆立期)		-	-	土師器, 山茶碗	SD69001 と一連の可能性あり
SD 69011	9-2	7-E16-E17-F16- F17-G17	平安後~末	→SD69009	-	0.8	縄文土器, 土師器, 須恵器, 灰釉陶器	
SD 69012	9-2	7-D17	平安中~後	→SD69008	幅 1.0	0.4	須恵器	
SD 69013	9-2	7-D17-E17	鎌倉	→SD69001, →69008	-	0.1	山茶碗	土坑の可能性あり

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (㎡) 長×短×幅	深さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 69014	9-3	4-116-J16-K16-L16	平安中～鎌倉		-	0.6	土師器、須恵器、灰釉陶器	
SZ 69015	9-3	4-116-J16	平安後～末		-	0.15	土師器	
SD 69016	9-4	4-116-K16-L16	鎌倉前～中	→ SD69001	幅0.6	0.2	土師器、須恵器、山形焼、瓦	
SD 69017	9-4	4-M16-N16-O16-V16 はか	奈良後～平安前	→ SR69020	幅1.8	0.8	土師器、須恵器、山形焼、製塩土器	遺物出土量多い
SD 69018	9-4	4-M16-N16-Q16-R16 はか	鎌倉	→ SR69020	幅1.0	0.6	土師器、須恵器、山形焼	
SD 69019	9-4	4-M16-N16-O16	平安～鎌倉?		幅0.5	-	なし	
SR 69020	9-4	4-M16-M17-U16-V16 はか	鎌倉	SD69017 →、SD69018 →	-	-	土師器、須恵器、黒色土器、ワケロ土師器、灰釉陶器、山形焼、瓦、土製品	奈良時代末～平安時代初期の遺物多い
SD 610001	10-1	9-S16-U16	鎌倉	SD610002 →、SR610003 →	幅3.0	0.9	土師器、平瓦	
SD 610002	10-1	9-R15-U16	平安前	→ SD610001、SR610003 →、SD610004 →	幅1.2	0.9	土師器	
SR 610003	10-1	9-R15-U16	弥生終末期以前	→ SD610001、→ SD610002、→ SD610004	-	-		
SD 610004	10-1	9-S15	弥生終末期	→ SD610002、SR610003 →	幅2.6	0.7	縄文土器、土師器	
SD 610005	10-2	9-X15 9-B15	不明		-	0.25	土師器	
SD 610006	10-3	9-T15 9-W16	不明	SR610008 →	幅0.75	0.4	土師器	
SD 610007	10-3	9-T15 9-W16	平安末	SR610008 →	幅0.9	0.25	土師器、山形焼	
SR 610008	10-3	9-T15 9-W16	奈良～平安	→ SD610006、→ SD610007	幅5.0	-	土師器、須恵器	
SD 611001	11-3 上層	9-K13-K14- J15-J18	平安前～中	SD611073 →、SD611075 → SD611067 →、SD611090 → → SD611004、→ SD611008	幅0.3～0.5	0.25～ 0.35	土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石製品、鉄製品	
SD 611002	11-3 上層	9-J11-K11	不明	SZ611006 →	幅0.35～0.2	0.1		
SD 611003	11-3 上層	9-J11-K11	奈良～平安		幅0.2～0.3	0.1～ 0.15	土師器	
SD 611004	11-3 上層	9-J13	平安前～中	SK611035 →、SD611001 →	幅0.55～0.4	0.2～ 0.25	土師器、製塩土器、須恵器、灰釉陶器	
SK 610005	11-3 上層	9-I14-I15	鎌倉	SD611008 →	1.6 × 1.2	0.3	陶器、石製品	
SZ 610006	11-3 上層	9-J10-J11-K10- K11	鎌倉	→ SD611002	3.0 × 2.35	0.05	土師器、山形焼	調査時は SX611006 として 掘削
SK 611007	11-3 上層	9-K10	不明		- × 1.15	0.1	鉄製品	
SD 611008	11-3 上層	9-I14-I15-J14- K14	平安前～中	SR611082 →、 SD611001 →、→ SK611005	幅0.25	0.15	土師器、須恵器	
SK 611009	11-3 上層	9-I15	鎌倉	SD611008 →、SD611034 → → SD611082	1.05 × 0.9	0.2	土師器	
SD 611010	11-2 上層	9-J7	不明		幅0.3	0.05		
SK 611011	11-2 上層	9-S5	不明		幅1.0	0.1		
SD 611012	11-2 上層	9-44-96-J4	不明		幅1.3～0.25	0.05～ 0.1		SD611017 との前後関係不明
SD 611013	11-2 上層	9-M23-25 9-M1-M3-D-K1 はか	室町後	SD611026 →、SD611038 →	幅2.0	0.8～0.9	土師器、製塩土器、須恵器、陶器	
SD 611014	11-2 上層	9-J6	不明		幅0.4	0.07		
SD 611015	11-2 上層	9-44	不明	→ SK611016	幅0.45～0.15	0.08		
SK 611016	11-2 上層	9-44-15	不明	SD611015 →	幅0.6	0.7		
SD 611017	11-2 上層	9-J5	不明		幅1.2～0.6	0.15		SD611012 との前後関係不明
SD 611018	11-2 上層	9-42-J2-K2	中世以降		-	0.5以上	釘	
SD 611019	11-2 上層	9-I3-J3	不明		幅0.25～0.1	0.05		
SK 611020	11-3 上層	9-K16-K17	平安中	→ SD611075	- × 1.5	0.1	土師器、製塩土器	調査時は SX611020 として 掘削
SD 611021	11-3 上層	9-I16～I19	平安末～鎌倉前	→ SK611024、→ SR611076	幅0.4～0.5	0.25	土師器、山形焼	
SK 611022	11-3 上層	9-J15-J16	平安末～鎌倉前		2.6 × 2.5	0.2	土師器、ワケロ土師器、製塩土器、灰釉陶器、石製品	調査時は SX611022 として 掘削。整理時に SX611023 と同一と判別
611023	欠番							
SK 611024	11-3 上層	9-I24	平安末～鎌倉前	SD611021 →、SD611025 →	1.6 × 1.2	0.26	土師器、灰釉陶器、土製品	
SD 611025	11-3 上層	9-I18	平安末～鎌倉前	SD611023 →、→ SK611024	幅0.7	0.15	土師器、須恵器、山形焼、土製品	
SD 611026	11-2 上層	9-N25-N24-O23- O24	平安前	SD611028 →、→ SD611013	幅0.45	0.25	土師器	

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (m) 長×短×幅	深さ (m)	主な出土遺物	備考
SD 611027	11-2 上層	△-N22-N23-O22-O23	平安前	SD611028 →	幅 1.2	0.5	土師器、管塚土器、須恵器、灰釉陶器	
SD 611028	11-2 上層	△-N20 - N23	平安前	→ SD611013、SD611026、 → SD611027、→ SD611043	-	0.02	縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、瓦	
SD 611029	11-2 上層	△-N19-O19-P19-Q19-R19	不明		幅 0.65 - 0.45	0.05		
SD 611030	11-2 上層	△-O17-P18-Q18-R18	古墳中～後		幅 0.85 - 0.6	0.15 - 0.25	縄文土器、土師器、須恵器、陶器、石製品	
SD 611031	11-3 上層	△-I17	平安末以前	→ SD611021	幅 0.6	0.15 - 0.25	土師器	
SK 611032	11-5	欠番						SK611031と同一
SD 611033	11-3 上層	△-I17-I18	平安末以前	→ SD611025	-	0.3		
SD 611034	11-3 上層	△I15	鎌倉前以前	→ SK611005、→ SK611009	幅 0.4	0.05		
SK 611035	11-3 上層	△-J13	平安中	→ SD611004	0.9 × 0.8	0.5	土師器、管塚土器	
SK 611036	11-3 上層	△-J16-J17	平安前以前		- × 0.55	0.23	縄文土器	
SK 611037	11-2 上層	△-O19	縄文後前半		(土器残存部) 0.4 × 0.35	0.9	縄文土器	埋設土器か
SK 611038	11-2 上層	△-M1-N1-△-M24-25-N24-25	平安後～鎌倉前	SA611087 →、→ SD611013	第 3 表参照		土師器	
SK 611039	11-2 ～ 4	欠番						
SD 611040	11-2 上層	△-O16	不明		幅 2.35	0.7 以上	土師器	
SD 611041	11-2 上層	△-O14-O15-P15	鎌倉前		幅 0.6	0.38	縄文土器、土師器、山形器、陶器、銅器?	
SD 611042	11-2 上層	△-O13-P14	不明		幅 0.65 - 0.9	0.2		
SK 611043	11-2 上層	△-M19-20-N20-21-O20-21-P20	奈良	SD611028 →、SK611089 →	第 3 表参照		土師器	
SK 611044	11-2 上層	△-N21-22-O21-22	奈良	SK611089 →	第 3 表参照		瓦し	
SD 611045	11-1	△-P3-P4-Q3	平安前		-	0.03 - 0.1	須恵器	
SD 611046	11-1	△-P4-P5-Q4	不明		幅 0.55 - 0.7	0.1		
SD 611047	11-1	△-P5-P6	不明		幅 0.35	0.07		
SD 611048	11-1	△-P6	鎌倉前～中		幅 1.6	0.15	土師器	
SK 611049	11-1	△-P8-P9	古墳以前		-	0.3 以上	土師器	
611050		欠番						
SK 611051	11-2 下層	△-R20	縄文後半		(土器残存部) 0.3 × 0.28	0.17	縄文土器	埋設土器
SK 611052	11-2 下層	△-Q19	縄文後半		(土器残存部) 0.23 × 0.19	0.8	縄文土器	埋設土器
SK 611053	11-2 下層	△-Q19-Q20-R19-R20	縄文後		1.32 × 1.3	0.35	縄文土器、石製品	不整形な方形
SK 611054	11-2 下層	△-P18-Q18	縄文後		1.02 × 0.85	0.38	縄文土器、石製品	
SK 611055	11-2 下層	△-O20	縄文後	SK611069 →、→ SK611089	-	0.3	縄文土器	
SK 611056	11-2 下層	△-Q19	縄文後		0.9 × 0.74	0.53	縄文土器	
SK 611057	11-2 下層	△-O18-P18	縄文後		1.26 × 1.1	0.38	縄文土器、石製品	
SK 611058	11-2 下層	△-P19	縄文後	SK611063 →	1.3 × 0.84	0.64	縄文土器、石製品	
SK 611059	11-2 下層	△-Q19	縄文後	SK611068 →	0.9 × 0.9	0.42	縄文土器、石製品	
SK 611060	11-2 下層	△-Q19	縄文後	SK611066 →	1.14 × 0.8	0.36	縄文土器、石製品	
SK 611061	11-2 下層	△-Q20	欠番					
SK 611062	11-2 下層	△-P19	欠番					
SK 611063	11-2 下層	△-P19	縄文後	→ SK611058	-	-	縄文土器	調査時14 S2611063として発掘
SK 611064	11-2 下層	△-P19	欠番					
SK 611065	11-2 下層	△-O19	欠番					
SK 611066	11-2 下層	△-P18-P19	縄文後		1.72 × 1.56	0.4	縄文土器	調査時14 S2611066として発掘
SK 611067	11-2 下層	△-Q19	縄文後		0.68 × 0.6	0.16	縄文土器、石製品	
SK 611068	11-2 下層	△-Q19	縄文後	→ SK611059、→ SK611060	幅 1.64	0.3	縄文土器、石製品	調査時14 S2611068として発掘

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (m) 長×短×幅	高さ (m)	主な出土遺物	備考
SK 611009	11-2 F層	△-O30-P20	縄文後	→ SK611055	幅1.2	0.2	縄文土器、石製品	
SK 611070	11-2 F層	△-N19-O19	縄文後		× 1.4	0.5	縄文土器	
SZ 611071	11-3 F層	F-117	欠番					
SK 611072	11-3 F層	F-K9	欠番					
SD 611073	11-3 上層	F-114-15-J13- 14-15-K13-14- 15	平安中～後	→ SD611001			第3表参照 黒色土器、灰釉陶器、瓦	
SD 611074	11-3 上層	F-J13-14-15- K13-14-15-L14- 15	奈良～平安前				第3表参照 須恵器	
SD 611075	11-3 上層	F-J17	平安前以前	→ SK611020, → SD611001			第3表参照 縄文土器	
SK 611076	11-3 上層	F-119-120-J19- 120	平安末～近世	SD611021 →	-	1.2以上	縄文土器、土師器、灰釉陶器、山 茶碗、陶器、瓦、石製品	調査時はSD611067として 掘削
SD 611077	11-3 上層	F-J15-16	平安中前後	→ SD611001			第3表参照 土師器	
SD 611080	11-3 上層	F-J10-11	平安前～中				第3表参照 土師器	
SD 611081	11-3 上層	F-J12-13	平安前～中				第3表参照 土師器	
SD 611082	11-3 上層	F-J14-15	平安前以前				第3表参照 なし	
SD 611083	11-3 上層	F-J10-11	不明				第3表参照 なし	
SA 611084	11-3 上層	F-K14-15	不明	→ SK611022			第3表参照 なし	
SA 611085	11-3 上層	F-J14-K14	不明				第3表参照 なし	
SA 611086	11-3 上層	F-K10-11	不明				第3表参照 なし	
SA 611087	11-3 上層	△-O24-25	平安	SA611088 →			第3表参照 なし	
SA 611088	11-3 上層	△-O24-25	平安	→ SA611087			第3表参照 なし	
SK 611089	11-2 上層	△-N20-N21-O20- O21	古墳前	→ SP611043, → SD611044, → SD611028, SK611055 →	幅3.8～5.0	0.9	土師器	下層でも検出
SD 611090	11-3 上層	F-J11-J12-K12- K13	平安以前	→ SD611001	幅0.4～0.5	0.15～ 0.25		
SK 611091	11-3 上層	F-K9-K10	不明		0.85×0.6	0.36		
SK 612001	12-4	F-Q14	平安末	SD612006 →, SE612007 →, SE612010 →	-	0.08	土師器、山茶碗	洗い落ち込み小
SD 612002	12-4	F-T14-U14	平安中		幅1.0	0.05	土師器、須恵器、灰釉陶器	下部に覆土のP4
SE 612003	12-3- 4	F-X13-X14	平安中～後	SE612006 →	3.5×3.3	-	縄文土器、土師器、ロクロ土師器、 黒色土器、朝鮮土器、須恵器、灰 釉陶器、石製品	方形井戸（覆板・横板組扉 付）
SD 612004	12-4	F-V14	平安後～鎌倉		幅0.9	0.15	土師器、甕埴土器	
SD 612005	12-3	F-X11-Y11	不明		幅0.4	-	土師器	
SD 612006	12-4	F-M14-R14	平安中～末	→ SK612001, SE612007 →, SE612010 →	-	-	土師器、ロクロ土師器、黒色土器、 山茶碗、瓦	平安時代の旧井戸上か下、 多量のマンゴシ粒含む、下 層から多くのP4を検出、 P45から古墳時代中期の白 付土
SE 612007	12-4	F-P14-Q14	平安後	→ SK612001, → SD612006, SE612010 →	幅2.8	-	土師器、ロクロ土師器、甕埴土器、 須恵器、灰釉陶器、瓦	
SD 612008	12-4	F-M14	不明		幅0.4	0.05	土師器	洗い流路
SD 612009	12-4	F-L14-M14	-		幅0.35	0.05	土師器	覆瓦
SE 612010	12-4	F-P14-Q14	平安中	→ SK612001, → SD612006, → SE612007	-	-	土師器	
SD 612011	12-2	F-X2-Y2	平安		幅0.6	0.23	灰釉陶器	
SD 612012	12-2	F-X3-X4	平安中	SD612013 →	幅0.5	0.15	土師器、須恵器	
SD 612013	12-2	F-X3-X4	平安前～中	→ SD612012	幅0.5	0.2	灰釉陶器、石製品	壁に軌跡状の痕跡あり
SD 612014	12-2	△-X23-Y23	平安		幅0.75	0.35	土師器	
SD 612015	12-2	△-X21-22	平安前～中	→ SD612017	幅3.0	0.8	土師器	
SD 612016	12-2	△-X19	平安前		-	-	土師器、山茶碗	
SK 612017	12-2	△-X21-22	平安前	SD612015 →	幅3.3	-	土師器、須恵器	井戸特（覆板・横板組扉付 小）
SD 612018	12-1	△-X14-X16	古墳前～中		-	-	土師器	大溝、遺構カードのグリッド とずれる。新ろ掘りと合 わせる
SD 612019	12-1	△-X13-X14	平安		-	-	土師器、須恵器	

遺構番号	調査区	地区	時期	前後関係	平面規模 (M) 長×短×幅	深さ (M)	主な出土遺物	備考
SD 61200	125	F-B14-C14	古墳後		幅 2.5	0.84	土師器	
SD 61201	125	F-G14-H14	奈良～平安前	S8612025 →	幅 0.9	0.45	須恵器	
SD 61202	125	F-B14	平安中	S8612025 →	幅 0.45	0.23	灰釉陶器	
SD 61203	125	F-S14	不明		幅 0.6	0.35	土師器	
SD 61204	126	F-W14-X14	不明		幅 0.82	0.22	土師器	
SR 61205	125	F-G14-R14	平安後～鎌倉前	→ SD612021 → SD612022	-	-	土師器、ロクロ土師器、製塩土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、土製品、瓦、石製品	
SE 61206	123-4	F-X13-Y14	平安中以前	→ SE612003	幅 4.0	-		方形井戸
SD 61207	121	F-X14	古墳中以降	SD612018 →, SD612029 →	幅 1.0	0.1		
SD 61208	121	F-X14	平安以降	SD612019 →, → SD612027	幅 0.9	0.18		
SD 61209	125	F-B14-F14	不明		幅 1.0	0.23		
SA 61200	124	F-L14-N14	平安	→ SD621006	-	-	土師器	
SA 61201	124	F-B14-T14	平安中		-	-	土師器、黒色土器	
SE 61202	122	F-X21-Z2	平安中前後	→ SE612017	-	-		方形井戸
SE 61201	132	F-J12-K12	鎌倉	SE613003 →, SD613004 →, SD613013 →	2.7	-	土師器、灰釉陶器、山茶碗	結物井戸群。底部に曲物、上面に円形排列の石
SR 61202	131-2	F-B12-K12	平安後～鎌倉	SD613013 →	-	-	土師器、製塩土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗	
SE 61203	132	F-K12	不明	→ SE613001, SD613013 →	-	-	土師器	
SD 61204	132	F-L12-M12	古墳	→ SE613001	幅 1.2	0.35	土師器	
SD 61205	132	F-Q12	不明		幅 0.15	0.12		
SR 61206	132	F-S12 F-A12	平安中～後	→ SD613007, → SD613008	幅 2.0	-	土師器、黒色土器、灰釉陶器、瓦、石製品	
SD 61207	132	F-T12 F-C12	鎌倉前	SD613005 →, S8613006 →	幅 1.1	0.4	土師器、ロクロ土師器、山茶碗	
SD 61208	132	F-S12	平安末	S8613006 →	幅 1.0	0.4	土師器、灰釉陶器、山茶碗、青磁、石製品	
SD 61209	132	F-D12-E12	不明		幅 1.0	0.05		
SR 61210	132	F-L12-P12	平安中以降		-	-	土師器	
SD 61211	133	F-V11 F-J11	中世以降	S8613012 →	幅 0.6	0.1		集りに沿う
SR 61212	133	F-B11-J11	不明	→ SD613011	-	-		
SD 61213	132	F-J12-K12	平安中以降	→ SE613001, → S8613002, → SE613003	-	-	土師器	
SZ 61214	132	F-B11-E12	不明		幅 0.7	0.3		集りに沿う。段板状門石礎跡
SD 61215	132	F-A12	鎌倉以前	→ SD613007, → S8613006	幅 0.3	0.15	なし	
SD 61216	132	F-B12-I12	平安後以前	→ SD613007, → S8613006	幅 1.6	0.4	なし	
SR 61217	141	F-W1 → W4	古墳前	→ SD614002, → SD614009	-	-	養生土器、土師器	
SD 61218	141	F-W2	古墳前以降	S8614001 →	幅 0.68	0.18		
SR 61219	141	F-W14-W15	鎌倉前～中		-	-	土師器、ロクロ土師器、須恵器、山茶碗、陶器、加工円盤	
SR 61219	141	F-W20 → W23	平安前～中		幅 10.3	-	土師器、須恵器	
SD 61219	143	F-Y13 F-A13	不明		幅 0.5	0.1		
SR 61219	142	F-W8 → W11	古墳前～中		-	-	土師器	
SD 61219	143	F-I13-J13	鎌倉前	S8614015 →	-	0.9	須恵器、灰釉陶器、山茶碗、白磁、石製品	
SD 61219	145	F-B12-B13-C12-C13	不明		幅 1.05	0.9		
SD 61219	141	F-W3-W4	古墳前以降	S8614001 →	幅 2.6	0.18	土師器	調査時は S8614009 として報告
SR 61219	145	F-D12-E12-E13	平安末～鎌倉前		-	-	灰釉陶器、山茶碗	
SE 61219	145	F-E13	鎌倉前以降	S8614010 →	1.4 × 1.3	0.9 以上		方形。調査時は S8614011 として報告
SD 61219	141	F-W25 F-W1	不明		幅 0.65 → 0.95	0.34		
SD 61219	143	欠番						
SR 61219	143	F-C13-D13	欠番					
SR 61219	143	F-D13-F13-H13-J13 I13 L13 M13	平安後以降	S8614014 →	-	-	土師器	
SR 61219	144	F-M12-M13-Q12-Q13 I13 L13 M13	平安末～鎌倉前		-	-	ロクロ土師器、陶器	

VI. 木製品

今回の調査で出土した木製品の大半は井戸枠の構造材である。その多くは転用材であるが、曲物、結物を直接的に転用したものと、その部材を転用したものがある。また一部には建築部材からの転用と考えられるものもある。枠板として転用されたものの材質はコウヤマキとスギ、曲物はヒノキとスギが目立つ。

SE61012 (第104・105図) 出土状況が不明確ではあるが、1～4は井戸枠材と考えられ、曲物(10～13)も井戸の構造材の可能性が高い。5～9は加工材であるが、これらも井戸枠材の可能性が高い。材質は全てスギ、曲物以外の木取は板目である。表面の仕上げは、主にヤリガンナで施されている。曲物内側のケビキは、10・12が縦方向であるのに対し11・13が斜め方向である。

14・15は両端に出ホゾ、16・17は切欠きが設けられ、土居桁に組まれていたものと思われる。出ホゾや切欠き周辺はノミにより仕上げられるが、他はチョウナによる。材質は1～13と同様にスギで木取は板目である。

これらの時期は、共存する土器等から鎌倉時代後期となる。

SE61013 (第106・107・136図) 18～23は井戸の構造材で、材質はスギである。木取は18・19が板目、他は板目である。表面の仕上げはチョウナによるが、小口はノミである。23は両端に形状の異なる切欠きを設ける。また、ノコギリの使用を思わせるような線状痕が一部に認められる。いずれも厚さ5cmを測る重厚な板材である。

160は厚さ10cmを測る厚いものであるが、一応、板状を呈する。材質はスギ、木取は板目、これも井戸枠の一部であった可能性がある。161は棒状具で丸太をミカン割りして成形する。材質はスギで、これも井戸枠として機能していたものであろうか。162はツブラジイの丸太を半載して成形する。芯持材で樹皮も残存している。

これらの時期は、共存する土器から平安時代後期と考えられる。

SE61032 (第136図) 図示したものは163のみで楔状の形状を呈する。ノコギリで成形し、ケズリにより整形している。材質はコウヤマキ、木取は板目である。時期は、共存する土器から鎌倉時代後期～室町時代となる。

SE61033 (第107・136図) 24～33は、全て井戸の構造材と思われる。24～30は結物から井戸の縦板枠へ転用したものである。割材の表面をヤリガンナで仕上げている。材質は全てスギ、木取は板目である。30の下端近くには小径の穿孔がある。

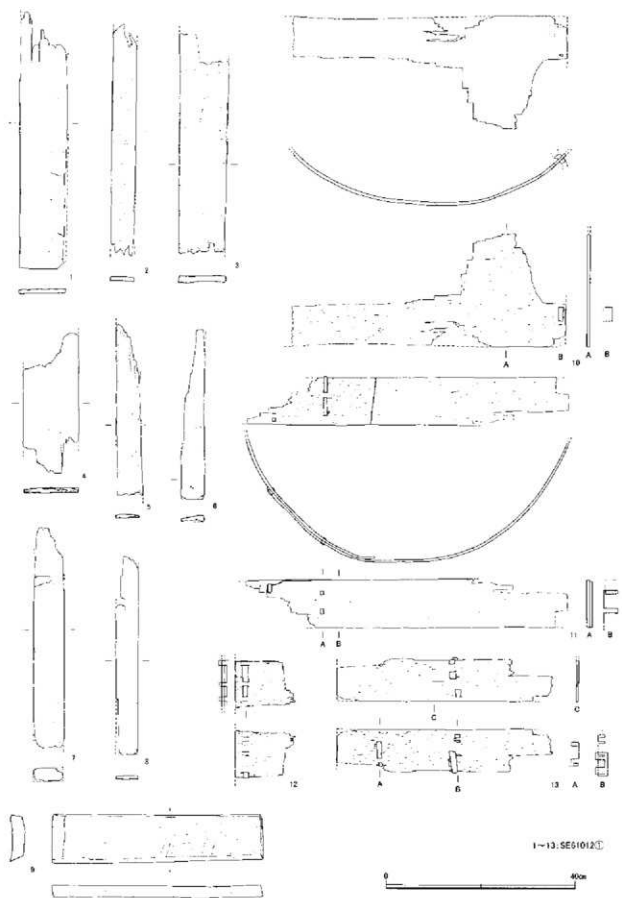
31～33は曲物で、材質はヒノキ、木取は板目であるが、ケビキは31が縦であるのに対し33は斜め方向である。

164～169は井戸の最下層から出土したものである。164の材質は不明確であるが、ツバキ属である。丸太の両端をオノにより切断し、表面に薄いケズリを施す。13cm程度の長さしかなく、用途は不明である。165～169は楔である。165～168はヒノキの割材で、ケズリで整形するが、167はノコギリの使用が疑われる。169は他のものより大きく、材質も異なりスギである。木取は板目、井戸枠縦板の可能性もある。

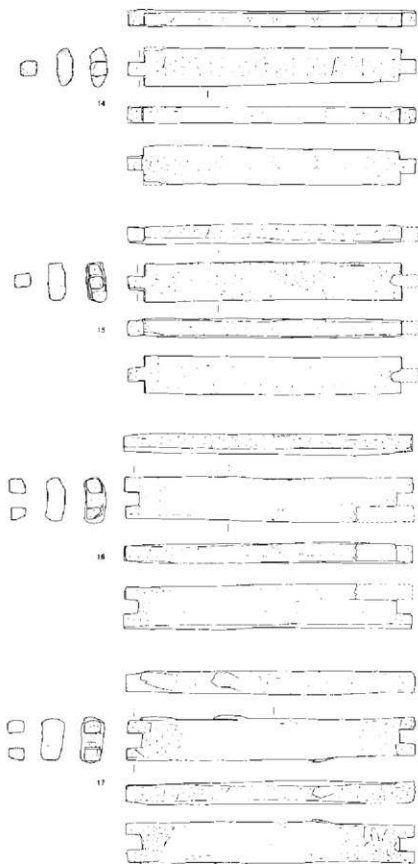
これらの時期は、共存する土器から室町時代となる。

SE62002 (第108～124・136図) 出土した遺物は、170を除き全て井戸の構造材である。170の材質はスギで、木取は板目である。出土状況からは不明確であるが、板状を呈することから、これも井戸の縦板井戸枠として転用されていた可能性が高い。

34～91は縦板井戸枠として機能していたもので、幅10cm前後のものである。厚さ1cm未満の薄いものと3cm程度の厚いものがある。薄いものはヘギ板と考えられ、厚いものは割材をチョウナ等で整形し、側面はノコギリや台カンナの使用が想定される。材質は薄いものにスギが散見されるもののが大半がコウヤマキ、厚いものは全てコウヤマキである。木取は板目であるが、厚いものに1点(36)板目が認められる。40・56・76・84の両端にはホゾ穴が設けら

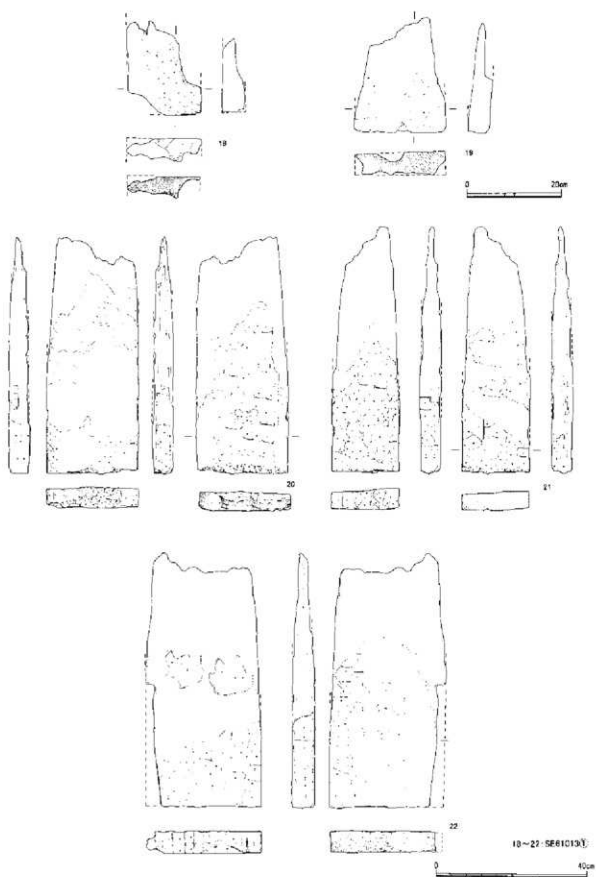


第104图 第6次調査1区井戸枠材等実測図①(1:8)

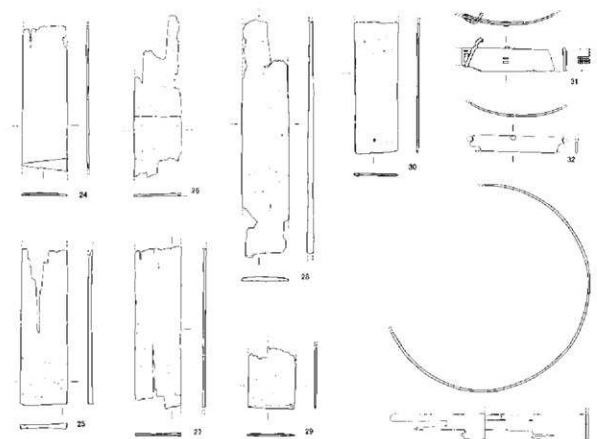
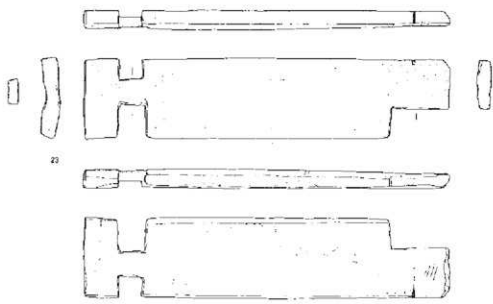


14~17: SE61012②

第105図 第6次調査1区井戸杵材等実測図② (1:8)

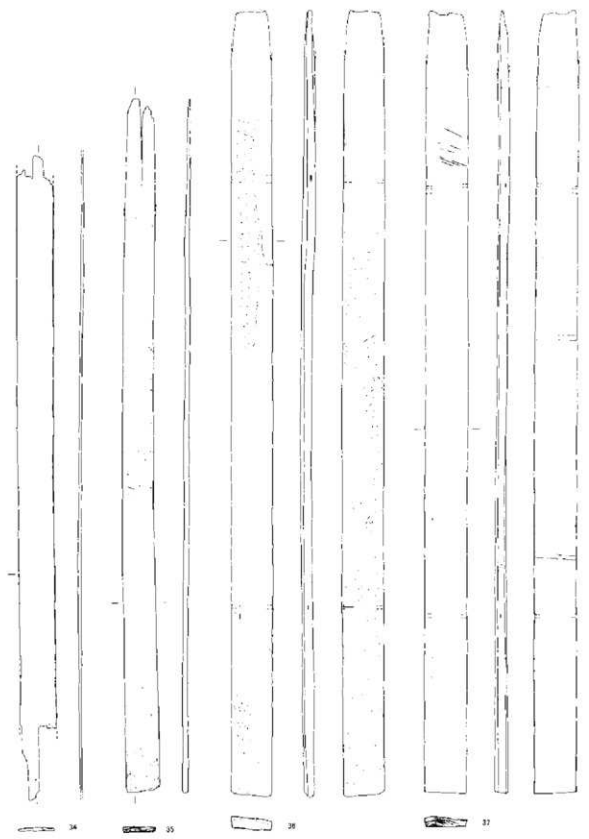


第106図 第6次調査1区井戸枳材等実測図③ (1:10, 18・19=1:8)



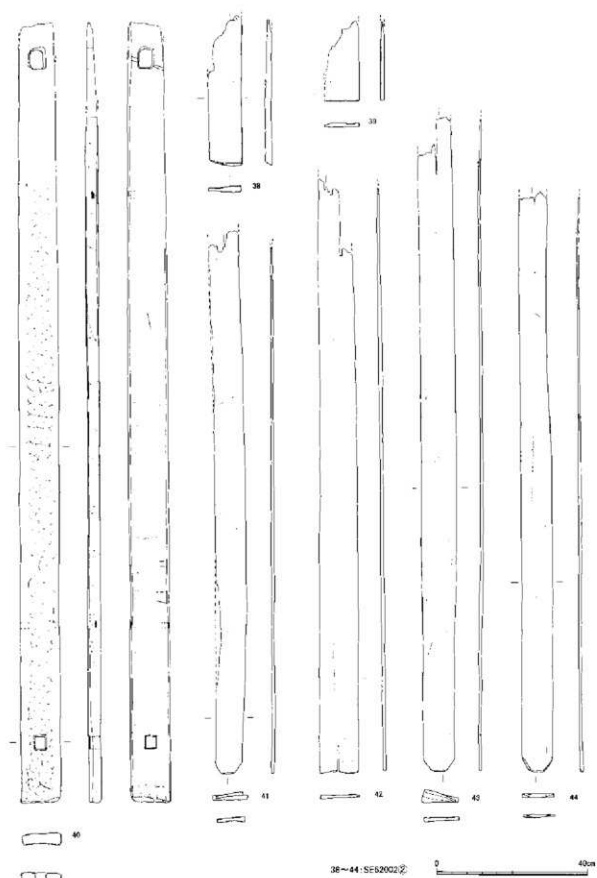
23: SE61013②
24-33: SE61023①

第107図 第6次調査1区井戸杵材等実測図④ (1:8, 23=1:10)



34-37 SE62002J

第108図 第6次調査2区井戸枠材等実測図① (1:10)



第109图 第6次調査2区井戸枠材等実測図② (1:10)

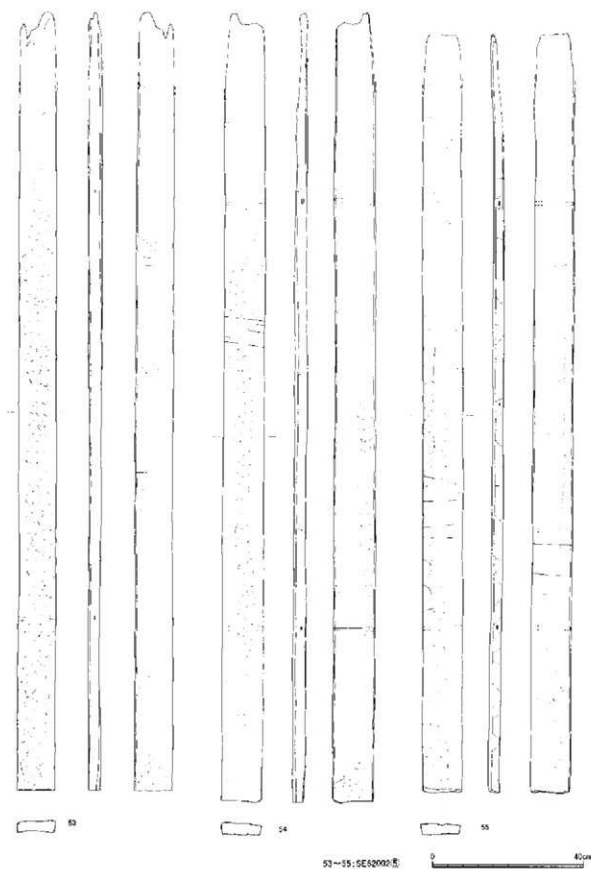


第110图 第6次調査2区井戸枠材等実測图③ (1:10)

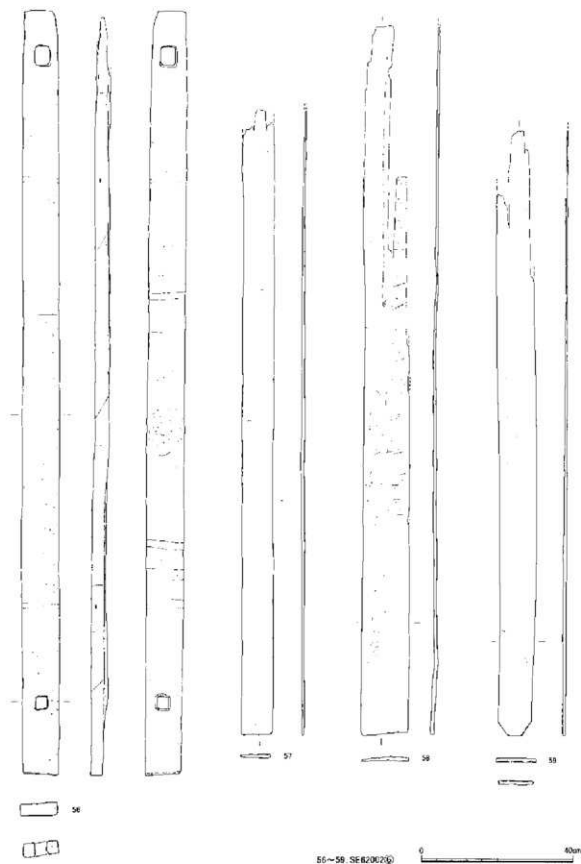


48-52 5542002④

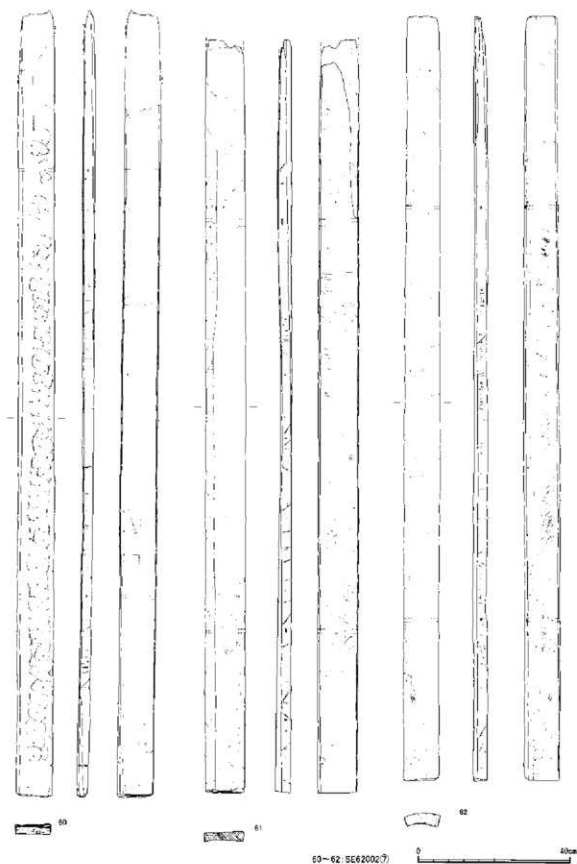
第111图 第6次調査2区井戸杵材等実測图④ (1:10)



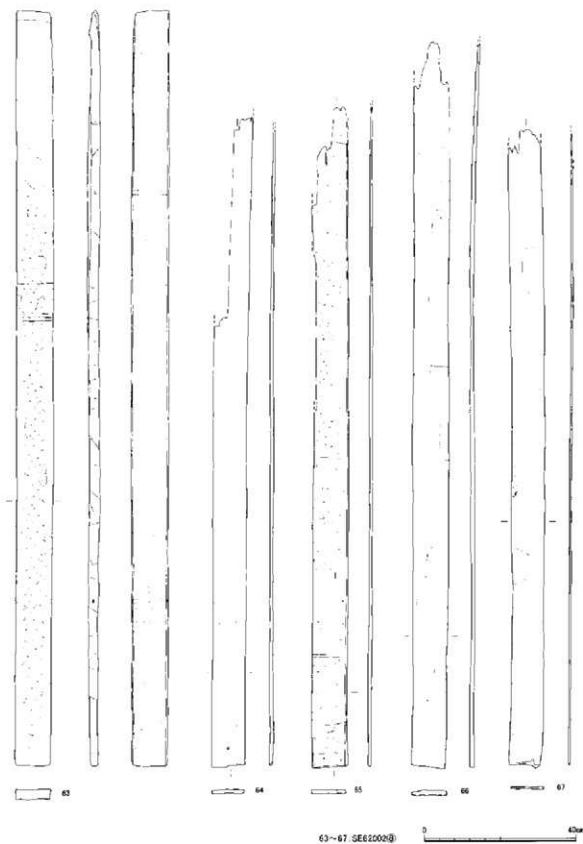
第112図 第6次調査2区井戸材等実測図⑤ (1:10)



第113図 第6次調査2区井戸杵材等実測図⑥ (1:10)



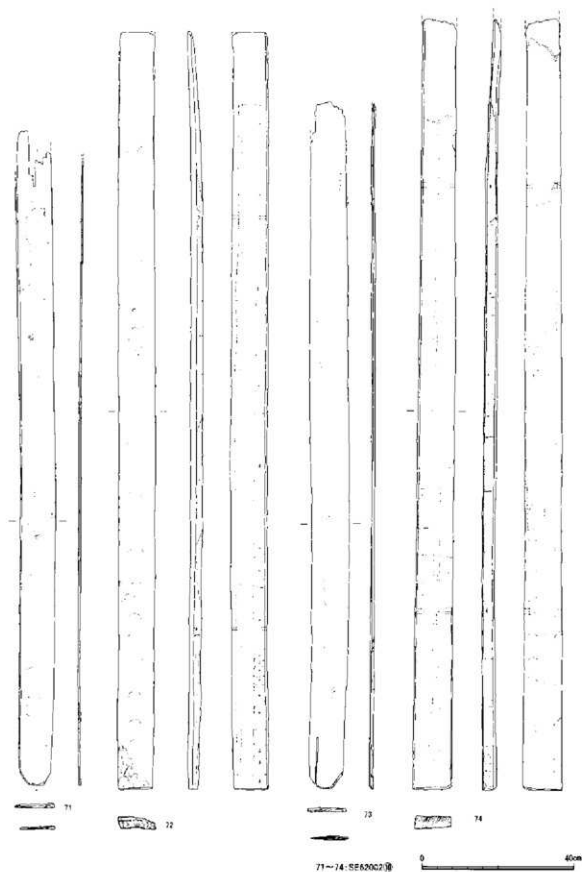
第114图 第6次調査2区井戸枅材等実測図⑦ (1:10)



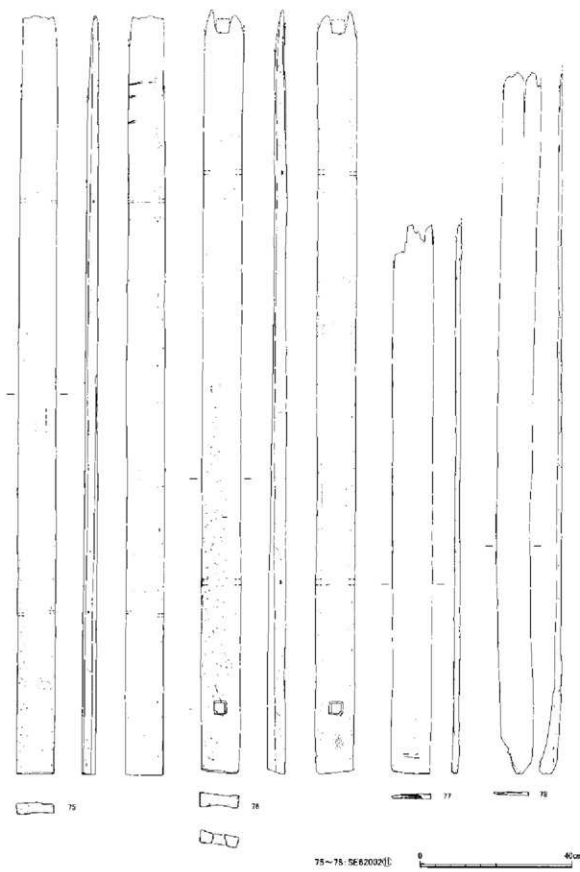
第115図 第6次調査2区井戸杵材等実測図⑧ (1:10)



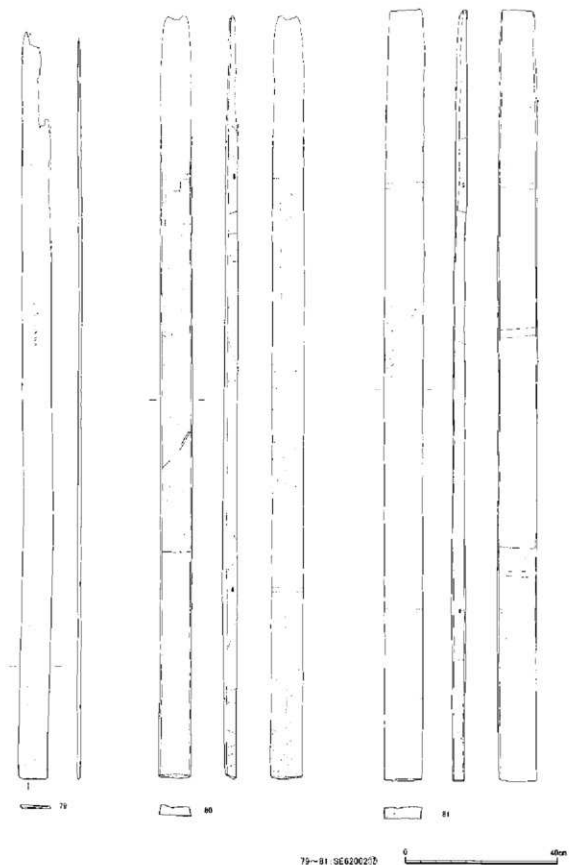
第116図 第6次調査2区井戸枠材等実測図⑨ (1:10)



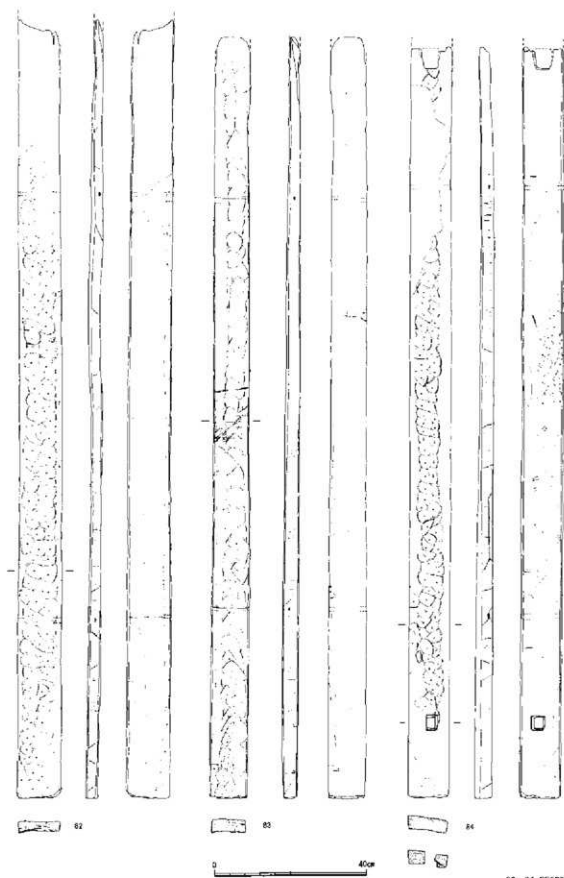
第117图 第6次調査2区井戸枠材等実測図⑩ (1:10)



第118図 第6次調査2区井戸杵材等実測図① (1:10)

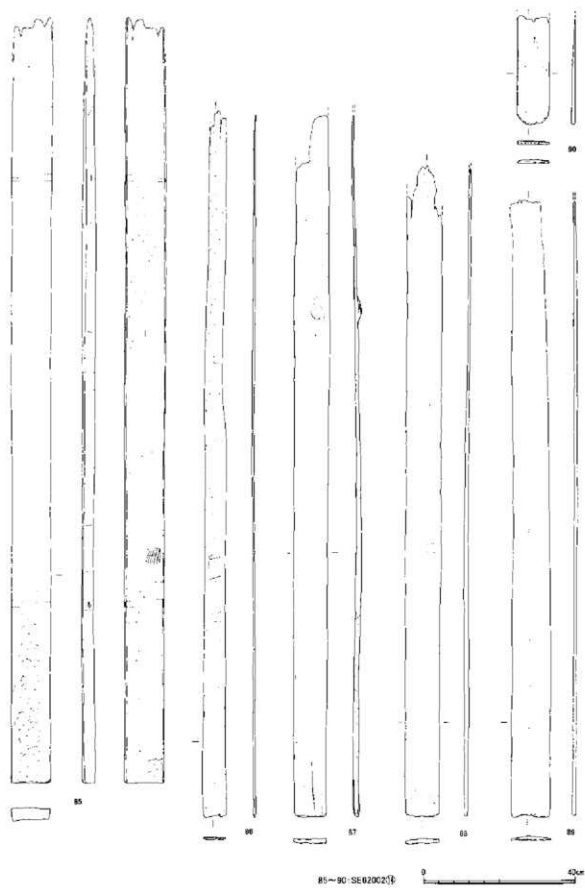


第119図 第6次調査2区井戸杵材等実測図⑫ (1:10)

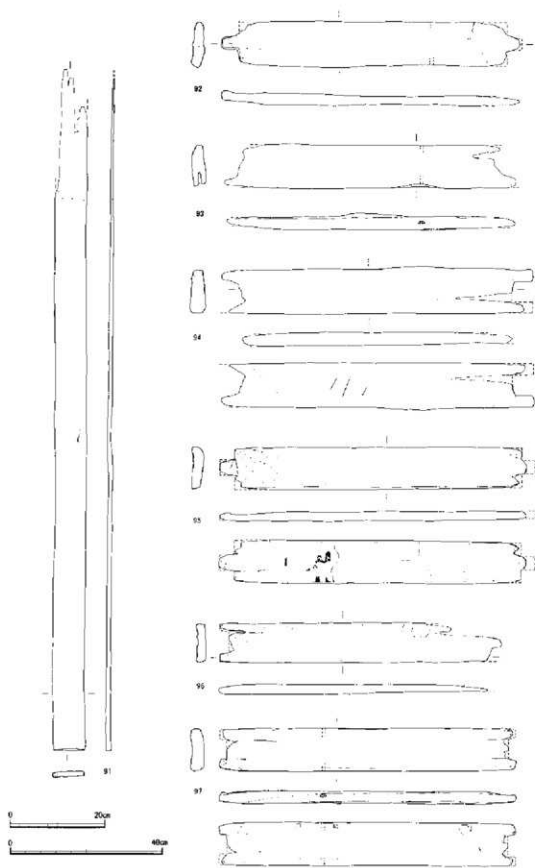


82~84: SEC2002③

第120図 第6次調査2区井戸枠材等実測図③ (1:10)

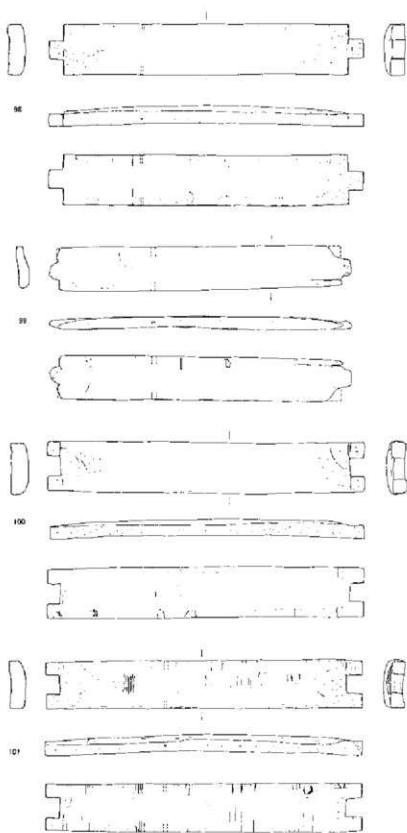


第121图 第6次調査2区井戸枠材等実測図⑩ (1:10)



91-97. 5E629C275

第122図 第6次調査2区井戸枅材等実測図⑮ (1:8, 91=1:10)



98-101. SE62002⑤



第123図 第6次調査2区井戸枿材等実測図⑤ (1:8)

れている。土居桁との吻合せのために開けられた可能性も否定できないが、出土位置からはその意図が汲み取れない。木釘穴が側面2ヶ所、平面に2ヶ所設けられているものも多数あり、64の下端には小径の穿孔がある。以上の状況から、これらの材は他部材からの転用と考えられる。

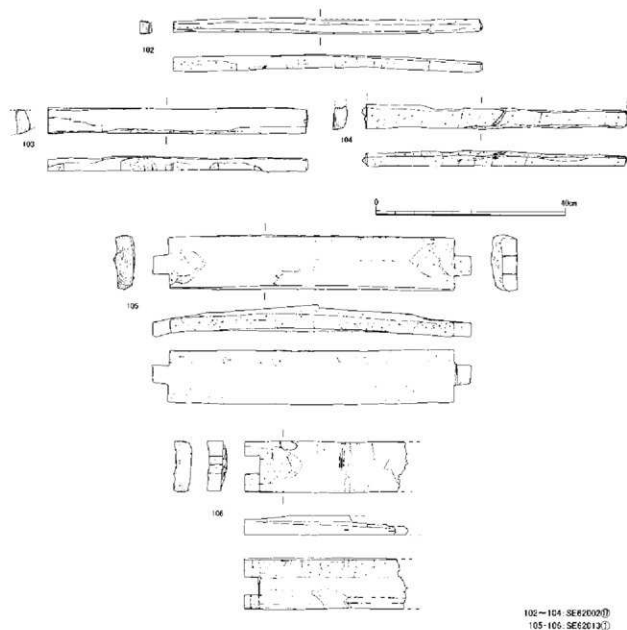
92～101は土居桁に組まれていた部材である。材質は全てコウヤマキ、木取は全て板目、明瞭なチョウナ痕が認められるものもある。両端を出ホゾに加工するものと切欠きを設けるものがあり、互いに組み合わされたものである。木釘穴が2ヶ所設けられ

ているものも多く、他部材からの転用であることを示している。

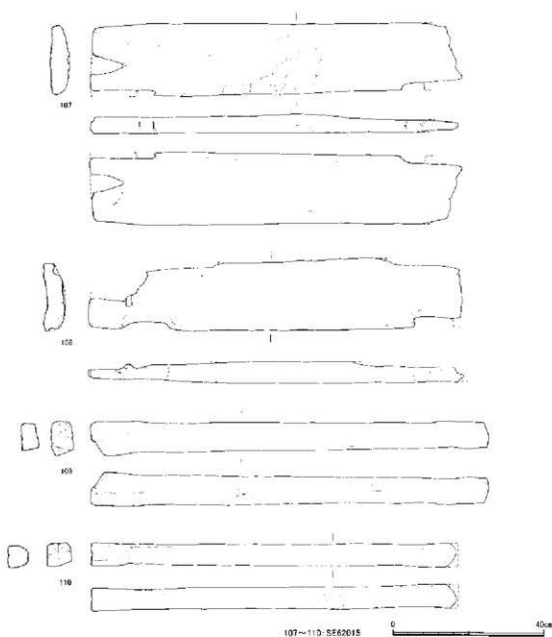
102・103は角材、104の木取は板目であるが、欠損しており、結果的に角材状の形状である。材質は全てコウヤマキで、これらも井戸の構造材として機能していたものであろう。他の部材と同様に転用材の可能性が高い。

これらの時期は、共存する土器から鎌倉時代前期～中期となる。

SE62013（第124・136図）105・106は井戸枠として土居桁に組まれていたものと想定される。



第124図 第6次調査2区井戸枠材等実測図① (1:8)



第125図 第6次調査2区井戸枠材等実測図④ (1:10)

105は両端を出ホブ、106は欠損しているものの両端に切欠きが設けられるものである。両者とも材質はコウヤマキ、木取は板目である。チョウナにより整形されるが、細部はノミによる。

171は井戸の下層、172は上層から出土した楔である。両者ともコウヤマキの割材で、171はノギリの使用が疑われる。

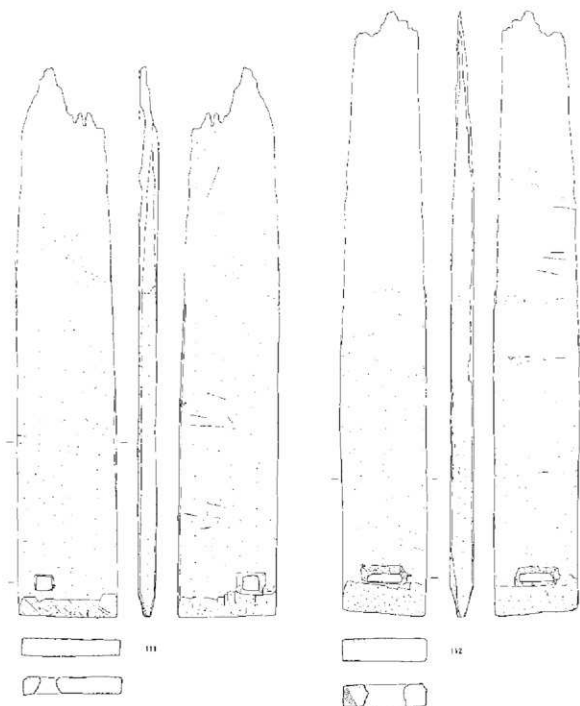
これらの時期は、共存する土器から鎌倉時代前期～中期となる。

SE62025(第125図) 107・108は井戸枠の横板、109・110は井戸枠の横棧である。前者には組み合

わせるための切欠きが設けられているが、劣化のため形状は不明確である。後者では細部にノミの使用が認められるが、両者ともに詳細な整形工具は不明である。材質はスギで木取は板目である。

これらの時期は、共存する土器から平安時代後期となる。

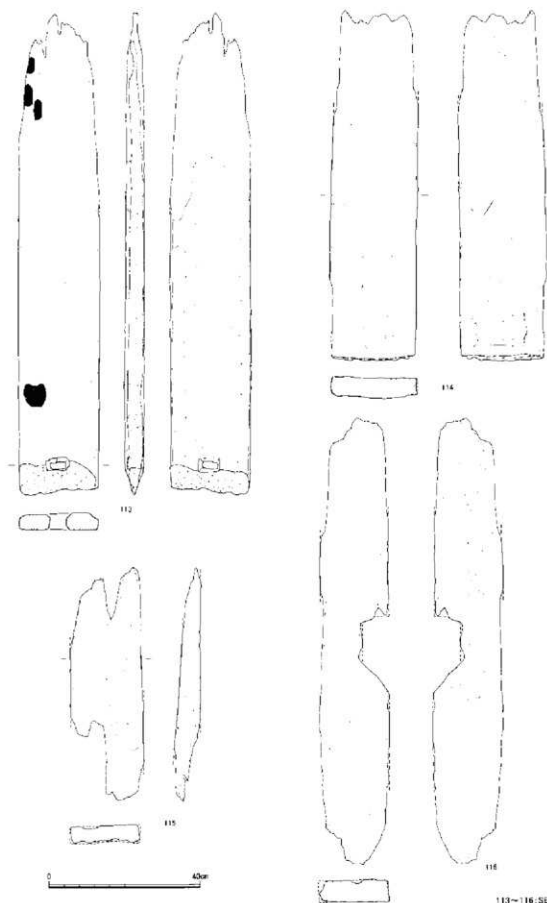
SE612003(第126～132・136・138図) 111～119は縦板の井戸枠として機能していたものである。材質は119のみヒノキ、他はスギである。木取は板目であるが、118は柃目、119は追柃目である。いずれも厚さ5cm前後を測る重厚な材で、表面には



111-112-556/2003.1

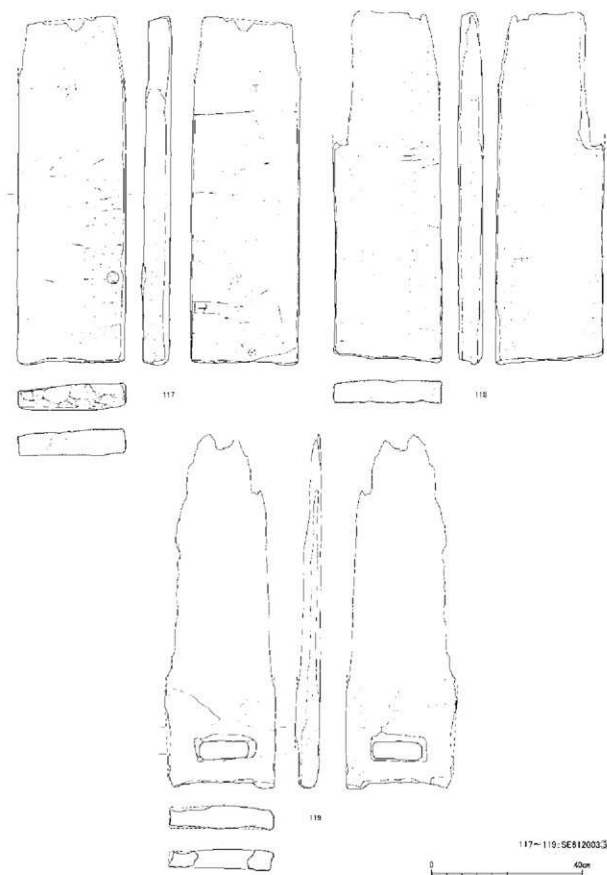


第126図 第6次調査12区井戸杵材等実測図① (1:10)

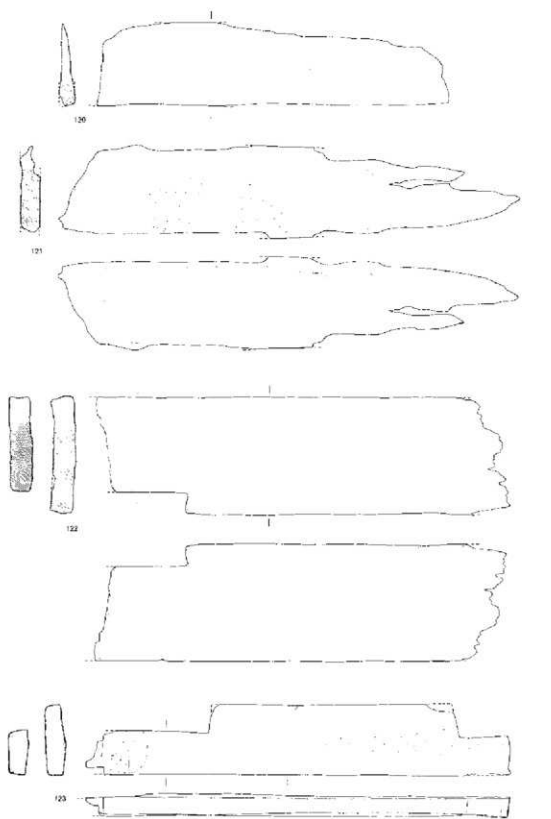


第127図 第6次調査12区井戸杵材等実測図② (1:10)

113~116:SE612002②



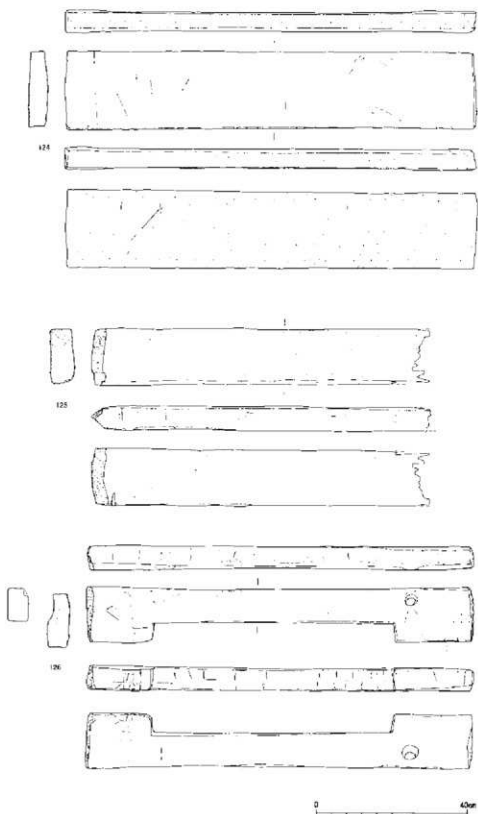
第128図 第6次調査12区井戸枠材等実測図③ (1:10)



120-123: SE612002/4

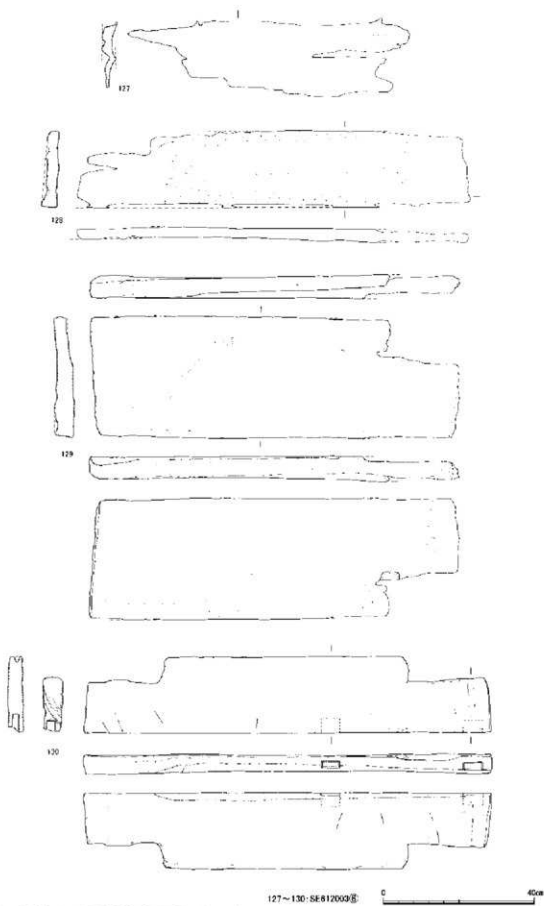


第129図 第6次調査12区井戸枠材等実測図④ (1:10)

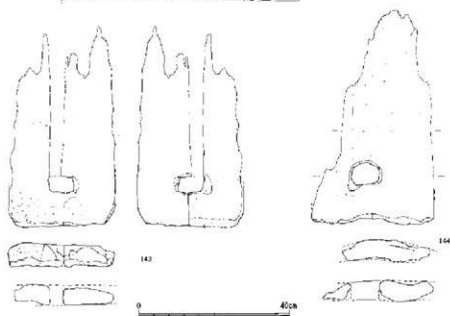
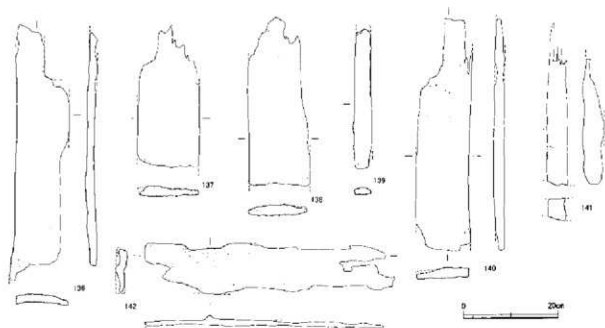
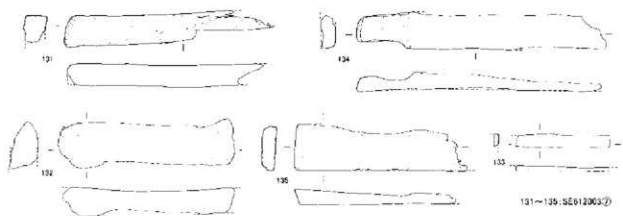


124~126 SE812009⑤

第130図 第6次調査12区井戸枠材等実測図⑤ (1:10)

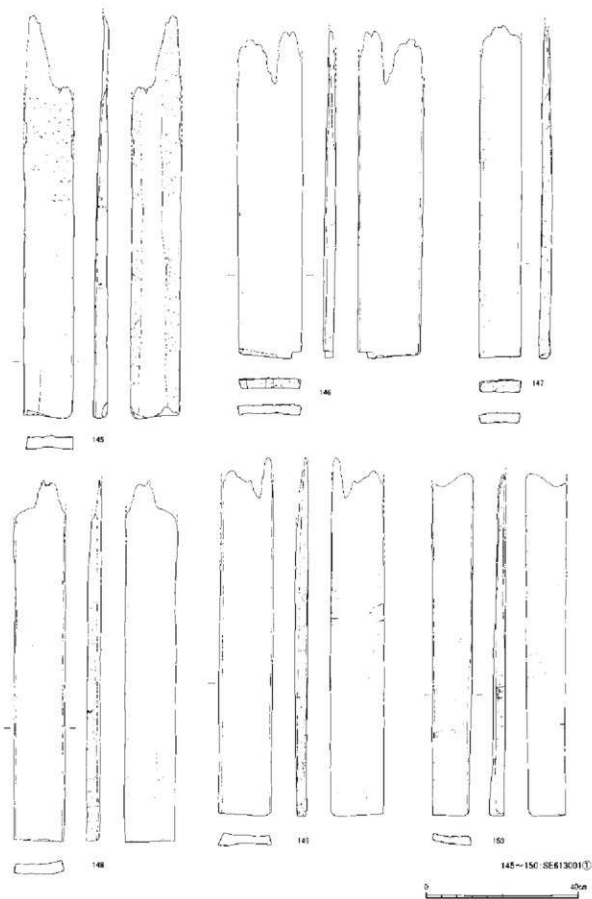


第131图 第6次調査12区井戸杵材等実測図⑥ (1:10)

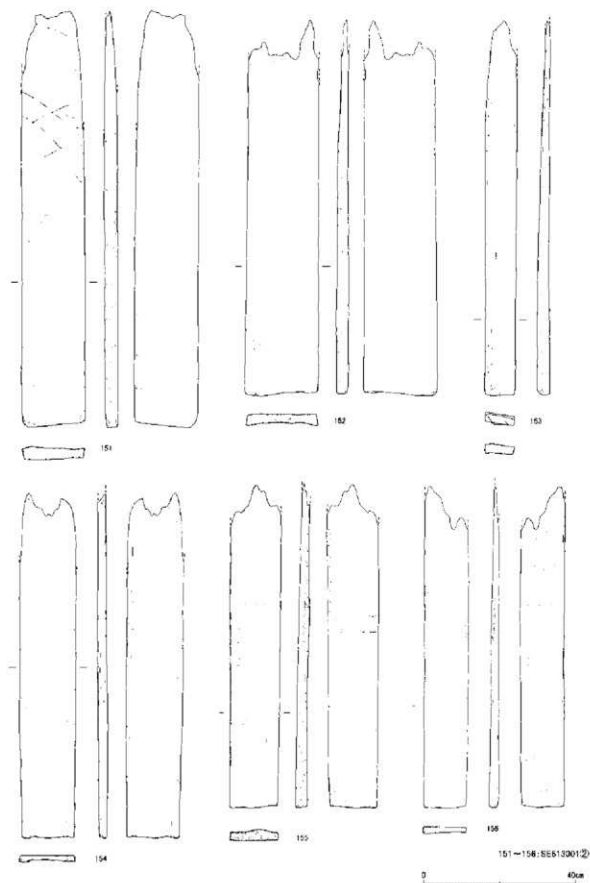


136~144: SE612017①

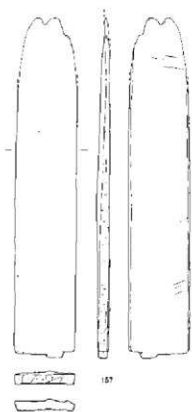
第132图 第6次調査12区井戸枠材等実測図⑦ (1:8, 143・144 = 1:10)



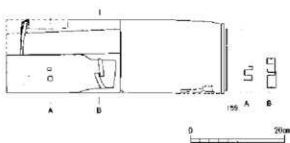
第133图 第6次調査13区井戸枠材等実測図① (1:10)



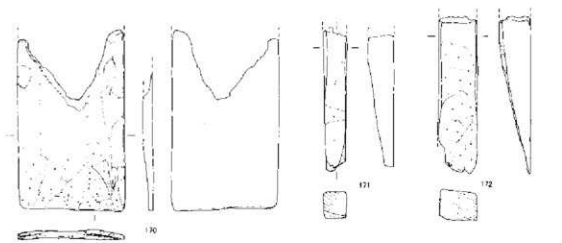
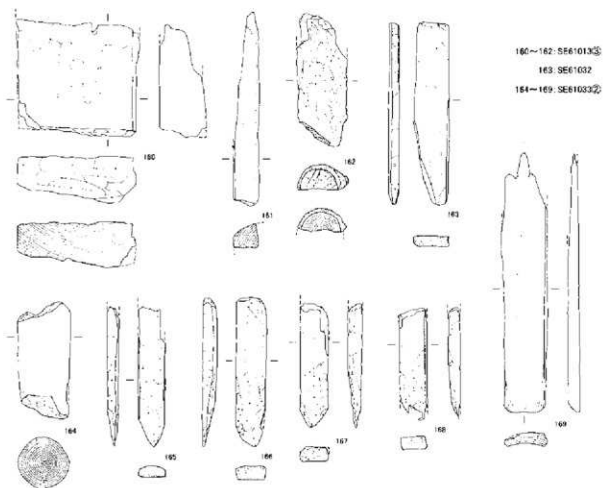
第134図 第6次調査13区井戸枠材等実測図② (1:10)



157~158:SE613001(2)



第135図 第6次調査13区井戸杵材等実測図③ (1:10, 159=1:8)



170: SE62002⑤
 171・172: SE62012②
 173: SE612003④



0 20cm

第136圖 第6次調査出土木製品実測図① (1:4)

明瞭なチョウナ痕が認められる。細部にはノミの使用も認められ、113・119には下端にホゾ穴が設けられている。116の中央部にも不明瞭ではあるが切欠きが認められるが、これらは井戸の枠組みとしての機能とは関連しない。また、113は下端部を鋭利に加工している。縦板を井戸底に差し込むための加工とも考えられなくもないが、横棧の125も先端を尖らせており、ホゾ穴を含めこれらは他の部材からの転用を示すものと考えられる。113は一部が炭化しており、焼失家屋の残材を転用したのかもしれない。

120～124・127～130・133は横板井戸枠として機能していたものである。材質は全てスギ、木取は板目、柾目、追柾目が混在する。腐食の激しいものもあるが、縦板と同様に厚さ5cm前後を測る重厚な材である。表面はチョウナにより整形されている。ノコギリの使用も推測され、側面には断定できないが線状痕が認められるものも多い。切欠きを設けるものもあるが、横棧を受けるためのものである。た

だし、130には、井戸枠の組上げに無関係なホゾ穴が側面に2ヶ所ある。したがって、これらの横板も他部材からの転用と考えられる。

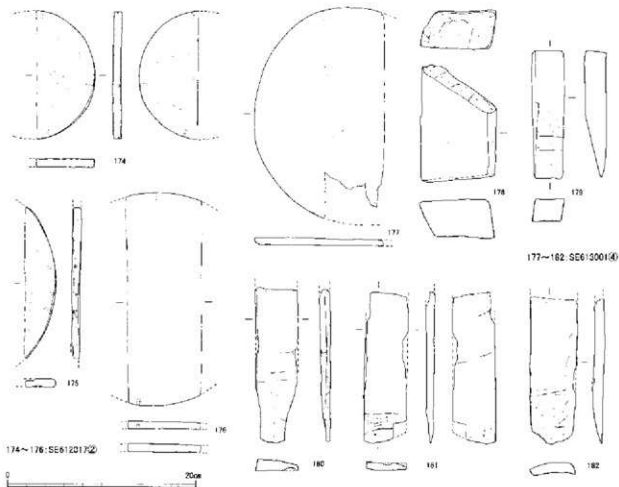
125・126・131・132は井戸枠の横棧、134・135も横棧と推測される。材質はコウヤマキとスギ、木取は板目と柾目がそれぞれ混在する。劣化の激しいものも多いが、整形手法は縦板や横板と大きな相違はない。既述したように井戸の組上げに無関係な加工もあることから、他部材からの転用であろう。

173はスギの角材である。井戸枠の周辺から出土しているが、20cm程度の長さしかなく井戸の枠板とは考えられない。

183～192は掘形出土の用途不明品で、加工屑としておく。全てスギの割材と思われ、表面や端部をノミ等で整形した痕跡も認められる。

これらの時期は、共存する土器から平安時代中期～後期となる。

SE612017 (第132・137図) 136～141・143・



第137図 第6次調査出土木製品実測図② (1:4)

141は井戸枠の縦板、142は横板として機能していたものである。劣化が激しいものも多く、詳細が不明な部分も多い。材質は141がヒノキ、他はスギである。木取は136が桎目、140・142が追桎目、他は板目である。143・144には井戸の組上げに無関係なホゾ穴が設けられており、他部材からの転用と考えられる。

174～176は曲物の底板である。材質はヒノキ、木取は板目でヤリガンナで整形する。側板とは木釘で固定されていたようで、2～3ヶ所に木釘穴が認められる。176は表面に黒色の塗膜が施されている。これらの時期は、共存する土器から平安時代前期となる。

SE613001（第133～135・137図）145～158は井戸枠として機能していた結物の側板である。材質は全てコウヤマキ、木取は板目である。割材をノコギリ、ノミ、台カンナで成形・整形を行う。一部

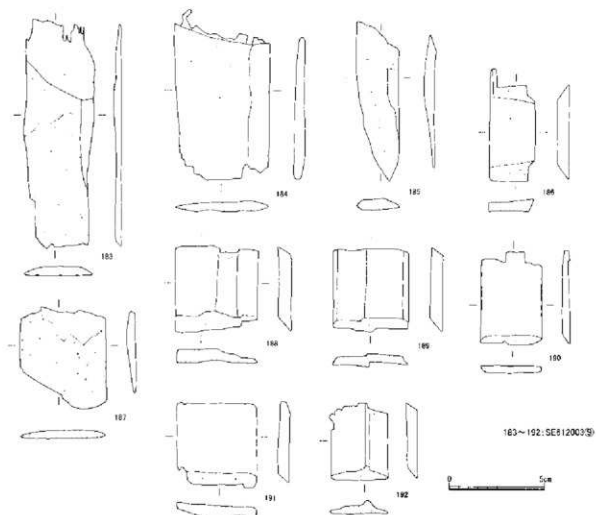
のものにはチョウナ痕も認められる。

159は井戸の集水桎として設置されていた曲物である。材質はヒノキ、木取は追桎目である。表面はヤリガンナで整形し、ケビキは縦方向である。3ヶ所で綴皮により固定される。底板は欠損しているが、木釘穴が3ヶ所で確認でき、本来は木釘で接合されていたものである。

177も曲物の底板と考えられるが、明瞭な加工痕はなく、側板を固定するための木釘穴もない。材質はスギで木取は桎目である。178はヒノキの角材で片方を尖らせるが、用途は不明である。

179～182は楔で材質は全てコウヤマキである。179は角材、他は板材を元に成形している。板材の木取は全て板目である。

これらの時期は、共存する土器等から鎌倉時代となる。（森川）



第138図 第6次調査出土加工解実測図（1：2）

第5表 木製品一覧表

【凡例】

※掲載番号は木製品・戸戸枠等図版中の各製品・材の番号と対応する。
 ※実用番号は実測図作成時に各製品・材の実測図に付与した整理番号である。
 ※法面における「長/径」は各製品・材の最大長、「厚」は最大厚を示した。
 ※同定番号は、相模岡定を実施した際の試料番号と同一であり、縦一列で示す結果を含めて対応している。

掲載番号	実測番号	用途	調査区	地区	造機部位	取上	法量 (GN)	加工後・観察所見	木取	樹種	同定番号	備考
							長/径 幅/高/厚					
1	124-01	戸戸枠材 (縦板カ)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	54.6 10.0 1.0	表面にヤリガシラ。一面は加工後不明瞭。側面にケズリヤ	板目	スギ	5	縦片。縦板である可能性高い
2	130-02	戸戸枠材 (縦板カ)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	49.2 3.1 0.8	表面はヤリガシラ。側面は加工後不明	板目	スギ	8	縦片。縦板である可能性高い
3	130-01	戸戸枠材 (縦板カ)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	46.7 10.3 1.5	表面はケズリ(不明瞭)および一部ヤリガシラ。側面はケズリ(右カシラヤ)	板目	スギ	4	縦片。縦板である可能性高い
4	132-02	戸戸枠材 (縦板カ)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	30.0 11.8 1.0	表面はケズリヤ(加工後不明瞭)	板目	スギ	1	縦片。縦板である可能性高い
5	132-02	加工材	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	36.3 3.6 1.0	表面はヤリガシラ。側面は打割	板目	スギ	2	縦片。戸戸枠材の一部である可能性あり
6	127-01	加工材	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	36.2 3.6 1.8	表面の加工後不明(ケズリヤ)	板目	スギ	9	縦片。戸戸枠材の一部である可能性あり
7	132-01	加工材	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	46.7 6.5 2.8	表面および側面の加工後不明	板目	スギ	6	縦片。戸戸枠材の一部である可能性あり
8	127-02	加工材	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	42.3 4.7 0.7	表面の加工後不明	板目	スギ	3	縦片。戸戸枠材の一部である可能性あり
9	113-01	加工材	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	44.8 10.3 3.1	表面はヤリガシラ。側面は右カシラ。小口はノミ。	板目	スギ	7	縦片。戸戸枠材の一部である可能性あり
10	115-01	垂物 (縦板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	57.8 24.0 0.7	表面はヤリガシラ。裏面はケズリ(不明瞭)のらぬ方向のケズリ。縦径によって側板を結束	板目	スギ	14	縦片
11	118-01	垂物 (縦板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	68.0 10.3 0.6	表面はヤリガシラ。側面はヤリガシラの一部に斜め方向のケズリ。縦径によって側板を結束	板目	スギ	15	縦片
12	129-01	垂物 (縦板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	12.7 10.0 0.3	表面はヤリガシラ。裏面に縦方向のケズリ。側面の一部にケズリ。縦径によって側板同士を結束	-	スギヤ	-	縦片
13	130-02	垂物 (縦板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	45.5 9.0 0.3	表面はヤリガシラ。裏面はヤリガシラの一部に斜め方向のケズリ。縦径によって側板を結束	-	スギヤ	-	縦片
14	122-01	戸戸枠材 (土留板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	61.0 8.3 3.5	表面中央および裏面中央はチョウナ。側面側板をケズリ。木材の凸部分を集中的に加工。両面に納。納周辺の小口はノミ	板目	スギ	13	
15	119-01	戸戸枠材 (土留板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	57.9 8.1 4.3	表面および裏面の納周辺はチョウナ。表面側板側と裏面はケズリが主体(一部ケズリ)。側面は右カシラ。両面に納(片側が欠損)。納周辺の小口はノミ	板目	スギ	11	
16	126-01	戸戸枠材 (土留板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	81.0 9.8 4.2	表面は両面の納周辺にチョウナ。コピヤ。裏面は薄くケズリ(不明瞭)。納周辺はチョウナ側面は右カシラおよび納周辺のチョウナ。納周辺の小口はノミ	板目	スギ	12	
17	123-01	戸戸枠材 (土留板)	1-1	〓-K23- 24,123- 25	SR6102	取上	61.0 8.9 5.0	表面および裏面はチョウナおよびケズリ。側面は土としてチョウナ。一部右カシラ。両面に納。納周辺の小口はノミ	板目	スギ	10	
18	128-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	取上	19.9 15.8 5.0	表面はチョウナ。小口はノミ	板目	スギ	24	縦片か
19	122-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	取上	24.2 19.3 5.0	表面はチョウナ。側面はチョウナヤ	板目	スギ	23	縦片か
20	111-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	取上	62.4 24.2 5.3	表面および裏面はチョウナ。側面はチョウナ。小口はノミ	板目	スギ	17	北面
21	116-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	取上	65.2 17.7 5.7	表面および裏面はチョウナ。側面はチョウナ。小口はノミ	板目	スギ	16	北面
22	112-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	取上	67.2 30.0 5.7	両表面と側面はチョウナ。小口はノミ	板目	スギ	18	北面
23	109-01	戸戸枠材 (縦板)	1-1	〓-K24	SR6103	北面 縦板	96.7 21.4 5.2	表面および裏面はチョウナ。部分的に横欠損あり(ノコギリ)。端はノコギリ。側面はノコギリのらチョウナまたはケズリ。小口はノミ。片側は欠損。もう一方は完成	板目	スギ	19	

掲載 番号	実測 番号	器種 用途	調査 区	地区	遺構 層位	取上	法量 (CM)			加工痕・観察所見	木取	樹種	測定 番号	備考
							長/	径/	高/厚					
48	013-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№16	190.0	10.1	3.4	表面はチャウナ。裏面はケズリ。側面は ノコギリのちり金シナ。本釘穴4箇所 (→側面2箇所)。小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	36	釘穴あり
49	074-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№22	182.6	10.0	0.9	表面は薄くケズリ(ヤリガンナ)。工具 に伴う腐状痕。裏面は打割り	板目	スギ	101	へり板か
50	074-02	井戸枠材 (板)	2	→K20, L19- L20	SF62002	№22	186.7	3.3	0.9	表面はヤリガンナ。工具に伴う腐状痕。 裏面は打割り。側面はケズリ(不明)	板目	スギ	102	へり板か
51	071-02	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№23	193.5	10.0	1.4	表面は打割りの薄くケズリ。裏面は打割 りもケズリ。側面はケズリ。小口はケズ リ	板目	コウヤマキ	91	へり板か
52	062-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№25	211.8	11.4	3.0	表面は薄くケズリ(不明)。腐状痕。 裏面はノコギリとケズリ。側面はノコギ リ30も存在シナ。小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	88	
53	028-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№24	205.9	10.1	2.4	表面はチャウナ。裏面は古物塗面にチャ ウナ。全体的に薄くケズリ。工具に伴う 腐状痕あり。側面はノコギリのちり金シ ナ。本釘穴4箇所(→側面2箇所)あり。小 口はノコギリ	板目	コウヤマキ	61	釘穴あり
54	027-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№26	208.0	11.1	1.0	表面はチャウナおよびケズリ。加工に伴 う腐状痕。裏面はチャウナおよび薄くケ ズリ。加工に伴う腐状痕。墨線あり。側 面はノコギリのちり金シナ。本釘穴4箇 所(→側面2箇所)あり。小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	63	釘穴あり。墨線あり
55	028-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№28	200.6	10.5	3.2	表面はチャウナ。腐状痕あり。裏面は打 割り後薄くケズリ。工具に伴う腐状 痕。側面はノコギリのちり金シナ。本 釘穴4箇所(→側面2箇所)あり。小口はノ コギリ	板目	コウヤマキ	66	釘穴あり
56	019-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№30	202.1	9.9	1.0	表面はチャウナ。部分的に薄くケズリ。 腐状痕と墨線あり。裏面はチャウナ。部 分的に薄くケズリ。腐状痕あり。側面は ノコギリのちり金シナ。本釘穴4箇所(→ 側面2箇所)あり。軌穴2箇所。軌穴はノ コギリ	板目	コウヤマキ	69	釘穴あり。墨線あり
57	039-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№29	185.5	8.5	1.0	表面はオオのちり金(ヤリガンナ)。 裏面は打割り。小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	38	へり板か
58	056-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№31	187.5	12.2	1.4	表面はヤリガンナ。全体的に薄くケズ リ。軌跡は打割り。一部ケズリあり。側面 はケズリ。小口はノコギリ	板目	スギ	85	へり板か
59	044-02	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№31-2 溝	160.0	10.5	1.1	表面は打割りの薄くケズリ。裏面は打割 りも部分的にケズリ。側面はケズリ。小 口はケズリ	板目	コウヤマキ	80	へり板か
60	012-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№22	208.2	9.6	3.2	表面はチャウナ。裏面は薄くケズリおよ び加工に伴う腐状痕。側面はノコギリの ちり金シナ。切込み1箇所。本釘穴4箇 所(→側面2箇所)あり。小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	55	釘穴あり
61	014-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№23	196.8	10.5	1.0	表面はチャウナ。一部にヤリガンナ。 裏面はチャウナおよびケズリ。加工に伴 う腐状痕。側面はノコギリのちり金シ ナ。本釘穴4箇所(→側面2箇所)あり。小 口はノコギリ	板目	コウヤマキ	57	釘穴あり
62	022-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№34	201.7	8.6	3.9	表面はケズリ。腐状痕(取り残)。裏面 は加工に伴う腐状痕。薄くケズリ。側面 あり。側面はノコギリのちり金シナ。本 釘穴4箇所(→側面2箇所)あり。小口はノ コギリ	板目	コウヤマキ	70	釘穴あり。墨線あり
63	033-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№30	199.5	9.9	3.1	表面はチャウナ。加工に伴う腐状痕。 裏面は薄くケズリ。加工に伴う腐状 痕。側面はノコギリのちり金シナ。本 釘穴4箇所(→側面2箇所)あり。小口はノ コギリ	板目	コウヤマキ	71	釘穴あり
64	014-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№36	171.9	9.0	1.3	表面は打割りの薄くケズリ。加工に伴 う腐状痕。側面は1箇所穿孔あり。裏面は打割 りも部分的にケズリ。側面はケズリ。小 口はノコギリ	板目	スギ	79	へり板か
65	067-03	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№37	174.7	9.4	1.1	表面は打割りのちり金シナ。加工に伴 う腐状痕。裏面は打割りの薄くケズリ。側 面はノコギリ	板目	コウヤマキ	82	へり板か
66	052-03	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№38	191.6	9.8	1.6	表面は打割りのちり金シナ。裏面は打割 りの薄くケズリ。側面はケズリ。小口はノ コギリ	板目	コウヤマキ	81	へり板か
67	067-01	井戸枠材 (板)	2	→K19- K20, L19- L20	SF62002	№39	168.3	8.8	0.7	表面は打割りのちり金シナ。加工に伴 う腐状痕。裏面は打割りの薄くケズリ。側 面はケズリ。小口は一部加工。打割	板目	コウヤマキ	90	へり板か

掲載 番号	実測 番号	砂積 用途	調査 区	地区	造機 層位	取上	法量 (cm)			加工後・観察所見	本取	樹種	測定 番号	備考
							長/径	幅/高	厚					
68	018-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%40	201.5	10.2	3.6	表面はチャウナお上びケズリ、裏面は薄くケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	50	釘穴あり
69	019-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%41	200.2	10.0	3.4	表面はチャウナお上びケズリ、裏面は薄くケズリ、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	51	釘穴あり
70	011-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%42	208.3	11.0	3.4	表面はチャウナ、加工に伴う腐状痕、裏面は薄くケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	54	釘穴あり
71	023-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%43	174.0	9.4	0.9	表面は打割のちケズリ(不明瞭)、加工に伴う腐状痕、裏面は打割のちケズリ、側面はケズリ、小口はケズリ	板目	コウヤマキ	99	へび板か
72	020-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%44	200.0	0.5	3.3	表面は部分的にチャウナお上びケズリ(不明瞭)、裏面は部分のちケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	52	釘穴あり
73	021-02	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%45	181.5	10.2	0.9	表面は打割のち薄くケズリ(不明瞭)、裏面は打割のち薄くケズリ(不明瞭)、側面はケズリ、小口はケズリ	板目	コウヤマキ	97	へび板か
74	017-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%46	203.6	10.2	4.1	表面は打割のち部分的にケズリ(不明瞭)、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	51	釘穴あり、墨線あり
75	034-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%47	200.1	10.0	3.6	表面は部分的にケズリ、加工に伴う腐状痕、裏面は薄くケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	72	釘穴あり、墨線あり
76	031-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%50	201.3	10.5	4.8	表面はチャウナお上びケズリ、加工時の切り傷、裏面は薄くケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、軌穴(箇所)一箇所(箇所)あり、軌穴および小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	69	釘穴あり、墨線あり
77	022-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%48	145.0	10.5	1.1	表面は部分的にケズリ(不明瞭)、加工に伴う腐状痕、裏面は薄くケズリ(ほぼ未加工)、側面はノコギリのち右カンテ、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	96	へび板か
78	011-03	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%49	184.8	10.1	1.1	表面は打割のち薄くケズリ、側面はノコギリのちケズリ、小口は一筋ノコギリ	板目	コウヤマキ	95	へび板か
79	006-02	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%51	197.1	8.0	1.0	表面は薄くケズリ(打割後)ケズリ、側面は打割、側面はケズリ、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	88	へび板か
80	029-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%52	201.1	8.5	3.9	表面はケズリ、加工に伴う腐状痕(傷の可能性あり)、裏面はチャウナお上び一部ケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	67	釘穴あり
81	024-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%53	204.7	10.5	3.9	表面は薄くケズリ(不明瞭)、裏面は部分的にケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	62	釘穴あり
82	015-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%56	205.4	11.4	3.1	表面はチャウナお上び一部ケズリ、裏面はケズリ、加工に伴う腐状痕、墨線あり、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	58	釘穴あり、墨線あり
83	023-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%57	201.0	10.0	4.0	表面はチャウナ、加工に伴う腐状痕、墨線、裏面は薄くケズリ(不明瞭)、腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	61	釘穴あり、墨線あり
84	025-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%58	198.2	11.0	4.5	表面はチャウナお上び部分的にケズリ、裏面はチャウナお上びケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、軌穴(箇所)一箇所(箇所)あり、軌穴および小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	63	釘穴あり、墨線あり
85	035-01	井戸特材 (腐板)	2	4-139- 420,119- 120	19G2002	%59	202.1	10.6	3.1	表面はチャウナお上びケズリ(不明瞭)、側面はケズリ、加工に伴う腐状痕、側面はノコギリのち右カンテ、木釘穴(箇所)一側面(箇所)あり、小口はノコギリ	板目	コウヤマキ	73	釘穴あり

掲載 番号	実測 番号	巻種 用途	調査 区	地区	遺構 層位	取上	法量 (cm)			加工痕・観察所見	木取	樹種	測定 番号	備考
							長/	径/	高/厚					
86	067-02	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	北直板 -東	186.8	6.2	6.7	表面は打割のちくズリ(ヤリガシラ)。加工に伴う縞状痕。側面に上及び小口は打割。	板目	スギ	91	へり板か
87	071-01	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	北直板 -中	165.5	9.0	1.0	表面は打割のちくズリ(不明瞭)。裏面は打割のちくズリ。側面はノコギリのちくズリ。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	92	へり板か
88	014-03	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	北直板 -西	172.5	9.4	1.8	表面は打割のちくズリ。裏面は打割のちくズリ。側面はノコギリのちくズリ。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	93	へり板か
89	052-01	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	北直板	163.0	10.3	1.0	表面は打割のちくズリ。裏面は打割のちくズリ。側面は加工痕不明。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	92	へり板か
90	057-01	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002		28.7	8.5	0.9	表面に薄いつくズリ。先端はくズリ。	板目	コウヤクギ	116	破片、へり板か、西側板の上
91	073-02	丹戸特材 (板状)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	西直板	180.0	8.4	1.7	表面は打割のちくズリ(不明瞭)。裏面は打割のちくズリ。側面はくズリ。小口はノコギリ。	板目	コウヤクギ	100	へり板か
92	040-02	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	%17	62.8	9.6	2.2	加工痕不明。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納。	板目	コウヤクギ	306	一部欠損。上段の破片
93	038-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	%18	64.5	9.5	2.6	加工痕不明(表面に一部くズリ)。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納。	板目	コウヤクギ	303	一部欠損。上段の破片
94	038-02	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	%19	66.1	10.1	3.1	表面は加工痕不明。裏面は加工に伴う縞状痕。両端に納。	板目	コウヤクギ	304	一部欠損。上段の破片
95	040-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	%20	64.5	9.0	2.0	表面は両端にチョウナ。一部くズリ。裏面はくズリ(不明瞭)。着物の付着あり。両端に納。納穴端が一部欠損。	板目	コウヤクギ	305	一部欠損。上段の破片
96	046-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	横板	59.5	8.5	2.3	表面はチョウナおよび一部くズリ。裏面は加工痕不明。納穴(箇所)あり。	板目	コウヤクギ	110	一部欠損
97	047-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	横板	62.6	9.3	2.7	表面はノコギリのちくズリ。裏面はくズリ(不明瞭)。着色の有機物付着あり。側面は台カンシ。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納(一部欠損)。	板目	コウヤクギ	112	一部欠損
98	043-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	最下段 底	66.4	10.8	3.8	表面はチョウナおよび一部くズリ。裏面はノコギリのちくズリ。側面はチョウナ。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	309	最下段の破片
99	046-02	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	横板	63.8	9.5	2.9	表面はくズリ(不明瞭)。裏面はノコギリのちくズリ。着色の有機物付着あり。側面は台カンシ。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納。	板目	コウヤクギ	111	一部欠損
100	042-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	最下段 東	67.0	11.9	3.9	表面はチョウナおよびくズリ。裏面はノコギリのちくズリ。着色の有機物付着あり。側面はチョウナ。両端に納。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	308	最下段の破片
101	041-01	丹戸特材 (土直板)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	最下段 西	67.0	10.3	3.7	表面はチョウナおよびくズリ。加工に伴う縞状痕。裏面はノコギリのちくズリ。加工に伴う縞状痕。着色の有機物付着あり。側面は台カンシ。木釘穴箇所(一個目箇所)あり。両端に納。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	307	最下段の破片
102	048-03	丹戸特材 (奥木)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	南・西 側板	65.2	3.2	2.1	表面はくズリ。側面はくズリ。縞状痕。小口はノコ。	両材	コウヤクギ	113	
103	048-01	丹戸特材 (奥木)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	内側 東	54.9	5.6	3.6	表面は一部くズリ。側面はくズリ。加工に伴う縞状痕。小口はノコ。	両材	コウヤクギ	112	
104	048-02	丹戸特材 (奥木)	2	→K19- K20, L19- L20	9F02002	内側 東	55.6	5.2	3.5	表面はくズリ。側面はくズリ(チョウナ)。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	114	
105	045-04	丹戸特材 (土直板)	2	→L18- L19, 9F18- 9F19	9F02012	%2 + 3	67.0	11.5	4.6	表面はチョウナおよびくズリ(不明瞭)。側面はくズリ。側面は台カンシ(一部くズリ)。両端に納。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	118	
106	049-01	丹戸特材 (横板)	2	→L18- L19, 9F18- 9F19	9F02013	%1	24.6	11.0	4.0	表面はチョウナ。端状痕。裏面はくズリ。側面は台カンシ。納穴(箇所)あり(一部欠損)。小口はノコ。	板目	コウヤクギ	119	破片
107	054-01	丹戸特材 (板状)	2	→M1- N21	9F02015	%2東 面	98.3	19.2	6.3	表面は加工痕不明。裏面はくズリ(不明瞭)。側面はノコギリのちくズリ。小口は加工痕不明。欠損。	板目	スギ	124	
108	053-01	丹戸特材 (板状)	2	→M1- N21	9F02015	%3西 面	98.8	18.8	5.8	表面・裏面・側面を含めて全体的に加工痕不明。欠損。	板目	スギ	125	
109	058-02	丹戸特材 (板状)	2	→M1- N21	9F02015	%4	105.3	9.0	4.7	表面・裏面・側面を含めて全体的に加工痕不明(くズリ)。使用時に伴う縞状痕あり。小口はノコ。	板目	スギ	122	

調査 番号	実測 番号	群 種 用途	調査 区	地区	造機 層位	取上	質量 (cm)			加工痕・観察所見	本取	樹種	測定 番号	備考
							長さ	幅	厚					
110	106-01	丹戸特材 (楕円)	2	2-21- N21	0062015	%5	96.3	6.8	6.8	表面・裏面・側面を含めて全体的に加工痕不明。使用時に伴う腐敗痕あり。小口はノコギリ跡	楕円	スギ	123	
111	124-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%17	145.5	27.0	4.9	表面・裏面ともにチャウナ。側面はチャウナ。納穴箇所	楕円	スギ	143	
112	120-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%13	130.0	23.0	6.0	表面・裏面ともにチャウナ。裏面に加工に伴う腐敗痕。側面はチャウナおよび一面ケズリ。納穴箇所。納穴はチャウナ	楕円	スギ	140	
113	009-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%10	127.6	21.4	5.1	表面・裏面ともにチャウナ。裏面の一部はケズリ。側面はチャウナ。納穴箇所。納穴はチャウナ。炭化部分あり	楕円	スギ	142	
114	101-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%5	92.8	23.2	5.0	表面・裏面ともにチャウナ。裏面に加工に伴う腐敗痕。側面チャウナ。小口はノコギリ	楕円	スギ	141	
115	104-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%7	61.2	19.3	5.0	表面・裏面ともにチャウナ(不明瞭)。側面はチャウナ	楕円	スギ	144	縦方向
116	070-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%6	118.4	18.4	6.0	表面・裏面ともにチャウナ。側面はチャウナ。欠込み	楕円	スギ	147	
117	003-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200		92.3	28.4	7.0	表面はチャウナ。加工に伴う腐敗痕。裏面はチャウナ。ノコギリ。加工に伴う腐敗痕。側面はノコギリのチャウナ。小口はノコギリ	楕円	スギ	124	
118	107-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200		91.0	28.4	6.3	表面・裏面ともにチャウナ。側面はチャウナ。小口はノコギリ	楕円	スギ	126	
119	006-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	丹戸内		91.0	29.3	6.5	表面・裏面ともに加工痕不明瞭。一部チャウナ。側面はチャウナ。納穴箇所。納穴および小口はノコギリ	楕円	ヒノキ	155	
120	102-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%1	92.6	22.0	5.1	表面・裏面・側面ともに加工痕不明	楕円	スギ	123	
121	077-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%2	124.6	24.6	6.4	表面はチャウナ。裏面・側面ともに加工痕不明	楕円	スギ	127	
122	004-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%3	104.1	21.1	7.0	表面はチャウナ。裏面はチャウナ(不明瞭)。側面はチャウナおよび一面ケズリ	楕円	スギ	126	
123	078-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%1	112.0	19.0	6.0	表面はチャウナおよびケズリ。加工に伴う腐敗痕。裏面はチャウナおよびケズリ。側面はノコギリのチャウナ。欠込み	楕円	スギ	124	
124	002-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%0	118.6	20.5	5.0	表面はチャウナ(やや不明瞭)。加工に伴う腐敗痕。裏面はチャウナ。加工に伴う腐敗痕。側面はチャウナ。小口はノコギリ	楕円	スギ	149	
125	100-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%0	89.8	15.2	9.3	表面はチャウナ。裏面はチャウナ。切込みあり。側面はチャウナおよび切込み。加工に伴う腐敗痕。小口はチャウナ(ノコギリの可能性あり)	楕円	コウヤマキ	151	
126	106-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%13	101.9	14.8	5.0	表面はチャウナおよび一面ケズリ。加工に伴う腐敗痕。工具痕。裏面はノコギリのチャウナおよびケズリ。側面はノコギリのチャウナ。工具痕。小口はノコギリ	楕円	コウヤマキ	145	
127	001-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%10	71.0	19.0	3.5	表面・裏面・側面ともに加工痕不明	楕円	スギ	156	
128	002-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%11	103.7	20.1	4.3	表面はチャウナ。裏面・側面ともに加工痕不明	楕円	スギ	129	
129	006-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%12	97.6	32.0	6.4	表面はケズリ(不明瞭)。裏面はチャウナ。側面・小口はチャウナ	楕円	スギ	135	
130	006-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%14	108.0	20.1	5.7	表面はチャウナおよび一面ケズリ。加工に伴う腐敗痕。裏面はケズリまたはチャウナ。側面はノコギリのチャウナ。納穴箇所。欠込み。小口はノコギリ	楕円	スギ	146	
131	054-02	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	西側棟 棟	63.7	6.5	6.0	表面はケズリ。裏面・側面は加工痕不明	楕円	コウヤマキ	120	破片
132	054-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%10西 棟	26.2	9.8	6.2	全体にわたって加工痕不明	楕円	スギ	133	破片
133	054-03	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	%10西 棟	19.9	2.8	1.1	側面は打割り。全体的に加工痕不明	楕円	スギ	160	破片
134	054-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	丹戸内	62.5	8.0	4.0	片側は換り(ケズリ)。全体的に加工痕不明	楕円	スギ	154	破片
135	007-01	丹戸特材 (楕円)	12-3- 4	0-3-V13 ~14	0061200	丹戸内 側	26.4	9.7	3.0	表面はケズリ。大部分は加工痕不明。裏面は合板に伴う腐敗痕。小口は側	楕円	スギ	132	破片
136	006-01	丹戸特材 (楕円)	12-2	~122	00612017	%8	53.9	11.0	2.0	表面は打割りのチャウナ(不明瞭。ケズリの可能性あり)。裏面は打割。側面は一面ケズリ	楕円	スギ	163	破片
137	006-01	丹戸特材 (楕円)	12-2	~122	00612017	%7	20.3	12.1	2.3	加工痕不明	楕円	スギ	165	破片

掲載 番号	実測 番号	器種 用途	調査 区	地区	遺構 階位	取上	法量 (cm)			加工痕・観察所見	木取	樹種	測定 番号	備考
							長さ	幅/高	厚					
138	009-01	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	6d	23.9	13.2	2.2	裏面は加工痕不明、小口はノミキ	板目	スギ	167	破片
139	003-01	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	6h10	29.4	4.1	1.5	加工痕不明	板目	スギ	169	破片、樹皮残存
140	050-02	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	6c9	49.0	11.3	2.6	表面・裏面ともに加工痕不明、側面はケズリ	透板目	スギ	164	破片
141	009-01	井戸枠材 (板状小)	12-2	-322	39012017	井戸枠 内	34.4	4.8	4.8	表面は加工痕不明、両側面は欠損	板目	ヒノキ	176	破片
142	001-01	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	横板 (南)	53.0	16.8	1.0	表面はケズリ、裏面・側面は加工痕不明	透板目	スギ	175	破片
143	003-01	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	6c3	52.9	28.1	4.0	表面はケツウナ、裏面は一段ケツウナ (ケツウナの可能性あり)、側面はケツウ ナ、小口はノミ	板目	スギ	166	
144	001-01	井戸枠材 (板状)	12-2	-322	39012017	横板	35.4	32.2	6.4	表面はケズリ、裏面・側面・小口は加 工痕不明	板目	スギ	168	
145	006-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	41	106.6	13.4	2.4	表面はケツウナおよび一段ケズリ、裏面 はヤリガシラ、薄くケズリ、側面はノ コギリのち台カンナ、小口はケツウナ	板目	コウヤケキ	169	
146	007-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	42	96.8	17.4	3.1	表面は打割のちケズリ(不明瞭)、裏面は 打割のち薄くケズリ、側面はノコギリの ち台カンナ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	183	
147	001-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	43	87.3	11.0	2.0	表面は打割のちケズリ、加工に伴う縮 れ、裏面は打割およびケズリ、側面は ノコギリのち台カンナおよびケズリ、小 口はノミ	板目	コウヤケキ	181	
148	076-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	44	95.4	13.5	2.0	表面は打割のちケズリ(不明瞭)、裏面 は打割のちケズリ、側面はノコギリのち 台カンナおよびケズリ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	192	
149	006-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	45	94.7	11.3	3.4	表面は打割のちケズリ、加工に伴う縮 れ、裏面は打割のちケズリ、加工に伴 う縮れ、側面はノコギリのち台カンナ およびケズリ	板目	コウヤケキ	190	
150	079-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	47	96.7	10.7	2.0	表面は打割のちケズリ、加工に伴う縮 れ、裏面は打割のちケズリ、加工に 伴う縮れ、側面はノコギリのち台カ ンナ	板目	コウヤケキ	193	
151	009-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	46	99.4	17.3	3.7	表面はケズリ、縦割あり、裏面はノコ ギリのちケズリ、側面はノコギリのちケ ズリ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	191	
152	003-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	48	99.5	19.5	3.2	表面・裏面ともにケズリ(不明瞭)、側 面はノコギリのち台カンナおよび一段 ケズリ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	186	
153	001-02	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	49	98.7	8.8	2.8	表面は打割のちケズリ(不明瞭)、裏面は 打割のちケズリ、側面はノコギリのち 台カンナ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	182	
154	001-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	50	91.3	14.8	2.8	表面は打割のちケズリ、加工に伴う縮 れ、裏面は打割のちケズリ、側面はノ コギリのちケズリ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	180	
155	009-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	51	85.3	13.4	3.1	表面は打割のちケズリ、加工に伴う縮 れ、裏面は打割のち薄くケズリ、加工 に伴う縮れ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	185	
156	002-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	52	85.0	11.9	2.7	表面は打割のちケズリ(不明瞭)、裏面は 打割のちケズリ、側面はノコギリのち 台カンナ、小口はノミ	板目	コウヤケキ	188	
157	009-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	53	96.1	16.2	3.3	表面は打割のち薄くケズリ(不明瞭)、裏 面は打割のちケズリまたはケツウナ、 側面はノコギリのち台カンナ、小口は ノミ	板目	コウヤケキ	184	
158	007-01	井戸枠材 (板物部材)	13-2	-412	39013001	54	89.5	14.3	3.0	表面は打割のちケズリ、裏面は打割のち 薄くケズリ(不明瞭)、側面はノコギリ のちケズリ(台カンナ)、小口はノミ	板目	コウヤケキ	187	
159	121-01	垂木 (板状)	13-2	-412	39013001	55	66.5	15.5	4.6	表面はヤリガシラ、裏面は縦方向のケ ズリ、縦皮により縦割(虫食い箇所)、木 口は縦割、裏割とは反対で縁立	透板目	ヒノキ	194	
160	129-02	板状瓦	1-1	-424	3901013		12.4	12.5	6.0	表面はケズリ(不明瞭)、小口はノミ	板目	スギ	21	破片、井戸枠材の一部か
161	126-03	棒状瓦	1-1	-424	3901013	北東隅	20.5	2.8	2.8	表面は加工痕不明(ケズリ)、側面は打 割	丸かん	スギ	20	破片
162	126-02	瓦木材	1-1	-424	3901013		14.0	4.3	2.8	表面に樹皮残存、打割、小口はノミ	半割	ツバラジ	22	破片、樹皮残存、芯持ち材
163	007-02	横	1-2	-813	3901022		19.3	3.7	1.1	両面全縁はケズリ、先加以外と薄くも 薄くケズリ、側面はノコギリのちケズ リ	板目	コウヤケキ	25	
164	006-01	瓦木材	1-2	-812- 812	3901033 下層		13.3	5.4	5.4	表面全縁は薄くケズリ、両端はキノビ による切欠あり	芯持ち 木	ツバケ	30	破片、芯持ち材

機軸 番号	実測 番号	用途	調査 区	地区	遺構 部位	取上	法量 (cm)			加工痕・観察所見	木取	樹種	測定 番号	備考
							長	幅	厚					
165	065-04	礎	1-2	1-A12- R12	5061023最 下層		14.9	2.9	1.2	表面先端はケズリ、側面はケズリ	割り材	ヒノキ	36	破片
166	065-01	礎	1-2	1-A12- R12	5061023最 下層		15.7	3.2	1.5	表面両先端はケズリ、側面はケズリ	割り材	ヒノキ	33	
167	065-02	礎	1-2	1-A12- R12	5061023最 下層		13.1	2.9	1.5	表面先端はケズリ、側面はノコギリヤ	割り材	ヒノキ	34	破片
168	065-03	礎	1-2	1-A12- R12	5061023最 下層		11.9	2.9	1.3	片面は先端および全面にケズリ、もう片 面は先端のみケズリ	割り材	ヒノキ	35	破片
169	066-02	礎	1-2	1-A12- R12	5061023最 下層		17.4	4.9	1.2	片面先端はケズリ、側面の一部はケズリ	板目	スギ	37	破片
170	062-02	板状具	2	1-A18- R20,119- R19	5062002	側板	19.2	11.2	1.1	表面は打割のちケズリ、裏面は加工痕不 明瞭、側面はケズリ	板目	スギ	45	破片、片付材の縦板の 一部、転用か
171	058-02	礎	2	1-A18- R19-R19	5062013下 層		15.2	2.5	2.8	片面先端はケズリ、裏面は打割、左側面 はノコギリヤ、右側面は打割	角材	コウヤマキ	121	破片
172	058-01	礎	2	1-A18- R19-R19	5062013上 層		16.6	4.2	3.4	片面先端ケズリ、裏面は打割	角材	コウヤマキ	120	破片
173	065-02	板状具	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003	片付材 周辺	19.3	6.2	3.8	表面は一部ケズリ、裏面は打、側面はケ ズリヤ	角材	スギ	137	
174	061-01	曲物 (底板)	12-2	1-A-113 ~14	50612017		13.6	6.2	9.0	表面・側面はヤリガンナ(加工痕顕著)、 板底は木釘(2箇所埋)で固定	板目	ヒノキ	177	破片、約1/2残
175	061-02	曲物 (底板)	12-2	1-A-113 ~14	50612017		16.0	3.1	0.9	表面はヤリガンナヤ、側面はヤリガン ナ、板底は木釘(2箇所埋)で固定	板目	ヒノキ	178	破片、約1/4残
176	061-03	曲物 (底板)	12-2	1-A-113 ~14	50612017	%2	22.5	7.8	6.8	側面はヤリガンナ、板底は木釘(2箇所埋) で固定、表面に黒色の塗膜あり	板目	ヒノキ	179	破片、約1/2残、塗膜分析 実施
177	062-01	曲物 (底板)	12-2	1-A-113 ~14	50612001	片付材 内	22.2	13.8	0.8	表面に黒く加工痕、表面・側面ともに加 工痕顕著でない、木釘穴なし	板目	スギ	190	破片、約1/2残
178	062-02	板状具	12-2	1-A-113 ~14	50612001		12.4	8.0	4.1	片面先端にケズリ	角材	ヒノキ	196	
179	064-02	礎	12-2	1-A-113 ~14	50612001		12.7	2.4	2.4	片面先端ケズリ、小口は削ヤ	角材	コウヤマキ	200	
180	062-03	礎	12-2	1-A-113 ~14	50612001		16.4	4.5	1.2	片面先端ケズリ、側面ケズリ	板目	コウヤマキ	198	破片
181	064-01	礎	12-2	1-A-113 ~14	50612001		16.0	4.5	0.9	表面先端ケズリ	板目	コウヤマキ	199	破片
182	062-04	礎	12-2	1-A-113 ~14	50612001	片付材 内	15.6	4.9	1.1	片面先端ケズリ	板目	コウヤマキ	197	破片
183	060-01	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		12.0	3.7	0.5	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
184	060-02	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		8.2	5.0	0.6	打割およびノミまたはケズリ	板目	スギ	161	手厚削か、下層出土
185	060-08	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		8.4	2.4	0.6	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
186	060-09	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		6.0	2.4	0.7	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
187	060-03	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		5.4	4.5	0.5	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
188	060-06	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		4.6	4.4	0.8	打割およびノミまたはケズリ	板目	スギ	162	手厚削か、下層出土
189	060-05	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		4.5	4.0	0.7	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
190	060-04	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		4.9	2.7	0.4	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
191	060-07	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		4.3	4.2	0.7	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず
192	060-10	加工層	12-3- 4	1-A-113 ~14	50612003 (第13層か)		4.1	3.0	0.7	打割およびノミまたはケズリ	-	スギヤ	-	手厚削か、下層出土、構 造固定実施せず

Ⅶ. 自然科学分析

1. 分析試料・目的・報告

(1) 資料の採取と保管

朝見遺跡第6次調査においては、基本層序となる堆積層および遺構から出土・採取した土壌、井戸枠材・木製品・漆製品、炭化材、鉄滓、動物骨、人歯、種実等を対象として、放射性炭素年代測定、火山灰分析、粒度分析、珪藻化石分析、植物珪酸体分析、花粉分析、リン・カルシウム分析、動物骨・人歯同定、樹種同定、種実同定、塗膜構造にかかる分析、鉄成分分析等を実施した。

実施した自然科学分析および試料の内容については、第6表に示したとおりである。

S X 62024木棺材・人歯・副葬品 S X 62024の木棺材や棺内に副葬されていた漆製品と被葬者の人歯については、出土時から非常に脆弱な状態であった。

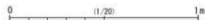
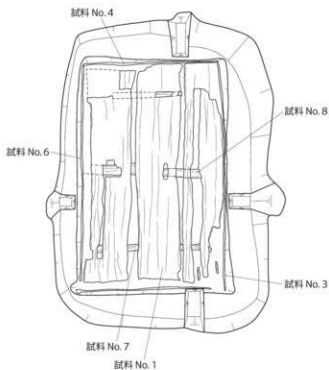
副葬品の漆製品については、木胎部分が残っており、表面の漆塗膜のみが残存している状況が観察されたため、調査時は水分を含ませたキムタオル(日本製紙クレシア株式会社製)を表面にかけて漆塗膜を保護した。取り上げ後から分析実施までは、漆製品の表面に霧吹きを使って水をかけ、湿潤な状態にした上で、カビの発生を防ぐために市販の消毒用エタノールを吹きかけた後、晒し布を表面にかけて、塗膜の遊離や剥離が生じないようにした状態で保管した。分析実施段階には、実施業者が担当者立ち会いのもと、分析に供する漆塗膜を採取した。

木棺材については、調査時に木棺材を構成する蓋板、東西南北にある四辺の側板、底板、底板下の3箇所に設置されていた横棧を部分ごとに取り上げ、洗浄を行った後、水とともにビニール袋に入れて保

蓋板検出状況



木棺内完掘状況



第6表 分析実施一覧表

委託業務実施年度	目的	分析内容	本書掲載	数量	分析対象 遺構名・層位名	分析試料	委託業務受託者
平成28年度	木棺構築材の樹種 の特定と副葬品の 材質や構造の特定	樹種特定(生材)	第Ⅴ章第2節 (2)	8点	S362024(2)区	木棺草の木棺構築材(直板・底板・北小口板・南小口板・東側板・西側板・棺下張板)	株式会社古田生物研究所 (※保存処理と同時に実施)
		炭素分析(炭素値 による断面観察)		6点			
		材質特定(T-TR分析)	第Ⅴ章第2節 (1)	6点	S362024棺内(2)区	棺内から副葬品として 出土した漆製品6点	
		顔料元素分析 (EDX分析)		6点			
平成29年度	出土鉄滓の鉄成分 の特定と鉄生産 についての推定	鉄成分分析	第Ⅴ章第3節	10点	S269003(9-1)区、S269020(9-4)区、S2611021(11-3)区上層、S2612025(12-5)区、P112(3-5)区・(4)区、P1118(12-5)区・(11)区、包含層(11-3)区上層・(12-2)区・(12-5)区	鉄滓	日鉄住金テクノロジーズ (株)八幡事業所・TACセンター
平成29年度	井戸枠および出土 木製品の樹種の特定	樹種特定(生材)	第Ⅴ章第4節 (1)	200点	S261012・S261013(1-1)区、S261032・S261033(1-2)区、S262002・S262013・S262015(2)区、S2612003(12-3)区、S2612017(12-2)区、S2612001(13-2)区	井戸枠材、曲物、椀、椀状片、棒状片、丸太材、加工屑、その他加工材	株式会社パレオ・ラボ
		炭素分析(炭素値 による断面観察)	第Ⅴ章第4節 (2)	1点	S2612017(12-2)区	曲物底版	
	木製品に付着する 樹種の構造と材質 の特定	材質特定(T-TR分析)	第Ⅴ章第4節 (3)	1点			
平成30年度	動物骨の種類や部位 の特定	動物骨特定	第Ⅴ章第5節	一式	S265004-P1(5-9)・(13-5)区、S265004・S265007(5-1)区、S2611059(11-2)区下層	動物骨(魚骨を含む)	株式会社パレオ・ラボ
	被葬者の人骨の部位 や年齢の特定	人骨特定	第Ⅴ章第2節 (3)	一式	S362024棺内(2)区	人骨	
平成30年度	出土した炭化材・ 種実の種の特定や 遺構の性格の推定	樹種特定(炭化材)	第Ⅴ章第6節 (4)	18点	S2611053・S2611054・S2611055・S2611056・S2611057・S2611058・S2611059・S2611060・S2611063・S2611068・S2611069・S2611070(11-2)区下層、第61層(11-2)区下層)	炭化材	株式会社パレオ・ラボ
		種実特定	第Ⅴ章第6節 (5)	一式	S261012・S261013(1-1)区、S261033(1-2)区、S262015(2)区、S2611053・S2611055・S2611056・S2611057・S2611058・S2611059・S2611060・S2611068・S2611069(11-2)区下層、P114(11-2)区下層～Q19)、S2611061(11-3)区上層)、遺物包含層(11-2)区下層)	種実(炭化種実を含む)	
	火山灰分析	第Ⅴ章第6節 (3)	5点	第89～91～94層(11-2)区下層土層)	土層		
	粒度分析		7点	第87～89・91～94層(11-2)区下層土層)	土層		
	遺跡の形成過程や 土壌の堆積状況を含 む古環境の復原	珪素分析		22点	第69～71・74層(1-1)区土層)、第42・45・49・50・87～89・91～94層(11-2)区下層土層)	土層	
		植物珪酸体分析	第Ⅴ章第6節 (6)	22点	第69～71・74層(1-1)区土層)、第87～89・91～94層(11-2)区下層土層)	土層	
		花粉分析		18点	第69～71・74層(1-1)区土層)、第87～89・91～94層(11-2)区下層土層)	土層	
	リン・カルシウム分析	第Ⅴ章第6節 (7)	4点	S3611051・S3611052・周辺基盤層(11-2)区下層)	土層(遺構埋土を含む)		
	基本層序の堆積年 代および縄文時代 遺構の埋没過程を 考察するための年代 測定	放射性炭素年代測定	第Ⅴ章第7節	18点	S2611053・S2611054・S2611055・S2611056・S2611057・S2611058・S2611059(第2・4層)、S2611060・S2611063・S2611066・S2611068・S2611069・S2611070(11-2)区下層)、P114(11-2)区下層～Q19)、第49・91層(11-2)区下層土層)、第61層(11-2)区下層土層)	炭化種実、炭化材、土層	

※動物骨特定・人骨特定・種実特定は、複数個体をまとめて一式として分析委託を行っているため、1試料に複数個体が含まれている。

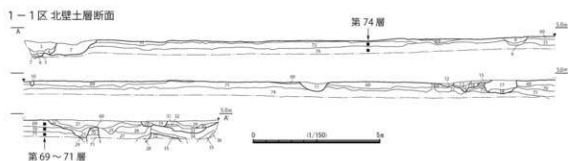
管した。

人歯については、出土範囲を記録した後、歯として認識できるものを取り上げ、出土範囲の周辺の土にも歯の破片等の一部が土中に含まれている可能性があったことから、周辺の土も採取した。取り上げ後、市販の絵画用筆などを使って水で洗浄をおこない、直射日光が当たらない場所で乾燥させた後、ラベルとともにビニール袋またはタッパー（プラスチック製）に入れて保管した。

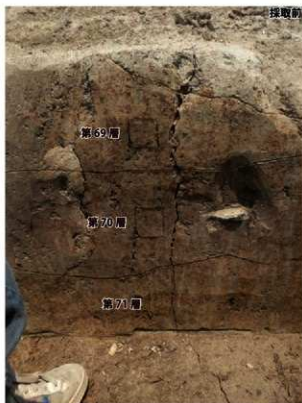
土壌・炭化材 土壌については、第140・143・150図にある土層断面図の箇所にて採取した。採取した土壌は、各調査区における基本層序を構成する堆積層と流路の埋土となる堆積層である。土壌の採取

は、移植ゴテまたはガリ（小型の三角ホー）を用いて採取した。採取に際しては、断面を削ったのち、空気に触れていない部分の土壌を採取し、層位が異なる土壌を採取する際は、採取前に必ず道具を水で洗浄した。採取した土壌は、他の土壌等が付着していないきれいなビニール袋または35mmフィルムケース（プラスチック製）にラベルとともに入れ、直射日光が当たらない場所で保管した。

炭化材については、微細なものが多く、分析に供した試料の中には、炭化粒に近い状態のものもある。炭化材は、縄文時代の遺構および基本層序を構成する堆積層中にあるものを中心に採取した。非常に脆弱かつ微細なものが多かったため、炭化材に付着す



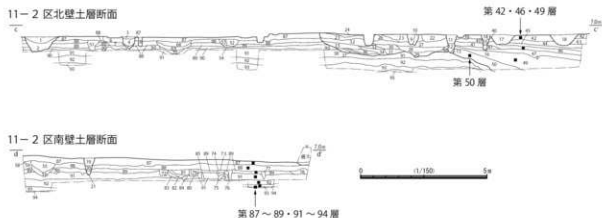
第140図 1-1区土壌分析試料採取箇所図



第141図 1-1区土壌分析試料採取箇所①



第142図 1-1区土壌分析試料採取箇所②



第143圖 11-2 区土壤分析試料採取箇所図



第144圖 11-2 区下層土壤分析試料採取箇所①



第145圖 11-2 区下層土壤分析試料採取箇所②



第146圖 11-2 区下層土壤分析試料採取箇所③



第147圖 11-2 区下層土壤分析試料採取箇所④

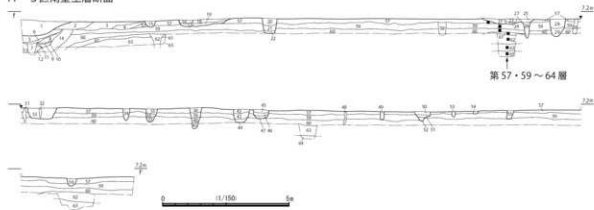


第148圖 11-2区下層土壤分析試料採取箇所⑤



第149圖 11-2区下層土壤分析試料採取箇所⑥

11-3区南壁土層断面



第150圖 11-3区土壤分析試料採取箇所圖



第151圖 11-3区下層土壤分析試料採取箇所①



第152圖 11-3区下層土壤分析試料採取箇所②

る土壌とともに採取している。なお採取では、移植ゴテおよび竹ベラを用いて作業を行い、土壌の採取時と同様にきれいなビニール袋にラベルとともに入れて、直射日光が当たらない場所で保管した。

鉄滓 鉄滓については、分析に供した全試料は調査時に他の遺物とともに一緒にして取り上げられたもので、洗浄作業後に鉄滓と判明したものである。そのため、個別での取り上げはできていない。洗浄後は、風通しの良い直射日光が当たらない場所で乾燥を行い、乾燥後はビニール袋に入れて保管した。

木製品 井戸杓・木製品については、調査時に取り上げられた後、洗浄を行った。小型の木製品については、水とともにビニール袋に入れて保管した。50cm以上を超える大型品については、大型のコンテナや当センターに設置されている水の入った水槽に入れて保管した。木製品と一緒に入っている水については、適時水の入替えを行っている。分析実施時は、実施業者が当センターで担当者立ち会いのもと試料を採取した。

また、木製品1点で実施した塗膜分析にかかる試料採取も樹種同定用試料の採取と同様の状況で行った。

動物骨 動物骨については、各遺構から取り上げられた後、洗浄を行った。洗浄では、脆弱なものについては、絵画用筆を適時用いて行っている。洗浄後、出土単位でビニール袋に入れて保管した。

種実 種実については、全て個別に取り上げを行ったものではなく、他の遺物と同様に洗浄を行った中で見つかったものである。とりわけ、縄文時代の土坑から出土した炭化種実片については、持ち帰った埋土を洗浄する中で見つかったものである。土壌の洗浄作業は当センターで行った。洗浄では、1.5～20mm目の篩を用いて水洗し、選別を行い、必要に応じて0.7mm目の篩を併用して炭化種実片を抽出した。なお洗浄における水量等は不明である。洗浄後の種実は、水を入れた小瓶（ガラス製）の中に入れて保管した。

(2) 分析の目的

分析の目的は、以下および第6表に示したとおりである。

放射性炭素年代測定 縄文時代の遺構や流路の埋土および基本層序から採取した試料の放射性炭素年代測定については、大きく2つの目的がある。一つは、遺構の形成および埋没過程の年代を出土遺物と合わせて絞り込むこと、二つ目には基本層序を構成する堆積層中の試料から遺跡の成立と密接に関連する地形の形成年代について、明らかにすることを目的とした。

特に第6次調査の11-2区下層遺構面では、縄文時代の土坑が複数検出された。縄文時代後期前半の土器が遺構埋土中から出土しているが、埋土は3～4層に分かれ、焼土ブロックを多量に含む堆積層もあり、一度に一気に埋没していない可能性が推定されたため、埋土中の炭化した種実および炭化材を用いて、土器の時期と炭化物から得られた年代の両者で埋没過程やその年代を検証する必要があると考えた。精度の高い年代が得られるよう、埋土中に含まれていた炭化種実を主に年代測定の試料として供し、炭化種実の出土がみられなかった遺構については炭化材を年代測定の試料とした。種実は収穫された後の時期・年代が確実に反映されやすいとされており、炭化材よりも収穫から廃棄に至る時間幅も少ない可能性が高いことから、優先的に年代測定に用いる試料とした。

また、年代測定を実施した試料のうち1点は、土壌を用いている。これは、土壌化が極端に進んだ黒色のシルト層であり、炭化材で測定するよりも確実性が高かったためである。

火山灰分析 火山灰分析は、縄文時代の遺構面に対応する層位の土壌と、それ以前に堆積した層位の土壌を対象に、土壌中に含まれる鉱物組成および屈折率回折を含めた分析を行った。火山灰の有無は、堆積環境および堆積年代を決定する上で、重要な要素となると考えられる。また、火山灰が確認された層位は、今後周辺における堆積層のキー層として認識することが可能となる。

珪藻化石分析・粒度分析 珪藻化石分析および粒度分析は、主に地形および遺構が形成されるまでの堆積物状況を把握し、堆積環境を推定することを目的に行った。そのため、分析を実施した試料は、基本層序を構成する堆積層の土壌が大半であり、一部

が流路埋土の土壌である。

試料中に含まれる珪藻の種類と量などにより、土層の乾湿や流水・離水の傾向を捉えることができるため、どのような環境下で遺跡における各時代の遺構が形成されたのか、遺構形成前後の環境が如何なる状態であったかの知見を得ることができると考えられる。

また、合わせて堆積物の粒度について分析を行うことにより、土壌に含まれる堆積物の大きさを把握し、珪藻化石分析と同様に堆積環境を推定する手がかりになると考えた。

植物珪酸体分析 植物珪酸体分析は、遺跡とその周囲における植生と水田等の稲作に関わるデータを得ることを目的に行った。とりわけ朝見遺跡は古代の条里制地割が遺存し、かつ第1・2次調査では条里の施工時期に機能していたと考えられる水路が見つかっており、これらを自然科学分析でも裏付けを行うことが必要であった。また、他の分析と同様に縄文時代前後から古代の遺構の形成に至るまで、どのような植生下が周辺に広がり、遺跡が成立する状況になるのかを明らかにすることも、分析を実施した理由の一つである。

リン・カルシウム分析 リン・カルシウム分析は、11-2区下層遺構面で検出された、縄文時代後期前半の埋設土器2基の土器内埋土と遺構面を形成する堆積層を比較対象試料として実施した。縄文時代の埋設土器の性格については、諸説あるものの墓である可能性も考えられている。哺乳動物が生命維持に必要とされるリン酸とカルシウムは、土壌に含まれる量と比較して多く残る傾向があることから、埋設土器内の埋土と遺構面を形成する堆積層に含まれるリン酸とカルシウムの有無と量を比較することにより、埋設土器が墓か否かを含めた性格を推定する手がかりを得ることができると思われる。

樹種・種実同定 樹種同定については、木棺墓であるS X 62024の木棺材や数多く検出した井戸の井戸枠材と出土木製品、縄文時代の土坑埋土に含まれていた炭化材について実施した。とくに木棺材や井戸枠材については、遺構の種類や時期の違いによる樹種の選択性の有無や周辺環境との対応関係を検討する上で、樹種同定は有効な手段であると考えた。

また、縄文時代の炭化材については、樹種を特定することにより、土坑の性格を推定する手がかりを得るために、樹種同定を行った。

種実同定については、主に縄文時代の土坑埋土から出土したものを対象に実施した。土坑の性格を推定する上で、また貯蔵穴の可能性を考える上で、出土した種実が食用にできる種のものか、または何らかの生業に関わる種のものかを明らかにする必要があった。

塗膜分析 塗膜にかかる分析（塗膜断面観察・FT-IR分析・顔料元素分析）については、S X 62024の副葬品である漆製品の塗膜構造を明らかにし、どのように製作された漆製品なのかを推定することにより、被葬者の性格を考える材料を得ることを目的に行った。

また、木製品1点に付着した塗膜については、漆か否かを含めて、何の塗膜なのか肉眼観察で不明だったため、塗膜の種類を明らかにする目的で実施した。

鉄成分分析 鉄成分分析は、古代の遺構から出土した鉄滓を中心に実施した。鉄滓は、鉄加工時に生じる廃棄物であり、その有無は鍛冶の存在やどのような原料を用いて鉄加工を行っていたのかを推定することができる。分析においては、肉眼観察でメタルが残っている可能性が高いと判断されるものを分析試料として抽出し、より有益なデータが得られるよう試料を厳選した上で実施することとした。

(3) 分析報告の構成について

第2節以降、本節および第6表で示した実施分析について報告する。基本的に委託を実施した分析単位で節を分けて報告するが、第2節については、遺構との関連性から異なる委託の分析を一つにまとめた。

なお、基本的に分析実施業者が記した分析報告をそのまま報告しているため、前章までの用語や時代表記、参考・引用文献、註の様式が不統一になっている状態である。これは編集において誤った改変を行ってしまう危険性を排除し、分析の事実を変えずに報告するためである。しかし、報告書作成の中で分析実施時から遺構名称が変わっている遺構がある

ため、該当箇所においては誤認を防ぐために修正を行っている。また図表の番号などは編集段階で統一を図っていることを断っておく。

なお、分析実施業者と担当者については、第6表および各項末に括弧付けで記した。(渡辺)

2. 木棺墓 (S X 6204) 分析

(1) 木棺構築材の樹種同定

A. 試料

試料は三重県朝見遺跡(第6次)から出土した祭祀具(木棺材)8点である。

B. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

C. 結果

樹種同定結果(針葉樹2種)の表(第7表)と顕微鏡写真(第153~155図)を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

① **スギ科スギ属スギ** (*Cryptomeria japonica* D.Don) (遺物Na7、第155図:写真Na7)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

② **ヒノキ科ヒノキ属** (*Chamaecyparis* sp.) (遺物Na1~6・8、第153~155図:写真Na1~6・8)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が

急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

(株式会社吉田生物研究所: 汐見 真・白崎泰子)

[参考文献]

- ・ 林 昭三『日本産木材顕微鏡写真集』1991年 京都大学木質 科学研究所
- ・ 島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』1988年 雄山閣出版
- ・ 北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編I・II』1979年 保育社
- ・ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第27冊 1985年
- ・ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊 1993年

[使用機材]

- ・ 顕微鏡: Nikon DS-Fi 1

(2) 漆製品塗膜構造分析

A. はじめに

三重県に所在する、朝見遺跡(第6次)から出土した漆製品6点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

B. 調査試料

調査した試料は、第8表に示す中世の桶と皿と鳥帽子合計6点である。

C. 調査方法

第8表の試料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取して、パーキンエルマー社製、FT-IR 分析装置 Spectrum One を用いて、膠着剤

第7表 木棺材の樹種同定結果一覧表

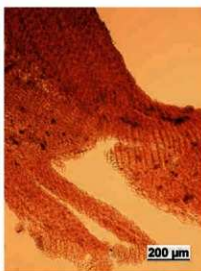
№	品名	樹種
1	漆①	ヒノキ科ヒノキ属
2	サンプル Na.5 蓋板	ヒノキ科ヒノキ属
3	東側板(南)	ヒノキ科ヒノキ属
4	北側小口板	ヒノキ科ヒノキ属
5	南側板	ヒノキ科ヒノキ属
6	西側板	ヒノキ科ヒノキ属
7	南横棧	スギ科スギ属スギ
8	横棧中央	ヒノキ科ヒノキ属



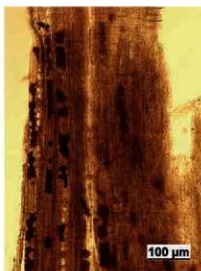
No. 1-a ヒノキ科ヒノキ属 板目



No. 1-b ヒノキ科ヒノキ属 柺目



No. 1-c ヒノキ科ヒノキ属 木口



No. 2-a ヒノキ科ヒノキ属 板目



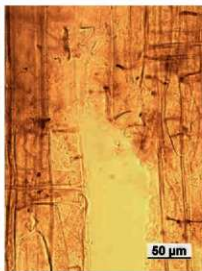
No. 2-b ヒノキ科ヒノキ属 柺目



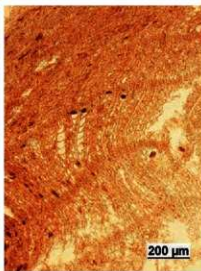
No. 2-c ヒノキ科ヒノキ属 木口



No. 3-a ヒノキ科ヒノキ属 板目

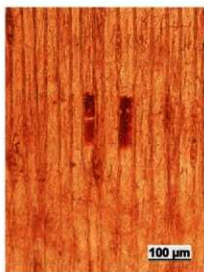


No. 3-b ヒノキ科ヒノキ属 柺目



No. 3-c ヒノキ科ヒノキ属 木口

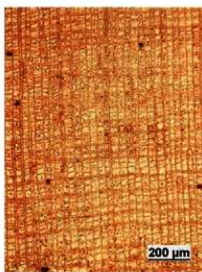
第153図 木棺材の光学顕微鏡写真①



No. 4-a ヒノキ科ヒノキ属 板目



No. 4-b ヒノキ科ヒノキ属 径目



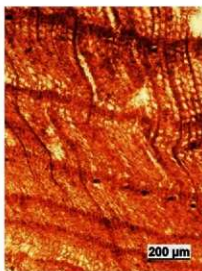
No. 4-c ヒノキ科ヒノキ属 木口



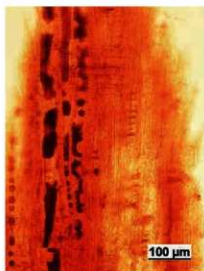
No. 5-a ヒノキ科ヒノキ属 板目



No. 5-b ヒノキ科ヒノキ属 径目



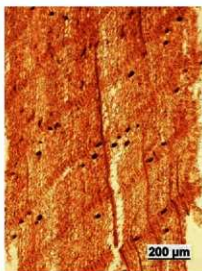
No. 5-c ヒノキ科ヒノキ属 木口



No. 6-a ヒノキ科ヒノキ属 板目



No. 6-b ヒノキ科ヒノキ属 径目



No. 6-c ヒノキ科ヒノキ属 木口

第154図 木棺材の光学顕微鏡写真②

第8表 漆製品調査試料一覧表

No.	保存処理 No.	品名	写真 No.	概要
1	1	漆桶	1	黒地に赤色で植物文が描かれた桶
2	2	漆桶	3	黒地に赤色で文様が描かれた桶
3	2	漆皿	3	黒地に赤色で文様が描かれた皿
4	3	漆皿	6	黒地に赤色でスタンプの亀甲文が施された皿
5	3	漆皿	6	黒地に赤色で文様が描かれた皿
6	4	漆破片	9	烏帽子の漆塗膜

の材質を調査した。

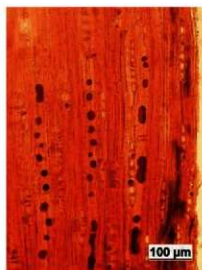
次に、その試料をエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

そして作製した塗膜断面プレパラートの導電性を上げて観察精度を高める為に金 (Au) 蒸着を行い、株式会社日立サイエンスシステムズ製走査型電子顕微鏡 SEMEDX3Type3、堀場製作所製エネルギー分散型 X 線分析装置 EMAXEnergy400 の装置を用いて、塗膜混和物の元素同定を行った。

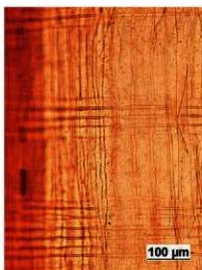
D. 調査結果

① FT-IR分析

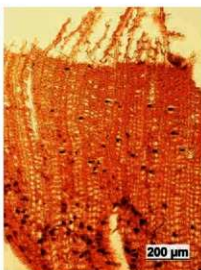
分析データを示し、その結果を記す。



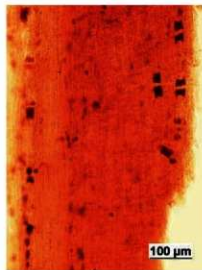
No. 7-a スギ科スギ属スギ板目



No. 7-b スギ科スギ属スギ径目



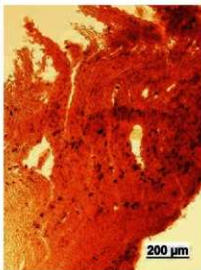
No. 7-c スギ科スギ属スギ木口



No. 8-a ヒノキ科ヒノキ属板目

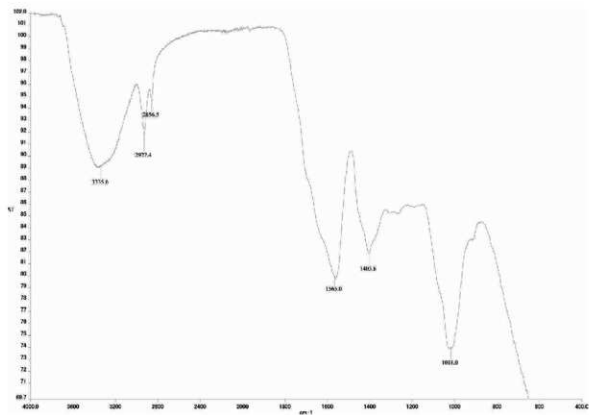


No. 8-b ヒノキ科ヒノキ属径目

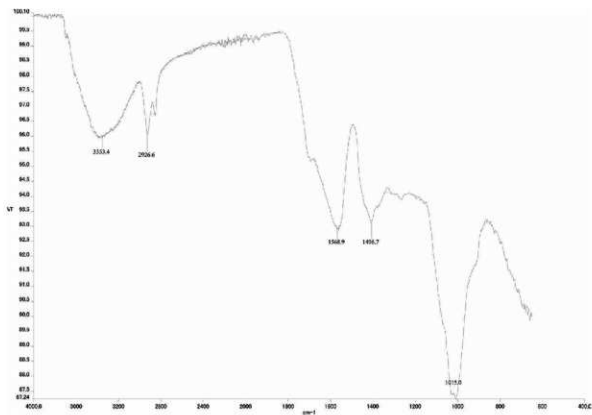


No. 8-c ヒノキ科ヒノキ属木口

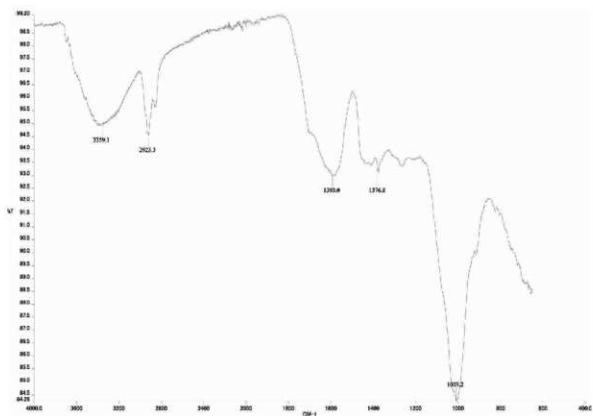
第155図 木棺材の光学顕微鏡写真③



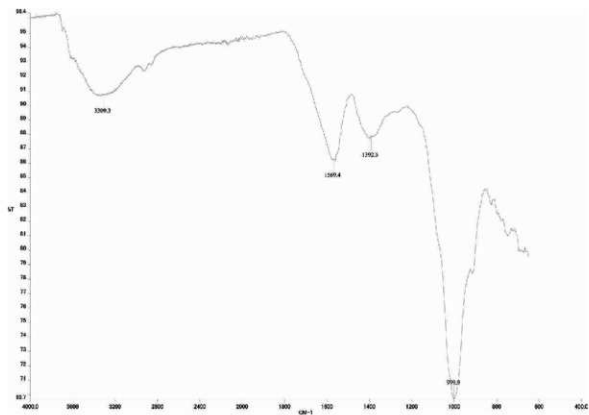
第156図 No. 1のFT-IR分析データ



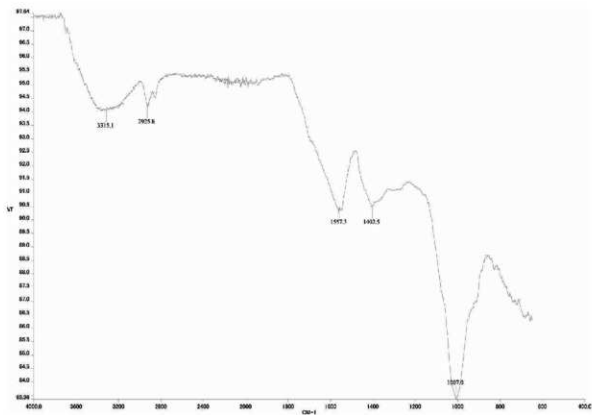
第157図 No. 2のFT-IR分析データ



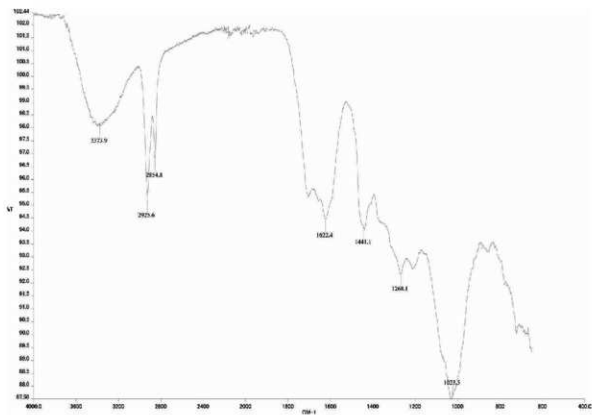
第158図 No. 3のFT-IR分析データ



第159図 No. 4のFT-IR分析データ



第160図 No. 5のFT-IR分析データ



第161図 No. 6のFT-IR分析データ

第156～161図と第162図とを比較して、赤外線吸収ピークの位置と波形に類似が見られるので№1～№6に使用された塗料は漆と判断される。

② 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を、第9表と以下の文章に示す。

塗膜構造 下層から、下地、漆層が観察された。器種ごとに記す。

a. 什器（第9表№1～5・第169・170図）

下地：漆層の下に下地の見られないものもあったが、ほとんどが濃褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。

漆層：下地の上に地色の透明漆を1～2層重ね、その上加飾の文様部の赤色漆層が重なっていた。

顔料：断面を観察したところ、赤色漆中に明確な粒子の形状を呈する朱が観察された。

b. 烏帽子（第9表№6・第170図）

素地：漆層の下に、漆が浸透した部分と白く抜けた部分とが混在する様子が見られた。これは何らかの繊維から成る素地と考えられる。腐食が進んだために素地の痕跡すら壊れており、素地の材質は不明

である。

漆層：均一な層厚の漆層が1～2層見られた。黒色の顔料の混和は認められない透明漆層である。

③ EPMA分析

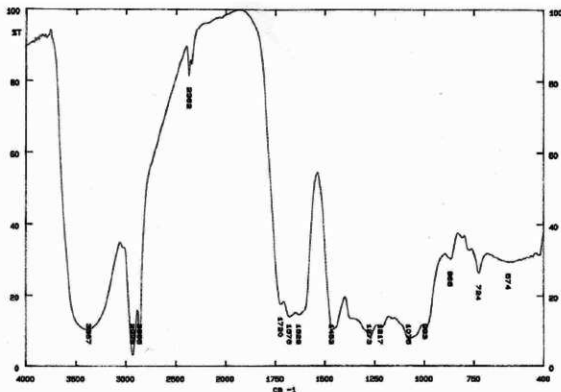
第163～168図・第10にEPMA分析データを示す。結果から、№1～5は赤色顔料としてHgが検出されたので、混和された赤色顔料は朱である。№6は、漆に顔料の混和はされていない。

E. 摘要

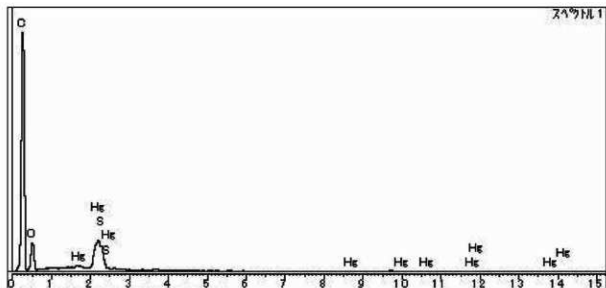
三重県に所在する朝見遺跡（第6次）の墓から出土した漆製品6点について、塗膜構造分析を行った。

什器（椀2点と皿3点）には特に大きな違いは見られなかった。1点には下地が遺存していなかったが、それ以外の4点には濃褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が見られ、その上に顔料を混和しない透明漆層が1～2層重ねられ、その上加飾の赤色漆が見られた。赤色漆に混和されていたのは、明確な粒子の形状を呈する透明度の高い朱であった。EPMA分析の結果と矛盾しない。

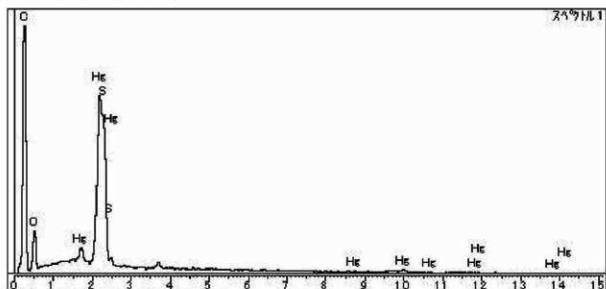
烏帽子の塗膜断面観察においては、何らかの繊維から成る素地の上に1～2層の透明漆層が塗布されて



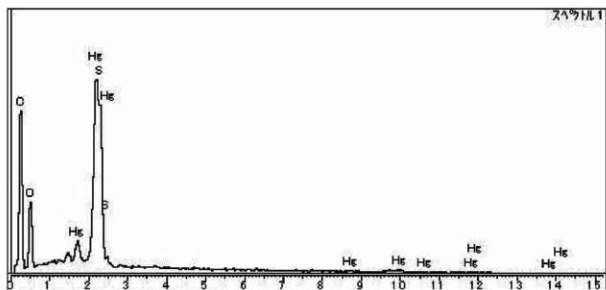
第162図 スグロメ漆塗布後60日経過のFT-IR分析データ（参考資料）



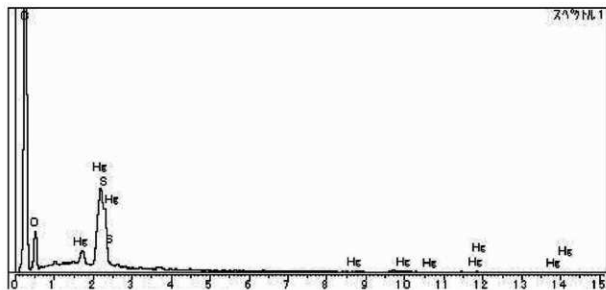
第163図 No. 1のEPMA分析データ



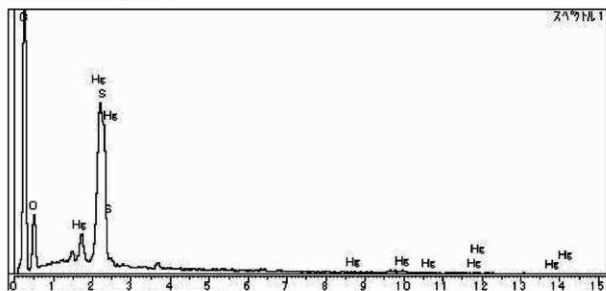
第164図 No. 2のEPMA分析データ



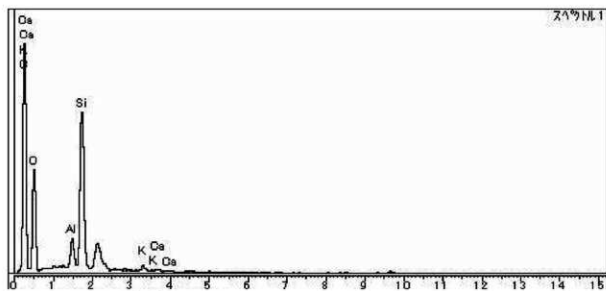
第165図 No. 3のEPMA分析データ



第166図 No. 4のEPMA分析データ



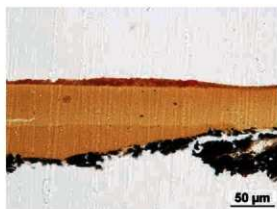
第167図 No. 5のEPMA分析データ



第168図 No. 6のEPMA分析データ



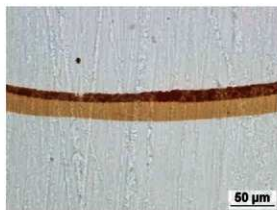
・試料 No. 1



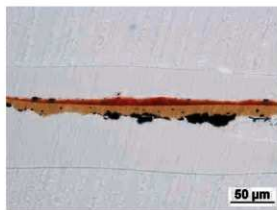
・試料 No. 1 断面写真



・試料 No. 2、No. 3



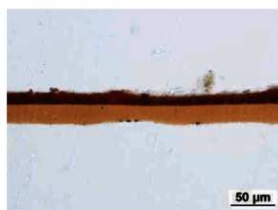
・試料 No. 2 断面写真



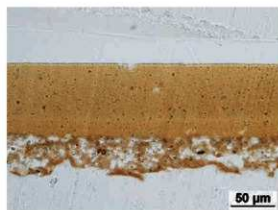
・試料 No. 3 断面写真



・ 試料 No. 4 断面写真



・ 試料 No. 5 断面写真



・ 試料 No. 6 断面写真

第170図 試料No. 4～6と塗膜断面

いた。素地には漆が浸透していたが腐食が進行しており、繊維の形状は不明である。資料の表面観察によると、漆膜の表面に素地の盛り上りの凹凸が規則正しく位置しているので、素地は布であった可能性が高い。
(株式会社吉田生物研究所)

第1切歯、右上顎第2切歯、左右上下不明の第1あるいは第2後臼歯が各1点である。年齢は、右上顎第2切歯の存在から8才以上と考えられるが、詳細は不明である。性別は不明である。

(株式会社パレオ・ラボ：中村賢太郎)

(3) 人歯分析

A. はじめに

初見遺跡（第6次）調査では、鎌倉時代の木棺墓から人骨（歯）が出土した。ここでは、人骨について報告する。

B. 試料と方法（第171図）

試料は発掘調査現場で採取された6包の人骨である。試料が採取された遺構は、鎌倉時代の木棺墓であるSX62024である。なお、SX62024からは副葬品である烏帽子などの遺物も出土している。

試料の観察を肉眼で行い、標本との比較により部位を同定した。

C. 結果と考察（第11表）

SX62024では、ヒトの歯および部位不明破片が見られた。ヒトの歯で歯種が同定できたのは、右上顎



1. ヒト右上顎第2切歯 (No. 15a)
2. ヒト右上顎第1切歯 (No. 10a)
3. ヒト第1あるいは第2後臼歯 (No. 10b)

第171図 出土人骨

第9表 漆器の断面観察結果表

No.	器種	写真No.	塗膜構造（下層から）			
			下地		漆層構造	顔料
			●	混和材		
1	椀	2	柿渋	木炭粉	透明漆2層／赤色漆1層	朱
2	椀	4	—	—	透明漆1層／赤色漆1層	朱
3	皿	5	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱
4	皿	7	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱
5	皿	8	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱
6	烏帽子	10	—	—	透明漆1～2層	—

第10表 EPMA分析結果表

元素	No.1 (wt%)	No.2 (wt%)	No.3 (wt%)	No.4 (wt%)	No.5 (wt%)	No.6 (wt%)
C	70.22	52.45	40.41	66.32	54.11	59.03
O	19.72	10.41	17	15.02	13.87	28.99
Al	—	—	—	—	—	1.42
Si	—	—	—	—	—	9.63
S	1.09	4.18	4.62	1.44	3.57	—
K	—	—	—	—	—	0.62
Ca	—	—	—	—	—	0.31
Hg	8.97	32.96	37.98	17.21	28.45	—

第11表 人歯試料一覧表

試料No.	遺跡・次数	地区名	遺構・層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
10a	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	右	上顎第1切歯	1	
10b	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	第1あるいは第2後臼歯(上下不明)	1	
10c	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	前臼歯破片(上下不明)	4	
10d	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	後臼歯破片(上下不明)	4	
10e	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	破片(上下不明)	約20	
10f	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	不明	不明	破片	2	
11a	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	臼歯破片(上下不明)	5	
11b	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	歯	不明	破片	約30	
11c	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯	ヒト	不明	不明	破片	2	
12a	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	歯	不明	臼歯破片(上下不明)	1	
12b	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	歯	不明	破片	約20	
12c	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	不明	不明	破片	3	
13	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	不明	不明	破片	1	
14a	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	歯	不明	臼歯破片(上下不明)	1	
14b	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 歯周辺土	ヒト	歯	不明	破片	15	
15a	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 棺北-中央	ヒト	歯	右	上顎第2切歯	1	
15b	朝見遺跡 (第6次)	2区	SM62024 棺北-中央	ヒト	不明	不明	破片	1	

3. 出土鉄滓の鉄成分分析

(1) いきさつ

朝見遺跡は三重県松阪市和原町に所在する。第6次調査地区では、平安時代のもとの推定される鉄滓が複数出土した。なお第2次調査地区でも、平安時代中期～後期と推定される大溝等から、鍛造鉄器・鍛造鉄器とともに複数の鉄滓が確認されており、分析調査も実施されている。さらに当遺跡周辺での鉄器生産の実態を検討するため、第6次調査地区出土鉄滓を調査する運びとなった。

(2) 調査方法

A. 供試材

第12表に示す。出土鉄滓10点の調査を実施した。

B. 調査項目

① 外観観察

鉄滓の外観的な特徴を記載した。

② マクロ組織

試料を端部から切り出した後、断面をエメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ mと1 μ mで順を追って研磨し、断面の全体像を撮影した。

③ 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて、鉄製品の金属組織および非

金属介在物を観察後、写真を撮影した。

④ ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試料は顕微鏡用を併用し、荷重50gfで測定した。ビッカース硬さは測定箇所にて圧子(136°の頂角をもったダイヤモンド)を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み(圧痕)の対角線長さから求めた表面積から算出される。

⑤ EPMA調査

EPMA(日本電子製機 JXA-8230)を用いて、鉄滓の鉄組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧:15kV、照射電流(分析電流):200E-8A。

⑥ 化学組成分析

出土鉄滓の化学組成分析を行った。測定元素と分析法は以下の通りである。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。
 二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸

化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2)、砒素 (As) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

A. 梶形鍛冶滓(ASA-1)

外観観察 やや小形の梶形鍛冶滓(57.7g)である。表面は黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆で覆われる。ただし金属探知器反応はなく、鉄部が存在しても金属鉄は残存していないと判断される。また滓の地の色調は暗灰色で、弱い着磁性がある。表面の気孔は少なく緻密である。

マクロ組織 第172図①に示す。不定形青灰色部は錆化鉄である。これに対して写真下側の灰褐色部は鍛冶滓である。また下面表層(写真右下)には微細な木炭破片が付着する。

顕微鏡組織 第172図②③に示す。②は錆化鉄部の拡大である。内部には層状のパーライト(Pearlite)組織の痕跡が残存する。素地はフェライト(Ferrite) :

a鉄)であった可能性が高い。パーライトの面積率から、この箇所は炭素量0.1%以下の軟鉄であったと推測される。

③は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が晶出する。

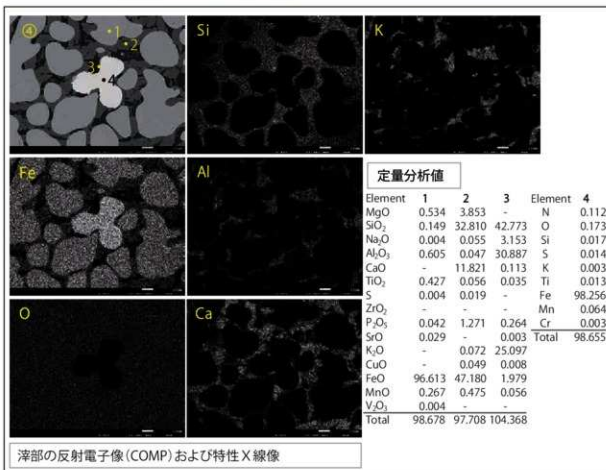
ビッカース断面硬度 第172図③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は447、472、493Hvであった。ほぼウスタイトの文献硬度値(約450~500Hv)の範囲内であり、ウスタイトと推定される。

EPMA調査 第172図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は96.6%FeO(分析点1)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は47.2%FeO - 11.8%CaO - 3.9%MgO - 32.8%SiO₂(分析点2)であった。ライム(CaO)、マグネシア(MgO)を高い割合で固溶する。オリビン[Olivin: 2(Fe,Ca)

第12表 供試料の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	計測値			調査項目					備考
						大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	EPMA	化学分析	
ASA-1	朝見	T3⑤ オ-M3 P92 ビット	㊸	梶形鍛冶滓(含鉄)	平安時代	47.3×43.7×27.9	57.7	錆化(Δ)	○	○	○	○	○	
ASA-2	(6次)	T9① モ-A17 SD69003 鏝	㊸	梶形鍛冶滓(含鉄)		60.5×53.7×38.0	143.3	錆化(Δ)	○	○	○	○	○	
ASA-3		T9④ モ-V17 上層銃路	㊸	梶形鍛冶滓		69.9×38.7×27.6	67.7	なし	○	○	○	○	○	
ASA-4		T10① 重機 彫削	㊸	梶形鍛冶滓		90.9×61.8×38.5	207.7	なし	○	○	○	○	○	
ASA-5		T11⑤ ホ-1 17 SD611021 鏝	㊸	梶形鍛冶滓		45.3×32.1×16.6	28.8	なし	○	○	○	○	○	
ASA-6		T11 ホ-Q14 包含層	㊸	鍛冶滓		37.4×32.8×25.0	31.4	なし	○	○	○	○	○	
ASA-7		T12③ ホ-L14 P918 ビット	㊸	梶形鍛冶滓		67.1×58.3×20.1	100.6	なし	○	○	○	○	○	
ASA-8		T12 ホ-X2 包含層	㊸	梶形鍛冶滓		48.0×38.2×23.3	53.0	なし	○	○	○	○	○	
ASA-9		T12⑤ X-J14 包含層	㊸	梶形鍛冶滓		65.5×48.5×29.5	103.0	なし	○	○	○	○	○	
ASA-10		T12③ X-L14 S9613025 自然銃路	㊸	梶形鍛冶滓		52.3×46.6×27.1	70.9	なし	○	○	○	○	○	

ASA-1
 椀形鍛冶滓 (含鉄)
 ①刃口組織
 ②錆化鉄部: 亜共析組織
 痕跡、③滓部のサイト
 ・77μm、硬度: 447、
 473、493Hv (刃口)
 荷重: 50gf

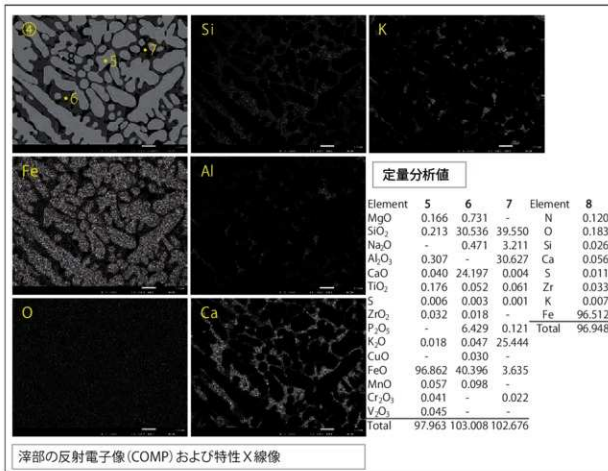
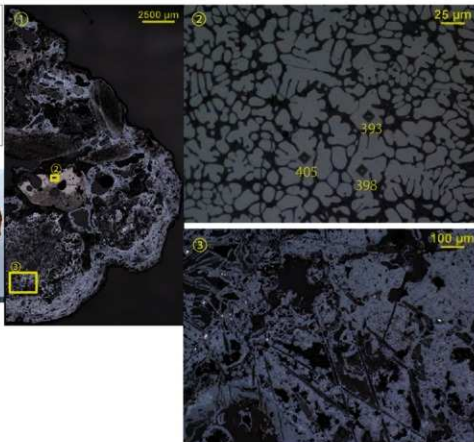


第172図 椀形鍛冶滓 (ASA-1) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

ASA-2

梘形鍛冶滓 (含鉄)

①マカ組織、②滓部:
 スタイト・ファライト、硬
 度:398、393、405Hv (マ
 スタイト) 荷重50gf、③
 酸化鉄部:過共析組織
 痕跡、



第173図 梘形鍛冶滓 (ASA-2) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

ビッカース断面硬度 第173図②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は393,398,405Hvであった。風化の影響か、ウスタイトの文献硬度値よりも軟質の値となった。ただし結晶の色調と形態、後述するEPMA調査から、ウスタイトと推定される。

EPMA調査 第173図④に萍部の反射電子像(Comp)を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は96.9%FeO(分析点5)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄(Fe)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は40.4%FeO-24.2%CaO-30.5%SiO₂-6.4%P₂O₅(分析点5)であった。オリビン[Olivin:2(Fe,Ca)O·SiO₂]組成であった。ライム(CaO)の割合が高く、磷酸分(P₂O₅)の割合も高めであった。微小暗黒色結晶は、特性X線像では珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は25.4%K₂O-3.2%Na₂O-30.6%Al₂O₃-39.6%SiO₂(分析点6)であった。オルソクレーズ(Orthoclase:KAlSi₃O₈)と推定される。また中央の微小明白色粒は特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は96.5%Fe(分析点8)であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)54.44%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.06%、酸化第1鉄(FeO)が39.40%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)33.96%の割合であった。造洋成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)15.63%とやや低めで、このうち塩基性成分(CaO+MgO)も2.23%も低値であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.15%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.04%、銅(Cu)も<0.01%と低値であった。

当鉄洋も主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、鉄材を熱間鍛打加工した時の反応副生物(鍛鉄鍛治滓)と推定される。また萍中には銹化鉄が含まれていた。内部に金属組織の痕跡が残存しており、炭素量は1.5%前後の高炭素鋼と推定される。

C. 椀形鍛治滓(ASA-3)

外観観察 やや大形の椀形鍛治滓の破片(67.7g)

である。表面に付着した土砂中に1箇所鍛造剥片が含まれている。洋の色調は灰褐色で、弱い着磁性がある。上面は中央がやや窪み形状で、一部黒色ガラス質層が付着する。これは羽口先端の溶融物と推定される。下面は広い範囲に砂質の鍛治炉床土が付着する。

マクロ組織 第174図①に示す。明灰色部は鍛治滓である。まとまった金属鉄部(またはその銹化物)はみられない。また下面の暗灰色層は鍛治炉土である。

顕微鏡組織 第174図②③に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また萍中に若干点に在る微細な明白色粒は金属鉄である。

ビッカース断面硬度 第174図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は454Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状の硬度値は640Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内(約600~700Hv)であり、ファヤライトと推定される。

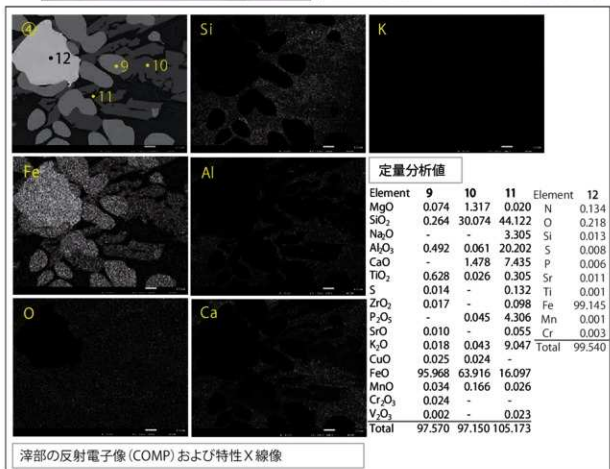
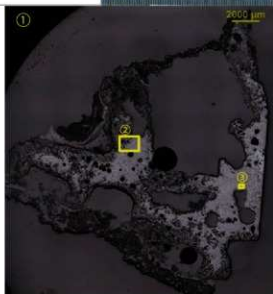
EPMA調査 第174図④に萍部の反射電子像(Comp)を示す。白色粒状結晶は特性X線像では、鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は96.0%FeO(分析点9)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)と推定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は63.9%FeO-1.5%CaO-1.3%MgO-30.1%SiO₂であった(分析点10)。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)で、少量ライム(CaO)、マグネシア(MgO)を固溶する。素地の暗灰色部の定量分析値は44.1%SiO₂-20.2%Al₂O₃-7.4%CaO-9.0%K₂O-3.3%Na₂O-16.1%FeO-4.3%P₂O₅(分析点11)であった。非晶質硫酸塩である。また写真左上の明白色粒は、特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は99.1%Fe(分析点12)であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)44.18%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.05%、酸化第1鉄(FeO)が34.94%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)24.28%の割合であった。造洋成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は30.58%であるが、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は1.27%と低

ASA-3

椀形鍛冶滓

①添加組織、
②③滓部:カス石・77μ
5μ、微小白色粒:
金属鉄、硬度:454Hv
(カス石)、640Hv(77μ
5μ)、荷重:50gf



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

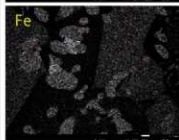
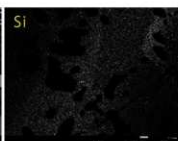
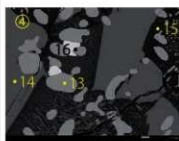
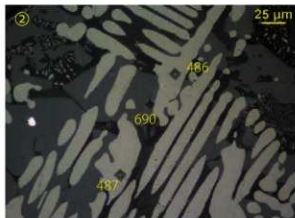
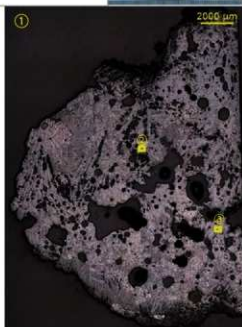
第174図 椀形鍛冶滓 (ASA-3) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

ASA-4 椀形鍛冶滓

①マカ組織

②硬度:486、487Hv (クスタイト)、
690Hv (ファヤライト)、荷重:50gf

③滓部:クスタイト・ファヤライト、
青灰色部: 銹化鉄



定量分析値

Element	13	14	15	Element	16
MgO	0.009	0.363	-	N	0.118
SiO ₂	0.321	29.764	60.506	O	0.231
Na ₂ O	-	-	0.971	S	0.025
Al ₂ O ₃	0.492	0.019	25.142	Zr	0.004
CaO	0.043	2.214	-	Ti	0.024
TiO ₂	1.419	0.130	0.055	Fe	97.683
S	0.015	0.001	-	Mn	0.063
ZrO ₂	0.032	-	-	Cr	0.003
P ₂ O ₅	-	0.568	0.078	Total	98.151
K ₂ O	0.011	-	16.943		
CuO	-	0.033	0.018		
FeO	94.235	62.881	1.215		
MnO	0.658	2.434	0.079		
Cr ₂ O ₃	0.001	0.002	-		
V ₂ O ₅	0.112	-	-		
Total	97.348	98.409	105.007		

滓部の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像

第175図 椀形鍛冶滓 (ASA-4) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

値であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.30%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.11%と低値であった。また銅（Cu）は0.02%であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物（ SiO_2 主成分）からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物（鍛錬鍛冶滓）と推定される。

D. 椀形鍛冶滓（ASA-4）

外観観察 6次調査地区出土鉄滓中では大形で、厚手の椀形鍛冶滓の破片（207.7g）である。滓の地の色調は灰褐色で着磁性がある。表面はやや風化気味である。上面には木炭痕が散在しており、一部は木炭が残存する。また茶褐色の鉄錆や黄褐色の土砂が部分的に付着するが、まとまった鉄部はみられない。下面端部には砂質の鍛冶炉床土が付着する。

マクロ組織 第175図①に示す。観察面はほぼ全体が灰褐色の鍛冶滓である。

顕微鏡組織 第175図②③に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄、青灰色部は銹化鉄である。

ビッカース断面硬度 第175図②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は486、487HVであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の定量分析値は690HVであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトと推定される。

EPMA調査 第175図④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は94.2%FeO - 1.4% TiO_2 （分析点13）であった。ウスタイト（Wustite: FeO）と推定される。淡灰色柱状結晶は、特性X線像では、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は62.9%FeO - 2.2%CaO - 2.4%MnO - 29.8% SiO_2 （分析点14）であった。ファヤライト（Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$ ）で、少量ライム（CaO）、マンガン（MnO）を固溶する。微小暗黒色結晶は、特性X線像では珪素（Si）、アルミニウム（Al）、カリウム（K）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は16.9% K_2O - 25.1% Al_2O_3 - 60.5% SiO_2 （分析点15）であった。オ

ルソクレース（Orthoclase: $KAlSi_3O_8$ ）と推定される。また中央の微小明白色粒は特性X線像では鉄（Fe）のみ強い反応がある。定量分析値は97.7%Fe（分析点16）であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分（Total Fe）49.33%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.04%、酸化第1鉄（FeO）が49.86%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）15.06%の割合であった。造滓成分（ $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ）は28.82%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は1.50%と低値であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.23%、バナジウム（V）が0.02%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は1.18%と高めで、銅（Cu）は<0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物（ SiO_2 主成分）からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物（鍛錬鍛冶滓）の可能性が高いと考えられる。ただし、他の鉄滓よりマンガン（MnO）が高め傾向を示す。これが製鉄原料に起因するものであれば、始発原料はマンガンを含む鉄鉱石（塊鉄）と推測される。

E. 椀形鍛冶滓（ASA-5）

外観観察 ごく小形で偏平な椀形鍛冶滓の破片（28.8g）で、側面は全面破面である。表面には黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で、弱着磁性がある。また表面の気孔は少なく緻密である。

マクロ組織 第176図①に示す。素地（明灰色部）は鍛冶滓、下面表層の暗灰色部はガラス質である。鍛冶炉床土が鍛冶滓と接触して溶融したものと推測される。

顕微鏡組織 第176図②③に示す。②は鍛冶滓部分の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な暗灰色結晶はヘルシナイト（Hercynite: $FeO \cdot Al_2O_3$ ）と推定される。③は下面表層のガラス質滓の拡大である。滓中には熱影響を受けた石英・長石類が混在する。鍛冶炉床土に混和された砂粒と推測される。またガラス質滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。

ビッカース断面硬度 第176図②の白色樹枝状結

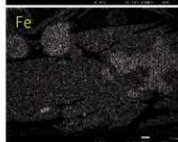
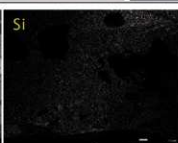
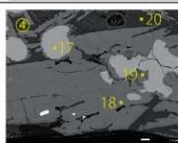
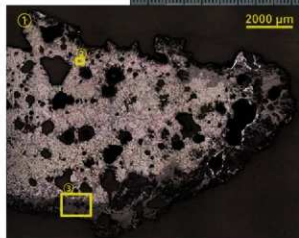
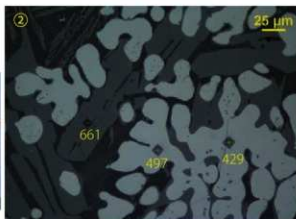
ASA-5

椀形鍛冶滓

①マカ組織

②滓部:カクタイト・微細ハ
ルナイト・マカライト、
硬度:429, 497Hv (マ
カイト)、661Hv (マ
カイト)、荷重:50gf

③下面表層:ガラス質滓
(石英・長石類混在)



滓部の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像



ガラス質滓の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像

定量分析値

Element	17	18	19	20
MgO	0.068	2.094	0.320	0.034
SiO ₂	0.240	29.757	0.916	48.331
Na ₂ O	-	-	-	3.197
Al ₂ O ₃	0.480	0.190	43.563	18.501
CaO	-	0.343	-	7.406
TiO ₂	1.003	0.085	2.376	0.791
S	-	-	-	0.041
ZrO ₂	-	-	-	0.030
P ₂ O ₅	-	0.297	-	2.096
SrO	-	-	0.011	-
K ₂ O	0.007	-	-	6.673
FeO	95.921	63.031	49.651	14.556
MnO	0.064	0.195	0.089	0.056
Cr ₂ O ₃	0.024	-	0.153	0.022
V ₂ O ₅	0.057	-	0.216	0.036
Total	97.864	95.992	97.295	101.770
Element	21	22	Element	23
MgO	-	0.634	N	0.128
SiO ₂	99.645	66.169	O	0.342
Na ₂ O	-	2.156	Si	0.073
Al ₂ O ₃	-	15.653	Zr	0.005
CaO	0.015	0.553	P	2.028
TiO ₂	0.019	0.765	Sr	0.006
S	-	0.008	K	0.082
ZrO ₂	0.006	0.017	Ti	0.031
P ₂ O ₅	0.019	0.796	Fe	94.810
K ₂ O	0.026	5.377	Mn	0.015
CuO	0.020	0.024	Total	97.520
FeO	0.226	3.270		
MnO	0.040	0.091		
Cr ₂ O ₃	-	0.012		
V ₂ O ₅	-	0.024		
Total	100.016	95.549		

第176図 椀形鍛冶滓 (ASA-5) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

晶の硬度を測定した。硬度値は429、497Hvであった。風化の影響か、前者はウスタイトの文献硬度値よりもやや軟質であったが、結晶の色調と形状、後述のEPMA調査の結果からウスタイトと推測される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は661Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

EPMA調査 第176図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)に強い反応がある。定量分析値は95.9%FeOであった(分析点17)。ウスタイト(Wustite: FeO)と推定される。淡灰色柱状結晶は、特性X線像は鉄(Fe)、珪素(Si)に反応がある。定量分析値は63.0%FeO - 21.1%MgO - 29.8%SiO₂(分析点18)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)で、少量マグネシア(MgO)を固溶する。微細暗灰色結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)に反応がある。定量分析値は49.7%FeO - 43.6%Al₂O₃ - 2.4%TiO₂(分析点19)であった。ヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)で、微量チタニア(TiO₂)を固溶する。素地の暗灰色部の定量分析値は48.3%SiO₂ - 18.5%Al₂O₃ - 7.4%CaO - 6.7%K₂O - 3.2%Na₂O - 14.6%FeO - 2.1%P₂O₅(分析点20)であった。非晶質珪酸塩である。

もう1視野、下面表層のガラス質滓部分を調査した。反射電子像(COMP)をPhoto5⑤に示す。左下の砂粒の定量分析値は99.6%SiO₂(分析点21)であった。石英(Quartz: SiO₂)に同定される。素地の暗灰色部の定量分析値は66.2%SiO₂ - 15.7%Al₂O₃ - 5.4%K₂O - 2.2%Na₂O - 3.3%FeO(分析点22)であった。非晶質珪酸塩である。また微細な明白色粒の定量分析値は94.8%Fe - 2.0%P(分析点23)であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)58.08%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.12%、酸化第1鉄(FeO)が64.13%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)11.58%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は21.74%で、このうち塩基性成分(CaO + MgO)は1.48%と低値であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.22%、バナジウム

(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガ(MnO)は0.02%、銅(Cu)0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副産物(鍛錬鍛造滓)と推定される。特に鉄酸化物の割合が高く、主に鉄材の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた滓と考えられる。

F. 鍛造滓(ASA-6)

外觀観察 ごく小形の鍛造滓破片(31.4g)である。側面は全面破面と推定される。表面には黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は灰褐色で表面は風化気味である。弱い磁性がある。また上面中央には砂粒を含む黒色ガラス質滓が付着する。羽口先端の溶融物と推測される。

マクロ組織 第177図①に示す。左上の暗灰色部はガラス質滓である。上述したように、熱影響をうけた砂粒(石英・長石類)が混在する。一方、素地は鍛造滓で、滓中に点在する青灰色部は錆化鉄である。

顕微鏡組織 第177図②③に示す。②は鍛造滓部分の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。③は錆化鉄部の拡大である。内部には層状のパーライト組織の痕跡が残存する。素地はフェライトであった可能性が高い。パーライトの面積率から、この箇所は炭素量0.1%以下の軟鉄であったと推測される。

ビッカース断面硬度 第177図②の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は670、685HVであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトと推定される。

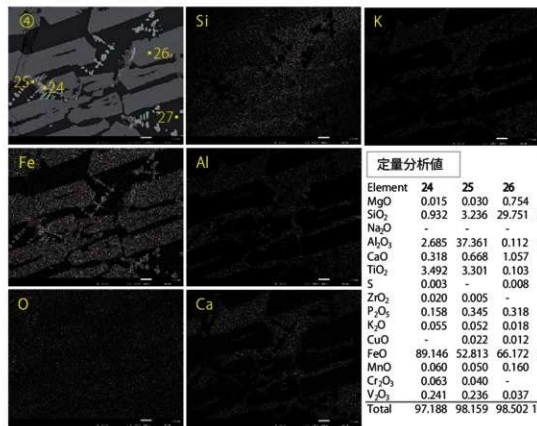
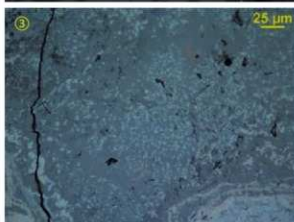
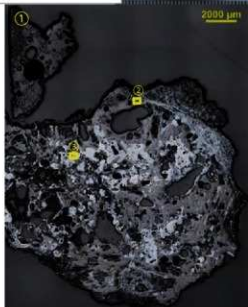
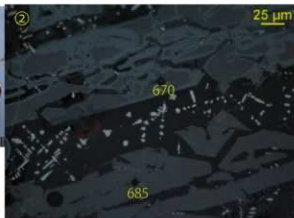
EPMA調査 第177図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。微細な白色樹枝状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は89.1%FeO - 3.5%TiO₂ - 2.7%Al₂O₃(分析点24)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)またはマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)と推定される。また微量チタニア(TiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)を固溶する。微細な暗灰色結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は52.8%FeO - 37.4%Al₂O₃ - 3.3%TiO₂(分析点25)であった。ヘルシナイト

ASA-6 鍛冶滓

①マクロ組織

②滓部:微細クワイト・ファライト、
硬度:670、685HV (ファライト)、
荷重:50gf

③青灰色部:酸化鉄、亜共析組織痕跡



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第177図 鍛冶滓 (ASA-6) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

(Hercynite $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$)に近い組成で、少量チタニア(TiO_2)を固溶する。また淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は66.2%FeO - 1.1%CaO - 29.8% SiO_2 (分析点26)であった。フェアライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)で、少量ライム(CaO)を固溶する。また素地の暗灰色部の定量分析値は40.6% SiO_2 - 18.6% Al_2O_3 - 9.6%CaO - 6.5% K_2O - 3.6% Na_2O - 5.2% P_2O_5 - 20.0%FeO(分析点27)であった。非晶質珪酸塩である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)40.28%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.03%、酸化第1鉄(FeO)が40.16%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)12.92%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)の割合は40.91%と高いが、このうち塩基性成分(CaO + MgO)3.34%と低めであった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.29%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であった。また酸化マンガング(MnO)は0.08%、銅(Cu)も<0.01%と低値であった。

G. 梟形鍛冶滓(ASA-7)

外観観察 やや小形で偏平な梟形鍛冶滓(100.6g)である。表面には薄く茶褐色の土砂や鉄錆が付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で、弱い着磁性がある。上面は比較的平坦で、下面は細かい木炭痕による凹凸が目立つ。また側面1面は破面で、気孔は少なく緻密である。

マクロ組織 第178図①に示す。表層にごく薄く青灰色の銹化鉄部が確認されるが、ほぼ全体が明灰色の鍛冶滓であった。

顕微鏡組織 第178図②③に示す。滓中には白色粒状・樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶フェアライトが晶出する。

ピッカース断面硬度 第178図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は446.470Hvであった。前者はウスタイトの文献硬度値より若干低めであるが、結晶の色調と形状、後述のEPMA調査の結果からウスタイトと推測される。

EPMA調査 第178図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がある。定量

分析値は94.7%FeO - 1.0% TiO_2 (分析点27)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)で、少量チタニア(TiO_2)を固溶する。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄(Fe)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は49.4%FeO - 13.9%CaO - 2.5%MnO - 30.0% SiO_2 - 2.7% P_2O_5 (分析点29)であった。ライム(CaO)の割合が高く、オリビン[$\text{Olivin}: 2(\text{Fe,Ca,Mn})\text{O}\cdot\text{SiO}_2$]組成であった。微小暗黒色結晶は、特性X線像では珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は11.5% K_2O - 1.5% Na_2O - 23.7% Al_2O_3 - 60.3% SiO_2 (分析点30)であった。オルソクレーズ(Orthoclase: KAlSi_3O_8)と推測される。また微細な明白色粒は、特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は96.8%Fe(分析点31)であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は62.77%と高値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.17%、酸化第1鉄(FeO)が64.77%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)17.53%であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は12.65%と低めで、このうち塩基性成分(CaO + MgO)も1.56%と低値であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.79%、バナジウム(V)が0.04%であった。当遺跡の出土鉄滓としては、高め傾向を示す。また酸化マンガング(MnO)も0.82%とやや高めであった。銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶解物(SiO_2 主成分)からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物(鍛錬鍛冶滓)と推定される。特に鉄酸化物の割合が高く、主に鉄材の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた滓と考えられる。その一方で、他の鉄滓よりチタニア(TiO_2)、バナジウム(V)が高め傾向を示す。始発原料は砂鉄の可能性が高いと考えられる。

H. 梟形鍛冶滓(ASA-8)

外観観察 やや偏平な梟形鍛冶滓の破片(53.0g)である。側面はほぼ全面破面で、気孔は少なく緻密である。滓の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。着磁性はごく弱い。また下面表層には点々とガラス質滓が付着する。炉材粘土の溶解物と推定

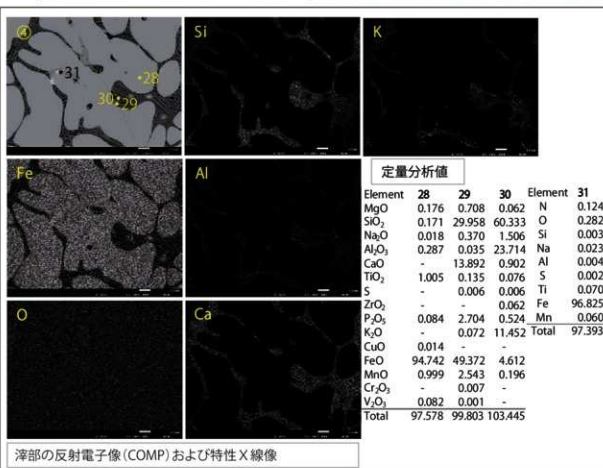
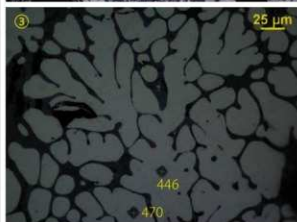
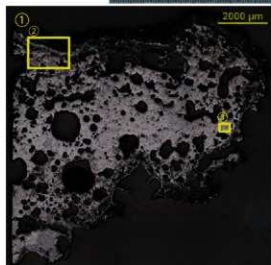
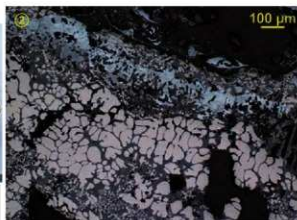
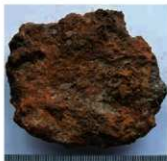
ASA-7

椋形鍛冶滓

①矽組織

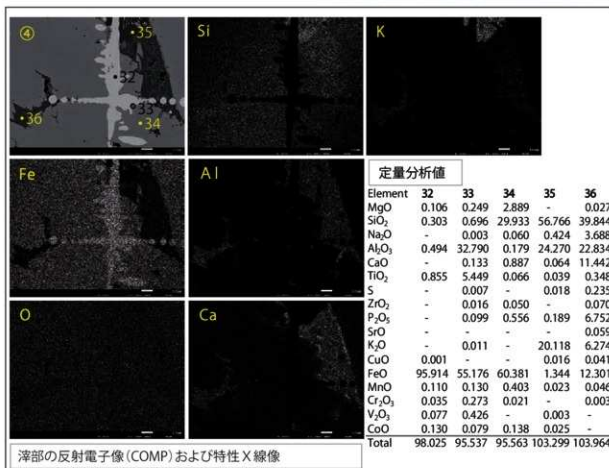
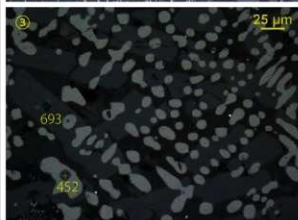
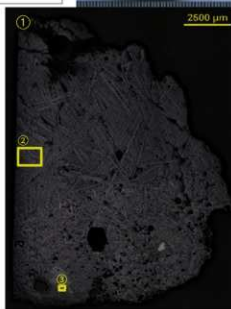
②青灰色部: 酸化鉄、
滓部: カシト・ファライト

③硬度: 446、470HV (9
79f)、荷重: 50gf



第178図 椋形鍛冶滓 (ASA-7) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

ASA-8
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②滓部:ウツイト・フヤイ
 ト、③硬度:452Hv(ウツ
 イト)、693Hv(フヤイ
 ト)、荷重:50gf

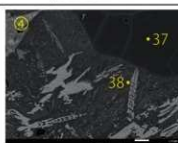
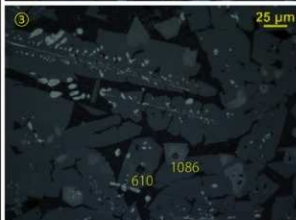
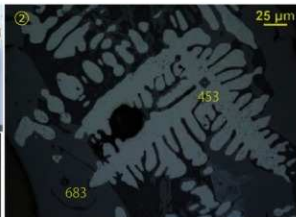
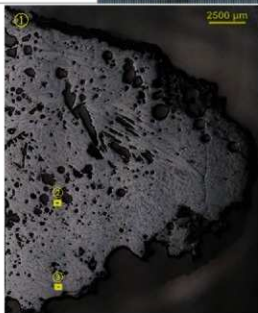


第179図 椀形鍛冶滓 (ASA-8) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

ASA-9

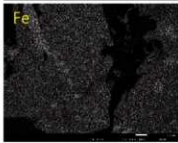
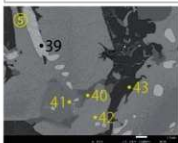
椀形鍛冶滓

①7μ組織、②③滓部硬
度:453Hv (双対)、610、
683Hv (7μナイト)、
1086Hv (7μナイト)、荷
重:50gf



定量分析値						
Element	37	38				
MgO	-	0.006				
SiO ₂	98.368	59.609				
Na ₂ O	-	4.225				
Al ₂ O ₃	-	18.264				
CaO	-	2.005				
TiO ₂	0.040	0.733				
ZrO ₂	0.003	-				
P ₂ O ₅	-	0.504				
K ₂ O	0.009	8.466				
CuO	-	0.032				
FeO	0.437	5.232				
Cr ₂ O ₃	0.024	0.031				
V ₂ O ₅	0.013	0.031				
Total	98.894	99.138				
Element	39	40	41	42	43	
MgO	0.012	0.108	0.079	0.333	-	
SiO ₂	0.389	0.255	0.698	29.312	61.237	
Na ₂ O	-	0.009	0.039	-	0.550	
Al ₂ O ₃	0.305	41.812	23.979	0.148	25.296	
CaO	-	-	-	0.362	0.008	
TiO ₂	0.508	1.217	2.846	0.130	0.033	
S	0.023	0.010	0.005	0.014	-	
ZrO ₂	0.067	-	0.018	-	-	
P ₂ O ₅	0.016	-	-	0.413	0.287	
K ₂ O	0.017	0.003	-	0.006	17.937	
CuO	0.031	-	-	0.052	-	
FeO	95.497	53.361	66.999	68.574	1.267	
MnO	0.025	0.046	0.034	0.136	-	
Cr ₂ O ₃	0.013	0.048	0.061	-	0.010	
V ₂ O ₅	0.058	0.086	0.226	-	0.016	
CoO	0.179	0.109	0.094	0.094	-	
Total	97.140	97.064	95.078	99.574	106.641	

ガラス質滓の反射電子像 (COMP) および特性X線像



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第180図 椀形鍛冶滓 (ASA-9) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

される。

マクロ組織 第179図①に示す。観察面はほぼ全面が暗灰色の鍛冶滓であった。

顕微鏡組織 第179図②③に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

ビッカース断面硬度 第179図③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は452Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は693Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内、ファヤライトと推定される。

EPMA調査 第179図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は95.9%FeO(分析点32)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。ウスタイト粒内の微細な暗灰色結晶の定量分析値は55.2%FeO-32.8%Al₂O₃-5.4%TiO₂(分析点33)であった。ヘルシナイト(Hercynite:FeO-Al₂O₃)で、チタニア(TiO₂)を微量固溶する。淡灰色柱状結晶の定量分析値は60.4%FeO-2.9%MgO-29.9%SiO₂(分析点34)であった。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)で、少量マグネシア(MgO)を固溶する。微小暗黒色結晶は、特性X線像では珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は20.1%K₂O-24.3%Al₂O₃-56.8%SiO₂(分析点35)であった。オルソクレーズ(Orthoclase:KAISi₃O₈)と推定される。また素地の暗灰色部の定量分析値は39.8%SiO₂-22.8%Al₂O₃-11.4%CaO-6.3%K₂O-3.7%Na₂O-6.8%P₂O₅-12.3%FeO(分析点36)であった。非晶質珪酸塩である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)41.28%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.13%、酸化第1鉄(FeO)が46.65%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)6.98%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は41.68%と高めで、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は4.97%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.32%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.21%、

銅(Cu)は0.03%とやや高めであった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、鉄材を熱間で鍛冶加工した時の反応副生物(鍛錬鍛冶滓)と推定される。

1. 梶形鍛冶滓(ASA-9)

外観観察 やや厚手の梶形鍛冶滓(103.0g)である。滓の地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。上面は10mm弱の細かい木炭痕が多数散在する。下面は細かい木炭痕による凹凸がある部分と淡灰褐色の鍛冶炉床土が付着する部分がある。側面4面は破面で、気孔は少なく緻密である。

マクロ組織 第180図①に示す。上下表面層の暗灰色部は、内部に砂粒が混在するガラス質滓である。炉材粘土の溶融物と推定される。また素地の灰色部は鍛冶滓である。

顕微鏡組織 第180図②③に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらに下面表層には、暗灰色多角形結晶ヘルシナイトが晶出する。

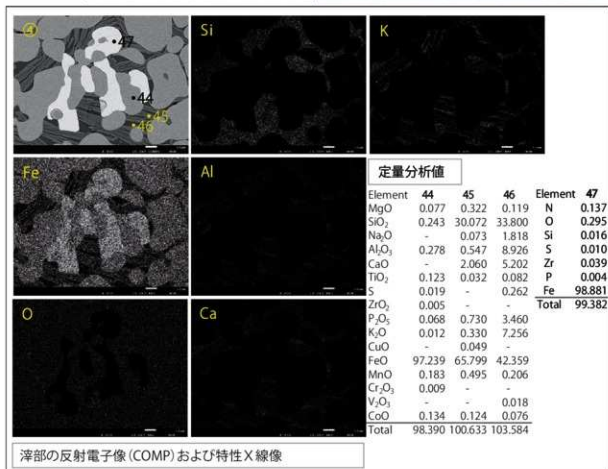
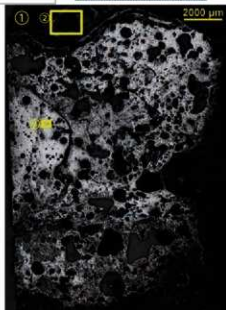
ビッカース断面硬度 第180図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は453Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内、ウスタイトと推定される。淡灰色柱状結晶の硬度値は610、683Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内、ファヤライトと推定される。さらに暗灰色多角形結晶の硬度値は1086Hvであった。非常に硬質で、ヘルシナイトと推定される。

EPMA調査 第180図④にガラス質滓の反射電子像(COMP)を示す。写真右上の暗灰色粒の定量分析値は98.4%SiO₂(分析点37)であった。石英(Quartz:SiO₂)に同定される。また素地の定量分析値は59.6%SiO₂-18.3%Al₂O₃-2.0%CaO-8.5%K₂O-4.2%Na₂O-5.2%FeO(分析点38)であった。非晶質珪酸塩である。

もう1視野、滓部の組成を調査した。Photo9⑤に反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶の定量分析値は95.5%FeO(分析点39)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)と推定される。また暗灰色多角形結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)に反応がある。定量分析値は外側が53.4%FeO-41.8%Al₂O₃-1.2%TiO₂(分析点

ASA-10
椀形鍛冶滓

- ① 7カ組織
② 木炭破片: 広葉樹材、
③ 滓部: 硬度 402、
411、431Hv (カステ)、
荷重: 50gf、ファヤライト



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第181図 椀形鍛冶滓 (ASA-10) の顕微鏡組織・EPMA調査結果

40)、内側が67.0%FeO - 24.0%Al₂O₃ - 2.8%TiO₂ (分析点41)であった。外側はヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)組成、内側はマグネタイト(Magnetite: FeO·Fe₂O₃)とヘルシナイトを主な端成分とする固溶体と判断される。さらにともに少量チタニア(TiO₂)を固溶する。淡灰色柱状結晶は、特性X線像では、鉄(Fe)、珪素(Si)に反応がある。定量分析値は68.6%FeO - 29.3%SiO₂(分析点42)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)に同定される。微小暗黒色結晶は、特性X線像では珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は17.9%K₂O - 25.3%Al₂O₃ - 61.2%SiO₂(分析点43)であった。オルソクレーズ(Orthoclase: KAlSi₃O₈)と推定される。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)46.17%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.11%、酸化第1鉄(FeO)が54.04%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)5.80%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は37.05%で、このうち塩基性成分(CaO + MgO)は2.36%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.27%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)も0.08%と低値であった。銅(Cu)は0.02%とやや高めであった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物(鍛錬鍛冶滓)と推定される。

J. 椀形鍛冶滓(ASA-10)

外観観察 小形の椀形鍛冶滓(70.9g)の破片と推測される。表面は黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆で覆われる。弱い着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また土砂中には木炭破片や鍛造破片などの微細な鍛冶関連物が少量含まれる。

マクロ組織 第181図①に示す。観察面はほぼ全面が明灰色の鍛冶滓であった。また上面には微細な木炭破片が付着する。

顕微鏡組織 第181図②③に示す。②は木炭破片の拡大である。柩目面を斜めに観察している。木炭組織中に導管が確認されることから、広葉樹材の黒炭と推定される。また③は滓部の拡大である。白色樹

枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

ビッカース断面硬度 第181図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は402、411、431Hvであった。風化の影響か、ウスタイトの文献硬度値より若干軟質の値となった。ただし結晶の色調と形状、後述のEPMA調査の結果からウスタイトと推測される。

EPMA調査 第181図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は97.2%FeO(分析点44)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶の特性X線像は65.8%FeO - 2.1%CaO - 30.1%FeO(分析点45)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)で少量石灰(CaO)を固溶する。素地の暗灰色部の定量分析値は33.8%SiO₂ - 8.9%Al₂O₃ - 5.2%CaO - 7.3%K₂O - 1.8%Na₂O - 3.5%P₂O₅ - 42.4%FeO(分析点46)であった。非晶質珪酸塩である。また中央の明白色粒は、特性X線像像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は98.9%Fe(分析点47)であった。金属鉄である。

化学組成分析 第13表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は62.66%と高めであった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.18%、酸化第1鉄(FeO)が55.90%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)27.21%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は10.91%と低めで、このうち塩基性成分(CaO + MgO)も0.57%と低値であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.09%、バナジウム(V)<0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.18%、銅(Cu)も<0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、鉄材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物(鍛錬鍛冶滓)と推定される。特に鉄酸化物の割合が高く、主に鉄材の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた滓と考えられる。

(4) まとめ

朝見遺跡第6次調査地区から出土した鉄滓は、い

ずれも主に鉄酸化物と粘土溶融物 (SiO₂ 主成分) からなり、大部分が鍛錬鍛冶と推定される。当地区周辺では、鉄材を熱間で加工して、鍛造鉄器の製作が主に行われていたと考えられる。

ただし製鉄原料起源の脈石成分のやや高い滓も2点確認された。このうち1点は始発原料が塊状鉄鉱石 (ASA-4: 1.18%MnO)、1点は砂鉄 (ASA-7: 0.79%TiO₂、0.04%V) の可能性が考えられる。

現在の滋賀・愛知県下では、古代 (7世紀後半～9世紀代) に塊状鉄鉱石 (磁鉄鉱) を製鉄原料とした鉄生産が行われたことが明らかになっている。これらの地域では、出土した鉄鉱石・製錬滓中の酸化マンガンの割合は著しく高くはないが、木瓜原遺跡 (1.88%MnO)、源内峠遺跡 (1.77%MnO) で、やや高めの製錬滓も確認されている。こうした鉄産地との関連性に関しては、近畿・東海両地域の製錬～鍛冶の調査資料を蓄積して判断する必要があるが、可能性を示すものとして注目される。

また始発原料が砂鉄の可能性が高い滓も確認された。朝見遺跡の第2次調査地区から出土した鍛造鉄器 (ASM-6、10) 中の非金属介在物中には、鉄チタン酸化物が確認されており、始発原料が砂鉄であったことが明らかになっている。また同じ松阪市内に所在する大連寺遺跡でも、始発原料が砂鉄で

あったことを示すチタニアの割合の高い滓が確認されている (DIR-4: 1.20%TiO₂、0.10%)。平安時代中～後期には、砂鉄を始発原料とする鉄材が一定量流通していたと推察される。

(日鉄冶金テクノロジー (株))

八幡事業所・TACセンター 鈴木瑞穂

【註】

- 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡 (第1・2次) 発掘調査報告』2014年
- 日刊工業新聞社『焼結組織写真および識別法』1968年。ウスタイトは約450～500Hv、マグネタイトは約500～600Hv、ファイヤライトは約600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネル (Ulvospinel: 2FeO・TiO₂) の硬度値範囲の明記はないが、マグネタイト (Magnetite: FeO・Fe₂O₃) と同じスピネル類の化合物で、チタニアを固溶するためマグネタイトよりも硬質である。ウルボスピネル組成であれば通常600Hv以上の値を示す。ヘルシナイト (Hercynite: FeO・Al₂O₃) はさらに硬質で1000Hvを超える。
- 鍛造剥片は、鍛造剥片は、熱間で鍛打したときに剥離・飛散した、鉄素材の表面の鉄酸化膜を指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe₂O₃)、中間層

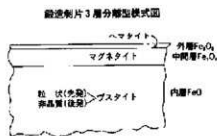
第14表 供試材調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	観察特徴	化学組成 (%)								備考
						Total Fe	Fe2O3	塩基性成分	TiO2	V	MnO	渣滓成分	Cu	
ASA-1	(16次)	T25: オ-43 P42 ビツ	鍛形鋳造滓 (査数)	平安時代	酸化鉄系・炭素系塊状物、深部 W=O+Cr	54.05	52.01	0.86	0.17	0.01	0.05	13.32	0.01	鍛錬鍛冶滓
ASA-2		T9: オ-417 S09003 溝	鍛形鋳造滓 (査数)		木炭焼片・炭素塊状物、酸化鉄系・炭素系塊状物、深部 W=O+Cr	54.44	33.96	2.23	0.15	<0.01	0.04	15.63	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASA-3		T9: オ-417 S10003 溝	鍛形鋳造滓		深部 W+F、微小金属粒	44.18	24.28	1.27	0.30	0.01	0.11	30.58	0.02	鍛錬鍛冶滓
ASA-4		T10: T 重機掘削	鍛形鋳造滓		深部 W+F、微小金属粒 (酸化鉄)	49.31	15.06	1.30	0.23	0.02	1.18	29.82	<0.01	鍛錬鍛冶滓 (MnOの割合が高く、始発原料が砂鉄の可能性が考えられる)
ASA-5		T11: オ-117 S0611021 溝	鍛形鋳造滓		深部 W+FeO+Cr、3次買戻 (石英・長石類混在)、微小金属粒	58.00	11.58	1.48	0.22	<0.01	0.02	21.74	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASA-6		T1: 中-014 包査期	鋳造滓		深部 W+FeO+Cr、酸化鉄系・炭素系塊状物、深部 W=O+Cr	40.28	12.92	3.34	0.29	<0.01	0.08	40.81	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASA-7		T12: 中-14 P418 ビツ	鍛形鋳造滓		深部 W=O+Cr	62.77	17.53	1.56	0.78	0.04	0.82	12.65	<0.01	鍛錬鍛冶滓 (TiO2の割合が高く、始発原料が砂鉄の可能性が考えられる)
ASA-8		T12: 中-X2 包査期	鍛形鋳造滓		深部 W+FeO+Cr+F	41.26	6.93	4.97	0.32	<0.01	0.21	41.88	0.02	鍛錬鍛冶滓
ASA-9		T12: 中-X14 包査期	鍛形鋳造滓		深部 W+H+O+Cr、3次買戻 (石英混在)	46.17	5.80	2.36	0.27	<0.01	0.06	37.05	0.02	鍛錬鍛冶滓
ASA-10		T12: 中-X14 S0612025 自然遺跡	鍛形鋳造滓		木炭焼片・炭素塊状物、深部 W+F、	82.60	27.21	0.57	0.08	<0.01	0.18	10.91	<0.01	鍛錬鍛冶滓

W:Waste (FeO), F:Flyash (2FeO・SiO₂), O:Oxide (2FeO・CaO・SiO₂), Cr:Chromium, K:K2S2O8

マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の3層から構成される。

- ④ 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会「木瓜原遺跡」1996年
- ⑤ 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会「源内峠遺跡」2001年
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター「大蓮寺遺跡(第2次)発掘調査報告」2015年



第182図 鍛造刺片3層分離型模式図

4. 木製品分析

(1) 木製品樹種同定

A. はじめに

柿田川左岸の平野部に立地する朝見遺跡(第6次)から出土した木製品および井戸枠材の樹種同定を行った。

B. 試料と方法

試料は、平安時代の井戸跡であるSE612003、SE612017、SE61013、SE62015、鎌倉時代の井戸跡であるSE61012、SE62002、SE62013、SE613001、室町時代の井戸跡であるSE61032、SE61033から出土した木製品および井戸枠材200点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

C. 結果

同定の結果、針葉樹であるコウヤマキとスギ、ヒノキ、イヌガヤの4分類群と、広葉樹であるツブラジイとコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、ツバキ属の3分類群の、計7分類群がみられた。コウヤマキが最も多く92点で、スギが89点、ヒノキが13点、イヌガヤとアカガシ亜属が各2点、ツブラジイとツバキ属が各1点であった。同定結果を第16表に、一覧を第15表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

① コウヤマキ *Sciadopitys verticillata*

(Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科(第183

図1a-1c (No113)・2a-2c (No182))

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~5列となる。分野壁孔は意状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

② スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don

ヒノキ科(第183図3a-3c (No7)、第184図4a-4c (No158))

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

③ ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科(第184図5a-5c (No39))

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1~15列である。分野壁孔はトウヒ~ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

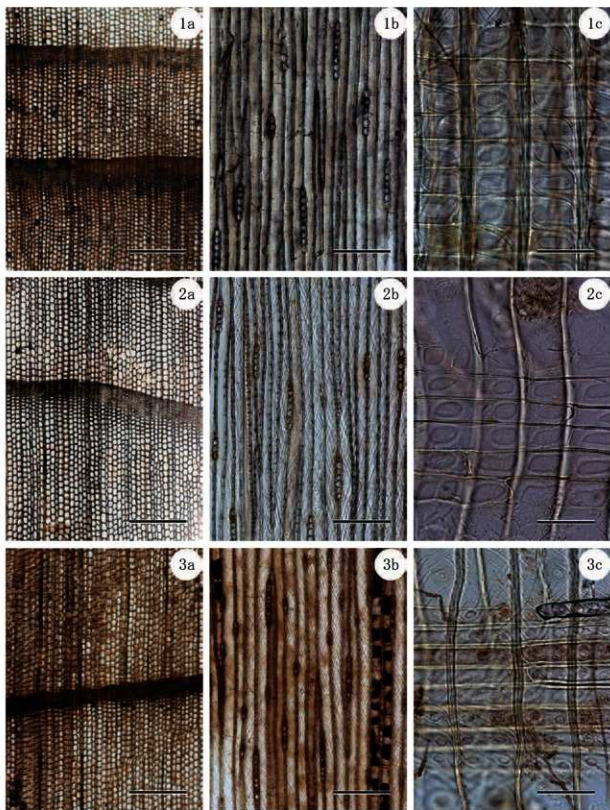
ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

第15表 木製品・井戸枠材の樹種同定結果一覧表

試料№	整理№	※番号	区	遺構名	層位	取上地	種 類	樹 種	木取り	備 考	時 期
1	194	132-03	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
2	195	132-02	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
3	196	127-02	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
4	197	130-01	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
5	198	131-01	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
6	199	132-01	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
7	220	113-01	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
8	209	130-02	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
9	210	127-01	T1	SF61012			井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
10	200	123-01	T1	SF61012			井戸枠横桟	スギ	板目		鎌倉時代
11	201	119-01	T1	SF61012			井戸枠横桟	スギ	板目		鎌倉時代
12	202	120-01	T1	SF61012			井戸枠横桟	スギ	板目		鎌倉時代
13	203	122-01	T1	SF61012			井戸枠横桟	スギ	板目		鎌倉時代
14	211	115-01	T1	SF61012			動物関係	スギ	板目		鎌倉時代
15	215	118-01	T1	SF61012			動物関係	スギ	板目		鎌倉時代
16	217	110-01	T1	SF61013	北面	西から№2	井戸枠縦板	スギ	板目		平安時代
17	218	111-01	T1	SF61013	北面	西から№3	井戸枠縦板	スギ	板目		平安時代
18	219	112-01	T1	SF61013	北面	西から①	井戸枠縦板	スギ	板目		平安時代
19	216	109-01	T1	SF61013		北面横桟	井戸枠横桟	スギ	板目		平安時代
20	204	126-03	T1	SF61013		井戸枠北東隅	杭	スギ	みかん割り		平安時代
21	988	129-02	T1	SF61013			加工材	スギ	板目	井戸枠材の一部か	平安時代
22	990	126-02	T1	SF61013			加工材	ツブラジイ	平割	靱皮残存	平安時代
23	191	132-04	T1	SF61013			加工材	板目			平安時代
24	193	128-01	T1	SF61013			加工材	スギ	板目	井戸枠材の一部か	平安時代
25	167	037-02	T1	SF61032			井戸枠片	コウヤマキ			室町時代
26	169	039-02	T1	SF61033		№5	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
27	170	063-01	T1	SF61033		№6	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
28	171	063-02	T1	SF61033		№1	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
29	172	064-01	T1	SF61033	下層		結節材	スギ	板目		鎌倉時代
30	173	064-02	T1	SF61033		№8	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
31	182	069-01	T1	SF61033		№2・3	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
32	184	069-02	T1	SF61033		№1・7	結節材	スギ	板目		鎌倉時代
33	174	065-01	T1	SF61033	最下層		くさび	ヒノキ	割り材		鎌倉時代
34	175	065-02	T1	SF61033	最下層		くさび	ヒノキ	割り材		鎌倉時代
35	176	065-03	T1	SF61033	最下層		くさび	ヒノキ	割り材		鎌倉時代
36	177	065-04	T1	SF61033	最下層		くさび	ヒノキ	割り材		鎌倉時代
37	179	066-02	T1	SF61033	最下層		くさび	スギ	板目		鎌倉時代
38	180	068-01	T1	SF61033	最下層		動物関係	ヒノキ	板目		鎌倉時代
39	187	070-01	T1	SF61033	最下層		動物関係	ヒノキ	板目		鎌倉時代
40	178	066-01	T1	SF61033	最下層		加工材	ツバノ属	芯持丸木		鎌倉時代
41	221	なし	T1	SF61033	最下層		加工材	イヌガヤ	芯持丸木		鎌倉時代
42	222	なし	T1	SF61033	最下層		加工材	イヌガヤ	芯持丸木		鎌倉時代
43	224	なし	T1	SF61033	最下層		加工材	コナラ属 アカガシ亜属	芯持丸木	靱皮残存	鎌倉時代
44	227	なし	T1	SF61033	最下層		加工材	コナラ属 アカガシ亜属	芯持丸木	靱皮残存	鎌倉時代
45	30	002-02	T2	SF62002		板板	井戸枠材	スギ	板目		鎌倉時代
46	33-1	054-02	T2	SF62002		№2	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
47	34	008-01	T2	SF62002		№1	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
48	36	016-01	T2	SF62002		№14	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
49	37	019-01	T2	SF62002		№30	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
50	38	018-01	T2	SF62002		№40	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
51	39	017-01	T2	SF62002		№46	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
52	40	020-01	T2	SF62002		№44	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
53	41	010-01	T2	SF62002		№41	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
54	42	011-01	T2	SF62002		№42	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
55	43	012-01	T2	SF62002		№32	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
56	44	013-01	T2	SF62002		№16	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
57	45	014-01	T2	SF62002		№33	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
58	46	015-01	T2	SF62002		№55	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
59	47	021-01	T2	SF62002		№15	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
60	48	022-01	T2	SF62002		№7	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
61	49	023-01	T2	SF62002		№57	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
62	50	024-01	T2	SF62002		№53	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
63	51	025-01	T2	SF62002		№58	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
64	52	026-01	T2	SF62002		№24	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
65	53	027-01	T2	SF62002		№26	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
66	54	028-01	T2	SF62002		№28	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
67	55	029-01	T2	SF62002		№52	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
68	56	030-01	T2	SF62002		№9	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代

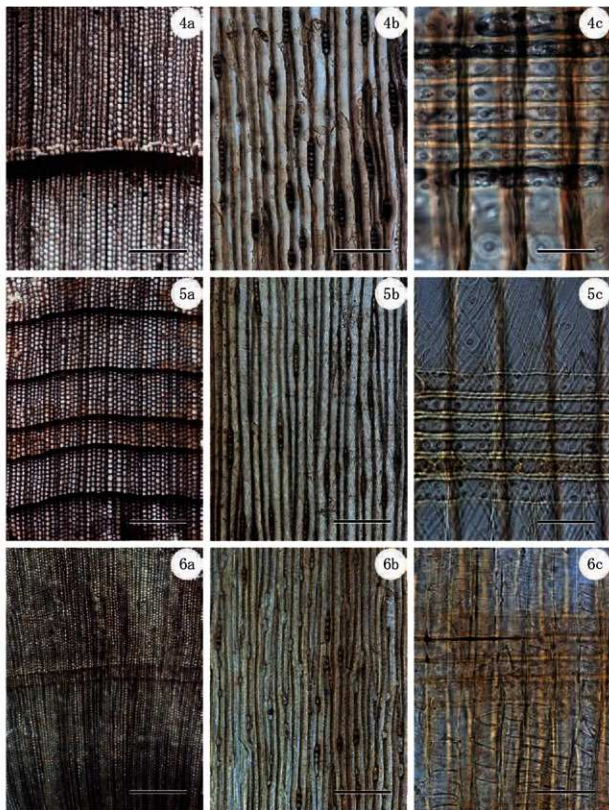
試料No	整理No	区	区	遺構名	層位	取上No	埋 埋	組 種	木取目	備 考	時 期
69	57	031-01	T2	SF62002		No.50	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
70	58	032-01	T2	SF62002		No.24	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
71	59	033-01	T2	SF62002		No.35	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
72	60	034-01	T2	SF62002		No.47	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
73	61	035-01	T2	SF62002		No.50	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり	鎌倉時代
74	62	036-01	T2	SF62002		No.4	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
75	63	037-01	T2	SF62002		No.14・2	井戸枠板	コウヤマキ	板目	釘穴あり 墨線あり	鎌倉時代
76	64	039-01	T2	SF62002		No.29	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
77	65	039-02	T2	SF62002		No.6	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
78	66	039-03	T2	SF62002		No.10	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
79	67	044-01	T2	SF62002		No.36	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
80	68	044-02	T2	SF62002		No.31・2スミ	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
81	69	044-03	T2	SF62002		北外板-西	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
82	70	052-01	T2	SF62002		北スミ	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
83	71	052-02	T2	SF62002		No.11	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
84	72	052-03	T2	SF62002		No.38	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
85	73	056-01	T2	SF62002		No.31	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
86	74	056-02	T2	SF62002		No.51	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
87	75	056-03	T2	SF62002		No.12	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
88	76	062-01	T2	SF62002		No.25	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
89	77	062-02	T2	SF62002		No.13	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
90	78	067-01	T2	SF62002		No.39	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
91	79	067-02	T2	SF62002		北外板-東	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
92	80	067-03	T2	SF62002		No.37	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
93	81	071-01	T2	SF62002		北外板-中	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
94	82	071-02	T2	SF62002		No.23	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
95	83	071-03	T2	SF62002		No.49	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
96	84	072-01	T2	SF62002		No.48	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
97	85	072-02	T2	SF62002		No.45	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
98	86	072-03	T2	SF62002		No.8	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
99	87	073-01	T2	SF62002		No.43	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
100	88	073-02	T2	SF62002		西スミ	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
101	89-1	074-01	T2	SF62002		No.22	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
102	89-2	074-02	T2	SF62002		No.22	井戸枠板	スギ	板目		鎌倉時代
103	90	038-01	T2	SF62002		No.18	井戸枠板	コウヤマキ	板目	上段の棧	鎌倉時代
104	91	038-02	T2	SF62002		No.19	井戸枠板	コウヤマキ	板目	上段の棧	鎌倉時代
105	92	040-01	T2	SF62002		No.20	井戸枠板	コウヤマキ	板目	上段の棧	鎌倉時代
106	93	040-02	T2	SF62002		No.17	井戸枠板	コウヤマキ	板目	上段の棧	鎌倉時代
107	94	041-01	T2	SF62002		最下段西	井戸枠板	コウヤマキ	板目	最下段の棧	鎌倉時代
108	95	042-01	T2	SF62002		最下段東	井戸枠板	コウヤマキ	板目	最下段の棧	鎌倉時代
109	96	043-01	T2	SF62002		最下段北	井戸枠板	コウヤマキ	板目	最下段の棧	鎌倉時代
110	97-1	046-01	T2	SF62002		ヨコサン	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
111	97-2	046-02	T2	SF62002		ヨコサン	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
112	97-3	047-01	T2	SF62002		ヨコサン	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
113	98	048-01	T2	SF62002		内側タテ西	井戸枠板	コウヤマキ	内材		鎌倉時代
114	99	048-02	T2	SF62002		内側タテ東	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
115	100	048-03	T2	SF62002		南側内側南西スミ	井戸枠板	コウヤマキ	内材		鎌倉時代
116	153	057-01	T2	SF62002		井戸枠材	コウヤマキ	板目		西側板上	鎌倉時代
117	148	なし	T2	SF62013		No.4	井戸枠材	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
118	102	045-01	T2	SF62013		No.2・3	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
119	103	049-01	T2	SF62013		No.1	井戸枠板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
120	150	058-01	T2	SF62015	上層	くさび	コウヤマキ	内材			鎌倉時代
121	155	058-02	T2	SF62015	下層	くさび	コウヤマキ	内材			鎌倉時代
122	121	108-02	T2	SF62015		No.4	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
123	130	108-01	T2	SF62015		No.5	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
124	129	105-01	T2	SF62015		No.2東西	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
125	132	103-01	T2	SF62015		No.3西面	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
126	26	なし	T2	SF62015		No.1	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
127	159	なし	T2	SF62015		No.7	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
128	160	なし	T2	SF62015		No.10	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
129	161	なし	T2	SF62015		No.6	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
130	162	なし	T2	SF62015		No.8	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
131	163	なし	T2	SF62015		No.8	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
132	164	なし	T2	SF62015		No.11	井戸枠材	スギ	板目		平安時代
133	306	102-01	T12	SF612003		No.1	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
134	115	083-03	T12	SF612003	タテ(西)	南側板	井戸枠板	スギ	板目		平安時代
135	116	086-01	T12	SF612003		No.12	井戸枠板	スギ	道板目		平安時代

試料No.	整理No.	年番号	区	遺構名	層位	取上地	種類	仕様	本取寸	備考	時期
136	126	094-01	T12	S042003	No.3	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
137	127	077-01	T12	S042003	No.2	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
138	128	107-01	T12	S042003	タテ(西)	北側板	スチ	板目			平安時代
139	133	082-01	T12	S042003	No.11	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
140	134	125-01	T12	S042003	No.15	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
141	135	101-01	T12	S042003	No.5	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
142	136	099-01	T12	S042003	No.16	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
143	139	124-01	T12	S042003	No.17	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
144	111	080-01	T12	S042003	No.7	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
145	125	106-01	T12	S042003	No.13	井戸枠縦板	コウヤマキ	板目			平安時代
146	126	080-01	T12	S042003	No.14	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
147	140	075-01	T12	S042003	No.6	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
148	142	078-01	T12	S042003	No.4	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
149	137	092-01	T12	S042003	No.8	井戸枠縦板	スチ	板目			平安時代
150	20	051-02	T12	S042003		西側横板	井戸枠横板	コウヤマキ	板目		平安時代
151	120	100-01	T12	S042003	No.9	井戸枠横板	コウヤマキ	板目			平安時代
152	18	007-01	T12	S042003		井戸枠周辺	井戸枠材	スチ	板目		平安時代
153	21-1	053-01	T12	S042003	No.4西ヨコ		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
154	22	054-01	T12	S042003		井戸枠内	井戸枠材	スチ	道板目		平安時代
155	123	095-01	T12	S042003		枠内の板	井戸枠材	ヒノキ	道板目		平安時代
156	131	081-01	T12	S042003	No.10		井戸枠材	スチ	道板目		平安時代
157	19-1	005-02	T12	S042003		井戸枠周辺	加工材	スチ	角材		平安時代
158	19-2	なし	T12	S042003		井戸枠周辺	加工材	スチ	道板目		平安時代
159	19-3	なし	T12	S042003		井戸枠周辺	加工材	スチ	道板目		平安時代
160	21-2	053-02	T12	S042003		No.4西ヨコ	加工材	スチ	板目		平安時代
161	157-2	060-02	T12	S042003		下層青灰色土層	木片	スチ	板目	削り屑	平安時代
162	157-6	060-06	T12	S042003		下層青灰色土層	木片	スチ	板目	削り屑	平安時代
163	12	050-01	T12	S042017	No.8		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
164	13	050-02	T12	S042017	No.9		井戸枠材	スチ	道板目		平安時代
165	14	006-01	T12	S042017	No.7		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
166	15	055-01	T12	S042017	No.3		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
167	16	009-01	T12	S042017	No.6		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
168	154	061-01	T12	S042017		削刺	井戸枠材	スチ	板目		平安時代
169	7	005-01	T12	S042017	No.10		井戸枠材	スチ	板目	積皮残存	平安時代
170	8-1	なし	T12	S042017	No.4 F		井戸枠材	スチ	道板目		平安時代
171	8-2	なし	T12	S042017	No.4 F		井戸枠材	スチ	道板目		平安時代
172	10-1	なし	T12	S042017	No.5		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
173	10-2	なし	T12	S042017	No.5		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
174	11	なし	T12	S042017	No.1		井戸枠材	スチ	板目		平安時代
175	17	051-01	T12	S042017		(南)横板	井戸枠横板	スチ	道板目		平安時代
176	136	059-01	T12	S042017		井戸枠内	井戸枠横板	ヒノキ	板目		平安時代
177	4	001-01	T12	S042017			面物底板	ヒノキ	板目	側面に釘穴あり	平安時代
178	5	001-02	T12	S042017			面物底板	ヒノキ	板目	側面に釘穴あり	平安時代
179	9	001-03	T12	S042017	No.2		面物底板	ヒノキ	板目	側面に釘穴あり 塗膜あり	平安時代
180	107	091-01	T12	S043001	R10		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
181	108	084-01	T12	S043001	R1		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
182	109	084-02	T12	S043001	R9		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
183	110	087-01	T12	S043001	R2		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
184	112	088-01	T12	S043001	R13		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
185	113	089-01	T12	S043001	R11		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
186	114	085-01	T12	S043001	R8		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
187	117	097-01	T12	S043001	R14		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
188	118	093-01	T12	S043001	R12		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
189	119	090-01	T12	S043001	R1		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
190	122	096-01	T12	S043001	R5		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
191	124	098-01	T12	S043001	R6		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
192	141	076-01	T12	S043001	R4		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
193	143	079-01	T12	S043001	R7		井戸枠縦板	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
194	105	121-01	T12	S043001	R15		井戸枠曲物	ヒノキ	道板目		鎌倉時代
195	23	062-01	T12	S043001		枠内	面物底板	スチ	板目		鎌倉時代
196	25-1	063-02	T12	S043001			加工材	ヒノキ	角材		鎌倉時代
197	25-5	063-01	T12	S043001		枠内	くさび	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
198	25-2	063-03	T12	S043001			くさび	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
199	25-3	064-01	T12	S043001			くさび	コウヤマキ	板目		鎌倉時代
200	25-4	064-02	T12	S043001			くさび	コウヤマキ	角材		鎌倉時代



1a-1c, コウヤマキ (No. 113)、2a-2c, コウヤマキ (No. 182)、3a-3c, スギ (No. 7)
 a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=50 μm)

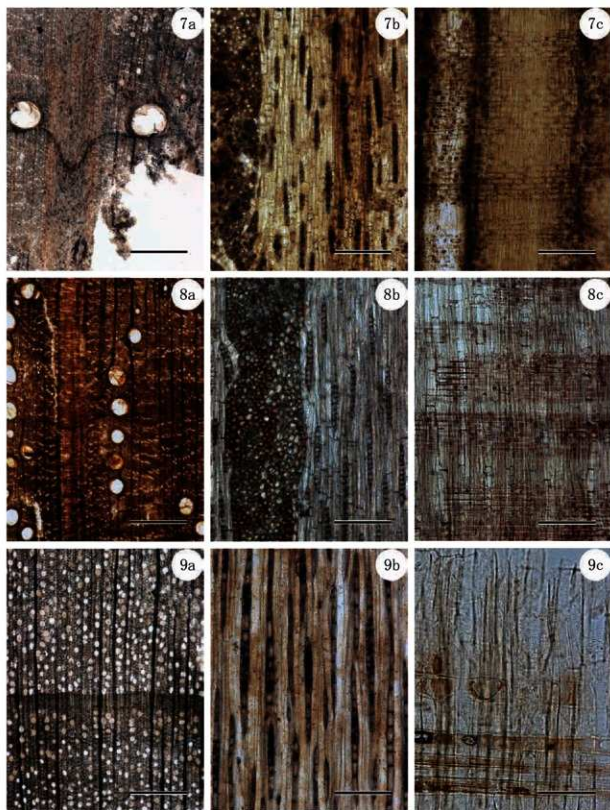
第183図 木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真①



4a-4c, スギ(No. 158), 5a-5c, ヒノキ(No. 39), 6a-6c, イスガヤ(No. 42)

a: 横断面(スケール=500 μm), b: 接線断面(スケール=200 μm), c: 放射断面(スケール=50 μm)

第184図 木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真②



7a-7c, ツブラジイ (No. 22)、8a-8c, コナラ属アカガシ亜属 (No. 44)、9a-9c, ツバキ属 (No. 40)
 a: 横断面(スケール=500 μm)、b: 接線断面(スケール=200 μm)、c: 放射断面(スケール=200 μm)

第185図 木製品・井戸杵材の光学顕微鏡写真③

④ イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*

(Knight ex Forbes) K. Koch イチイ科 (第184図 6a-6c (No.42))

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1~3細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、2~4個みられる。また仮道管の内壁には、らせん肥厚が確認できる。

イヌガヤは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する常緑小高木の針葉樹である。樹木自体が小さいため、現在では顕著な木材利用は行われていない。

⑤ ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 (第185図7a-7c (No.22))

年輪のはじめに大型の道管が不連続に1~3列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

⑥ コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen.*

Cyclobalanopsis ブナ科 (第185図8a-8c (No.44))

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定がき

い。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韧で、耐久性があり、切削加工は困難である。

⑦ ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 (第185図9a-9c (No.40))

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~3列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

D. 考察

鎌倉時代のくさびは、コウヤマキとスギ、ヒノキであった。コウヤマキとスギ、ヒノキは木理通直で真つすぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ。また、コウヤマキは水湿に耐朽性がある(伊東ほか、2011)。三重県内の樹種同定例では、堀町遺跡(第5次)の平安時代~鎌倉時代のくさびに、コウヤマキとスギ、ヒノキ、クリが利用されており、樹種の利用傾向は一致する(黒沼・小林、2016)。

曲物では、平安時代の曲物底板はヒノキ、鎌倉時代の曲物側板はスギとヒノキ、底板はスギであった。加工性の良いスギとヒノキが、底板や側板として利用されていたと考えられる。なお、堀町遺跡第5次調査の平安時代~鎌倉時代の曲物にもスギとヒノキが利用されており、樹種の利用傾向は一致する(黒

第16表 井戸枳材の遺構別樹種同定結果

時期	平安時代								鎌倉時代						室町時代		合計		
	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE					
遺構	612003	612017	61013	62015	61012	62002	62013	613001	61032	61032	61032	61032	61032	61032					
樹種	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板	井戸枳 枳板		
器種	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板	板		
コウヤマキ																			
スギ	12	4	12	3	1	2	2	7	4	9	6	1	2	1	14	1	86		
スギ																	68		
ヒノキ			1	1													3		
合計	12	5	2	12	3	1	2	2	7	4	9	57	13	2	2	1	14	1	157

沼・小林, 2016)。

平安時代の杭は、スギであった。また加工木は、平安時代はスギとツブラジイ、鎌倉時代はヒノキとイヌガヤ、アカガシ亜属とツバキ属であった。いずれも遺跡周辺に生育していた樹木が、伐採利用されたと考えられるため、平安時代には遺跡周辺にスギが多く生育していた可能性があり、鎌倉時代の遺跡周辺の森林ではスギは減少し、ヒノキやイヌガヤといった針葉樹やアカガシ亜属やツバキ属といった常緑広葉樹が伐採利用されていた可能性がある。

鎌倉時代の結物材は、いずれもスギであった。真つすぐで加工性の良いスギが多く利用されたと考えられる。なお、六大A遺跡の古墳時代中期～室町時代の結物には、コウヤマキが利用されている。

平安時代の木片は、いずれもスギであった。この木片は、木製品加工時の削り屑と考えられており、朝見遺跡においてスギ材が木製品に加工されていたと考えられる。

井戸枠では、平安時代、鎌倉時代ともにコウヤマキとスギ、ヒノキがみられ、室町時代ではコウヤマキがみられる。遺構別にみると、平安時代のSE612003とSE612017の井戸枠横板または横棧にコウヤマキとヒノキが数点認められるものの、全体ではスギが多くみられた(第17表)。これに対し、鎌倉時代の井戸枠では、SE61012がスギのみを利用している以外は、コウヤマキが多くみられた。このように朝見遺跡(第6次)では、例外もあるものの、平安時代と鎌倉時代で井戸枠の主要樹種が異なるという傾向がみられた。なお、同じ井戸跡1基の中で、部材ごとに樹種選択が行なわれていたと考えられる

ような明確な傾向は確認できなかった。

同じ時期の井戸枠材の例としては、堀町遺跡(第5次)で平安時代～鎌倉時代の井戸枠にスギを主体とする針葉樹が利用され、室町時代にはコウヤマキとスギ、ヒノキが、戦国時代にはスギとカヤが利用されていた(黒沼・小林, 2016)。また、堀町遺跡(第1次)の井戸枠でも、平安時代、鎌倉時代ともに井戸枠にはスギが多く確認されている(パリオ・サーヴェイ株式会社, 2000a・b)。堀町遺跡では、平安時代～鎌倉時代を通して井戸枠にスギが多く利用される傾向が確認できる。

しかし中坪遺跡(第1次)で行われた井戸枠の樹種同定では、平安時代ではスギおよびヒノキが利用されるが、中坪の井戸枠ではコウヤマキも多く利用されており(パリオ・サーヴェイ株式会社, 2017)、朝見遺跡(第6次)と傾向は一致する。

朝見遺跡(第6次)および中坪遺跡(第1次)と、堀町遺跡の井戸枠の用材傾向を比較すると、鎌倉時代に違いがみられた。杭および加工木の樹種をみる限り、鎌倉時代の朝見遺跡周辺ではスギが減少していた可能性があり、スギが減少したためにコウヤマキが井戸枠材として多用され始めた可能性がある。

(株式会社パレオ・ラボ: 小林克也)

【引用文献】

- ・ 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳『日本有用樹木誌』2011年 海青社
- ・ 伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学—出土木製品用材データベース—』2012年 海青社
- ・ 黒沼保子・小林克也『樹種同定』堀町遺跡(第5次)

第17表 木製品・井戸枠材の樹種同定結果

樹種	時期	平安時代						鎌倉時代						合計								
		井戸枠			曲物			井戸枠			曲物											
		器種	底板	横板	縦板	井戸枠材	加工材	木片	くさび	側板	底板	結物材	横板	曲物	縦板	井戸枠材	加工材	井戸枠片				
コウヤマキ			2	1					6			15	65	2			1	92				
スギ			3	5	17	23	1	7	2	1	2	1	7	4	6	10		89				
ヒノキ			3		1		1											13				
イヌガヤ																		2				
ツブラジイ								1										1				
コナラ属アカガシ亜属															2			2				
ツバキ属															1			1				
			合計	3	5	7	17	24	1	8	2	11	4	1	7	19	1	71	12	6	1	200

発掘調査報告」2016年

- ・ パリノ・サーヴェイ株式会社「堀町遺跡（第1次）における自然科学分析」『堀町遺跡』2000年a 三重県埋蔵文化財センター
- ・ パリノ・サーヴェイ株式会社「堀町遺跡から出土した木製品の樹種」『堀町遺跡』2000年b 三重県埋蔵文化財センター
- ・ パリノ・サーヴェイ株式会社「平成27年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査（中坪遺跡）にかかる自然科学分析業務委託報告」『中坪遺跡（第1次）発掘調査報告』2017年三重県埋蔵文化財センター

(2) 曲物底板塗膜分析

A. はじめに

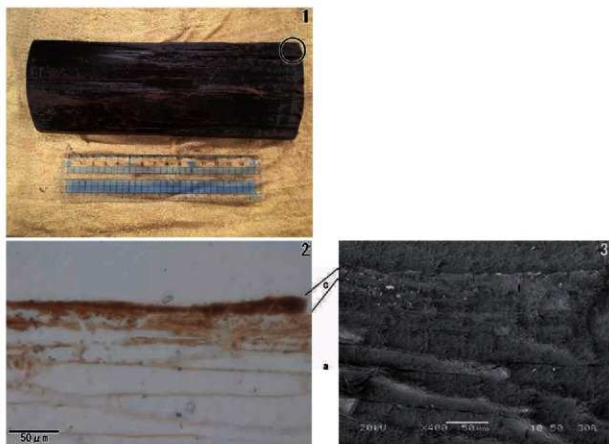
松阪市立田町・和屋町に所在する朝見遺跡（第6次）より出土した平安時代の曲物底板の塗膜について、塗膜薄片を作製し、塗膜の構造を検討した。

B. 試料と方法

分析対象は、平安時代の井戸 SE612017 より出土した曲物底板の黒色塗膜である（第18表、第186図）。なお、胎部の板は、板目取りのヒノキ製である（詳細は第4節の樹種同定を参照）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。分析は、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微

第18表 分析対象

試料 No.	整理 No.	R番号	種類	区	遺構名	取上 No.	樹種	木取り	採取部位
179	9	001-03	曲物 底板	T12	SE612017	No.2	ヒノキ	板目	黒色塗膜



1. 試料採取位置（試料 No. 179 曲物底板の黒色塗膜） 2. 断面の生物顕微鏡写真 3. 断面の反射電子像

第186図 曲物底板の塗膜構造

鏡による観察を行った。なお、別途採取した塗膜試料を用いて、赤外分光分析も実施している（詳細は第4節（3）の塗膜の材質分析を参照）。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約50 μ m前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約20 μ m前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

C. 結果および考察

第186図2・3に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。

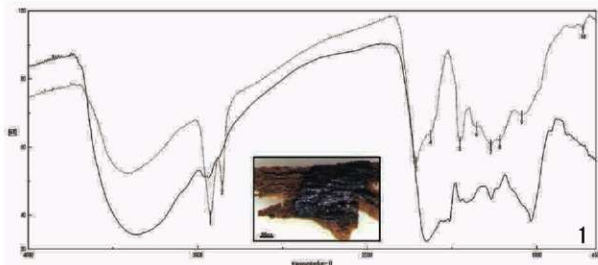
塗膜薄片では、胎部a層、透明漆層c層が観察された（第186図2・3）。下地は観察されず、木材組織に直接塗布されており、拭き漆や木地呂塗り、または洗塗りのような、木目の見える塗膜であったと考えられる。塗膜の特徴を第19表に示す。

第19表 塗膜分析結果

試料No.	種類	採取塗膜	下地	塗膜層
179	曲物底板	黒色塗膜	—	1層 透明漆7層

第20表 分析試料とその詳細

分析No.	試料	取上No.	調査区	遺構	時期	備考
1	曲物底板の黒色塗膜	2	T12	SE612017	平安	側面に釘穴あり、黒色塗膜あり



実線：塗膜、点線：生漆、数字：生漆の吸収位置
1. 分析No.1 (曲物底板の黒色塗膜)

第187図 塗膜試料の赤外分光スペクトル図

D. おわりに

朝見遺跡（第6次）の平安時代の井戸 SE612017から出土した曲物底板の黒色塗膜について塗膜分析を行い、塗膜構造について検討した。その結果、拭き漆や洗塗りのような、木材に直接塗料が塗布される構造とみられた。

（株式会社パレオ・ラボ

：竹原弘展・米田恭子・小林克也）

（3）曲物底板の塗膜の材質分析

A. はじめに

朝見遺跡は、松阪市立田町・和屋町地内に所在する、平安時代を中心とした縄文時代～江戸時代にかけての遺跡である。これまでの調査では、平安時代の青銅鏡や大型の掘立柱建物が発出されている。ここでは、井戸内から出土した曲物底板に黒色塗膜について材質分析を行った。

B. 試料と方法

分析試料は、平安時代の曲物底板の黒色塗膜1点である（第20表）。分析は、赤外分光分析を行った。試料は、試料表面から手術用メスを用いて少量を削り取り、厚さ1mm程度に截断した臭化カリウム

(KBr) 結晶板に押しつぶして、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。

測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製 FT/IR-410、IRT-30）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較した。

C. 結果および考察

以下に、塗膜試料の赤外分光分析結果について述べる。なお、第187図に赤外分光スペクトル図を示す。なお、縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber (cm⁻¹); カイザー)を示す。また、赤外分光スペクトル図に示した数字は生漆の主な赤外吸収位置（第21表）を示す。

分析No.1（曲物底板の黒色塗膜） 試料は、黒色で光沢のある厚みのある塗膜である（第186図1の写真）。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオ-

第21表 生漆赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウシオキ
7	1270.86	46.3336	ウシオキ
8	1218.79	47.5362	ウシオキ
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

ルの一部吸収（吸収No.7）が明瞭に見られた。また、漆などの有機物にみられる炭化水素の吸収（吸収No.1およびNo.2）が明瞭に見られ、その他の吸収位置も生漆と一致した（第187図1）。この結果から、曲物底板の黒色塗膜は漆と同定される。

（株式会社パレオ・ラボ：藤根 久）

5. 動物骨同定

A. はじめに

朝見遺跡（第6次）調査では、平安時代の溝と縄文時代後期初頭の土坑から動物骨が出土した。ここでは、動物骨の同定結果を報告する。

B. 試料と方法

試料は発掘調査現場で採取された8包の動物骨である。試料が採取された遺構は、平安時代（10世紀）の道路状遺構であるSZ65004、同じく平安時代（10世紀）の溝であるSD65007、縄文時代後期前半の土坑であるSK611059の3基である。

試料の観察を肉眼で行い、標本との比較により分類群と部位を同定した。

C. 結果と考察

同定されたのは、種不明の硬骨魚綱（Osteichthyes）、種不明の哺乳綱（Mammalia）、ウマ（*Equus caballus*）の3分類群である。

平安時代（10世紀）の道路状遺構であるSZ65004と道路内にあるピットでは、ウマの臼歯と種不明硬骨魚綱の椎骨が見られた。ウマの臼歯は少なくとも6点分である。ウマの性別と年齢は不明である。ウマの利用法としては運搬や農耕などが想定される。硬骨魚綱は、おそらく海産魚類である。

平安時代（10世紀）の溝であるSD65007では、ウマの臼歯と上顎骨あるいは下顎骨、種不明哺乳綱の部位不明破片が見られた。ウマの臼歯の破片には、咬耗が進んでいられない試料が見られ、ウマの年齢は比較的若いと考えられる。ウマの利用法としては運搬や農耕などが想定される。

縄文時代後期前半の土坑であるSK611059では、哺乳綱の頭蓋骨破片が見られた。哺乳綱の頭蓋骨破片は焼けており、調理後の残渣と考えられる。

（株式会社パレオ・ラボ：中村賢太郎）

第22表 動物骨

試料No.	遺跡・次数	遺坑名	遺構・部位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-818	SZ65004-P5	ウマ	臼歯	不明	破片	約10	
2	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-817	SZ65004-P9	ウマ	臼歯	不明	破片	約10	
3	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-817	SZ65004-P9	ウマ	臼歯	不明	破片	約10	
4a	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-817	SZ65004-P11	ウマ	臼歯	不明	破片	約10	
4b	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-817	SZ65004-P11	硬骨魚綱	—	不明	破片	1	
5	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-816	SZ65004-P13	ウマ	臼歯	不明	破片	約10	
6	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-817	SZ65004下層	ウマ	臼歯	不明	破片	5	
7a	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-816	SZ65007	ウマ	臼歯	不明	破片	約20	咬耗進んでいない
7b	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-816	SZ65007	ウマ	上顎骨あるいは下顎骨	不明	破片	3	
7c	朝見遺跡（第6次）	5-11K-B-816	SZ65007	哺乳綱	不明	不明	破片	2塊	
8	朝見遺跡（第6次）	11-21C下層	SK611059	哺乳綱	頭蓋骨	不明	破片	2塊	

6. 遺構の性格および古環境分析

(1) はじめに

本報告では、朝見遺跡（第6次）調査の各調査区の古環境復元、基本層序の年代決定および遺構の用途の推定などを目的とした自然科学分析結果を示す。今回の目的に対して適用された分析項目は、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析の微化石分析、種実同定、炭化材の樹種同定、火山灰分析、粒度分析、リン・カルシウム分析である。

(2) 分析試料

分析試料の一覧を第23表に示す。試料の詳細は、各分析の報告において適宜述べる。

（株式会社バレオ・ラボ：辻 康男）

(3) 火山灰分析・粒度分析

A. 方法

① 火山灰分析

試料は、粒度分析を行って篩い分けした4φ

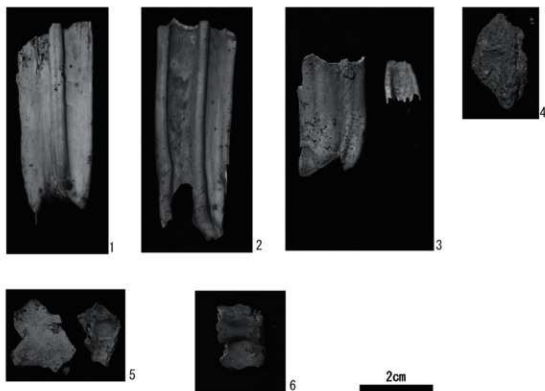
(0.063mm) 篩残渣を使用した。各試料を、恒温乾燥機 105度、24時間で乾燥して含水率を求めた。

4φ篩残渣について、重液（テトラプロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。

軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。

火山ガラスの形態は、町田・新井（町田・新井、2003）の分類基準に従って、バブル型平板状（b1）、バブル型Y字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破砕型フレーク状（c1）、急冷破砕型塊状（c2）に分類した。

また、重鉱物は、封入剤レクサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）を同定・計数した。今回の分析試料で確認できる上記の重軽鉱物と火山ガラスの形態については、第190図において示しており、これを同定根拠とする。



1. ウマ白歯 (No. 3) 2. ウマ白歯 (No. 4a) 3. ウマ白歯 (No. 7a)
4. ウマ上顎骨あるいは下顎骨 (No. 7b) 5. 哺乳綱頭蓋骨 (No. 8) 6. 硬骨魚綱骨 (No. 4b)

第23表 分析試料一覧表

試料 No.	調査区	遺構・層位	時期・備考等	分析種別						
				種実	薪炭 炭化材	花粉	珪藻	花粉体	火山灰	靛度
1	1-1K	S61012 7層	鎌倉後期	○	—	—	—	—	—	—
2	1-1K	S61013 9層	平安後期	○	—	—	—	—	—	—
3	1-2K	S61033	室町	○	—	—	—	—	—	—
4	2K	S62015	平安後期	○	—	—	—	—	—	—
5	11-2K下層	S611033	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
6	11-2K下層	S611053	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
7	11-2K下層	S611054 3層	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
8	11-2K下層	S611055	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
9	11-2K下層	S611055	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
10	11-2K下層	S611056	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
11	11-2K下層	S611056	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
12	11-2K下層	S611057	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
13	11-2K下層	S611057	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
14	11-2K下層	S611058	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
15	11-2K下層	S611058 1層	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
16	11-2K下層	S611059 2層	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
17	11-2K下層	S611059 4層	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
18	11-2K下層	S611059	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
19	11-2K下層	S611060	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
20	11-2K下層	S611060	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
21	11-2K下層	S611063	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
22	11-2K下層	S611066	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
23	11-2K下層	S611068	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
24	11-2K下層	S611068 5層	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
25	11-2K下層	S611069	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
26	11-2K下層	S611069	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
27	11-2K下層	S611070	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
28	11-2K下層	F14 (~Q19)	縄文後期前半	○	—	—	—	—	—	—
29	11-3K上層	S611001	平安中後期	○	—	—	—	—	—	—
30	11-2K下層	縄文遺物包含層 (S7層に对应)	縄文後期以降	○	—	—	—	—	—	—
31	11-2K下層	69層	流路埋土	—	—	—	—	—	—	—
32	11-2K下層	91層	—	—	—	—	—	—	—	—
33	11-3K下層	61層	縄文後期前半	—	○	—	—	—	—	—
34	1-1K	69層	平安後期～室町の遺構基盤層	—	—	○	○	○	—	—
35	1-1K	70層縄文土層包含	—	—	○	○	○	○	—	—
36	1-1K	71層	縄文土層包含	—	—	○	○	○	—	—
37	1-1K	74層	—	—	—	○	○	○	—	—
38	11-2K下層	67層	縄文後期前半以降	—	—	○	○	○	—	○
39	11-2K下層	88層	縄文後期の遺構基盤層	—	—	○	○	○	—	○
40	11-2K下層	89層	縄文後期遺構の検出面	—	—	○	○	○	○	—
41	11-2K下層	91層	—	—	—	○	○	○	○	○
42	11-2K下層	92層	—	—	—	○	○	○	○	○
43	11-2K下層	93層	—	—	—	○	○	○	○	○
44	11-2K下層	94層	砂礫層	—	—	○	○	○	○	○
45	11-2K下層	42層	流路埋土	—	—	○	○	○	—	—
46	11-2K下層	86層	流路埋土(流路中層)	—	—	○	○	○	—	—
47	11-2K下層	49層	流路埋土(流路下層)	—	—	○	○	○	—	—
48	11-2K下層	50層	流路埋土(流路下層)	—	—	○	○	○	—	—
49	11-2K下層	S3611051 堀辺基盤層	縄文後期の遺構検出面	—	—	—	—	—	—	○
50	11-2K下層	S3611051 1層 (土部内埋土)	縄文後期前半	—	—	—	—	—	—	○
51	11-2K下層	S3611052 1層 (土部内埋土)	縄文後期前半	—	—	—	—	—	—	○
52	11-3K下層	37層	平安の遺構基盤層	—	—	○	○	○	—	—
53	11-3K下層	39層	—	—	—	○	○	○	—	—
54	11-3K下層	60層	—	—	—	○	○	○	—	—
55	11-3K下層	61層	—	—	—	○	○	○	—	—
56	11-3K下層	63層	—	—	—	○	○	○	—	—
57	11-3K下層	64層	縄文中期末土層包含	—	—	○	○	○	—	—
58	11-3K下層	65層	—	—	—	○	○	○	—	—

また、試料No 41 中の火山ガラスについては、横山ほか(横山・檀原・山下, 1986)に従い、温度変化型屈折率測定装置(温度変化型屈折率測定装置(MAIOT 2000:(株)古澤地質製)を用いて屈折率測定を行った。

② 粒度分析

分析は、湿式篩分けとレーザー回折式粒度分布を行い、粒度組成を調べた。

分析方法は、適量を採取し4φ以上の篩(0.5φ間隔)を重ねて湿式篩分けを行った。なお、各試料は、恒温乾燥機105度、24時間で乾燥して、処理試料の乾燥重量を計算した。

4φ篩を通過した残渣の一部を回収して超音波洗浄機で分散した後、レーザー回折式粒度分布測定装置((株)堀場製作所製LA-960)を用いて計測した。

湿式篩分けおよびレーザー回折式粒度分析結果から、堆積物の各粒度階の百分率(%)を求め、モーメント法(積率統計算法;公文・立石,1998)に従って、各試料の平均粒径、分級度、歪度、尖度を計算した。

B. 結果

① 火山灰分析

以下に、鉱物組成、火山ガラスの形態分類の特徴、火山ガラスの屈折率測定結果について述べる。試料は、灰黄褐色～にぶい黄褐色の砂質シルトおよび礫混じり砂質シルトである。含水率は、0.88～5.00(%)であり、試料No 41が最も高い。重液分離では、いずれも軽鉱物の割合が高い(第24表)。

火山ガラスは全体的に少ないが、試料No 41において、バブル型平板状ガラス(b1)とバブル型Y字状ガラス(b2)がやや多く含まれていた(第25表、第190図)。重鉱物は、全体的に角閃石が多く、斜方輝石や単斜輝石は極端に少ない。

試料No 41の火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.5058-1.5114、平均1.5084であった(第189図)。

第24表 含水率および重・軽鉱物

試料No.	湿潤(g)	乾燥(g)	含水率(%)	処理湿重(g)	処理乾重(g)	軽・重鉱物組成(g)	
						軽鉱物	重鉱物
40	11.37	11.27	0.88	36.18	35.86	0.28	0.02
41	7.80	7.41	5.00	22.27	21.16	0.18	0.03
42	11.40	11.05	3.07	34.40	33.34	0.31	0.03
43	10.04	9.89	1.49	36.75	36.20	0.24	0.02
44	12.71	12.57	1.10	35.80	35.41	0.26	0.02

② 粒度分析

第26表と第191図に、湿式篩分けとレーザー回折式粒度分析による結果(重量%)を示す。また、第27表に各試料の平均粒径(D_φ)、分級度(標準偏差σ)、歪度(Sk)、尖度(K)、モード数およびモード径を示す。なお、第28表に統計値の評価値(Folk and Ward,1957)を示す。

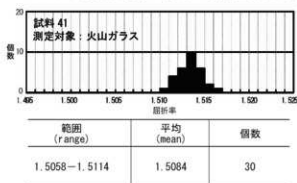
分析試料の粒度組成は、シルト分が55～68%含まれ、シルト主体の堆積物である。今回の分析試料は、下位から上位に向かって層位的に連続的に採取されている。分析結果をみると、シルト分と砂分は、上位に向かって概ね増加傾向を示す。粘土分は、下位の試料No 43、42で相対的に多い。このような粒度組成を示す層位的試料において、試料No 41では、シルト分が74%と非常に多いのが特徴である。

C. 考察

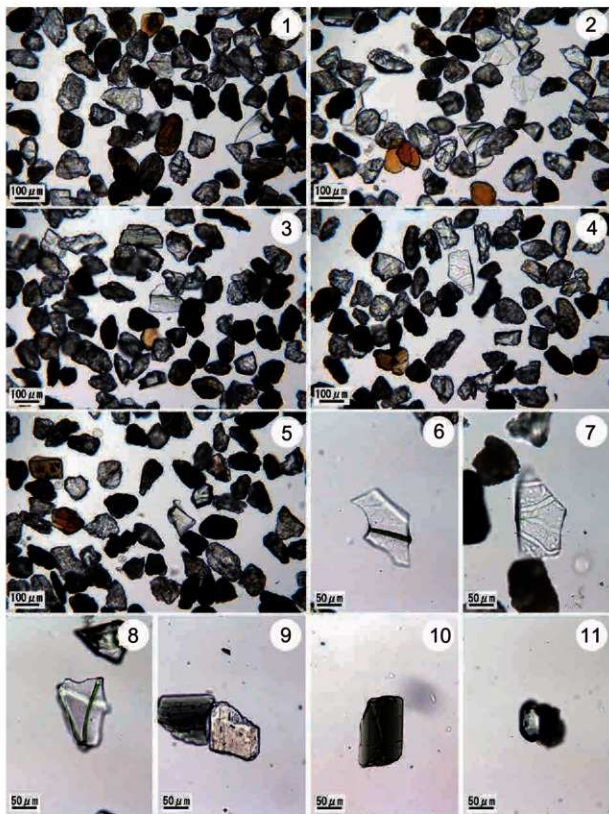
① テフラの分析結果

試料No 41(91層)中に含まれる火山ガラスは、ガラスの形態および屈折率(範囲1.5058-1.5114、平均1.5084)から、鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)と同定される。なお、火山ガラスが少ない点や、斜方輝石や単斜輝石が極端に少ない点から、一次的なテフラ層ではない可能性が考えられる。

鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)は、南九州鬼界カルデラから約7,300年前に噴出した降下軽石、火砕



第189図 火山ガラス屈折率測定結果



1. 4φ軽鉱物 (No. 40) 2. 4φ軽鉱物 (No. 41) 3. 4φ軽鉱物 (No. 42)
 4. 4φ軽鉱物 (No. 43) 5. 4φ軽鉱物 (No. 44) 6. バブル型平板状ガラス (No. 41)
 7. バブル型平板状ガラス (No. 44) 8. バブル型Y字状ガラス (No. 40)
 9. 斜方輝石 (No. 41, 右側) 10. 角閃石 (No. 40) 11. ジルコン (No. 44)

第190図 テフラ試料の偏光顕微鏡写真

流堆積物とその降下火山灰をさす。このテフラは、輝石デイサイト質のガラス質テフラで、部層により大差なく、ほぼ均質である。バブル型の多い火山ガラスは、始良 Tn テフラ (AT) の火山ガラスと比べると、薄手で淡褐色を帯びるものがあり、屈折率もかなり高く、広いレンジをもつ (n:1.508-1.516)。もっとも、完全に水和していないガラスの継目などガラスの厚い部分の屈折率は低く、1,500 前後のまでもある (町田・新井, 2003)。

② 基本層序の形成過程

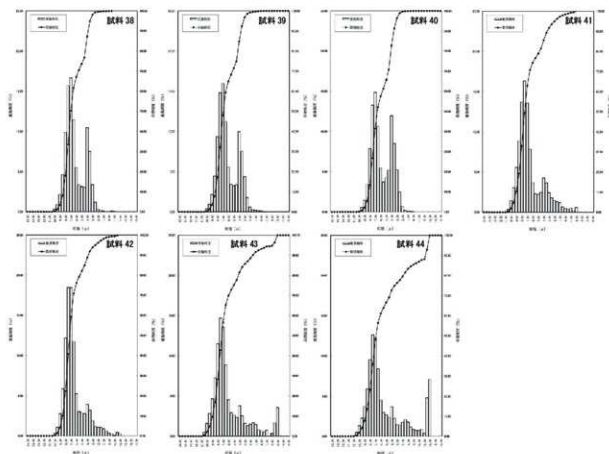
今回の調査区では、表土から極浅い深度に古代以

降の遺構検出面が埋没している。自然科学分析が実施された 11-2 区下層、11-3 区下層などの堆積層断面写真の観察にもとづくと、調査区に累重する堆積層の下層には、古代以降の遺構検出面下 20~40cm 前後にかけて、古地表面ないしそれに近接する層準に対応するとみられる縄文時代後期の遺構検出面が存在する。この遺構面の下位には、遺構面の基盤層をなす縄文時代後期や縄文時代中期末の遺物を含む堆積層が 20~30cm 前後累重している (11-2 区 88 層、89 層、11-3 区 64 層など)。その直下には、黒褐色を呈し腐植を多く含むと考えられる暗

第25表 4Φ残渣中の鉱物粗製

分相群 試料No.	火山ガラス										ガラス合計		遺器物						遺器物の合計
	石英 (Qtz)	長石 (Pl)	雲母 (m)	不明 (Opn)	バブル (Bp) 型		軽石型 (L)	急冷凝結型 (C)	ガラス合計	ガラス合計	斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Am)	ジルコニ (Zr)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opn)			
					(h1)	(h2)											(p1)	(p2)	
40	5	18	18	286		2			2	329	5	3	138		2	67	215		
41	31	52	5	224		8			16	328	6		164		14	34	218		
42	15	44	7	253					0	319	3		177		7	46	233		
43	15	28	10	269		1			1	323	6	1	191		11	49	258		
44	23	26	7	232		1			1	309	5	1	160	1	5	76	248		

・平板状 (h1)、Y字状 (h2)、繊維状 (p1)、スポンジ状 (p2)、フレーク状 (c1)、塊状 (c2)



第191図 粒度分布と累積頻度曲線

第26表 各試料の粒度分析結果

粒度階 (φスケール)	粒径(mm)	粒度階	試料No.							
			28	39	49	41	42	43	44	
-5.0	32000.00	中粒 (pebble)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
-4.5	22627.42		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
-4.0	16000.00		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
-3.5	11313.71		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
-3.0	8000.00		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.56	7.09	
-2.5	5636.85		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.66	4.80	
-2.0	4000.00	0.00	0.00	0.00	0.24	0.37	0.33	0.37		
-1.5	2828.43	細粒 (grain)	0.00	0.00	0.00	0.43	0.15	0.00	0.88	
-1.0	2000.00		0.06	0.03	0.00	0.05	0.48	0.75	0.73	
			0.06	0.03	0.00	0.48	0.63	0.75	1.61	
-0.5	1414.21	極細粒砂 (very coarse sand)	0.09	0.05	0.00	0.24	0.36	0.52	0.73	
0.0	1000.00		0.03	0.13	0.03	0.33	0.48	0.69	0.85	
			0.12	0.18	0.03	0.57	0.94	1.21	1.58	
0.5	707.11	粗粒砂 (coarse sand)	0.03	0.13	0.06	0.61	0.66	0.80	1.16	
1.0	500.00		0.09	0.21	0.08	0.90	1.17	1.46	1.78	
			0.12	0.34	0.14	1.51	1.83	2.26	2.94	
1.5	353.55	中粒砂 (medium sand)	0.17	0.26	0.20	1.09	1.29	1.69	2.09	
2.0	250.00		0.29	0.60	0.70	1.09	1.44	1.49	1.75	
			0.46	0.86	0.90	2.18	2.73	3.18	3.84	
2.5	176.78	細粒砂 (fine sand)	1.18	1.78	2.48	1.18	1.77	1.33	1.38	
3.0	125.00		3.37	4.37	5.21	1.89	2.43	1.60	1.47	
			4.55	6.15	7.69	3.07	4.09	2.93	2.85	
3.5	88.39	極細粒砂 (very fine sand)	7.51	7.54	8.53	3.21	3.63	2.54	2.23	
4.0	62.50		10.47	9.97	11.96	3.92	4.26	3.78	3.67	
			17.98	17.51	20.49	7.13	7.89	6.32	5.90	
			23.23	25.04	29.25	14.46	17.49	15.90	17.11	
4.5	44.19	粗粒シルト (coarse silt)	3.08	3.38	5.19	2.79	2.46	2.35	2.34	
5.0	31.25		3.14	3.27	4.34	2.84	2.22	3.62	2.65	
			3.34	3.43	3.71	3.02	2.31	2.93	2.96	
5.5	22.10	中粒シルト (medium silt)	5.53	5.60	5.44	5.25	3.96	4.03	4.32	
6.0	15.63		11.45	11.23	10.65	11.72	7.85	8.84	8.41	
			16.66	15.96	14.46	18.48	13.58	13.30	12.31	
7.0	7.81	細粒シルト (fine silt)	15.65	14.81	13.27	18.48	16.31	14.67	12.62	
7.5	5.52		9.90	8.34	7.86	12.19	13.70	11.49	9.54	
8.0	3.91		68.75	67.02	65.22	74.77	62.09	61.02	55.35	
8.5	2.76	粘土 (clay)	4.60	4.45	3.40	5.86	8.87	7.24	5.87	
9.0	1.95		2.16	2.15	1.45	2.79	5.58	4.64	3.79	
9.5	1.38		0.89	0.94	0.58	1.09	3.43	2.82	2.26	
10.0	0.98		0.32	0.37	0.11	0.33	1.44	1.60	1.33	
			7.97	7.91	5.52	10.07	18.92	16.30	13.16	
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.33	0.47	0.48	
10.5	0.69	コロイド (colloid)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	
11.0	0.49		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
11.5	0.35		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
12.0	0.24		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
12.5	0.17		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
13.0	0.12		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
13.5	0.09		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
14.0	0.06		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
14.5	0.04		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
15.0	0.03		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
total			223.25	225.04	229.23	214.36	216.65	209.86	204.34	

色帯が存在する。この暗色帯は、11-2区下層の91層などに相当する。暗色帯では、塊状無層理を呈し、未分解の植物遺体を含まないことから、古土壌と解釈される。暗色帯の下位では、30cm前後（縄文時代後期の遺構検出面下70cm前後）で砂礫層に達する。櫻井編（2016）によると、砂礫層は1～1.5m前後と厚く堆積することが明らかにされている。上記した古代以降の遺構検出面の下位に累重する堆積層は、層状をなし個方へ連続的に累重しており、これらが基本層序をなしている。また、場所によっては、この基本層序を下方侵食して流路が形成されている。

今回の分析は、上述の基本層序と流路部分において行われている。このうち、火山灰分析は、縄文時代後期の遺構検出面の基盤層から砂礫層の直上を覆う基本層序において層位的に連続的に分析試料が採取されている。粒度分析は、火山灰分析試料層に加え、縄文時代後期の遺構検出面の被覆層から古代以降の遺構面基盤層までの層序についても行われている。

粒度分析結果によると、調査区の基底をなす砂礫層を被覆する堆積層は、極細粒砂～細粒砂（じり）のシルトを主体とすることが確認できる。後述する本

遺跡の立地環境と基本層序の堆積状況をふまえると、古代以降の遺構面基盤層の下位から砂礫層までの層序は、氾濫原を埋積した浮遊洪水堆積物と解釈される。

火山灰分析では、暗色帯において、一次的なテフラ層ではないと判断されるものの、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）が暗色帯に多く含まれる点を確認される。K-Ahの噴出年代は、暦年代で約7300年前である（町田・新井，2003）。放射性炭素年代測定では、火山灰分析層序に対比される暗色帯の腐植の年代測定が行われており、7500～7400年前の暦年代が得られている。火山灰分析と放射性炭素年代測定にもとづくと、暗色帯は、縄文時代早期後葉の7500-7300年前もしくはそれ以前に発達した土壤生成層と捉えられる。土壤生成が進行していたと考えられる縄文時代早期後葉頃には、調査区周辺の氾濫原の堆積環境が安定していたことがうかがえる。暗色帯は、縄文時代中期末から後期の遺構・遺物が検出された浮遊洪水堆積物に被覆されることから、当該期に氾濫原の堆積環境が不安定化していたことがうかがわれる。

なお、この浮遊洪水堆積物の上面付近で検出され

第27表 各試料の粒度指標

統計値	No	38	39	40	41	42	43	44
平均粒径 (D ₅₀)		5.96	5.85	5.58	6.19	6.28	5.71	4.80
分級度 (標準偏差σ)		1.78	1.86	1.83	1.99	2.33	3.09	3.78
歪度 (Sk)		-0.57	-0.53	-0.28	-1.48	-1.25	-1.46	-1.02
尖度 (K)		2.49	2.41	1.93	5.34	4.30	4.56	2.79
モード数		多峰 (2)	多峰 (2)	多峰 (2)	単峰	多峰 (2)	多峰 (3)	多峰 (3)
第1モード		6.5-7.0	6.5-7.0	6.5-7.0	6.5-7.0	7.0-7.5	6.5-7.0	6.5-7.0
第2モード			12.0-12.5			3.5-4.0	12.0-12.5	3.5-4.0
第3モード						12.0-12.5		

第28表 分級度、歪み度、尖度の評価

(σ, 分級度)		(Sk, 歪み度)		(K, 尖度)
0.35以下	非常に良い	0	対称	1
0.35～0.50	良い	-1.00～-0.30	著しく負	0.67以下
0.50～0.71	やや良い	-0.30～-0.10	負の歪み	0.67～0.90
0.71～1.00	普通	-0.10～+0.10	ほぼ対称	0.90～1.11
1.00～2.00	悪い	+0.10～+0.30	正の歪み	1.11～1.50
2.00～4.00	非常に悪い	+0.30～+1.00	著しく正の歪み	1.50～3.00
4.00以上	極めて悪い	正: 負:	粗い方へ偏する 細い方へ偏する	3.00以上
				正規分布曲線 非常に扁平 扁平 中間的 突出 非常に突出 極めて突出

た遺構埋土からは、2500 cal BC ~ 2050 cal BC 前後 (4400 ~ 4000 cal BP 前後) の年代値が得られている。試料No.33 (61層) は、暗色帯を被覆する縄文時代中期末から後期の遺構・遺物が検出される浮遊洪水堆積物から採取された炭化材片であるが、1300-1430 cal BC (3250-3380 cal BP) とかなり新しい年代値を示す。本試料は、上位からのコンタミネーションである可能性が高い。また、試料No.31(49層) は、基本層序を下方侵食する流路埋土の下部付近の埋積層から採取した炭化材である。本試料は、1880-1750 cal BC (3830-3700 cal BP) と基本層序中で検出される縄文時代後期の遺構埋土より新しい年代値を示しており、層序関係において矛盾のない結果が得られている。

以上述べてきた結果にもとづくと、調査区では、縄文時代早期後葉以前のある段階に、砂礫層で厚く埋積されるような流路および氾濫原の発達時期が存在したと考えられる。縄文時代中期末から後期頃になると、調査区周辺の氾濫原面では、砂礫が流入しなくなり、浮遊泥質洪水堆積物が穏やかに埋積していくような堆積環境へと変化したと確認される。このような層相変化から、縄文時代中期末から後期頃には、調査区周辺の氾濫原面が既に離水傾向へ転じていたとみなされる。縄文時代後期前半を中心とする遺構が検出される古地表面付近の層序は、古代以降の遺構検出面に近接するように極浅い深度に埋設している。このような層序関係から、調査区周辺の氾濫原面は、縄文時代後期前半以降に氾濫原の離水傾向をさらに強めたことがうかがえる。

縄文時代後期前半には、調査区において貯蔵穴とみられる遺構などが多く検出されている。当該期には、間欠的に浮遊泥質洪水堆積物が流入するような、平常には比較的静穏な氾濫原上において人間活動が展開していたと考えられる。浮遊泥質洪水堆積物は、基本層序を下刻して形成された流路や当時活動のであった備田川の分流路から供給されたことが推測される。

(株式会社パレオ・ラボ：藤根 久・辻 康男)

【引用・参考文献】

- ・ Folk,R.L. and Ward,W. (1957) Braros river bar : a study in the significance of grain size parameters, J. Sed. Petrol., 27, 3-26.
- ・ 公文富士夫・立石雅昭 (1998) 新版砂屑物の研究法, 396p, 地学団体研究会.
- ・ 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
- ・ 櫻井拓馬編 (2016) 壱町道跡 (第5次) 発掘調査報告, 208p, 三重県埋蔵文化財センター.
- ・ 横山卓雄・櫻原 徹・山下 達 (1986) 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定, 第四紀研究, 25, 21-30.

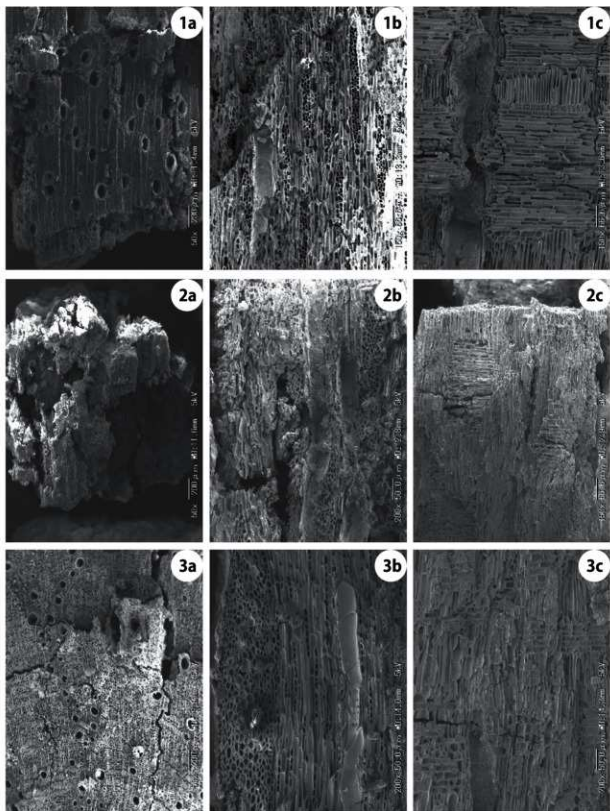
(4) 樹種同定 (炭化材)

A. 方法

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柃目) について、カミソリと手で割断面を複製し、整形して試料台に

第29表 炭化材の樹種同定結果一覧表

試料No.	地区名	遺構・層位	種類	樹種	年代測定番号
6	11-2区下層	S8611053	炭化材	広葉樹	
7	11-2区下層	S8611054 3層	炭化材	広葉樹	PLD-36733
9	11-2区下層	S8611055	炭化材	ブナ科	
11	11-2区下層	S8611056	炭化材	広葉樹	
13	11-2区下層	S8611057	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	
15	11-2区下層	S8611058 1層	炭化材	ムクノキ	
18	11-2区下層	S8611059	炭化材	広葉樹	
20	11-2区下層	S8611060	炭化材	エノキ属	
21	11-2区下層	S8611063	炭化材	ブナ科	PLD-36741
24	11-2区下層	S8611068 1層	炭化材	広葉樹	
26	11-2区下層	S8611069	炭化材	広葉樹	
27	11-2区下層	S8611070	炭化材	広葉樹	PLD-36745
33	11-2区下層	61層	炭化材	広葉樹	PLD-36749



1a-1c. ムタノキ (No. 15)、2a-2c. エノキ属 (No. 20)、3a-3c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 13)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第192図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

カーボンテープで固定した。その後、イオンスリットにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡 (KEYENCE 社製 VE-9800) にて検鏡および写真撮影を行なった。

B. 結果

同定の結果、広葉樹であるムクノキとエノキ属、コナラ属アカガシ亜属 (以下、アカガシ亜属) の3分類群が各1点みられた。また、試料の状態が悪く、ブナ科までの同定にとどめた試料が2点、広葉樹までの同定にとどめた試料が8点あった。同定結果を第29表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

① ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.)

Planch. アサ科 (第192図1a-1c (No15))

中型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、4列以上の帯状となる。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~4列となる。

ムクノキは温帯の日当たりのよい適潤地を好み、海に近い所に比較的多い落葉高木の広葉樹である。材の強さは中庸であるが、韌性があり、割裂しにくい。

② エノキ属 *Celtis* アサ科 (第192図2a-2c (No20))

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が方形となる異性で、幅1~5列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキヤシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

③ コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Cyclobalanopsis ブナ科 (第192図3a-3c (No13))

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放

射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では、道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシヤツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

④ ブナ科 *Fagaceae*

試料の状態が悪く、横断面のみの観察となった。年輪界は確認できなかったが、道管の形状と軸方向柔組織の形状でブナ科と判断した。

⑤ 広葉樹 *Broadleaf-wood*

試料の状態が悪く、横断面のみの観察となった。年輪界は確認できなかったが、道管が確認できたため広葉樹と判断した。

C. 考察

今回同定を行った炭化材は、縄文時代の遺構および基本層序中から採取されたものである。産出した炭化材は、ムクノキとエノキ属、アカガシ亜属、ブナ科、広葉樹であった。ムクノキとエノキ属、アカガシ亜属はいずれも堅硬な部類の樹種であるが、薪炭材としても多く利用される樹種である。また、遺跡の立地と樹種の生態性をふまえると、いずれの樹種も、朝見遺跡周辺に生育可能な樹種とみなされる (伊東ほか, 2011)。

(株式会社バレイオ・ラボ: 小林克也)

[引用・参考文献]

・伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂『日本有用樹木誌』238p 海青社 2011

(5) 種実同定

A. 試料と方法

試料は、水洗選別済み17試料である。分析試料の内訳は、1-2区の室町時代の井戸 (SE61033) から1試料 (試料No3)、1-1区の鎌倉時代後期の井戸 (SE61012) から1試料 (試料No1) と、平安時代後期の試料では1-1区の井戸 (SE61013) と

2区の井戸 (SE62015) から各1試料 (試料No.2、4)、11-3区上層の平安時代中期～後期の溝 (SD611001) から1試料 (試料No.29)、縄文時代後期前半の試料では11-2区下層の土坑SK611053、SK611055、SK611056、SK611057、SK611058、SK611059、SK611060、SK611068、SK611069からの計10試料 (試料No.5、8、10、12、14、16、17、19、23、25) と、柱穴Pit 4 (へ-Q19) から1試料 (試料No.28)、11-2区下層の縄文遺物包含層から採取された縄文時代後期以降の1試料 (試料No.30) である。

土壌の採取から水洗、種実等の抽出までの作業は、三重県埋蔵文化財センターによって行われた。水洗では、1.5～2.0mm目の篩を用いて種実等が回収された。水洗量は、不明である。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。

B. 結果

同定の結果、木本植物で広葉樹のモモ核・炭化核とクリ炭化果実・炭化子葉、イチイガシ炭化子葉、コナラ属コナラ節炭化子葉、コナラ属アカガシ亜属炭化子葉、オニグルミ炭化核、トチノキ炭化種子・炭化子葉、ムクロジ炭化種子、エゴノキ核の9分類

第30表 種実

分類群	時期	調査区									
		1-1区		1-2区		2区		11-2区下層			
		SR61012	SR61013	SR61033	SR62015	SK611053	SK611055	SK611056	SK611057	SK611058	SK611059
種別	2種	9種	—	—	—	—	—	—	—	2種	
試料No.	1	2	3	4	5	8	10	12	14	16	
分類群	時期	平安後期					縄文後期前半				
		鎌倉後期	平安後期	室町	平安後期	不明					
モモ	核	(1)	1		(2)						
クリ	炭化果実							(2)			
オニグルミ	炭化核					(5)		(4)	(31)	(18)	
トチノキ	炭化種子					(2)	(5)	(2)	(38)	(11)	
	炭化子葉							(4)		(3)	
ムクロジ	炭化種子							(1)	(1)		
エゴノキ	核			2							
同定不能	炭化種実					(1)				(2)	

分類群	時期	11-2区下層					11-2区上層		11-2区下層	
		遺構		P14 (へ-Q19)			遺文遺物包含層		遺文遺物包含層	
		SK611059	SK611060	SK611068	SK611069	SK611061	SK611062	SK611063	SK611064	
種別	4種	—	—	—	—	—	—	—	—	
試料No.	17	19	23	25	28	29	30			
分類群	時期	縄文後期前半					平安中期～後期		縄文後期以降	
							不明			
モモ	炭化核							(1)		
クリ	炭化子葉			(1)						
イチイガシ	炭化子葉								(2)	
コナラ属コナラ節	炭化子葉	(2)								
コナラ属アカガシ亜属	炭化子葉		(3)							
オニグルミ	炭化核	(2)		(5)		(2)		(7)		
トチノキ	炭化種子	(3)	(1)	(6)						

群が得られた。残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を、同定不能炭化種実とした (第30表)。

以下に、種実等の産出傾向を時期ごとに、遺構別に記載する (同定不能炭化種実を除く)。

【縄文時代後期前半】

SK611053：オニグルミとトチノキがわずかに得られた。

SK611055：トチノキがわずかに得られた。

SK611056：オニグルミとトチノキ、ムクロジがわずかに得られた。

SK611057：オニグルミとトチノキが少量、クリとムクロジがわずかに得られた。

SK611058：トチノキが少量、オニグルミがわずかに得られた。

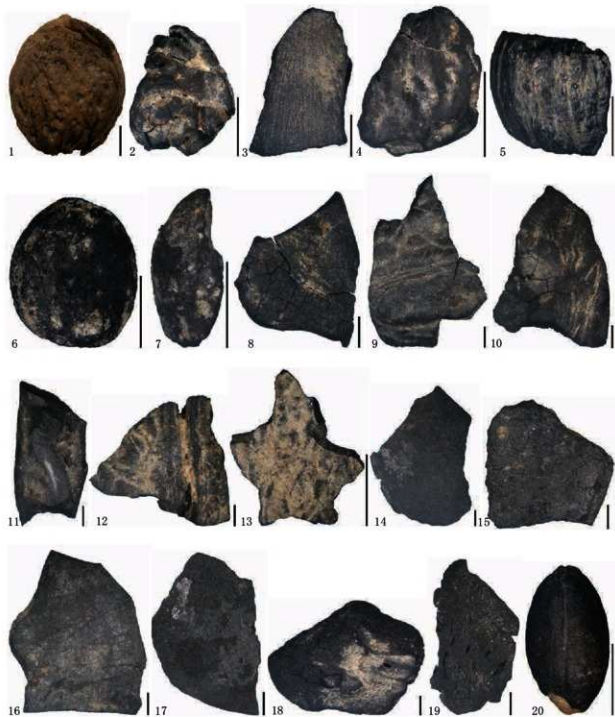
SK611059：オニグルミが少量、コナラ属コナラ節とトチノキがわずかに得られた。

SK611060：コナラ属アカガシ亜属とオニグルミ、トチノキがわずかに得られた。

SK611068：クリとオニグルミ、トチノキがわずかに得られた。

SK611069：オニグルミがわずかに得られた。

Pit 4：オニグルミがわずかに得られた。



スケール 1, 2, 4-7, 13, 20: 5mm 3, 8-12, 14-19: 1mm

1. モモ核 (SE61013, 9層, No. 2)
2. モモ炭化核 (SD611001, No. 29)
3. クリ炭化果実 (SK611057, No. 12)
4. クリ炭化子葉 (SK611068, No. 23)
5. コナラ属コナラ節炭化子葉 (SK611059, 4層, No. 17)
6. イチイガシ炭化子葉 (縄文遺物包含層, No. 30)
7. コナラ属アカガシ亜属炭化子葉 (SK611060, No. 19)
8. オニグルミ炭化核 (SK611053, No. 5, PLD-36732)
9. オニグルミ炭化核 (SK611057, No. 12, PLD-36736)
10. オニグルミ炭化核 (SK611060, No. 19, PLD-36740)
11. オニグルミ炭化核 (SK611058, No. 14, PLD-36737)
12. オニグルミ炭化核 (SK611069, No. 25, PLD-36744)
13. オニグルミ炭化核 (P1t4 (ハ-Q19), No. 28, PLD-36746)
14. トチノキ炭化種子 (SK611055, No. 8, PLD-36734)
15. トチノキ炭化種子 (SK611059, 2層, No. 16, PLD-36738)
16. トチノキ炭化種子 (SK611059, 4層, No. 17, PLD-36739)
17. トチノキ炭化種子 (SK611068, No. 23, PLD-36743)
18. トチノキ炭化子葉 (SK611057, No. 12)
19. ムクロジ炭化種子 (SK611056, No. 10, PLD-36735)
20. エゴノキ核 (SE61033, No. 3)

第193図 朝見遺跡から出土した種実

【縄文時代後期前半以降】

縄文遺物包含層：イチイガシがわずかに得られた。

【平安時代中期～後期】

SD611001：モモがわずかに得られた。

【平安時代後期】

SE61013：モモがわずかに得られた。

SE62015：モモがわずかに得られた。

【鎌倉時代後期】

SE61012：モモがわずかに得られた。

【室町時代】

SE61033：エゴノキがわずかに得られた。

次に、各分類群の記載を行い、第193図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠する。

① モモ *Amygdalus persica* L. 核・炭化核 バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側側面には縦合線に沿って深い溝が入る。高さ23.7mm、幅19.9mm、厚さ16.3mm。炭化核は、残存高11.3mm、残存幅9.2mm。

② クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実は完形ならば側面が広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面の殻斗着痕は残存していない。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。残存高3.6mm、残存幅2.2mm。子葉は、表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。残存高9.4mm、残存幅7.5mm。

③ コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* 炭化子葉 ブナ科

完形ならば長楕円体。表面には皺があり、コナラ属コナラ節のうち、全体の形状はミズナラまたはナラガシワに似るが、状態が悪いため、節以上の詳細な同定はできなかった。残存高10.0mm、残存幅10.0mm。

④ イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 ブナ科

楕円体～長楕円体、側面観は俵形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が1本確認できる。

高さ10.7mm、幅9.0mm。

⑤ コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Cyclobalanopsis 炭化子葉 ブナ科

完形ならば長楕円体。表面は滑らかであり、皺もなかった。イチイガシならば縦方向の溝が1本あるが、溝は確認できなかった。ただし破片であるため、イチイガシである可能性は否定できない。残存高9.2mm、残存幅5.0mm。

⑥ オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var.

sachalinensis (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

すべて破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖り、光沢がある。第193図に示した破片は、残存高5.0mm、残存幅4.0mm(試料No.5:PLD-36732)、残存高8.6mm、残存幅6.1mm(試料No.12:PLD-36736)、残存高7.3mm、残存幅4.3mm(試料No.19:PLD-36740)、残存高7.0mm、残存幅3.6mm(試料No.14:PLD-36737)、残存高6.2mm、残存幅6.5mm(試料No.25:PLD-36744)、残存高10.7mm、残存幅9.5mm(試料No.28:PLD-36746)。

⑦ トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子・炭化子葉 ムクロジ科

種子は完形ならば楕円形で、下半部は光沢がなく、上半部にはやや光沢がある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄く、やや硬い。種皮は3層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮の表面には指紋状の微細模様がある。図版に示した破片は、残存長8.8mm、残存幅6.5mm(試料No.8:PLD-36734)、残存長6.4mm、残存幅6.4mm(試料No.16:PLD-36738)、残存長7.1mm、残存幅6.2mm(試料No.17:PLD-36739)、残存長6.9mm、残存幅4.5mm(試料No.23:PLD-36743)。子葉は厚みがあり、大型の子葉の破片と推定できる。表面の輪郭の湾曲具合から、元の形は球形に近かったと推定できる。表面には皺や筋などは見られず、平滑。破片は不定形に割れる。残存高5.9mm、残存幅8.2mm。

⑧ ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 炭化種子 ムクロジ科

完形ならば球形。表面は平滑で木質。基部は平らでやや凹み、果実着痕が縦方向の溝となってみられ

る。種皮は厚い。残存長 6.9mm、残存幅 4.0mm。

⑨ エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.

核 エゴノキ科

黒褐色で、上面観は円形、側面観は倒卵形になる。下端に大きな着点がある。頂部から 3 本の浅い溝が走る。表面には細かい網目模様があり、壁は厚く硬い。長さ 10.7mm、幅 5.9mm。

C. 考察

種実を同定した結果、縄文時代と平安時代、鎌倉時代、室町時代の炭化種実を中心とした大型植物遺体が得られた。

以下、時期別に考察を行う。

① 縄文時代後期前半

11-2区下層で検出された土坑 SK611053、SK611055、SK611056、SK611057、SK611058、SK611059、SK611060、SK611068、SK611069 と 柱穴 Pit 4 (へ-Q19) からは、野生植物で食用として利用可能なクリとコナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、オニグルミ、トチノキ、ムクロジが得られた。

クリは食用になる子葉もわずかに得られており、保管中や調理中に炭化した可能性がある。破片 2 点が得られたコナラ属コナラ節は、その植生と大きさから判断して、ミズナラもしくはナラガシワの破片の可能性がある。また、破片 3 点が得られたコナラ属アカガシ亜属は、イチイガシかアカガシ、シラカシ、ウラジロガシ、アラカシ、ツクバネガシのいずれかの破片であるが、特徴がないため、同定はできなかった。

オニグルミは食用にならない核の破片が得られたため、加工後の残滓がなんらかの要因で炭化したと考えられる。トチノキは食べるにあたってアク抜きが必要である。利用できる部位である種子や子葉が出土しており、遺跡内でトチノキの加工が行われていた可能性を示している。ムクロジにはアクの成分であるサポニンが含まれているが、石鹸などに利用可能な種実で、種子を煮て食べることもでき、近現代の民俗例では薬用としても用いられている (長沢, 2012)。オニグルミとトチノキは、炭化した小さな破片が非常に多産しているため、加工後の残滓を燃やして土坑内に廃棄したか、炭化した残滓が土坑内に流れ込んだ可能性などが考えられる。いずれ

にせよ、種実は炭化しており、遺構に貯蔵された種実や自然の営力で落下した種実ではなく、人間活動に由来して、遺構周辺で火を伴う行為があり、炭化した残滓が堆積したと考えられる。

② 縄文時代後期前半以降

縄文遺物包含層から得られたイチイガシは、生食可能なドングリ類である。炭化しているため、加工時や保管中などに何らかの要因で炭化して、堆積したと考えられる。

③ 平安時代中期～後期

11-3区上層で検出された平安時代中期～後期の溝である SD611001 と、1-1区の平安時代後期の井戸 SE61013、2区の平安時代後期の井戸 SE62015 からは、栽培植物のモモが得られた。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を収集した新津 (新津, 1999) によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代では比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、奈良・平安時代の核長は 2.36～2.66cm で、鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなる。朝見遺跡の井戸 SE61013 から出土したモモ核は、高さ 2.37cm、幅 1.99cm、厚さ 1.63cm で、平安時代のモモ核としては平均的な大きさであった。ただし、計測可能な完形 1 点のみの検討であり、この 1 点が当時のモモ核の一般的な大きさであったかどうかは分からない。モモは時代とともに大型化して形状も変化するため、ある程度計測可能なモモ核が多数あれば、大きさの検討が可能である。

④ 鎌倉時代後期

1-1区の井戸 SE61012 からは、栽培植物のモモが得られた。モモは破片であったため、全体の大きさは不明である。

⑤ 室町時代

1-2区の井戸 SE61033 からは、エゴノキが得られた。井戸の周辺には、林縁など隣の当たる場所を好むエゴノキが生育していたと推定される。

(株式会社パレオ・ラボ)

パンダリ スダグシヤン・佐々木由香

【引用・参考文献】

・ 長沢 武 (2012) 野外植物民俗事典. 443p. ほおず

き書籍。

- ・ 新津 健(1999) 遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—。山梨考古学論集 IV, 361-374. 山梨県考古学協会。
- ・ 米倉浩司・梶田 忠(2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList). <http://ylist.info>

(6) 微化石(珪藻・花粉・植物珪酸体)分析

A. 方法

ここでは、微化石である珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析の結果について述べる

① 珪藻分析

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

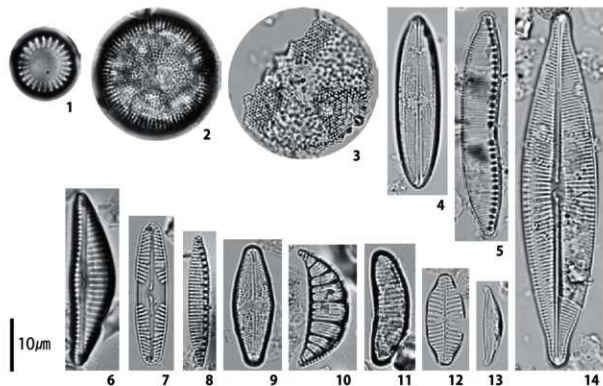
①: 湿潤重量約 1.0 g を取り出し、秤量した後ピーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反

応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

②: 反応終了後、水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 20 回ほど繰り返した。

③: 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで過量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下 600 ~ 1000 倍で観察し、プレパラートの 2/3 以上の面積について同定・計数した。顕微鏡は、三眼生物顕微鏡 オリンパス BX43 (珪藻) を使用した。珪藻殻は、完形と非完形 (原則として半分程度残っている殻) に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1 g 当たりの殻数を計算した。また、保存状態



1. *Cyclotella meneghiniana* (No. 34) 2. *Orthosira roeseana* (No. 45) 3. *Actinoptynchus senarius* (No. 45) 4. *Neidium ampliatus* (No. 41) 5. *Hantzschia amphioxys* (No. 52) 6. *Cymbella mesiana* (No. 45) 7. *Pinnularia subcapitata* (No. 41) 8. *Nitzschia frustulum* (No. 45) 9. *Luticola mutica* (No. 55) 10. *Rhopalodia acuminata* (No. 45) 11. *Eunotia* spp. (No. 38) 12. *Navicula elginensis* (No. 41) 13. *Amphora montana* (No. 45) 14. *Navicula cuspidata* (No. 43)

(括弧内の数字は試料番号を示す)

の良好な珪藻化石を選び、写真を第194図に載せた。

② 花粉分析

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混液を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製し、全面を鏡視した。顕微鏡は、三眼生物顕微鏡 オリンパス BH-2(花粉)を使用した。

③ 植物珪酸体分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、鏡視した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を

撮り、写真を第196図に載せた。

B. 結果

① 珪藻分析

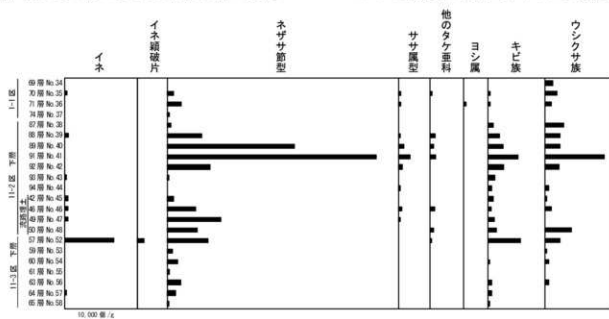
珪藻化石の環境指標種群 珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(小杉, 1988)および安藤(安藤, 1990)が設定し、千葉・澤井(千葉・澤井, 2014)により再検討された環境指標種群に基づいた。第194図に珪藻化石を示して同定根拠とするとともに、同定された種についての環境指標群とそれ以外の対応関係を結果表(第31表)に示す。

なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種(?)として、海~汽水種は海~汽水不定・不明種(?)として、汽水種は汽水不定・不明種(?)として、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。

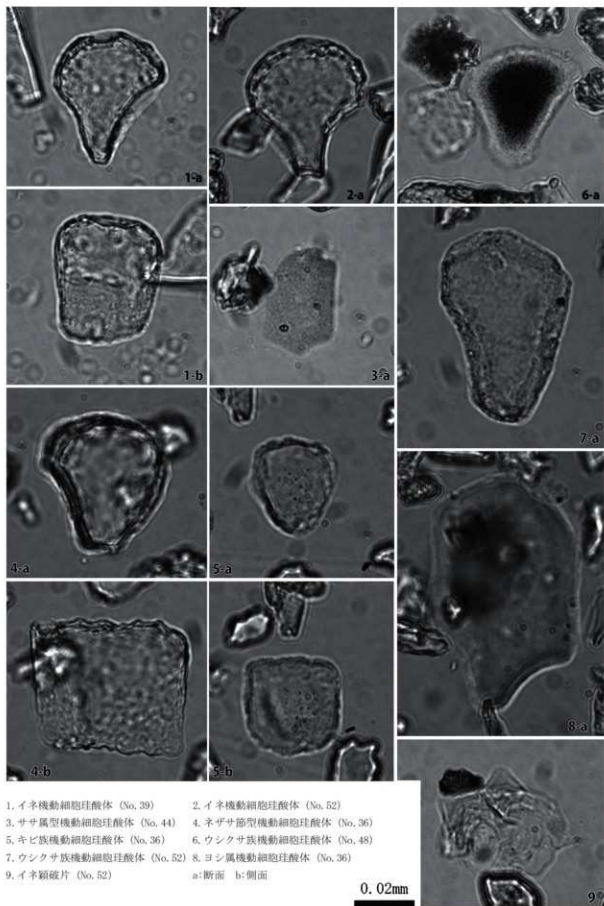
以下に、小杉(小杉, 1988)が設定した海水~汽水域における環境指標種群と、安藤(安藤, 1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す(第32表)。

結果 堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が2分類群2属2種、汽水種が1分類群1属1種、淡水種が33分類群19属21種であった(第31表)。

これらの珪藻化石は、海水域における1環境指標



第195図 植物珪酸体分布図



第196図 植物珪酸体

物中の珪藻殻数は全く含まれていないか非常に少ない。

環境指標種群では、陸生珪藻A群(Qa)、陸生珪藻B群(Qb)、高層珪藻指標種群(P)の淡水種と、海水藻場指標種群(C1)の海水種が検出された。

珪藻化石の残存状況から、基本的に乾燥した陸域環境の可能性が考えられる。

② 花粉分析

18試料の検鏡の結果、いずれの試料からも花粉は検出されなかった。

花粉が検出されなかったため、図表は作成していない。

③ 植物珪酸体分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第33表)、分布図に示した(第196図)。

22試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体(第

196図1・2)とネザサ節型機動細胞珪酸体(第196図4)、ササ属型機動細胞珪酸体(第196図3)、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体(第196図8)、キビ族機動細胞珪酸体(第196図5)、ウチクサ族機動細胞珪酸体(第196図7)の7種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。また、イネの初殻で形成される珪酸体の破片(イネ類破片)も確認された(第196図9)。

C. 考察

① 遺跡立地および基本層序の形成過程と微化石の産状

微化石分析は、調査区を構成する基本層序を中心に行われたが、ほとんどの試料で化石の保存状態が極めて不良であった。分析試料の層相と調査区周辺の地形をふまえると、このような微化石の産状は、遺跡の立地環境と密接に関わると予想される。したがって、ここでは、遺跡の立地環境の検討から、微化石の産状について考えていきたい。

第32表 珪藻化石の環境指標種群一覧表

【外洋指標種群 (A)】
塩分濃度が35‰～16以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。
【内湾指標種群 (B)】
塩分濃度が26～35‰以内の内湾水中を浮遊生活する種群である。
【海水藻場指標種群 (C1)】
塩分濃度が12～35‰以内の水域の海藻や海草(アマモなど)に附着生活する種群である。
【海水砂質干潟指標種群 (D1)】
塩分濃度が26～35‰以内の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に附着生活する種群である。この生育場所には、ウミナシ、キサゴ箱、アザリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。
【海水泥質干潟指標種群 (E1)】
塩分濃度が12～30‰以内の水域の泥底に附着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナシ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。
【汽水藻場指標種群 (C2)】
塩分濃度が14～12‰以内の水域の海藻や海草に附着生活する種群である。
【汽水砂質干潟指標種群 (D2)】
塩分濃度が15～26‰以内の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に附着生活する種群である。
【汽水泥質干潟指標種群 (E2)】
塩分濃度が12～12‰以内の水域の泥底に附着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性沼地に生活するものである。
【上流性河川指標種群 (J)】
河川の上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによっては取られてしまうことがない。
【中～下流性河川指標種群 (K)】
河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、新またはさやで基物に附着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。
【最下流性河川指標種群 (L)】
最下流部の三角洲の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種も生育できるようになるためである。
【湖沼浮遊生指標種群 (M)】
水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。
【湖沼沼沢地指標種群 (N)】
湖沼における浮遊生種としても、沼沢地における附着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢地の環境を指標する可能性が大きい種群である。
【沼沢地附着生指標種群 (O)】
水深1m以内で、一部に植物が繁殖している所および沼地において、附着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
【高層珪藻指標種群 (P)】
尾瀬ヶ原層や霞ヶ峠層などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
【陸域指標種群 (Q)】
上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれる)。
【陸生珪藻A群 (Qa)】
朝鮮性の地味特長のグループである。
【陸生珪藻B群 (Qb)】
A群に隣接し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

本遺跡は、柳田川左岸の沖積氾濫原面上に立地している(第197図)。調査区を構成する基本層序は、粒度分析結果から、上面で古代以降、下面で縄文時代の遺構が検出される基本的に層状をなして累重する極細粒砂～細粒砂混じりのシルトを主体とする砕屑物(以下、シルト層とする)からなる。粒度組成や堆積状況および立地環境から、基本層序は河川の浮遊洪水堆積物と解釈される。分析地点周辺の基本層序については、三重県埋蔵文化財センター(2016)によって詳しく検討されている。これによると、分析層序となった泥質砂を中心として、所々で砂層を挟む堆積層は、現地表面下から2～1m前後の層厚で側方へ広く連続して累重する。そして、その直下には、砂礫が5～7m前後厚く堆積している。この砂礫層は、今回の発掘調査地点でも、基本層序の最下部付近で確認されている。

今回の調査地点は、柳田川が臨海部に広がる平野に出る谷口に近い場所に存在しており、付近の等高線が扇形に張り出すようにして分布する。このような地形をふまえると、遺跡周辺の沖積面は、沖積扇状地の氾濫原をなすと解釈される。

調査区の構成する基本層序のうち、底部に厚く累重する砂礫のうち上部のものは、三重県埋蔵文化財センター(三重県埋蔵文化財センター,2016)によ

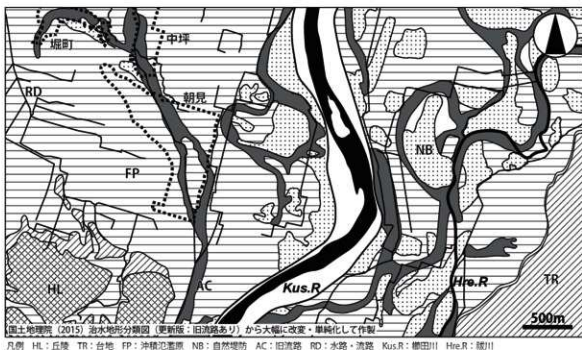
り、沖積層に区分されることから、沖積扇状地面を構成する主要な堆積物と解釈される。調査区の沖積層の基盤に砂礫層が厚く累重することからも、遺跡周辺の沖積面が扇状地であることが支持される。

また、上記の砂礫を薄く覆って、調査区では、今回微化石分析を実施したシルト層の基本層序が累重する。このシルト層は、活発な堆積領域が移動して、この場所での扇状地形成が終了しつつある離水傾向が強まった段階に堆積した浮遊洪水堆積物と考えられる。上記した年代測定の結果と、テフラ分析の結果から、堆積時期は、縄文時代早期以降から縄文時代中期末～後期前半頃と確認できる。調査区では、縄文時代早期後葉頃に調査区周辺の氾濫原の堆積環境が安定し、シルト層の累重時期である縄文時代早期以降から縄文時代中期末～後期になると、氾濫原面において離水傾向が強まり、さらに縄文時代後期前半以降にはほぼ離水が完了したと推定される。

11-2区下層の試料№44～38(94-91層、89層、87層、86層)の植物珪酸体分析では、砂礫層の試料№44(94層)から暗色帯をなす古土壌の試料№41(91層)の上位に向けて産出量が急増する。このような産出量の層位的変化は、層相と相関しており、土壌発達が進む安定した地表となった試料№41(91層)で、堆積速度の低下により堆積層中

第33表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ類 破片 (個/g)	ネギ子殻型 (個/g)	ササ葉型 (個/g)	他のタケ 類科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キジ属 (個/g)	ウシタケ属 (個/g)	ポイント 型珪酸体 (個/g)	不明 (個/g)
1-1区	No. 34	0	0	0	0	0	0	4,500	0	0
	No. 35	1,200	0	3,500	1,200	1,200	0	1,200	7,100	0
	No. 36	0	0	8,100	1,200	0	1,200	1,200	3,500	0
	No. 37	0	0	1,100	0	0	0	0	0	0
	No. 38	0	0	2,000	0	0	0	3,000	11,000	0
11-2区 下層	No. 39	2,000	0	20,500	1,000	2,900	0	6,800	8,800	3,900
	No. 40	0	0	75,500	2,900	2,900	0	8,800	8,800	3,900
	No. 41	0	0	124,200	6,600	3,300	0	17,600	35,200	1,100
	No. 42	0	0	25,400	2,000	0	0	5,100	8,100	1,800
	No. 43	1,000	0	1,800	0	0	0	4,000	0	2,000
	No. 44	0	0	0	1,000	0	0	2,000	2,000	0
	No. 45	1,900	0	3,800	0	0	0	2,900	1,000	1,000
	No. 46	1,900	0	16,700	1,900	2,800	0	1,900	3,000	0
	No. 47	1,900	0	31,800	1,000	0	0	3,800	0	2,900
	No. 48	0	0	17,700	0	2,000	0	4,900	15,700	0
11-3区 下層	No. 52	26,900	3,900	24,100	0	1,000	0	19,300	8,700	1,900
	No. 53	0	0	3,100	0	0	0	0	1,000	0
	No. 54	0	0	6,100	0	0	0	1,000	2,000	0
	No. 55	0	0	1,100	0	0	0	0	0	0
	No. 56	0	0	7,800	0	0	0	2,200	2,200	1,100
	No. 57	1,000	0	5,900	0	0	0	2,000	0	0
No. 58	0	0	1,800	0	0	0	1,000	0	0	



凡例 HL:丘陵 TR:台地 FP:沖積氾濫原 NB:自然堤防 AC:旧流路 RD:水路・流路 Kus.R:櫛田川 Hne.R:瀬川

第197図 遺跡周辺の地形分類図

に植物珪酸体が蓄積されたと考えられる。縄文時代後期の遺構検出面をなす試料No.41の直上の試料No.40(89層)でも産出量が多く、当該層準においても相対的に地表環境がかなり安定していたことが確認される。試料No.40を被覆する試料No.39(88層)になると、産出量が急減する。本層は、縄文時代後期の遺構基盤層をなす堆積層とされる。発掘結果と植物珪酸体分析結果をふまえると、今回の調査区付近では、縄文時代後期前半もしくは中期末～後期前半のある段階に、氾濫原において洪水堆積物が流入して、地表環境が不安定化するような時期が存在していた可能性が示唆される。試料No.39を埋没させる縄文時代後期前半以降の試料No.38(87層)では、産出量がさらに減少しており、不安定な地表環境がこの段階まで継続していたことがうかがわれる。

今回の基本層序では、暗色帯をなす層準の上位に累重するシルト層を主体に微化石分析が行われている。この層準のシルト層では、上述の11-2区下層だけでなく、1-1区(試料No.37-34)や11-3区下層(試料No.58-52)でも分析が実施されている。これらの試料では、11-2区の試料No.38(87層)と同様に保存状態が不良で産出量も少ない。今回の調査区では、古代の遺構検出面の下位のシルト層を主体とする層準が、一般的な傾向として上位ほどシ

ルト層に砂が多く含まれることが認識される。報告者のこれまでの分析経験から、植物珪酸体はシルトと挙動をともにする可能性が認識される。上位の砂が多く含まれるシルト層では、植物珪酸体が堆積層中に取り込まれにくい堆積・土壌環境下にあったことが想定される。

上述のような特徴が示される基本層序のシルト層では、下部に透水性の高い砂礫が厚く堆積する。さらに、地形的には、下部の砂礫層とシルト層の累重により、高燥な微高地をなす層状地面を形成している。このため、シルト層の形成段階に調査区周辺では、有機物の分解・消失が進行する好気的な地表環境が維持される状態であったと解釈される。暗色帯上位のシルト層では、植物遺体が挟在せず、土色も酸化傾向を示す黄灰色系を示す領域が多く、このような層相からも好気的な地表環境下にあったことが示唆される。この解釈については、今回実施した基本層序のシルト層の微化石、特に花粉化石と珪藻化石の保存状態が非常に不良であったことから支持される。花粉および珪藻化石の保存は、埋没過程および埋没後の土壌環境が水浸かりとなる嫌氣的(還元)状態でも良く、大気に常時曝されるような好気的(酸化的)状態で相対的に不良となる傾向がある(松井, 2003)。上記の微化石の風化・消失に関わる

一般的傾向と上述の調査区の地形・地質的特徴にもとづくと、シルト層に含まれる花粉および珪藻化石は、好気的な地表環境下において風化・消失が進行したと捉えられる。

植物珪酸体については、花粉・珪藻化石よりも風化に耐性が強いとされるが、上述のように保存状態が不良なものが目立つとともに産出量が全体に低い傾向を示す。基本層序のシルト層の植物珪酸体群集については、乾燥地を好むタケ亜科のネザザ節型が目立つ組成をなす試料が多く、湿潤地を好むヨシ属がほぼ産出しないことから、遺跡周辺において基本的に高燥な地表環境が広がっていたと解釈される。このような場所には、多産傾向にある種類にもとづくと、ネザザ節のササ類やキビ族、ウシクサ族などのイネ科植物が生育していたとみられる。また、縄文時代後期の遺構検出面構成層や包含層をなすその下位層では、開けた場所を好むウシクサ族の産出が目立つことにも着目される。この段階の古植生については、植物化石の保存状態が非常に不良で詳細な検討を行えないが、植物珪酸体分析結果にもとづくと、貯蔵穴などが多く検出されている流路沿いを中心に開けた植生景観が展開していた可能性が示唆される。

以上、述べてきた今回の微化石分析結果からは、保存状態が不良で調査区付近の縄文時代から古代頃までの十分な古環境復元が行えない。ただし、その産状に関しては、上記のような遺跡周辺の地形発達史と密接に関連するものとして捉えられ、このような観点から分析結果を評価することが可能である。

② 調査区周辺で検出された埋没流路について

本遺跡内には、地割からも明瞭に確認される埋没旧流路（以下、旧流路とする）が流下している。旧流路については、発掘調査が実施されており、奈良時代頃から鎌倉時代前後にかけて機能および埋没することが明らかにされている（櫻井編, 2016）。また、この旧流路では、流路の埋積層において、砂を挟在するものの砂礫がほぼ認められず、シルトや粘土の泥質堆積物を主体とする埋没状況であることが櫻井編（櫻井編, 2016）などの記載から読み取れる。このような流路の層相やその埋没過程は、旧流路が柳田川の主要な分流路ではなく、主流路の流路移動や切

断によって切り離された放棄流路（増田・伊勢屋, 1985）や、洪水流の侵食によって形成された氾濫流路（増田, 2018）の特徴を有している。一般的に沖積扇状地面上では、本流の転流などによって切り離されたり、地形面が離水傾向へと転じたことを契機として、それまで本流であった流路への河川水と堆積物の供給が激激に減少して、穏やか河川堆積作用に変化するとともに、流路も固定的となる放棄流路や氾濫流路が形成されやすい。特に、本流転流後にその旧流路内を流れる河川は、名残川と呼ばれ、転流（流路変更）や流路切断が生じやすい扇状地でよくみられる地形とされる（鈴木, 1998）。

本遺跡内を流下する旧流路については、直線状をなしており、柳田川右岸の蔵川沿いを中心に広く分布する蛇行が著しい流路痕跡と形態が大きく異なる。遺跡周辺では、上記のことから、縄文時代後期前後以降に離水傾向をさらに強めたことが指摘される。このような流路痕跡の微地形および流路内とその基盤層の堆積層の特徴をふまえると、旧流路は名残川に相当するものであることが推定される。名残川では、地表水が集積するとともに地下水でも涵養されるため、流路の堆積環境が穏やかで、大規模な洪水が起こりにくく、一定量の水量が見込まれることから、灌漑など農業的利用に適した流路となる（鈴木, 1998）

これまでの発掘調査において、朝見遺跡とこの北東方向に続く中坪遺跡、堀町遺跡では、旧流路沿いで古代から中世の活発な人間活動や灌漑水路の掘削などが確認されている（三重原理蔵文化財センター, 2015）。上述の流路痕跡の分布から、柳田川右岸の氾濫原は、河川の地形および堆積作用が激しく、不安定であったとみなされる。いっぽうで、柳田川左岸の朝見遺跡とその周辺遺跡が載る氾濫原面は、柳田川右岸よりも相対的に堆積環境がかなり安定的であったことが、調査区周辺の地形や基本層序の形成過程からも確認できる。このような場所での耕作地の開発等の人間活動にとって、名残川をなす旧流路は、水供給の基幹として重要な存在であったとみなされる。本遺跡周辺の耕作地の開発、特に水田の構築とその維持・管理については、旧流路内を流下する河川水の水量に強く依存していたと思われる。

ただし、灌漑については、現地表の水路網において見られるように、南側に存在する丘陵部分の開析谷からも古代以降のある段階で水路が整備されたことが想像される。上述の遺跡の地形・地質学的検討から、遺跡周辺の沖積氾濫原は、非常に安定的で耕作地開発を行いやすい領域であることが指摘できる。しかし、名残川の可能性のある旧流路や後背の丘陵地ともに水の涵養量が大きくないことが予想され、耕作地開発の維持・管理の基礎となる水の供給量については、一定の限界が生じやすい地域であったとみなされる。今後は、本地域の水文学的な検討も併せて、古代以降の人間活動について検討していくことが課題と認識される。

上記のような性質を有する調査区付近で検出されている埋没流路では、11-2区下層において埋土(試料№48-45)の分析が行われている。埋没流路の埋土の微化石では、珪藻、花粉化石の保存状態が極めて不良であり、化石群集から流路内の詳細な埋没環境を検討することが不可能である。微化石の産状からは、流路内において一定期間安定した滞水域や排水不良の湿地が形成されるような状況でなかったことが推定される。このような堆積環境については、流路埋土からヨシ属が産出しないことから推測される。また、流路埋土では、最下層付近の試料№48(50層)を除き、層位的に上方へ連続して試料№47~45(49層、46層、42層)において栽培種のイネが産出する。この時期には、流路の集水域に水田や人間によってイネが持ち込まれるような居住域などが存在していたことが推定される。また、11-3区下層の平安時代の遺構基盤層をなす試料№52(57層)では、イネ機動細胞珪酸体の多産とともにイネ類破片の産出も認められる。イネ属の産状にもとづくと、本層は水田耕作土の可能性が示唆される。ただし、57層が水田耕作土であると認定するにあたっては、現状において、洪水等による植物珪酸体の再堆積や人為的な廃棄等によって集積したイネが含まれる可能性の確認や、57層段階に調査区付近で水田耕作が行えるような微地形であったなど検証すべき点が多い。このため、今回の分析結果については、堆積・土壌構造の観察や発掘調査結果をふまえ、さらに検討を進めていくことが課題と認

識される。

この他、試料№35(70層)、試料№39(88層)、試料№43(93層)、試料№57(64層)からも、イネ属の産出している。試料№57(64層)については、層位的に明らかに縄文時代中後期である可能性が高く、なんらかのコンタミネーションであることが強く疑われる。他の試料についても、発掘調査結果等との対照を行い評価していく必要があると思われる。

これまで述べてきた微化石の産状と、調査区周辺の地形勾配をふまえると、流路の機能段階には、河床の排水性が良く、そこを流下する河川水の流速も比較的速かったことが想定される。また層相から、埋没へ転じた段階には、堆積環境が不安定になり、泥質の浮遊堆積物の埋積が進行したことも推測される。埋没流路の埋土の微化石の保存状態の悪さは、このような流路内の堆積環境を反映していることが疑われる。

ところで、今回報告する調査区では、縄文時代後期前半前後の貯蔵穴が多く検出されている。これらの遺構は、埋没流路沿いに存在することが発掘調査によって確認される。発掘調査結果から、本遺跡内に存在する旧流路については、縄文時代に相当するものも存在することがうかがわれる。流路沿いに貯蔵穴が展開する状況は、岡山県岡山市の旭川扇状地表面上に立地する津島岡大遺跡において、縄文時代後期初頭から中葉の様相が詳細な地形復元にもとづき明らかにされており(山本ほか、2018)、先行研究により類似した立地環境が存在することが確認される。貯蔵穴埋土の植物残渣として同定された炭化種実と炭化材は、いずれも河畔林要素を多く含んでおり、埋没地形から推定される植生環境とも相関する結果が得られている。ただし、貯蔵穴の埋土の水洗別では、未分解の植物遺体が回収されておらず、すべて炭化したものであった。このような産状にもとづくと、貯蔵穴の機能期の主体をなす縄文時代後期前半には、調査区周辺の地下水位が低く、好気的な地表環境領域が広がっていたことが推測される。

(株式会社パレオ・ラボ)

森 将志・野口真利江・辻 康男)

【引用・参考文献】

- ・ 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- ・ 千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標種の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.
- ・ 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- ・ 松井 章 (2003) 環境考古学の歴史と実践. 環境考古学マニュアル, 同成社, 6-16.
- ・ 増田富士雄 (2018) 京都府南部、城陽市下水主遺跡の発掘調査で見いだされた弥生時代の氾濫流路とその埋積物. 新名神高速道路整備事業関係遺跡下水主遺跡第1・4・6次. (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 247-255.
- ・ 増田富士雄・伊勢原ふじこ (1985) “逆グレーディング構造” 自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報 22-23, 108-116.
- ・ 三重県埋蔵文化財センター編 (2015) 水と大地といにしえのふもと—松阪市朝見地区の発掘調査から—, 30p. 三重県埋蔵文化財センター.
- ・ 櫻井拓馬編 (2016) 堀町遺跡 (第5次) 発掘調査報告. 三重県埋蔵文化財センター, 208p.
- ・ 鈴木隆介 (1998) 建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地. 古今書院, 554p.
- ・ 山本悦世・山口雄治・鈴木茂之, 2018, 縄文時代の

海岸線復元と遺跡動態—岡山平野のポーリング調査を踏まえて—, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター, 7p.

(7) リン・カルシウム分析

A. 試料と方法

分析対象となる試料は、縄文時代後期前半の埋設土器内から採取した埋土2点 (試料No.50・51) と、比較試料として採取された遺構周辺の堆積物 (縄文後期の遺構基盤層) 2点 (試料No.41・49) の、計4点である。

分析は、藤根ほか (藤根・佐々木・中村, 2008) の方法に従って行った。この方法は、リン、カルシウムを多く含む箇所を元素マッピングにより面的に検出し、直接測定できるという利点がある。測定試料には、試料を乾燥後、極細粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である (株) 堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム (Rh) ターゲット、X線ビーム径が100 μmまたは10 μm、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得

第34表 半定量分析結果

No.	試料	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
41	a	0.65	25.04	60.44	0.88	0.18	2.33	1.09	0.86	0.17	8.32	0.01	0.01	0.01	0.02
	b	1.83	25.23	56.82	1.02	0.26	1.93	2.28	1.00	0.12	9.48	0.01	0.01	0.01	0.02
	c	1.73	23.36	62.30	0.69	0.16	1.96	1.32	1.04	0.10	7.30	0.01	0.01	0.01	0.02
	d	1.15	24.14	59.95	0.50	0.18	2.06	1.98	1.19	0.13	8.66	0.01	0.01	0.01	0.03
	e	0.49	25.39	57.95	0.74	0.24	2.28	1.42	1.15	0.26	10.03	0.01	0.01	0.01	0.02
49	a	0.86	17.69	45.13	13.25	0.02	2.23	14.33	0.69	0.20	5.56	0.02	0.01	0.01	0.02
	b	2.84	21.11	63.98	0.19	0.07	2.71	0.86	1.01	0.25	6.94	0.01	0.01	0.00	0.02
	c	2.34	22.48	64.34	0.12	0.11	3.23	0.81	0.94	0.18	5.43	0.00	0.01	0.01	0.01
	d	1.48	23.48	61.52	0.60	0.10	3.20	0.70	1.14	0.17	7.58	0.01	0.01	0.01	0.02
	e	1.85	18.76	69.29	0.25	0.07	3.40	1.07	0.52	0.16	4.61	0.01	0.01	0.01	0.00
50	a	1.44	19.46	64.01	0.30	0.04	2.62	1.65	3.58	0.13	6.73	0.01	0.01	0.00	0.01
	b	1.73	20.67	64.26	0.26	0.06	3.12	0.88	0.81	0.40	7.77	0.01	0.01	0.01	0.01
	c	2.23	21.66	55.08	0.18	0.15	2.90	0.82	0.91	8.38	7.66	0.01	0.01	0.00	0.02
	d	0.36	21.64	63.17	0.15	0.02	2.94	0.70	3.44	0.19	7.35	0.01	0.01	0.00	0.02
	e	2.12	22.56	60.64	0.00	0.08	2.70	1.63	1.25	0.14	8.82	0.01	0.01	0.01	0.00
51	a	0.00	28.18	48.26	12.86	0.12	1.40	1.11	1.69	0.01	6.34	0.01	0.01	0.00	0.02
	b	1.47	20.75	63.46	1.33	0.13	2.73	0.96	0.66	0.27	8.19	0.01	0.01	0.01	0.02
	c	2.98	19.64	61.61	2.17	0.12	2.29	2.68	0.56	0.18	7.73	0.01	0.01	0.01	0.02
	d	1.04	20.35	64.54	1.37	0.14	2.54	1.20	0.66	0.19	7.93	0.01	0.01	0.00	0.02
	e	2.90	22.97	61.83	0.24	0.14	3.78	0.55	0.94	0.17	6.44	0.01	0.01	0.01	0.02

る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン (P) のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 6000s、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では 50kV、0.10 ~ 0.36mA (自動設定)、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

B. 結果

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各 5ヶ所 (a ~ e) の位置を示した図を第 198 図に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素の半定量値を第 34 表に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

分析の結果、91 層の黒色土 (試料 No. 41) はリン (P_2O_5) が 0.50 ~ 1.02%、カルシウム (CaO) が 1.09 ~ 2.28%、SX611051 ベース層 (試料 No. 49) はリン (P_2O_5) が 0.12 ~ 13.25%、カルシウム (CaO) が 0.70 ~ 14.33%、SX611051 埋設土器内の埋土 (試料 No. 50) はリン (P_2O_5) が 0.00 ~ 0.30%、カルシウム (CaO) が 0.70 ~ 1.65%、SX611052 埋設土器内の埋土 (試料 No. 51) はリン (P_2O_5) が 0.24 ~ 12.86%、カルシウム (CaO) が 0.55 ~ 2.68% の値を示した。

C. 考察

骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $Ca_5(PO_4)_3OH$ が主成分であり、すなわち蛍光 X 線分析ではリン (P) とカルシウム (Ca) がともに高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要がある、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光 X 線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみの検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には

骨が存在していても、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からピビアナイト $Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$ が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。

今回分析した埋設土器内埋土の試料のうち、SX611052 の埋設土器内埋土 (試料 No. 51) は、リンが明らかに多い箇所 (ポイント a) やリン、カルシウム共に約 1 ~ 3% とやや多く含まれる箇所 (ポイント b ~ d) が検出された。これらは骨や歯に由来する可能性がある。ただし、比較試料である周辺土 (試料 No. 41, 49) においても、リン、カルシウム共に明らかに多く含まれ、骨や歯に由来する可能性の高い箇所 (試料 No. 49 ポイント a) や、SX611052 の埋設土器内埋土 (試料 No. 51) と同様にリン、カルシウム共に約 1 ~ 2% とやや多く含まれる箇所 (試料 No. 41 ポイント a, b) が検出されており、その由来には注意が必要である。

SX611051 の埋設土器内埋土 (試料 No. 50) は、リンが最大でも 0.30% と少なく、リンが明らかに多い箇所は検出されなかった。

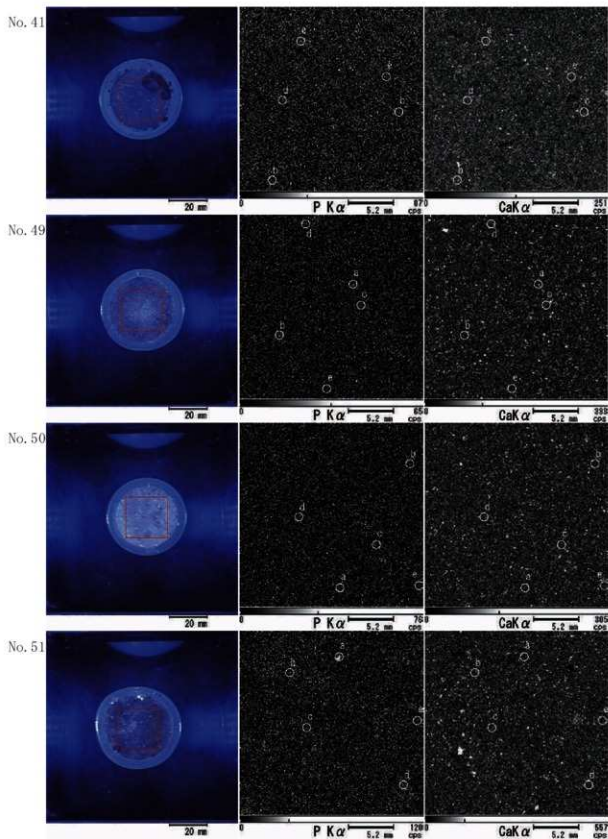
D. おわりに

縄文時代後期前半の埋設土器内の埋土 2 点について分析を行った結果、SX611052 の埋設土器内埋土 (試料 No. 51) からはリン・カルシウム共にやや多く含まれる箇所が検出され、骨や歯が存在した可能性が示された。ただし、周辺土からもリン、カルシウム共に明らかに多い箇所が検出されており、その解釈には注意が必要である。遺構の性格については、他の自然科学分析の結果および遺物の出土状況や類型など考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

(株式会社バレオ・ラボ: 竹原弘展)

[引用・参考文献]

- ・ 藤根 久・佐々木由春・中村賢太郎 (2008) 蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析。日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集、108-109。



第198図 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図

7. 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

本報告では、朝見遺跡（第6次）調査の各調査区の基本層序と遺構の年代決定を目的として実施されたC14年代測定結果について述べていく。

(2) 方法

測定試料の情報、調製データは第35表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオラボ、コンパクトAMS；NEC製15SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

なお、年代試料となった種実および炭化材については、試料写真を第199図に示した。

(3) 結果

第36表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、第200図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線デー

タ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

A. 土坑・ピットの年代

出土遺物から縄文時代後期前半と考えられる土坑およびピットから検出された炭化種実と炭化材片の多くは、2050 cal BC～2500 cal BC前後の暦年代の範囲に収まる（第201図）。幡中（幡中、2012）によると、この暦年代値は、縄文時代後期初頭～前葉に対比され、出土遺物とも調和的な年代値であると評価される。

いっぽうで、炭化材片の試料No.7とNo.22では、相対的に古い年代値（試料7：2830-2490 cal BC、試料No.22：3390-3820 cal BC）が得られている。このような年代値を示す試料は、古い時代の燃焼物の再堆積とみなされる。

ただし、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち炭化材は、すべて最終形成年輪を欠く部位不明である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

なお、暦年代値からは、試料No.5、試料No.14、試料No.16は、試料No.7と試料No.22を除く、他の試料群と比較してやや新しい年代を示すことが認識される。この点の評価については、出土遺物や発掘状況をふまえ、さらに検討が必要と認識される。

B. 基本層序の年代

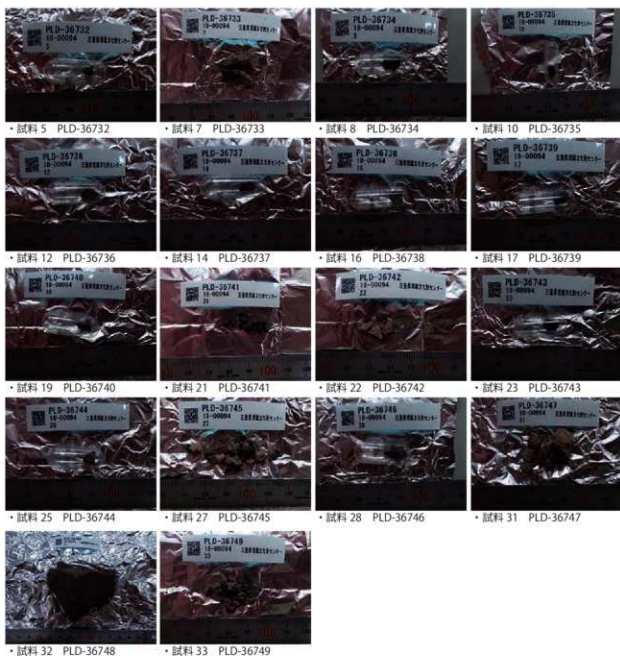
試料No.32（91層）は、基本層序に挟む古土

壤をなす暗色帯の腐植の年代測定が行われており、7500～7400年前の暦年代が得られている。後述する火山灰分析の結果では、本層から一次的なテフラ層ではないと判断されるものの、噴出年代の暦年代が約7300年前の鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)が暗色帯に多く含まれることが確認される。以上のことから、放射性炭素年代測定と火山灰分析結果は、互いに調和的な結果とみなされる。

上記の暗色帯は、縄文時代中期末から後期の遺構・遺物が検出される浮遊洪水堆積物で被覆される。試

料No.33(61層)は、この浮遊洪水堆積物から採取された炭化材片であるが、1300-1430 cal BC (3250-3380 cal BP)と、包含および上面付近で検出される遺構出土の遺物から示される絶対年代よりもかなり新しい年代値を示す。このことから、本試料は、上位からのコンタミネーションと判断される。

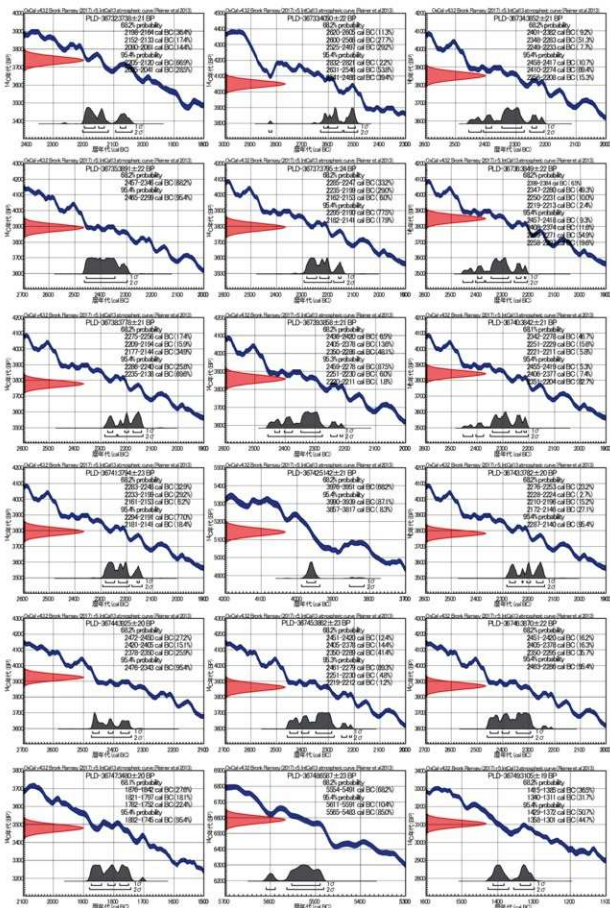
試料No.31については、基本層序を下方侵食する流路埋土の下部付近の埋積層(49層)から採取した炭化材である。本試料は、1880-1750 cal BC (3830-3700 cal BP)と基本層序中で検出される縄



第199図 炭化材の年代測定試料写真

第35表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36732	遺構：SK611053 調査区：11-2区下層 試料 No.5	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36733	遺構：SK611054 調査区：11-2区下層 層位：3層 試料 No.7	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） 処理備考：土戻じり、状態悪い ガス化備考：薪物混じり
PLD-36734	遺構：SK611055 調査区：11-2区下層 試料 No.8	種類：トナノキ炭化種子 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36735	遺構：SK611056 調査区：11-2区下層 試料 No.10	種類：ムクロジ炭化種子 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36736	遺構：SK611057 調査区：11-2区下層 試料 No.12	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36737	遺構：SK611058 調査区：11-2区下層 試料 No.14	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36738	遺構：SK611059 調査区：11-2区下層 層位：2層 試料 No.16	種類：トナノキ炭化種子 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36739	遺構：SK611059 調査区：11-2区下層 層位：4層 試料 No.17	種類：トナノキ炭化種子 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36740	遺構：SK611060 調査区：11-2区下層 試料 No.19	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36741	遺構：SK611063 調査区：11-2区下層 試料 No.21	種類：炭化材（ブナ科） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36742	遺構：SK611066 調査区：11-2区下層 試料 No.22	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N） 処理備考：土戻じり、微量、状態悪い ガス化備考：薪物混じり
PLD-36743	遺構：SK611068 調査区：11-2区下層 試料 No.23	種類：トナノキ炭化種子 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36744	遺構：SK611069 調査区：11-2区下層 試料 No.25	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36745	遺構：SK611070 調査区：11-2区下層 試料 No.27	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い？
PLD-36746	遺構：Pn4 (Q19) 調査区：11-2区下層 試料 No.28	種類：オニゲルミ炭化核 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36747	調査区：11-2区下層 層位：49層 試料 No.31	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N） 処理備考：土戻じり、微量、状態悪い ガス化備考：薪物混じり
PLD-36748	調査区：11-2区下層 層位：91層 試料 No.32	種類：土壌（ヒューミン） 試料の性状：その他 状態：dry	湿式篩分：106 μ m 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36749	調査区：11-3区下層 層位：61層 試料 No.33	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 鹽：アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N） 処理備考：土戻じり、状態悪い ガス化備考：薪物混じり



第200圖 曆年校正結果

第36表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-36732 試料No. 5	-30.36 \pm 0.21	3738 \pm 21	3740 \pm 20	2198-2164 cal BC (36.4%) 2152-2133 cal BC (17.4%) 2090-2061 cal BC (14.4%)	2205-2126 cal BC (66.9%) 2095-2041 cal BC (28.3%)
PLD-36733 試料No. 7	-27.71 \pm 0.18	4050 \pm 22	4050 \pm 20	2620-2605 cal BC (11.2%) 2600-2566 cal BC (37.7%) 2525-2497 cal BC (29.2%)	2632-2621 cal BC (2.2%) 2631-2546 cal BC (53.9%) 2541-2488 cal BC (29.4%)
PLD-36734 試料No. 8	-26.35 \pm 0.20	3852 \pm 21	3850 \pm 20	2401-2382 cal BC (9.2%) 2348-2283 cal BC (51.3%) 2249-2233 cal BC (7.7%)	2458-2417 cal BC (10.7%) 2410-2274 cal BC (69.4%) 2256-2208 cal BC (15.3%)
PLD-36735 試料No. 10	-28.18 \pm 0.19	3891 \pm 22	3890 \pm 20	2457-2346 cal BC (68.2%)	2465-2299 cal BC (95.4%)
PLD-36736 試料No. 12	-27.08 \pm 0.17	3849 \pm 22	3850 \pm 20	2399-2384 cal BC (6.3%) 2347-2286 cal BC (44.3%) 2250-2231 cal BC (10.0%) 2219-2213 cal BC (2.4%)	2457-2418 cal BC (9.3%) 2408-2254 cal BC (11.6%) 2369-2271 cal BC (54.9%) 2258-2207 cal BC (19.4%)
PLD-36737 試料No. 14	-28.60 \pm 0.32	3795 \pm 24	3795 \pm 25	2265-2247 cal BC (33.2%) 2235-2199 cal BC (29.0%) 2162-2153 cal BC (6.0%)	2295-2190 cal BC (77.5%) 2182-2141 cal BC (17.9%)
PLD-36738 試料No. 16	-27.18 \pm 0.20	3778 \pm 21	3780 \pm 20	2275-2256 cal BC (17.4%) 2209-2194 cal BC (15.9%) 2177-2144 cal BC (54.9%)	2286-2240 cal BC (25.8%) 2235-2138 cal BC (69.4%)
PLD-36739 試料No. 17	-26.80 \pm 0.15	3858 \pm 21	3860 \pm 20	2436-2429 cal BC (6.5%) 2405-2378 cal BC (13.6%) 2350-2286 cal BC (48.1%)	2459-2278 cal BC (87.0%) 2251-2230 cal BC (6.0%) 2220-2211 cal BC (1.8%)
PLD-36740 試料No. 19	-28.05 \pm 0.15	3842 \pm 21	3840 \pm 20	2342-2278 cal BC (46.7%) 2251-2229 cal BC (15.4%) 2221-2211 cal BC (5.8%)	2455-2419 cal BC (5.3%) 2406-2377 cal BC (7.4%) 2351-2204 cal BC (82.7%)
PLD-36741 試料No. 21	-30.09 \pm 0.14	3794 \pm 23	3795 \pm 25	2283-2248 cal BC (32.9%) 2233-2199 cal BC (29.2%) 2161-2153 cal BC (6.2%)	2294-2191 cal BC (77.0%) 2181-2141 cal BC (18.4%)
PLD-36742 試料No. 22	-27.73 \pm 0.16	5142 \pm 21	5140 \pm 20	3976-3951 cal BC (68.2%)	3990-3639 cal BC (87.1%) 3857-3817 cal BC (8.3%)
PLD-36743 試料No. 23	-25.86 \pm 0.12	3782 \pm 20	3780 \pm 20	2276-2253 cal BC (23.2%) 2228-2224 cal BC (2.7%) 2219-2196 cal BC (15.2%) 2172-2146 cal BC (27.1%)	2287-2140 cal BC (95.4%)
PLD-36744 試料No. 25	-28.41 \pm 0.14	3925 \pm 20	3925 \pm 20	2472-2450 cal BC (27.2%) 2429-2405 cal BC (15.1%) 2378-2350 cal BC (25.9%)	2476-2343 cal BC (95.4%)
PLD-36745 試料No. 27	-27.19 \pm 0.20	3862 \pm 23	3860 \pm 25	2451-2420 cal BC (12.4%) 2405-2378 cal BC (14.4%) 2350-2289 cal BC (41.4%)	2461-2279 cal BC (69.3%) 2251-2230 cal BC (4.8%) 2219-2212 cal BC (1.2%)
PLD-36746 試料No. 28	-27.06 \pm 0.19	3870 \pm 22	3870 \pm 20	2451-2420 cal BC (16.2%) 2405-2378 cal BC (16.3%) 2350-2295 cal BC (35.7%)	2463-2286 cal BC (95.4%)
PLD-36747 試料No. 31	-27.13 \pm 0.19	3480 \pm 20	3480 \pm 20	1876-1842 cal BC (27.6%) 1821-1797 cal BC (18.1%) 1782-1752 cal BC (22.4%)	1882-1745 cal BC (95.4%)
PLD-36748 試料No. 32	-27.24 \pm 0.18	6587 \pm 23	6585 \pm 25	5554-5491 cal BC (68.2%)	5611-5591 cal BC (10.4%) 5565-5485 cal BC (95.0%)
PLD-36749 試料No. 33	-27.12 \pm 0.16	3105 \pm 19	3105 \pm 20	1415-1385 cal BC (36.5%) 1340-1311 cal BC (31.7%)	1429-1372 cal BC (50.7%) 1358-1301 cal BC (44.7%)

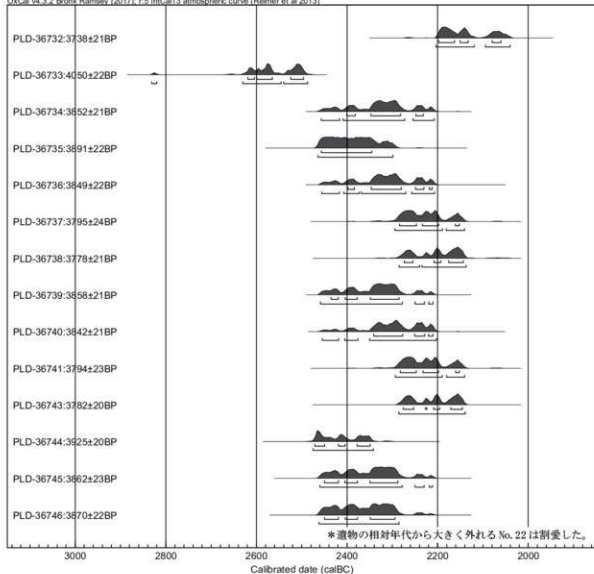
文時代後期の遺構埋土より新しい年代値を示しており、層序関係において矛盾のない結果が得られている。(株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ：伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtaditze・辻 康男)

【引用・参考文献】

- ・ Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- ・ 幡中光輔 (2012) 西日本縄文時代における遺跡タイプロジー分析の実践と展開, 関西縄文文化研究会編「関西縄文時代研究の新展開: 松尾洋次郎さん追悼論集」, 33-49, 関西縄文文化研究会.

- ・ 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- ・ Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0?50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017), r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第201図 縄文時代後期土坑出土試料の暦年較正結果



1・2区全景（東から）



1区全景（東から）



1-1、1-3区全景（東から）



1-2、1-4区全景（東から）



SE 61033 井戸枠検出状況 (北から)



SD 61002 (東から)



SE 61013 井戸枠検出状況 (北から)



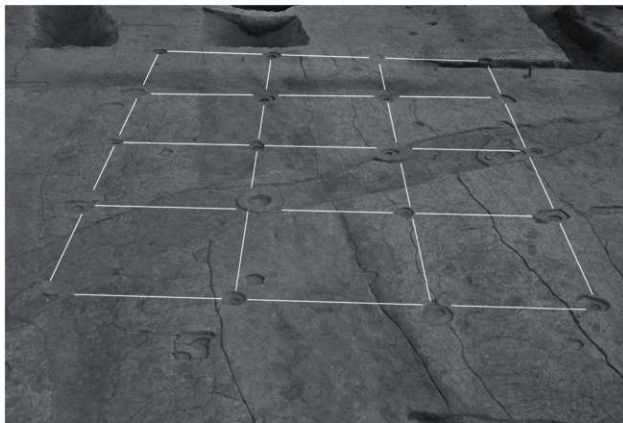
SD 61002 土層 (東から)



2区全景（北から）



2区全景（南から）



SB 62026 (南から)



SB 62026 No. 3 (北西から)



SB 62026 No. 4 (西から)



SB 62026 No. 16 (東から)



SB 62026 No. 20 (南から)



SB 62028・62039 (南から)



SB 62029 No. 5 (西から)



SB 62039 No. 4 (東から)



SB 62020 (北から)



SE 62002 (南から)



SE 62002 断面 (南から)



SE 62015 (南から)



SE 62018 (南西から)



SK 62036 (北から)



SK 62038 断面 (南から)



S X 62024 木棺検出状況（北から）



S X 62024（南から）



S X 62024 遺物出土状況 (南から)



S X 62024 漆No. 1 (西から)



S X 62024 漆No. 2・3 (西から)



S X 62024 漆No. 4 (北から)



S X 62024 漆No. 5 (西から)



S X 62024 掘形断面 (東から)



S X 62024 掘形断面 (東から)



S X 62024 木棺底板 (南東から)



S X 62024 木棺除去後断面 (西から)



S X 62024 木棺除去後 (西から)



SD 62003 遺物出土状況 (北から)



SD 62003 断面 (西から)



SD 62003・62014 断面 (北から)



SD 62007 断面 (南から)



SD 62022 断面 (北から)



SD 62017 断面 (南東から)



SD 62029 断面 (西から)



SD 62031 断面 (北東から)



3-2、3-3区全景（北から）



SB 63004（西から）



3-1区全景 (北から)



3-3区全景 (南から)



3-4区全景 (北から)



3-5、3-6区全景 (北から)



4-1区全景（西から）



4-1区全景（東から）



4-2区全景（東から）



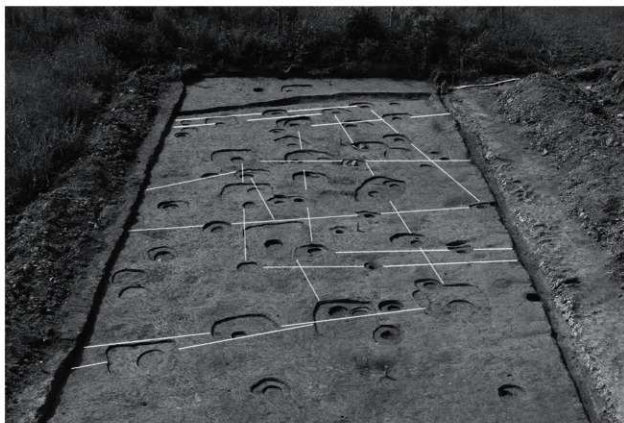
4-2区全景（西から）



セ-Hllpit 4（北から）



5-1、5-2区全景（東から）



S B 65014 ~ 65018（東から）



S Z 65004 (西から)



S Z 65004 (北から)



S Z 65004 断面 (北から)



S D 65010・65029 (北西から)



S D 65011 遺物出土状況 (北から)



6-1区全景（北から）



6-1区南部（北から）



SD 66002 断面（南から）



6-2区（北から）



層序（東から）



6-2区（南から）



7-1区全景 (北から)



7-2区全景 (西から)



SD 67001 (北から)



SD 67001 断面 (北から)



8区全景（北から）



8区南部（北から）



SD 68001（南東から）



SD 68004（西から）



SD 68002・68003（東から）



SD 68003 断面（北から）



9区調査前風景（北から）



9-1区全景（南から）



9-2区全景 (南から)



9-4区全景 (北から)



9-3区全景 (南から)



10-1区全景 (南から)



10-2区全景 (北から)



10-3区全景 (北から)



SD 610004 (東から)



SD 610005 (南から)



11区調査前風景（東から）



11-1区全景（西から）



11-2区西部（西から）



11-2区中央部 (南から)



11-2区中央部 (東から)



11-2区東部（西から）



11-3区全景（西から）



11-2区下層中央部 (北東から)



11-3区下層 (東から)



11-3区下層 (西から)



SB 611044 (南から)



SB 611044 No. 2 (南から)



SB 611044 No. 3 (南から)



SB 611044 No. 4 (北から)



SB 611044 No. 6 (南から)



SB 611043 (南から)



SB 611043 No. 4 (東から)



SB 611043 No. 7 (南から)



SB 611043 No. 9 (南から)



SB 611038 (東から)



SA 611087・611088 (北から)



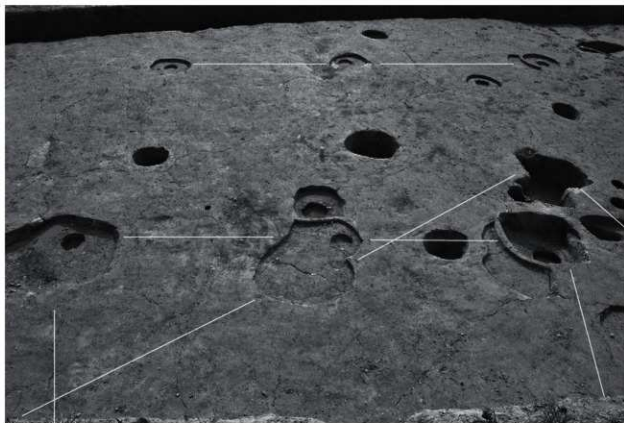
SB 611073・611074・611082 (西から)



SB 611075 (東から)



SB 611081 (西から)



SB 611080・611083、SA 611086 (北から)



SK 611005 (東から)



SK 611009 (東から)



SK 611022 (南東から)



SK 611024 (南から)



SD 611001 遺物出土状況 (西から)



SD 611001 遺物出土状況 (西から)



SD 611001 遺物出土状況 (西から)



SD 611001・611004 (北西から)



SD 611001 (東から)



SD 611013 (南から)



SD 611013 (北から)



SD 611013 断面 (南から)



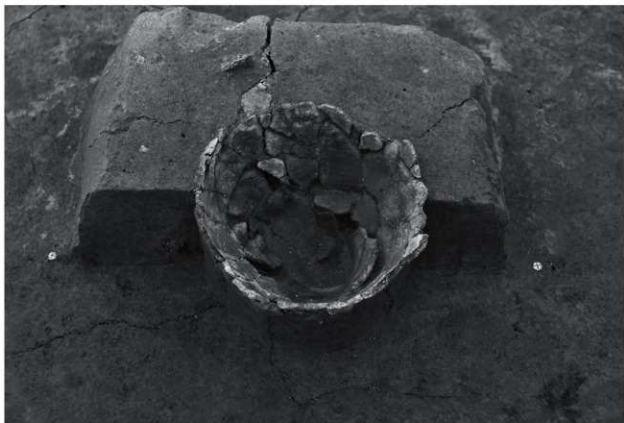
SD 611021 (東から)



S Z 611006 (北から)



S X 611037 (東から)



S X 611051 (北から)



S X 611052 (南から)



SK 611057・611058・611066 (東から)



SK 611057 (西から)



SK 611053 (東から)



SK 611053 (北から)



SK 611055 (北西から)



SK 611060 (西から)



SK 611059 (北から)



SK 611069 (南西から)



^-P 18 Pit3 (西から)



^-Q 18 Pit1 (南から)



^-Q 18 Pit6 (西から)



^-P 19 Pit6 (東から)



^-P 19 Pit13 (西から)



^-Q 19 Pit2 (西から)



^-R 19 Pit5 (西から)



^-R 18 Pit1 (東から)



12区調査前風景（南から）



12-1区全景（西から）



12-2区全景（東から）



12-3区全景 (西から)



12-4区全景 (北から)



12-5区全景 (北から)



SA 612030 (北から)



SE 612003 (北から)



SE 612003 (西から)



SE 612007・612017 (北西から)



SE 612017 (南から)



SD 612020 (西から)



SD 612015 (北から)



ホーO 14Pit5 上層遺物出土状況（北東から）



ホーO 14Pit5 下層遺物出土状況（南から）



13区調査前風景（北から）



13-1区全景（南から）



13-2区北部全景（北から）



13-2区中央部 (南から)



13-2区南部 (南から)



13-3区全景 (北から)



13-3区全景 (南から)



SE 613001 下部 (東から)



SE 613001 下部断面 (東から)



SE 613001 上部 (東から)



SE 613001 上部断面 (東から)



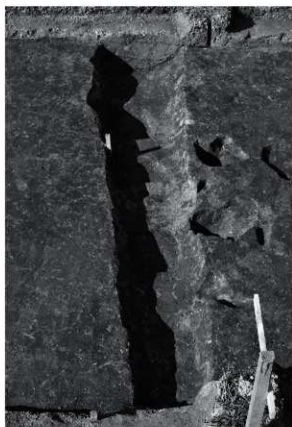
SD 613007 断面 (南から)



SD 613008 (南東から)



SD 613007 (北から)



SZ 613014 (東から)



14-1区全景（東から）



14-1区全景（西から）



14-2区全景（東から）



14-3区全景 (北から)



14-3区全景 (南から)



14-4区全景 (北から)



14-5区全景 (北から)







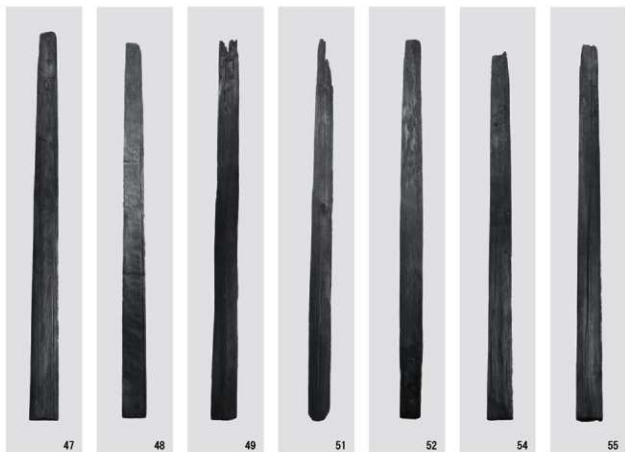
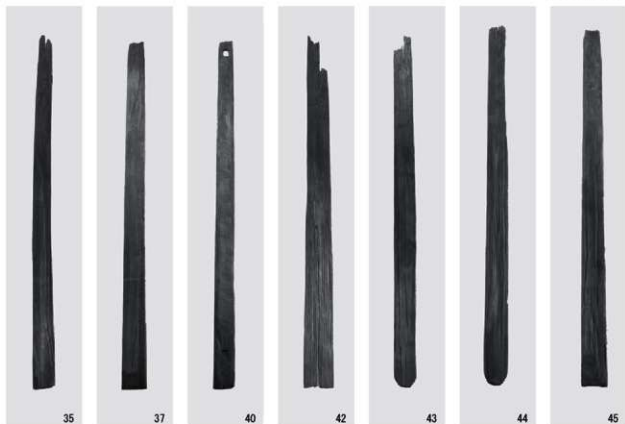
写真図版 54



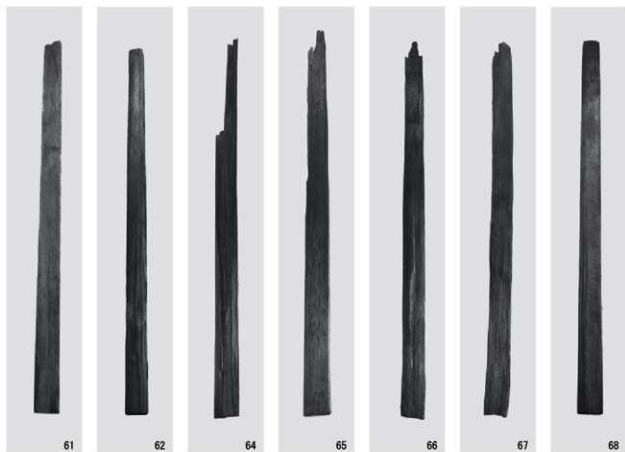
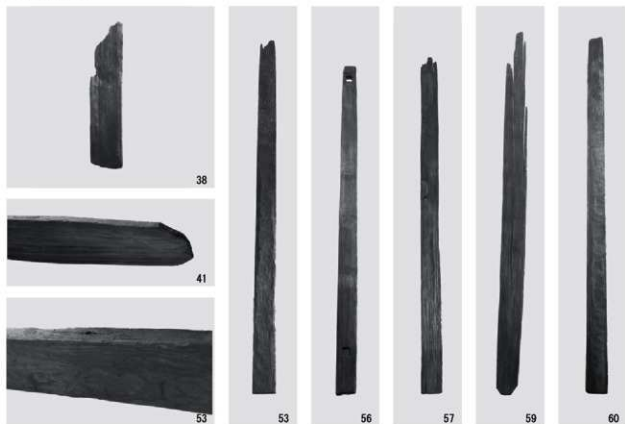


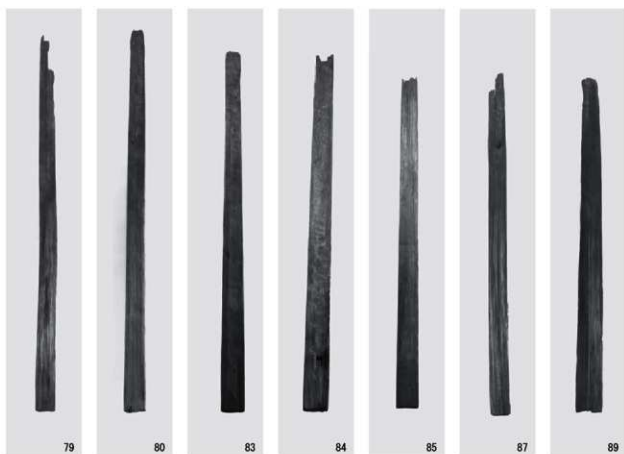
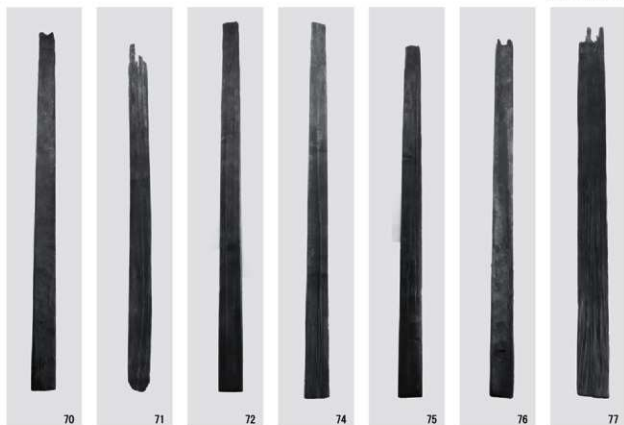
写真図版 56





写真図版 58







報告書抄録

ふりがな	あさみいせき(だい3・4・6じ)はつくつちょうさほうこく							
書名	朝見遺跡(第3・4・6次)発掘調査報告 <第1分冊:遺構・木製品・分析編>							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	387-1							
編著者名	石井智大・萩原義彦・森川常厚・和澄(相場)さやか・渡辺和仁・株式会社吉田生物研究所・株式会社パレオ・ラボ・日鉄住金テクノロジー株式会社							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2020(令和2)年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
あさみいせき 朝見遺跡	まつきかしおのちやう 松阪市和屋町・ ちつたほし 立田町	204	a 838	34° 55' 85"	136° 57' 74"	20121211 ~ 20121214 20130904 ~ 20130913 20121210 ~ 20121211 20130930 20150512 ~ 20160223	範囲確認調査 330㎡ 範囲確認調査 384㎡ 第3次調査 236㎡ 第4次調査 141㎡ 第6次調査 8,545㎡	平成24・25・ 27年度高度 水利機能確 保基盤整備 事業(朝見土 地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
朝見遺跡	集落跡	縄文時代中期 末~後期前葉	埋設土器・土坑	縄文土器		下層検出		
		平安	掘立柱建物 井戸・土坑・溝	土師器・灰釉陶器 木製品		多量の製塩土器		
		鎌倉	掘立柱建物 井戸・木棺墓	土師器・山茶碗 木製品・漆桶・烏帽子		木棺墓から漆桶・烏帽子 等が出土		
要約	<p>朝見遺跡の位置する柳田川下流域の沖積平野には、飯野郡の条里型地割が広がっている。今回の調査では、奈良時代から鎌倉時代の集落跡が検出された。平安時代の蛇行する小溝から多量の土器が出土したが、なかでも多量の製塩土器が注目される。また、鎌倉時代の木棺墓には漆桶や烏帽子、刀子等が副葬されていた。他に掘立柱建物、井戸等が検出されている。</p> <p>なお、下層から縄文時代中期から後期の埋設土器等の出土があり、沖積地での検出が注目される。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告387-1

朝見遺跡（第3・4・6次）発掘調査報告

〈第1分冊：遺構・木製品・分析編〉

2020（令和2）年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター

発行

印刷 株式会社アイブレン
